

IS —可能性の宇宙へ—

ババネロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勢いで某種運命のシンとレイがIS世界に女の子として転生してしてなんやかんや生きていくお話。

デステイニープランを巡る攻防の最中、アスランを下し、キラと殆ど相討ちになったシンは別世界で飛鳥マコトという少女として第二の人生を歩んでいた。彼女となった彼は人類の可能性を巡る戦いに巻き込まれていく。

「あたしは戦う。人が人のまま、無限の成層圏へと飛び立つために――」

## 目次

■ p h a s e — 20 時点までの I S (※自己解釈満載) ■	1
# p h a s e — 0 「世界を超えて」	8
# p h a s e — 1 「翼を広げて」	26
# p h a s e — 2 「歪まされた世界」	42
# p h a s e — 3 「世界の歪み」	59
# p h a s e — 4 「黒騎士」	76
# p h a s e — 5 「理由」	90
# p h a s e — 6 「単一機能」	107
# p h a s e — 7 「囲む影」	135
# p h a s e — 8 「悪意と姫の傘」	150
# p h a s e — 9 「手続きは大事」	162
# p h a s e — 10 「„迅雷”」	174
# p h a s e — 11 「堕ちた涙」	194
# p h a s e — 12 「故郷(前編)」	221
# p h a s e — 13 「故郷(後編)」	236
# p h a s e — 14 「波乱の幕開け」	252
# p h a s e — 15 「7つ目の弾丸／彗星の姉妹」	271
# p h a s e — 16 「流星の少女の残痕を見た」	301
# p h a s e — E X 1 「魔女」	322
# p h a s e — 17 「嵐への出撃」	331
# p h a s e — 18 「シャルル脱走」	356
# p h a s e — 19 「星を砕くもの／スターブレイカー」	376
# p h a s e — 20 「雨降って地固まる」	392
# p h a s e — E X 2 「ネスト」	409

# p h a s e — 4 0	「静かな立ち上がり」	729
# p h a s e — 3 9	「惨状」	719
# p h a s e — E X 6	「雨下の一等星」	711
# p h a s e — 3 8	「焦りは禁物」	696
# p h a s e — 3 7	「戦いの始まり」	678
# p h a s e — 3 6	「可能性への飛翔」	665
# p h a s e — 3 5	「ホワイト・テイル」	645
# p h a s e — E X 5	「シルバー・エンジェルス」	640
# p h a s e — 3 4	「星は陰ることなく」	628
# p h a s e — 3 3	「つなぎとめるもの」	616
# p h a s e — 3 2	「二等星」	600
# p h a s e — E X 4	「すべての根源」	595
# p h a s e — 3 1	「流星を断つもの／夜叉を狩るもの」	580
# p h a s e — 3 0	「かくして幕は上がる」	568
# p h a s e — 2 9	「ユグドラシル」	551
# p h a s e — 2 8	「ギルバート・デュランダル」	533
518		
# p h a s e — 2 7	「自覚／レイラ・デュランダル最悪の日」	509
# p h a s e — E X 3	「妹（本当に）」	499
# p h a s e — 2 6	「悪夢を越えて」	486
# p h a s e — 2 5	「真なる回帰」	468
# p h a s e — 2 4	「ワールドページ」	450
# p h a s e — 2 3	「嵐の目の中で」	434
# p h a s e — 2 2	「待ち受ける試練」	421
# p h a s e — 2 1	「妹（仮）転入」	

# p h a s e — 4 6	「終わらない追撃」	807
# p h a s e — 4 5	「リビングデッド・マザー（後編）」	791
# p h a s e — 4 4	「リビングデッド・マザー（中編）」	783
# p h a s e — 4 3	「リビングデッド・マザー（前編）」	772
# p h a s e — 4 2	「単一の化身」	761
# p h a s e — 4 1	「第四の騎士」	745

■ phase—20時点までのIS（※自己解釈満載） ■

■白騎士

正式名称：インフィニット・ストラトス 1号機

搭乗者：織斑千冬（メインパイロット） 篠ノ之束（テストパイロット）

登場話数：phase—1

【概要】

人類初のインフィニット・ストラトスであり、全てのISの原型にして、数世代先に行くインフィニット・ストラトスの完成形。宇宙探査用のパワードスーツとしてはこの時点で完成されているが、搭乗者を全く考慮していない性能のため超人的な肉体を持つものしか乗りこなすことができない。

現在は暮桜を経て白式のコアとしてそのまま稼働中で、千冬が白式を身に付けるとコアが白騎士のデータを解放し、白騎士として展開が可能。更に開発時にはなかった零落白夜も現在は使用可能。

主な装備は対デブリ用ブレード（現在は雪片に変更）、射程無限の対デブリ用無砲身ビーム砲。

なお、もつとも稼働が長いコアのためAIはかなり成長し人間に近い思考をしているが、千冬のせいで脳筋気味。

■白式

正式名称：白式

搭乗者：織斑一夏

登場話数：phase—5以降

【概要】

倉持技研が開発していた暮桜のコアデータをそのまま、次期主力量産ISの試作機に仕立て上げようとしていたもの。が、上手くいかず束がこっそり手を貸して完成にこぎつけた。性能的には暮桜のアツブレード版として申し分なく、素人の一夏が乗っても振り回されない

が、ブレードオンリーでも十二分な機動力を持ち、使いこなせれば秋冬が行っていた「理不尽な左右へのステップ移動からの雪片突き刺し、そのまま前方移動で相手をガリガリと削る」という動きも可能。ただし、一夏の技量がまだまだのため全くそういった動きが得意。い。

#### ■黒騎士

正式名称：インフィニット・ストラトス 2号機

搭乗者：飛鳥マコト

登場話数：phase 4、phase 17以降

#### 【概要】

原作ではサイレント・ゼフィルスの改造機。本作では白騎士と同型の機体で、一部機体形状などをマコトの前世の搭乗機に寄せたり、ビーム・ブーメランなどの武装も取り入れている。基本仕様は1号機である白騎士と同じだが、超人しか乗れない1号機と違い、搭乗者に合わせた出力調整機能を追加したため、誰でも乗れる。現状マコトの専用機だが、マコトの許可があれば特に搭乗者の制限はない。

マコト搭乗時は通常のISの5倍近い出力を發揮し、コアのジェネレーターに制限がないためかエネルギー切れという概念がなく、既存のISと比較してもその性能は圧倒的。競技としてのISバトルをする際は意図的にジェネレーターの機能を停止させ、コスミック・イラのバッテリー駆動機のように稼働させる必要がある。

装備はビーム・ブーメランのみが現在の専用装備。他は白騎士と共通だが、作成が進んでいない。

#### ■打鉄二式（未完成）

正式名称：打鉄次期量産試作タイプ

搭乗者：更識簪

登場話数：phase 10以降

#### 【概要】

開発が難航した白式に代わり進められていた打鉄の改良機。限界性能や拡張性に余裕がない打鉄を第三代機化に加えて、今後数年に渡り運用できるようにするためあらゆる部分に手を加えている。が、

そのせいでこちらでも開発が難航し、簪が学園に入学するまでに完成が間に合わず一先ず打鉄の既存パーツなどを組み入れて最低限の稼働を可能とした状態が10話登場時点の打鉄二式。

瞬時加速もできないという低い完成度だが、打鉄がベースのため、打鉄のオプションパッケージ「迅雷」を用いることで機動力を補っている。

サイレント・ゼフィルスとの戦闘で大破してしまい、しばらく簪は代替え機に乗ることに。

#### ■ブルー・ティアーズ

正式名称：ティアーズシリーズ 1号機

搭乗者：セシリア・オルコット

登場話数：phase 5以降

#### 【概要】

セシリアが出資するティアーズプロジェクトの試作1号機。外見などは原作と同一。ただし中身は悲惨の一言で、機体制御のOSやBTシステム、フレキシブル機能の制御システムがそれぞれ干渉を起こしてケンカしてしまっている。そのため、ビットを2機以上展開しオールレンジ攻撃を行うとブルー・ティアーズ本体の機体制御システムがエラーを吐き出し、原作ではセシリアの技量不足でビット展開中は動けなかったが本作は機体のせいで動けない。

本来の主兵装であるBTスナイパーライフル「スターライト」は積んでいるフレキシブル機能の制御システムの容量が大きく、装備すると他の予備武装が一切積みなくなるためセシリアはこれを嫌ってプロモーション以外では装備していない。代わりにティアーズシリーズ用のビーム・ライフル「レヴァリエ」を装備している。

一番の変更点として本機には「ガーディアン・システム」と呼ばれる衛星砲「エクスカリバー」の制御システムが搭載されており、セシリアがその気になれば地方都市一つを消しとばすことさえ可能だがまず使われることはない。なお、この衛星砲エクスカリバーは無人でISの技術などは使われていない。

#### ■ダイヴトウ・ブルー



正式名称：ティアーズシリーズ 3号機

搭乗者：レイラ・デュランダル

登場話数：phase 10以降

#### 【概要】

原作ではセシリアの使用人、チエルシー・ブランケットの専用機でかつ所属も敵側となってしまうが本作ではレイラの専用機となって主要機体に。サイレント・ゼフィルス強奪事件のため、慌ててブルー・ティアーズと同じ装備を施しレイラに預けられた。ガンダムで言えばブルー・デイスティニー3号機のような立ち位置。

基本性能は同一だがブルー・ティアーズの予備パーツで組み立てられているためか塗装がグレー主体でとても「ブルー」という名前からはかけ離れている。ビットの搭載機数も本来の6基から2基にまで減っており、非固定ユニットも左側しかない。

武装は当初別機体のロングライフルのみだったが、phase 19以降はロングバレル化した「レヴァリエ」に変更。更にシールドビットやサイレント・ゼフィルスが装備していた「零落白夜に近似するモノ」である特殊ナイフ「女王宣誓」を装備する。

搭載されているBTシステムには1、2号機と違い脳波を増幅する機構が積まれている。

#### ■サイレント・ゼフィルス

正式名称：ティアーズシリーズ 2号機

搭乗者：正体不明の人形（敵対時） レイラ・デュランダル（本来）

登場話数：phase 9、10

#### 【概要】

原作でも強奪されてMの乗機となったが本作ではエンジエ○パツク状態のアンドロイドが搭乗してクラス代表戦を襲撃。何らかの方法でISのリミッターを解除し、白騎士と同等の性能まで強化されていたがアンドロイドの思考がプログラミング制御で脳はあくまでオマケだったせいか最終的に破壊された。

形状は原作の初登場時に準拠。機体色が白に変更されていた。

装備などはダイヴトウ・ブルーに移植される予定。コアは4号機以

降に戻され、機体形状も4号機からアニメ版のサイレント・ゼフィール  
スと同形状に。

■フリカアトラ（コメット姉妹専用機）

正式名称：FIS-15 フリカアトラ

搭乗者：コメット姉妹

登場話数：phase-15

#### 【概要】

オリジナルIS。アメリカ開発の軍用ISで、IS版F-15とでも  
言うべき機体。軍用としては扱いやすいが、そうでない場合はシビ  
アな機体制御を求められる。ラファール・リヴァイヴや打鉄と比べ  
ると加速性能やロール性能が優れ、戦闘機のようにドッグファイトに持  
ち込むと機体周囲の非固定ユニット4基に搭載されたミサイルベ  
イなどが正面を向き、最大火力が発揮できる。

コメット姉妹機はカラーリングが二人に合わせて変更されている  
他は細かなチューニングや調整を施しているだけで通常の量産機と  
かわりない性能。ただし、特殊な“システム”を搭載し、これを起動  
することで“2つの体に1つの意志”を宿した状態になり、ありえな  
い反応速度での挙動が可能になる。

イメージは某TEの紅の姉妹搭乗のチエルミナートル。

■ラファール・リヴァイヴ 山田真耶スペシャル

正式名称：ラファール・リヴァイヴ初期生産型 自衛隊仕様

搭乗者：山田真耶

登場話数：phase-15

#### 【概要】

ラファール・リヴァイヴSP相当の機体で、本作における真耶の専  
用機。現在は学園の整備科で教材として動体保存されており、稀に動  
作確認のため真耶も乗っている。カラーリングは灰色の迷彩（一番近  
いのはジェガンのシャイアン基地カラー）。

基本性能はラファール・リヴァイヴそのままだが、自衛隊仕様とし  
て迎撃機としての特性が必要なため瞬時加速時の速度が通常機の数  
倍近く上げられており、緊急展開などの状況に優れている。コニール

に反応が追いつかないほどの急接近が出来たのはこのため。

真耶の専用装備としてアルベール主導で開発されていた特殊ライフルと「零落白夜に近似するモノ」として特殊散弾を装備。真耶の類稀なる射撃センスによって非公式戦ながら勝率9割を誇った。

アルベールが学園にパイプを持っていたのはこの機体の整備のため度々パーツ生産を行っているため。

#### ■黒い魔女

正式名称：ブラック・ロータス

搭乗者：ロゼンタ・デユノア

登場話数：phase—EX1

#### 【概要】

元亡国機業所属のISで現在は所属不明機となっているが、ロゼンタが秘密裏に所持している。ラファール・リヴァイヴをベースとした量産機で組織崩壊前は同型機が数機存在したが搭乗者ごと千冬が破壊し、現存するのは実質的にロゼンタの専用機となっているこの機体のみ。

外見は全身装甲で魔女を模したローブ状の増加装甲が特徴的。

主兵装であるブースター付きバスターランチャーを魔法の筈のように扱い、重装甲な本体の機動性低下を補っている。本来は最大五機によるバスターランチャー一斉射で衛星砲並の火力を出すことが可能な決戦兵器的な運用を行っていたが、現在はせいぜい工場を一つ吹き飛ばす程度の力しかない上、接近戦は苦手。

デユノア社に妨害工作を行っていたノルン社のラボを吹き飛ばし即時撤退を行なっている。

#### ■九尾ノ魂

正式名称：打鉄改

搭乗者：布仏本音

登場話数：phase—19

#### 【概要】

ISABに登場したものは完全な別機体。更識家が秘密裏にIS学園の整備科へ作成を依頼し、授業の一環として開発されたIS学

園製の打鉄の改造機。打鉄そのまま外装を大きく形状変更し、非合法活動で入手したBTシステムの基礎研究データを流用して有線式テールビットを九尾の尻尾のように装備している。このテールビットは物理的な槍、内蔵ビーム砲、ビーム砲の出力調整で使用可能なサーベルなど手持ち武装を必要としない多用途性を持つ。マニユピレーターにはあらゆる武装の使用制限を強制解除するクラック機能が搭載され、ゲリラ戦を得意とするがまずそういった状況での運用がない。

コンセプトは更識家の工作員の運用を前提とした隠密機で、これは実際ほぼ中身が打鉄そのまままで低い速度を補うためのもの。本音が使用したのは試作1号機で、中身が打鉄のため誰でも搭乗できる。

束が狐モチーフで面白そう、と七槻しばねとして手を貸す前はやはり学生のお手製なためかBTシステムと機体制御システムの問題がブルー・ティアーズ同様に解決できず校庭にクレーターを作りまくっていたが、束が手を貸してからは順調に開発が進み、シャルロット脱走時には完成し、追撃戦に投入された。

## # p h a s e ー 0 「世界を超えて」

幾つもの輝きが浮かんでは消え、光条が走り交差する宇宙で光の翼で軌跡を描きながら剣をぶつけあう二体の巨人があった。

「あんたらが正しいって言うのなら！俺にかっつて見せろ！」

「クッ！」

トリコロールカラーに、赤い翼を背に持つ機体…デステイニーが聖剣アロンダイトの名を冠する対艦刀を振り抜き、対する機体…対照的な青の翼を持つストライクフリーダムの右腕を切り落とす。

片腕を失い、バランスを崩しながらも残ったビット兵器 “スーパードラグーン” がデステイニーの右足を撃ち抜く。

「ぐあつ……まだ、足をやったぐらいで！」

デステイニーのパイロット、シン・アスカは激情の中でも冷静さを失わずに相手へと機体を振り返しながら機体の右肩に残ったビーム・ブーメランを抜いて、ストライクフリーダムへと投げつける。ビームの刃を発振させ高速回転するブーメランはストライクフリーダムのパイロットの cockpit をめがけて飛翔するがストライクフリーダムのパイロットであるキラ・ヤマトもそのまま黙って受けるわけにはいかず、最後のドラグーンをビーム・ブーメランにぶつけて相打ちにさせた。

「シン！君の言うこともわかるけど、けどっ！」

「議長を目指す世界が正しいかどうかなんて俺にはわからない！でも、あんたらが戦った先の世界だって、平和になるかもわからない！」

同時にブーストし、二機がその手に持つ剣をぶつける。キラはストライクフリーダムの持つビーム・サーベルのリミッターを解除し、大出力であるアロンダイトのビーム刃との鏝迫り合いを可能とさせた。

シンの叫びに、キラはひどく心が穿たれた。自分が間違っている、それはいつからか彼自身も気がついていて。目の前の、運命の名を持つ “戦う力 (ガンダム)” に乗るシン・アスカが守ろうとする未来は人類を生まれ得た才覚のみで縛りつけ、鳥籠の中へと縛りつけるようなものだ。もしそんな世界になれば人類はただ管理される家畜となり、形だけは確かに “真の平和” が訪れるかもしれない。

だが、キラが背負う未来は誰のものでもない、自分自身で運命を切り開くことのできる世界……聞こえよく言えばそうだが、実際は現状維持、混迷が続く世界だ。平和になるかは保証できない。けれども、今平和な場所の明日は保証される世界。

どちらが正しいかなんて、誰かが決めつけるものではない。こうして、力でどちらの平和がいいかねじ伏せてまで選ぶものではないのかもしれない。

だが、もう言葉を以って未来を選ぶには遅すぎた。

——力だけが、僕の全てじゃない。

いつかの、誰かが言った言葉がキラの脳裏を過ぎる。

「(今の僕は)」

デステイニーの光の翼が輝きを増し、ストライクフリーダムが押し切られる。弾かれ、宇宙空間を縦回転するストライクフリーダムに、デステイニーがトドメと言わんばかりに加速してくる。

「力、だけしか……っ！」

迎撃。ストライクフリーダムの両腰に備えられたレールガンが回転しながらも放たれ、シンは咄嗟に回避する。まだ外装は片足を失っただけだが、既にデステイニーはボロボロだった。かつての上司であり、尊敬していたアスラン・ザラのジャステイスを行動不能にした時点で、デステイニーの最大稼働モードを長時間使用し機体の動力源は機能不全を起こしている。今、デステイニーをまともに動かしているのは残った内部バッテリーの動力だけだった。

シンは、今のキラの眩きが聞こえていた。力だけ。力だけしかない。それはシンの心に重くのしかかる。今のシンには力しかない。それは彼自身、自覚していた。気がつけば、もう心は死んでいて、シンの手に残されたのは剣だけだった。

初めて恋をした流星のような儂げな少女も、溺れるように愛を紡いだ焔のように赤い少女も、記憶の中にいたはずの最愛の妹も——もう何も、彼には残されていなかった。

正義も折って、目の前の自由も切り捨てて。シン・アスカの運命はどこに行こうというのか。それは彼にもわかるはずがない。

「できるようになったのは、こんなことばかりでっ」

悲鳴のように、シンが吐き捨てながら再び機体を加速させる。デステイニーの頭部の隈取りの一部が血の涙を流しているようにキラは見えた。

「もう力だけしか、これしか、俺にはないんだっ！」

「そんなことっ！」

そんなことはない、とキラは言えなかった。キラもそうだったから。ラクス・クラインという一人の少女の願いを叶えるためだけにキラは剣を振るっている。自由から程遠い、もはや暴力装置として。

残った手足と、背部バインダー、腰部スラスタ、全てを使って強引に体勢を整えたキラは握っているビーム・サーベルの端部に、もう一本のビーム・サーベルを接続し、アンビテクス・ハルバートモードへと移行させる。

「あんたも俺と同じで、力だけしかないんだ！」

「それでもっ！」

二人の言葉は、決して二人の周りの人々が聞くことが出来なかった絶叫だった。こぼれ落ちていく想い、残ったものは想いを守っていたはずの力。二人の戦士は気がつかないうちに伽藍堂になっていた。

ストライクフリーダムの光の翼が青く、青く、大きく広がり、関節部や装甲の隙間から黄金色の光が覗く。限界稼働、コクピットにアラートが響く。

デステイニーの光の翼が赤く、赤く、端から千切れていくように生えていく。聖剣アロンダイトは禍々しく紅く閃いて、全開を超えた出力でビームの刃を纏った。

「俺は、俺はアアアア！」

「僕は、それでも、それでもっ！」

運命と、自由が交差する。翼を失ったのは……。

「ああ、どうして、僕たちは…こんな、こんなところまで、きてしまったんだろう」

ストライクフリーダムの右肩に、聖剣は突き立てられ、その柄には力なく灰色になった両腕があった。

「ステラ、ルナ……マユ、ごめん、俺は、おれは……明日を、見れない」  
デステイニーの翼から光が失われ、碧く意志を灯した光が消えていく。鮮やかなトリコロールは灰に染まる。

シンの視界を光が包んでいく。終わりだと、彼は悟った。確かな手応えはあった。それでも彼は、守ろうとした、正しいと信じた明日を守れたのかわからなかった。戦争がない世界以上に平和な世界なんてない。そのための方法はどうでもよかった。ただ、近い人がそれを世界に示して、信じて、剣をとって、戦った。

失われていった彼女のような存在をもう生み出さないために。

「…そうだよな、あんたも、そうなんだよな」

大切な少女を奪ったはずの彼でさえ、きつとそうなのだと、いや、そうだとシンは知っていた。

だから、戦争なんて、なくなるのが一番だ。そうに決まっている。

「キラ・ヤマト、おれは」

俺たちは、同じものを見ていたはずだったんだ。そう告げようとして、シンの意識は吞まれていく。熾烈な焰が、彼の運命をこの「世界」から拐っていく。

音を立てて崩れていく運命に、キラは叫びながら機体のスロットルを全開にして、その場から去っていく。もう、遅い。何もかもが間違ってしまった世界で、キラ・ヤマトは混迷を選んだのだ。彼のように、毎日、誰かが大切な物を奪われ、絶叫し、平和を願う心を根絶やしにしていく、そんな世界を彼は選んでしまったのだ。

「ラクス、僕たちは、間違っただ」

一人、コクピットの中でキラは言った。間違っただ。今更それをハッキリと理解した。一人の少年が、愛するもの全てを奪われて、残った最後の、平和を願う心をキラは奪ったのだ。もっと、やりようはあったはずだ。こんなことになる前に。

「いいや、僕か。僕が悪いのか」

世界を何回滅ぼしても足りないような憎悪に飲まれ、心を消耗し、それを癒すために彼女の……世界を、今よりも少しはマシにできるはずの少女の運命を、選択肢を、キラは奪ってしまったのだ。元をたどれ



ば、彼女はキラのものではなかった。親友の女性だった。例え親に決められたものであっても、そこには確かに、愛はあったことを知っている。

それを奪った。

「フレイだって、ははっ……あははっ……ああ、僕は、ぼくはっ」

どれだけ、どれだけのものをキラは奪ってきたのだろう。

そして、これからも、きつとキラは奪い続ける。止められない、止まらない。一度飛んでしまった弾丸のように。

「誰か、僕を、ぼくを、止めて」

「のぞみ通り、そうしてやる」

憎悪に染まった、彼の心を破壊した声がまるで福音のようにコクピット内に響いた。刹那、キラの全てが光に灼かれていく。意識が、どこかへと流されていく。

「お前の重ねた業も、全て、これで終わりだ。キラ・ヤマト」

ストライクフリーダム胸をビーム・サーベルが貫いていた。それを行ったのは満身創痍の機体。レジエンド、デステイニーの兄弟機であるその機体はキラが大破させたはずだった。

「お前が、おまえがっ……おれの、友達を奪ったんだ」

もはや先のない運命を憂いた彼の友達はいない。目の前の自由が奪い去ったのだった。それを知って、初めて、彼は、レイ・ザ・バレルは本当の意味での怒りを覚え、真の意味で殺意を持って、人を殺した。仇としてこれまでもみていた、けれども、どこかそれは他人のもののようなはずだった。それが、心から、燃え盛るような憎悪になっていた。

「シン、お前の、仇はおれが——」

殺し殺され、世界の行方を左右したはずの青年たちは瞬く間にそこからじゆうに瞬く命の輝きに混じり、消滅する。

こうして、この世界は混迷へと進んでいく。その果ては、絶望を超えた、虚無が広がっている。そこには正義も、運命も、自由も、明日を切り開いてきたものたちの伝説さえもなく、悲鳴が響き、あたりまえのように幸せは散る。

地獄がここに顕現したのだ。

そんなことにも気が付かずに、人々は平和を、平和をと唄う。その平和が、誰のものなのか、何のためのものなのか、知ろうとも、聞こうともせず——その果ての終局を見ようともせず。

正義は世界に残された。秩序を失い、混迷へと堕ちても、それは身勝手にも誰しもが持つものであるから。

けれども、自由と、運命と、伝説は世界から失われた。それはもう、この世界には不必要なものだから。故に、新たな世界にそれは必要だった。

剣が必要だ。

担い手が必要だ。

世界を想う心が必要だ。

誰かを想う心が必要だ。

愛を知る心が必要だ。

だから、彼らの戦いは全てを失って、伽藍堂になろうとも終わらない。失ったのなら、もう一度詰めればいい。そんな、超然的な総意によって人形となっていた者たちに今一度熱が宿される。

もしくは、その超善的な総意は、僅かな彼らを想った人々の贈り物なのかもしれない。

「シン、明日を、私が欲しかった明日を、あげるから：運命は、あなたの味方だよ」

「キラ：もう大丈夫。あなたを自由に、してあげるから」

「レイ：いい。レイはレイだけの生き方を伝えていけばいい」

虹色の彼方、刻の狭間を流され、彼らはどこかへと消えていく。その先には光が待ち構えていた。

「つはら：」

黒髪の少女が汗をかきながら跳ねるように目を覚ました。周囲を見渡せばそこには見慣れた彼女の部屋があつて、ため息をつく。懐かしい夢を見ていた。飛鳥 マコトはもう遠い昔のことのように感じ

る宇宙での戦いを夢に見ていたのだ。

「あたしが…いや『俺』が『俺』だった頃の、か」

喉から出てくる声は間違いなく、容姿相応の少女らしいソプラノで、ルビーのような瞳と端正な顔つきに僅かにシン・アスカの面影を残すのみだ。

「…：…なんでまた、見るようになったらう」

彼は、彼女となつてこの世界に生まれ変わっていた。性別は逆転し、しかし家族は依然と変わらず。とりまく世界は彼が生きた世界の遙か昔の西暦。紛争はあれど、大きな戦争などない、彼が望んでやまなかつた世界だ。

マコトは掌を見る。ひどく汗ばんで、まるでモビルスーツで戦つたあとのようだった。今の世界では空想の産物でしかないモビルスーツというロボットに乗つて戦つていたなど、本当に“夢”のようだとマコトは思つてしまう。もしかしたら、本当に、あれは夢でしかなく、あたしの妄想の産物なのかもしれない。苦笑気味に、彼女はそう思つてしまう。

それほどまでに、彼がこの世界に来て馴染んでしまつていた。当たり前のように平和に慣れ、少女として生き、今日に至つていて。欲しかったものが手に入つて、失う心配もないとなれば、そう思いたくもなる。

「んっ、ふう、起きよっかな」

口調も、既に残つていない。シン・アスカという人物は飛鳥マコトの空想上の人物なのではないかと彼女自身考えてしまう。ただ、それを完全に否定できないほどに、彼の記憶は間違いなく“俺の記憶”だと彼女は言えてしまう。実感があるのだ。

「マユも起こして、ランニングにいこう」

マコトはそう言つてベッドから出る。最愛の妹は当たり前のようにいて、今も生きている。一歳年下の姉に甘えん坊な妹だ。今世でも仲がいいとマコトは胸を張つて言えた。パジャマのまま、彼女は妹の部屋に移動し、ノックもせずに入る。妹の飛鳥マユは静かに寝息を立ててベッドに入つていた。

マコトにそっくりだが、姉はつり目で妹は垂れ目、背の高さと髪の毛の長さで区別はつく。マコトはいつものようにマユの肩を揺らして起こす。

「ほら、マユ、起きなっつて」

「…んう…いま、なんじ?」

「六時だよ」

「むりい、ねる」

「ダメだつて。ランニング一緒に今日からするつて言つたのマユでしよう?」

「明日から、やるからあ」

「マユ、約束、したでしょ」

「うう…そうだけど…」

マコトが笑顔で、圧をかけて言つたせいマユは仕方なく、といった形で上半身を起こす。

「ほら、支度して。あたしも着替えるから」

「りようかーい」

だらだらとしつつ、マユは起きて、マコトもそれを見届けると一度部屋に戻りランニングウェアに着替える。初夏の朝とはいえ、既に陽が上り気温は高い。短パンTシャツだ。

着替え終わった二人はもうとつくに起きて弁当の準備をしている母に挨拶をしながら家を出る。家を出て、軽くストレッチをしてから二人は走りだす。妹の速度は遅く、マコトはこのペースだといつもの半分も走れないなど苦笑いしながら、予定していたランニングコースを変更することにした。

「マユ、今日は篠ノ之神社までいって階段上り下りして、家まで帰るからね」

「ええ…?!あそこの階段登るの…?!」

「しやうがないでしょ。いつものあたしのコース行つたら学校遅刻しちゃうから、近くの神社の階段往復に変えたの」

「お姉ちゃんの鬼」

「マユ、我がまま言わないの」

「ふう〜…まあ、しょうがないけどさあ」

ぐうたらしがちな妹が姉にせがんだ誕生日プレゼント。そのあげ代わりに体をちやんと動かさないと、という約束があつて今マユはランニングをする羽目になっている。約束を破るのは流石にダメだとわかってるので文句は言つても走るのはやめない。

マコトはマユがひとまず約束通り走っていることに安堵し、目的の神社まで向かう。篠ノ之神社は姉妹が住むこの街にある歴史ある神社で、篠ノ之流剣術という剣術道場でもある。その娘たちと二人は知り合いなのだ。だからついで朝の挨拶でもしよう、マコトはそんなふうに思っていた。

神社はさほど飛鳥家から遠くなく、すぐに二人の前にそれなりの段数の階段が姿を表す。綺麗に掃除された石積みの階段は普段は神社にこないマユには断崖絶壁のように見えた。

「いくよ、マユ」  
「うん」

気乗りはしないが、といった様子でマコトの後ろにマユが続き、階段を登っていく。途中、朝早くからきている参拝客とすれ違いつつ、あつという間に鳥居をくぐり彼女らは神社の正面へとやってくる。

「ふう…思ったよりは疲れなかったかも」  
「そりやちよつと走ってきただけでしょ」  
「そうだけど」

マユの言われなくてもわかってるよー！という言葉は無視しつつ、マコトは周囲を見渡す。清涼な空気に満たされ、呼吸をするのも気持ちがいい。マコトは篠ノ之神社が持つこの空気感が好きだ。神社が持つ特有のものなのかもしれないが、マコトは前世ではあまり神社に行つた記憶もなかったから新鮮に感じているのかもしれない。

境内を見ていると、社の前に、奇妙な人物がいるのが見えた。中学生ぐらいの背丈で紫色の髪を揺らし、白衣姿で箒を雑に動かしている少女。明らかに神社に合っていない服装の少女がいた。

「あ、今日は珍しく束姉さんがやってるんだね」  
「ほんとだ〜」

「束姉さん！おはよう！」

マコトが元気よく声をあげれば、白衣の少女…この神社の神主の長女、篠ノ之束が死んだ目を一瞬マコトたちに向けたあと、すぐに二人の姿を認識して生き生きとしたものへと変えた。

「まーちゃん！ゆーちゃん！おはよう！」

竹箒を放り投げて束は二人に駆け寄る。境内の掃除が嫌だったんだなと飛鳥姉妹は察して、束を迎えた。

「束姉さんは掃除？」

「そうそう。ほんつと面倒なんだけどさ、箒ちゃんがやんなきゃだめだって言うからしょうがなく」

箒とは束の妹で、マコトたちとは同級生だ。生家である神社の掃除を嫌がる束と違い生真面目で、元男であるマコトでさえも男より男らしい気概のあるまるで武家のような少女だ。そんな箒を束は溺愛しており、妹の頼みは断れないのだ。

なんだから、その辺りは親近感を覚えるなどマコトは内心、苦笑した。

「まーちゃんたちはランニング？精が出るね、束さんは朝の運動とか絶対やだね」

「そうは言っても、束姉さんは運動神経いいじゃん」

「そりゃ天才ですから。万事、やればできちゃうのです」

ブイ、つとピースして笑う束。彼女はまごうことなき天才であった。西暦というマコトから見れば過去の世界でありながら、既に束の技術はコズミック・イラにも劣らない凄まじいもので、その天才的な頭脳は日本の義務教育の中で過ごすにはあまりに退屈で彼女が学校に通うことはあまりない。

篠ノ之束にとっての世界で認識できる人間は家族だけしかいなかった。そのはずなのに、飛鳥姉妹が認識されているのはひとえに、束がマコトに……シン・アスカという存在に興味を持っているからにすぎない。

「ほんと、人類が宇宙にいつちやえばこんな面倒な社の掃除とかなくなるんだけどなあ」

「そうなの？」

「そうだよ、ゆうちゃん。宇宙に出る頃になれば人類に人種とか国境とかそういうの意味なくなるからね」

「じんしゅ、こっきょー」

マユが首をひねる。まだそのあたりの話は早いか、と束はあははと笑いながら誤魔化してチラリとマコトを見る。マコトは愛想笑いをしかない。束には既にコズミック・イラの全てを伝えている。彼女の夢、宇宙の果てまでを人類の飛べる成層圏とする壮大な計画のために。

マコトはその時のことを思い返していた。

「へえ、それが君の生きた世界なんだ。〃シン・アスカ〃」

束との出会いはまだマコトたちがもつと小さい時のことだ。篠ノ之神社の近くで迷子になったマユを探すうちに入り込んでしまった篠ノ之神社の裏山で見つけた、明らかにこの世界の技術レベルではない人工的な施設の入り口に辿り着いたマコトは束にスタンガンで気絶させられ、彼女の研究施設に監禁されたのだ。

その時に、年齢相応でない喋り方と何か〃この世界とはズレている違和感〃を感じ取った束は根掘り葉掘りマコトを問い詰めて、彼女が〃彼〃だった頃の記憶を聞き出したのだ。

「そうだよ、だから、もういいだろ。離してくれ」

まだ少し、シン・アスカとしての口調が残っていたマコトはぶつきらばうにそう言って束に解放を求め、束はあっさり拘束を解いていた。

「宇宙に出ても、ヒトは、人類は、争いを止められないのか」

マコトを解放し、思考に耽る束を見てマコトはその場からすぐに離れようとは何故か思わなかった。彼女の悩む姿が、どこか、彼が最後に仕えた男と重なったから。かつての彼も、そうだった。僅かに見せた、苦悩。人類がどこまで行こうとも絶やすことのできない争い、戦争。それを解決するために、ある種の天才と言えた頭脳が導き出した遺伝子による運命の強制。

似ても似つかない目の前の少女も、何かに苦悩しているようだっ

た。

「……なに？まだいたの？」

「なあ、あんたは、何をしようっていうんだ」

値踏みするかのように束はマコトを見る。しばらく彼らは見つめあい、束がため息をついて「しようがない」と話し出した。

「私は、この世界が窮屈でしようがないの。だから、もっと、もっと遠くへ行きたいの」

出てきたものは平和に悩んでいた彼とは全く結びつくこともない、個人の願望だった。

「私は天才。わかるでしょう？ここを見れば、キミも」

まだ中学生もいいところな束の容姿と、マコトが今いるこの研究所と思しき施設は束が一人で作り上げたものだと察していた。確かに、空間に投影されるディスプレイや自動的に何かを作っている機械の類を見れば束の「天才」という発言にも納得がいく。

「どこまでも続く『無限の成層圏』。私はそこに行きたいの」

「それがあんたの……夢、っていいばいいのか」

「そう。けど、今、キミが語った『未来』の出来事でそれに影が差した」

明らかに不機嫌だと言わんばかりの表情にマコトは身構える。

「あたしの妄想だって、思わないのか」

「普通ならそう思うだろうね。けど、キミの言葉は現実味があるすぎる。そして、君が語った技術は私の脳が今は無理でも、人類がこのまま続いていけば実現できる技術だと理解できる。それに、コーディネイターだっけ？遺伝子改良による人工的な人類の改造はもう現時点で行われている」

「ツ……そんなっ」

「まあ、流石に大々的じゃないから、種族間の戦争とかそういうことにはならないと思うけどさ」

マコトがこの世界は薄氷の上に平和があると認識したのも、この時だった。

「話を戻すけど、このまま私が一人で世界を変えても、世界は混乱し



て、宇宙に行くどころじゃなくなる。宇宙に出て、遺伝子いじくって強制的に進化しても結局、人類はなんにも変わらず君の世界では戦争してたわけだからね。こんな地球に縛りつけられてる間に私の技術っていう「劇薬」……君の世界で言うところの「ファースト・コーデイネイター」のような衝撃を与えたらどうなることか容易い」

篠ノ之束はどこまでも理性的に思考をしていた。いや、まだ理性的な思考をできる段階だった。もし、マコトと出会うのが彼女が「事を為した」あとであれば、せいぜい異世界の持つ技術を聞くだけ聞いて、玩具にする程度で終わっていたことだろう。

だが、まだ間に合った。かろうじて、家族との繋がりを絶っていない。楽しい世界にしたい。天才であっても、未来は確定していないからやってみないとわからない。わからなかったが、実例が突如として目の前に降ってきた。束の夢のプランは修正を求められていた。

「あんたは、その、結局何をどうしたいんだ」

「ああ、具体的に言わないとわかんないよね。纏めると、生身で人間が宇宙に進出できるようにしたいんだよ、私は」

「生身で!?!」

「そう。宇宙線、フレア、人体には地獄とも言っている宇宙空間を身一つでどこまでも」

マコトは想像する。モビルスーツという兵器で宇宙を駆けていた彼がそうなった世界を。彼女の言う通り、本当になんの枷もない、囚われていない自由な世界。無限の宇宙を前に、人類の争いなんて無意味に思える。

「私は、この母なる星と未知の闇に広がる広大な宇宙との架け橋、そして人の今と未来の間に立つ者。調整者、コーデイネイター……」

「なにそれ」

「あたしの世界の、さっき言ったジョージ・グレンが外宇宙に旅立つ前に言った言葉」

「……へえ」

東はその言葉を真に理解できた。宇宙という、無限の可能性。そこへと旅たつ者が後に続く者たちへと充てた激励の言葉。今東を囲う檻の外。そこはきつと楽しくて、終わりのない夢の先。ヒトはどこまでも行ける。

「私はさ、自分だけが飛べればどうでもよかったんだ。けど、今開発してる技術は世界に公表したかったんだ。これはさ、天才である私も理解ができなかった。他人なんてどうでもいいのにさ」

だが、今彼女はわかった。理解した。同時に、自らがただの思い上がった小娘だとも知った。

「みんなにも、きつとそこが楽しいよって言いたいんだ」

所詮、東自身も“人間”なのだど壮大な宇宙戦争が続いた世界の話を前に、思い知らされた。そして、憑物が落ちたかのように、これまでの自身の世界が矮小なものだと認めざるえない。

「……そうだな、きつと、争いもない宇宙を自由に行けたら、楽しいよな」

「わかるんだ」

「ああ。あたしが飛び続けた宇宙は楽しくなかった。いつも死と隣合わせで、楽しいなんて思えなかった。けど、あなたの言うように、誰しもが宇宙に簡単にいけるようになったら、きつと、きつと」

素晴らしい事だ、とマコトは言い切った。東は微笑んだ。初めて彼女が人らしい温かみを見せたマコトは思った。機械的な、どこか覺めた声音が暖かさを伴っていく。

「名前」

「へ？」

「もう一回、言って欲しいな、あなたの」

「…シン…いや、あたしの名前は飛鳥マコト」

「マコト…マコト…うん、じゃあ、まーちゃんだ」

「ま、まーちゃん？」

「そうそう。私は東、篠ノ之東！よろしくね、まーちゃん！」

これが篠ノ之東と飛鳥マコトの出会い。気がつかぬ間に一人の少

女の『運命』をマコトが大きく変えてしまった出来事だった。

「——まーちゃん、どうしたの?」

「へ?あ、ごめん、束姉さん、ぼーっとしちやって」

「もく、話をちゃんと聞かない子はぎゅっくの刑にしちやうぞー!」

「うっ、それはちよつと」

束との出会いを思い返していたマコトは束の言葉で現在に意識を戻す。今日の前にいる篠ノ之束はどこにでもいそうな、気の良い近所のお姉さんだ。マコトの出会い以降、篠ノ之束という人物はある程度は社交的になった。学校こそ行く機会は少ないが、それでも僅かながら友達も増えたし、束は他人をある程度認識できるようになった。小さな世界で宇宙を目指すには限界があると悟ったからだろう。

実を言えば現時点で、束は宇宙へ身一つで飛び立つことができるが、それを世界へと明かすにはまだ尚早だとわかって控えていた。せいぜい、関連論文をこそつと学術誌忍ばせるぐらい。彼女が選んだのは時間をかけて、確実に地面を固めることだったのだ。人との関わりを経て、束は人が急激な変化を嫌うものだと理解した。

そんなことをしようなど以前は考えもしなかったのに、そのきつかけをくれた目の前の少女はそれをわかっているのだろうかと束は優しげな瞳をマコトへと向ける。

「いや〜それにしてもゆーちゃんもかわいいね〜、まーちゃん、妹を交換しない?」

「いやだよ」

「そんなあく、少しだけ、少しだけだから」

「束お姉ちゃん、箒ねえに怒られちゃうよ?」

「大丈夫だよ、この時間帯は箒ちゃん稽古で」

「姉さん」

マコの肩を掴んで明らかに不審者じみた行動をする束に、絶対零度の声が届く。ギギギ、と錆び付いたロボットのよう束が社のほうへと振り向けば、道着を身につけた束の妹の箒がそこにはいた。幼いながらも大和撫子を体現するような容姿は、今、彼女の怒りを強く

引き立てる。

「ほ、ほほほ、箒ちゃん、これはその、じよ、冗談で」

「私のお願いを聞かず、私の友人の妹に変な事を言う姉さんよりも、確かにマコトのほうがいい姉かもしれないですね」

「うっ」

笑顔で、それはもう冷たい笑顔で箒は言った。束の精神へのダメー  
ジはこの時点で致命傷レベルだった。自業自得、とはマコトもマユも  
言わなかった。

「父さんに言います」

「ちよ、ちよつと、箒ちゃん、ま、待って、それだけはダメえ！」

「言います」

「本当にやめてえ！なます切りにされちゃう！」

箒がスタスタとその場から去っていく。篠ノ之姉妹の父は現代に  
生きる剣士でもあり、束の言う通り人間をなます切りにするぐらい出  
来そうだった。実際、束が箒と喧嘩して研究所に引き籠った際、研究  
所の合金製の分厚い扉を斬鉄してしまったことがあるという。

「束姉さん、あたしたちはもう家に戻るから、箒のこと追いかけたら  
？」

「うう、そうだね……じゃあね、二人とも！」

白衣の端を風に揺らしながら束はその場から兎のように駆けてい  
く。マコトたちは手を降って見送った。くすくすと笑いながら、恒例  
の篠ノ之姉妹の漫才の余韻を味わった二人は神社に背を向けて元き  
た階段へと戻る。

戻ろうとした時、一人の黒髪の少年がちようど登ってきた。

「あ、マコトとマユじゃん」

「一夏じゃん、おはよう」

「おう、おはよう」

「おはよっ、一夏にい」

現れたのは箒や束と共通の友人である同級生の織斑一夏だった。  
彼も朝のトレーニングのためここに来ているため、こうしてマコト  
と会うことは珍しくなかった。

「二人もランニング？マユも一緒なのは珍しいな」

「うん。今日はちよつとね」

「そっか。箒たちは？朝の挨拶ぐらいいはしてこうかなって思ってるんだけど」

「あゝ、さつき会ったけど今はいかないう方がいいと思う」

「……わかった。となると師範にも会わない方がいいな」

「うん」

一夏はマコトの言葉で何があったのか悟り、大人しく帰る事を決めた。マコトたちが階段を降り始め、一夏もそれに並んだ。

「束さんも懲りないなあ、千冬姉にまたアイアンクローされそう」

「あはは…目に浮かぶ」

千冬、というのは一夏の姉で、束とは同級生だ。束の数少ない友人の一人で、天才的な剣術少女だ。箒は束よりも千冬の妹なのではないかと思うほど、ウマが合う。ただ、箒と違い私生活がだらしなく、そこだけは束と共通している。

両親がおらず、一夏と二人で暮らしているため、ズボラな姉のため一夏は家事が得意で、マコトはそういったところにちよつと憧れている。

「マコト？」

「ああ、なんでもないよ。さつきと走って戻らないと、もうこんな時間だし」

「そうだな」

「あ、ちよつと二人とも、待つてよ〜！」

三人が階段を駆け下りる。初夏の暑さが滲み出てきた空の下、いつもの日常が始まる。

マコトはきつとこのまま、何事もなく日常を続けていけるのだと思っていた。近所に住む変わったお姉さんたちや、可愛い妹。一緒にバカをできる男友達。優しい両親や、しっかりとした大人たち。得たかった平穩は今ここにあって、これ以上は望まなかった。

だが、「世界の運命」は彼をそのままにはさせない。どれだけ大きな分岐をして、一人の少女の運命を救ったとしても、「世界」そのも

の力には抗う術がない。

「ツ……………なんだ、この、不愉快な感覚は」

「レイ？どうしたの？」

「あ…いえ、母さん、なんでも、ないの」

遠い欧州の島国で、まるで姫のような愛らしい容姿の金髪の少女が世界に一瞬駆け巡った悪意を察知した。

世界を悪意が包んでいく。運命の時を刻む針は、今動こうとしていた。

## # p h a s e ー 1 「翼を広げて」

その日はいつもと変わらない朝だった。マコトはいつも通り朝のランニングへと向かい、結局三日坊主となったマユを置いて、篠ノ之神社へとやってきていた。

「しくしく…しくしく…」

「束姉さん、しようがないって」

「だってえ、あれから箒ちゃん全然口聞いてくれなくて」

「謝った？」

「まだ」

「いや謝ろうよ」

束はつい先日の「マユと箒を入れ替えちやおう」という冗談を箒に聞かれてから未だに箒から許されていなかった。マコトはまあ当然だろうな、と思いつながら束の愚痴に付き合う。

「父さんも何も言ってくれないし、母さんも笑ってるだけだし、うう、こんな世界、滅ぼしてやる」

「すぐに魔王みたいなこと言わないで。束姉さんが謝ればそのうち箒も口聞くなって」

「でも私なんも悪い事してないよ」

「そうかもしれないけど、ほら、とりあえず謝っておくっていうのもさ」

年上のはずだが、どこか子供っぽい束に、マコトはデカイ妹のようにも彼女が見えてくる。前世と合わせれば束は年下の女の子で、今のマコトの自認は女なせいかな意識することはほぼないが、少しだけ可愛らしくも思えた。

いやいやと首を振り、マコトは心を鬼にする。こういうとき束の友人である千冬がいればさつきと解決していそうなものだが、千冬はつい昨日まで剣道の遠征でこの街にはいなかったのだ。

「それに、いつまでも箒ちゃんとかじれてると千冬さんに」

「ひっ、ちーちゃんの名前は出さないで！言ったら」

「言ったらどうなるんだ？」

魔王、降臨。そんな言葉が一瞬脳裏に過ぎるほどの殺気がマコトの背後から発せられた。振り向けば、そこには箒と同じく絶対零度の笑みを浮かべた黒髪のセーラー服姿の少女がいた。織斑千冬。この町では東同様ちよつと有名な剣道全国大会の覇者で、一夏の姉だ。

「ち、ちーちゃん、も、戻ってきたんだね」

「ああ、昨日な。先生は息災か？」

「と、父さんなら今朝も箒ちゃんと、道場にいたよ」

「そうか。大会で優勝したことを伝えようと思ってきたのだが、来たらたで年下の女の子に随分と情けない姿を見せる親友がいたものだな」

「アハハ、だ、誰だろうね」

「お前だ」

いつの間にも?!とマコトが言う暇もなく、東の顔面に千冬のアイアンクローが放たれていた。メキメキと鳴ってはいけない音が東の頭蓋から鳴っている。

「ちよつ、いたたたつ！ちーちゃん、だめつ、頭が、今世紀最大の天才の頭脳が、出る、出ちゃう」

「なあにが天才だ。妹の機嫌を損ねてそれをどうこうともしない姉が天才なわけあるか。愚か者め」

「あ、あははっ」

マコトは笑うしかない。このバイオレンスな光景が東と千冬のコンビの挨拶のようなものだ。マコトと会う前から東と千冬は親交があったようだが、今では完全に親友と呼べる仲のようで、二人の間には遠慮というものがない。

「全く…マコト、すまないな。この阿呆が面倒を」

「い、いいですよ、千冬さん。いつものことですよ」

「まーちゃん!?!」

「事実だろうが」

「ぎにやあああつー」

断末魔のような叫びが境内に響くが、他の参拝客は気にもとめない。いつものことだからだ。



石畳の上に倒れた束を見もせず、手を払った千冬は改めてマコトに向き合う。

「久しぶり、といっても一週間ぶりぐらいか、マコト」

「千冬さんも、おかえりなさい。大会優勝したんでしよう？おめでとうー！」

「ああ、ありがとう。癩だが、この阿呆にも感謝しなくちゃならない」「でしょ!?ちーちゃん!私の作ったスーパーソードマンMK・IXのおかげでしょ!？」

「ああ、ほんつとうに癩だが、アレのおかげで今回の相手の太刀筋が止まって見えた」

詳細はマコトもよくはしらないが、束は千冬のために剣道の練習用ホログラムマシンを作って、それを彼女に誕生日プレゼントとして渡していた。なんでも古今東西あらゆる剣術を詰め込んでおり、それらを繰り出すホログラムとVRで模擬戦ができるというシロモノだった。

束が進めている宇宙用のパワードスーツから技術を応用して作成したものらしく、その完成度は高い：と以前千冬が嫌そうな顔でマコトに言っていた。一夏はその実機を見ていたのでマコトに詳細を伝えようとしたが「なんかすげえ機械で千冬姉がすげえ動きしてた」としか聞けず、いまだにどういう形をした機械なのかわかっていない。「いや〜照れちゃうなく、親友の剣を支える幼なじみの美少女研究者、すごくおいしくない?」

「お前を選ぶやつはさうさうの節穴かお前と同じぐらいぶっ飛んだやつだろうな」

「それならちーちゃんもそうじゃん」

「私はお前ほど人間離れしていない」

千冬はその言葉にそれは嘘だとマコトは言いたかった。千冬は明らかに人間的な肉体強度を超えたものを持っており、凄まじい怪力だ。軽トラックを一人で、台車を押すように軽々と動かしたことは衝撃的な出来事としてマコトの脳内に刻まれている。

束と千冬は本人たちが思っている以上にお似合いのコンビだとマ

コトは思っている。

「…も〜、いいも〜ん、ちーちゃんが選んでくれなくてもいいも〜ん」  
マコトの背後にさっと回り込み、彼女を盾にして束は言う。千冬はただただ苦笑いしている年下の幼なじみに「お前だぞ、お前」と他人事だと思いい込んでいるマコトに心の中で嘆息しながらも意識を切り替える。

「ああ、別にそれでいいぞ。…つと、お前と遊んでいる場合じゃないな、先生に挨拶しなくては」

「さつきも言ったけど、父さんはまだ道場にいると思うよ」

「わかった。お前たち、学校には遅れるなよ」

「はいはい」

学校では風紀委員を務めているという千冬の言葉に、束はやる気なく返事をし、千冬も言ったところで意味はないだろうとその場を離れようとする。だが、千冬が二人に背を向けようとしたところで、束の体が跳ねるようにビクツとした。

「わっ、た、束姉さん?」

「う、うそ、え、なにこれ」

「ん?なんだ、束、どうした」

「や、やばい、やばいよ!まーちゃん、ちーちゃん!」

尋常ではない束の様子に、マコトも千冬も真剣な表情になる。彼女が本当にまずいと思うような表情を見せたのはほんの数回で、今回の表情も、そうだった。

一度目はこの街へ飛来しようとしていた隕石を見つけた時、二度目は千冬が剣道の試合で負けた時、三度目は箒が姉に反抗的な態度を取り始めた時。落差がひどいが、どれも彼女にとっては一大事だ。

「束。なんだ、また妙なことでも起きて——」

「ミサイルが!すごい量のミサイルが日本に飛んできてる!」

「は?」

脅威はいつだって、前触れなく現れる。束がマコトを脇に抱えて走り出す。

「ぐえっ!?た、束姉さん!?!」

「お、おいつ！東！待て！」

超人的な肉体を持つ東の足は速く、あつという間に彼女の研究所へとたどり着く。同じく超人的な千冬も彼女についていき、研究所へと滑り込む。

研究所の一面にある大型ディスプレイモニターへとやってきた東はマコトを下ろすと、即座にコンソールを叩いて世界地図を表示させる。

「軌道上の全衛星に接続、リアルタイムで情報を……移動する熱源、捕捉、予測進路……やっぱり！」

理解が追いつかないマコトと千冬も、神速とも言える東の情報処理で何が起きたのか理解した。画面に映る世界地図。その中で強調された日本へと向かってくる幾本もの白い線。マコトはこれが即興で東が用意したレーダーだと前世の知識から察し、白い線の先端に表示されたものも見慣れたもので、何がきているのかわかった。

「弾道ミサイル!？」

「そうだよ、マコトちゃん！」

「な、なんだ、何が起きてるんだ？ミサイル？ミサイルだと？」

「千冬さん、日本に、すごい数のミサイルが飛んできてるんだ！」

「なんだと!?!この、白い線全てがか!？」

千冬は固まりそうになる。こんな夥しい量のミサイルが日本に、住んでいる国に向かっていているなど、ありえない、理解の範疇を超えている。東でさえも、悲鳴を上げたくなる。以前の隕石はまだ地球へ辿りつくまで余裕があり、どうにかできる手段を用意できる時間があつた。だが、今回は時間がなさすぎる。

「予測進路、関東全域……!?!どこの国がこんな……クソツ！色んなところから撃ってる！」

東の悲鳴のような状況確認の声に、マコトは葬り去られたはずの過去の意識が蘇る。破裂しそうなほどに鼓動を訴える心臓とは真逆の、覚めた思考。戦場でのカン。

「テロだ、東姉さん」

「まーちゃん!？」

「狙いはわからない。けれど、誰かが、日本の、関東にある何かを狙ってるんだ。それも、こんな数のミサイルで根絶やしにしくちやいけないぐらい」

まるで今の光景は、かつての血のバレンタインにもマコトには思えた。いや、事実そうなのかもしれない。この世界における血のバレンタイン、それは今起きているのかもしれない。

怒れる瞳が、迫りくる脅威を睨む。しかし、今の彼女にかつての翼はなく、ただ、手を強く握るしかない。

「どうして、なんでこんなことを……！そんなに戦争をしたいのか！」  
「まーちゃん……」

その叫びは心の底からのもの。事情を知る束は重く心に彼の怒りと悲しみがのしかかる。だが、今の束にはまだ彼女に渡せるものがない。いや、渡そうとは思えないというのが正解だった。シン・アスカという一人の少年が駆け抜けた軌跡。聞いた時はなんとも思わなかった、悲しみと怒りに満ちた戦いの記憶は今の束にはあまりに重すぎる。

どうか、マコトが、いつか平和な世界で無限の成層圏を跳べるように……そう願っている彼女は、マコトを無力なまままでいさせていた。

「……………束」

「ちーちゃん……っ？」

マコトの叫びで静まり返り、警告音だけが響く研究所の中に、千冬の静かな声が何故かよく通った。

「白騎士を出す」

「ちーちゃん!？」

親友からの提案に、束は目を見開く。白騎士、それは束が秘蔵する“来るべき時”のために作成した無限の成層圏へと到達するための、人類のための鎧だ。

真名、インフィニット・ストラトス。その試作一号機。それがこの研究所の格納庫にあるのだ。

「アレに搭載されていた……なんだ、すごいレーザーがあるだろう。アレなら」

「無砲身レーザー砲のこと？確かにアレなら迎撃できるだろうけど……」

「なら、迷うことはないはずだ。ミサイルはここにも落ちるのだろう」  
「そ、そうだけど、でも」

東は直感した。今ここで、千冬を出せば世界は変わる。変わってしまう。かつて危惧したように。異世界の「調整者」が伝えたかっただけの言葉の意味が歪められて伝えられたように。東の目指す世界が歪む。

マコトも、戸惑う東に、彼女が迷っているとすぐにわかった。インフィニット・ストラトスがどういったものかマコトもわかっている。宇宙で、ほぼ生身で行動を可能とするマルチフォームパワードスーツがインフィニット・ストラトスの正体だ。纏う事で存在している次元の位相をズラし、歪曲させることで肌を裸出させた状態でも宇宙空間に出ることが可能となる。『シールド・バリア』を備え、宇宙空間で障害となるスペース・デブリ、隕石を破壊するために備えられたこれらの兵器よりも、下手をすればコズミック・イラの兵器よりも強力な様々な武装。

ただ、宇宙という地球の外、無限の成層圏を飛ぶために用意された翼。この世界にとっては全てを変えてしまう劇薬。

今、日本を守るために出撃し、ミサイルを迎撃すれば間違いなくインフィニット・ストラトスはただの翼から、違うものへと変質するだろう。

「ち、千冬さん、まだ、他に何か方法が」

「ないだろう。その天才が今こうして画面とにらめっこして、すぐに作業をしないのが証拠だ」

「それは……」

「マコト、東。お前たちが何を危惧しているのかは私でもわかる。アレは凄まじい力だ。何せ、私の親友が作った世紀の大発明だからな」  
「ちーちゃん……」

「そして、力というものも。先生からの受け売りだがな、力とは無色、無色故に揺れやすいと。きつと、私が白騎士でミサイルを落とせば、

アレは東が目指すものではなくなる」

千冬もわかっていた。ここで出て、戦ってしまえばインフィニツト・ストラトスが兵器となることを。それでも彼女はもう、行く気だった。目の前の親友と、弟の友人を守るために。

「それでも、私は。お前たちの命の方が大切だ。たとえそれが……東、お前の願いを踏みにじるものだとしても」

覚悟はある、私は戦う。言外に、千冬はそう言った。マコトは俯く。前世の、最後に聞こえた青年の言葉が蘇る。

——ああ、どうして、僕たちは……こんな、こんなところまで、きてしまったんだろう。

もつと、やりようがあつたはずだ。何かできたはずだ。そんな、後悔に溢れた悲壮な言葉。だが、もう状況が選択肢を与えてくれない。そうだ、いつだって、あの時もそうだった。古い、忌々しい記憶。故郷が、オーブが焼かれ、かつての家族がただの肉片と化したあの時も。

世界は、運命は残酷にも、マコトの、シン・アスカの大切な人を踏みにじる。平和だったはずの世界は今、崩れていつている。

マコトの隣に立つ少女は震えていた。今、彼女に課せられているものは家族を犠牲に世界を維持し続けるか、家族を、友を守るために世界を破壊するのかという葛藤だ。いくら天才といえど、いや、マコトと出会わなければ抱くことのなかったものだ。一人の人間として、当たり前のような恐怖。東はそれを正しく感じていた。

どうするべきなのか、マコトはもうわかっていた。もう、猶予はない。やるしかない。だが、状況に流されて、ただ突き動かされたかつてのシン・アスカの時とは違い、自らの意志で。

「……東姉さん、大丈夫。あたしたちがついてるから」

手を握る。震えていた手は少し、マコトよりも大きかった。

「まー、ちゃん」

「千冬さん。お願いします。あたしを、東姉さんを、マユを、一夏を……みんなを助けて」

頭を下げる。無力な自身にできることは今、目の前にいるヒーローの背中を押すことだけだ。数秒後、わしゃわしゃとマコトの頭を千冬

は撫でた。

「任された。……東、白騎士を出す。いいな」

「……………本気、なんだね」

「ああ。いつだって本気だぞ、私は。お前の頭を締め上げてる時もな」  
「ぷつ……………そうだね、すつごい、痛いんだからね！」

「当然だ。お前の石頭はあれぐらいせんの意味がない」

軽口を叩き合い、いつもの調子を取り戻した二人にマコトは安堵してしまふ。一瞬緩んだ空気はすぐに引き締められ、千冬はその場から格納庫へと駆け出した。

「東！準備を頼む！」

「うん！任せて！まーちゃん、ごめん、手伝って！」

「えっ!?!」

「わかるよね!?!」

「わかるけど!?!」

東の研究所のコンソールはマコトも扱える。以前の隕石騒ぎのときに彼女を手助けしたからだ。不思議とコスミック・イラのシステムに近いそれらをマコトは手慣れた様子で叩いていく。二人がこれから行うのは千冬を、インフィニット・ストラトス“白騎士”を出撃させるためのシークエンスだ。

『東！ついでぞ！装着する！』

「お願い！」

格納庫内の映像が映り、千冬が安置されていた白騎士を纏う。その名の通り、純白の騎士甲冑を思わせる美しい装甲が開き、千冬を包む。顔はバイザーで隠され、まさにSFの騎士がそこに現れる。

「拡張領域とは別に両腕に直接無砲身レーザーをつけるよ！」

「展開時間も惜しいんだね！」

「そう！ちーちゃん!?!拡張領域のは予備だよ！」

『了解した。近接装備は』

「一応入ってる！解析したらミサイルは全部普通の弾頭だから！レーザーを抜けたやつを始末するのに使って！」

『わかった！』

白騎士に装備が外付けされている様はまるでマコトの前世で見られた、ウィザードパックの装着にも見えた。

「ハッチ解放！背部カタパルト接続！コア・ネットワークオンライン！」

マコトの言葉に合わせて、千冬の頭上にある隔壁が全て開き、遠くに外の光が見える。千冬は身を預けた白騎士からわずかに強い想いのようなものを感じた。インフィニット・ストラトスの核をなす、Iスコア。その中に治められた超性能AIには自我があるのではないかと、製作者本人である束が言っていた。

偶発的に生まれた機能だったが、束はそれをそのままにしている。宇宙空間を一人で飛ぶのは寂しいものだと思っただからだ。…それが“ある不具合”を誘発させるのだが、今は誰もそのことを知らない。

「白騎士、お前も守りたいんだな」

『――！』

「そうか。……束、マコト、行ってくる。サポートを頼む」

『もちのろん！』

『千冬さん、気をつけて！』

「ああ。よし、行くぞっ！」

『射出！』

白騎士がカタパルトによって空へと射出される。裏山の小さな滝壺に設けられていた射出口から一気に飛び出した千冬は即座に機体にステルス機能を展開させ、周囲から姿を消す。

『電磁迷彩の作動を正常確認。ちーちゃん、迎撃ポイントを送るから、まずはそこに向かって！』

「了解した。場所は……霞ヶ関、議事堂上空か」

『レーザー出力は無制限！千冬さん、絶対に地表に向けて撃たないでくださいね！射程が無限になります！』

「わかった。マコト。…レーザー砲のドライブを確認。目標ポイントに移動する」

後に「白騎士事件」と呼ばれる三人の少女たちの小さな防衛戦が始まった。



目標ポイントに到達した時には既にミサイルは射程内で、千冬は両腕に備えられたレーザー砲を空へと向ける。無砲身レーザーと呼ばれるそれは束お得意の次元制御を大いに利用した収束の必要のないレーザーと言いつつも超強力な荷電粒子砲で、あまりに高出力すぎてレーザー光線のように減退しないため便宜上レーザーと呼ばれているものだ。射程は長く、砲身がないためどんな方向にも撃てる白騎士唯一の射撃兵装にしてこれ以外は不要とされているものだ。

『あーもう、こいつら邪魔！』

「自衛隊の飛行機か」

『束姉さん、どうするの!?!』

『退かす!』

千冬の周囲には当然ながらこの国を守る自衛隊も展開している。まだ攻撃を行っていないため白騎士の姿は認識されていないが、いずれ晒すとなれば早いほうがいい。また、現状の問題として白騎士の射線に自衛隊も入っている。

『ちーちゃん、迷彩解いて!射線の警報と、合成音声で警告する!』

「わかった。迷彩オフ。戦闘モード」

白騎士の姿が晴れ渡った空の下に晒される。純白の装甲が陽光を反射し、その姿は街中からも上空を飛ぶ飛行機からも視認できた。

『周辺の自衛隊機へ、直ちに現空域より離脱せよ。これより迎撃行動を行う。繰り返す——』

束によつて合成された音声が無差別に周囲へ放送される。同時に、束は自衛隊の司令部に白騎士の射線の情報を流す。そのおかげか、流石に撤退こそしなかったが、白騎士の射線からは外れて行った。

『正面、クリア。千冬さん、安全装置を解除、いつでも』

「解除を確認。エネルギー上昇……ハイパーセンサーに目標を捉えた」

『ロックは自動的にしてくれるから!ちーちゃんは!』

「撃つだけだな」

引き金を引く、それが比喩に近いとわかかっていても千冬は躊躇いを

覚える。この一撃が、親友の夢を歪ませる。それをわかっていながら千冬は引き金に指をかける。やらねばならない。覚悟は決めてきたのだ。

「やるぞ、白騎士！」

『——っ』

機体が応え、それは放たれた。黄金色の夥しい数の光が空を駆ける。まるでそれは真昼間の空を登る流星群のように。

全てのミサイルに、ビームは命中する。空が文字通り爆ぜた。

『全弾命中！』

『後続のミサイルにも次々に当たってます！』

『このまま続けるっ』

光は全てのミサイルを破壊するまで走り続ける。時間にして十数分、日本を狙ったミサイルはたった一機のインフィニット・ストラトスが迎撃しきった。

『全てのミサイルの撃墜を確認！やったよ！ちーちゃん！』

「ああ、無事に終わったようだ」

どつと、緊張が抜けて千冬は疲れを感じた。いくら千冬が超人でもこれは彼女にとつて初陣なのだ。千冬のそのようすにマコトはお疲れ様と声をかけつつ、早く戻るように声をかけた。

『千冬さん、戻ってきてください。迷彩の起動を忘れずに』

「わかった」

千冬はその場から去ろうと、迷彩を起動させようとする。しかし、全周波数で千冬に通信が飛んできた。

「こちらは自衛隊、ここの防衛を任された臨時部隊だ。所属不明機、ただちに武装解除の上、指定するポイントへと降下せよ」

『くっ！そりやそうだよね！ただで返してくれるわけないか！』

『どうする。さつきから網膜投影にロックオン警報と出ているが』

『やっぱりそうなるよね…！東姉さん！ここで戦ってもしょうがない！逃げない！』

『わかってるよ！ちーちゃん！いいから逃げて！無視して！』

「そのつもりだ。迷彩展開、帰るぞ！」

白騎士の姿がその場から忽然と消える。混乱する自衛隊を他所に、千冬はそそくさと離脱した。

研究所へと無事帰還した千冬はすぐに二人の元へと戻る。束もマコトも、5体満足で帰ってきた千冬に安堵した。

「おかえり、ちーちゃん」

「お帰りなさい、千冬さん」

「ああ、ただいま。それで、どうだ。ミサイルは一発も落とさなかったか」

「うん。全部落とせたよ。ただ…」

「世界は大混乱、か」

モニターにはあらゆる世界のニュース番組が白騎士の姿を移していた。束も、マコトも、その映像を黙って見続ける。そして、映像の全てにはかならず「謎の機動兵器」という文字が踊っていた。

「……あーあ、結局、こうなっちゃったか」

「ツ……すまない、束、私は」

「いいよ、ちーちゃんが悪いわけじゃないから」

「でも、これからどうするの、束姉さん」

世界にインフィニット・ストラトスが露見した以上、もう逃げ道は残されていない。いずれあらゆる世界の諜報機関が束にたどり着くだろう。だから、その前に束は動く必要があった。

「……ISコアをばら撒く」

「なっ!? 束姉さん!?! そんなことしたら」

「わかってる。でも、このままこの国だけで発表したら世界のバランスが崩れる……あの『世界』のように」

「……束姉さん」

「束、仮にISコアを全世界にばら撒いたとしても、それは複製できるものなのか」

「完全に、となると今の世界じゃ無理。あと100年は必要だと思う」  
「……だが、どこかに独占されたり、奪おうとこの街を襲うものが現れるよりはマシ、か」

「うん」

世界の悪意が伸びる前に先手を打つ。それしかなかった。

「まーちゃん。大丈夫。私、頑張るから」

束は気丈にも笑顔を見せて、マコトの頭を撫でる。マコトは齒噛みした。ああ、これはあの時と同じだと。家族を失ったあのときと、同じだ。身を焼くほどの無力感。なにもできず、大きなうねりの中へ流されていく。

それが嫌だった。もう、二度も、同じ過ちを繰り返したくない。マコトは束に気がつけば抱きついていた。

「うわっ、と。まーちゃん?」

「作って」

「な、なにを」

「あたしの、あたしだけの、インフィニット・ストラトスを。束姉さんを、マユを、一夏を、千冬さんを、みんなを守る、力を」

夢を踏みに行ける行為だと、マコトはわかっていた。それでも、今は欲しかった。伽藍堂なあの時とは違う、確かな想いを持って、守るべきものを守る力が欲しかった。

束はああ、とマコトを抱きしめながらひどく悲しくなった。また、きつと、彼女は戦うのだろう。あの語られた世界でのように、誰かのために、身をすり減らして、全てを失っても。束の夢を、素晴らしいと言ったときのマコトはまるで、死人のようだった。もう手が届かない輝きをみているかのような。

それが、今の束の心の奥に刻まれている進み続ける理由の一つ。彼女に、彼に、平和な宇宙をあげたい。跳ばせてあげたい。今、マコトの願いを叶えれば束の夢はきつと叶うのだろう。でも、それは、ダメだ。叶うのは、マコトがいなかった束の夢だ。

今の彼女は一人ではない。弱くなった、否、彼女は強くなった。自身の夢に、誰かを乗せられるぐらいに。

「……ありがとう、まーちゃん」

「束っ、待て、おまえ」

「でもね、それはできないよ」

千冬が息を呑んだ。見たこともない、親友の表情に。

「(なんて、顔をしてるんだ)」

愛しさと、哀しみを混ぜたかのような、研究一筋な篠ノ之束という少女が見せることのなかった、恋する少女のような表情。

「束姉さん、でもっ、でもっ！」

「マコト」、私はね。君にもあげたいと思ってる。インフィニット・ストラトスを」

「ならっ！」

「でも、今、マコト」に与えたら、キミはどんな空を飛ぶのかな」

あだ名ではなく、名前で呼ばれ、マコトは硬直した。束の声は僅かな震えを伴っていた。それは最後の戦いへと赴く前に、別れを告げた赤い少女のようだった。

——シン、シンはもう、どこにいるのか、わからない。

どこにいるのか、わからない。でも今、翼を手によればどこを飛ぶのか、そんなこと、わかりきっている。

飛鳥 マコトは死ぬ。シン・アスカが黄泉の国から戻ってくる。そして、彼が飛ぶ空はひどく濁って冷たい、命など価値のない空だ。

「(それは——ダメだ。ダメだよ。束姉さんの飛びたい空は)」

争いなんてない、自由な空。そんな空を飛びたいはずだ。

「……わかってくれた？」

「…うん」

「ごめんね」

「いいよ、別に」

二人は離れる。互いにひどい顔だった。束は今にも泣きそうで、マコトは悲しさに顔を染め上げている。

「約束」

「え？」

「約束しよ。いつか、まーちゃんのための翼をあげるから」

「…わかった。束姉さん」

束とマコトは指切りをする。それを黙って千冬は見届けた。二人の少女の願いを破壊したのは自らだとわかっていたから。

しばらく、研究所の中は動作しているモニターの音だけが響いていた。

「……つと、よしっ！これから忙しくなるぞ〜っ！」

まるでこれまでに別れを告げるかのように、束が声をあげた。

「束。できることがあつたら呼んでくれ。テストパイロットぐらいならできるからな」

「ありがと、ちーちゃん！」

「束姉さん、あたしも！」

「うん！まーちゃんも、お願い！」

世界の運命が動き出す。三人の少女たちから始まった、世界の運命が動いていく。歪んでいく、壊れていく。それでももう止まることはできない。だが、心に秘めた思いは見失わず、少女たちは無限の成層圏を目指す。

いく末に、いくつもの壁を前にしても、飛び越えて。

## # phase 2 「歪まされた世界」

白騎士事件と呼ばれる、日本へ無数のミサイルが飛来したテロより世界は一変した。篠ノ之束という一人の少女が生み出したマルチフォーマルパワードスーツ、インフィニット・ストラトス。通称“IS”の存在が明かされたからだ。白騎士と呼ばれた試作一号機の所在こそ篠ノ之“博士”は明かさなかったが、単騎で何千発というミサイルを破壊しえた超兵器を博士は全世界に配布した。正しくは、その核とも言える基幹システム“ISコア”を。

宇宙空間での作業を飛躍的に効率化、果てはコロニー建造や未開の惑星に直接降下し調査することもでき、宇宙空間での航行速度は亜光速にまで達し、人体への影響は皆無。まさに新たな人類のフロンティアのために生み出されたISは……その本来の要素は聞き流されて、全人類に受け入れられた。

核に代わる、新たな超兵器。あらゆる攻撃を通さず、単騎で戦略さえ影響を及ぼす。人類の暴力装置の一端として。

だが、ISコアをそのままの形で量産や解析することは叶わず……この国も篠ノ之束博士を欲した。彼女を手中におさめればこの夢の力は思いのまま。世界を、文字通り手にすることができると。

しかし、既に彼女はこの世界のどこを探しても見つけることができなかった。彼女の近い存在を利用しようとしても、阻まれ、篠ノ之束を誘い出すこともできない。

気がつけば世界にはただ兵器としてのISだけが残り、本来の“無限の成層圏”という名は忘れられていった。篠ノ之束の存在もまた、一説には思うようにいかず、絶望して人知れず命を絶ったのではないかと自殺説さえ流れていた。

極め付けとして、世界の歪みは女尊男卑主義というものによって決定づけられる。ISがインフィニット・ストラトスであった時から存在した唯一の不具合“女性しか反応せず、男性は乗ることができない”。当初は限られたISだったが、量産型コアと呼ばれるオリジナルの3割程度の機能を備えたものを搭載したISの登場によりISは

社会に急速的に浸透。女性の権利をそれこそ、もはや強権といつても過言ではないものへと変え、世界は完全に歪み切ってしまった。

東という少女を知る者たちはひどく嘆いた。明るく、ちよつと人見知りのケがあつたとはいえ、街の発明家でしかなかった彼女がこんなものを望むだろうか。それこそ、この世を去ってしまったも、おかしくないほどだろうと。

けれども、もつと深く、彼女の側にいたものたちは知っている。篠ノ之東がまだ生きていて、諦めていないことを。

「それじゃあ父さん、母さん、マユ。行つてきます！」

「ちゃんと月一で連絡は寄越すんだぞ！」

「困ったことがあつたらすぐに言うのよ！」

「お姉ちゃん、ちゃんと休みの日は帰つてきてね！」

飛鳥マコト。彼女もまた、東を信じている一人だ。

「わかつてるよ！じゃあね！」

今日、彼女はある新しい生活へと向けて家を出た。身に纏うのは白を基調としたワンピースタイプの制服。肩に“ISHS”とワツペンがついている。

IS学園と呼ばれる、IS発祥の地、日本に設けられたIS操縦者専門の養成学校。量産型コアではなく、オリジナルコアのISを扱うにはIS学園に通う必要があつた。だから、彼女は歪められた教育だとしても行くしかなかった。

「(東姉さん)」

空を見上げる。白騎士が空を飛んだあの日のように、澄み渡った青空の下のどこかに東もいるとマコトは確信している。世間は死んだ、などと言うがああ東がそんな簡単に物事を諦めないと知っていた。というより、知っている。

インフィニット・ストラトスを発表してから会えなくなり、東の家族も政府の保護プログラムによって離散し、篠ノ之家との繋がりが断たれたマコトだったが、入学前に携帯電話に差出人不明のメールが入っていた。

その内容は「待つてるから」という一言だけ。それだけで、マコト



は誰が送ってきたのかわかった。進学先は別になってしまったが、一夏にもそれは伝えて、二人で東がIS学園にいと確信した。千冬も知っているのだろうか、とマコトは思ったが彼女はIS学園の教員で、何より東の親友だ。むしろ、当然とも言えることだ。

「(それにしても、一夏。昨日から全然連絡つかないな。命な危険はないがヤバイ。何かは言えないがヤバイことになったって、余計に心配なんだけど)」

マコトは駅へと向かいながら、東のことから不可解な音信不通になっっている一夏のことを考える。女尊男卑が蔓延る中でも小さい頃から変わらぬ一夏との関係は良好で、今ではマコトの前世のレイやルナマリアのような親友と呼べるものになっていた。そんな彼が大変な目に合えば当然心配になる。まるで弟のような存在なのもあるかもしれない。

「(弾も連絡つかないって言ってるし、鈴もダメ。家に行ったら電気ついてるけどインターフォンには出ず、窓から腕でジェスチャー。ほんとは何をしてんの一夏は)」

中学時代の友人たちでさえ連絡がつかず、家を尋ねても直接声を交わせない。生きてるのは間違いないが一体何がどうなっているのかマコトはわからなかった。

「まあ、本当にやばかったら千冬さんが家に帰ってきてるし、大丈夫かな」

マコトは楽観的にそんなことを考えて、IS学園方面へと向かうために駅へと足を踏み入れた。

が、そんな彼女は楽観したことを後悔した。

「なんで一夏がここにいるの」

「いや、まあ、その、IS、動かしちゃって」

「……………」

入学式前に、辿り着いたIS学園の1年1組に、その性質上ありえない男子生徒がいて、その男子が幼馴染の男子だったという理解不能な状況にマコトは前世でも感じたことのない混乱に陥りそうになる。

周囲は二人の動向を見守っており、静まり返っていた。

「(なんで、男である一夏がISを?だってあの『不具合』は最後まで束姉さんでも直せなくて…)」

マコトはISコアにある『不具合』を知っていた。女性しか乗れない、否、正確には「起動時に生態パターンがスキャンが女性でしか上手くできず、男性でしようとするエラーを起こし起動に失敗する」という解消不能な不具合を。今の世界では特権となってしまったソレを正しくマコトは『不具合』と認識できている一人だった。

「(いや、そうか。ISコアの全ての原型。白騎士のコアに刻まれた最初の生態スキャンデータは千冬さんだ!だから、生態パターンの近い一夏を『女性』と誤認して起動できた…のか!?)」

ありえる原因に思い当たり、マコトは頭を抱えそうになる。そんなマコトに一夏はなんの気兼ねもなし口を開く。

「あ、そうだ。マコト、お前って確かたばっ——」

「はいストップ!ストップ!ほら!あんまり喋っていると入学式の時間になっちやうでしょ!式の次第とか、紙、机の上にあるし、見とかないと!」

慌てて彼の口を押さえ、遮るようにマコトは言った。そう、マコトは篠ノ之束の次にIS

コアを理解している人間になってしまっていた。それを知るのは束本人と、織斑姉妹、飛鳥家のみだ。作成は不可能だが、未だ人類が見ることさえ叶わないISコアの最深部のブラックボックスでさえ見ることが出来る。

それが露見したらまず、マコトの身も、家族も危険だった。

「何考えてんの…っ」

「……………ごめん」

耳打ちして、マコトの言わんとしていることを一夏は思い出し謝る。

そんな二人を見ていた周囲はこう思うしかなかった。「あの二人、付き合ってるの?」と。

「…………お前、なんでこんなところにいる」

「えっ!?!」

混沌としている教室の中を気にせず、一夏に声をかけてきたのはマコトも知る人物だった。黒髪をポニーテールにしたスラツとした少女。忘れるはずもない、一夏とマコトの幼なじみ。

「箒!?!」

「声が大きい!それよりも、一夏、お前は男だろう!?!どういことなんだ!」

「いや、そ、それが、一昨日、千冬姉に忘れ物届けようとして学園に来ただけけど、偶然通りがかつたISに触れたら」

「:起動、したのか」

「うん:」

箒は盛大にため息をついて頭を抱えた。家族離散の上、姉に罪はないとわかっていても悩みながら、強制的にIS学園進学となり自らの人生を呪っていたところで教室に入ればいるはずのない幼なじみと、会えると思っていた幼なじみが密着していたのである、意味がわからず、感動の再会などできるはずもなかった。

箒はチラリとマコトを見ると「あとで話す」というアイコンタクトをされる。変わらない少女に安堵しながらも、オロオロとしているかつては堂々とした剣士だった一夏にひとまずチョップした。

「いでっ!」

「まあいい。ともかく、積もる話は後でだ。入学式があるからな」

「そうだね。一夏いいよね」

「なんで俺は殴られたんだ?」

「腑抜けているからだ。そんなもの、父が見たら」

「うう、先生だったらやばいな」

未だ篠ノ之父から受けた所業の数々を覚えていることに箒は安堵しつつ周囲を見渡す。奇異の目で見られているのがすぐにわかる。異分子である一夏と親しげに話していたのだから当然と言えた。一部からは訝しげな視線もあった。

「(女尊男卑主義者、か)」

マコトもその視線に気が付き、内心あたりをつけていた。特に、金

髪縦ロールの少女から視線が強く、その背後にいる同じく金髪の、こちらはストレートにしている少女は何か別の視線を向けていたが似たようなものだろうとマコトは判断した。

「うっし、とりあえず、来ちゃったもんはしようがないから、やるしかないな」

「一夏のその切り替えの速さ、千冬さん譲りだよね」  
「まあな」

能天気なのかどうなのかよくわからないが、一夏は既にここで過ごすことを良しとしたらしい。藍越学園という都立の学校に彼は、マコトとも共通の友人、五反田弾や凰鈴音と通うはずだったがそうでなくなってしまうって大丈夫ではないはずだとマコトは思っていたがいない心配だったようだ。

「そういうば、鈴と弾にはこのこと言ったの？」

「さつき行ったら弾は『うらやましいぞ馬鹿野郎!』って言って、鈴は『馬鹿なの!?! なんなの!?! 意味わかんないだけ!?!』って言った。あとどつちも週末店に来てとりあえず大盛りメニュー喰えって言われた」

「二人なりの罰ゲームだね」

「いや、なんで俺が罰ゲームを…」

「二人とも心配してたってことだよ。あたしもだけど」

「しよ、しようがないだろ…電話も政府の人からとりあげられちゃって、戻ってきたの今朝なんだぞ…」

うんざりしたような一夏に、再度箒のチョップが飛ぶ。

「いでえ!」

「友人を心配させたんだから甘んじて受けろ」

「それ、箒が言えるか!?!」

「いや、私の場合はやんとどこに行くかわかっていたし、お別れ会もやっただろう」

「そういう問題!?!」

「そういう問題だ」

一夏は理不尽に思いながらも、懐かしさを感じていた。この生真面

目ぎ、確かに彼女は篠ノ之箒だ。

それはマコトも同じだ。篠ノ之束の妹、真面目でちよつと堅物な篠ノ之箒。

二人が変わらなかつたように、箒も変わっていないなかつたのだ。

「お前らは変わらんな」

「箒こそ」

「それを言ったら三人とも、でしょ」

「だな」

そうして笑い合う。教室の中は完全に三人だけの世界になっていて、周囲の生徒たち。男子生徒に良くも悪くも声をかけようとしていた生徒たちはそのまま入学式まで動くことはできなかつた。

入学式を終え、教室へと戻ってきた三人はそれぞれの席についた。マコトは廊下側、一夏は教室中央、箒は窓際だ。綺麗に別れてしまったとマコトは思ったが、席が近ければ授業中に雑談しかねなかつたので良かったとも思った。

今、マコトはかなり飛鳥マコトとしての自認が強く、シン・アスカだった頃の認識は薄れつつあつた。記憶こそ間違いなく、胸を張って自分が生きた軌跡だと言えるがそれでも、それはもう遠い過去で、今の生活にはあまり関係のないものだった。シン・アスカがいなくなつたわけではないが、ここに居るのはこの世界の少女飛鳥マコト。彼女はそう思うようになって、生きている。

「IS学園って言っても、ザフトのアカデミーみたいに軍学校ってわけじゃないし、空気自体は結構ゆるいんだね」

教室に流れる空気は一夏がいるせいで微妙に緊張しつつも、それは進学時の初めての教室でのものと酷似していて、普通の学校と何ら変わりない。一夏への反応も普通の学校では珍しい外国からの留学生を見たときのようなもので、特段驚くほどのものでもない。

今では兵器として扱われているISを学ぶ場所にしてはあまりに空気は緩く、当たり前前の光景があつた。

「(安心していいのやら、しちやいけないのやら)」

幸いにもマコトや一夏が過ごした中学校では女尊男卑など無きに等しく、むしろ男女共にたくさんのバカをやって遊んでいた。先ほど名前のあがった弾や鈴はその筆頭で、どちらも食堂経営の息子、娘で、マコトもよく二人の実家には食べに行っている。

「(週末来いって言っても一夏の状況だと外出が許されるのかどうか。でもあの二人なら勝手に出前にして寮の部屋に送りつけてきそう)」

IS学園は基本全寮制で、一夏も勿論寮暮らしになる。入学式後に少し見た生徒証には出前を頼んではいけないという校則はなかった。むしろ、出前を頼んだ場合は裏口の警備室を通して受け取るようにとまで逆に案内が載っていた。

五反田食堂から嵐中華料理店から、という出前の呼び出しが容易に想像できた。

「まあ、いいや。あの二人のことだし、あたしの分もついでに通常サイズでおくってきそうだし、今週末はおいしいお昼食べられそうだな)」

罰ゲームを受けるのは一夏なのでマコトは気にせず、HRの開始を待った。

しばらくして、教室の扉が開き、教師が入っている。が、入ってきたのは生徒たちとあまり変わらないぐらいの少女にも見える眼鏡をかけた女性で、出席簿をその豊満な胸に押し付けて持っていた。一眼で緊張しているのがわかった。

「(うわ、一夏ガン見してる)」

仕方のないことであつたが、一夏は真正銘年頃の男子であつた。箒も一夏の様子をしっかりと見ており、マコトは南無…とあとで入るであろう折檻に念仏を唱えた。

「お、おはようございます！みなさん、初めまして！私はこの1年1組の副担任、山田真耶といいます！前から読んでも後ろから読んでも、やまだまや！です！」

自己紹介が余計に背伸びしている少女のように見えてマコトはくすりとしたが、教室は静まり返っていた。これもよくある反応だ。マコトはさすがに挨拶はしたほうがいいだろうと口を開きかけたが、カ

ツカツと足音が廊下から聞こえ、教室の中にもう一人の教師が入ってくる。

黒のタイトな女性用スーツを纏った黒髪の、絶世の美女が現れた。「(ち、千冬さん!?この担任なの!?)」

入ってきたのは一夏の姉であり、箒やマコトからすれば幼馴染みと言っていい年上の女性だった。だが纏う雰囲気はいつも見せていたどこかズボラものではなく、抜身の刀のような剣呑なものだった。

「なんだ貴様らは、ロクに挨拶もできんのか。これは期待できんな」

その声を聞いた途端、奥底にある恐怖を一夏と箒は思いだし、マコトもまた前世の「アカデミー」であつたことを思い出して、三人は同時に席を立った。

『おはようございます!!師範／教官!!』

「遅い。座れ。それと私は先生だ。師範だの、教官などではない」

『すいませんでした!!!』

「……それで、なんだ。他の者たちは?お前らはこいつら以下の愚図なのか」

教室を身の毛もよだつほどの恐怖が支配する。副担任であるはずの真耶も何故か目を回しそうなぐらい恐怖で震えていた。マコトたち以外の生徒も席を立ち挨拶をする。悲鳴のような挨拶だった。

千冬はそれを見ると「座れ」と一言告げ、全員を座らせた。

「それでは本クラス最初のホームルームを行う。山田先生、進行を」

「は、はひい、先輩!」

「……コホン」

「す、すいません、織斑先生!はい!そ、それではこれからHRです!まず最初に出席番号順に自己紹介です!それが終わったら校内オリエンテーションに移ります!」

マコトは一足先に恐怖から抜け、安堵する。千冬の口調や態度はまさしく軍学校の教官そのものだった。いや、まだ優しい方かもしれない。改めてマコトは千冬を見る。ISが世に出てから、誰よりも先に搭乗経験のある千冬はIS操縦者としての頭角をメキメキと表し、今では実質的ISを使つての戦闘行為を許されているISによるオリ

ンピック『モンドグロッソ』の二年連続優勝者となっていた。

その後、一時期ドイツ軍で何故か教官をやっていたことをマコトは知っているが、なるほど、これは軍隊仕込みなのだろう。ただ、真耶がもはや泣きながら進めているのを見るにこれがIS学園のスタンダードというわけではないらしい。千冬をよく知るマコトや箒、それに一夏は内心まったく同じことを考えていた。

『俺／私／あたしみたいな身内がいるからだろうな』

身内がいるから特別厳しく行く。箒が姉を反面教師として、千冬に似てしまったというのもあって千冬もなんでもかんでもな生真面目人物かと言われれば大間違いなことは私生活がダメという時点で三人ともわかつているため、鼻肩しないように必死に押さええて至った結論が軍隊の真似事ということだったのだろう。

三人とも見抜いているためあまり意味がなさそうだが。

順番に自己紹介が行われる。一番最初に自己紹介を開始した相川という生徒がガツチガチに緊張したまま喋ったが千冬は別に何も言わず、仏頂面のまま自己紹介が終われば拍手した。至って普通の自己紹介で特に怒られもしなかったため、以降の生徒は大丈夫なのだろうと判断して特に震えることなく自己紹介を開始した。

そして、あつという間にマコトの番になったため彼女は席を立った。

「はじめまして、飛鳥マコトといいます。藍越市汽車町から来ました。趣味はランニング：とにかく、体を動かすことが好きです。あと、よく真反対だねって言われるけど機械いじりもしています。よろしくお願ひします」

一礼して、席につく。拍手が響いた。なお、マコト自身は全く意識していないがこのクラスの生徒の過半数ぐらいからはすごい可愛い子、と思われる程度には容姿が整っており、拍手の音は少し大きかった。

そのまま順調に進み、一夏の番がやってくる。中学生の時は名前だけ言って終わった彼だったが、今回ばかりはそうもいかなかったように勢いよく立ち上がり、元気よく自己紹介を行った。



「織斑一夏といひます！さきほど紹介のあつた飛鳥さんと同じ藍越市  
汽車町から来ました！趣味は特にはないです！昔剣術：剣道やつてま  
した！彼女いません！以上です！」

「最後の情報、いる？」

「最後のはいらんだろ…」

「浮いた話の一つはないのかこの愚弟は」

マコト、箒、千冬、それぞれが緊張して明らかに不必要な情報を混  
ぜた一夏に呆れたがクラスは拍手喝采だった。少なくとも一夏は  
「イケメン」と言える顔立ちで体格も恵まれており、剣術を辞めても肉  
体労働でバイトをしていたおかげで体は締まっている。出会いのな  
い学園の中に現れた一夏はまさに女子たちからすれば虎の折の中に  
放り込まれた兎も同然であり、彼女いませんはある意味最悪な不要情  
報だった。

その後しばらくして、箒の番がやってくる。

「篠ノ之箒。出身は先ほどの織斑、飛鳥と同じく。趣味は剣。以上」

短く、端的に。教室の中は「お、おう」といった空気になり拍手も  
疎らだった。あまりに短く、武士然とした雰囲気生徒の誰しもが、  
かの篠ノ之束と同じ苗字を持っていることをこの時点では気にさせ  
なかった。

残りの生徒たちの自己紹介も続いて、マコトが視線を気にした金髪  
縦ロールが立った。

「セシリア・オルコットですわ。イギリスより参りました。イギリス  
では代表候補生を務めさせて頂いておりますの」

代表候補生。その言葉にマコトは驚く。それは世界でも数少ない  
500弱のオリジナルコアを与えられた者の一人ということ。束が  
生み出した本物のインフィニット・ストラトス、その乗り手。

それが、彼女。

「以後、お見知り置きを」

格が違う、そうとも言いたげな視線をクラスに向けつつセシリアは  
席に座る。拍手は気圧されたのか控えめだった。最後に、セシリアの  
後ろに座っている同じく金髪の少女が立った。均整の取れた抜群の

プロポーションを持つセシリアと比べると幾らかスレンダーだが、顔つきは美女になることが約束されたものだった。

「レイラ・デュランダルです。セシリアと同じく、イギリスより留学しています。また、同じく代表候補生でもありますが、私は専用機のない、彼女の補佐のようなものです。よろしくお願いします」

一礼して、静かに座る。不思議とマコトは彼女に既視感があった。それは同じ金髪で、長髪だった。最後の出撃でも一緒だった友、レイ・ザ・バレル。顔つきに彼の面影を感じた。加えて、デュランダルという家名。それは――。

「(議長の、ファミリーネーム)」

ギルバート・デュランダル。最後にシンが剣を預けた、プラントの最高指導者。そのファミリーネームと一緒にだった。

「(レイ、なのか)」

確信は持てないし、聞くこともできない。マコトがこうして転生したように、他の誰かも転生しているのかもしれない。マユや両親は違ったようだが。

「これで全員か。では最後に、私が織斑千冬。このクラスの担任だ。諸君らとはこの一年、ないし、生徒によつては来年も担当する場合がある。ああ、クラス替え的な意味でだ。この学園に留年という制度はない。落第はすなわち即刻退学を意味する」

それはマコトも知っている。生徒証に記載があったからだ。だが、他の生徒は息を飲んでいいる。一夏もだ。

「これより諸君らが学ぶのはこの世界を実質的に支配している最強の戦略兵器の運用方法だ。生半可な気持ちで学習されては困る。諸君らが過ちを犯せば世界は荒れ、諸君らの家族などそれこそ、世界から非難される。私は決して諸君らを特別扱いしない平等に接する。何故ならば、今はまだ貴様らに価値がない、平等に無価値だからだ」

脅しのような言葉の裏に、戦略兵器という言葉を発した瞬間の千冬はひどく表情を歪めていた。彼女からすればそれは間違った呼称で、言いたくはないのだろう。だが、それが今の世界のISであり、ISを教える機関の教師故に言わなくてはいけない言葉なのだ。マコト

は理解する。

やっぱり、変なところで真面目な幼馴染みだとマコトは千冬も変わっていないと思った。

「以上。意義のあるものは放課後にでも寮の寮長室を訪ねるといい。一年生の寮母は私だ。諸君らにとつてこの一年が有意義なものであることを切に願う。…では山田先生、あとを頼みます。私は会議に」  
「はい…よろしく願います！」

千冬が教室を出ると、瞬時に空気が緩む。真耶もため息を露骨にしていた。それでいいのかとマコトは嘆息した。

「では、オリエンテーリングを開始します！まずは校内の各施設について私から——」

1日のオリエンテーリングを終えて、マコトは寮にやってきた。一夏と筈は何故か同室で、それはいいのかと考えたが二人とも同じ剣術を学んでいた弟子同士で男女というよりはむしろ男同士の友情に近いものとして縁を結んでいるため問題ないだろうとマコトは考えた。

「で、私の部屋はここかあ」

真耶から鍵を渡されてやってきた部屋にマコトはノックをして入る。室内には初日ということもあってかまだダンボールが山積になっていた。

「失礼します…つと、誰かいないのかな？」

「……います」

「うわっ」

段ボールの山の陰から、ぬるりと水色の髪をした少女が出てくる。型までの長さで揃えられた髪だが、前髪は長く、赤枠の眼鏡が彼女の印象を暗くしていた。マコトは面食らいながらも彼女がルームメイトだと察して自己紹介する。

「えっと、1年1組の飛鳥マコトです」

「1年4組の更識簪です」

静かな声で彼女、簪はそう応え、そのまま段ボールの開封作業に

戻ってしまう。マコトはどうしたものかと頭をかいた。まずは自身の荷物を探そうと室内を見渡し、すぐ入り口に実家から送った衣服類などが入ったダンボールが見つかった。しかし、それらはこの部屋の段ボールの五分の一にしかすぎず、残りは簪の荷物だとわかった。

「え、ええっと、更識、さん？」

「簪」

「へ？」

「簪でいい。苗字は嫌い」

「あ、はい」

ピシヤリと、簪はそう告げた。マコトは思わず言葉を止めてしまうがこれでめげる彼女ではない。マコトは幼少期、まだ他人をゴミ程度にししか見ていなかった束との邂逅という経験があった。この程度では折れない。

「簪さん、でいいのかな？荷物すごいね、手伝おうか？」

「いい」

「いやでも」

「一人でやれる」

「……そ、そっかあ」

この時点で簪という少女が何かあるなとマコトは察してそれ以上話すのはやめた。意固地になっているのが見え見えだった。

「じゃあ、私は荷物自分のを開けたら食堂にでも行ってるね。ベッドとか、どっちがいい？」

「どっちでも」

「じゃあ、あたしが窓際ね」

「わかった」

話せば返答してくれるあたり、初対面の頃の束より遥かにマシだった。マコトはささっと荷物を開けて仕舞うと部屋を出る。寮内の廊下は賑やかで、入学初日の興奮が生徒たちから抜けていないようだった。

食堂にひとまず行こう、そんなことを考えていたマコトだったが携帯電話が鳴る。誰かと思えば幼馴染みである鈴音だった。

「もしもし?」

『お、繋がった。もしもしマコト? 元気?』

つい先週どころか一昨日にも聞いた声である。マコトは特段感慨もなく応える。

「元気だけど、どうしたの? 急に」

『いや、そっちはどうかなくって』

「鈴こそ。藍越はどう?」

『え? いつも通りかなく、弾のやつ自己紹介でいきなり彼女募集中です! とか言ったわよ』

「バカだね」

『ほんとバカよね〜! おかげでクラスの男子とはすぐ打ち解けたけど、女子からはまあお察しして感じね』

「あははっ、なんか二人ともいつも通りで安心した。で、電話の用件はこっちのおぼかと」

『正解〜。というか、あんたらニュース見た? すごい騒ぎになってるわよ』

「お昼見たし、マユからも電話きたよ」

時刻は既に夕方、昼食時にマコトたちは食堂で一夏がISを起動させたことを報せる報道を見ていた。報道を見た一夏は「とりあえず保護って名目でここに入れられた」とIS学園に在籍している理由を述べた。つまりは受験せずに入学したわけだが、1年1組の生徒たちはほとんど一夏の境遇に同情し、裏口入学などと因縁をつけるものはいなかった。

マコトはこのご時世珍しい生徒たちだなと感心した。

『いやほんと、電話も繋がらなかったのこれが理由だったわけね』

「あたしも朝会った時びっくりしたよ」

『いきなり学校行って一夏がいたあんたのほうが余計に驚いたでしょうね。それで学校自体はどうなの?』

「千冬さんが厳しい以外は普通の学校と変わらないかな」

『え? 千冬さんが厳しいとか嘘でしょ、何その冗談』

「いやたぶん身内の担任になったから変に意識してるんだと思う」

『あく、そういう』

鈴もまた千冬の本性を知っており、一夏が食事を作れない時はかならず弾か鈴の実家に千冬は出脱していた。まったくの余談だが、両店の大盛りメニューの最速完食記録を持っているのは千冬だった。

『ま、落ち着いたらまたみなで食べにきてよ。父さんと母さん、一夏のこと爆笑してたわよ』

「あ、そこは爆笑なんだ…」

『いやだつて何を間違えたら女子校に行く羽目になるのよ。あたしと弾はキレたけどさ。あ、そうだ。一夏週末こつちこれそう？』

「たぶん無理じゃないかな。身の安全的に」

『ですよ、じゃ、あんた当てで一夏用の特別メニュー、弾と一緒に送つとくから。マコトもなんか食べる？』

「それなら鈴の炒飯が食べたいかな」

『……りょーかい。任せときなさい』

電話の向こうで「弾！賭けはあたしの勝ちね！」「チクシヨオオオ！」という声が聞こえたがマコトは聞かなかつたことにした。次代を担う二人の料理をマコトが何度か試食していることとは関係のないことだろう。また、二人の実家が雑誌でライバル店扱いされてることも関係のないことだろう。

『じゃあまたね、マコト。あんたは帰ってこれるんだから顔出しなさいよ』

「うん。そうだね。またね、鈴」

電話はそこまで終わった。

「…ん、なんだかお腹減つてきちゃったな」

鈴と話していたからか、マコトはお腹が鳴ってしまった。別に羞恥感がないのは前世のおかげか。彼女は食堂へと足早に向かうことにした。昼食で食べたラーメンは学校の食堂にしては本格的でおいしく、夕食も期待できるからだ。

「料理がおいしいのは大切なことだよ。そうだ、一夏たちも誘って行こう」

マコトはそう決めて、一夏たちの部屋へと向かった。

が、

「そこに直れ」

「やめ、やめろ！ 箒！」

何故か廊下に上半身裸で尻餅をつく一夏と、上半身サラシで下はスカートという何も知らないものが見れば一夏が箒を襲って返り討ちにあっている場面にマコトは遭遇。どうせまた一夏がラッキースケベでもしたのだろうと箒を宥めて二人を食堂に連れて行くことに成功した。

学園1日目から彼女ら三人の濃い空気に周囲の生徒たちは置いていかれていた。また、怒れる箒を簡単に宥めた手腕から何故か翌日から彼女を「飛鳥先輩」と呼ぶクラスメイトが増えた。マコトは意味がわからないと思いつながらあだ名だとすぐにわかったので気にしないことにした。

## # p h a s e — 3 「世界の歪み」

IS学園にやってきて一週間が経過していた。そんな朝。

マコトは朝陽を浴びながら目を覚ます。彼女は太陽の光で目を覚ますのが好きだった。上体を起こして周囲を見れば、まだ室内にダンボールがまばらに残っている。それら全ては隣のベッドで未だ深い眠りの中にいる簪のものだった。

「……理由、聞けるといいんだけどな」

困っている、マコトは簪に対してそう思っていた。だから何か力になれればと考えてしまう。それは彼女が彼だった頃から変わらない、ある種傲慢とも言える本質だった。

「ん~~~~、とにかく、起きよう」

学園に来て彼女の日課は変わらない。朝のランニングだ。幼い頃から続けたおかげで基礎体力は軍隊にいた頃にも劣っていないと自負できる。それこそ、モビルスーツに乗っても以前と同じパフォーマンスが発揮できるはずだ。そこまで彼女が鍛えているのはマコト自身の若干の勘違いのせいもあった。

インファイニット・ストラトスには年齢制限がかけられており、それは公表される前から束自身がマコトに言っていたことだ。幼い体で乗ると成長に悪影響が出る。正確には鍛えられていないとインファイニット・ストラトス自体に振り回されて怪我をする、と言われていたからだ。

実際、現在流通している量産機も、オリジナルコア搭載の機体も、一律14歳まで搭乗不可とされている。マコトはその理由も同じだろうと思いついていたが実際には違うことを昨日の授業で思い知った。

「それにしても、まさか搭乗制限がただの年齢制限だったなんて」

今のISにある搭乗制限はただの年齢制限以外の何者でもなく、白騎士時代にあった肉体的なものが理由ではなくなっていた。

これは単に白騎士の時点では搭乗者のことなど考慮していない……それこそ、ミサイル迎撃時に見せた超兵器としての力を出すことができる現行のISとは隔絶した性能を出すためにはその超出力に



耐えられる超人的な肉体の持ち主でないといけなかったからだ。

当然、最初期の開発では東と千冬しかテストパイロットがおらず、両者とも超人的な肉体の持ち主であったため問題はなかった。このISの兵器としての性能の誤解はコアが配られ、実際に各国で試作機が出てきてから表面化したものだ。

白騎士並の性能を再現しようとして各国では最初の荣誉ある搭乗者を皆傷物にし、全ての国家の結論が「白騎士に乗っていたのはアンドロイド＝人間じゃない」と結論づけた。そう結論づけるしかなかったのだ。

千冬はそのことに若干傷ついていたが、正体を見破られる可能性が薄くなったため半分安心していた。

「映像とかで見てはいたけど、現行のISはあそこまでの性能はないつてことか」

白騎士のスペックシートは今でもマコトの記憶の中にある。確かに公表されている現行のISの性能と比較すれば、白騎士とは戦いにならないようなものばかりだ。そもそも、大気圏内での限定的な運用しかできない現行ISと外宇宙への航行さえ前提とした白騎士とではもはやマシンとしてのモノが違いすぎるのだ。

マコトの前世で言って仕舞えばヤキン・ドゥーエ以前のジンタイプとG兵器の隔絶した性能差に近い。

「これもいいのか悪いのか…」

本来の目的から外れているため、製作者サイドであるマコトは悪いことだろうなあと思うがそれを声高に言ったところで聞かれないのがオチだ。ひそひそと、今は学園のどこかに潜んでいるであろう東のように自分たちは自分たちのインフィニット・ストラトスで空を目指せばいい。

「(それにしても東姉さんはどこにいるのやら)」

ランニング用の服装に着替え終わったマコトは簪を起こさないように部屋を出て、あのメッセージを送ってきた東がどこにいるのか考えた。未だ接触の兆候はなく、鬼教官モードを頑張っている千冬に聞くのも悪いのでマコトは全く手掛かりがなかった。

会いたいかと聞かれれば会いたいと彼女は思っている。何せ、彼女の夢に共感しているし、色んなことも一緒に経験し、それに唯一自らの前世を語った相手でもある。

千冬とともに、この世界の最初の戦友とも言えるかもしれない。

なお、同時刻学園のどこかに潜んでいる兎は「それは違うよ！」と唐突に叫んだが現在の助手に引かれるだけでマコトには届かなかった。

寮から出て校内を走り出せば少なくとも生徒がランニングしているのが見えた。普通の学校と似た雰囲気だがやはりIS搭乗者を育成する学校だけあり、努力家が多いのだろう。実際に入学試験は難しく、倍率の高さもあり難関高校とIS学園は言われている。

マコトが入れたのは素直にISそのものを深く知っていることと、前世のタツパがあるからだ。

「ちよつとズルしてる気分になるな。しょうがないけど」

素直な彼女はそう思ってしまうが割り切る。

しばらく校内を走っていると見知った顔が並んで走っているのを見つけた。

「箒、一夏ー」

「む？ああ、マコトか。おはよう」

「おつ、マコトも走ってんだな」

箒と一夏もジャージ姿で走っており、マコトは二人の横に並んだ。一夏と箒は高身長でマコトと並ぶとマコトは幼く見えてしまう。それほどまでに差があった。

「うん。一夏たちもいつも通りって感じかな」

「そうだけ。目が覚めるしな、走ると」

「ああ。これで道場が借りられればな」

箒は未だ剣道をやめていない。一夏もマコトも特別言うことはないが、特別保護プログラムで各地を転々とする間偽名を使用しているも明らかに箒と思われる少女が各地の剣道大会を総なめしていることが噂として流れてきたからだ。

弾は「間違いなく箒だろ」と断定し、面識のない鈴は「ナニモンな

のよそいつ…」と慄いていた。

「まあ、来週には部活の勧誘が始まるって山田先生言ってたし、すぐ剣道部入れればいいだろ」

「それもそうか」

一夏の言葉に箒は同意する。一夏は真耶と仲がよくなったのか、よく話しているのを放課後に見る。単純に副寮母という真耶の立場もあるのだろうが、親しみやすい真耶と同じく親しみやすい一夏の相性はいいらしい。

一夏が所帯染みでいて、なんでも真耶の部屋に「害虫」が出たため、偶然通りかかった一夏がそれを駆除した上、潜んでいるものへの対策も徹底的にしたのも理由の一つだった。なお、真耶の部屋の隣室は千冬の部屋であり、話を聞いたマコトと箒は察した。

「で、今日は朝飯どうする?」

「焼き魚定食だな」

「おっ、いいちよいすだな箒。俺はサバ味噌で行こうと思う。昨日の晩飯で相川さんが食べてたけど旨そうだった」

「確かに、それも捨てがたい。マコトはどうするんだ?」

「うーん、あたしはパンとスープにしようかな」

マコトの回答になんだそれという顔を二人がする。が、マコトからすれば前世から向こう、パン食が根付いているので何がおかしいのかわからない。

「え、なんかおかしい?」

「おいおい、そんなんじゃないぞ」

「そうだぞ。確かにマコトがそれなりに鍛えているのはわかるが」

「二人とも脳筋すぎない?」

前世のアカデミーや乗っていた艦であるミネルバにそんなことを言う者がいなかったのでマコトは正直に二人に思ったことを言ったが、一夏と箒は「失敬な」と口をそろえた。二人が脳筋気味なのはわかってはいたがここまで進行していたのかとマコトはげんなりした。

「よしマコト。今日の飯は私たちと同じものにしよう。そうしよう」

「ああ、名案だぜ箒」

「いや別にいいけどさ」

和食が嫌いなわけではないため、マコトは二人の提案を了承する。

「ああそうだ、定食といえば弾が新しいの開発したらから来てって」

「マジか!? 楽しみだな」

「弾? 弾と言うのは五反田のことか?」

「そうそう。箒が引越したあとだったけど、弾、学校行きながら修行してるんだよ。あたしもたまに試食してる」

「ほう、あいつが…私も行きたいな」

「いいんじゃない? 弾も箒に会ったら喜ぶと思うよ」

「だいたいな」

「試食といえば、鈴のほうも最近してんの? マコト」

「そつちもしてるよ。この前餡掛け炒飯の新作食べたけどおいしかったよ」

「鈴?」

箒が鈴音の名前で首を傾げた。マコトと一夏はそうだったと思いき、箒に鈴のことを説明する。

「あー、そういや箒は知らなかったよな。箒と入れ替わりで鈴音ってやつが中国から来てさ」

「で、鈴音の両親もお店…中華料理屋してて、鈴音も次の店主になるために修行中ってわけ」

「そうなのか。二人の様子を見るに気持ちのいいやつなのだろう? その鈴音というのも」

「ああ、竹割った感じだな」

「そうだね。鈴は」

「ふふ、会うのが楽しみだ。期待しておこう」

箒が旧友と、新たな友への期待を膨らませる中、三人は気がつけば寮まで戻ってきていた。一夏が腕時計を見ればもういい時間で、そのままそれぞれの部屋に戻るのだった。

午前午後の授業もつつなく終え、放課後のSHRの時間になった。

いや、午前午後の授業も突然この学校に連れてこられてしまった一夏が「なんにもわかりません！」と堂々と応え千冬に「知ったかぶりをせずに言い切ったのは褒めてやるが来週末までに覚えろ」と膨大な量の宿題を渡されるといふ事件があった。

ただ内容自体はただの書き写しのようなもので、千冬の姉としての優しさなのかもしれない。

そんなことなど脳筋な一夏には理解できず現在のSHRでも意気消沈しており、隣の席の生徒が呪詛を吐きそうな一夏に若干引いていた。

「さて、SHRを始める：前に、おいそこの」

「はい！すいません！元気です！」

「よろしい。では気を取り直して、SHRだ」

鬼モードをなんとか維持していると見られる千冬と、強引に再覚醒した一夏にマコトは吹き出しかけながらも、千冬の口から語られる連絡事項をメモしていく。教室全体がメモをとっている音で埋め尽くされており、どれだけ千冬の恐怖政治が効いているのか物語っていた。

「——なお、一年生寮の浴場については来週以降、消灯時間後に男子の時間も設けることとなった。この措置により男子生徒の消灯時間が延びる」

男子生徒、といってもそれは一夏しかおらず、千冬は一夏をジロリと見る。

「ただし、だからといって入浴以外の行動をとれば即刻ここから出て行ってもらおう。わかったか、織斑」

「はい！」

「よろしい。なお、他の女子ども、諸君らも織斑の入浴時間に動こうものならわかつているとは思うが」

『はい！外に出ません！』

「よろしい。わかってきたじゃないか、諸君。そうやって息を合わせてこれから三年間励むといい」

1年1組の生徒のほとんどが千冬には完全に教官として接してい

るせい、マコトには「はい」が「サー・イエスサー」に聞こえた。「では最後の連絡事項だが、本学では毎年4月末に1年生の各クラス代表者によるISバトルが行われる。そのため、このクラスからも代表者を選出する必要がある」

マコトはぐくりと生唾を飲んでしまった。もうISによる模擬戦が行われるのかと。代表者のみとはいえ、一夏以外の生徒は試験でISに乗った以外、二ヶ月はISに乗れない。ここで立候補すれば誰よりも早くISに乗れるのだ。

その特権は是が非でも欲しい。だからマコトは千冬が「誰か…」と声をかける前に手をあげていた。

「はいーあたしーやりますー!」

「飛鳥、いいやる気だ。他に、誰かいないのか? 自他推薦は問わない。これから五分ほど時間を与える。周囲と話し合っても構わん。始め」千冬が号令をかければ教室ないは少女たちの声で騒がしくなる。マコトの周囲の生徒たちはマコトの立候補に驚いていた。

「飛鳥さんすごい! 立候補するなんて!」

「そうかな? だって誰よりも早くISに乗れるんだよ?」

「うわ、すっごいやる気。でも確かにどうだよね」

彼女に声をかけたのは相沢さやかという一つ前の席の少女だった。黒髪サイドテールで、小柄で人形のような愛らしさだった。

「相沢さんはやらないの?」

「うーん、どうだろ。まだそんなに強い気持ちはないかなって」

「そっか」

「それにしても、あのイギリスの人たちも立候補するのかな?」

さやか言葉に、マコトは教室の角に座っているセシリアたちを見る。彼女らはまるで子供のお遊戯会を見るような視線で眺めており、目を向けているマコトに微笑みという名の嘲笑を向けていた。

セシリアの後ろにいるレイラは静かに目を閉じている。

「(レイラ……)」

確証はまだないが、静かな様がどうしてもかつての友に重なる。

マコトはかぶりをふって、さやかに向き直った。

「どうだろうね。オルコットさんは専用機あるだろうし」

「そうだよね。ブルー・ティアーズだっけ。動画で見たんだけど、すごかったね〜」

「さやかさんも見たことあるんだ」

ブルー・ティアーズ。イギリスの開発している第三世代ISと呼ばれる最新型の機体の一つで、その試作一号機を任されているのがここにいるセシリア・オルコットなのだ。テストパイロットを任されるということはそれ相応の実力があつてのことだとマコトは勝手に思っている。

肝心の動画が、射撃訓練の映像しかなく戦闘機動が確認できなかったせいもあつた。

「いやまあ、最新鋭機なんて軍事機密だし、条約で対人戦闘での使用はできないって言つても、モンドグロツソのはホロモゲーションモデルだからなあ」

「マコトさんはどこのISが好き？」

「え？どうだろう、あんまりこだわりはないかな」

完成されたインフィニット・ストラトスを見たことがあるせいか、今のISにはあまり興味がないマコトであった。

「私はフランスのラファール・リヴァイヴかな」

「ああ、あの」

ラファール・リヴァイヴ。第二世代ISの完成形とも言われる汎用型ISで、オリジナルコア、量産機コア双方での稼働数が最多の機体だ。

このラファールを開発したデュノア社のように、欧州の民間企業開発機の多さは目を見張るものがあり、未だ軍主体での運用に限られ民間でのIS普及はIS技術を利用した義足やアシスト機能に限っているアメリカや、そもそも発祥国なのに民間利用がほとんど許可されていない日本とはその技術力に大きな差が出てしまっている。

「他にはロシアのフランカーとか」

「最近出てきたシリーズだね。ラファールを研究したつていう」

「そそ。なんだ、マコトさん詳しいんだね」

さやかがこだわりがないと言っているわりに知っているマコトに「やっぱり好きなのあるんじゃないの」と悪戯っぽく笑った。好きなインフィニット・ストラトスがないと言えば嘘になってしまうが、その機体が白騎士などとは口が裂けても言えない。

「まあ、一応ここにきてるわけだし」

「それもそっか」

インフィニット・ストラトスの開発にほんの少しでも関わっていたものとして、今を見届ける必要があるためにマコトはしっかりと調べていたのだがそんなこと言えるわけがなかった。

「時間だ。さて、飛鳥以外に立候補と推薦はあるか」

千冬の声に教室がシンッと静まり返る。静謐な空間となった中で、最初に手を挙げたのは教室の真ん中の後ろに座っている布ノ仏本音という生徒だった。明らかに袖のサイズが合っておらず、いわゆる「萌え袖」の彼女は「はあくーい！」とどこか抜けた明るい声を出しながら立った。

「私は、おりむーを推薦します」

「お、俺!？」

ガタツと音を立てて一夏が立ち上がる。まさかISに一秒も乗ったことがない一夏が推薦されるとは思ってなかったのだ。本音の推薦に、マコトが千冬を見れば明らかに不可解だ、という表情を浮かべていることに気が付く。

「一応理由を聞くんが、何故だ？」

「えーっと、みんなで話したんですけど、おりむーは急にここにきちゃったから、ISのこと何もわからないだろうし、先に触れられた方がいいんじゃないかって」

「なるほど、一理ある。実際に乗った方が理解が深まる生徒もいるからな」

完全な善意からの推薦だったようで、マコトもほっとすると同時にこのクラスあまりにいい子が多すぎると感じた。もう少しIS搭乗者の養成学校なら差別があってもおかしくないはずなのに、このクラスの子のほとんどが一夏に嫌悪感を持っていない。



かつてのナチュラルとコーディネイターでないにせよ、浅くない溝が今の世界にはあるはずだった。

「みんな…すまない…！先生！俺、やりたいです！」

「加えて、自推薦か。他にいないか？ならこのままこの場で飛鳥と織斑のジャンケンで——」

「お待ちください！」

弟のことで気が緩んで若干素が出かけていた千冬を再度鬼モードに戻したのは今までただクラスを見ているだけだったセシリアだった。スツと席を立ったセシリアに全員の目が向けられる。彼女の後ろに座るレイラは「何をしてるんですか」と言わんばかりにちよつとオロオロとしていた。

「クラス代表と言えば、このまま一年間、このクラスの委員長も兼任するのでしよう？そうではなくて、織斑教諭」

「オルコットの言う通り、クラス委員長も兼任する。といってもこれは毎年決まってから言うのが通例だったんだがな」

「…ですから、そんな大役をただのお節介で決めていいものですか？」  
セシリアの言い分に、全員がなんとも微妙な顔をする。これはセシリアと今このクラスにいる生徒たちの認識の差異によるものだった。クラス委員長という立場など、一般の中学出身者がほとんどのこのクラスでは別に誰がやっても変わらない、いわば雑用に近い役割だと思われている。

対して、セシリアはまさにその意味通り「クラスの代表者」つまりは「リーダー」と思っている。であるのなら、皆の規範になれるべきものがやるべきだろう。マコトがそれに値するかはこの僅かな時間でもセシリアはわかるところにいる。完全にISをただの遊園地のアトラクション程度にしか思っていない。セシリアはマコトの先程の立候補をそう判断した。

「セシリア、落ち着いて。織斑教諭の言う通り、一理ある話ではありませんか」

「まあレイラ、あなたがそんなことを言うなど、どうしたのですか」

セシリアと行動をともししているレイラから出た意外な言葉にク

ラス中が驚いた。どこか1組全体を見下しているくらいがあるセシリアと四六時中、それこそルームメイトなので本当に一日中一緒にいるレイラも、セシリアと同じだろうと思われていたからだ。

「軍でも、足りないものには倍の訓練を課すものです。本人が諦めなければいずれ、技術は向上します。幸いにも彼は成り行きで来たのにも関わらずやる気があります」

本当はレイラの言うほどやる気もなく、なっっちゃったもんはしょうがない、知り合いもいるし、姉もいるしでやるしかないか、というさほど何かの決意があったわけでもなく一夏のどこか楽観的ながらやるからにはやるという信条があるおかげなのだが、レイラにそんなことはわからなかった。

「えっと、デュランダルさんだっけ？いいこと言うじゃん」

「レイ：レイラで結構です。織斑さん」

容易く名前呼びを許したレイラに、セシリアは眉をひそめた。日本では苗字で呼び合うのが他人との距離感だと思っていたからだ。

「妙に肩を持つではありませんか、レイラ」

「彼のような単純な人は嫌いではないのですよ」

「それ：褒められてるのか…？」

クラス中がくすくすと笑いに包まれる。一瞬詰まっていた空気は和やかなものに戻りつつあった。

「フツ：オルコット、まだ異存はあるか」

「……ええ、ええ！もちろんですわ！織斑一夏！」

「なんだ！」

「くつ：調子の狂う！決闘ですわ！由緒正しきデュランダル家令嬢を誑かしたあなたに、決闘を申し込みますわ！」

このとき、セシリア以外のクラス全員が同じことを思った「何を言っているんだこの金髪ドリルは」と。

「決闘」

「そう、決闘です！」

「手袋を投げると決闘の合図、なんて言いますね」

真耶がそんな豆知識を披露するとクラス中からへえくと声があ

がった。千冬もふむふむと素が出ていた。マコトはもう千冬が面倒くさくなってきたいるなと感じていた。

「正確には左手の手袋を投げ、それを拾うと合図ですね」

「レイラ！解説しなくともよろしい！あいにく、今は手袋をつけていませんが代わりに言葉をあなたに投げさせて頂きます。さあ、織斑一夏、お受けになりなさい！」

もはや入学初日からあった「なんかエリート気取りのイギリスの貴族っぽい人」というセシリアの印象がちよつと面白い人になってきていることにセシリアは気がついていない。レイラがわりと普通っぽいとクラス中に知れ渡ったのも大きかった。

一夏の返答はわざわざ制服のポケットから何かを取り出してものだった。

「……それは？」

「軍手だが」

「なぜそんなものがポケットに」

「いやここに来たとき、ルームメイトの荷物が多くてさ」

「そうなのですね……って違う！何故今そんなものをわざわざ——」

セシリアの見事なツツコミに合わせて、一夏は……手に持っていた丸めた軍手を見事なコントロールでセシリアの足元に投げつけた。その行為の意味はついさきほど真耶の解説でクラス全員が知っていた。

「……な、なな、貴方なにを」

「決闘、するんだろ。だからそつちのに合わせただよ。日本には郷に入っては郷に従えってことわざがあるんだ」

「無礼な！」

「いや決闘しかけたのはセシリアが先では」

「レイラっ！」

「わかった。黙る」

もはやコントの様相を呈してきたが、全員面白がっているので誰も止めない。マコトも立候補したことを忘れ去られている気がするが止めなかった。中学生時代のクラスでの馬鹿騒ぎを思い出してしまっていた。

「そもそもっ、投げるなら左手だけ！レイラも言っていたでしょう!? 全部投げてどうするのです!？」

「えっ!? 怒ってるのそっち!？」

「それもあります! けれども、貴族である私に平民から決闘を挑まれるなど! しかも、令嬢をたぶらかしたうえでっ!」

「たぶらかしたの……箒、そうなのか?」

「ああ」

「ほらみなさい! そちらの篠ノ之さんも仰っているではないですか」

くくつ、と箒は笑っている。明らかに箒も引越し前のことを思い出したらしい。生真面目だが決して冗談を言わないわけではない。それが箒だった。マコトは面白くなってきたので自分でも立候補したことを忘れそうになる。

「箒い!」

「そこまでだ。オルコット、織斑」

流石にこれ以上は時間がかかりすぎると判断した千冬が二人を止める。マコトも姿勢を正して、千冬のほうを向いた。

「さて、これ以上は待たない。よって、候補者は飛鳥、織斑、オルコットの三名となった」

そこは忘れていなかったのかとマコトは苦笑いだった。

「こうなってしまうては多数決では気持ちのおさまりもつかないだろう」

特にオルコット、と言外に千冬は言いつつ真耶のほうを見た。

「山田先生。アリーナの使用可能な時間は直近でいつですか」

「え!? ええつと……来週土曜日は1日第三アリーナが空いています」

「押さえてください。今すぐ」

「は、はいっ!」

クラスないがざわめき、マコトとセシリアがまさか、と声を合わせた。

「そうだ。決闘したいのだろうか? いいだろう。特例で私闘を認めよう。ただし、IS学園らしくIS同士でな」

「マジかよ千冬姉」

ガゴツ、と鈍い音が教卓の前から鳴り、気がつけば一夏が煙を吹きながら机上に伏していた。セシリアはなまじ動体視力がいいせいかなが起きたのか正確に理解してがちがちと震えていた。

「先生、あの、あたしは別に決闘は」

一方マコトは見慣れているので特に気にせず発言し、セシリアが信じられない目をしてマコトを見た。

「ちよ、ちよっとお待ちを！いい、いま、織斑さんが殴られて死——」

「飛鳥。貴様は確かその首席と実技では同点だっただろう？いい機会だ、首席同士の戦いをクラスに見せてみる」

おおっと、クラス中がマコトの実技の成績に驚く。実技、それは入試の際行われた教員との模擬戦等で、首席であるセシリアの点数は満点。つまりは元代表候補生や国家代表クラスがひしめく教員の誰かに撃墜判定を下しているのだ。

それと同点。マコトもつまりは教員を撃墜している。

マコトは千冬にISが戦闘兵器として使われるのは嫌だったのは、と言いたかったが、千冬からすればまだ競技の中での戦いは剣道などの延長線上という認識でしかなかった。彼女が本気で嫌なのは非正規戦で使用されているISの姿だ。

そうとは知らないマコトはため息をつきながらも、ここまで言われてしまえば受けるしかなかった。

「わかりました。やります。みんなのお手本になれるかはわかりませんが」

拍手に包まれる教室。マコトはちよっと照れ臭そうに笑った。

「いえおかしいですよ!?!」

「何がだ?」

「だって織斑さんが明らかに殴殺され…ってえええええっ!?!」

いつの間にか復帰して一夏は拍手してセシリアの様子に首を傾げていた。セシリアはマコトが自身と同じく教師を撃墜していたという驚きなど簡単に上書きされ幽霊でもみるかのように一夏を見ていた。

「お、織斑さん、死んだはずでは」

「いや生きてるし。いつものことだよ」

「いつものこと!?!」

「ああいつものことだな。それは私とマコトが保証しよう。オルコツト」

「……crazy……」

箒の肯定にセシリアは席に力なく着いた。レイラはそんなセシリアに「大丈夫。私は気にしない」と言っていた。マコトはもうほぼ確信した。絶対レイラはレイだと。真面目くさっっていて、ちゃんと仲良くなつていくと彼は意外とボケるのだ。箒とは似ている。

「織斑先生。予約取れましたよ」

「ありがとうございます。では来週土曜の午前9時より、3名による乱取りを……ああ、わかりやすく言うと同時に3名で戦うこととし、勝ち残ったものをクラス代表とする。いいな?」

「はい」

「臨むところだぜ」

「……わかりました」

三者三様の返事を聞き届け「それでは本日はこれにて解散。日直、号令」と何事もなかったかのように千冬はSHRを締め、挨拶のあと真耶を伴って教室を出る。去り際「ああ、そうだ今の3名は明日からアリーナの使用を特例として許可する。練習に使用してよし」と告げ、今度こそ去っていった。

「うっし、じゃあ飯食いに行くか」

「ああ。マコト、行こう」

「了解」

さすが姉弟とでも言うべきか、一夏も何事もなかったかのように言うって、クラスも何事もなかったかのように放課後の喧騒に包まれる。そんな中、セシリアは完全に意気消沈していた。

「私がおかしいのでしょうか」

「気にしないほうがいいですよ、セシリア」

「レイラ……あなたも……あちら側なのですか」

「郷に入っては郷に従え、いい言葉ですよね」

「やはり誑かされているのでは？」

セシリアの言葉に首をぶんぶん横にふるレイラは茶目つ気があり、周りの生徒も認識を変えたのか話しかけ始めていた。ついでにセシリアもセットで連れ出されていき、マコトたちは何故だか安心を覚えた。

「これで、あいつらもクラスになじめっかな」

「だといいな。一皮剥けばあの通り、私たちと変わらなかつたわけだ」

「二人ともわかつてたの？」

「いいや」

「流れに身を任せただけだ」

「あ、そう」

マコトはもう少し二人とも頭が良かったはずだが、と天井を仰いだ  
がひとまず丸く収まったのでよしとした。

「(何はともあれ、レイラ：いや、レイなのか確かめない)」

本当にそうする必要があるのかマコトはちよつと疑問に思った。  
あの様子では今のマコトのように現在の生活に馴染んでいるし、今更  
あの世界のことを話して何をしようというのか。傷を舐め合うのか。  
「(いや、寂しいのかな)」

どれだけ飛鳥マコトになっても、彼女はシン・アスカと地続きなの  
だ。彼女の中のシン・アスカがどうしても孤独を訴えかけてくる。

「ま、今はいつか」

だがそれはすぐじゃなくてもいい。マコトはそう思いながら、一夏  
たちの後に続いて食堂へと向かうのだった。

「つてことがあつたんですよ、簪さん」

「そう」

「4組の代表は誰になつたんですか？」

「わたし」

「そうなんだ！」

その日の晩、眠る前に恒例となつた一方的に簪へと行われるコミュ  
ニケーションをマコトは行っていた。なんだかんだで、簪も彼女の話

に反応はしていた。

「じゃあ代表選では戦うこともあるかもしれないですね」

「……まだ決まっていけないんでしょう」

「ううん。あたし、勝つから」

簪はその自身はどこから湧くんだ、とこれまでは見もしないマコトのほうへと寝返りを打って向く。

「ッ……………」

「だってあたしは、強くならなくちゃいけないから」

そう言つて天井へ手を伸ばすマコトの顔は…ひどく好戦的な笑みを浮かべて、赤い瞳を闘争の炎に輝かせていた。



## # p h a s e ー 4 「黒騎士」

「織斑、お前には専用機が与えられる」

「え？専用機？」

「唯一の男性操縦者だ。データ取りのためにもな。有り体に言えばモルモットだ」

「言い方！」

決闘が決まった翌日の帰りのSHRでそんなことは千冬の口から語られ、もはや昨日の騒ぎもあり僅か一週間で驚きに耐性がついてしまった1組の生徒たちは一夏の専用機が用意されることに何も反応を示さなかった。せいぜい、本音が「おめでとー！ぱちぱちぱち」と拍手しているぐらいだ。

「私がおかしいのでしょうか。専用機が素人に用意されるなど」

「私は気にしない」

「そうでしょうねえ！戦うのはレイラじゃないですからねえ！」

「どーどーセシリア」

もはや完全にクラスに馴染んだセシリアは周囲の生徒から宥められていた。千冬はその様を見てフツと一瞬表情を緩める。マコトはやっぱりこのクラスの生徒の選出は何か理由があるのではないかと考えた。

女尊男卑主義者かと思っていたセシリアが実際はただの高飛車なお嬢様でしかなく（IS乗りとしては間違いなくエリートだが）、レイ疑惑のあるレイラもやんごとなき身分なのだろうが身分など気にしていない。

一夏の推薦理由なども考えれば流石にマコトも察することができ

る。

「（このクラスの生徒は、女尊男卑のない生徒しかいない？）」

試しに前の席の相沢にそれとなく女尊男卑であるかと、中学校が共学だったか聞けば、答えは特に今の性差など気にせず、共学の中学校の出身だった。

もし仕組まれたものなら、それをやったのは千冬しかありえない。

マコトは一週間この学校にいて千冬がそれなりの権力を有していることに気づき始めていた。いきなりアリーナを理由もなくおさえることなど本来は教員であろうとできないのだ。申請をして始めて受理される。それがルールだった。

「いやダメでしょ。千冬さんに権力持たせちゃ」

確かに見てくれはまさに出来る大人だが、中身はダメな二十代中盤の大人だ。一夏は今週末外に出れないため千冬の部屋を訪ねるといふ：隣室の住人（山田真耶）からの苦情を受けて。

そんなことなど全く知らない千冬は今日も何事もなくSHRを締め教室を出ていく。うしろについていく真耶がどんな気持ちなのかマコトは考えると少しゾツとしたが気にしないようにした。隣人間のトラブルなど関わりたくないのが本音だ。

「で？実際どうするのだ」

「何が」

「いや決闘でしょ、一夏」

「ああ」

場所は変わって放課後の食堂。生徒で賑わう中で三人は隅の席に座っていた。箒に決闘に向けて何か対策するのか聞かれてこの返事である。何も考えていないのがありありと感じられる。

「まあ、ISも生身の延長線上だ。斬ればなんとかなろう」

「ISってそうなのか？俺は二人ほど知らないし、東さんも研究所に入れてくれなかったからなあ」

「まあ確かにISは生身の動きを極力そのままできるようになってるけど…」

「マコトがこう言ってるんだ。一夏、明日から早速稽古だ」

「アリーナの予約、とれっかな」

「何を言っているんだ。道場でするんだぞ」

「稽古ってそっちかよ！いいけどさ」

マコトは頭を抱えた。幼馴染み二人のアホさ加減に。

「（鈴、鈴がいれば…）」

最強のツツコミ役がいればとマコトは願うが、残念ながら彼女のせ

いで歪んだこの世界の歴史では鈴音がこの学園に生徒として来ることは未来永劫ない。

思えば、かつてのミネルバでもボケとツツコミの比率がおかしかった。副長のアーサーですらボケ倒し、まともに艦橋でツツコミを入れていたのは艦長のタリアだけ。

そういう定めなのかとマコトはため息をついた。

「どうした、ため息なんぞついて」

「いやなんでもないよ。とにかく、本気で剣術だけしかやらないつもり？ ISは飛び道具が主流だよ？」

「でも千冬姉、モンドグロッソでは刀だけで全員倒してなかったか？」  
「千冬さんは正直言つて超人だから」

レーザー、ビーム、ミサイル、砲弾、あらゆる射撃の雨霞を全てブレード一本で切り伏せた千冬は超人と呼ぶに相応しく、本来はモンドグロッソ覇者に与えられる戦乙女の称号が千冬にだけ与えられていない。強すぎるからだ。

結果彼女に与えられた名はなく…残ったのは「織斑千冬」という彼女の真実の名前だけ。名は存在を示すものだ、などと前世で誰かが言われたとかつての上司から聞いたがまさにその通りだった。最強の称号がそのまま「織斑千冬」になってしまっただけだ。

第二回大会を最後に、いやたつた二回の世界大会で彼女が殿堂入りとされてしまったことにマコトはやっぱりなと渴いた笑いしかでなかった。白騎士事件では武装の性能だけで対応していたが、こつそり宇宙空間で行った隕石への対処テストで、千冬はギリギリ小惑星に届いていない岩石をなんのアシストもなく剣術だけで一刀両断してみせたことがあった。ハッキリ言つて人間辞めてる。それがマコトの千冬への総評だった。

「まあ、千冬姉が規格外なのはわかってるけど、俺は飛び道具からつきしダメで」

「そういえば祭りで射的するといつも財布空にしていたな」

「そういえばそうだったね…それでいつも弾にお金借りてまで…」

「懐かしいな…だが、それを踏まえれば剣術に専念するのもいいこと

だと思わないか？マコト」

「…まあ、いいんじゃないかな」

もはやマコトも投げやりだった。

そもそもたった一晩明けただけで決闘自体がもはやどうでもよくなってきた。1組の空気を考えると、かならずしも勝つ必要性は薄かった。負けても勝つても何かをセシリアが要求するわけでもない。「それなら、あたしが勝ちちゃうからね」

「うっわ、余裕だなマコト」

「そもそも、一夏は推薦で、オルコットはなんだかよくわからんがそもそも立候補もしていない」

「……あれ、言われてみれば」

マコトは昨日のSHRのことを思い返せば、セシリアは一言も立候補するなどと言っていないのだ。要約すれば彼女が言っていたことは「本当に推薦でそんなクラスのリーダーを決めていいの？」である。これはセシリアとさっそく仲良くなったさやかから聞いたのだ。まづ間違いない。

「俺たち、なんか千冬姉に遊ばれてるんじゃない」

「ありうるな。千冬さんもそういうところがある。伊達に姉さんの親友をやっていない」

「箒、千冬姉尊敬してるけど結構容赦ないよな」

「剣士として憧れているのであって本人のダメなところはダメだからな」

「ええ……」

箒の容赦のない評価に一夏はヒクつきながらも止む無しと思った。

「まあ、話を戻せば、やる気に溢れているマコトがお前にはまず負けるわけがない。それに実際にマコトは教官を倒しているしな」

「倒したって言ってもすごい手加減されてたけど」

「そもそも手加減されてるなどISに始めて乗ったものが気が付くはずないぞ、必死だからな」

「そういう箒はどうだったんだ、実技」

「いや、時間切れで0点だったはずだが何故かあとからきた評価で9

割の点だった」

「は？なにそれ、なにしたんだよ」

「飛び方のイメージが湧かなかったから地上で飛んでくる弾丸を切り払っていた」

「お前もおかしいよ」

「いや普通だろ」

もうやだこの幼馴染み。マコトは早く週末に鈴の待つ食堂に行きたかった。

それから一夏の罰ゲームや千冬の部屋が恐ろしいことになっていった事件など、筆舌にしがたい出来事が立て続けに起きた休日を過ごし、マコトは月曜日に学内のある場所に呼び出しを受けていた。

向かう先は学園内でも景観のために用意されているという森の中だった。そもそも、このIS学園は日本の領海内の太平洋側に作られた巨大な人工島だ。そんな場所で一年間いる生徒のことも考えて、学内には様々なスポットが用意されている。

この森もその一つだった。

「……アカデミーのサバイバルを思い出すな」

前世であった歩兵としての訓練で行われた森の中でのサバイバル。ルナマリアが悲鳴を上げ続けたことが昨日のようにマコトは思い出せる。

「といってもこの森そんなに深くないみたいだけど」

学園内向けのタブレット端末に地図を表示して進んでいるため迷うことなくマコトは指定された地点まで進んでいった。途中、何度か奇怪な野鳥の鳴き声や動物の気配に緊張感を持ちながらもあつという間に目標としていた場所に到着した。

「……」

そこは突然開けた自然の広場で、真ん中に何故か切り株があった。近づいてよく見れば凄まじく精巧にできているがこの切り株が作り物であることがマコトにはわかった。なんとなくマコトは生えているように見せかけている枝を上へ持ち上げてみると切り株の上部が

蓋のように開き、懐かしいコンソール画面が出てきた。

「これって……!」

自然と彼女の手が画面触れる。そうすれば、彼女の指紋を認識して、電子音が鳴った。地面がかすかに揺れ、切り株の後ろの地表が割れる。ゴゴゴと音を立てて現れたのは人参型のエレベーターだった。

マコトは迷うことなくそれに乗り、地下へと降りる。やく三十秒ほど降ったところでエレベーターは停止し、扉が開いた。

現れたのは人工的なトンネルでその突き当たりにはかつて裏山で見た研究所の入り口がそのままあった。マコトは駆け出す。間違いなく「彼女」があそこにいる。研究所の入り口までくればあとは知っての通り、セキュリティも変わらず網膜認証の後に個々に割り振られた暗証番号の入力。

マコトは昔の手順のまま研究所の扉を開き中へと踏み込む。

「うわぁ」

そこはあの頃と全く変わっていなかった。所構わず走る線やパイプ。青白く光照明。気持ち広くはなっているが、間違いなくマコトが小さい頃に束と出会い、千冬とも出会ったあの研究所のままだった。

「お待ちしておりました。マコト様」

「っ!?!」

すうっと、何も無い真正面の空間から染み出すように人影が現れた。マコトは思わず構えるが、現れたのはメイド服を身に纏ったマコトと同じぐらいの銀髪の少女だった。お辞儀をしており、顔を上げれば常に目を閉じているかのように糸目だった。

「私はクロエ・クロニクルと申します。現在の束様の助手です」

「束姉さんの、助手?」

「はい。マコト様。あなたのこと束様から伺っております。幼馴染みのお一人と」

あの束が助手を雇えたことが驚きでマコトはよく言葉が入っていない。

「束様はこちらです。ついてきてください」

クロエと名乗った少女に続き、マコトは研究所の奥へと進んでい

く。途中、妙に生活感のあるかつて白騎士のオペレートをしたモニタールームを横切り、辿り着いたのは白騎士が格納されていた格納庫だった。

そこにはマコトの記憶のままの「兎」がインフィニット・ストラトスを整備していた。

「東様、ご友人をお連れしました」

「サンキュー、クーちゃん！休んでいいよー！」

「何かご用があればお呼びください」

顔を向けず、休みを与えられたクロエは再び空間に溶けるように消えていく。マコトはそんな彼女に驚きながらも、改めて目の前にいる人物を見る。白衣もあの頃と変わらず、髪色も何も変わっていない。頭につけた実は簡易インフィニット・ストラトス「時計兎」もそのまま。

「…東姉さん？」

「……んっ。そうだよ、まーちゃん」

作業を止め、彼女はマコトに振り向く。スパナを手に、顔に機械油を少しひっつけた篠ノ之束が、あの頃より明らかに大人の女性となつてそこにいた。ただ、彼女の見せた笑顔は何も変わっていない。屈託のない、子供のような笑顔。夢に向かって跳躍を繰り返すウサギのまま。

ゆっくりとマコトは彼女に歩み寄る。束はただただ待った。

そうして、マコトは束に抱きつく。嗅ぎなれた束の匂いが確かに鼻腔をくすぐる。わずかに混ざるオイルの臭いが彼女が技術者なのだと思ひ出させる。

「久しぶり、東姉さん」

「久しぶり、まーちゃん」

妹と違つて、間違いなく感動の再開を二人は果たしたのだった。

「どこいったの、あのあと」

「んーと、色んな国でなんとか技術者に変装して潜り込んで、宇宙開発に誘導できないか試してた」

「でも、それは」

「失敗したよ。難しいね、人の考えを変えるのは」

「じゃあ、今はここで何してるの」

「もう一度作ってるんだ、インフィニット・ストラトスを」

「本物の？」

「そう。約束したでしょ、キミに翼をあげるって」

顔を上げて束を見上げれば、そこには優しい笑顔があった。昔のよう、優しい姉のような笑顔。マコトは心の底から安心する。誰も、何も変わらなかったのだ。一夏も筈も、千冬も…そして束も。世界が歪んでも、狂つても、彼女たちは変わらなかった。マコトの手の中にある平和は何も、失われていなかった。

「あたしの、翼」

「そう。今風に言えば専用機って言うのかな」

二人はお互いを離して、改めて横に並んで以前は白騎士があったハングアーに目をやる。そこにあつたのは灰色に背中には大きな翼を持つインフィニット・ストラトスがあつたそれはどこか、シン・アスカの最後に乗った機体を彷彿とさせた。

「これって」

「正式名称はインフィニット・ストラトス試作二号機。愛称は白騎士とは対をなす『黒騎士』」

束が手元についての間にか用意していたボタンを押した。すると、灰色だった装甲は黒く染まっていくな。

「フェイズシフト装甲…!?!」

「それってまーちゃんの前世の？」

「そう、だけど。これ、どうやって」

「いやね、白騎士ではシールドバリアでデブリ全部弾いてたけど、さすがにそれだといずれ限界がきたり、不具合が起きたときとか怖いから、物理装甲もちゃんとしようかなって。でも、インフィニット・ストラトスの装甲は物理的に防ぐの無理だから、こうして表面を相違点させてしまえばってね」

「衝撃自体はシールド…絶対防御で防ぐことができるから」

「そう。つまりこの子は白騎士の欠点を埋めた子ってこと」



真の意味で、この黒騎士が東にとってのインフィニット・ストラトスの二機目なのだろう。

「これがあたしの…」

「まーちゃんの翼。ま、今はまだ調整中で、ファイティングどころか装着さえできないけど」

「え、これで？形はできてるのに」

「うん、これでもまだなんだ」

東から言えばまだ黒騎士は完成には程遠く、マコトに触らせることすらできないのだという。今ここにあるのはガワだけで、中身は何もないに等しい。

「なかなかこの外装に合うコアが見つからなくてね、結局今新しく作ってる最中なんだ」

「新しいコアって、東姉さん、そこまで」

「まーちゃんにあげる子だからね。満足いくまでやりたいんだ」

真剣な彼女の顔を見てしまえばマコトは何も言えない。そこまで  
の想いで作られているのなら、マコトはもう待つことしかできない。  
デステイニーも、彼女のように誰かが想いを込めて作っていたの  
だろうか。そうなのだろうとマコトは思う。

不思議と、ザフト製のGは意味のある名前が多かった。フリーダム、ジャステイス、プロヴィデンス、デステイニー、レジェンド…果たして、乗り手たちは機体に込められた願いを果たすことが出来たのだろうか。

「(できてない、か)」

でなければ、今ここにマコトは存在していない。運命から外れてしまったから、彼女は今ここにいない。なら、今度こそ、彼女は目の前にある黒騎士に、隣に立っている女性に誓いたかった。託された願いを、自分自身の想いに乗せて叶えてみせると。

「わかった。任せたよ、東姉さん」

「お任せ。まーちゃん。さいつこうに気持ちよく空を飛べる子にしてあげるから」

「期待してる」

笑顔を交わして二人は約束を再確認した。

格納庫から研究室へと戻ったところで、ふとマコトは気になったことがあつて束に尋ねた。

「そういえば白騎士はどこいったの？」

「ずっとちーちゃんが使ってたよ」

「え、でも千冬さんが現役時代に乗ってたのって『暮桜』だよ」

暮桜。千冬の現役時代の搭乗機で、オリジナルコアを持つISのひとつだ。当然、束制作のものではなく、日本の倉持技研という半官企業が開発した第一世代ISの一機。織斑千冬が刀一本で世界最強を勝ち取った白騎士の次の相棒だ。

「だから、コアだけ入れ替えちゃった」

「え」

「ちーちゃんって、白騎士のコアが馴染みすぎて他のつけるとコアが逆についてけなくなっちゃうんだよ」

それは、千冬が史上初めてのインファイニット・ストラトス乗りだった弊害だった。なんの制限もない超人しか扱えないインファイニット・ストラトスを乗りこなし、乗り潰す勢いでテストを重ねていたせいで、千冬がISに求める動きは今世界に配布された制限のかかってしまったISコアではできないのだ。やろうとすれば、ISコアは搭乗者を守ろうとして強制的に機能を停止させる。

白騎士という特別なインファイニット・ストラトスのコアは今のISコア全てをつなぐコア・ネットワークシステムからも隔離され、千冬が超人であることがISコアたちに伝わらない。だから、束は「全く動かん」と困っていた千冬に暮桜のコアを勝手に交換して渡していた。もちろん万全の偽装工作をしたうえでだ。

結果、生まれたのが最強「織斑千冬」。人間を辞めた剣士が、限界などない外宇宙までひとつとびでできるマシンに乗ってしまえばどうなるのか想像にたやすい。マコトは顎が外れそうになった。

「それでまさかちーちゃんがあんな大暴れしちゃうとは思わなくて……ワンオフアビリティなんてものも生み出しちゃったから慌ててそれだけISコアの子たちに共有させたり。ちーちゃんは本当に規

格外だよな」

天才さえ匙を投げる超人に東も笑うしかなかったようだった。

「それで、今は」

暮桜はとうに解体されている。そのコアは日本政府の所有物だ。

「もちろん、暮桜本来のコアと入れ替えて戻したよ。白騎士に」

「でもここに白騎士、ないよね」

「うん。なにせ、今度はいつくんのものになるからね」

マコトは今日の帰り際の千冬の言葉を思い出す。専用機、一夏のための、専用機。

「まさか専用機って」

「そう。白騎士のISコアをまたまた変装させて、外装もいじくって暮桜の後継機っぽくした白騎士……改め“白式”。それがいつくんの専用機だ！」

ばばーんと口でいいながら、東は空間投影モニターで“白式”の概要図を表示する。表示されたスペックはISそのもの。第二世代機、暮桜のマイナーチェンジのような機体。だが、隠された真のスペックは全て計測不能を示している。完成されたインフィニット・ストラトス、白騎士の本来の性能だ。

「一夏これつけて大丈夫なの？」

「もちろん。いつくんが使ってる間はちゃんとISの範囲内だよ。いつくんがちーちゃん並みになったら別だけど」

「なんで白騎士を一夏に？」

「念のためかな。白騎士はもともと外宇宙探査用。非常時は待機状態でも最低限の生命維持装置を起動してくれるし、付けてれば深海でも銀河系の果てでも食料さえあれば一ヶ月は行きてられる。まーちゃんも知ってるでしょ」

「そこまで言えばなぜ一夏に白騎士を与えるのか理解できる。」

「一夏、そんなに狙われてるの？」

「うん。唯一の男性操縦者……まーちゃんも察してると思うけど、ちーちゃんの生体データとほぼ一致してる。いつくんは最初からただ一人、インフィニット・ストラトスの不具合の例外なんだ。でも、世

界はそれを知らない。だから今のいつくんこそが「不具合」そのものと見られてるんだ」

「そんな、そんなこと」

「まーちゃんなら、怒るよね」

「そんなのっ」

当たり前だった。世界の都合で振り回される理不尽をマコトは誰よりも嫌っている。だからこそ、束に共感できた。彼女に降りかかる理不尽に怒ることができた。

そんなマコトの存在がだんだんと大きくなって、理解した束もまた、マコトと同じように理不尽へと争いたくなっていった。だからこそこうして今もインフィニット・ストラトスの作成を止めていないし、微々たる力でも世界の歪みを正そうと、強引な手を使わず潜入などを繰り返していた。

ゆえに、大切なものへ降りかかる理不尽を防ぐために束は最強の備えを持って迎え撃つ。白騎士。もはや、伝説と化した唯一無二の真なるインフィニット・ストラトス。どのコアよりもAIが成長し、主人との意志さえ交わすことのできる、宇宙を旅する人類のための隣人。「だから、大丈夫。いつくんのために、白騎士は全力で守ってくれる。もちろん、私も」

「……あたしだって、そうとわかれば」

目の前の平和を脅かすのならマコトは剣をとることをいとわない。以前とは違う、自分自身の意志で。

「ありがとう、まーちゃん」

「千冬さんだって、箒だってそう言いますよ」

「だろうね。いや、本当に束さんはいい人に恵まれたな」

理解者。たったひとつ、まるで差し込まれた葉のようなものが、篠ノ之束をただの天才にして、運命を変えたことなど誰も気がつかない。気がつかない。紛れもなく、今ここにある全てが現実なのだから。周りの人に恵まれた。そんなこと本来の束であれば言うことはなかっただろう。

それでも篠ノ之束はもう、人の温かみを知ってしまった。だから戦

うことも、守ることもできる。人と人の間に立つ、人間。異世界で誰かが本当に伝えたかった、真の意味での調整者。無限の宇宙へと人類を導くために奮闘する、真の意味のコーディネイターとなっていることに、誰も気がついていない。マコトでさえも、気がつかない。

「さて、そんなわけでいっくんの専用機も、まーちゃんの専用機も鋭意開発中というわけで」

「一夏、来週模擬戦するんだけど、間に合うのかな」

「大丈夫でしょ。こっそり束さんが倉持に潜入して製造の最終工程まで終わらせてあるから、あとは最終調整を残すのみだし」

「流石。それなら大丈夫かな」

「そういえば、まーちゃんも模擬戦なんでしょ？大丈夫？」

「まあ、モビルスーツの時と、空間把握の感覚は似てるから、あとは慣れかなって」

「そっか、まーちゃんそもそもそういうのに乗ってたんだもんね」

「まさか今世で役立つとは思ってもいなかったよ」

転生して最初は穏やかな人生を過ごして、次第にシン・アスカという人間は完全に消えるものだと思っていたが蓋を開ければ未だにマコトの中にシン・アスカの記憶はあるし、そもそも人格こそちゃんとマコト自身だと言えるがそれはシン・アスカという存在があつてこそだ。

経験は嘘をつかない。

「それにしてもよく知ってたね」

「ちーちゃんが教えてくれたんだ」

「なるほど。千冬さんとはよく会うの？」

「うん。よく愚痴を言っはくーちゃん愛でてるね」

「うわ……そういえばくーちゃんってさっきの」

「そう。この世界の…遺伝子操作的な意味でのコーディネイターだよ」

「あの子が…」

「消えたりするのは白騎士にも使ってた迷彩の機能だけだね」

「なんでつけたの？」

「いやだって影も音もなく現れる従者って、かっこいいじゃん」

東の感性は相変わらずだが、本人たちはなんやかんやでうまくやっているのだろうと思つてマコトは特に何も言わない。

「じゃあ、そろそろ戻ろうかな」

「そっか。帰り道はわかる？」

「大丈夫」

「よかった。それなら、またね、まーちゃん。いつでも遊びに来ていいから」

「またね、東姉さん。……けど、そんな頻繁に来ていいの？」

「ちーちゃんは週一で来るね」

もはや何も言うまいとマコトは思った。

## # p h a s e — 5 「理由」

束との再会も果たし、約束の再確認と幼馴染みの置かれている状況を理解したマコトは模擬戦に向けてどのISを乗るか悩んでいた。千冬の計らいで、本来は二年生にならないと乗れないオリジナルコアを搭載した量産型のISに乗れることになったため、選べる範囲はぐっと広がっていた。

「ちなみに簪さんは何がいいと思う?」

「なんでも。あえて勧めるなら打鉄」

入学以来初めて朝食を共にしている簪にマコトは聞いていた。出ていく時間が偶然同じで、席がなかったため仕方なく席をともにしているのだが、マコトはなんの躊躇いもなく簪に話しかけ、簪も寝る前に何故か話しかけてくるマコトに慣れてしまったせいか、受け応えだけはちゃんとしてくれていた。

「打鉄かあ」

「打鉄はよくできてる。第二世代初期のISだけど堅牢性、信頼性、何よりインタフェースが日本人向けに調整されてるから初心者でも扱いやすい」

「あゝ、ハイパーセンサーの網膜投影の情報とかが日本語なのかな」「そう」

簪の言う通り、打鉄と呼ばれる日本製のISは日本人向けに製作されたと言っても過言ではなく、鎧武者を彷彿とさせる外見からもそれは誰もがわかる。マコトが入試の際に使用したのはあまり流通していないアメリカ製の量産型コア使用のIS「アイアンレディMK-II」で、装着時の網膜に投影される機体情報は全て英語で、操作説明もあまり充実していない。

おまけに量産型コアなせいで性能も限定的で、動作も人間がつけているパワードスーツにしてはぎこちない。

その点、打鉄は量産機でありながらオリジナルコア機も多く、とりあえず選んでおけば間違いのない機体だ。

「なら、打鉄にしようかな」

「いいと思う」

「…そういえば、簪さんってその言い方からして初心者って感じじゃない？」

「私は日本の代表候補生」

「初耳だよ……」

「私はどちらかといえば技術者志望だから」

どこか “そう決めつけている” かのようない方にマコトは怪訝に思うも、深くは追求しない。だが、代表候補生、というものの自体は気になった。クラスメイトのセシリアがそうだが、まさかもっと身近にいるとは思ってもみなかった。

「ってことは簪さんは結構強いのか？」

「公式戦の経験がない」

「それって…」

「単純になったばかりなのと、専用機の開発が難航してる」

疲れた表情で簪がそう言った。あまりいい表情ではなかったが、マコトは初めて彼女から生身の人間らしい表情を見た。……決して簪は感情が薄いわけではなくただ人見知り継続中で、実際はマコトが寝ている間にこっそり簪は “趣味” のDVDを見てそれなりに笑顔をみせているだが、マコトは夜の眠りが深いため見たことがないだけである。

「開発に難航してるって、大丈夫なの？」

「詳しくは機密だから言えないけど、大丈夫ならこんな顔してない」

専用機の製作は通常難しく、また大抵は新技術の試作機も兼ねるため完成に漕ぎ着けるのが難しいとマコトは聞いたことがあった。一夏の専用機はそもそもガワを変えただけなので別だ。

簪のISもなんらかの新技術を入れようとしてうまく行っていないのだろう。

「クラス代表戦、大丈夫？」

「難航してるのは “専用” 的な部分だけだから、ただの高性能機として出すだけなら今でも動かせる」

「そうなんだ」



マコトはできることがあれば手伝ってあげたいと思ってしまいが、国家所有のISなど触れるわけがない。束のような規格外なら別だが、マコトはただの女子高生だ。

「…話を戻すね。打鉄にするとして、装備はどうしようかな」

「『葵』は剣術ができないといけないし、『夢幻』は槍術の経験がないと厳しい」

「刀と槍は確かに持ったことないから無理そうだね。普通の『剣』ってないの？」

「打鉄用のものでないものなら幾らでも」

「やっぱりそうなるよね…となると、イギリス製のISブレードとか？」

「アレは長すぎて重心の感覚が難しい」

「そこは大丈夫かな」

簪の指摘した『ISブレード』の難点は生身では持てないほどの大型の直剣なため、重心が通常の剣とは違いすぎて扱いが難しいということだった。困ったことに通常の剣と違って、相手を砕くのではなく斬り裂くというものなので余計に素人がハマりやすい罫武装だった。

だが、マコトは前世で使用した兵装の中に長大な対艦刀があった。操縦桿を通してとはいえ、長い剣のような得物には心得がある。

「ならあとは射撃武器か。ここは無難にデュノア社製の『ガラム』とか？」

「本当に無難。だけどそれが正解だと思う」

IS用のライフルとしては最も人気の高い『ガラム』。単射からフルオート射撃まで幅広く対応可能で、オプションでショートバレルから狙撃仕様のロングバレルにもできる高い汎用性が魅力的だった。

あまりによく出来すぎてIS専用ではなく、戦車の上部機銃として採用されたり、テクニカルに搭載される場合すらある。マコトは思うところがあるものの、かつて軍人だったが故にガラムの性能を高く評価していた。入試で初めて使用し、彼女はその性能にちよつと感動していた。

「ガラムにISブレード。これだけでも十分な気がする」

「搭乗時間から考えても妥当だと思う。装備が多くなればなるほど、初心者には辛い」

簪のアドバイスは的確で、マコトは「ありがとう」と素直にお礼を言い、簪は照れたのか視線を食事に集中させた。ただ、マコトはその気になれば複数の装備を持つ機体であっても制御できる自信があるため、最後のアドバイスは無用だった。

「じゃあ、週末はこれで行こう。一回は練習の時間取ればいいけど、アリーナってあんまり空いてないよね」

「仕方がない。申請に時間かかるし、そのせいで後ろが詰まってるから」

「だよね。イメージトレーニングかなあ、結局」

ISは既存のどんな兵器よりも、それどころか未来ともいえるコスミック・イラの兵器よりも感覚に依存した操作形態だ。だからイメージトレーニングも馬鹿に出来ない。

優れたAIが搭乗者の全てをサポートし、思うがままに機体を動かせる。オリジナルコアだけの機能ではあるが、それは東がインフィニット・ストラトスに託した夢の残り香だった。

広大な宇宙で、不安を感じないよう、自由に過ごすために。そのための機能の延長線上だ。

「私もずっとイメージトレーニングをしているけれど、シミュレーターの結果はちよつと上がった」

「やっぱり効果あるんだね。今日からやろ」

「……もしよければ、私の戦技本、貸そうか？」

「いいの？」

「まあ、本自体は市販のだし……」

「ありがと！戦術とかはあんまり興味がなかったからさ」

あくまで宇宙を飛ぶためにISに乗るつもりなマコトにとって、IS乗りとしての戦い方は全く知識がなかった。入試の量産機はほとんどマニュアル稼働などころがあり、マコトは入試ではモビルスーツ乗りの動きをしていたのだ。

簪から本を借りられることになり気分が良くなったマコトは朝食を勢いよく平らげていく。簪はまだ一緒になってまだ日が浅いこのルームメイトを凶かねていた。見た目は可愛らしく、元気がいいどこにでもいそうな少女だ。織斑一夏や篠ノ之箒という、1組以外の生徒から見れば異物にしか見えない生徒”とつるんでいるのがおかしいと思えるぐらいには。

簪の私物を全て見ても特に何も言わなかったり、少し同年代の者たちより落ち着いているのかもしれないが、それにしたって何か違和感を感じてしまう。

その違和感はかつて束が感じたものに近かった。違和感の原因の中身は違うが。

「……飛鳥さん」

「んっ？なに？」

「飛鳥さんはどうしてこの学園に入ろうと思ったの」

気がつけば直球で簪は問うていた。マコトは箸を止める。宝玉のように美しく赤い瞳が簪の瞳を射抜くように見る。威圧しているわけではなく、なぜそんなことを聞くのかと真意を測ろうとして。

「(この、目)」

そして、簪はそんなマコトに既視感を覚える。彼女が嫌悪する”生家”で見たものと同じ——。

「うーん、そう聞かれると…インフィニット・ストラトスで空を飛ぶため？」

が、一瞬でマコトから嫌悪感はなくなる。同時に、簪の感じていた違和感の正体が明かされる。空を飛ぶため。ISであれば当たり前のことをするために、彼女は来たと言った。どこか冷めて、一歩引いた位置にいる簪はマコトが、簪の従者のようににのほほんとしているわけではなく、真剣に言っているのがわかった。

「ISなら空は簡単に飛べる」

「いや、なんて言えばいいのか……もっと、自由に、どこでも飛べたらいいなって」

「その目的を果たすなら、ISじゃなくてもいいんじゃない」

「インフィニット・ストラトスじゃなきや、ダメなんだ」

思わず、同性ながら簪はまつすぐなマコトに見惚れた。まるで、大きな夢を語る少年のようにマコトは見えた。燃えるような瞳が、そのまま彼女の熱情を表しているようで、簪は圧倒される。流されるままに生きて、ただの「スペア」と見られ、最愛の姉は簪の手をとることを許されず、全てを諦めていた簪にマコトはあまりに熱すぎた。

「……か、簪?」

「…はっ、な、なんでもない。大丈夫」

「そ、そっか。変かな、あたしの夢」

照れた様子で言うマコトに、簪は初めて、マコトの前で口を緩ませた。

「変」

「ええっ」

「けど、素敵だと思った」

マコトはその言葉をどこかで聞いたことがあった。いや、彼女自身が言ったのだ。

東に。あの、夢を追い続ける。今でも少女のような女性に。あのときの彼女の気持ちにマコトはよくわかった。夢を、向かいたい未来を「素敵だ」と言われることがどれだけ嬉しいことか。

前世ではついで、そんなことはなかった。マコトはこみあげてきそうになるものをグツとこらえた。

「……簪、ありがとう」

「どういたしまして?」

「なんだか、今日初めてまともに簪と話した気がする」

「毎晩、一方的に話されてたからね」

「そ、それはごめん」

「まあ、いいよ」

「…あ、そうだ」

「どうしたの?」

「名前、名前で呼んでよ。苗字じゃなくてさ」

悪戯っぽく、ねだるようなマコトの顔に簪は今度はくらりとくる。

まるで漫画のヒロインか、主人公のような気やすさ。これまでの流れは本当に漫画のようだと言は自ら思い返し、恥ずかしくなる。

だが、ここでそうせがまれて断れるほど簪は強くなかった。

「…ま、マコトさん。これでいい？」

「できば呼び捨てがいいけど。ま、いいや。じゃ、改めてよろしくね、簪さん」

「…よろしく」

こうして、簪とマコトは初めてルームメイトと言える関係になったのだった。

「で、紹介するね。あたしのルームメイトの簪さん」

「……………」

僅か数時間で簪はマコトに気を許したことを後悔した。午前の授業を終え、いつも通り一人で昼を食べようとしていた簪をマコトがわざわざ4組まで迎えに来て半ば拉致し、簪は気がつけば食堂の席に座らせられていた。そこには当たり前のように一夏と箒がおり、人見知りの激しい簪は死にそうになった。

「へえ、この子が。大人しそうだな。俺は織斑一夏、よろしくな簪さん」

「一夏、苗字がわからんとはいえいきなり名前で女の子を呼ぶのはどうかと思うぞ。篠ノ之箒だ。この隣の阿呆と、マコトの幼馴染みやっている」

陽のもの、と簪は天井を見上げた。二人は明らかに「リア充」と呼べると簪は思った。実際は一夏も箒も親が蒸発していたり、一家離散していたりと到底そうは言えない人生を歩んでいるが、簪が知る由もない。

生きてるのが楽しそう。簪はそんな人間が苦手だった。マコトは特段そういったものを感じさせない「普通」な感じがあるのと、大抵は簪との初対面の数回の会話で距離を取らないどころか、つかずはなれずでいたため特別だった。

「簪さん？」

「……よ、よろしく。苗字はその、呼ばれるの好きじゃないから…簪で、いい」

「おっ、そうか。なら簪って呼ぶな」

「そうか、簪。よろしく頼む。マコトは気立てが良くて出来たやつだから、過ごしやすいだろう」

何様なんだろう、簪は。そんな気持ちになりつつもいつもの調子なのでマコトは聞き流す。無条件でマコトを褒め出したりするあたりは東と似ているあたり、ちゃんと姉妹なんだなとマコトは思う。

「それで二人は何を話してたの？」

「ああ、今週土曜のセシリア対策だな」

「セシリア対策？」

ほれ、と箒が視線を食堂のある席へと飛ばす。そこには1組の生徒が陣取っておりセシリアもその中にいた。レイラも彼女の隣におり、何やら楽しそうに談笑しているセシリアとは対照的に静かに食事をとっている。

「今日は肉じゃがに挑戦か。夜食べればいいんじゃないか？」

「そのあたりはおいおい学習していくだろうさ」

「なんの話してんの」

「???」

対策、と言いながら一夏と箒がしていたのはただの観察だった。マコトの鋭いツツコミが入り、いきなりこのノリを目の当たりにした簪は意味がわからないと頭にハテナマークを浮かべていた。

「いやさ、あいつの使うISの情報全然ないし、ならせめて普段の立ち振る舞いからなんかヒントをつて」

「ISは人体の延長線上にあるからな。代表候補生ともなれば肉体に何らかの癖がしみついているかもしれない。武術を嗜んでいるもののように」

「あつてるような、あつてないような…」

元々剣術馬鹿な二人らしい結論だったが、その前にもう少し考えられるだろうとマコトは思った。

「調べたりしたの？他に何か」

「他に出てきたのはセシリアが爵位持つてる貴族なことと、おまけにあの年で当主なこと。ついでにレイラの情報も出てきて、レイラの家が貴族で、親父は議員だつてことぐらいかな」

「思ったよりちゃんとしてるね」

「つて、山田先生に教えてもらったんだけどな」

「ダメじゃん！」

「わからないことがあつたら先生に聞く。これは当たり前だろう、マコト」

馬鹿だ…こいつら…と幼馴染みたちのあまりの素直さにマコトは頭を抱えなくなる。簪はなんとなくマコトの日頃の苦勞を察した。

「（鈴…なんでIS学園にこなかったの…）」

今世最大のツッコミ要員である鈴音はここにはいない。マコトはここで孤軍奮闘しなくてはならないのだ。

「けどさあ、実際真面目に調べても、セシリアのブルー・ティーズだっけ？あれなんか、所有権はイギリス空軍で軍事兵器で、しかも最新鋭。俺でもそんなもんの情報がネットに転がってるとは思ってないよ」

「流石にISについてはちゃんと調べたがせいぜい、SNSのイギリス軍広報アカウントに狙撃してる動画があつたぐらいだ」

「よかつたよ、そこはちゃんと調べてて…」

つまり二人もマコトと今同じ位置にいるということがわかっただけで、なんの対策もできていないということだった。その末の本人を観察するというもの。この二人なら行き着く当然の結論だった。

「なるようにしかならないんじゃないかなあ」

「ああ。ぶつかるとはならないな、結局。なに、剣道の試合と同じだ」

「いやまあ、そうだけど……」

マコトとしても最終的に二人と同じ結論なので、あまりとやかく一夏と箒のことを言えないはずだがそこは彼女の悪い癖が出てしまっていた。

しばらく、そのまま意気消沈して食事を進めていた三人だったが、そんな中さつきまでずっと人見知りゆえに黙っていた簪が口を開い

た。

「…ビット」

「簪さん？」

聞き覚えのある単語が簪の口から出てマコトは驚いた。ビットといえは無線兵器の総称だ。マコトの前世で言うところのドラグリーンがそれにあたる。

「なんだ、びつとって」

「ブルー・ティアーズの武器：無線兵器。簡単に言えば、空飛ぶビーム砲」

「どういうことだ？」

箒もビットがわからないのか首を傾げる。世界中継されるモンドグロツソでも未だにビット兵器は登場していない。IS関連の雑誌を見ればどの国も研究中の難しい技術で、搭載されている機体はないと言われているものだ。彼女が知らないのも当然だ。

白騎士の時点で既に実現されていた技術だが、束が配布したのはISコアそのものなので、IS自体を動かすOSやブラックボックス以外の外側のソフトウェアは実を言えば各国の独自開発なのだ。それが配布されたオリジナルコアの性能低下の理由の一つでもある。

それを知っているのは今この場ではマコトだけで、彼女は口をつぐんだ。ここでビットのことを知り得ているのは国家代表候補生として、おそらくは各国の最新機の情報を持っている簪だけだろうから。「もっと簡単に言えば、銃が手を離れて勝手に浮いて、しかもそれを意のままに動かせて撃てる」

「嘘だろ…なんだそれ」

「つまり、なんだ？あいつはエスパーなのか？」

「的外れじゃない言い方。BT兵器…これは無線兵器の総称だけど、それを扱える人はみんなちよつと特殊な感覚を持つてる」

特殊な感覚、というところにマコトは覚えあつた。レイもそうだった。人より少し、カンがいい。

「なるほど…でも、それ、言つてよかつたの？簪さん」

「別に秘密じゃない。ただの“噂”。IS関係者の中での」



マコトに、薄く笑う簪は「少しは役に立った？」と言外に言っているようだった。いきなり距離感がバグっていることにマコトは気がつかなかった。

「噂ね、それならしょうがないね」

「ああ、そうだな。：結局、それがわかってても一夏はどうすることもできんが」

「俺の専用機当日に来るらしいし、今ので余計に勝負できるかも怪しくなった」

別に一夏達のために教えたわけではなかったので簪は「そう」と淡白に反応を返すだけだった。

「まあまあ、知ってるのと、知らないのじゃ全然違うから：けど、そうなるトライフルとブレードだけじゃ厳しいかも」

「熟練者ならともかく、搭乗2回目となると」

「流石に難しいかもね。あとで装備見直そう」

「手伝う」

「ありがと、簪さん」

「仲良いな：二人とも」

一夏は明らかに態度を変えている簪に気が付きながらも、どこでも誰でも仲良くなるマコトにいつも通りの幼馴染みだと気が抜けた。

そうして時はたち、約束の土曜。一夏は箒と剣術に打ち込み、マコトは結局イメージトレーニングだけで当日を迎えた。

「それでこれが俺のISか」

「白式と言うらしいですよ、織斑くん」

ISスーツと呼ばれる密着型の全身スーツに着替えた一夏の前には灰色のスラリとしたフォルムのISがあった。白式というわりにはまるで、フェイズソフト装甲のディアクティブモードのような色合いの状態ははまだ初回起動前の段階で、搭乗者に合わせた調整もされていないからだ。

「かっこいいですね！早速乗ってみましょう！」

「はいー」

何故か真耶が一夏の隣で張り切っており、箒が首を傾げまくっている。千冬は無言でその光景を見守っており、マコトはなんなんだこの空気はと居心地が悪い。

一夏が白式に触れ、彼の体が白式の装甲に包まれていく。展開が終了すれば、そこには機械仕掛けの鎧を身に纏った若武者が立っていた。

「うわ、なんかすげえ！視界に色々写ってる！これがハイパーセンサーってやつかな」

「正確にはハイパーセンサーの機能の一つ、網膜投影です。よくアニメとかでロボットのコクピットにモニターがあつて、色々情報が載ってますけど、それと同じようなものです」

「なるほど。エネルギー…うわ、出てきた。これがシールドエネルギー、ってやつで、推進剤？ジェット燃料ってことか…すごいな、俺の思ったこと、すぐに出してくれる」

「ISコアに搭載されたAIの補助機能のおかげですね。搭乗者の意識に反応して、そのとき必要な情報を即座に提示してくれます」

正確にはISコアが本当に「これがほしいんだね！」と人間同様の反応を超速でしていることをマコトは知っている。おまけに、白式のコアはこの世界でもっとも稼働時間の長い白騎士のコアである。搭乗者の思考を読み取るのは慣れているだろう。なにせ一番長い付き合いの搭乗者があの千冬だ。無茶振りに次ぐ無茶振りで、白騎士のコアは恐ろしいまでの進化を遂げている。

なので、初回起動にしては明らかにおかしい処理速度をしているのだが、そのことに誰も気がついていない。

「織斑。ファイティング…IS側の自動調整はすまないがぶっつけ本番だ。やれるか」

「やるも何も、やるしかないでしょう。千冬ね…いや、織斑先生」

「その通りだ」

「わかった、ならもういくよ。箒、今週はありがとな」

「礼を言うならまだ早いぞ」

「それもそうか。マコト、先行くぞ」

「どうぞ」

一夏が今いるピット……この模擬戦の会場であるアリーナの中へと続く、カタパルトデッキの入り口へと歩んでいく。初めてのISなのに歩行をなんなく行えていることに真耶が驚き、関心している。箒も同様だ。

が、白式の中身を知る千冬とマコトは、きつとコアが頑張つて補正しているのだろうと察した。ここまで献身的なのは千冬のせいなのだが直接的に会話をしたことはない千冬は、白騎士とはそういうものだと思っている。

「織斑くん！カタパルトに乗ってくださいー！」

「はいー」

真耶がデッキ内のコンソールへと移動すると、一夏を管制する。一夏は指示に従い、カタパルト台に白式の足を乗せる。音を立ててロック機構が白式の足をつかんで、固定する。

「カタパルト接続確認、進路クリア。アリーナ側、コンデイションオールグリーン。織斑くんに進進タイミングを移譲。いつでもどうぞ！」  
「えっと、こういうときって…」

「一夏、こういうときは機体名と、自分の名前を言うんだよ」

マコトの助言は完全に前世の出撃時の決まりだったが、この世界でもそれは同じなようだった。

「そっか！わかった！…白式、織斑一夏でいきますー！」

刹那、凄まじい勢いで一夏が射出される。彼の雄叫びのような悲鳴が響いたが、全員スルーした。

「さて、次は飛鳥、お前だ」

「了解しました」

マコトは白式の後ろに佇む打鉄に近づく。灰色の無骨な鎧武者という出立のISだ。装備は量子化され保存されているため今は丸腰だ。あの時”はみていることしかできなかった。だがこれからは違う。

そして、怒りに流されることもない。自分のため、誰かのため。明確な意志を持ってマコトは打鉄に触れる。

量産型コア機とは違う、暖かな感覚がマコトを包み込む。はじめまして——打鉄がそう言っている気がマコトにはした。

「(これが、インフィニット・ストラトス…これが、宇宙にいくための、翼)」

気がつけば装着は完了していた。マコトは感動に身を震わせながらも移動式ハンガーから一歩足を進める。モバイルスーツを動かすような感覚をイメージしながら歩めば、ISコアが補正し、彼女の思考に合わせて適切なバランスを作動させる。

自動的に動かし過ぎているとマコトが感じればコアはあえて「あそび」を持たせる。

それは思考の会話。マコトは、これが宇宙とともに飛ぶ際の相棒になるのだと思い、最高だと感じる。一人じゃない。暗く、無限に広がる宇宙でこのコアの温もりは心強いことは間違いない。

「どうだマコト——初めてのインフィニット・ストラトスは」

名前で千冬は呼ぶ。今、彼女は教師としてではなく、かつて裏山の研究所にいた頃と同じ、近所のお姉さんその2である千冬としてマコトに聞いた。

「最高ですよ。こんなものを一足先に乗ってたんですね。ずるいですよ、千冬さん」

「フツ……これからも私は乗れるし、お前もこれから好きだけ乗れる」

「…そうですね」

夢のような時間の始まり。マコトはそう予感した。

「行きます」

「ああ、行っていい」

一夏と同じようにカタパルトにマコトは乗った。

「スタンバイ。カタパルト接続、確認。進路クリア。オールグリーン。発進タイミングを飛鳥さんに移譲…やり方は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。山田先生」

真耶に微笑みながらマコトは顔つきを変えて前を見た。

かつての出撃のように、けれども、これから飛ぶのはあの時の空と

は全く違う空。

「(…あたしは、ここにいます。ここから、飛ぶんだ。東姉さんの目指す、成層圏の先へ)」

瞑目し、マコトはこれまでのことを思い浮かべながら、再び目を開いて射出口の先を見据えた。

「飛鳥 マコト、打鉄！いきまますっ！」

どこか懐かしいGに押されながらもマコトは飛び立つ。射出口から出てしまえば、彼女は、いつもの癖で、打鉄をくるりと横回転させて上空へと飛び立つ。そのまま、ピタリと停止し、その場で滞空する。

1組の生徒達しかいない観客席から歓声があがった。

「マコトーきたかー！」

「一夏、きたよー！」

マコトの眼下に同じように滞空している一夏が好戦的な笑みを浮かべて呼ぶ。マコトも同じように笑みを浮かべながら応える。

「本当に、これが2回目の搭乗なのですか」

「そうだよー！」

青いISに身を包んだセシリアがマコトの発進時の機動に驚きを隠していない。素質がある、なんてものにはセシリアは見えなかった。少なくともかなり慣れている…そうにしが見えない。

「……なんであれ、約束の決闘です！織斑一夏！」

「ああ！本気で行くー！」

「それ以外ないでしょう！あなたを倒し、レイラの目を覚ましますー！」

セシリアが両手をバツと広げれば、その手には彼女の前腕より少し長いぐらいのライフルが握られていた。ここで一夏とマコトはあれっ、と思った。

「(スナイパーライフルじゃない…!?)」

ネットに上がっていた動画で装備していたのはビーム・スナイパーライフルだったが、今セシリアが装備したのはライフル。おそらくはビーム・ライフルと思しきもの。ビット兵器に、青い機体色、二挺のライフル。

マコトの脳裏に、不倶戴天の敵が過ぎる。

「フフ…お二人とも、私の動画を見ていたのでしょう？ ですが、あれはあくまで広報用のものです。本来の私の戦い方はあのような狙撃手としてのものではありません」

1組に溶け込んで、表情豊かになっていたセシリアの顔に、入学当初見受けられた完全に相手を見下す表情が浮かぶ。徐々に場の空気が、変わっていく。ヒリヒリとした、戦いの空気へと。

「さあ、一曲、お付き合いくださいませ…このセシリア・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でるワルツを！」

バシユ、とセシリアの左右を飛ぶ非固定のバインダーから涙が落ちるように二つの装甲板…否、ビットが射出される。それらの先端が二人の顔を向く。

「…いいぜ、やってやる。答えは剣の中にあるってな！」

一夏が量子化されていた武装を呼び出し、その手に身の丈以上の真っ白な太刀を構える。それは今のISに関わるものならば誰もが知っているであろう伝説の一振りと酷似していた。

「雪片……」

マコトがその名を呼ぶ。正式名称は対岩石破碎ブレード。元々は白騎士のスペースデブリ排除用だったものが、暮桜に擬態していた際に変化し、ある特殊な「固有能力」を発揮した千冬が最強のIS乗りたる所以の一つ。

セシリアも目を見開くが、すぐに表情を真剣なものへと戻す。固有能力の顕現はその機体のみ。一夏の白式がただ暮桜の後継機か何かだろうと思ってだ。もし「固有能力」引き継いでいると知っていたらセシリアはもつと険しい顔をしていたはずだ。

「オルコットさん、一夏。あたしはクラス代表になりたいんだ。だから」

武装をコール。マコトの両手にライフルとブレードが装備される。初心者に難しいはずの装備が左手に見え、セシリアはやはりマコトはただの初心者ではないと判断する。そもそも、いろんなことがあってセシリアは今の今まで忘却していたがマコトも教官を入試で破っているのだ。只者ではない。

「だから、悪いけど。勝つつもりでいくよ」

「期待していますわよ」

「マコト、俺も負けないからな！」

一瞬触発。観客席にいる1組の生徒達は三人の間に火花が散るのを幻視した。

『ではこれより、1組クラス代表決定戦を開始する。怪我だけはしてくれるなよ——始め！』

三年間、元1年1組の生徒が語り継ぐある意味伝説の戦いが幕を開けた。

## # p h a s e — 6 「単一機能」

時はほんの数分前に遡り、観客席にいるレイラはあつという間に馴染んでしまった1組の生徒達に囲まれて既にアリーナ内に待機しているセシリアを見上げていた。

「あれがセツシーのブルー・ティアーズだね、レイレイ」

「ええ。我が国が誇る最新鋭のIS。彼女の専用機です」

レイレイとレイラのことを呼んだのはクラスの中で最も緩い空気を纏っている本音だった。人見知りせず、彼女の柔らかな態度に1組の生徒達全員が骨抜きにされており早くも彼女は1組のマスコットキャラのように扱われていた。

レイラも本音のような同い年の少女は初めてで、思わず簡単に気を許してしまうほどだった。すると、人の内側に入るのが得意なのだろうとレイラは彼女の人の良さを評価していた。

「私、専用機って初めて生で見たかも」

クラスメイトの一人である相川清香がそう言うってセシリアを見つめる。1組全員が初めて生で専用機を見たのだ。レイラはその反応も止む無しと思う。特に。ブルー・ティアーズは今どこそ軍の最新鋭で機密情報の塊であり、メディア露出では戦闘機動などといったことがない。しかし、いずれ開発が完了すればホロモゲーションモデルとして改造され、メディアへの露出も増える。

それも見越して、今の時点でも装甲は磨き上げられ、武装のデザインも力を入れている。

「セシリアさん、綺麗だね」

「ほんとほんと。貴族だもんね」

そして、セシリアが持つ美貌が機体の美しさと相乗効果を生み出す。代表候補生として今、求められているものの一つである「華やかさ」に関しては国家代表にも劣っていないだろうとレイラは友人の鼻屑目を除いても思う。

「レイさんも代表候補生だけど、あれに乗ったことがあるの？」

「いいえ。私の専用機として予定されているISはまだ建造途中で



す」

「へー、つてことはそのうち届いて乗れるんだ」

「はい。ちょうど、織斑さんのように」

織斑一夏。レイラの持つ「記憶」にある少年とどこか近いものを持つ少年。似ても似つかないがその真つ直ぐさは嫌いじゃない。そんな彼がタイミングよくアリーナ内に飛び出してくる。体勢を崩しながらもどうにかISによって墜落は免れ、セシリアの前に立つ。

「あー！織斑くん出てきたよー！」

「あれが織斑くんの専用機なんだ」

「打鉄…というか暮桜と似てるねー」

最後の本音の言葉に全員が「ああ」と一夏のISに感じた既視感に納得した。織斑千冬のもはや悪鬼羅利のようなモンドグロツソでの大暴れは世代関係なく知れ渡っており、暮桜の姿もまたよく覚えられている。

それ故に、リアルタイムで暮桜大暴れを見ていたもの達にはよく似た打鉄でも若干心理的なショックを受けてしまうほどで、打鉄のデザインが暮桜を踏襲しているのは単に後継機だからという理由ではなかった。

「大方、日本側の試作機を彼に回したのでしょう」

「そうなのかな、かっこいいね」

鎧武者、という出立ちの趣味はレイラにも少しはわかる。かっこいい、とほんのちよつとだけ内心想った。

「(しかし、男性搭乗者、こうして目の当たりにすると…やはり気になつてしまいますね)」

レイラは本来ここには来ない予定の少女だった。それは彼女自身の存在が「本来はこの世界にない」ものであるからとは別に、単純に進路が違つたためだ。だが、こうして彼女がIS学園にいる理由は一夏にあった。

「(男性操縦者の観察…必要であれば接触し、遺伝子データの確保…この世界でも、ヒトの持つ業はかわらない)」

祖国から与えられた任務を彼女は唾棄すべきものだ判断し、ほぼ

放棄している。最低限身を守るために観察している体でレポートこそ作成しているが。

「(仕事半分、興味半分。見させてもらいましよう、織斑一夏。あなたが…いや、お前が、私の『記憶』に残る彼のように、どこまでまっすぐなのかを)」

足を組み、レイラは一夏へ視線を向ける。真剣な眼差しに周囲はレイラの真意などしらず「本当に誑かされている(一目惚れしている)のでは」とセシリアの決闘理由が的外れではないと勘違いする。

一夏が出て数十秒後、続けてマコトもアリーナ内に出てくる。射出からの一連の機動に1組の生徒達から歓声と拍手がわき起こる。

「うわっーマコトすごい動きしてるー!」

「教官倒したんだもんね。もしかしてマコトってIS乗ってたのかな、ここにくるまで」

「ううん、それは違うって本人が言ってたよ」

さやかがクラスメイトたちの言葉を否定し、レイラは一夏からマコトへと視線を向ける。懐かしさを覚える黒髪に赤い瞳。ただ、『彼』とは似ても似つかない愛らしい少女で、その瞳に宿しているのも『怒り』ではなく『希望』。

よく似た他人：レイラは『記憶』に残る『彼』とマコトを同一人物とは思っていなかった。

しかし、今の機動には引つかかるものが生まれてしまう。

「(対空戦闘時の出撃機動…今のはそれでした)」

『記憶』が間違いないと告げてくる。そして、その動きはこれまで何度も後ろで見てきた。

「レイレイ?」

「…っ、どうしましたか?」

「ううん、ずーっと、まこりんを見てたから」

「ええ、つい。搭乗2回目であの動きをしているので、興味が」

レイラ・デュランダルとしても、『記憶』の中の誰かとしても、レイラはマコトに興味を抱いた。彼女は何者なのだろう。それは今、マコトと対峙しているセシリアと同じ気持ちであった。

「ねえねえ、レイラさん。誰が勝つかなあ？」

相沢さやか。その、マコトの前席の生徒から問われ、彼女はそれはもちろん…と席を立つ。

「セシリア。彼女に違いないでしょう。彼女はああ見えて、努力家ですからね」

不適な笑みを浮かべ、宣言する。生徒達は「おお！」とどよめく。今の彼女。『レイラ・デュランダル』のこの世界における『相棒』であるセシリア・オルコットの在り方はレイラにとって好ましいもので…その勝利を信じている。

「(飛鳥マコト。あなたが私の『記憶』の語る『彼』だとしても、モビルスーツとISは違う。一朝一夕でどうにかなるものではないのですよ)」

レイラが、1組の生徒達が見上げる中、模擬戦は開始された。

戦闘開始。初撃を放ったのはマコトだった。右手に構えたガラム：アサルトライフルをセシリアに向けてフルオートで放った。

ロックオン警報がなく、突然の手動照準での攻撃にセシリアは舌を巻いて回避した。弾丸は正確にセシリアの胴体を狙っており、元いた場所を銃撃が通り過ぎていく。

「無礼な！」

首もたれず、いきなりの攻撃。セシリアはバックブーストから旋回機動をとってマコトに向けて二挺のライフルから機体名のように青いビームを連射。彼女に追従するビットからもレーザーが連射される。

その弾幕に素人であればすぐに圧倒され固まるはずだが、マコトは冷静に、それがただの弾幕であると理解し上昇し回避する。

「俺も忘れるな！」

一夏がセシリアに向かって一直線に向かってくる。機体が灰色なのは未だファーストシフトすら済んでおらず、機体が全くの未調整である証で、セシリアはそんな状態で出てきた一夏を最初から相手にならないと判断していた。彼が男性であるかなど全く気にせず、一人の

IS 乗りとして見ていた。

完全な素人。それが前のめりになるならばセシリアは当たり前のように腰部に搭載されているミサイルランチャーから単発のミサイルで迎撃する。

「あなたの相手は後でしてよ！」

「おわっ!? み、ミサイル!?!」

ギャグ漫画のように空中でたたら踏んで慌ててミサイルから逃れようとする一夏を、セシリアの放ったミサイルが追尾する。彼の機体が暮桜の後継機と睨んでいるセシリアはブレードオンリーと白式の武装を断定して、そのまま意識をマコトに戻す。

「一夏ー!」

爆発音。それは一夏にミサイルが命中したわけではなく、マコトが放った弾丸によってミサイルが落とされた結果だった。

「わ、わりいー! マコトー!」

本当に素人なのか? セシリアはマコトを射抜くように見つめる。搭乗二回目の少女が高速で飛び、小型の目標を撃ち落とすなどありえない。セシリア自身もどうしようもない時でなければフレアをばら撒いて回避する。

セシリアのギアが一段階、早々にあげられる。飛鳥マコトを初心者相手と見ない方がいいと。

「…飛鳥さん。正直、あなたがそこまでおやりになるとは思っていないんですけど」

「そうかな? 一週間ずつとイメージトレーニングしてたことをイメージ通りにやったら、IS がそうしてくれただけだと思うんだけど」

「あなた、IS 適正はどうでしたの」

銃を向けたまま、セシリアは問いかける。もちろん、この音声は観客席側にも流れており、1組の生徒達は「そっか、聞いていたことがなかった」と口々に呟く。

マコトは問われ、素直に答えた。

「A+」

「なっ……」

「A+。あたしの適性。あたし自身も驚いてるよ」

「あなたも、レイラと同じ、最高値…」

「あの子も、そうなんだ」

世界に本当にごくわずかにしかない初期適正值「A+」。マコトもそうだった。初めて乗つてもISが言うことをきき、思った通りに動くことができる。そんな存在。マコトに関しては最初機から開発に関わっていたこともあつてそうなっている。

それが、マコトの素人とはかけ離れた機動が可能な理由の一つ。

「ならば、これは如何ですか？」

セシリアが上方に急加速し、マコトたちにビーム・ライフルで雨を降らす。マコトも一夏もそれぞれなんとか回避し、セシリアに接近しようとして一夏が上昇しようとする。

「ッ！一夏！だめだ！」

「え!?!おわっ!?!」

背後から大きな衝撃。一夏は視界の隅にある「シールドバリアエネルギー」の残量が一気に減つたのが見えた。ISバトルにおいてはこのバリアエネルギーの残量で勝負が決まるルールで、いわばHPだ。それが減つた。攻撃を受けたということ。

一夏がなんだと背後を向けば、僅かに青い飛翔物が視界から外れていくのが見えた。

「なんだっ!?!がっ!?!」

今度は左側面から衝撃。エネルギーが削られる。幸にも痛みはまつたくないが衝撃自体は体を揺らす。

「一夏！その場から動いて…くっ!?!」

マコトのほうへと向けば、一夏は今何が自分たちを襲っているのか理解する。ブルー・ティアーズから分離したビット兵器。それが直角機動で凄まじい速さでマコトの周りを飛び交い、一夏の周囲にも飛んでいる。

全部で4機のビットが二人に襲いかかっていた。

「さあ、さあ！そんなステップでは！」

機数は多くないためビームの檻に閉じ込められることはないが、一

夏は次々と全身にビームが突き刺さる。

「くそっ！くそっ！わかつちやいたけど、どうすりゃいいんだよ！」

悪態をつきながら、遮二無二に動いて回避を試みる一夏だがそれは叶わない。シールドの発生を知らせる表示に合わせて「絶対防御起動中」という表示も明滅する。必死に覚えているISの用語の中にそれはあり、一夏はかろうじて意味を思い出す。

絶対防御とは、ISの搭乗者をあらゆる外的事象から守るためのもので、物理的な装甲に例えれば二次装甲。バイタルパートを保護するための最後の壁だ。その性能は白騎士のものからシールドバリア同様一切変わっていない。ISコアの稼働エネルギーが尽きるまで一切の攻撃を通さない。それこそ、流星群の中に迷い込んでも、アーマーがダメになっても搭乗者だけは無傷でいられるほどのものだ。

だが、発動には夥しいエネルギーを必要とし、今のISコア自身人類に合わせてセーブしている状況ではコアの発生するエネルギー供給量を消費量が上回り、いずれISが強制停止する。

白騎士のコアそのまま白式といえど、今の白騎士コアは「創造主」から与えられた命令を忠実に守り、ただのISと同等の機能に力を制限しているため白式も例外ではない。

「エネルギーがもうやばい！」

「おーほっほっほっ！そのまま地に落として差し上げますわ！」

あまりにらしい高笑いに一夏はムカつきながらも「マジで貴族ってあんな笑い方するのか」と衝撃を受けつつ、なけなしのエネルギーを使って無意味な回避運動を続ける。

一方、マコトは危なげなく回避をしながらどうしたものかと考える。

「(二機だけがこつちを向いているとはいえ素早くて正直それ以上の弾幕。相手には頭を取られてる。ブラストインパルスやデステイニーみたいな長距離攻撃できる武器があるわけでもない)」

何より、マコトはさつきからガラムを収納している。ビットによる攻撃が始まってから、数度、セシリア本体からマコトの武器を狙った攻撃がされたからだ。実際のところ、この戦いでは全員模擬戦用武装

の火力や判定はモード変更で本当に削られているわけではない。一夏の受けている衝撃も、ISが全身を膜のように包むシールドバリアを使ってシミュレートしている。結果だ。もちろん、エネルギーが減っているのも実際の数値よりは少ない。

射撃武装の被弾判定はシビアで、当たれば一撃で破損になってしまう。マコトは簪から前日までの話でそう聞いていたので、狙われた時点で武装を収納している。

「くっ、思ったより動けるからいけると思ってたけど、逆だ。やれるから、できないこともすぐわかる！」

打鉄の性能限界。それが如実に今のマコトにはわかってしまっていた。千冬の暮桜の後継機とはいえ、打鉄に求められたのは量産機としての安定性だ。故に、暮桜のピーキーな操作性からなされる俊敏性や、高い出力の内臓スラスタは調整されて相当にマイルドにされており、性能の頭打ちも早い。

拡張性が少ない。これも簪から聞いた話で、日本の第三世代機の開発が遅れに遅れているのは打鉄の突き詰められた設計によつて引き起こされ、簪がちらりとマコトに語った彼女の専用機、打鉄の改良機はほとんど設計を見直して名前だけ同じの別機体になってしまっているという。

ひらり、ひらりとビットを避けられる操作性の良さはマコトも気に入ったが、今の上空にいるセシリアに突撃をかけることは難しい。

「手はあるにはあるけど、瞬時加速の瞬間到達速度も平均より遅いから間違はなく迎撃される」

打開策として、マコトは瞬時加速と呼ばれるISの戦技のうちの一つを挙げるが、この打鉄の加速性能の悪さがその案を却下させる。瞬時加速はシールドバリアにも使用されているエネルギーを機体の推進装置に回して一気に解放することで瞬間的に凄まじい加速力を得る戦技だ。

さきほど、セシリアが上空に一気に跳躍したのもその技だ。ISの操縦者としては出来て当たり前の技術で、候補生レベルとなれば瞬時加速の応用技も使ってくる。セシリアの本領が中距離機動戦である

ことはマコトも察しているため、未だ全力でない彼女が見せていないだけだろう。

「時間をためてエネルギーを貯めても、それをすれば動きが鈍くなる。どうすればっ!」

正面から放たれたビットの一撃を咄嗟にマコトは剣で切り払う。ビームが拡散し、飛沫のように舞う。観客席からは「がんばれー!」と声援が飛んでくる。

「…そうか! 剣で払えばいいのか!」

唐突に、そんなことを一夏が言い出した。マコトもセシリアも、観客席の全員も「は?」と呆けた。

一夏のシールドエネルギーは風前の灯で、セシリアはとどめとばかりにビットの全砲門とライフルの銃口を向けて、ノータイムで放つ。これで一夏は落ちるだろうと、観客席ではなくカタパルトの管制室にいる千冬と箒以外は思った。

「お、織斑くんが! 一夏くんが!」

「落ち着け、山田くん。あの馬鹿はあれでは終わらんよ」

「そうですね、織斑先生。アイツは馬鹿ですからね」

信頼。千冬と箒は知っている。織斑一夏がどれだけ単純かを。ISが生み出され、千冬がISがらみの方向へ進んでも一夏は何も変わらなかった。単純なまま、いつも真っ直ぐに進んできた。だからあの束も、単純で、まず誰かを肯定する一夏に千冬と同じく心を許した。

「……だあぁっ!」

「なっ!?!」

一斉砲撃。それは、一瞬とはいえ全ての砲身が固定された状態。一夏は本能的にそれを理解し、セシリアに向かって真っ直ぐ加速した。四方からのビットの攻撃をすり抜け、真正面から一夏を貫かんとするビームを彼は、その手に持つ『雪片二型』で切り払った。

「そんなっ!?!」

観客席でレイラが驚愕の声をあげる。本当に、完全な素人が、今日初めてISに乗る人間が、亜光速のビームを切り払うなどありえない。信じられない。



「だから言っただろう、一夏。ISは人体の延長線上。斬ればなんともなる」

モニターを見ながら、箒は満足そうに頷いた。

「正気ですか!?真正面から!」

「斬ればなんともなるんだよお!」

セシリアがライフルを連射する。しかし、一夏は何かが吹っ切れたかのようにひたすらライフルのビームを切り払い、接近する。ビットを一夏に当てたいが、それをすればマコトがフリーになるためできない。

「うおおおっ!」

一夏の雄叫びとともに、白式の装甲が白く染まっていく。まるで雪が降り積もり、染み渡るかのように。一夏と白式の間調整が完了した証拠だった。エネルギー残量が僅かに回復し、“白騎士”は一夏の声や勢い。感じる体温から判断する。

——ああ、この人はあの剣術馬鹿（千冬）と同じだ、と。

『単一機能の発動を許可』

「なんだかわからないがいくぞ!」

ワンオフアビリティの起動の提案。白式からなされたそれを一夏は何も考えずに承認した。

「ッ?!?!」

声にもならないマコトの悲鳴があがる。振りかぶり、雪片二型の切っ先がマコトに向いた途端それは顕現した。青白く、どこまでも伸びていく、無敵の太刀。それがマコトにまず掠めて、ついでに彼女のことを追いかけてようとしていたビットにあたり、ブルー・ティアーズ本体から分離しているためバリアもないそれらは紙のように斬られる。

マコトのシールドエネルギーは僅かに刃が掠っただけでほぼ全損し、あと一撃でももらえば試合は続行不可能となる。

「ひっ!」

セシリアは迫り来る白い鎧武者に以前見たトラウマビデオ映像を思い出す。黒髪の剣鬼、何もかも青白い太刀で斬り裂いた最強の戦

士。白式の：日本のISの持つ「暮桜」と似た形状である視覚的性  
能が見事に牙を剥いていた。

「もらったあああー！」

自身が引き起こしている事態に気がつくこともなく一夏はセシリアに太刀を振り抜こうとする。視界には青空と、恐怖でしわくちゃになって  
いるセシリアしかない。いや、本当に「それしか映っていない」。

普通であれば当たらない間合いを青白い光の太刀が振られ、セシリアを斬り裂かんとする。セシリアは恐怖のあまり目を瞑った。が、一向に直撃によるエネルギー消失のアラートはこない。

なにが、とセシリアが目をゆっくりと開ければ、雪片を振り抜いた格好で固まっているのが見えた。

「……え？」

「……え？」

セシリアも、一夏も困惑とした表情を交わす。セシリアの視界には未だ8割近いエネルギーが残されていることを示す各種エネルギーマップが正常に動いており、ビットのうち3、4番機がシグナルロス  
トしていることもわかった。

撃墜されていない。セシリアは状況を理解した。では何故、一夏がその場で固まっているのか。

『白式、エネルギー残量、ぜ、ゼロです！』

静まり返ったアリーナに真耶のアナウンスが虚しく響く。ここでようやく、一夏の視界に全ての表示が戻ってくる。

視界の邪魔になるほどの色んなゲージの0、0、0という数字。一夏もようやく白式の状態を把握する。

「ね、燃料、切れ？」

この状況をただ一人、白騎士の長きにわたる相棒だった千冬だけが理解していた。

「(はしやぎすぎたな、あいつめ)」

オリジナルコアの数は限られており、新型機を開発するとなると、当然現行のものを解体し、ISコアも初期化される。このコアの初期

化技術は束から開示されているもので、完全にコアを初期化できるのだ。それをしないとどうなるのかといえば、外装と制御システムの不一致やISコア自体の混乱などが起きてシステムダウンなどが発生する。また、専用機ともなれば以前の操縦者の癖に合わせてISコアが動くため、操縦者の意図しない動作が発生する。

今回、一夏と白式の間が発生したのはまさにそのコアと操縦者の意図の不一致だった。

白騎士のコアは一夏の生態パターンが千冬に似ていることに加えて、剣術の心得があることや思い切りの良さなど姉弟特有の似ている行動から「彼は千冬と同じだから同じ仕様でいいよね」と判断し、かつて千冬が暮桜でそうしていたように機体情報の表示を全てオフ。さらに、機体制御と火力に全エネルギーを白騎士時代の感覚で過剰投入。

その結果、僅か7〜8秒で、展開し長距離移動するなら半日は持つ程度には残っていたエネルギーを浪費し、エネルギー切れ。失格となった。

あまりのことに固まっていたマコトに、セシリアのビットが一発当て、マコトの打鉄もエネルギーが全損。彼女も失格となる。

『打鉄、エネルギーゼロ！オルコットさんの勝ちです！』

勝負していた本人たち、観客席にいた1組全員が「ええ……」となんとも微妙な空気となった決着に声を漏らしながら、1年1組のクラス代表候補決定戦の幕は降りたのだった。

戦っていた三人が全員同じピットへと帰還し、ISから降りる。勝者であるセシリアも微妙な顔つきで、勝負がついたというのに三人を取り巻く空気は非常に陰鬱だった。

「…あー、三人とも、ひとまずぐ苦労」

『お疲れ様です』

「勝者はオルコットとなった。このまま行くとオルコットがクラス代表になるが」

「織斑先生」

「なんだオルコット」

「私はクラス代表に立候補するなど一言も言っていないませんが」

「と言うのはわかっていたからな、撃墜順で言えば飛鳥になるのだが……」

マコトは千冬の言葉に首を横に振った。千冬は「おや」と僅かに驚く。

「立候補したときの威勢はどうした」

「いえ、その……正直、ISのこと、舐めてました」

「だとしても、そういった認識を正す機会にクラス代表戦はなると思うが?」

マコトは気持ちが逸るあまり今回立候補してしまったと模擬戦が終わり自覚した。ISに感じた高揚感は嘘ではなく、できるならばこれからどんどん乗って行きたかったが鼻っ柱を折られたような感覚がマコトにはあった。

「オルコットさんの動きに圧倒されました。あたしにはまだまだ、ISに乗る勉強が足りません」

「心構えもだろう」

「はい」

落ちて着いているように見えて、マコトが真っ直ぐなのは千冬もわかっており今回の模擬戦が無駄にならなかったとこの時点でも満足だった。彼女に関しては束とのももあり特に心配はしていないため、こんなものだろうと千冬は視線を一夏へと向けた。

「織斑。お前が最後に出したもの、何かわかるか?」

「えっ?あれですか?いやなんか光の剣……」

「阿呆か。発動直前に白式が何らかの提示をしなかったか」

一夏はそう言われて思い返す。心当たりがあった。

「確か、ワンオフアビリティ:単一機能がどうかかって」

「そうだ。それだ。ISコアには進化機能があるというのは今週の授業で習っただろう」

千冬はヒールの音をピット内に響かせながら膝立ちで置かれている白式へと歩み寄り、コンコンと機体叩く。

「単一機能とは、操縦者とISコアの同調が高まり、極まったときにISコア自体が生み出すものだ」

「ですが織斑先生。織斑さんは今日そのISに乗ったばかりです。それで即座に単一機能の発現など。さらに、あの単一機能は」

「オルコットの疑問は尤もだ。さきほど織斑が発動させたのは『零落白夜』。私が現役時代に使用していた暮桜のものと同一だ」

「千冬姉と…そういうえば、なんか青白いのでぶった斬ってた記憶が」

「ありえませんが！単一機能の継承など、現時点のISでは絶対に起こり得ません！コアを流用していたとしても——」

「——初期化されていれば、という条件がなければ、それはありえませんが」

セシリアの言葉をマコトが否定する。マコトもてつきり、白騎士のコア自体が成長しきっているため初期化されていてもそれは表面的なソフトウエアだけだろうと考えていた。が、どうやら実際には違うのかもしれないとマコトは推測する。

あの白式のコアは。

「(白騎士の時から、ずっと、そのまま)」

ナンバー0と呼ばれる白騎士のコアは表向きには束が所持していると言われ、白騎士自体の性能の隔絶したことからコア自体も配布されたものとは違うと言われている。それは事実でマコトもその全てを知るわけではないが、コアに内蔵されるジェネレーターやそれらを伝達する機能、コア自体の拡張性、何度も言うが性能制限の無さ。

偽装され、暮桜のコアに擬態しているとはいえ、なんらかの手を使い束自身が手を加えたとなればコアの初期化をせざとも不具合は出さない。結果、これまでの全てを引き継いだまま、今は白式としてここにある。

強くてニューゲーム。妹がそんなことを言っていたことがあったが、まさにそう言った状況なのだともマコトは思った。

「そんな…そんなこと、可能なのですか？」

「倉持の技術者からはそう聞いている」

千冬はそう言ってポケットから一枚の手紙をひらひらと見せつけ

る。

「といっても、難航していて諦めようとしていたら偶然不具合が解消して、このIS以外はうまくいかなかったそうだ」

「偶然ですか…」

「まあ、ISには未知の領域が多すぎるからな。唯一わかっている開発者もこの世にいるのかわからない。そういった不安さも手伝って、データ取りには最適で、私とは血縁のある織斑がこのISの操縦者として選定されたわけだ。最初は私がテストパイロットをする予定だったんだが、そのあたりはもつと上の意向だろう」

しれっとした態度で千冬は白式の「カヴァーストリー」を語りきり、セシリアは納得するしかなかった。

マコトはこのほとんど嘘な話を考えたのは東だと確信する。千冬が話きったとき「面倒だった」と言わんばかりに彼女の癖である側頭部に手を当てる仕草を見たからだ。箒もその仕草をするときがどういった状況なのかわかり、白式が姉の手によって何かされているのだと察した。

「それで、だ。消去法でクラス代表は織斑になるのだが、いいか」

「…いいのかなあ、なって」

一夏は悩んでいた。こんな自滅紛いのことをしてしまうほど一夏はISをよく知らない上、戦闘の内容は散々である。むしろ、一夏の一撃がなければほとんどダメージを受けていなかったマコトのほうがいいんじゃないかと思った。

しかし、その一夏の迷いを絶つたのは意外なことに彼の代表推薦を止めようとしたセシリアだった。

「織斑さん。あなたが代表になるべきです」

「え？オルコットさん、嫌だったんだろ？」

「……私は一言もあなたが代表に相応しくないから辞退なさいと、言っていますせんが」

「…言われてみればそうだな」

「先ほどの最後の突撃。見事でした。初めての戦闘ともなれば誰しも相手の攻撃に恐怖し、動けなくなるのが常です」

「オルコットさんもか？」

「恥ずかしながら私もそうでした。ですが、あなたは初陣で光を切り裂き、振り切って私まで刃を届かせかけた。あなたのISが特殊なものもあるでしょう。ですが、それ以前に、あなたのその胆力は認められます」

セシリアは先ほどの一夏の思い切った突撃を称賛する。剣で弾を弾けば損傷の判定は出ないと気が付き、それをいきなり実行しようとする者がいるだろうか。それも乗った初日で。確かに彼の動きはおぼつかず、回避すらまともに出来ずセシリアの攻撃は全て彼に直撃していたが、それでも戦意を衰えさせていなかった彼に、セシリアは畏怖さえ感じる。

「へへ、なんか嬉しいな」

「そうやって、称賛を謙遜せずに受け切ることもリーダーには必要でしょう」

「ってことはつまり」

「認めましょう。織斑一夏。IS乗りとして以前に…人としてその真つ直ぐさ、強さを。あなたには1組のリーダーになる資格がある」

セシリアは微笑みながら一夏を認めて、そう言った。箒が一夏の肩を抱いた。

「やったな一夏！勝負には負けたが、試合相手に認めさせたぞ！」

「ああ！やったぜ！オルコットさん、あんためっちゃいい人だな！」

「この国の言葉では信賞必罰と言うのでしょうか？あなたは私に認めさせるだけのものを見せてくれた。であれば、下々の上に立つものとして、認め、与えるのは当然と言えるでしょう」

「ノブレスオブリージュ、というものですね！」

真耶の補足に「その通り、ですわ！」とセシリアがまた高笑いした。マコトはクラス代表にはなれなかったがこれにて一件落着、と安堵した…のだが、リーダーの件に加えてもう一つ決闘の理由が、むしろそちらの理由がメインだったとマコトは思い出してセシリアに問いかけた。

「オルコットさん、そういえばデュランダルさんがどうのって理由で

「一夏に決闘をふっかけてたよね」

「ああ、そのことですか？流石にあのような負け方をすればレイラも考えを改めるでしょうし、気にしていませんわ」

「……なるほど」

勘違いは勘違いのままセシリアの中で解決したらしかった。これ以上聞いて藪蛇になるのはごめんなのでマコトは何も言わなかった。

「というところで1組のクラス代表は織斑くんになりました。1組、一夏、で1と1。語呂がいいですね！」

模擬戦後、特別SHRで真耶がクラス代表の一夏就任を発表し1組は拍手で湧いた。マコトもなれはしなかったが納得はしているので拍手する。一夏自体の立場もあるため、むしろこれでよかったかもしれないとマコトは思う。

「本日は授業のない中でよく全員集まったな、暇なのか？」

千冬が土曜で今日は授業でないせいも珍しく冗談を言うと、クラスのほとんどが「そうです！」と元氣よく応えた。

「そうか。ならこの後は空いているな」

突然のその言葉に教室は静まり返る。マコトもまさかこのあと授業でもするつもりなのかと思わず身構えるが、違った。

「毎年、私が受け持ったクラスではどうにもクラス代表を決定する際一悶着起きるからな、こういった決定のあとはかならずパーティーをすることになっている。会場は食堂の一角だ」

千冬の唐突なパーティー開催の宣言に全員が喜んで声をあげた。鬼教官はどこいったのか、とマコトは苦笑する。箒も一夏も苦笑いしていた。おそらく、維持することに疲れたのだろう。

「さて、本日のSHRはここまでだ。食堂ではしやぎすぎないように注意すること。あとは自由にしてよし。解散！」

『ありがとうございます！』

千冬の号令に全員が我先にと教室から出ていく。千冬も真耶も苦笑いしながらその様を見届けて教室を後にする。マコトもさやかに手を引かれ教室から連れていかれそうになるが、彼女はさやかに待つ



たをかけて教室に少し止まった。

「一夏、箒も、行こうよー!」

「おう!もちろん。ただ、その前に」

「一夏?」

箒とマコトが首を傾げるなか、一夏は席を立ってセシリアたちのほうへと歩み寄る。セシリアも席を立ち、一夏と向かい合う。

「オルコットさん」

「何か?」

「一緒に飯、食べようぜ」

まだ教室に残っていた生徒たちが全員、ババッと二人の方へと向いた。全員が「ナンパ!?ナンパなのか!?!」と目で訴えている。

「まあ、そのような下手な誘い方では乗れませんわね」

くすくすと、セシリアらしい冗談で一夏に応える。

「日本じゃ、喧嘩したらそのあと、飯食うもんなんだよ」

「あら、そうなのですか?初耳ですわ」

「それとも、跪かないとダメか?」

「そこまでしなくても結構ですわ。いいでしょう、お受けしますわ、そのお誘い」

セシリアが手を差し出す。一夏は躊躇いなく彼女と握手を交わした。

「っ……いい、意外と、握力強いな」

「そ、そういう、あなた、こそ」

友情だ…と見ている1組の生徒たちは二人の様子に「尊いものが見れた」と心の中で拜んでいた。

「ふう、っと。これから、よろしくな。オルコットさん」

「ええ…それと、セシリア、でいいですわよ。一夏さん」

「おっ、そうか。というか、俺の名前を呼ぶのは許可とらないんだな」  
「あなたの言う日本での、というのはそういうものなのでしょう?」

悪戯っぽく笑うセシリアに一夏は思わず固まる。あまりにその顔が可愛らしく、一夏は心の中に感じたことのないものが疼いた。

「(一夏……お前……)」

「(一夏、チヨロすぎる……)」

幼馴染みであるマコトと箒はすぐに一夏の様子に気がついた。これは間違いなくときめている。一夏が女子にときめくことはこれまでも一度もなかったのだ。マコトも箒も、ここにはいない鈴も一夏とは馬鹿をやる友人でしかなく、男女の関係などまかりまちがってもなることはありえないと思っている。一夏自身、明らかにマコトたちを異性とは見ていない。

そんな彼が初めて見せて表情に彼女らはすぐに勘付くことができただのだ。

「で、セシリアが行くってことはデュランダルさんも来るんだよね？」  
「ええ、もちろん。ここで断るほど、私も空気が読めないわけじゃないですよ」

レイラも立ち上がり、セシリアの隣に立つ。そうして、一夏に手を差し出す。今度は一夏も普通に握手を交わす。

「それと、私のこともレイラ、で構いませんよ」

「そっか。じゃあ、俺のことも一夏でいいよ。レイラ」

「よろしく願いますね、一夏さん」

セシリアよりもどこかの姫と言っている容姿のレイラに周囲は見惚れてしまうが、何故か一夏はセシリア相手の時とは違いなんの反応も返さなかった。一部の1組生徒たちの中で「一夏、イロモノ好き説」が生まれた瞬間だった。

一方でセシリアは固まっていた。レイラが一夏に興味を失ったと思いついていたからだ。

「れ、レイラ、彼のことをお認めになるの？」

「認めるも何も、彼のごことは好ましく思っています」

三角関係誕生。そんな勘違いが出来た。

「レイラ!?あなたはデュランダル家次期当主!こんな極東の殿方など!」

「セシリア、落ち着いてください。何を勘違いして」

「いけません!いけませんわ!一夏さん!レイラに手を出せば、どうなるかわかっていますか!?!」

「い、いや、そもそも手を出すも何もしないが…」

「信用できませんわ！男は皆羊の皮を被った狼！父もそうでした！いつもはヘコヘコと母の顔を伺っている癖に大変なときばかり格好つけて母を骨抜きにして！信用できませんわ！」

「オルコット、お前自分の両親のことそんな暴露していいのか？」

「別に構いませんわ！最期に会った時も私の前でイチヤイチャと…！とにかくくっ、一夏さん、レイラ！私の目が黒いうちはそのような不埒な関係、絶対に許しませんわ！レイラ、行きますわよ！」

「……わかりました」

暴走するセシリアにレイラは呆れたような顔をしてついていく。残された生徒たちは呆然とその姿を見送った。

静まり返った教室の中で箒が呟いた。

「あいつはデュランダルの姉か母か何かか？」

その呟きはあまりに全員の気持ちを代弁していた。

その後のパーティーは順調に行われ、お開きが近くなった頃、マコトは一度食堂を抜けて、食堂から程近い小さな噴水のある休憩所までやってきていた。夜のIS学園はその立地上風が気持ちよく、僅かな磯の香り混ざる。

パーティーの高揚感で熱った体を冷やすにはちょうどよい環境だった。

「……それで、いつまでそうしているつもりですか」

マコトは尾行されていることにすぐ気がついた。幼い頃は束からいきなり背後から抱きつかれる可能性があり、そのせいで妙に背後からの視線に敏感になっていた。

「気がついていましたか」

「やるわね、あなた」

「えっ？」

思わずマコトは振り向いてしまった。彼女が感じていたのは「一人だけ」の気配だった。が、呼びかけて出てきたのは一人ではなく二人である。休憩所の入り口にいたの一人はもう見慣れたクラスメイト

であるレイラだった。

「……誰……?」

「あら、入学式の時、挨拶したの忘れられちゃったかしら」

水色の髪をした学園の上級生と思しき少女が扇子を口元で広げて言う。扇子には「失礼千万」と書かれている。

入学式、と言われてマコトは思い返す。二週前の出来事である。すぐに思い出せた。

「……更識生徒会長?」

「正解、おめでとう」

今度は「ご名答」と扇子に書かれていた。どういう仕組みなんだ、と思いつながらマコトはそれよりも何故ここにレイラはともかく、この学園の生徒会長……更識がいるのかわからず、警戒する。

「いやあねえ、そんなに警戒しないでちょうだい。私の名字、あなたも普段から聞いてるでしょう?」

「普段から?生徒会長に面と向かって会うのはこれが初めてですが」「私、そんなに似てないのかしら……あの子と……」

よよよ、と嘘泣きをする更識にマコトは毒気を抜かれてしまう。普段から聞いていると言うが、どこで聞いているのだろうか。それよりも、誰と似ているのだろうか。マコトはこれもちよつと考えてみればわかった。

「まさか、簪さんのお姉さんなんですか?」

「またまた正解。そうです。私が簪ちゃん的最愛のお姉ちゃん、更識と……楯無よ」

更識楯無、と強調するように扇子に表示して彼女が目元を笑わせる。なるほど、言われてみればとマコトは楯無が簪にそっくりであることがわかる。性格はどこかおちやらけている楯無と静かな簪とは似ていないが、容姿は簪をちよつと大人っぽく勝気にしたらこうなるだろうという印象だ。

「それで、その簪さんのお姉さんがあたしに何か……?」

「ごめんなさいね、尾行しちゃって。ちよつと簪ちゃんの様子を聞きたくって」

「本人に聞けばいいのでは？」

「生徒会長つて多忙でね……ほとんど缶詰なのよ、生徒会室に」

嘘か本当かはわからないが、楯無は同じ学内にいるのに簪には会えないらしい。食事の時ぐらいいは会えるのではとマコトは聞くも、それも生徒会室でとつてしていると聞きよほど忙しいのだろうとマコトは思うことにした。

「今も休憩時間にこっさり抜け出してきてね、あんまり時間がないの。長く空けると生徒会の役員たちが私を……また、あの地獄に……」

「ええつと……そうなんですネ」

「だから！一言でもいいの！教えて頂戴！簪ちゃんは元気!?」

「はい、元気ですよ。ついこの前から一緒にご飯食べるようになりましたし」

「いつしよに、ごはん!?!」

「よく笑うようにもなりました」

「よく、笑う!?!」

「ただ、たまに夜更かししてるみたいで、朝起こすのが大変です」

「朝、おこすうううつ!?!」

マコトは直感した。あ、この人面倒臭い人だと。

なお、この間レイラはただただ固まっている。

「飛鳥マコトさん!」

「はい?」

「命令です!簪ちゃんの可愛い姿、これに納めて今後送って頂戴!」

「うわつ」

いきなり楯無が懐からマコトに投げたのはインスタントカメラだった。

「いや、いきなりルームメイトに写真撮られ出したら簪さん引くと思います」

「大丈夫!あなたなら!……ハツ!?殺気!じゃあ、そういうことで!

よろしく!撮ったら生徒会室に送って頂戴!」

「え、ちよつと待ってください!やるなんて一言も!」

「さよならつ!」

そのまま楯無は嵐のように去っていく。楯無が消えて数秒後、遠くで「いたぞー！」

「連れ戻しなさい！」といった声が聞こえてきた。マコトはカメラを持ったままどうするんだこれはと呆然とした。

「…………コホン。嵐のような方でしたね」

「あ、いえ、ごめんなさい。デュランダルさん、待たせちゃって」「いいえ。そもそも勝手についてきたので」

気を取り直して、レイラがマコトの前に立つ。マコトは見れば見るほど、綺麗な少女だと思った。金髪碧眼で、整った顔立ち。王族、なんて言われてしまえば信じてしまいそうな容姿だった。

「それで、なんであたしを尾行したんですか」

本来の目的はレイラとの会話。マコトはカメラをポケットに入れながらレイラに聞く。彼女はマコトを見つめたまま、応える。

「——ミネルバ。あなたはこう言われて、なんて応えますか？」

息を呑む。マコトは、ミネルバと聞かれば二つの意味がすぐに出てくる。

一つはローマ神話のミネルヴァ。あまり神話に興味のないマコトでも名前ぐらいは聞いたことがある。

そして、もう一つは。

「…………ミネルバ級惑星強襲揚陸艦の1番艦、ミネルバ。そうでしょう、  
「レイ」？」

「…やはり、あなたなのですね ッシン」

前世の親友との再会に、マコトもレイラも、大きな感情の波は不思議と起こらなかった。それは確信めいたものがあつたのか。それとも、もはや、二人の中で「シン・アスカ」と「レイ・ザ・バレル」の関係は過去のものとしてしまったのか。

「どうして(ハン)に？」

「それはこちらのセリフですよ」

「それに完全に女の子になってる」

「それも、こちらのセリフです」

だが、聞きたいことはある。それは同じだった。

「……あたしは、〃シン・アスカ〃はあのととき、キラ・ヤマトに負けて、気がついたらこの世界のあたしになつていた」

「…私も同じです。あなたが討たれ、私は満身創痕のフリーダムと相討ちになりました」

「仇、とつてくれたんだね」

「当然です。……あなたは前世で、唯一の友だったのですよ」

微笑む彼女に、マコトは前世の親友を幻視する。ああ、この儂げな笑顔は間違いない。レイ・ザ・バレルだと。

「そうして、私はこの世界にレイラ・デュランダルとして生まれた。前世のよく似た他人の娘として」

「デュランダルってやっぱり、そういうことなの？」

「そういうことです。といつても、前世と似ても似つかない家庭環境に出生。加えて、セシリアという幼馴染みの存在……シン、いいえ、マコト。あなたが今世の飛鳥マコトとして生きているように、私も今はただのイギリス生まれの少女、レイラ・デュランダルとして生きています」

「そっか……」

どこか、それは寂しいような、嬉しいような。戦争に明け暮れて、最後には死んだ親友が今は一先ずは平和に生きている。お互いに、思うところがあつた。

「…けれど、だからといって、あなたとの関係をなかつたことにするのは……いいや、なかつたことにするというのは、あまりにも薄情だろう。シン」

少し声を低くして、レイラは、否、レイはマコトではなくシンに言う。

「…ああ、そうだな。レイ。俺も、お前と、まだ友達いたいよ」

「フツ…あの頃はそんなこと、言う暇もなかつたな」

「ああ、必死で、休むまもなく戦つてさ」

「それが今では、ISなんてものがあるがあの世界と比べれば遙かに平和だ」

「こういう世界に、したかつたな」

「……そうだな。ギルの目指した世界でも、近い平和は実現できただろうさ」

欲しかった平和は今ここにある。二人は感慨深く、空を見上げる。過去、二人が飛んだ星々の彼方。最期を迎えた月。今は向かうことができない、遠い場所。

「それにしても、今じゃ、昔の口調で話すほうが違和感あるよ。あたし」

「…ふふつ、そうですね。慣れというのは怖いものです」

二人はふつ、と力を抜いて言う。シンとレイ、彼らはもういない。だが、彼らから地続きの彼女たちがそこにいる。

「まさか同じクラスになるなんて思わなかったね」

「ええ。あなたを初めて見た時、まさか、とは思いましたが」

「あたしも。意外とわかるもんなんだね」

「そこは、友情の為せる技、と思っておきましょう」

「オルコットさんと幼馴染みなんだよね」

「ええ、両親の付き合いで。そういうあなたも、織斑先生の弟や、篠ノ之博士の妹と幼馴染みではありませんか」

「それも偶然、昔近所だったんだ。それ言ったら、篠ノ之博士…束姉さんとも仲良いよ」

「まあ、それは国家代表候補生である私に言ってもいいのでしょうか」

「レイラなら大丈夫でしょ、信じてるから」

「全く、相変わらずあなたは人を信じすぎるくらいがありますよ、マコト」

あははつ、と二人は笑い合う。

「ねえ、レイラ」

「なんですか、マコト」

「この世界、守りたいね」

「…ええ、そうですね」

「今のあたしたちは、あたしたちそれぞれの人生があって、もう違う世界に生きてる。あたしはただの小娘で、レイラは外国のお嬢様。けど、それでも、また同じものを見れるって信じてる」



「勿論。言ったでしょう、あなたとの関係は終わらないと。マコトの言いたいことはわかります。この世界は薄氷のうえに平和を置いている。ISの登場や、女尊男卑の蔓延。そんなものは大したことはありません」

「…なにか、知ってる?」

「それは…あなたであつても、まだ言えません。でも、この世界には、あの世界”と同じぐらい悪しき人の業が重ねられている。それは今も。これからも。それだけの業を重ねていけば、ヒトはいずれ滅ぶでしょう。滅ぶべくして」

「それは、嫌だな」

「ええ、私もいやです。今の世界を、父上を母上を…そして友を失うなど、考えたくもありません」

レイラは一度言葉を切り、目を閉じる。マコトは続きを待った。

「私は戦います。この世界の、レイラ・デュランダルとして、私自身の意志で」

「あたしもだよ。あたし自身の想いで、この世界を守りたい。守って、夢を叶えたい」

「夢?」

「ああ、そうだ。これ、束姉さんと千冬さんにしか言っていないもんね。特別に、レイラにだけ教えてあげる。あたしの夢」

「それは、嬉しいですわ」

「あたしの夢、それは——」

「——争いのない、平和な世界で、インフィニット・ストラトスでどこまで飛んで行きたい。それがあたしの夢」

両腕を広げて、マコトは星空を見上げながら言う。レイラはその姿に、驚く。かつては復讐に身を焦がし、最後には灰にまでなつて、伽藍堂となつても剣を取り続けた姿を…いや、そうさせたのを知っているから。

だから、彼女は、今はもうしがらみもなく、ただのクラスメイトとして、友人としてその夢にこう言った。

「…素敵な、素敵な夢をお持ちですね、あなたは」

優しい笑みを浮かべて、レイラ・デュランダルはシン・アスカが、飛鳥マコトとしてこの世界に生きていると実感する。それはとても嬉しく、レイラの心を暖かくさせた。

「そのためにも、頑張って生きないといけませんね」

「うん。もちろん、レイラも」

「ええ。私も、今世はちゃんと、天寿を全うしたいですわ」

自然と、二人は歩み寄って握手し笑みを交わす。再会と出会いを二人はようやく果たし、今度は確かに自分たちの足で未来へと進み始めたのだ。

「さて、会場戻ろうか。後片付けもあるだろうし」

「私、パーティーの後片付けをするの、初めてですわ」

「嘘つかないの。アカデミーでやったでしょ」

「あかでみー？はて、なんのことやら」

「あつ、まさかサボるつもり？」

「さあ、どうでしょう。セシリア次第ですよ」

「ちよつと、レイラ、待って！」

「待ちませんよ」

レイラが駆け出し、食堂へと戻っていく。マコトも慌てて彼女の後を追う。あとに残されたのは澄み渡る星空と、静かに水音を立てる噴水だけだった。

「そういえば、レイラって一夏のこと好きなの？」

「人間的には好きですね」

「そっかー。ちなみに、今まで告白されたことは？」

「それなりに。ただ、どの殿方も特に惹かれませんでしたので」

「一夏は？」

「ああそう言う意味ですか：全く惹かれません」

「それ、早めにオルコットさんに言った方がいいよ」

「そのうち治るでしょう。私は気にしてませんので、あなたもお気になさいませぬ」

「そこらへん全然っ変わってないね！」

??

## # p h a s e — 7 「困む影」

IS学園の生徒会室。そこでは書類に埋もれている更識楯無が壊れかけのゼンマイ人形のように押印を続けていた。

「……はい、承認、承認……これも承認、承認、承認……」

小気味よく押印されるたびになる音に余計に楯無は機械的に作業を続けることになる。そもそも、この最新技術満載の学園でなぜこういった手続き絡みが未だに書類なのか楯無は理解に苦しむ。が、ちゃんと理由あつてのことと納得できないが、納得するしかない。

「記録抹消しやすいからって馬鹿じゃないの……こんな生徒の申請一つ一つまで……」

誰もいない生徒会室の中で楯無の声が虚しく響く。彼女の従者はとつくに引き上げているし、その従者の妹にして、楯無の妹の従者はそもそもサボリ。他の役員も今日は上がってしまったている。時計は20時を指しており、少なくとも学生がこんな仕事で残る時間ではない。

「……しぬ、つかれた、ひもじい、ねむい……うう、あしたはロシアの馬鹿が定期ヒアリングでくるし、簪ちゃん……あいたいよお……」

最愛の妹が脳内では可愛らしい笑顔で姉を迎えてくれているが現実はそのことはいえず、まず会ったとしてもジト目で睨まれるだけである。別に姉妹仲がこじれているわけではない。楯無以外の家族とはこじれているが、姉妹の間は問題ない。

問題ないのだが、その関係は本当に普通の姉妹だ。近すぎず遠すぎず、特段、仲が良すぎるわけでもない。むしろ、一方的に楯無がスキンシップをとるためウザがられているぐらいである。

「飛鳥ちゃんに頼んだ写真は送られてこないし……というか部屋忍び込んだらゴミ箱に捨てられてたし……どうして……」

飛鳥マコト。妹のルームメイトにして、妹の同級生。確かな情報筋から簪とは仲がいいと聞き依頼をしたが結果は失敗だった。なお、そもそも頼んだのはつい一昨日で、そんな即日で結果がでるはずもなければ、そもそも簪によって件のカメラは捨てられている。

「くう、諦めないんだから…お姉ちゃんは」

変なことをしなければいいのに、と簪は思っているが残念なことにこの姉には伝わっておらず、楯無は次なる計画を考える。

が、そんな極まった思考を中断するかのように生徒会室の扉がノックされた。

「……ん？こんな時間に……となるとあの子か。どうぞ」

扉が開き、書類越しに楯無はその姿を認める。見慣れた姿で、できればもっと早くからこの部屋にいてほしい存在だった。

「仕事を手伝いにきた…ってわけじゃないわよね」

入ってきた「彼女」は肯く。楯無はため息をつく。それが「彼女の素であり、最大の武器。人の懐にするりと入り込む才能だ。」

「……お疲れ様。じゃあ、教えてちょうだい」

楯無は席をたち、先ほどまでの疲れた表情などまるで演技だったかのように消し、口元で扇子を開く。

「——飛鳥マコト、レイラ・デュランダル。二人の関係」

そこにいたのはただ後輩のことを知りたいという意味で言っている学園の生徒会長ではなく……まるで、人間を駒としか見ていないような冷たい、機械のような存在だった。

「初めまして簪さん！私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ！よろしくお願いしますわ！」

「……よろしく……」

代表決定戦の翌週の昼、マコトはセシリアとレイラにも簪を紹介していた。が、簪の人見知りはそのままなのでまたしても簪の心が死んでいた。声が小さいことにセシリアは何を勘違いしたのか「もしやお加減が…」と心配してしまい、余計に簪は居心地が悪くなった。

「セシリア、彼女は少し、人との距離感をとるのに慣れていないだけですから、今は」

「あら、そうですの。ごめんあそばせ」

「友が失礼を。名字で呼ばれるの苦手とのことで、簪さんと。初めまして、レイラ・デュランダルです。よろしくお願いします」

察しのいいレイラの言葉が簪にトドメを刺しており簪は沈んでいた。マコトはまあいつものことだろうとそんな簪を放っておく。

「いやしかし、こうして昼一緒に食うの初めてだな、セシリア、レイラ」  
「ええ、一夏さん」

「そうですね。食事は楽しくとったほうがおいしいですから」

この場にいるのはマコト、箒、一夏、セシリア、レイラに加えて簪である。簪だけ組が違うが、つい先日の流れでそれからずっと簪はマコトに連れられて1組の席に混じっている。マコトの誘いを断らないあたり、満更ではないようだが。

「それで今日からクラス代表ってわけだけど特に何にもかわらなかつたな」

「クラス委員長のようなものだろうか？ 思えばクラス内の委員も決めていないからな。それが決まってから本番だろう」

「千冬姉に聞いたたら4月の間はお試し期間みたいなもんで、5月からクラスのそういうのとか決めていくんだとさ」  
「なるほど」

クラス代表となった初日の午前中、一夏はこれといって何かが変わることもなかった。むしろ、それ以外のことでは喜ばしいことがあった。

「それよりもだ。ようやく俺に外出許可が出た」

「うむ、耐えたかいがあったな」

「よかったね、一夏」

「ありがと、箒、マコト。早速週末地元に戻りたいと思う。家も心配だしな」

一夏の外出が許可された。それが何よりも一夏にとって嬉しい知らせだった。白式を受領したことにより最悪の場合ISの展開をすれば身を守れるというためだった。専用機所持者か教員の同伴が必須ということであるが。

幸いなことに千冬か真耶を連れていくのは容易なため、一夏は大してその条件は気にしていなかった。

「まあ、一夏さんは外出が禁止されていたのですか？」

「まあな。ほら、俺一応男性操縦者だし」

「一応…って…」

簪が一夏の曖昧な態度に呆れる。どれだけ自分が希少な存在なのかわかっていないのかといった具合だ。だが、マコトはそう思うのも致し方ないと思う。

「まあ、1組って女尊男卑の風潮ないし、みんな中学は男女共学でそういうのなかったみたいだからね」

「……一人も？」

「うん。オルコットさんやレイラもね」

「人の価値はその人が何を為したかで決まるのですから当然でしょう」

「私も、セシリアと同じです」

「………」

珍しいものを見るかのように簪は二人を見る。貴族といえど女尊男卑主義者もど真ん中なはずなのにこの姿勢である。驚きながらも、小さな違和感を感じる。

「…1組は特殊なんだと思う。他のクラスはそうでもない」

「どういうことだ？」

「……織斑くんは私たちのクラスもまだそこまでじゃないけど、3組とか、5組とかの生徒からは……」

「それはあの睨んでいる生徒たちのことか？」

箒が、簪の言う3組、5組の生徒なのかと食堂のある席からこちらを時折睨んできている生徒を指差して言う。簪は慌てて箒の手を握って下げさせる。その力は容姿相応に小動物のようで、箒は少しキュンとした。

「……ダメだよ……指差しちゃ」

「お、おう、そうなのか。しかし、あんなもの気にする必要もないだろう」

「そうだな。中学ん時もああいう感じの女子グループっていたぞ」

「あの人たちは、そんな生易しいものじゃないよ……」

「簪さん、どういうこと？」

マコトは気になったので簪に彼女たちが一体どういう存在なのか聞く。簪は言い淀むが、声のトーンを少し下げて話す。

「……あの人たちは、一夏くんの退学を狙ってる……」

「……そういうイジメをするやつ、学校によってははいるって聞いたことあるぞ」

「……ああ、いるな。私も遭遇したことがある」

「……まあ、どこの国にも卑怯な方がいるのですね」

「……政界では日常茶飯事です」

一夏の退学を狙っていると聞いてマコト以外のものたちが口々に思い思いのことを言った。一夏本人にすれば取るに足らない話で、箒はそういった類には正々堂々と叩き潰すことを心情としている。セシリアやレイラは大人の社会に触れているせいで、子供のそれはまさに兇戯に等しい。

マコトはそういったものに遭遇したことはないが、他人をそうやって害すことには腹が立つ。というより、実際中学生の頃に鈴音を巡って一夏と大立ち回りを演じたことがあるため、許せないと強い気持ちがある。

「一夏」

「なんだ、マコト」

「鈴音と似たようなこと自分がされたらどう思う」

「……ぶっ飛ばしてえな」

「けど、反抗したら？」

「今の社会だと俺がしよっぱかれちゃうのか」

マコトは肯く。つまり、一夏にはなす術がないのだ。勿論、世界で唯一の男性操縦者である一夏を退学にまで追い込もうものなら、とんでもない責任をやった側がとらされることになるだろうが、リスクと感情を天秤にかけて、感情を優先するものがかならずいる。そういった本物の「馬鹿」に一夏が反抗すればそれだけで彼女らの勝ちなのだ。

釣り針、または生贄。それが来るのを待っている。陰湿すぎて、一夏は余計に腹が立った。



「セシリアみたいに正々堂々戦えってんだ」

「そう言って頂けるのは嬉しいですが、誰しもがそうとは限らないでしょう。力無きものが群れ、囁き合うのは集団の常です」

「簡単に言うतो?」

「:そうですわね。弱いものイジメをするものたちはもつと弱いやつらの集まりということですよ」

「なるほど、わかりやすいな。サンキューセシリア。気にしないことにするわ」

「それでこそ、ですよ。一夏さん」

まあ、一夏なら気にしないだろうなとマコトも箒も、レイラもそれ以上は何も言わなかった。簪は「本当に大丈夫なの?」となおも食い下がるが、一夏が「平気だ」と言い切ってしまったので話はそこで終わった。

マコトは簪の今の行動に、友達想いで、優しい子なんだなと彼女の認識を深める。そもそも、マコトは簪とそういった話を一切部屋でしないが彼女の私物の殆どが「戦隊ヒーロー」や「ロボットアニメ」のDVDである。ちらりとマコトも見したが、勧善懲悪なものが多く、簪の正義感もそこそこ強いのだろう。

「むしろ、簪。私はお前が心配だぞ」

「し、篠ノ之さん:~?」

「そんな一夏というがお前は大丈夫なのか?」

「確かに:~:~:簪、大丈夫か?」

「そうだよね:~:簪さん、大丈夫?なんか被害にあつてない?」

箒、一夏、マコトからいきなり身を案じられ簪はビクツとしてしまうが、彼女は「大丈夫」と答えた。本当なのか、と箒が問えば納得するしかない答えが返ってくる。

「そもそも私、代表候補生で所属先もただの企業じゃなくて半官:~:国が絡んでる企業だし、お姉ちゃん:~:姉はこの生徒会長だし」

「楯無さんだね」

「うん」

人見知りで、静かな簪だがその立場はセシリアと同じく国家代表候

補生であり、後ろ盾である所属企業も日本ではトップのIS関連企業、倉持技研である。おまけに、姉である楯無はこの学園の生徒会長。手を出せばどうなるか、嫌でもわかるはずだ。

「そういうわけで、私の心配は必要ない。むしろ、もっとも危ないのはマコトさん、あなただよ」

「え？あたし？」

「篠ノ之さんみたいに、篠ノ之束博士の妹かもしれないとか「妹だぞ」……私と同じように代表候補生でそもそも外国のVIPのオルコットさんやデユランダルさんと違って、マコトさんには何にも後ろ盾がないでしょ」

言われてみれば、とマコト以外が思った。束とのコネクションを知らない人々から見ればこの中でマコトがもつとも危険だった。

「あたしをダシにして、一夏が何かされるかもしれないってこと？」

「うん」

「ふざけんな……そんなこと、俺も千冬姉も、きっと束さんも許さねえぞ」

「ああ。私も許さん」

幼馴染み二人は本気で怒りを覚え、そう言った。マコトはなんとも頼もしいものだと思っただが、どうにも束の存在のせいで危機感が湧かない。

「…もし、マコトに手を出すのでしたら、私はその者を許さないでしょう」

「レイラ……」

レイラがゾツとするような表情でそう言い、一夏も簪も、簪も息を呑んだ。セシリアは「レイラは友達想いですからね」と微笑んでいる。「まあ、そういうことですわ。簪さん。そこらの有象無象など取るに足りません。このオルコット家当主、セシリア・オルコットといれば問題ありませんわ」

「……………じゃあ、いつか……………」

「ええ、万事お任せくださいませ。ということで一夏さん。よろしければ週末のお出かけ、私が同伴致しましょうか？」

「え？いいのか？忙しいと思うぞ。俺の友達の家に行ったり、実家の掃除とか」

「それぐらいお付き合い致しますわ」

「悪いな」

「なら、私もお供しましょう、一夏さん」

「レイラもか？」

「ええ。セシリアだけだと不安ですので」

「レイラ、どういう意味ですの」

「チエルシーから毎日電話が来ているセシリア一人に護衛を任せるのは不安ということですよ」

「なっ、そ、それは」

「チエルシー？」

聞いたことのない名前にマコトが反応する。「セシリアの秘書を兼任している家政婦…メイドさんです」とレイラが応える。

「へえ、セシリア、メイドさんいるのか」

「ええ。当然でしょう。そもそも、こんな長期で屋敷を離れるのはこの学園に在籍している間だけです。だから普段は彼女たちと過ごしていきますわ」

「本当に当主なのだな……」両親はどうされているのだ？もう隠遁されているのか？」

箒の何気ない質問に、レイラがあっ、と口を開いた。箒はすぐにまづいと思った。その反応でだいたい何がどうなっているのか察したからだ。

「レイラ、そんなに気にする必要もなくてよ。箒さん、私の父と母もうこの世にはいませんの」

「……っ…そうか、すまない。失礼なことを聞いた」

「まさか、そんなことはありませんわ。もう気持ちの整理もついていますし、私には使用人という家族もまだ残っていますの。悲しんでいる暇ありませんわ」

おーっほっほっ、とまたしても高笑いをあげるセシリアに本当に気にしていない様子が見て取れ、箒は安堵した。ここで話を切れればよ

かったものを一夏が余計にも口を開いた。

「そうなのか。俺も実は両親いなくてさ」

「そうなんですの?」

「ああ。物心つくころには千冬姉しかいなくて、千冬姉は『家族はお前と私だけだつて』ずっと言われててさ」

とんでもない厄ネタに全員が口を閉ざした。あの千冬が本気でそう言っているのが簡単に想像でき、そこまで言うということは相当なことがあつたと察してしまう。

「……ま、まあ、一夏はほら、千冬さんどころか近所みんなに見てもらえたし、寂しくなかつたよね」

「そ、そうだな。姉さんや、五反田の家族。あと話に聞く鈴音というやつもいたんだろう」

「おう!ほんとあの町つてみんな親切だよなあ。東さんも受け入れてたし」

なんとか空気を元に戻し、マコトと箒はため息をつく。一夏の家族関係の話はタブーであり、いつもこうだった。

「あら、そろそろお昼休みも終わりますわね」

「そうですね。皆様、食事はお済みで?」

セシリアとレイラの呼びかけに全員が時計を見てもうそんな時間なのかと気がつく。5人はそのまま食器を片付け、それぞれの教室へと戻っていくのだった。

あつという間に時間は過ぎ、その日の放課後、一夏は教室に残って談笑していた。

「それにしてもまさか校庭にクレーターつてそんなボコボコできるもんなんだな」

「あれは隕石降ってきたみたいだったね」

午後の授業で、整備課の見学を行う際に途中で通った学園の校庭が小規模なクレーターでボコボコになっているのを一夏たちは見たのだ。真耶がそのクレーターの原因を笑顔で生徒たちに回答しており、その内容は「学園の整備課で授業がてら作っている機体の飛行試験の

結果ですね！」というものだった。アリーナにも負けていない大きさの校庭の三分の一がクレーターだらけな時点で、その試験機に乗っていた人間が生きているのか疑うレベルだ。

「まあ、その後の整備課もすごい施設でしたわね。さすがはIS学園といったところでしょか。最新の機器が満載でしたわ」

「セシリアの言う通りですね。イギリスの研究機関でもないようなものがほとんどでした」

IS学園の整備課はそれこそ全世界のIS関連施設の中では最高峰の設備が用意されている。それこそ、量産型コアを利用した整備用のIS。EOSと呼ばれるISに代わる陸上専用パワーダストも整備用に利用されていた。他にもISを安置する整備用ハンガーにはISを置いただけでスキャンする機能がついていたり、簡単な損傷であれば自動的に整備班がやらなくても修理してくれるハンガーなどもあった。

マコトはそのほとんどが束の研究所で見たものであり、おそらくこつそりと束が協力しているのだろうと察した。

「そういうばさ、あの奥にあった水色の打鉄っぽいのはなんだったんだ」

「ありましたわね、そういうえば。あれも学園の機体なのでしょか」  
一夏が言ったISはこの場にいる五人が見たものだった。水色の打鉄に近いシルエットをしたISで、ただし打鉄にしてはスッキリとした印象でどちらかといえば欧州、欧米製のISのような機能的な形状を持っていた。

マコトはあの機体に心当たりがあった。それは簪の語っていた彼女の開発が難航しているという専用機。打鉄の改良型と呼ばれている機体だ。何故学園にあるのかはわからないが、設備からして進んでいるこちらのほうが開発をしやすいからなのだろうか。

「わからないものをあれこれ言ってもしょうがないだろう。それよりも一夏。来週にはクラス代表戦だぞ。大丈夫なのか？」

簪が話を切って一夏にそう告げる。彼は困ったような顔をして応える。

「いや全然準備できてない」

「何をやっとするんだ」

「しようがないだろ！全然アリーナの予約とれないんだよ！」

これは一夏の言う通りで、彼が予約を入れようとすると何故か決まってアリーナの使用時間が全て埋まっているのである。おかげで未だに彼が出来ているのはイメージトレーニングだけだ。

「一夏さん。白式には搭載されていませんか？イメージトレーニングモードは」

「なかったよ。というか、倉持技研だっけ？白式作った。そこに聞いたら白式は零落白夜をそのまま継承させるために零落白夜でいろんな容量食い潰してて、制御系のシステム以外は雪片しか詰めてないんだと」

「なんというか……ひどく実験的なISですな……」

レイラが残念なものを見るような目で一夏の左腕についている白いガントレット……白式の待機状態を見た。なお、マコトは知っているが実際には零落白夜を隠蓑に白騎士から暮桜までのデータを全部内包していて容量がなくなっているのである。つまり、単純に3機分のISのデータが白式の中にはあるのだ。

流石の規格外である白騎士コアも、3機分の膨大なデータを内包するには容量が足りなかった。

「困ったね、これじゃあ一夏が全然ISに乗れない」

「授業で乗っても一瞬だしな」

「千冬さんには相談したのか？」

「ああ。けど申請があつてアリーナは予約されてるし、いっぱいになつたらしようがないんだと」

「むう……」

箒がうなるのも止む無しで、現状打開策がない。

「……………いつそのこと、セシリアの訓練時間に混ぜてしまうのはどうでしょうか」

レイラの提案にセシリアが「なるほど」と手を叩いた。

「どういうことだ？レイラ」

「一夏さん。セシリアが代表候補生でかつ、試作機の運用を任されていることはご存知かと思えます」

「ああ、そうだな」

「ですから、セシリアには特別な訓練…テスト運用の時間が学園より与えられています」

一夏や箒がおおと声をあげる。マコトはレイラのそれは妙案だと思っただが、気になったことがあった。

「レイラ、それ一夏が…というより、『日本』のIS乗りが参加しているものなの？」

「確かに…レイラ。私の時間内では試験装備の使用もあります。一夏さん個人はともかくとして、彼の所属は他国です。難しいと思います  
が」

「マコトとセシリアの懸念は最もです。ですが、予定ではこの先三週間は現状の装備の慣熟訓練だけです。そして現状の装備は先週土曜の模擬戦で使用した第二種兵装。既に公開しているものですから…」

「ああ…それならば、可能性はありますね」

機密に抵触しないものであれば問題ない。戦闘機動やビットのことは機密だが、それらは学園に入学した際サインする機密保護の包括書に含まれるレベルのもので、現時点なら一夏の訓練参加が許される可能性が高い。

何より、レイラの『任務』としても男性操縦者のデータを取ること  
は彼女のことを突いてくる本国の連中を向こう半年以上は黙らせられるぐらいの価値がある。

「(マコトには悪いですが、戦闘データぐらいはいずれ世界に流れるでしょうし早いか遅いかの違い。それに、最終的に参考にならないというのがオチでしょう。彼の機体が『織斑千冬』と同じコンセプトな時点で)」

「そうと決まれば早速問い合わせましょう！」

「え、どこでか」

「ええ、即断即決。これが大切なのですわ」

セシリアは一夏の困惑をよそに、もう本国へ衛星電話をイヤーカフ

スになっている待機状態のブルー・ティアーズを使用してかけ、繋がる  
ると流暢なイギリス英語でレイラの提案した内容を伝える。マコト  
は前世の公用語が英語に近いものであったためなんとなく内容がわ  
かったが、箒と一夏は何もわからなかった。日本の受験英語はIS学  
園の日本人向けテストにも採用されているせいである。

「――よし。一夏さん、許可が取れましたわ」

「あっさりいったな」

「レイラの読み通りでしたわ。今装備しているものは近いうちに公開  
するそうですから、それまでクラスの皆さんが黙って頂ければただの  
先行公開程度だそうです」

「よかった。これで一夏も訓練できるね」

「ああ。時間もなし、悪いけどセシリア、いろいろ教えてくれると助  
かる」

「いいでしょう。ただし、私はスパルタですわよ」

「臨むところだ」

一夏は厳しい指導に慣れているためセシリアの言葉にむしろやる  
気を見せる。ただ、実際には別の意味で“過酷”になるのだが、今の  
一夏はそんなこと全く考えていない、肉体的に辛いのだろうかと思っ  
ていた。

「あとはセシリアと一夏さんが頑張ってどこまでいけるか、という  
ところでしょうか」

「そうだね、レイラ。オルコットさん、一夏のこと、お願い」

「セシリア、私からも頼む」

「ええ、お任せください。最低限代表候補生に必要なものは叩き込  
んで差し上げますわ」

「……………それ、二週間でいけるもんなのか」

「厳しいの、お望みなのでしょうか？」

一種サデイスティックともいえる微笑みに一夏はゾクつとするも  
強がるように笑みを浮かべる。レイラはセシリアの“教え方”を  
知っているためこれはフォローした方がいいだろうと思っただ。

マコトと箒はセシリアに任せておけば大丈夫だろうと判断して、ひ



とまらずは安堵した。

そのまま放課後を過ごし、夜。就寝前にいつものようにマコトは簪に今日の出来事を話していた。すると、一夏のアーリーナのくだりで簪がある可能性をあげた。

「その、一夏さんが予約出来ない理由、例の3組とかの生徒のせいかも」

「え? どういうこと?」

「……トイレにいるとき聞いたんだけど、この時期は本来空いてるらしくて、アーリーナの予約はとりやすいらしいの」

「そうなの? でも、一夏はいっぱいだって」

「うん。だから、今はクラス代表しか予約できない一年生じゃなくて、二年生に予約を取らせてるんだと思う」

マコトは簪の推測にまさか、と枕元にある学内情報用の端末を起動させ、アーリーナの予約状況を見る。確認すれば本当に二年生からの予約が多かった。だが、1組以外のクラス代表の予約時間はまるで「そこだけ空けられている」かのように入っている。

「あれ…でも4組の予約もないよ?」

「……私も、これのターゲットにされてるみたい」

「ええ!? 簪さん、嫌がらせはされないって」

「これぐらいなら『偶然』で片付けられる。いや、苦しいけどさ。ルール上はなんにも間違っていないわけだし」

マコトは歯噛みする。ふざけるな、と。彼女の中の既に死んだはずの『怒れる瞳』が蘇りそうになる。

「私の場合はそもそも機体調整がどう足掻いても代表戦当日まで間に合わないから予約が取れようが取れまいが関係ないんだけど」

「そうなんだ…でも、やっぱりこれ、あたしは許せないよ」

「ここは我慢すべきだと思う。それに、一夏さんはオルコットさんと一緒に訓練できるんでしょう? 彼をハメようとしてた連中からすれば青天の霹靂だと思う。なにせ、代表候補生が教導してくれるんだもん」

結果的に、現役で試作機を任せられるパイロット…もといIS操縦者と訓練をともにできるのだ。マコトから見てもいい環境を用意できていると思う。であれば現状は問題ない。だが、既に釣り糸が垂らされ、針が漂っているのは間違いない。

「……こういうの、ここからエスカレートするよね」

「……たぶん……マコトさんも、気をつけて」

「気をつけるけど、何をされるやら……」

陰謀の類は前世から不得意で、こういったものはレイ…レイラの得意とするところだ。マコトは明日、レイラにこのことを相談してみようと思いい、眠りに落ちるのだった。

## # phase—8 「悪意と姫の傘」

セシリアと一夏の訓練が決まった翌日、早速マコトは朝食の時間から面倒なことに巻き込まれていた。

「うわっ！」

朝食を受け取り、トレイを持って簪の待つ席へと向かおうとしたところで背後から誰かがぶつがり、全くの無警戒だったマコトはトレイの上に載せていた朝食の焼き魚定食を食堂の床のうえにぶち撒けてしまった。

当然、食器類も割れて大きな音を立て、周囲の注目を浴びる。

「ああ！大丈夫かい!？」

慌てて食堂の職員である割腹のいい女性が受け渡し口から飛び出してマコトに駆け寄る。

「あたしは大丈夫です。ただ、ご飯が…」

「気にしないでいいよ。またつくりゃいいだけだから」

「すいません…」

「それより今この子にぶつかった子、どこいったんだい」

マコトは周囲を見渡すが確かにぶつけられたはずなのにそれらしき生徒はいなかった。こぼしたものを片付けだした女性が見ていたはずだが、どういふことだとマコトは首を傾げる。

騒ぎを聞きつけて、簪も珍しく駆け寄ってくる。マコトはそういえば彼女が走るのを初めて見たかもしれないと呑気なことを考え、簪の走るフォームが意外にも綺麗で洗練されていることに気が付く。内向的、とはいっても彼女は代表候補生で、それなりに身体能力もいいのかもしれない。

「マコトさん…!?!どうしたの!?!」

「あー、混雑してるからぶつけられちゃって」

「そうなの…?？」

「いいや、ありゃわざとだよ」

マコトは簪に心配させないよう言ったが、食堂の女性はそう断言する。

「茶髪の長い髪の子だったね。ぶつかつたあとスツと列の合間を通つて消えちゃつたけど。今度見たら叱つとくよ」

「なんかすいません」

「謝るんじゃないよ。ほら、同じの出してあげるから、あっちの受け口に行きな」

女性に促され、マコトは教員用と書かれている受け渡し口に向い、そこで別の食堂の厨房担当者から同じ料理を貰う。今度は誰にもぶつけられることもなく簪の取つていた席につくことができた。

「いやあ、早速きたね」

「そんな呑気な態度してる場合じゃない」

なんとか場の空気を緩ませようとしたマコトだったが、簪の真剣な表情に固まる。正義感の強い簪がこうしてマコトに実害が及べばこうなってしまうのは想像できていた。

「そうは言っても……あたし、こういうことされるの初めてだし」

「私はある。だから、実際に起きたらもう止まらない。銃の引き金と同じだよ。一回引いちゃえば、躊躇うことがなくなる」

本気で心配そうな表情で簪は言い、マコトは彼女の言葉に「ああ……」と納得する。前世でそれは嫌というほど実例を知っていた。それはいじめられた経験などではなく、例えば自体だ。地球連合軍が核を当たり前のように撃つたり、所属していた軍が奪取した戦略兵器を簡単に連射しようとしたり……引き金は初めて引くときが異様に重く、そのあとはまるでオモチャのように軽い。

あまりにスケールが違う経験だったがマコトはこれから更に激しくなるのかと困惑するしかない。

「簪は、その……言いづらかったらアレだけど、前はどうしたの？」

「お姉ちゃんに助けてもらった」

「……た、楯無さんに？」

「昔はちゃんと私を見てくれていたから……って、私の話はいいの。とにかく、こういう時は頼れる人に話すのが一番良い。マコトは織斑先生と幼馴染みなんでしょう？先生に相談して解決するなら一番良い」

「千冬さんか……」

千冬に相談すれば確かに助けてくれるだろう。だが「織斑先生」としてはどうだろうか。今の状態では「証拠が足りん、動けない」で彼女はマコトを助けたくても助けられないだろう。突撃バカのように見えて、千冬の真面目さはそういうところで発揮されてしまうからだ。

だから千冬に頼るといふ選択肢はなくなる。では東は……とマコトは考えるが即座に却下した。頼れば確かに即時マコトへの嫌がらせは治るだろう。それどころか一夏へのものも。しかし、犯人たちはおそらくこの世界から社会的にも物理的にも「抹消」されるだろう。

まだマコトが小学生の頃、箒が僅かな間いじめられていたことがあった。それを一夏と一緒に助け……る必要もなく箒自身がいじめてきた相手を締め上げていたが、大抵そういつたイジメを行なうものは親の前では「いい子」であり、被害者であるはずの箒が逆に学校側と加害者親子に追及されることがあった。

当然、箒は否定し、学校に呼ばれた箒の父もありえないと言うが学校側からすれば証拠もなく先に言ったもの勝ちだ。箒たちは圧倒的に不利だった。

が、箒のそんな状況をふと東が聞いた翌日、加害者家族は突如として町から失踪した。殺人なども考えられたが全くそんな形跡もなく、まるでマリーゼレスト号のように夕食の準備がされている状態で誰もいなくなっていたという。

マコトは間違いなくそれは東がしたのだと思っっている、というより、東もマコトと千冬にだけは仄かしている。

——人間って自分の身に何かおきないといつまでも他人事だよね。と、加害者家族が失踪したその日に言ったのである。千冬もマコト、それで東を追及する気はなかったが、彼女本来の「人を人として見れない、他人がわからない」本性の末恐ろしさを感じた出来事だった。

今は多少、改善されているかもしれないがそれでもマコトが話せば同じことが起きる可能性が高い。東の理性という枷を外すのはあまりにも危険すぎる。

「マコトさん？」

「え？」

「相談できる人、いないの？」

「いや、まあ、その……千冬さんは難しいだろうし、他の人も……」

「デュランダルさんやオルコットさんは？」

「オルコットさんは今、一夏のこと集中して欲しいし、レイラをこれに巻き込むのも……同じ生徒だし」

「デュランダルさんの家柄的にまず大丈夫だと思うけど」

「そういえば、レイラって一体イギリスだとどれくらい偉いの？」

「……知らないの？」

「うん」

マコトはレイラがレイなことあつて、彼女の背景をよくは知らなかった。一夏たちが真耶から聞いた父親が政治家なこととそれなりの上流階級のお嬢様であることはわかっていたが。

「元ロイヤルファミリーだよ」

「……え」

「デュランダルさんのお母さん、タリア・デュランダル大佐は元英国王室の人で、軍隊に入ってそのまま王室から出た人なの」

「れ、レイラ、本当にお姫様だったの!？」

「そうだよ。だからデュランダルさん、向こうじゃ仲のいいセシリアさんとセットでこう呼ばれてる……『青の姉妹姫』って」

とんでもない事実のマコトは自身の置かれている状況など、どうでもよくなってしまうが「だから」と簪が話を戻す。

「デュランダルさんと一緒に行動してれば迂闊に手を出せないはずだよ。マコトさんは仲いいみたいだし、話せば協力してくれるんじゃないの？」

「まあ、そりゃあ……」

前世からの付き合いである。今世ではまだ一ヶ月も経っていないが、レイラはマコトに相談されれば断らないだろう。

「今はそれしかないのかな……」

「決定的なものを掴むまではだね」

何もずっと耐えろというわけではなく、どんどん大きくなっていく釣り針を逆に捕まえるまで待てばいいのである。マコトは待つことがあまり得意ではないが今はそれしかないと判断し、レイラに相談することを決めた。

朝のSHRが始まる前にマコトはレイラにだけこっそりと相談し、彼女はマコトのお願いを快諾した。

「あなたが困っているとなれば当然助けますよ」

「ありがとう、レイラ」

早速その日の朝から授業時間以外はかならずマコトの隣にレイラがいる状態となった。休み時間中も普段はセシリアの隣にいる彼女がわざわざマコトの席まで行くようになり、さやかがかなり驚いていたがレイラは得意の「私は気にしません、だからあなたもお気になさらず」で誤魔化し、当たり前のようにマコトの側に付き添った。

セシリアはレイラが先日のパーティー中にマコトと仲良くなったことを聞かされていたため特に気にせず、一夏は自身のことと目一杯、箒は何かが起きていることを察しているが、問題が大きくなったら剣を振るえばいいだろうと放置だ。

「それにしてもレイラが本当にお姫様だったなんて驚いたよ」

「聞いたのですか？」

「うん、簪さんから。ああ、もっと丁寧な口調話したほうがいい？」

「別にどうでもいいことですよ。今はただの一般人ですし」

昼休み中、珍しく屋上で買ったサンドイッチを食べながら談笑しているマコトはレイラに彼女の家のことを言っていた。レイラ自身も親のことを特に鼻にかけることもなく、むしろマコトの冗談に若干嫌な顔をしたぐらいである。

「人に頭を垂られるのは好きではありません」

「オルコットさんはそう言う感じだよ」

「セシリアはあくまでそういう“役目”だからそのように振る舞っているだけです。完全オフだと使用人にも敬語ですよ、彼女」

「そうなの？意外だね……」

「十代のセシリアが当主不在になった家を持ち直して、そのまま続けさせられているのは優秀な使用人たちのおかげもあるのでしょね」  
根は善人すぎるぐらいのセシリアの、レイラが語る姿は簡単にマコトの脳裏に浮かぶ。それに、ただ高慢なだけであればレイラ自身も彼女の付き人のように学園では一緒に行動していかないのだろう。

「そういうところ、『好ましい』のかな」

「ええ、とても『好ましい』ですよ」

微笑み、肯定するレイラに、マコトは本当に仲がいいんだなど僅かにセシリアに嫉妬してしまった。

「……それにしても、本当に悪いよ、巻き込んだじゃって」

「それは言わないでください。さっきも言いましたが、あなたが困っていたら絶対助けますから」

「頼もしいや」

「どンドン頼ってください、そういうものでしょう?」

「うん。レイラがいてくれるなら百人力だよ」

あはは、と二人は笑い合う。昼休みはそのままゆっくり時間が流れていき、なんの事件も起きなかった。

「そういえば、他のクラスの代表候補生ってどんなのがあるんだ?」

放課後である。夜のセシリアとの訓練もあるため、食堂でかなり早めに軽食をとっていた一夏と一緒に机を囲んでいるマコトたちにそんなことを聞く。

「まず簪さんがいるよね」

マコトがはや当たり前のように混じっている簪を指差す。一夏はそういえばそうだったと頷く。セシリアやレイラのように明らかに「私は特別です」といった空気は纏っておらず、限りなく普通な彼女に一夏は代表候補生であることを忘れていた。

「……まあ、影薄いし……」

「いやいや、簪、ごめんって」

「別にいい……」

拗ねる簪に一夏は苦笑いする。



「で、他は？」

「切り替えが早いですわね……」

「いいことだと思いますよ」

さらに簪の纏う空気が沈むが、1組生徒であるマコトたちはその程度のことは気にせず話を進める。一ヶ月も経たないうちに1組の中ではスルースキルの習得が出来ているため、話を進めたい時は容赦無くスルーができるのだ。

「他には2組のコメット姉妹でしょうか。カナダの代表候補生です」

「カナダ？コメット？そんなのいるのか？」

「双子の姉妹で代表候補生な上、飛び級していますね」

レイラは言いながら珍しく携帯端末を操作し、テーブルの上に置く。画面にはオレンジと菫色の髪をした双子と思われる少女が、華やかなドレスを纏ってマイクを握っている写真が表示されていた。

「オレンジのほうが姉のファニール、菫色のほうが妹のオニールです」

「なんだこれは。破廉恥な」

「箒、そこまで言わなくてもいいんじゃない」

「いや破廉恥だ、マコト。見てみろ、脇腹は空いてるし、指抜きの手袋にこの様子だと背中も空いているだろう。破廉恥以外の何者でもない」

生真面目さを発揮した箒がそんなことを言いつつ画面をガン見していることに全員がツツコミたかったがスルーする。箒がボケ出すと止まらなくなるためだ。マコトも画面のコメット姉妹の画像をよく見るが、非常に可愛らしく、おそらくはアイドルとして活動している時の写真なのだろうと推測することができる。

代表候補生は何かと広報的な仕事も多く、セシリアも雑誌の表紙になったり、校内には顔女の写ったポスターまで貼られている。

「コメット姉妹はアイドルとして有名だよ。私も何度かテレビで見たことがある」

「そうなのか、簪？俺見たことないや。箒は」

「私もわからん」

「マコトは？」

「うーん、ちらつと見たことがあるような」

藍越出身の3人は昔からあまりテレビを見ずに外ではしやぎ回っていたせいか今でもあまりテレビを見る習慣がない。そのため、コメット姉妹のことはよくわからなかった。

「まあ、アイドルなのはわかったけど、肝心のISとかはどうなんだ？」

「専用機が未完成らしく未だに母国ではアメリカ製のライセンス生産機に乗っているようです」

レイラの解説に簪やセシリアが頷く。事実らしく、マコトたちもそうなのかと思った。

「腕も…未知数ですわね。公式戦への出場もなし、非公式の記録もなし。簪さんもそうですが、まだ候補生としてはなり立てというのも大きいですわね」

未知数、といっても単純にコメット姉妹自体の記録がないためのもので一夏はならそこまで警戒する必要もないか、と判断する。だが、そんな一夏の気持ちを見破ったのかセシリアが付け加えるように言った。

「ただ、当然代表候補生となるということはそれなりの実力…もしくは何か特異性あつてのこと。侮るなど、ありえないですわよ」

「うっ、わ、わかつてるって」

釘を刺された一夏にマコトたちはくすりとする。ここで千冬がいれば強烈な一撃が一夏の後頭部入れられていたところだった。

「2組はわかった。なら残りの組は」

「3組、5組、6組にはいませんわね」

「え、そうなのか？じゃあ1年の代表候補生って……」

「ここにほとんど集まっていますわね。もしかしたら他にいるのかもしれないませんが、代表候補生であること公表していない人もいる可能性があります」

セシリアの言うことは事実だったが、確かめようがないため一夏の疑問はここまでで解消されてしまった。また、この様子ではクラス代表になっっている代表候補生は簪しかおらず、あとは一般生徒が代表に

なっている可能性が高い。

「……だから、相川や相沢が「勝ったな…」などと言っていたのか」「そういうことですわ箒さん。一夏さんは素人もいいところですがI S自体の性能はかなりのものです。もちろんあまりにピーキーすぎますが、素人と素人では性能差が如実に結果に出るでしょう」

「そして、一夏さんは剣術の心得がある様子。白式を扱えるようになればシンプルな装備ですからある程度は戦えるようになるはずす」

「いやでも、箒がいるだろ。箒って強いのか？」

「……それ、本人がいる前で聞く？」

全く箒がいつことなど気にしていない様子で一夏はセシリアたちに聞く。箒は当然「それはないだろう」と言った顔をした。

「じゃあ箒に聞くけど、お前強いのか？」

「私が強いつて自信満々に言えると思ってるの」

「いや……」

「……少なくとも、素人よりは強いよ……」

自信なさげに箒は言う。誰もフォローができない。先ほど話にあがったコメント姉妹同様、そもそも箒の戦っている姿やI Sに乗った姿を全員見たことがないからだ。

「代表戦で当たったら、負ける気ないから」

「宣戦布告か？いいぜ、受けてたつ」

「一夏、なんでそんないつもやる気満々なの」

「売られた喧嘩は買わないとな」

腰抜けと言われたらすぐに燃え上がりそうな勢いにマコトは「そう」と波風立たせずに流した。箒が頷いているため余計にだ。

「マコトさん、なんでこの人こんな好戦的なの？」

「ごめん……単純で……」

マコトは箒に謝罪しつつ、ここに以前は弾なども混じりヒートアップしていったのだが今はいないためマコトは感謝した。

「ま、となると警戒しなくちゃいけないのは箒か。といっても俺にできるのは剣振るだけだし、千冬姉みたいに強くないけど」

「そうですね。ですが、この私の指導を受ければ私とレイラ以外は相手にならなくなりますわよーおーっほっほっほっ！」

あまりの自信にもはやギャグのように思えてきた簪はヒクヒクと口の端を笑わせるだけだった。マコトはここに鈴がいれば間違いないくセシリアにツツコミを入れていただろうし、もつと楽しかっただろうと思ってしまう。さらに弾が入ればもつといい。

「あつ、あとさ、俺以外の男性操縦者って見つからないのかな」

一夏が入学して以来誰も気に留めていなかったことを口にする。世の中、前例があれば可能性を否定できないもので、全世界では男性操縦者探しのためにパッチテストのように起動テストが行われているのはニュースや新聞に載っていたが、こと1組の生徒は一夏に早々に慣れてしまったのでそんなことを気にしていなかった。

「一夏は他に誰かいてほしいの？」

「うーん、どうなんだろ。どっちでもいいのかな…ただ、俺が起動できたってことは他にもいるんじゃないかっていう疑問」

「ISには未知の領域が多いですから、ありえなくはないですわね」

セシリアの言う通りでISには未知の領域が多いため、結局のところやってみなければわからないということになってしまう。マコトは話を聞きながらも、何故一夏が起動できたかの理由を知っているため絶対に出てこないとだけ内心呟く。レイラは微妙に表情の硬いマコトに気が付くが、何も言わない。

「新たに見つかったところで、大勢には影響ないだろう。女尊男卑などと言いつつも、それが顕著なのはIS周りだけだろうからな」

「むしろISが更に普及するのではないのでしょうか。環境問題解決に大きく寄与する可能性が高いです」

「環境問題？ああ、そっか。排気ガスとかないもんなIS」

「少なからずスラスターで燃料は使ってるけどそれで出てくる空気汚染物質なんて超微量だしね」

「……まあ、見つかったら…大騒ぎだろうね、また」

宇宙空間での運用を大前提に作成されたインフィット・ストラトスであるが、束の作成したジェネレーターは無補給航行を目指し半永久

的にエネルギーを生み出すことができるものであり、その詳細はマコトですら知らない。開発者権限でのみ覗けるブラックボックス内に存在していることや、発生可能エネルギー量の限界こそわかっているがそれが何をどうやって稼働し、何からエネルギーを取り出しているのはわからない。

考えてみればよくそんなものから機動兵器を作ろうとするなこの世界は、とマコトは呆れに近い感情を抱く。ただ、束のことだから安全性自体は保証されたものであることは間違いないと信じている。彼女の近い人を大事にする姿勢はわかっているし、本当に危険であれば千冬にテストを任せていない。マコト出会う前、白騎士がまだインフィニット・ストラトスとしては不完全な頃は束一人で実験していたというのだから。

「見つかったらその人もI S学園にくるだろうね」

マコトの言葉に全員が頷く。その時はおそらく一人目がいる1組に来るだろうとも全員が考えた。

「ま、期待しないでおくさ。それでセシリア、今日の訓練なんだけどさ——」

話が今夜の訓練にうつり、マコトはふう、と少し話から身を引く。思考は今話のあった二人目のことだった。未だに原因は束もわかっていない。白騎士のログや世界中のI Sのログを探しても起動時のスキャン自体はしているが、男性とわかるとそこでI Sは起動を停止し、そもそもOSすら立ち上がっていないのだという。I Sの基本システム周りは束が配布したコアに初期から搭載されているもので、束自身がその後、ある企業に潜入してブラックボックス以外の周辺システムを解析したかのように作成し、コアの初期化をしてもコピー&ペーストで復旧可能なようになっていいる。

そのシステムがダメなのかと束は考えていくつも違うOSや起動シーケンスのプログラムを変えたりしたがどれも効果がなかった。となればブラックボックス：束からすればAI本体やジェネレーター部分に原因があると探っているのだが成果は出ていない。開発者なのに開発品に振り回されているあたりはいくら天才といえど変

わらないようだった。

とはいえ、二人目の登場はそれこそ一夏がもう一人いるぐらいでないと現状ありえず、もし現れればそれは何らかの無理か、嘘がある。マコトはそう思ってもし現れれば注意すべきだろうと思った。

## # p h a s e — 9 「手続きは大事」

悪いことは連続して起こるもので、セシリアと一夏の訓練が開始された翌日の朝、SHRで千冬の口から容赦のない言葉がマコトたちに告げられた。

「気がついている者もいると思うが、オルコット、デュランダルは本日欠席だ。今週末には戻れると思うが彼女らは本国から緊急の呼び出しにより一時帰国することになり早朝学園から出ている。呼び出しの内容は学園にも通知されていない。わかっていると思うが詮索はしないこと」

セシリアとレイラの緊急帰国。唐突なことに1組生徒全員がついていけない。特に一夏の受け衝撃は計り知れない。彼は昨晚のセシリアの指導を思い出す。非常に論理的すぎて分かり辛すぎたが、レイラがセシリアの言いたいことを一夏レベルに翻訳し、結果的に一夏はたった一晩でスムーズな飛行と歩行、更にはかなり手加減しているとはいえセシリアの射撃を回避することが出来ていた。

見違えるようになった動きに一夏は確かな手応えを感じており、これならクラス代表戦で簪とぶつかっても、戦いにはなるのではないかと思ってしまうほどだ。

そんな、可能性を育むための場がいきなり失われた。

千冬も一夏の事情はわかってはいるためかなり心苦しく、表情には一切出せないが本当は彼のことを励ましてあげたかった。

「……これが大人になるといふことなのか……?」

まだ、彼女は24歳。早熟かもしれないが、まだ心の隅には感情を優先したい、弟を姉として守りたい、という気持ちが訴えかけてくる。

そんな千冬の葛藤を全く察しているはずのない箒が突如拳手した。

「織斑先生」

「……なんだ、篠ノ之。イギリスの二人のこの質問は受け付けられないぞ」

「いいえ、二人のことではありません。一夏……織斑のISの練習についてです」

「個々人の自主学習については感知していない」

「アリーナの予約時間がまるで先回りしたかのように潰され、我々1組だけが予約できていません。これについて、思うところはありますか」

箒も、簪のようにアリーナの不自然な予約状況を感じ取っていたのか、席を立ちハッキリと告げた。彼女の言葉に教室がざわつき、中には実際に端末をSHR中だというのに開き確認して「本当だ」と言う生徒もいる。

マコトは箒ならば言うのと、真つ直ぐに千冬を見る彼女の姿がとても凛々しく見えた。

対する千冬は、あくまで教師としての話をする。

「アリーナの予約状況については全て正規の手順で行われている。承認は生徒からまず教員に行われ、生徒会が書類確認を最終的に行い、データベースに反映される。最終確認を行う生徒会役員、特に実際の承認を行う生徒会長は国家代表だ。立场上そういった不正などに加担することはまずできない。した場合はIS学園側が所属国に資格なし、と通告できるからな」

「なるほど、非常に性善説に乗っ取ったシステムですね」

「篠ノ之、何を聞きたい」

「では無礼を承知で申し上げます」

まるで武士のような、抜身の刀のような周囲を威圧する気を発する。彼女の周囲の生徒たちが無意識に体を引かせる。マコトですらも思わず気圧されるような気迫だ。箒の真面目さは当然、一夏の置かれていた状況を許さない。まだ昨日まではセシリアやレイラのおかげもあり、実質一夏がなんの被害も受けていないために我慢していたのだろう。

「疑わしきは罰せずなどバカも休み休み言ってください。実際にこうして陰湿な行為が起きているのだから対処しなくて何が教師ですか」

ざわっ、と1組の生徒たちがする。あの千冬に、バカ、などと言いつつ切った箒に信じられないといった目を向ける。最強「織斑千冬」に対してというわけではなく、教師として厳しい織斑先生に、そんな無礼



を承知でなどつけても、言っではいけないような言葉を箒は言ったのだ。

先ほどから千冬の隣に控えている真耶は「篠ノ之さん、お、落ち着いて」と顔を青ざめさせながら箒をとりなそうとしているが、箒は完全に無視している。

「……篠ノ之」

「ッ……！」

解放されたのはまるで見られただけで射殺するような怜悯な瞳。過去、今は無き篠ノ之家の道場で相對した時に千冬が見せた、剣鬼としての殺人的な気迫。正面にいる一夏でさえも硬直し、隣の席の生徒は失神しかけている。

箒は過去にも受けたことがあるためか、なんとか正気を保っていた。

強張りながらも引かない箒に千冬は内心、感謝していた。体裁上こうして威圧しているが、箒の真つ直ぐな物言いは本来「千冬が姉として言いたかった」ことだ。千冬として、このアリーナの予約がおかしいことは察している。実際に申請に来た女生徒たちの様子も知っている。

それでも言えない。仮初とは言え、彼女は教師なのだから。箒が憧れたように、彼女も真面目に役目を果たすためにここにいるのだから。

「その物言い、普通であれば罰則処分ものだが……いいだろう。諸君、今篠ノ之の言った通り、不自然なアリーナの予約があることは学園側も把握している。だが、先ほども伝えた通り正規の手順で全て予約されている。よって、学園としては動くことはできない」

「先生！」

「逸るな、篠ノ之。手続きというのは大事でな、急ぎの時も怠つてはいけないものだ。……山田先生、アリーナの時間外での使用許可証、オクルットから取下げはありましたか？」

「え!? ひゃい!? あ、ああ! 時間外ですね! 確認してみます!」

真耶が慌ててタブレット端末を操作し、何かを確認する。すると、

真耶が何かを見つければあつとした笑顔を見つけた。

「あ、ありました！オルコットさんからの許可証は取下げされていません！来週までの利用者氏名そのままです！」

タブレット端末の画面を教室内に見えるように真耶はひっくり返し、生徒たち全員がその画面を注視する。一番前の席に座っている一夏は画面の内容がよく見えた。そこにはアリーナの使用時間と、使用する予定者の名前が記載されていた。

——以下の者に第三アリーナの時間外使用を許可する。

——1年1組 セシリア・オルコット、織斑一夏

「……う、これは…!？」

箒の困惑に千冬は人の悪い笑みを浮かべる。

「本来、時間外使用はオルコットのような新型機を預かっている代表候補生が本国からの推薦もあり行えるものだ。当然学園に3年間もしてもらわなければならないから、操縦者に預けている新型機も3年間開発をしないわけにはいかない」

千冬という言葉に全員がそりやそうだと納得する。

「織斑の場合は代表候補生でもなく、少し立ち位置が浮いてる現状ではできない手続きだが、一昨日の晩にオルコットから申請の変更が行われていた。本国の許可も取り付けてあり、正規の手続きであるためスムーズにこれは受理された。通常、本人がいなくなる前にこの申請は取り下げられるが、取り下げられなかった場合は卒業を除いて失効しないものとなる」

一夏は一気に語られた内容を頭の中で反芻して状況を整理する。セシリアとの練習はちゃんと学校側に許可をとりつけていたということ。本人がいなくなっても、その時間はなくなっていないということ。

「つまり、ちふ…織斑先生！」

「ああ。織斑は時間外使用が未だ可能というわけだ」

一夏がよっしゃ！っとガッツポーズする。箒はバツが悪そうな顔をした。

「知っていたんですか、先生は」

「いや、篠ノ之に言われなければ後で確認して言っていただろう。この許可証自体は知っていたがな」

「……そうですか」

「ということだ。諸君らは何も気にせず、いつも通り授業を受ければいい。それと、篠ノ之。教員への暴言は以降慎むように」

「申し訳ありませんでした」

「わかればいい。以上でSHRを終了する。1時間目の授業は移動教室で担当教員は私だ。遅れるなよ」

教師二人が出ていき、直後に1組の生徒全員が一夏や箒の周りに集まる。

「織斑くん！まさか虐められてるの!？」

「アリーナの予約、これひどいね」

「おりむー、だいじょうぶー？おかし食べるー？」

「う、うおっ!?みんな落ち着いてくれ!」

「篠ノ之さん！さつきすごいかつこよかったよ!」

「まさか織斑先生にあんなこと言えるなんて!」

「まるで侍みたいだよ!」

「い、いきなりなんだ!私ほただ言いたいことを言っただけで!」

千冬によつて集められた「善良な」少女である1組の生徒たちは当然今の話を聞けばクラスメイト、仲間のことが心配になる。マコトはこの状況を眺めて、一体全体どうやってこんな人がいい人たちを千冬が選別したのだろうかと思議に思う。

「すごかったね、さつきの」

「そうだね、さやか」

囲まれる二人を遠巻きに眺めるマコトの前に座っているさやかが苦笑いしながら言った。

「さやかは一夏のとこいかないの?」

「まあね。アリーナのこととか聞いて、腹が立つけどこうして大丈夫だったわけだし」

「そうだね」

「マコトは知ってたの?あの話」

「ううん、全然。でも、話聞いてよかったよ」

レイラに助けられたな、とマコトは思った。このセシリアとの時間外訓練はレイラが発案したものだ。流石に緊急で呼び出されることまでは読んでいなかったであろうが、千冬の語る申請までの流れをみるに申請は通りやすいが、簡単には取り下げられないものであることがわかる。

教官役がいなくなってしまうたが、何も出来ないよりは遥かにマシだ。

「それにさ、なんだか織斑くんって困難にぶつかっても壁を壊していつちやいそうじゃん？」

さやかの一夏像に思わずマコトは吹き出しそうになる。よく的を捉えている言葉だったから。

「そうだね、さやかよく見てるね。一夏はさ、言い方よくないけど馬鹿なんだよ。でもさ、だから、土壇場では真っ直ぐなんだ。この前のクラス代表決定戦の時も、そうだったでしょ」

「ああ、あれすごかったね。剣でチームを切るなんて漫画かアニメかと思った」

「ほんとね」

さやかとマコトは笑い合う。先ほどまでの緊迫した空気はとつくに教室ないから雲散し、1組の生徒たちはいつも通りの1日を再開したのだった。

昼食時、簪と合流したマコト、一夏、箒の3人は同じテーブルに座った。今日は珍しくテレビがかけられている柱の近くだった。

「あれ、二人は？」

「緊急で呼び出されたって、簪さん」

「緊急？ そうなんだ」

セシリアたちがいないことに簪も驚いたようだが、代表候補生としてそういったこともありえるためそれ以上の反応はなかった。それぞれが椅子に座り食事を取り始める。セシリアとレイラがいないため妙に食事中は静かだった。

そのせいか、頭上にあるテレビのニュースから流れてくる音声が入りによく聞こえた。

『次のニュースです。昨晚、イギリスでISによる襲撃事件が発生し、イギリス軍所有の試作型IS一機が強奪される事件が発生しました』  
4人がバツ、と顔をあげる。それどころか、食堂内も今のニュースを受けて静まり返っていた。

『強奪されたのは現在イギリス代表候補生であるセシリア・オルコットさんが専用機としていたブルー・ティアーズの同型機、サイレント・ゼフィルスで、公開はされていない機体でしたが、イギリス軍は情報収集のため今朝、写真などを公開しました』

画面には人が載っていない駐機状態のISが映される。セシリアのブルー・ティアーズによく似た紺色の機体で、違いは非固定ユニットと思われるバインダーが大きく一対になっているところか。マコトは形状からしてビット兵器が表面に装甲板のように付けられているように見えた。

「セシリアたちが呼び出されたのはこれなのか」  
「だろうな、一夏。しかし、強奪とは…」

ISを強奪するなど重大事件であり、テレビのキャスターは「イギリスは安全保障にも関わりと欧州連合への警戒の呼びかけなどを」と伝えている。マコトはこの事件に、前世で起きたG強奪事件を思い出していた。一度目はまだ「シン」が子供だった頃、祖国のコロニーが襲撃されて4機が強奪。二度目は自身が所属した軍の3機が強奪され、被害側の当事者だった。

「(…:ファントム・ペインみたいなのがいるのかな…?)」

ファントム・ペイン、それは幾度もマコトが前世で刃を交えた表向きには非正規部隊の地球連合軍の特殊部隊だった。非人道的な実験で生まれた強化人間を主力に様々な極秘裏な作戦を遂行する、ある種のスペシャリスト集団。そのようなものたちがこの世界にもいて、こんな事件を引き起こしているのか。全てはマコトの想像だが、幼少期の白騎士事件の時にも彼女は血のバレンタインのようだとあのミサイル群を見ていた。

「ミサイルが日本に撃たれた時もそうだけど、こう、たまに物騒だよなあ」

「……日本が特別平和なだけだよ」

「簪の言う通りだな。我々もISに触ってるんだ。気をつけないとな」

「気を付けるって言っても」

「一夏。知っていると知ってない、構えてないと構えてるじゃ違う、そうでしょう?」

「それもそっか、マコト」

「それにしても、こんなことが起きて二人は戻れるのか?」

「…むしろ、戻るよりIS学園にいた方が安全だからすぐ帰ってくると思う。ここにはオリジナル、量産型合わせて世界で一番ISがあるから」

学園にISがたくさんあることに加えて、教員は高い実力を持つ。特に千冬という世界的に有名な最強のIS乗りがいるということも大きい。簪の言うことはもつともだった。それでも、マコトは不安になつてくる。

人間はどこまでも愚かになれる。一夏への嫌がらせやマコトへの嫌がらせもそうだ。たとえ、世界最強がしようが、ISの配備が世界一だろうが…仕掛けてくるものは仕掛けてくる。ロゴスのような、利益があつて、そのために動こうとするもののほうがまだわかりやすい。しかし、そうではない、もつと曖昧なものを頼りにしている者たちがあのミサイルや今回の強奪をしているのであれば、どこにも安全な場所などありはしない。

「マコトさん?」

「……ああ、なんでもないよ、簪」

「……………そう」

誤魔化すようにマコトは微笑みながら言うが、簪は一瞬だけ見えたマコトの瞳に絶対に何かがあったとわかった。テレビの画面を見上げていたマコトの表情が見たこともないぐらい冷たく、目つきが鋭かったのだから。

「なんにしても、セシリアたちが戻るまで一夏は一人で特訓継続だな」  
「ああ。むしろ、あいつらが帰ってくるころには驚かせるぐらい……  
なんだ？」

話している一夏のポケットからメールの受信音が鳴る。一夏が携帯を取り出してメールを見れば彼は驚いた顔をする。

「どうした一夏」

「レイラからだ。今日の訓練用のメニューを送るってさ」

「本当か？アイツはすごいな」

「ただ、これからしばらく連絡はできないから返信不要って……レイラも大変だったのにな、あいつ」

「オルコットさん、言ってたよね。レイラは友達思いだって」

本当にこういうところが前世からマメなやつだとマコトは心からの笑顔を浮かべる。そうしなければ落とされていた、というのもあったが、マコトはフリーダム対策をしていた時のことを思い出す。

だから、レイラの送ってきたメニューもすっかり今の一夏に必要なものだろうと思った。

「ほんと、いい奴らに恵まれたよ、俺は」

「だな。ならば、応えんな、一夏」

「ああ。見てろよ、代表戦で目に物見せてやるぜ」

「そうだ、その意気だ」

まるで熱血漫画のようなノリに簪はちよつと心が踊り、マコトは安堵する。これなら一夏は大丈夫だと。問題はマコト自身だ。レイラがいなくなった以上、身の危険がある。これからは極力一人で行動しないようにしよう思うのだった。

その後、一夏は順調にレイラの訓練メニューを消化し続け、翌週の月曜。代表選の数日前にはセシリアたちは帰ってきていた。

「ただいまもどりましたわあ！」

「皆様、朝から友が大きなで声で失礼します」

S H R 前、元気よく教室に入ってきたセシリアたちに1組の生徒たちは「おかえりー！」と声を揃えて出迎えた。セシリアは真っ先に一

夏と箒へと歩み寄り突然訓練を放置して戻ってしまったことを謝罪した。

「本当に申し訳ありませんでしたわ。まさか急に呼び出されるとは」

「いいよ、気にしなくて。大変だったんだろ。ニュースで見たよ」

「ええ。まさかこのようなことが起こるとは…」

「犯人は見つかったのか？」

「いいえ、それが全く…襲撃犯も捕捉できず、本国は何をしているのやら」

少々疲れた様子でセシリアはため息をつく。彼女からすれば相棒の姉妹が誘拐されたようなもので、サイレント・ゼフィルス強奪の報を聞いたときは思わずすぐにブルー・ティアーズを展開しそうになったほど怒りに震えていた。レイラがそれを宥めてくれたが、本来はレイラのほうが怒りたかつたはずである。

この世界におけるサイレント・ゼフィルスは彼女のISとなるはずのものだったからだ。

「おかえり、レイラ」

「ええ、ただいま戻りました。マコト」

レイラはマコトのほうにまず歩んできて、何事もなかったか聞く。マコトの近辺警護をしていた以上、突然放り出してしまい心配だったのだ。

「何かありませんでしたか？」

「うん。とりあえずは…それよりもレイラは大丈夫？ だいぶ顔が疲れてるけど」

「…………やはり、あなたにはバレますね」

マコトはすぐにレイラがひどく落ち込んで、疲れ切っているのがわかった。元からポーカーフェイスなのが今世では余計に様になっていくせいでセシリアでさえもレイラのポーカーフェイスは見破れない。だが、マコトは僅かな視線の動きや息遣いなどの前世の仕草の癖からレイラが疲れていることを悟った。

「何があったの？」

「…………奪われたアレは私の搭乗予定の機体でした」



「っ！そんな…」

「先日、装備が完了し、諸々の検査をして再来月には送ると言われていたのですが、まさか報告のあった数日後にこうなるとは」

「それって」

「ええ…あの時と似ていますね」

レイラが言うあの時、それは間違いなく前世のミネルバ進宙式で発生したG強奪事件だろう。後の調査で、あの式典の襲撃とG強奪には内通者がいることがわかつている。でなければ、本来は戦艦だけのお披露目で搭載予定だった非公表の機体がターゲットになるはずがないのである。

「捜査はしていますがそう易々とはいかないでしょう。代わりと言ってはなんですが、建造中だったブルー・ティアーズ三号機を緊急避難的に受領しました」

レイラが自身の右手を上げる。中指には青い金属製の指輪が嵌められていた。

「愛称はダイヴトウ・ブルー。といっても急いで組み上げたのでパーツがなくて、外装のほとんどがセシリアのブルー・ティアーズの予備パーツで組まれているので実質ブルー・ティアーズの色違いですね」

「……大変だったんだね」

「手続きに急ぎの調整、セシリアとのテストを兼ねた模擬戦…久々に忙しかったですよ」

ため息をつくレイラにマコトはポンポンと昔の癖で肩を叩く。レイラも少し眉を下げながらも「ありがとうございます」と励ましを受け取った。

「…あ、あのさ、それ、私聞いてもよかったの？」

「あ」

が、二人の横にいたさやかかか恐る恐ると言った様子で言う。レイラはすっかりさやかかかいることを忘れており、マコトはかつての親友がそこまで疲れているのかと悟る。

「相沢さん、魔法の言葉を教えましょう」

「う、うん」

「私は気にしない、だからあなたも気にしないでください」

言外に「忘れろ」という意味だった。

笑顔で、目一杯の笑顔でさやかかの肩を突然ガシツと掴んで言うレイ  
ラは、さやか曰く恐ろしかったという。

## # phase-10 「迅雷」

セシリアたちが戻り、一夏の訓練はラストスパートに入る。二人が戻った翌日から再開されたそれにはマコトも管制室へ入ることが許されて3人の訓練を見ることができた。そう、3人である。

アリーナ内のモニターにはセシリアのブルー・ティアーズとは違い、灰色に染まったブルー・ティアーズ三号機、ダイヴトウ・ブルーを纏ったレイラの姿があった。セシリアのブルー・ティアーズと違い、ビットを搭載した非固定ユニットのバインダーは左側に2枚となり右側には無く、専用のライフルも製造前だったのか、マコトもネットで見ることがあるアメリカ製のIS用ロングライフル「イングラム105mm IS用大型ロングライフル」を右手に持っていた。

実体弾を撃ち出すIS用の狙撃用ライフルで、本来は集団運用を前提とする量産型IS用の装備で、少数機動戦を得意とするオリジナルコア機では取り回しの悪さから好まれない装備である。

しかし、ブルー・ティアーズは中々長距離線を主眼に置いた機体であり、それは三号機であるダイヴトウ・ブルーも同様で、緊急措置的に装備されたようだった。

「すごいな、レイラ。昔みたいだ」

一夏に、近接戦闘を教えるレイラの動き方は前世でレジエンドを操っていた時のように正確で、わざと一夏に見えるようにゆっくりと動作を行い説明をしている。

『いいですか、一夏さん。セシリアの時のように、剣で切り払うのはあくまで緊急手段です。切り払う、という行為をするよりも回避したほうがエネルギーの効率がいいのです。なにより、近接戦に持ち込む前に無駄な体力を消耗してしまう』

『ええ、レイラの言う通り。一夏さんは織斑先生の映像を見たことか？』

『この前見直したよ。千冬姉、レイラの言う通り突っ込むときは全部避けてたな』

近接戦闘主体の内容のためレイラが今は主導しているようで、その

内容はマコト自身もためになる。余計な動作をせずに回避して接近する。マコトの前世もそのように格闘戦をしかけており、再確認のよななものだ。マコトは前世でのデステイニーの操縦をイメージする。

指を操縦桿に預け、武装をセレクト。整備班の同期、ヴィーノとヨウランに無理を言って組んだオリジナルのパターンモーションで、アロنداイトを抜刀。プログラムを改修して自動的にウイングバインダーのコロイド粒子を散布し光の翼を展開、スロットルを押し込み、一気に加速。

かかるG。正面の敵、ライフルで迎撃をしてくる。マニュアルで回避運動。横に、縦に、機体のフレーム強度が許す限りの強引な機動で射撃を回避する。

潜り込み、間合い。アロنداイトを振り抜き、敵機を一刀両断。撃破、爆発。

「……ふう。本当に、デステイニーはいい機体だった」

マコトは前世の愛機を称賛する。当時最高峰の技術を詰め込みに詰め込んで、単騎で戦局を変えようとしたモビルスーツのマルチロール機としては一つの完成形とも言える機体。対艦装備として大型剣と長距離ビーム砲、対モビルスーツ中距離戦はライフルと高い機動性でかき乱し、近距離はビーム・ブーメラン兼ビーム・サーベルや掌のビーム砲、あらゆる場面に対応可能な装備と、それらを十全に扱える強靱な機体強度。

万能機でありながら、それぞれに特化した局地戦機とも比肩しうるまさに最強格の機体。事実、一度死ぬ直前まで戦っていた機体、ストライクフリーダムもインフィニット・ジャスティスも、それぞれが「領域支配機」「白兵戦特化機」であり一つのことの特化した強力な機体だった。それらを前にしてもデステイニーは戦えたのだ。

今世では戦うためのものではなく、ただ宇宙を飛ぶために乗りたいと思うが、状況が許してくれるのかとマコトは思う。ひしひしと、嫌な予感がするのだ。戦争が起こる直前のような緊張状態。簪からもピリピリしていると指摘されるほど、今のマコトは空気に敏感になっている。

『セシリア、早速やってみましょう。一夏さん、私とセシリアがあらから射撃を行います。ですから、一夏さんはできうる限り回避に専念してください』

『それ、俺前に進めるのか?』

『前に進めるとお思いで?』

『セシリア。……私たちがこれより行うのは弾幕射撃です。牽制、といったほうがいいでしょうか。一夏さん単体を狙うのではなく、面で射撃します。ただ、これは訓練ですので最初は弾数も少なく、初心者慌てて撃っているように撃ちます』

『そっか、その弾幕の中をすり抜けてく感じでやればいいのか?』  
『察しがよくて助かります。では、それぞれ配置に』

モニターの中で訓練が進む。今度は一夏が実際に射撃を回避して接近する練習を行うようだ。アリーナの端と端に立ち、一夏は雪片を抜刀する。

『セシリア、申し訳ないのですがレヴァリエを私に貸して頂けませんか』

『構いせんよ。そのキャノンでは難しいでしょう』

レイラはロングライフルを仕舞うと、セシリアからビーム・ライフルを借り、右手で構える。更に左側のアンロックユニットからビットを一機射出し、機体の左側面に配置した。

『最初は散発的に。わざとぶれさせてください』

『逆に難しいですわね』

『難しければ、狙いをつけず前方に撃ってください』

『わかりましたわ』

では、始めます、とレイラが言い。一夏に向かってまばらに青いビームが射撃された。

『いくぞっ!』

一夏は早速その場から前方へと加速する。まだ張られている弾幕の間には隙間があり、余裕を持って回避できる。しかし、明らかに避けなくていい弾にも反応して回避運動をしているところもあった。

『よっ、ほっ……うおっ!?!』

そうして、余計な回避運動をすると、今度は当たらないはずだった弾が当たりそうになる。それが近づくごとに増えていく。悪循環だとマコトは気がついた。そして、レイラがわざとそうしているのも気がついた。

「うわあ、レイラ厳しいな」

『一夏さん、無駄な回避が多すぎます。そうすると』

『けど、なんか見えすぎちゃって!』

『ハイパーセンサーは些細なことも捉えてくれますが、そうすると普段は気にも留めないものに気を取られる可能性があります』

そうして、アリーナの半分ほどまで来たところで一夏にビームが数発命中し、一回目の練習が止まる。

『たとえば、普段は気にしない小石が足元に見えたとしますわ。一夏さん、あなたはそれをどうされますか?』

『え、そりゃ足上げて避けるだろ……ああ、そういうことか。普段は気にしなくても避けてるのに、ってことか』

セシリアの例えにハイパーセンサーのデメリットを一夏は理解し、今の被弾も原因がわかる。

『わかりすぎるのも考えもんだな』

『機械がよくなっても扱うのは人間ですから、目を鍛えなくてはいいけません』

『わたったぜ、レイラ。もう一回やらせてくれ!』

『もちろん。セシリア、いいですね』

『構いませんわ!……ただこれ、私が教導するのでは……?』

いつの間にか教官役をレイラに取られていたセシリアは疑問に思うが、効率的なのでいいやと気にしないことにした。マコトはそのまま、一夏の立場を自身に置き換えて弾幕をどう潜り抜けるのかシミュレーションするのだった。

クラス代表戦当日の朝。1組では対戦相手の開示を待っていた。

「しっかし、誰になるのかね相手は」

「誰が来ても全力。そうだろう一夏?」

「ああ、違くないな」

セシリアたちとの訓練で一夏はそれなりに出来るようになったのではと思うぐらいには自信がついていた。それは傲りではなく、セシリアたちも想像以上の一夏の実力の伸び方に驚いたのだ。未だブレードオンリーで戦い続けるには厳しさがあるものの、量産機と専用機の性能差でうまくいけば一方的に押し切れるところまで一夏は成長していた。

「みなさん！発表されました！」

真耶が端末を操作し、クラス中の生徒が集まっている一夏の机の空間投影モニタにクラス代表戦のトーナメント表を掲示する。

「っ……これは」

「いきなり決勝戦だね」

箒の驚きと、本音の気の抜けた声が重なる。一夏の一回戦の相手はここ最近は何なども一緒にとる幼馴染みのルームメイト、更識簪だった。

「一夏、簪さんが相手だね」

「ああ……一番強いやつだね」

「ですが、この一週間であなとも強くなりました。胸を借りるつもりで、全力でいきましょう」

「ああ、レイラ。…二人とも、本当に訓練、ありがとう」

「まだ早いですわよ、一夏さん。それは優勝してからです」  
「だなー」

一夏が勢いよく立ち上がり「よし！いくぞー」と拳をあげる。すると、周囲にいた生徒たちも「おー！」と合わせた。

「私たちのデザート半年間フリーパスのために」

本音の口から出たのはこのクラス代表戦の優勝商品である。一夏は家事をしていたせいとか料理に凝っており、デザートの類いも好きだった。そのため、わりと優勝商品が欲しいという気持ちもあって訓練には全力で取り組んでいた。

「マコト、甘いもの好き？」

「普通に。さやかは？」

「私も嫌いじゃないかな」

「じゃ、一夏、応援しよっか」

「もちろん」

1組全員が纏まって教室から出ていく様はさながら一夏のハーレムのようだった。実態は全くもってそんなことはないのだが。

なお、一夏と当たった簪はクラスメイトに「更識さんなら大丈夫だよ……ほら、真面目だし!」となんとも言えない応援をされていた。簪は未だに4組に馴染めていなかったのである。

試合会場であるアリーナに移動した1組はそれぞれ観客席と出撃ピットに分かれる。前者は大多数の生徒。後者は一夏と、彼のサポートをしてきたセシリア、レイラだ。マコトが気がつけば何故かいなかったが、千冬に一夏が聞けば「更識妹の応援に行った」と答えられ、それはいいのかと思ったが特に何も千冬が指摘しないあたりいいらしい。

「ついにこの時がやってきましたわ、一夏さん」

「ああ。武者震いがしてくるぜ」

「あなたならきつと大丈夫です。機体と、自身を信じて」

「おう!」

まるでヒロインと主人公のような会話をするレイラと一夏に、彼らと面識のない代表戦の手伝いをしている上級生たちが「こいつら付き合ってるのか?」とまたしても勘違いする。セシリアはレイラに誤解を解かれていたので表情こそ変えないが、この友人が色々と男性を勘違いさせないだろうか冷や冷やとする。

「結局、零落白夜の練習とかしなかったけど、いいのかな」

「アレは切り札であると同時に諸刃の剣です。今の一夏さんには過ぎる力でしよう」

「そこは同感ですわ。簪さんがどういったISで来るかはわかりませんが、当たらなければ終わりなものより、確実に攻めたほうがいいでしょう」

一撃でエネルギーを削り取る零落白夜は同時に多くのエネルギー



を使う。未知数とはいえ代表候補生の簪に隙の大きい零落白夜が当たるとは一夏も思っていない。箒も別れる前に「零落白夜は最後の手段にしておけ」と釘を刺されている。

「フン…随分と鍛えてくれたようだな、オルコット、デュランダル」  
そんな3人のもとに千冬が歩み寄ってくる。家族である一夏はちよつと千冬が上機嫌なのがわかった。

「織斑先生…：はい、貴方の弟君ですから」

レイラが気品を持った雰囲気ですべて千冬に込めた。

「ここは…いち教師ではなく、こいつの弟して礼を言わせてもらおう。ありがとう、二人とも」

「！」

千冬が頭を下げ、セシリアとレイラは驚きのあまり言葉も発せない。一夏は照れ臭くなって、白式をコールして呼び出した。

装着音が固まった空気を強制的に動かす。

「…じゃ、行くよ」

「え、ええ、一夏さん。期待していますわよ」

「頑張ってください、一夏さん」

一夏は二人に見送られ、カタパルトへと向かう。その背中に、もう一つの声がかげられた。

「一夏」

それはこの学園に来て、初めて聞いた「姉」の声だった。

一夏は振り返らずに足を止める。きつと、振り向けば声をかけてくれないだろう。昔から彼の姉は恥ずかしがり屋なのだ。

「こんなことを教師である私が言っではいけないのだが…：勝つてこい」

「ああ…：…！」

「篠ノ之流剣術、その一！」

「剣は体を斬るにあらず、心を斬るものである！」

「よし。行ってこい」

「押忍！」

一夏がカタパルトに乗った。管制官を務めているのは手伝いの二

年生だった。

「発進タイムニングを移譲。アリーナ内のコンディション、グリーン。進路クリア、どうぞ」

「織斑一夏、白式！行きます！」

カタパルトでの出撃もこつそり練習していた一夏は悲鳴をあげることなく射出され、アリーナの中へと飛び立つ。飛び出せば割れんばかりの歓声が届く。一夏のことを疎んでいたものたちなど幻だったかのように。

「いくぞ、白式。俺たちの力を見せるんだ」

』

反応が返ってくるはずのない白式へ一夏はそう言った。白式は…白騎士は彼には聞こえないながらも「もちろん」と頷いた。

時は少し遡り、一夏たちがいるピットとは反対の4組側のピットに場面は移る。ここでは簪が自らのISの最終チェックを行なっていた。

「アンロックユニットは大丈夫。火器管制、駆動制御、どれも干渉なし…ひとまず、これならいけるかな」

「簪さん」

「っ!？」

そんな彼女の下に、誰かがやってくる。薄情にも誰も応援にこないクラスメイトのものではなく、よく聴き慣れたルームメイトの声だった。

「マコトさん!?!どうしてここに」

「そりゃ応援だよ。それが簪のIS?」

「そ、そうだけど…1組のほうはいいの?」

「あつちはオルコットさんとレイラが行ってるからね。二人も、それに簪も簪に頑張ってるって言ってたよ」

「……ふふ、そっか」

簪はただただ嬉しかった。今回は組が違う、戦う相手だというのに。彼女たちは優し過ぎる。簪はどこまでも底のない暗い闇を知っているからこそ、マコトたちの明るさが尊く、温かった。

「……この子は、打鉄二式。倉持技研で開発中の私の専用機……」

薄い水色のISを簪が撫でながら紹介する。マコトはこの機体に見覚えがあった。以前、授業で見学した整備課の最奥に置かれていた機体だ。やはり、あれが簪の専用機だったようだ。

「打鉄に似てるけど、こう近いと全然違うね。武者っぽい打鉄よりも、ロボットというか、直線的なデザインだね」

「開発コンセプトは打鉄の持つ安定性を犠牲にしてもいいことを前提にした、高性能化と拡張性の向上。汎用性は現行の打鉄でも複数のパッケージ換装で足りてるけど、打鉄は設計を突き詰めすぎてあれ以上の高性能化ができない」

「本当に改良機なんだね」

「うん。だから、この子が作られてる。加えて、打鉄の第三世代機化……リファインも目指している」

イメージインターフェイスを利用した第三世代武装と呼ばれる装備。それを有する機体が第三世代機と呼ばれる、現行最新鋭機。ブルー・ティアーズとダイヴトウ・ブルーの二機も数少ない第三世代機である。

「それが簪さんの言ってた『専用装備』ってことか」

「そう。……間に合わなかったけどね」

簪が打鉄二式を纏い、ハンガーから機体を下ろす。その姿は打鉄とは違ってかわって機動力に富んでいそうな姿だった。上半身は簪の腕を包むアーマーだけで、本来ならばある非固定ユニットの蛇腹状のシールドがない。代わりに腰部に非固定ユニットが一對設けられており、それはAMBAAC肢としての役割を持つスラスターユニットだった。

「打鉄用高機動パッケージ『迅雷』、同期完了。スラスターベーン、可動を確認。武装確認、右手、試製19式IS用自動小銃。左腕部、試製19式多連装ミサイルランチャー。管制認識」

電子キーボードを叩きながら簪は機体を僅かに浮かせてカタパルトへと導いていく。

「簪さん、もしかしてまだ調整が？」

「実を言うと、OSがこの機体は不完全」

「う、動かせるの？」

「なんとか……ただ瞬時加速はできないかな」

ISバトル必須技能である瞬時加速の使用不能。それはあまりにも機体の状態が不完全であることを表している。マコトは心配そうに簪を見上げている。マコトの様子に、簪はまるで姉がかつてそうしてくれただよように、優しい笑みを浮かべて言った。

「大丈夫。そのためのこの装備。それに——まだISに乗り出して一ヶ月も経ってない相手に、負けない」

「簪さん……」

いつもは静かな彼女が精一杯の勇気を振り絞ってそう言って、マコトはわかった、と頷き、彼女を見送る。簪の打鉄二式がカタパルトに接続される。

「システムチェック、発進シークエンス。ハイパーセンサー起動、各補助システムをアクティブ。迅雷、スラスター点火」

キュウウウウ、と甲高い音がピット内に響く。打鉄二式に装備されたスラスターユニットが叫ぶように起動したのだ。

「シールドバリア、展開。既定出力まで上昇。絶対防御、発動制御システム異常なし。全装備の安全装置を解除——発進準備、完了っ」

電子キーボードが消え、簪は両手に武装を呼び出す。試製19式IS用自動小銃、試製19式多連装ミサイルランチャー。IS用というよりは人間用のようなデザインのアサルトライフルに、一見シールドのように装備される表面に発射管を備えたVLSのようなミサイルランチャー。それが装備される。

「発進タイミングを更識さんに移譲」

「了解。…マコトさん、行ってくるね」

「うん！頑張つて！簪さん！」

「更識簪、打鉄二式、迅雷」、行きます……！」

スラスターが青白い炎を噴出し、簪の打鉄二式が飛び出していく。マコトは、思えば誰かの出撃をこうしてちゃんと見送るのは一夏のものを含めてまだ二回だけなのだ気がついた。前世ではずっと、見送

られる側だった。

「(ルナも、こんな気持ちだったのかな)」

少し、不安になるような気持ち。最後は見送ることしかできなくなっていた恋人の顔がマコトの脳裏に蘇った。

アリーナ内に簪が現れ、一夏は初めて簪のIS乗りとしての姿を見た。いつものどこか頼りなさげで、静かで、小動物のような彼女が今日は一夏がゾクゾクとするような気迫を見せる。意志の強い、マコトとよく似た赤い瞳が一夏を射抜く。

「……簪」

「一夏さん」

二人が向かい合ったことで、試合開始を告げるブザーが鳴る。一夏は雪片を構えた。

「勝負！」

「いくよっ！」

一夏がまずは動いた。先手必勝、と言わんばかりに瞬時加速をし、一気に間合いを詰める。セシリアとレイラからはこうアドバイスされていた。

——ブレードオンリーである以上、先手は上手くいかなくても取らなくてははいけません。

——レイラの言う通りでこれは簪さんがどんな装備でも絶対です。

——退いたらどうなるんだ？

——永遠に接近できず蜂の巣にしますわね、私なら。

退けば死。なんとも俺好みだ、と一夏は苦笑いしながらその時は説明を聞いていた。

そして、その理由はすぐにわかった。簪が非固定ユニットのスラストターを一夏の方に向けて、全力で後退した。瞬時加速は使っていないがその加速力はかなりのもので、僅かに瞬時加速には及ばないが一夏の初撃は降ることすらできない。

続けて、簪が左腕に装備するシールドのようなミサイルランチャーを一夏に向け全弾発射する。

「ミサイル！ビームよりは！」

弾幕を掻い潜る訓練を思い出しながら一夏は前へと進む。ビームよりも弾速が遅いミサイルならば避けられる。一夏は向かってくるミサイルをギリギリまで引き付けて回避する。通常の弾丸と違い追尾して纏まってしまふミサイルのほうが一夏は避けやすかった。

「…想像以上…！」

「おおおっ！」

話には聞いていたが、初心者がこうも正面から攻撃を恐れずに来るのは簪も驚き、実際に避けているのだからさらに驚きは増す。それでも簪は冷静に、雄叫びをあげながら突撃してくる一夏をギリギリまで待つて、雪片が振られる直前にスラスラーを機体左面に向けて噴射し、強引に回避した。

「なっ…！」

「そんな正面からの攻撃、当たらない！」

回避し、今度は一夏にアサルトライフルで銃撃。一夏はまともに左側に被弾しエネルギーを削られた。

「くっ、まだまだ！」

上下、左右。一夏はランダムな運動パターンで簪に接近を仕掛ける。簪は白式の運動性能の高さに、この機動性を打鉄二式にもフィードバックしてくれないかと同じ会社製の白式の性能に嫉妬する。

打鉄二式に装備されている「迅雷」は高機動パッケージとされているが実際は高高度迎撃用の装備で、近く中距離の機動戦には向いていない。この装備の実態は緊急展開用のブースターであり、今回装備したのは打鉄二式が瞬時加速を使えなかったためその代用品だ。

なので、非固定とはいえ、機体の加速力自体は上がったが小回りが効かなくなっている。おまけに「迅雷」はジェット燃料を使用しているため、いずれ燃料切れになる。その前に勝負をつけなくてはいけないのだが、不完全なOSは打撃力のある武装を装備させてくれなかった。

「当てづらい…！」

偏差射撃することもできないほどの白式の機動性に、簪は齒噛みす

る。白式が再び距離を縮めたため、簪はアサルトライフルで牽制しながら全速力で一夏と距離を離す。早くも戦闘は逃げる簪を追う一夏という構図になる。

「逃げるなー」

「戦ってるー」

一夏は白式に射撃武装がないのが本当にキツイと感じてしまう。こうも逃げられると手の出しようがなかった。

膠着状態となった戦闘を観客席にいるセシリアとレイラ、そして1組の生徒たちはどうしたものかと呻いていた。

「やはり、日本の新型機は機動性に富んだ機体でしたか」

「かのゼロファイターも機動性に富んだ機体だったと言われているです」

「よく知っていますわね、レイラ」

「体験入校した軍学校で教わりました」

「なるほど…」

レイラは簪の機体を機動力の高い射撃機であると分析する。どうにも完成とは程遠いようだが、現時点でもコンセプトは垣間見える。白式が白兵戦なら、あの機体はそのサポートだろうか。レイラは前世のモビルスーツにあった役割分担からそう思った。

「こうなると一夏さんは厳しいですわね。白式に射撃武装がないのが」

「公式では暮桜には一応ライフルが装備されているといいますが、一度も使用されず誰も見たことがなかったですね」

「ですから、不要とされてしまったと。それは織斑先生が強過ぎるからでは」

「……我が祖国でもたまにある『病』でしょうね」

「…おやめなさい、レイラ。言っていることと悪いことがありますわ」セシリアは思い当たるフシがありすぎて頭が痛くなる。そもそも、

セシリアが実戦でスナイパーライフルを使用しないのはライフル搭載の『フレキシブル機能』というビームを曲げる偏向機能の容量が

あまりに重すぎて、機体の量子格納庫に予備のビットや万が一の近接装備が載せられないどころか、フレキシブルとビットの制御システムが干渉を起こしてエラーを発生させ火器管制がフリーズするためだ。

おまけに、フレキシブルを発生させるためには凄まじい集中が今のセシリアには必要でそんなことを悠長にしていれば動くことさえままならない。

「スターライト、レイラは装備を断ったのでしよう」

「ええ、信頼性に欠けますので」

「信頼性。そうですね、そう言えばあのイングラムキャノンは弾詰まりしやすいそうですわ」

「なるほど、覚えておきましょう」

うふふ、と令嬢同士の黒い微笑に周囲の生徒は若干引いた。

「お前たちでもそういう言葉を交わすのだな」

箒がレイラとセシリアの静かな言い合いに珍しいものを見たといった表情をする。レイラとセシリアは箒から見れば互いを尊重し合い、レイラはセシリアのフォローをし、セシリアはレイラよりかならず前に立つ。いいコンビだと箒以外の1組の生徒も感じている。

「あら、箒さん。仲がいいからこそ、ですわ。そういったこと、一夏さんたちとはなくて？」

「まあ、喧嘩は何度か一夏としているが」

仲がいいほど、お互いの距離が近くたくさんのものが見えて中には気に入らないこともある。それさえも飲み込んで、共に分かち合うことができるのが友人。箒は憧れていた学生の頃の千冬の、姉との姿勢にそう学んだ。

一夏とも数度は喧嘩しているが全て仲直りできている。

「マコトとはないのですか？」

レイラの問いに、箒はマコトと喧嘩した記憶がないことに気が付く。

「……あいつとはないな。昔からみんなと一緒にいるようでどこか一歩引いたやつだった。大人、というのか、達観しているというのか……」  
時には一夏や箒たちと馬鹿騒ぎし、時には二人を止めるブレーキ。



まるでマコトの中に子供の彼女と大人の彼女がいるようなアンバランスさに、箒はこの歳になつて気がついてきていた。

「ただ、別になんとなく仲がいいわけではなくアイツは私の友人と自信を持つて言える。子供の頃も助けてようとしてくれたし、一夏と同じく真つ直ぐなやつだからな」

そう、真つ直ぐなのだ。物事をよく見て、深く考えることもあるよ。うだが、マコトは肝心な時は悩まず真つ直ぐだと箒は思っている。特に、他人のために何かをする時はだ。

レイラは箒のマコト評に思わず笑顔になる。まっすぐ、誰かのために。怒れる瞳の奥に埋もれていた優しく誰かを想う心。それを箒や一夏が彼女に思い出させたのかもしれないと思つたからだ。

普通の生、恵まれた家庭。それらを得たレイラは友人とは替え難く欠けがないのないものであると知り、シン・アスカという存在がどれだけ自身の中で大きかつたのか今世で初めて理解したのだ。

「かんちゃんー！がんばれー！」  
「…かんちゃん？」

レイラはそんな応援をする本音に気が付く。かんちゃん、というのは誰なのだろうか。

「本音さん、かんちゃん、というのとはどなたでしょうか」

「ん？レイレイ、かんちゃんはかんちゃんだよ」

本音はそう言いながら指を差す。箒のことを「かんちゃん」と呼んでいたようだ。意外な繋がりがあったものだ。レイラは驚いた。

「どうしましたのレイラ」

「いいえ、本音さんは箒さんとお知り合いのようです」

「あら、そうですの」

「ほう、箒とか」

「うん！昔からの幼馴染みなんだ」

レイラはなるほど、と納得する。箒には確かに、これぐらいゆるい本音がちよつど良いのだろう。

「昔からかんちゃん静かだね、でも、今日はすつごく頑張ってるね！」

「確かに……いつもの、お昼の時よりも強そうですね」

セシリアは素直に簪の今の姿に感心する。何かと自信が無さそうな少女だったがやる時はやるタイプのようだ。セシリアは初動のスラスター使用による後退に、簪の機体が瞬時加速もできないほど未完成状態なのだと見抜いていたが、それをわかっていて強引にスラスターで機体を動かそうとする根性が気に入った。

「かんちゃん、最近、しののん、せっしーとかレイレイと楽しそうだから、私も嬉しいんだ」

「ふふ、簪さんはいいご友人をお持ちですね」

「そんなく、レイレイ」

本音を思わず撫でながら、レイラは視線を勝負へと戻す。友人同士の戦い。けれども戦争ではなく、競い合うもの。レイアらは戦いであるにもかかわらず穏やかに二人の軌道を見守る。アリーナの空は覆われているとはいえ、二人の姿があまりにも自由に見えた。

「(マコトと、ああいう風に飛べるといいのですが)」

レイラの視線の先では、一夏があともう少しで簪に追いつけそう、というところだった。

「そのブースターを破壊すれば！」

「バレた……でも！」

打鉄二式の機動力のからくりを見抜いた一夏は「迅雷」に雪片を向けようとするが、簪はここで手札の一つを切った。スラスターを全カットし、迅雷を左右に広げる。直後、簪の体は斜め後ろへとふわりと後退し、一夏の後方頭上をとった。

「……このっ！」

「くそっ！」

さながらそれはコブラ機動のようだった。背後をとった簪は容赦無くアサルトライフルとミサイルを斉射。一夏は防御もままならずモロに背面へ攻撃を食らう。ミサイルの爆発と弾丸の衝撃が合わさり簡単に絶対防御を発動させる。

エネルギーがガリガリと削られ、一夏はこのままではやられると判

断し、一か八か瞬時加速で逃げようと試みるが、被弾の衝撃が集中力を乱す。イメージ操作に大きく頼るISの弱点だった。

「このままっ、押し切るー!」

ライフルとミサイルを打ち切り、簪はそれらの装備を量子化すると新たな装備を呼び出す。今度はアメリカ製のIS用ガトリングガンだった。

一夏は一瞬の弾丸の切れ間を瞬時加速でなんとか距離をとり、簪へと振り向く。その時にはすでに簪はガトリングの引き金を引いており、夥しい量の弾丸が吐き出される。一夏は回避し、接近しようとするが、今度はあるうことか簪がガトリングを撃ちながら接近してきた。

「今度は追われる側かよ……!」

白式のエネルギーは既に大きく削られており、強引に接近するのは難しくなった。つまり、このまま時間切れまで持ち込まれれば、エネルギー残量から一夏の敗北となる。また、簪が今回装備している「迅雷」は燃料によって推力を得ているため打鉄二式本体の推進システムは未使用。エネルギーはまだほぼ100%だった。

「逃げないで!」

「逃げるしかないだろ!」

立場が逆転し、一夏は必死に射線から逃れる。どうしたものか、と彼は思考を巡らす。ないない尽して初手で当てられなかったことが結局ここまで響いている。これが代表候補生の実力かと一夏は悔しさを覚える。加えて、彼は知らないが簪の機体は不調で全力とは程遠い状態。それでもここまで追い詰められている。

「くそ、飛び道具がほしい、飛び道具がほしい……!何か、何かないのキャー!」

必死に念じるが、一夏の言葉に白騎士は聞くだけ聞いて何も出さなかった。本来は白式の中の白騎士が持っている量子格納庫に白騎士の装備一式が入っており、かつて弾道ミサイルを全て撃ち落とした後にも先にも出てこない最強のビーム砲があるのだが、白騎士は創造主の命令を忠実に守っている。

「だいたいあんなブースターつけて、ブースター…そうか、ブースター！」

何かを閃いたらしい。簪は一夏の言葉に気がついたがそろそろトドメを刺そうと加速をかけようとする。

が、突如として「迅雷」の噴射が停止する。燃料切れ、そんなありえない、と簪は燃料の残量を見るが数値はまだ半分近くある。じゃあ何が、と咄嗟にシステムを確認する。

「制御システムのプラグが…?!？」

「迅雷」のステータスマニタには「迅雷」本体の内部にあるプラグが外れていることを示すアラートが出ていた。簪はそんなことはないはずだとパニックになりそうになる。なぜならばそこは昨日、確認したのだ。確認し、問題はなかった。

「どうしてっ?!？」

打鉄二式が突如、失速し墜落していく。必死だった一夏はそれを好機と捉えた。

「いつけええええっ!」

「っ…!!…なに?!」

落ちながらも簪は打鉄二式自体の推進システムで姿勢制御をしていたが、一夏の雄叫びになんだと彼の方を向く。すると、とんでもない光景が見えた。

「はっ?!…えっ?!?!」

「零落、白夜ア―!」

一夏が何をしたのか。それは非常に単純だった。彼はなんとも綺麗なフォームで、まるでスラスターのように全開で展開した零落白夜を後ろに向けながら、雪片を「投げた」。 「迅雷」がデッドウェイトと化し、パーズもままならない簪は回避することなど不可能。

流星のように柄の部分の前に雪片が簪へ向かってくる。簪はせめてもの防御として両腕をクロスしたが、雪片がぶつかった瞬間に回転し、彼女の頭にぶつかった。

同時に、零落白夜の発動が終了し、打鉄二式のシールドエネルギーも10割あつたものが5割まで削られる。

「そ、んなっ」

「これでえー」

一夏はダメ押しとして拳を振りかぶる。簪はこのまま叩き落とされるわけにはいかない、とまだ弾が切れていないガトリングを一夏に乱射する。一夏はそれを避けずに突っ込んだ。ブースターが死に、逃げられない簪はまずガトリング自体を殴られ、砲身が歪む。一夏は射撃武装を破壊したことを確認しながら、流れるようにキックを簪の左脚部に当てた。

簪はバランスを崩し地面を落ちていく。このままでは墜落のダメージも受けると簪は重しになっている「迅雷」を空中でパージ。どうにか急制動をかけて墜落は免れ、アリーナの地面に強引に着地する。

土に打鉄二式の脚部がめり込むほどの衝撃を殺した簪に、一夏が少し離れたところで向かい合う。

「これでもう逃げられないな」

「……………」

白式の得意レンジを避けてチマチマと削っていくはずが、「迅雷」を失った打鉄二式は機動力がないに等しく、白式からは逃げれない。

「……………迅雷、細工された」

パージされ、地面に突き刺さるように落ちた「迅雷」に簪はそう推測する。何者かが簪の整備完了後に格納庫に忍び込んで弄ったのだろう。待機状態にすらできない打鉄二式の弊害だった。

大方、一夏にわざと勝たせて簪が不調だったことを告げて……………と言う魂胆だろうと、簪は陰湿すぎる何者かのやり方に腹が立つ。しかし、今は一夏との真剣勝負。万全でなくても、負けるわけにはいかなないと簪はアサルトライフルを再度呼び出し、リロードする。

「接近戦では確かに不利かもしれない。でも、まだ終わってない」

「俺も簪を侮らない。全力でいく」

慢心はせずに、一夏は雪片を構える。簪もアサルトライフルの銃口を一夏に向ける。一回戦の第一試合でもの熱さ。会場のボルテージは最高潮になる。

同時に、大きな破碎音と天から神の裁きのように光が落ちてきた。  
「っ!?なんだ!？」

今から飛び出そうとしていた一夏は急制動をかけて停止し、簪は引き金からかけていた指を離す。落ちてきた光は本来不可視なはずのアリーナを覆うシールドバリアを貫いていた。IS単機とは比較にならない、大出力のシールドバリアを、である。

「何が、起きてんだ」

一夏は呆然と、その光を眺めていた。

観客席にいた1組の生徒たちも呆然としていた。だが、ただ一人、レイラは何者かに攻撃を受けていると飛び上がるようにISを半起動状態にしてハイパーセンサーやレーダー類を起動させ索敵を行う。

「(レーダーに反応は……見つけました。一体どこ……!?)」

レイラは息が止まりそうになる。レーダーに引つかかった機体があるのかをわかってだ。ダイヴトウ・ブルーはそんな新たな操縦者の驚愕など知らずに、無慈悲に襲撃者の名前を告げる。それは姉妹である『彼女』。

——IFF認識。『友軍機』。

——機体名称『サイレント・ゼフィルス』。

静かに、奪われたはずの青が、落涙してきていた。

## # phase 11 「堕ちた涙」

アリーナのシールドバリアが砕け、光が消え、ソレは静かに降りてきた。機体色は白一色。しかしシルエットはアリーナにいる誰もが見たことがあった。

「あれは、セシリアたちの国の」

サイレント・ゼフィルス。つい先週、イギリスで強奪されたというIS。現れたISの形状は間違い無くそれだった。右手には大型のブルー・ティアーズのようなスナイパーライフルを備え、明らかにビット兵器らしきものを僕のように従えている。装着者の顔はフルフェイスで見えず、体も全身がスーツで覆われているのか、肌が見えない。

ただ、その体つきは妙にグラマラスだった。

一夏は、動けない。アレは敵だと彼の本能が告げている。濃厚な殺意、それがあの白いISから発せられている。

「……簪、動けるか」

「いけるけど、今の打鉄二式はどんくさい。一夏は」

「まだ3割はエネルギーが残ってる。…エネルギー的には俺が危ないな」

既に危険域の白式は素人の一夏ではこのエネルギー残量で未知の敵と戦うことは不可能だ。おまけに最大火力である零落白夜は使用できても一回が限度だ。

「どうする？」

「……あれは、敵だ」

「それは、私もわかる」

簪が一夏に対応を問えば、返ってきたのは立ち向かうとも取れるような言葉。敵。簪はライフルを持つ手に力を込めながら打鉄二式の状態をチェックする。エネルギーは5割、武装は残りライフル一挺。瞬時加速はできず、空中戦をするには足も遅い。下手をすれば一夏よりも戦えないのではないかと簪は思ってしまう。

「織斑先生、聞こえますか」

一夏は、試合中アリーナの制御室にいるという千冬に通信を飛ばす。彼女はすぐに応答した。

『ああ、聞こえる。どうだ、動けるか』

『それは大丈夫です。でも、どっちにしる試合中でエネルギーが』

『打鉄二式は半分、白式は危険域か。今、外で待機している三年生たちを増援として呼んでいる。それまで待てるか』

『あいつが動き出さなきゃ、かな』

『……動きがあれば、直ちに撤退しろ。こちらも観客席の生徒を避難させる。シールドバリアを破るほどの出力だ。観客席に向けられたらわからん』

観客席にサイレント・ゼフィルスのライフルが撃たれば本当に生徒が消炭になることは容易に一夏も想像できた。

『それに、そんな出力を出せるISはこの世界にもう存在していないはずだからな』

『その、存在してないISって』

『——白騎士だ』

一夏は唾を飲み込んだ。これまでの授業で、白騎士だけが出鱈目な性能であることは知識で知っていた。ミサイルを棒立ちで迎撃できるほどのシステム、射程限界がないとされる超出力のビーム砲、姿を本当に消しているかのように迷彩。詳細は不明だが、既存のISを超越した「最初にして最後の完成されたIS」と白騎士は呼ばれている。

観客席をちらりと見れば、パニック寸前ではあるがなんとか避難誘導を始め、避難が開始されていることがわかる。このまま、相手が動かなければなんとか……と一夏は思うが、それは希望的観測だった。

サイレント・ゼフィルスの持つライフルが観客席に向けられた。

『いかん！』

「っ！やめろおおおっ！」

一夏は反射的に瞬時加速を行い、サイレント・ゼフィルスに体当たりする。結果、スナイパーライフルという名のメガビーム砲は空に砲口が向き、ビームが今度は空に向けて放たれた。

観客席はパニック状態に陥る。



「くっ！皆さん！落ち着いてください！怪我をします！」

「でも、早く逃げないと！」

「それで怪我をして逃げられなくなったらどうするつもりなのです！日本ではこういうとき、おさない、かけない、しゃべらない、というのでしょうか！落ち着いて避難を！」

「二人の言う通りだ！真正面にいる一夏たちよりマシだろう！」

我先にと駆け出す生徒たちをセシリアとレイラ、箒が沈めるために大きな声を出す。彼女らの持つ空気感とこんな状況でもよく通る声は一部の生徒たち、特に1組の生徒に通じ、生徒たちは慌てず、しかし迅速に出口へと向かう。

「かんちやーん！かんちやーん！」

「本音さん、ここは一度さがりましょう」

「でもっでもお！」

「一夏さんもいます。あなたが死んでは簪さんも悲しみます」

「うううううっ」

アリーナに取り残された簪に本音は避難を拒否したがレイラが強引に彼女の手を引き連れ出す。避難をしながら、レイラはサイレント・ゼフィルスの状態を確認する。リーダー情報はイギリスにあったときとは変わらない。

だが色が変わり、明らかに主兵装の「スターブレイカー」の威力が名前そのものになってしまっている。本来はセシリアの使用するスナイパーライフル「スターライト」と同程度の出力に、大幅に容量を圧縮できたフレキシブルシステムを搭載しているだけで基本的なものとは変わらない。

「(あれは一体、何？なのですか)」

底知れない不気味さをサイレント・ゼフィルスに、いやもはや別の「ナニカ」と化しているものを感じる。スーツに覆われているが作り物めいた女性の肢体が余計にそれを助長させた。

観客席への一撃をなんとか防いだ一夏は、間違い無く相手のターゲットが自身に向いたと判断する。

このままあのビーム砲とやりあうのかと覚悟を決めようとした一

夏だったが、サイレント・ゼフィルスは何を思っただけかライフルを量子化し、大型のナイフを展開する。それはピンク色に刀身が発光した。「接近戦をやるって言うのか」

狙撃機ではなかったのか。一夏は意味不明なサイレント・ゼフィルスの動きに困惑をしながらも雪片を体の前に構えた。

『一夏さん、聞こえますか!?!』

臨戦態勢となった一夏に、本音の避難を終え、残っている生徒がいないか観客席に戻ってきたレイラがサイレント・ゼフィルスの様子を見て慌てて一夏へ通信を繋げた。

「れ、レイラ!? どうした!?!」

『あのナイフには気をつけてください! アレはシールドバリアを無視します!』

「は?!? どういうことだ!」

『あのナイフはシールドバリアと同じ位相に合わせたフィールドを刀身に纏い、ぶつけることでバリアを中和。絶対防御を発生させるものです!』

レイラからの忠告に一夏は冗談じゃないと構える。相手は焼くより切り刻む方がお好みらしい。

『零落白夜の登場に、こぞって全世界が同じものを作ろうとしました。そして、イギリスの出した答えがあの大型ナイフ: “女王宣誓”です』

本来は自身が扱うはずだった武装。レイラはよくその特性を知っていた。刀身自体は切れ味のないナマクラだが、ようは競技で勝つのならバリアエネルギーを0にすればいいのであって、一番効率的なのが絶対防御の連続発動である。

そして、実戦でもそれは同じで、ナマクラとはいえISSのパワーアシストで武器を振るえば生身の人間は死ぬ。混沌としたブルー・ティーズシリーズの中で、狂気が産んだ機体コンセプトとは真逆の最強の近接武装だった。

「リーチはこつちがあるから、捌ければ……」

『あのISSは普通の状態ではありません。撤退を勧めます』

「けど、逃げられるわけないだろ、あいつ、観客席に撃つたんだぞ」  
ここで逃げればさっきの焼き直しだ。時間を稼ぐ。なんとしても。一夏は無謀とも思えることをやろうと考えていた。しかし、それに簪が待ったをかける。

「一夏さん、撤退して」

「なっ!? 簪一人でアレを止めようって言うのか!?!」

「違う。待てば三年生の増援がくる」

「でもいつくるか分からないんだぞ!」

「それでも、エネルギーに余裕がない白式で、白兵戦は厳しいよ」

事実だった。サイレント・ゼフィルスの格闘戦能力は未知数だが、激しい動きになることは想像に難くない。今の白式で激しい動きをするにはあまりにエネルギー残量が心許ない。

「……置いてけるわけないだろ、友達を」

「でもっ」

「簪！俺は絶対友達を見捨てない!」

一夏は叫ぶ。無謀だと、無意味だと、それはわかっている。

『織斑、馬鹿な真似はよせ。今のお前では』

「やるんだよ、白式！力を貸せ!」

気合で白式のエネルギーは回復しない。それでも一夏の気迫は増す。サイレント・ゼフィルスが一夏の気合に呼応するかのようになり、前に飛び出してきた。従えるビットも一気に散開し、一夏たちを後方を飛び交う。下がれば撃つ、と言わんばかりだ。

「くう!」

振るわれたサイレント・ゼフィルスのナイフを一夏は雪片で受ける。手応えは重く、それでも一夏はナイフを弾き、返す刀でサイレント・ゼフィルスに反撃する。だが、サイレント・ゼフィルスの反応は尋常ではなく、弾かれたというのにナイフで雪片を受ける。

「こいつ…!?!」

「援護する!」

「ダメだ簪…ぐあっ!」

一夏の横に周り、援護をしようと簪が動いたところで、サイレント・

ゼフィールスがナイフの刀身で雪片を滑らし、バランスを崩した一夏に左足で脇腹を蹴り上げると、彼はとんでもない距離を舞った。

そして、彼の無事を確認する間もなく、サイレント・ゼフィールスは簪に向かって瞬時加速をしたかと思えば、簪は腹部に強烈な衝撃を受ける。息が止まり、手にもつライフルがこぼれ落ちる。

網膜投影に「絶対防御最大稼働」と表示され、簪の体は一夏と同じように蹴り飛ばされていた。背中から地面に落ちて、そのままISをつけているにもかかわらず地面を石のように転がる。止まった頃にはエネルギーが2割まで削られたことと、打鉄二式自体のダメージが行動不能レベルまで達していた。

「ぐ、う……」

痛みは薄い。打鉄二式が全力で操縦者を守ったおかげだった。代償に、打鉄二式の装甲は損傷し、歪んだせいで発生した隙間からバチバチと火花をあげ、煙を吹いている。

たった一発の蹴りでこの惨状を成したサイレント・ゼフィールスは簪を興味なさげに見下ろしている。

「ばけ、ものっ……」

せめてもの反撃は口で。しかし、サイレント・ゼフィールスはそんなことな歯牙にもかけず片手を天に伸ばした。ビットが集い、全ての砲門が簪へと向けられている。簪はとてもではないが動けない。打鉄二式になんとか動いてと念じるも、打鉄二式は主人の要望に応えられず、どうすることもできず機体の損傷状況を伝えるしかない。

「ああ、これはダメだ」

簪は悟った。間違いなくこれは死ぬと。この状態で撃たれればエネルギーは切れ、非常用のものもなくなり、最後にはビームに体を蜂の巣にされる。人の形が残るかどうかもわからない。

走馬灯のようにこれまでの人生が流れていく。姉は、こんなときも助けにきてくれない。

そうして、ビットの砲口の光が増していく。簪は目を閉じた。

「(なんで、こんな時になって浮かぶのが……マコトさんの顔なんだろう)」

付き合いはまだ一ヶ月とない友人の顔が最後に浮かぶ。彼女が現れてから簪の生活は激変した。友達が増えて、お昼をみんなで食べた。放課後もたまにおしゃべりをする。夜寝る前は今日あったことを話し合う。

普通の人から見れば当たり前かもしれないそれは、簪にとっては特別なものだった。

「(……なんか、悪いな)」

ここで、更識簪は終わる。それがなぜだか残念で、悲しくて……申し訳なかった。

ビームの発射音が前方から聞こえ、簪の意識は……途絶えることなく、死を伝える衝撃もこない。しかし、ビームが着弾する音は確かにする。簪が恐る恐る目を見開けば、そこには大きな背中があった。

「マコト、さん」

打鉄の非固定ユニットのシールドを前面に展開し、全力防御をするマコトの姿があった。彼女は攻撃を受け続けながら、シールドの裏から量子化していた武装を呼び出し、構える。現れたのはグレネードランチャー付きのガラム。

マコトはこの打鉄の装備を出撃前に確認していた。元々、別のクラス代表が使用する予定だった打鉄で、これを使おうとしていた操縦者は頭がいいとマコトは思った。

マコトがガラムのランチャーのトリガーを弾く。ボシュツと音を立てて発射され、サイレント・ゼフィルスに到達する前に爆発する。

「対IS用煙幕!?!」

簪が驚愕する。爆発し、広がったのは白煙。それは煙幕だった。しかも、ただの煙幕では無く、IS用のものでハイパーセンサーの視界も欺ける。

ビットによる射撃が止む。マコトは簪に振り向かず声をかけた。

「簪さん、動ける?」

「ごめん、打鉄二式はもう、シールドバリアを張るので精一杯……」

「わかった」

「……まさか、戦うつもり?」

「そのために来たよ。織斑先生にも止められてるけど」

『当たり前だ馬鹿者。これ以上被害を増やすな』

「けど、アリーナの出入り口、全部ロックされてるから、誰かがアレの目を引かなくちゃいけない。そうでしょ、織斑先生」

「アリーナの出入口がロック!?!」

簪の驚きに、マコトはそうだよ、と答えた。観客席を出たはいいが、そこからアリーナの外に出るゲートは全てロックされ外に出れなくなってしまったという。

『…ISの無断展開、強奪まがいの搭乗、制止をかける上級生を無視……飛鳥、戻ったら、わかっているな』

「覚悟の上です。二人が吹っ飛ばされて、見ていただけませんでしたので」

ここに来るまで相当な無茶をしたらしいマコトに簪は思わず呆れそうになる。簪から見たマコトはわりと冷静で、無謀なこととはしなないと思っていたからだ。だが、マコトは前世の時からこんな状況になって逃げ出すようなことができるほど理性的ではなかった。

目の前で誰かが殺されそうになって、それを防ぐことができる力があるのなら、彼女は戦う。花が吹き飛ばされるのを彼女は許さない。

『……状況が変わった。飛鳥そのままサイレント・ゼファイルスと交戦し時間を稼げ。無理はするな。更識妹はそのまま待機。…織斑は、生きてるか?..』

『生きてるよ!ただもうエネルギーが限界に近い!』

『貴様もそのまま待機だ。先ほどからモニターしているとどうもヤツは動いたISに反応して攻撃を行っているらしい。観客席に打ち込もうとしたのも、デュランダルが索敵のためにISの一部機能を使ったのを察知してだろう』

「目的はIS…?いや、これはむしろ…」

『プログラミングされたロボットの動きだね!』

「うわっ!?!」

なんの前触れもなく束の音がマコトにだけ届く。

「ちよ、ちよっと、大丈夫なの!?!かけてきて」

『ダイジョーブイ！あとちーちゃんにもつなぐよ。ちーちゃん！』  
『……なんだ束。アリーナのロツクは解除できたのか？』

『ちーちゃん人使い荒いよく、それまだ聞いてすらいないし、たぶんこつちから解除できないよ』

『なんだと？』

千冬はこの状況を打開するために束の力を借りる気満々だったが本人からそれが無理だと言われ梯子を外されたような気分になる。アリーナにハッキングしてきているのがよほど凄腕なのか、それともそれ以前なのか。答えは後者だった。

『私とくーちゃんのいる “特別教室” とその接続が物理的に切られてる』

『内部からも仕掛けられているのか……！更識姉は何をしている……！』

『まあ、いつくん狙いのもいいいたし、紛れ込まれてたかもね』

内部からの妨害工作に加え、これをしたということは相手は束が学園に知っているを知っている。底知れない敵に千冬は戦慄する。狙いが見えない、何をしたいのかわからない。故に読めず、真正面から戦えない。

『ともかく、まーちゃん！』

『なに？』

『こつからは束さんがサポートするよ……といっても応援だけだけど』

できることがなく、明らかに沈んでいる束にマコトは場違いながらも笑う。

『ううん、ありがとう。一人じゃないだけ、心強いよ』

一人は心細い。マコトはそれを知っているから、束がオペレートしてくれるだけでも嬉しかった。

『煙幕、そろそろ晴れるよ！』

『了解。…仕掛ける！』

ライフルを量子化し、マコトはIS用ブレードを呼び出す。初心者がはまりやすい罫武装は初心者乗るはずだったこの打鉄にもしつかりと積まれていた。

それを彼女はかつてデステイニーに乗っていたときのように体の前にまっすぐ構え、そのまま右側に担ぐように持つと、瞬時加速で煙幕の中に飛び込んだ。そうして、マコトはカンを頼りにブレードを振り下ろす。

広がった煙幕から先に飛び出してきたのはサイレント・ゼフィルスだった。

『このまま行こう！』

「畳み掛ける！」

まだ態勢が崩れているサイレント・ゼフィルスにマコトは瞬時加速をかけ時間を与えない。サイレント・ゼフィルスの頭部めがけて振り下ろし、一気にダメージを稼ごうとするが、サイレント・ゼフィルスはありえないことにマコトの振り下ろしたISブレードを片手で受け止めた。

「なにっ!？」

マコトはそのまま打鉄のパワーを全開にし、脚部内臓のスラスタ―やシールドエネルギーを利用した推進システムを回すが、ビクともしない。網膜投影に移される各種スロットルのメーターは限界まで回っている。

押し込むどころか、サイレント・ゼフィルスは片腕でマコトを押し込み始めた。

「う、なに、このパワーは……!」

『まーちゃんの子も頑張ってるのに……コイツ!？』

東はマコトのハイパーセンサーと同期しながら、サイレント・ゼフィルスの分析を行う。東から見た打鉄はあまりに性能が低いものだが、格闘戦向けに調整されたアクチュエーターや安定性は僅かながら評価できる。操縦者の望み通りに動く機体という点では十分といえる作りをしており、こうして今のマコトのように過負荷運転をしてもすぐに根をあげないタフさもある。

通常のISバトルであればこの打鉄を片腕で押し返すなどありえない。

『想定される出力……嘘、この、出力……!』



サイレント・ゼフィルスの放ったビーム、これまでの徒手格闘、その場にいるサイレント・ゼフィルス以外のISコアがコア・ネットワークに流した情報も拾い、束はサイレント・ゼフィルスが一体どういう性能なのか分析できでしまう。

白騎士と、同格。それが分析結果だった。

「このままだと、押し込まれ……っ!?!」

サイレント・ゼフィルスの右手にあったナイフが、大出力のビームを放っていたスターブレイカーへと変わって、マコトの顔面に砲口を向けていた。

『まーちゃん!!』

束の悲鳴のような声がやけによく聞こえる。マコトはどうすることもできずただ目の前で広がる光を眺め――。

「やらせない!」

「やらせませんわ!」

何十というビームが一点集中でスターブレイカーを貫き、エネルギーを溜めていたライフルは大爆発を起こす。マコトはその爆発で大きく吹っ飛ばされかなりのダメージをエネルギーに受けるが、ビームの直撃を受けるよりは遥かにマシな被害だった。

「~~~~~!」

至近距離の爆発は流石に堪えたものの、なんとかマコトは地面に着地し、ガラムを再コールする。サイレント・ゼフィルスの姿は未だ爆炎に包まれ見ることができない。

「無事ですか!?マコト!」

慌てた様子で飛び寄ってきたのはダイヴトウ・ブルーを纏ったレイラだった。彼女はビットを二機従え、ロングライフルを装備している。また、マコトがビットのほうをちらりと見ればセシリアがビット4機とライフルをサイレント・ゼフィルスのいるほうへと向けている。

マコトはレイラに素直に礼を言った。

「助かった!レイラ!」

「間に合ってよかった。セシリア!彼女は無事です!」

「それはよかったですわ。織斑先生！観客席の確認は終わりました！これより彼女らを援護します！」

『誰が出撃を許可した……まあいい。篠ノ之はどうした』

「今はアリーナの中央出口に集まっている1組の方を纏めておられま  
すわ」

『了解した』

セシリアの言う通り、箒はここにはおらず、避難している1組についていた。彼女はいつもの6人の中で唯一戦う力がない。だが、彼女はできることをするべきだと不安で震えているクラスメイトたちの元へと向かったのだ。

「しかし、奪って早々投入してくるとは」

「ますます、あの時みたいだ」

「ええ」

『まーちゃん、あの、その子は』

「あ……」

マコトは束と通信が繋がっていることをすっかり忘れレイラといつものように前世のことを話してしまっていた。

「……今度話すから」

『わかったよ！今はとりあえず、生き残らないとね！』

「マコト？なんですか？誰と話しているのですか？」

「レイラも、あとで話す。あたしたちのことを『本当に知っている』人のこと」

「……！わかりました」

マコトとレイラが肩を並べる。まるで、かつてのミネルバ隊の時のように。マコトは灰色のISを纏うレイラが余計に前世のレイに重なって見えた。爆炎が治まっていき、当然爆心地にはサイレント・ゼフィールの影が見える。マコトが無事なのならば、あのサイレント・ゼフィールがやられているはずがないのだ。

そうして、サイレント・ゼフィールのビットが爆炎をはらすかのよう  
に周囲を回転し、再び上空へと舞う。

爆炎が晴れるとそこには、純白だった装甲を焦がし、あるべきはず

のものがなくなり、顔を覆っていたバイザーが消えたサイレント・ゼフィルスがいた。

「なに、あれ」

しかし、その姿を見た簪が恐怖のあまり吐き気を覚える。現れたサイレント・ゼフィルスはまともな状態ではなかった。

『馬鹿な』

あの千冬が言葉を失う。

「そんな……ありませんわ!」

セシリアが、悲鳴をあげるように言った。

「おい、嘘だろ……!」

まだISの知識が浅い一夏でさえも目を疑う。

「これが、わたくしのISを奪った、もの」

レイラが怒りを交えた声音で手に持つロングライフルを向ける。

「たば、ねえ」

『……やり、やがったなあ……!』

マコトは呆然とし、そして、束は怒りのあまり口調が崩れる。

現れたサイレント・ゼフィルスは右腕を失っていた。それはおかしくはない、凄まじい爆発で打鉄のシールドエネルギーを大きく削ぐほどのものを手に持っていたのだ。バリアを打ち抜くほどのエネルギーを溜めていれば当然、そうなるのもうなずける。

しかし、問題なのはその失われた前腕の接続部、即ち肘の断面から覗くものが、コードやフレームのようなものなことだ。

そして、極め付けがバイザーの破壊された頭部。バイザーの下にあったのは複眼型のセンサーで、人間の顔ですらなかった。

『コイツ……ISコアを操ってる人形だ!』

「無人機……!」

サイレント・ゼフィルスは無人機……正確に言うのであれば「アンドロイド」がISを纏っている。奇しくもそれは各国が以前分析した白騎士はアンドロイド説を認めるようなものだった。

『嘘から出た真じゃないんだぞ……!』

白騎士の張本人である千冬はそう言うしかない。

中破したサイレント・ゼフィルスはセンサーを光らせると稼働する。ビットが一気に散開し、それらはセシリアへと殺到する。

「セシリアー！」

「こちらに…!? ティアーズ！」

セシリアも負けじとティアーズを放つが、サイレント・ゼフィルスのビットの動きはあまりに獰猛すぎた。直角に強烈な軌道を描きセシリアのビットを打ち落とすしていく。

「これは!？」

「セシリアー下がりなさい！」

レイラがビット二機を飛ばし、セシリアに加勢する。レイラのビットの動きはマコトが知るレイのもの、鋭い動きでサイレント・ゼフィルスのビットをまずは一機落とす。だが、数が違いすぎるせいか、セシリアのビットを全て落とされる方が早かった。

「こんな簡単に私のティアーズを…！」

今度はセシリアにビットが襲いかかる。セシリアはブルー・ティアーズの機動性を生かし、回避運動を交えながら両手のライフルでビットを落とそうと狙うが、ビットの動きが早すぎて狙いがつけられない。

それどころか、ライフルを撃ち抜かれ左手のものを失う。

「くっ…！ レヴァリエが…！」

「まずい、援護を…！」

『まーちゃん！くるよー！』

レイラがセシリアを助けようとしたところで、サイレント・ゼフィルスが残った左腕に“女王宣誓”を展開し、飛び込んでくる。マコトは先ほどの爆発に巻き込まれてもまだ残っていた非固定ユニットのシールドでレイラに振られた一撃を受け止めるが、限界だったのかシールドは砕ける。

「チィッ！」

砕かれたがマコトは即座にガラムをフルオートで射撃し、牽制する。サイレント・ゼフィルスは本来はビットを懸架するための非固定ユニットをシールドがわりにしながら跳ねるように距離をとる。そ

して、また飛びかかってくる。今度はマコトにだ。

だが、そう簡単にはレイラが通さない。ロングライフルを正確にサイレント・ゼフィルスへと打ち込む、腹部に命中、サイレント・ゼフィルスはよろめく。

「ありがとう、レイラ！」

「任せてください、マコト！」

マコトはガルムを放ちながらサイレント・ゼフィルスへと加速する。

「弱点は！」

『わかんない！でもあのセンサーは弱そう！』

「了解！」

頭部のセンサー部分を弱点と見た束の言葉にマコトはサイレント・ゼフィルスの頭部めがけて銃撃をする。すると、サイレント・ゼフィルスは頭部を庇うような仕草をする。

「ビンゴ！」

『やつりい！たまにはカンもいいね！』

「流石！みんな！こいつは頭が弱点だ！」

マコトが頭を狙いながら動けば露骨にサイレント・ゼフィルスの動きが鈍くなる。セシリアを襲うビットの動きにも隙ができた。

「そこっ！」

脇を通し、背後に回ってきたビットを偏差射撃でセシリアが撃ち落とす。レイラはそれを確認するとマコトの援護にロングライフルで射撃を開始。サイレント・ゼフィルスの足元へ打ち込み、体勢を維持させない。

「当たってるけど、やっぱりまだバリアが！」

『絶対防御はかならず人体の弱点で強く発生するから効果はあるよ！』

「こつちが先に削り切れるかの勝負か……！」

根比べだった。サイレント・ゼフィルスが力尽きるか、先にマコトたちの弾薬がつきるか。

『束。どうにかお前からあのコアにアクセスできないのか』

『ダメ！あのクソ人形がコアをネットワークから乗っ取ってる！』

東がコアへのアクセスをさつきからしていないのはこのためだった。当初は東自身コアが自閉モードで遮断されているのかと思っただが、実際はサイレント・ゼフィルスを操っているアンドロイドがISコアを「監禁」していた。

「こいつはここで、倒さないで！」

「ええ。こんなものがいていいはずがない」

マコトの言葉にレイラが同意する。このサイレント・ゼフィルスは今、この世界に存在してはいけないものだ。ISが無人運用できるようになれば、もはやISがインフィニット・ストラトスに戻ることはできなくなる。人が宇宙へ、無限の可能性を見せるためにあるそれが、人類の未来を閉ざすものになってしまう。

『お願いまーちゃん！みんな！あのクソ人形をぶっ壊して！』

開発者本人の願いは、マコトにしか聞こえていないはずなのに、全員に届いたかのようにだった。

「……頭を、潰せばいいんだな」

倒れていた一夏が立ちあがる。彼は雪片を構え、瞑想した。何をやる気だ、と全員が思ったが即座に理解する。零落白夜。バリアを無視し、掠っただけでも大きくエネルギーを奪う絶対の剣。人間相手ではエネルギーを奪った時点で強制停止するそれが、機械に放たればどうなるか。

「白式、力を貸せ」

『』

白式は……白騎士は、彼に力を貸す。以前の搭乗者のように、純粹で真っ直ぐな心。ただ、目の前の何かを斬ろうというシンプルな目的。

——零落白夜の使用を許可。

提案は、認証される。

「——零落白夜、起動」

雪片の刀身が展開し、青白い無敵の剣が顕現する。その剣を掲げる一夏の姿はセシリアやレイラから見ればまるで、アーサー王伝説のアーサーが選定の剣を抜いた場面にも見えた。世界のISを全て切

り裂いた最強の力に選ばれたのは今、まぎれまもなく織斑一夏なのだ。

『嘘。いっくん、白騎士の機能、少し戻してる。白式が、インフィニツト・ストラトスに戻ってる』

人の可能性が、定められたプログラムを超えた瞬間だった、

サイレント・ゼフィルスは最大の脅威に気が付き、一夏を排除しようとして一夏の方へと振り向くが、そうはさせまいとマコト、レイラ、セシリアの一斉射がサイレント・ゼフィルスをよろけさせる。

「今だよ！一夏！」

「斬り裂けえええええっ！」

振り下ろされる断罪の剣。光の刃はサイレント・ゼフィルスの頭部を貫き、そこで白式のエネルギーは限界を迎える。振り下ろしたままの一夏から雪片、白式がまるで雪に溶けるように消えていく。

サイレント・ゼフィルスはガクガクと痙攣したかのように2、3回震えるも、そのままガシャンと糸が切れたかのようにその場に崩れ落ちる。セシリアをまだ襲っていたビットも全て機能を停止し落下した。

「……どうだ、機械野郎。人間様舐めんな」

一夏が倒れたサイレント・ゼフィルスにそう言っ、彼らの勝利が確定した。

サイレント・ゼフィルス撃破後、クラス代表戦は中止となった。後日残りの一回戦だけを行うことが周知されたが、優勝商品など当然配布されない。

「うわーん！半年間フリーパスがあ〜〜！」

事件の翌日、朝のSHR前に本音のそんな悲鳴が響いた。彼女の周りの生徒たちも無念そうな顔をしており、一夏は苦笑いする。あんなことがあったのに1組は平常運転だった。

「布仏、流石に不謹慎が過ぎるぞ」

昨日の避難時に仲がよくなったのか、箒が本音に苦笑いしながらそう言ったが「でも」と本音は駄々をこねる。困ったものだ、という

表情をする彼女に、周囲は笑う。一夏は凶太い1組の生徒たちに感謝しながら、今朝から姿の見えないマコトの席を見る。彼女の前の席の相沢さやかが居心地悪そうに空席となったマコトの席をちらちらと見ている。

前日のサイレント・ゼフィールズ撃破後、即座に交戦をした一夏たちには箝口令が出され、疲れている体のまま取り調べや各機体の交戦記録の抹消、IS学園との誓約書まで書かされた。交戦記録の抹消はセシリアが難色を示したが、本来は自身の乗機を奪われ、勝手に使われ襲撃までされたレイラが彼女を宥めることで認めさせた。

「(人類の可能性を否定する存在か……)」

レイラがセシリアを説得するために告げた言葉が妙に頭に残っていた。また、それをマコトが肯定し「あんなものがあつたことを世界に知らせちゃいけない」とまで言った。マコトがISの開発段階から関わっていることを一夏は知っている。いつの頃からか束と仲良くなり、その時期を同じくして束も大きく変わっていった。二人の間に何があつたのかは一夏も、千冬でさえも知らない。

インフイニット・ストラトス。ISの正式名称と名付けられたそれは授業で「無限の成層圏」という意味を持つと教えられていた。だが、それがどういう願いを込めてつけられたのかは説明している真耶も言わなかった。

どういった願いを持ってその名を束は名付けたのだろうか、と一夏は手元にある白式を見る。姉が使ったISをそのまま受け継ぎ、流されるままに今日まで来ている。関わるわけがないと思っていた一夏はあまりISに興味がなく、姉の応援もテレビ越しでしていた。

立ち塞がるものを全て斬り倒していく姉の姿はかっこよかったが、どこか自棄になっているようにも見えていた。家族だからこそわかる、同じ流派の剣術を学んでいたからこそわかる、荒い太刀筋。

「(千冬姉は、どういう気持ちで雪片を振るってたんだ)」

姉と同じ剣、同じ力。力は無色で何にでも染まる。篠ノ之姉妹の父に告げられた言葉が蘇る。

「(白式、お前は…知ってるのか?)」



地続きの記録を持ち続ける白式は何か知っているのかもしれないと一夏は思ったが、彼女は何も応えない。彼女は騎士だ。主人に仕える忠実な騎士。創造主の願いを未だに守り、使役するものの隣に立ち続けるだけ。

だから、最初の相棒の「こんなはずじゃなかった」という後悔の元でも剣を託し、今の相棒の「ただ剣を振るう」という曖昧な意志の元でも剣を託す。

「一夏さん、どうされましたか？」

「…ああ、レイラか。いや、なんでもないさ」

「なんでもない、という人は大抵、なんでもなくないですよ」

思考に耽っていた一夏にレイラが声をかける。セシリアは本音たちに混ざっているのか一緒にではなかった。

「なんというか、レイラって結構ズバつと言うよな」

「ふふ、遠回しに言うと、人は誤解を招きますから」

「好ましいと思う、ってあれはそうじゃないのか？」

「ああ、一本とられてしまいましたわ」

お淑やかで、本当のお姫様のように優雅な空気を纏うレイラ。彼女が灰色のISを纏い戦う姿を見た一夏は、とても同一人物には見えなかった。ビットの動きもセシリアより激しく、明らかに実力が上に見える。

「レイラって、強かったんだな」

「さあ…それはどうでしょう」

「いやでも、ビットとかすごい動きしてなかったか」

「あれは慣れの問題ですよ」

「そんなものなのか…？」

「適正があれば、あとはひたすらイメージトレーニングと実践を繰り返して…そうですね、戦場全体を俯瞰するような感覚…空間認識能力というものを身につければ一夏さんもできますよ」

「俺も？適正があれば？」

「ええ」

一夏のBT適正。レイラはイギリス本国から失われたサイレント・

ゼフィルスとの交戦記録の代わりにせめてそれを寄越せと言われていた。強欲な「彼ら」にレイラは一層軽蔑したが、要求に応えるのはこれまでとしようと考えている。

「……友達は、大切ですからね」

こんな薄氷の平和の上でも尊く大切な友人の存在。レイラは強く願う。この平和を、かつて前世で「彼」が願った平和とは違うのかも知れないが、続けていきたい。

「BT適正の検査は簡単です。セシリアのブルー・ティアーズに簡易測定器が内蔵されているので、あとの休み時間にやってみましょう」  
「おっ、そうなのか。じゃあやってみようかな」

「楽しみですね」

「そういえば、マコトもあるのかな」

「…さあ？検査をしたくとも、今マコトは謹慎中ですし」

レイラがマコトの席を見ながら言う。マコトは謹慎中でこのクラスに今いなかった。簪と一夏を助けるために乱入したマコトはかなりの無茶をしてあの場に来ていた。

サイレント・ゼフィルスの奇襲の中、ピットで観戦していた彼女は次の試合の準備のために乗り込もうとしていた別クラスの生徒をなんと倒して駐機されていた打鉄を強奪。当然、その時点でまづいのだが、そもそも許可なしにISに乗り込むこと自体違法で、授業やアリーナでの練習申請時・試合使用以外はIS学園でも無断使用は禁じられている。その上、制止を呼び掛けた上級生を振り解き、千冬の命令も無視して彼女は簪の窮地を救ったのだ。

戦闘後、打鉄の損傷は見た目よりもひどく、メーカー修理レベルのものになってしまったと思ったらしく、マコトは数々の問題行動とISの損害の責任をとるため数日間の謹慎処分となった。もちろん、撤退命令を無視した一夏にも膨大な枚数の反省文が書かされた。

一方で、一夏に引きずられるような形となった簪の処分はなく、同じく千冬の指示を無視したセシリアやレイラにも処分はなかった。セシリアやレイラは自国の機体を奪還するためと乱入を正当化したためだ。一夏はちよつとそれはずるくないか、と思っただが嘘でもない

ので止めることもできなかつた。

「マコトも無茶するよな…」

「まあ、それが彼女らしいところですね」

「……そういえば、レイラっていつの間にかマコトとめちやくちや仲良くなってるけど、もしかしてここに来る前からの知り合いなのか？」

一夏の言葉は何気ないもので、特に裏があるわけでもない。しかし、レイラはまさか一夏からそんなことを聞かれるとは思わず少しだけ目をぱちくりとさせると、またいつも通りの柔らかな笑顔を浮かべる。

それが貼り付けた笑みだと一夏は気がつかない。

「気になりますか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ。まあ。マコトってすぐ誰とも仲良くなるというか、簪もそうだったし」

「そうですね。マコトは…彼女はとても好ましく思いますよ」

「そっか。なら、これからも仲良くしてやってくれ、俺たちの幼馴染みと」

「ええもちろん」

今度は、最期まで。レイラは心の中でそう誓う。

そんな彼女と一夏のやりとりを聞いていた「狐」がいることをこのクラスの生徒は知らない。

「そういえばマコトって部屋にいの？」

「いいえ、「特別教室」で謹慎中は作業をさせられるそうですよ」

「特別教室」という名の束の研究所でマコトはあるISを前にしていた。それは、簪の大破した打鉄二式と、彼女が装備したオプシヨン「迅雷」だった。

「まーちゃん、ちよつとそのレンチとって」

「はい、束姉さん」

彼女に課されたのは謹慎という名の束の手伝いだった。サイレント・ゼフィルスのコアは一時IS学園に保管され、数週間後に戻すこ

とが決まっている。それはあの無人運用の

記録を消し、機体を初期化した上で再度奪取前に状態を戻すためである。幸いにしてそんな無茶をできるのが開発者たる束で、襲撃時に何もできなかったことから束からその役目を買って出たのだ。

その前に、不可思議な機能停止が起きたと簪から千冬に報告のあった打鉄二式のパッケージを確認することとなった。

「うーん、ここを開くと…お、あったあった。いやあ、こういうところは束さんも評価しちゃうなく」

整備しやすい内部構造の配置には束も称賛の言葉を送る。天才、というのは何事も最高を求めてしまい色々と整備性を度外視してしまうことがある。束はそれも見越して白騎士にほぼメンテナンスフリーとなるようナノマシンにより自己整備機能を与えていたが、束以外が作ったISはそうもいかない。誰でも整備できるようにわかりやすく、尚且つ構造も極力シンプルに。日本のISは特にそれが顕著だった。

「どう?」

「その、簪ちゃんだっけ?まーちゃんの友達。その子が言う通り、これわざと外されてるね」

束が指を指した「迅雷」の内部には何かのプラグが幾つかあり、そのうち一つが抜けていた。激しい機動をする以上、差込口はチャックが設けられ簡単には抜けないようになってはいるはずだがそれが抜けていた。

「出撃時にエラーがなかったってことは、緩めて抜けやすくしてたんだらうね、ほらここ、虫眼鏡でみると差込口にプラグ側が引っ搔いてできた傷があるよ」

「……ほんとだ」

「これはブチギレ案件でしょ。束さんがやられたら原子レベルで分解するね、犯人」

「やめてね?」

「うそうそ、冗談だよ。でも、こんなくだらないこととする馬鹿がいるんだね。ここ、一応進学校以上の難関高校だよな?」

「そうだけど、頭の良さと性格の良さはかならずしも比例しないんじゃないかな」

「その点、東さんは優しくて頭が良くて可愛くて最高だね！」

「……可愛いよりも美人のほうが正しいんじゃないかな……」

「え」

マコトの思わず言ってしまった言葉に東が顔を真っ赤にして固まる。マコトもまさかそんな反応をされるとは思わずびっくりしてしまう。彼女はそこまで鈍感ではない、前世では二度の恋も経験している。だから、東の照れ方が同性に言われたにしてはあまりに強かったのでマコトは脳裏に前世での恋人の反応などが思い返される。

「東様、マコト様。お茶の時間ですが」

「うひゃい！くーちゃん、ありがと！」

タイミング良くクロエが作業を行っている格納庫に入ってきて声をかけてくる。東とマコトは飛び上がって取り繕うようにクロエに向いた。

「……何かありましたか？」

「なんでもないよ、なんでも。それより、クロエは今日ロングスカートにメイド服なんだね」

「はい。数日前校内を歩いていた際、イギリスからの留学生だと仰る金髪縦ロールの方からメイドとはこういうものだと伺いまして」

絶対セシリアだ、とマコトは思った。

「というか、クロエって外出て大丈夫なの？」

「あ、そこは大丈夫だよ。くーちゃん実はまーちゃんたちより先輩の二年生で在籍はしてるから」

「え、先輩!？」

衝撃の事実だった。幼く、てっきりマコトたちよりも年下かと思っていたクロエが形だけとはいえここの二年生だということ。…二年生がこんな地下で本格的なメイド服を着てお茶を用意するという状況が凄まじいものだともコトは感じる。

「…クロエ先輩って呼んだほうがいい？」

「気にしないでください。東様のご友人で、かつマコト様はその中で

も千冬様と同じく特別な方です。それに、在籍しているとはいえ、特別学級の生徒扱いで学校にただいるだけのようなものです」

特別教室とこの研究所が呼ばれているのはそのためだった。形上は目の不自由な生徒、クロエ・クロニクルはここでISのハイパーセンサーを応用した擬似視覚を得るための開発、実験に参加していることになっている。

「……束姉さん、もしかして、束姉さんも先生とか言ったりしないよね」

「正解！どどんぱふぱふ。束さんも形上は『七槻しばね』って名前前でこの『特別教室』の担任だよ」

まさかとは思ったが束も形上は教師としてここにいることにマコトは信じられない気持ちとなった。加えて束は「ちなみに超稀に変装してちゃんと授業もしてるよ」と言った。

「それ、大丈夫なの？というか束姉さん授業できるの？」

「結構失礼なことを言うねまーちゃん！ちーちゃんにも言われたけど天才に不可能はない！」

「束様の授業は束様の天才的な頭脳についていけない愚図な生徒でも理解できる大変わかりやすいものとなっています」

「……クロエ、そんな愚図、とか言っちゃいけない。束姉さんも、クロエはたぶん束姉さんの娘みたいな感じなんだろうけど、ダメだよ、汚い言葉教えちゃ」

「あはは、ごめんごめん。気をつけなきゃね」

娘の言葉遣いを指摘する父親のようだと束はマコトを思った。それはちよつとだけ、束にとつて嬉しいという感覚だった。

「ああそうだ、くーちゃん、お茶だよね」

「はい。今日はそのイギリスの方から頂いた茶葉を使っています。なんでも、彼女のご友人がお持ちの王室御用達のもの」

セシリアに加えて、レイラの持ち物がクロエに渡っていたらしい。まさかこんなところで友人たちの名前を聞くことになるとはマコトも思わず、意外と世の中狭いなと思った。

「へ〜期待しちゃうな〜。イギリスに潜入してた時、研究員のご飯と

か最悪だったし、お茶とかちやんとしたの飲めてなかったから期待しちゃうな〜」

「いい香りでしたから期待できると思いますよ」

「よし、じゃ、お茶にしよっか、まーちゃん」

「そうだね」

踵を返したクロエに続いて、二人も格納庫を出ていく。

打鉄二式の調査結果はその日のうちに出され、指紋も検出されたことからこの工作を行った生徒は特定され、停学処分となった。また、この事件以降、一夏の周りに嫌がらせをするものはいなくなった。見せしめとして停学となったもののせいなのか、それとも「別の何か」に忠告されたのかは誰も知らない。

一つ言えるのは学園に束の間の平穏が戻ったということだった。

「へー、そんな仲良さそうなんだ」

「明かりの落ちた生徒会室の中で、楯無は「報告」を受けていた。

「それにしても、誰も彼女のこと疑わないのが不気味なぐらいね。素人がこんな腕持つてるわけじゃないでしょうに」

楯無の視線の先には削除されたはずのサイレント・ゼフィルスとの交戦映像が流れているモニターがあった。そこにはただ一人量産機で異常な強さだったサイレント・ゼフィルスと戦うマコトの姿がある。

「イギリス代表候補生、レイラ・デュランダル。父はイギリスの議員にして元貴族、ギルバート・デュランダル。母元王室の第四王位継承者にして現在はイギリス空軍大佐、タリア・デュランダル。一人娘として生まれ、幼少期にセシリア・オルコットと出会い彼女とは幼馴染み。オルコット家の当主「暗殺時」には彼女を支え、オルコット家の使用人とともに、セシリア・オルコットの台頭を支援…」

手元にある資料を楯無は確認するように読み上げる。

「その後、一時軍学校に体験入学し、その時のIS適正検査で「A+」を出して即代表候補生。オルコット家が投資するイギリス軍次期主力機開発計画「ティアーズプロジェクト」に参加。二号機のテスト

パイロットに選出されるも、先の強奪事件で急遽三号機を受領し、そのままテストパイロットを継続」

資料には本来はイギリスしか知り得ない、ダイヴトウ・ブルーの詳細なスペックが記載されていた。

「現時点では一号機仕様を急遽装備、性能、能力共に一号機とほぼ同等であり搭載予定だった特殊装備は見送り。ただし、BTシステムの最適化が行われ、より強い感度でビットを操作可能。……なるほど、それである無人機並のビットの動きというわけね。本人の素質もあるだろうけど」

レイラの才能の高さは楯無も認めるところだ。いや、まだ全力を出しているのかさえわからない。実際のところ、レイラはまだ本気で戦っていない。それはマコトも勘付いているところだった。

「それで……本命はこの情報よ。日本への渡航歴……IS学園入学以前はなし。公式、非公式でも、か。はあく外れかしら。でも、彼女イギリス軍の諜報部の通信に何度か名前出てきてるらしいのよねえ」

楯無が知りたかったのはレイラがマコトにIS学園に来る以前知り合っているかどうかだった。それはこの情報によって否定されてしまう。調べたのは信頼できるものであり、今彼女の目の前にいる少女だ。

「たぶん彼女はイギリスの諜報部から織斑くんのこと頼まれてるだろうけど、監視してる限りなんか、はぐらかしてるみたいだし、私の考えすぎかしら。マコトちゃんと仲いいのもウマが合ってるだけなのかなあ」

マコトはレイラの現地協力者ではないか。楯無はそんな風に彼女を疑っていた。だからマコトに渡したカメラには盗聴器を仕組んでいたが入っていたのは妹との楽しそうな会話だけで、その後1日の間でも何らそれらしき情報はなかった。

「ま、こんだけ必死に簪ちゃんのことを守ろうとするマコトちゃんにはちよつと腹芸は難しそうだし、今後も監視だけは続けるように。それよりも、今は『特別教室』の回線ぶったぎったの探さないかね。見つけて信頼回復しないと後が怖いから」



平和の下に、幾つもの影が蠢く。それは善なるものか、悪なるものかはどれも黒くてわからない。楯無たちの落とす影がどちらなのかを知るのには彼女たちを重用するものと、彼女たち自身しか知らない。

## # p h a s e — 1 2 「故郷（前編）」

サイレント・ゼフィルス襲撃事件から数日が経過した日曜日の朝。調査途中で東に「ここまでで大丈夫だよ」と謹慎を解かれたマコトがパーカーにジーンズという私服姿で食堂にやってきていた。

彼女の隣には同じく私服姿の簪がおり、彼女もマコトと似たような格好だった。

「何を食べるの？マコトさん」

「ん、パンとスープとコーヒーでいいかな」

「わかった。取りに行くね」

「え、いいよ。自分で行くから」

「疲れてるでしょ」

「え、まあ…」

東のサイレント・ゼフィルスの分析は彼女といえど難航し、マコトはその分析に必死に食らいついていたが結果的にやれることがなくなっていくって、実質追い出されたというのが正しかった。東のほうはむしろ追い出した気持ちなどまったくなかったのだが、マコトはあまり役に立てなかったかな、と考えてしまう。

その落ち込みが顔に出ていたのか、簪にすら気を遣われてしまった。

「（はあ：気にする必要はないと思うし、やれるだけのことはやった。あとは束姉さんに任せよう）」

今はイギリスへの返還期限があるサイレント・ゼフィルス本体の解析が先なのだが、彼女に任せておけばあの人形も解析してくれるだろう。

しばらく窓から食堂の外の生垣をボーツと見ていると、簪が朝食の乗ったトレーを持ってくる。簪もパン食なのか、マコトと同じメニューだった。

「お待たせ」

「いや全然待ってないよ。ごめんね」

「いいよ、私が好きでやってることだから」

サイレント・ゼフィールズ戦以降、簪との距離がもつと縮まったと思うマコトだが、簪は殺されかけたのだ。そこを助けたマコトにそうなってしまふのはしょうがないのだろうとマコトは思った。友人として仲がいいことにこしたことはない。

「それにしても、簪さんも災難だったね」

「犯人は停学処分になったし……いいかな」

「あたしたちへの嫌がらせもなくなったし、これにて一件落着って感じだね」

一夏と簪によるクラス代表選中に発生した簪の打鉄二式に起きた不調。それを引き起こしたのはある一年生の生徒で、マコトに食堂で体当たりをした生徒だった。彼女は一夏を貶めようとした者たちの一派で、その中でも一番過激派だったらしく簪のISに細工したのも彼女だったという。

一歩間違えれば命を失う大事故にもなったかもしれない、加えて起きたサイレント・ゼフィールズ襲撃事件で簪は不完全な打鉄二式で戦う羽目になり実際に殺されかけた。後者は伏せられたが、それでも情状酌量の余地はなく厳しい処分が下された。

なお、詰問を行ったのはなんと真耶で、同席していたという千冬が、束とマコトに研究所で「あれは恐ろしかったな」と苦笑いで話していた。聞けば真耶は元日本代表候補生らしく、後輩である簪が被害を受けたことに普段の優しくちょっと臆病な姿からは考えられないほど激昂したという。

マコトは優しい人が怒ると怖いというのは間違い無いな、と真耶にも敬意を払うことに決めた。

「忙しかったね。ゴールデンウィーク前に」

「うん。なんとというか嵐のような一ヶ月間だった」

入学してここまでの、様々なことが起こりすぎてマコトはここにきてドツと疲れが出ていた。もう少し頑張ればゴールデンウィークになり、実家に帰ることになるだろう。そうすればマユにも会える、とマコトは背もたれに体を預けた。

「はあ……そういえば、簪さんの打鉄、大丈夫なのあれ」

「…………完全に壊れたわけじゃないけど、装甲は全とつかえ、内部構造も3割は交換しなくちゃいけない。私のは試作機だからパーツも全部選定品だし、規格落ちしたのは使えない。だから来月までは乗れないかな…………」

簪の打鉄二式の受けたダメージは大きく、完全に分解してから再度組み立てる必要があるほどだった。サイレント・ゼフィルスの一撃はそこまで重く、簪は本当に生きて帰れたことが不思議だった。

「その間は どうするの？」

「一応、二式作るときの副産物で出来た打鉄丙型っていうマイナーチェンジ版があるからそれを代用機にする感じ」

ポケットから取り出した携帯端末を簪はマコトに見せる。画面に写っているのは倉持技研のHPで「最新機種」と書かれたリストの中にあるものの中に「打鉄丙型」と名前があつた。それをタッチし、画像が出てくる。

「これが打鉄丙型。打鉄二式を作るときに出来たパーツの規格落ちパーツをつかって組み上げてる機体で、性能は全体的に上がってる。一応、高機動型扱いで、非固定ユニットをシールドから背中側に展開するスラストユニット“火蜂”に交換してるよ」

「へえ〜」

その姿はマコトの前世で見た「ブレイズ・ザクウオーリア」を彷彿とさせた。ただ違うのはスラストユニットにはビームキャノンが内蔵されており、運用方法は中距離支援機といったものになりそうだった。

「簪さんって、打鉄二式もそうだったけど、中々遠距離戦が得意なの？」

「…そういうわけでもないけど、そっちのほうが好きだからかな」

「そっか。あれだけ不完全な状態でも一夏追い詰めてたし、合ってると思うよ」

「…………ありがと。ただ、素人の一夏さん相手にこっちもあれだけ追い詰められちゃったから」

「まあ、流石に零落白夜を投げようとは思わないでしょ」

「それは、まあ」

戦場では想定外、でしたからという言い訳はできないがISバトルはあくまで競技であるためマコトは簪を励ますように言った。零落白夜を投擲するという千冬ですらしなかつた暴挙はサイレント・ゼフィルスのせいで霞んでしまったが、十分にあり得ない行動で校内新聞に載ってしまったていた。

一夏は「しょうがないだろ！射撃武器がねえんだから！」と新聞を非難していたが、マコト以外のいつもの5人や1組の生徒たち全員が「ありえないでしょ」と口を揃えてしまった。

「でも、そこが一夏の柔軟性ってことになるのかな。ビーム・ブーメランとか似合いそう」「……なにその名前からして浪漫ある武装」

「あ、あたしの想像上の武器だから…」

思わずマコトはポロツと前世なら一夏はソードインパルスが合うだろうなと思いついてしまい、誤魔化す。簪はそれで納得したのか「それでも、あつたら面白そう」と興味を持っていた。

「確かに、一夏さんは格闘戦のセンス自体はあるのだから、本命に繋ぐための武器が必要。織斑先生みたいにわけのわからない左右移動でロックオン切つて、気がつけばガリガリされてエネルギー切らすのは無理だし」

「そうだね。せめて牽制程度に撃てるマシンガンみたいのがあればいいんだけどね」

「ただ、火器管制もないんですよ、白式。倉持から聞いたけど」

同じ開発元なため、簪も白式の詳細スペックは聞いていた。姉妹機というわけではないが、白式も打鉄二式同様、倉持技研の次期量産型ISの候補の一つのことだった。

量産時は流石にあそこまで振り切った性能にはならないが格闘戦を主眼に置いた前衛機で、高コストな上級者向けの機体となる予定だという。中衛向きな打鉄二式とはハイローミックス構想に基づいた売り込みを将来予定しているらしい。

「うん。だから射撃武器を持っても手動で狙いつけなきゃいけないし、射撃中の補正機能もないから本当に銃に慣れる練習しなきゃいけ

ないみたいだよ」

「……一夏さん、射撃の腕ってどうなの」

「ボール投げるのは上手いけど、射撃は壊滅的だね。射的でいつも財布の中空にしてる」

一夏に射撃武器を与えたところで今の白式では扱えないし、本人に適正が無い。となると、やはりビーム・ブーメランのような投擲できる近接武器などがあったほうがいいのだろう。実際、雪片を投げつけて、行動不能状態だったとはいえ簪に当てている。

簪は彼の射撃適正の無さをマコトの言葉で理解し、倉持の技術者が何か作るまで待つしか無いのだろうなどと、素人でありながらトンデモ機体を渡されてしまった彼に同情した。

「あら、マコトさんに簪さん、ご機嫌よう」

「あ、セシリアさん。おはよ」

二人の話が一区切りついたところでセシリアが声をかけてくる。彼女はいかにも大人の女性らしい落ち着いた私服姿で、上品さが際立っていた。ロングスカートもよく似合っている。

「やっぱりオーラが違うね…」

「……お嬢様だね……」

マコトと簪はセシリアの姿に格が違うと認識する。マコトも簪も、世間一般から見ればかなりの美少女なのだが、セシリアはルックスに加えて持っている雰囲気が違う。溢れ出る大物間と真面目な時は確かなカリスマがある。

「そうでしょうか？ 私はオルコット家の当主。恥ずかしい格好はできませんわ」

おーほっほっほっ、と高笑いするセシリアに二人は苦笑いする。この自信たっぷりな姿も一ヶ月で随分と慣れてしまった。1組の生徒たちも冗談交じりで「セシリア様」などと呼んだりしているが、セシリアはどちらかといえばクラスメイトたちに遊ばれる側である。

「セシリア、バッグを忘れていますよ」

「あら、レイラ。ごめんあそばせ。私としたことが忘れ物とは」

「外出が楽しみなのは結構ですが、はしやぎすぎですよ」

苦笑しつつセシリアに手持ちのバッグを渡すのはレイラだった。彼女の服装はワンピースの上にジャケットを纏っており、頭を後ろで結っていた。マコトは本当にこいつは前世同じ男だったんだよね？ と思ってしまうほど女性的で、タチが悪いのがレイラは本当にお姫様で、その立場に相応しいぐらい愛らしいということだ、

「な、そんなはしやくなど」

「深くは言いませんが、外で怪我などされたらチエルシーが本国から飛んできますよ」

「うっ…わかりましたわ」

マコトはレイラの立場などを知ってからセシリアとレイラのやりとりを改めて見ると、セシリアはレイラに頭があがらず、また無意識に守ろうとしているようなところが見受けられた。考えてみれば一夏に誑かされたなどと勘違いしたのも、元とはいえ自国の姫様がと考えれば納得の過剰反応であった。

また、レイラのほうがセシリアより幼い容姿なのも相まって、妹のようにも見ているのかもしれない。

「それはともかく、お二人ともその格好はなんですか」

バッグを受け取ったセシリアは突然そんなことをマコトたちに言い出した。

「なんですか、って言われても」

「…私服」

「それが!?お二人とも自身の容姿を理解していないのですか!着飾らなくてどうするのです!」

マコトと簪は同時にため息をついた。二人ともその手のことは散々家族から言われていた。私服のセンスがひどい、もっと可愛い格好をすればいいのに等々。マコトと簪は私服の趣味だけは共通していて、過ごしやすさを一番にしているのだ。

「レイラ!この二人を部屋に連れていきましよう!ちゃんと粧さなければ」

「セシリア、落ち着きましょう。服装など人それぞれです。それに、二人の服装が小汚いといったわけでもないでしょう」

「ですが……」

「夜会に出るわけではないのです。本日はマコトや一夏さん、箒さんの故郷に伺うのです。皆さんにとっては心安らぐ場所。整えるのは外の者である我々だけです」

「……それもそうですが」

「二人を想って言っているのですが、ここは抑えるべきです。出発まで時間もないのですから」

レイラがセシリアを宥め、セシリアは「そこまで言うのでしたら」と一先ずマコトたちを着替えさせるのを諦めた。レイラにアイコンタクトでありがとう、とマコトが伝えると、彼女は可憐にもウィンクした。

「(本当にレイだったのか自信なくってきちゃったよ)」

割とブーメランな考えをマコトはしているが、実際レイラの今世への馴染み方がかなりのものなので仕方がなかった。

彼女らは今日、一夏やマコト、箒の故郷である藍越市へ向かうことになっていた。なんだかんだで戻れなかったが一夏が今日ようやく行こうと決めて、一夏がマコトたちを誘ったのである。千冬もここ最近の騒動続きで疲れただろうと快く一夏の外出を承認していた。

ただ「ついでに家の冷蔵庫にビールが置きっぱなので取ってこい」と相変わらずのダメっぷりを申請時に同行した一夏、マコトと箒に見せていたので色々と台無しだった。

「それにしても一夏さんたちは遅いですわね。てつきりもう来ているものかと」

「あく、あの二人、毎日朝稽古してるし、汗流したり着替えたりしてるんじゃないかな」

「部屋にはシャワールームが1つしかありませんし、待ち時間が発生してしまうのでしょうか」

「そ、レイラの言う通り。二人ともそこは大変みたいだよ」

男女同室のため、急いでシャワーを浴びたい時も二人で浴びれないのが一夏と箒の部屋だ。なお、マコトたちは知らないがそもそも入学初日に発生した「織斑篠ノ之下着姿で廊下事件」は一夏のラッ



キースケベではなく一夏が剣術を辞めていたことに正気を失った箒が暴れたために起こった出来事である。

一夏が箒を異性として意識していないのはマコトも知っているが箒もそれは同じで、むしろ箒のほうがひどく、彼女はシャワーを一夏と浴びても問題ないと考えていたが一夏がそれを固辞している。そのため、今日も二人は朝の稽古の後、順番にシャワーを浴びている。「あ、今から部屋出るから校門のところで待っててだつて」

「わかりました。では行きましょうか」

マコトの携帯に一夏からメッセージが入り、学校の入り口で合流となった。食べかけのパンとスープをマコトと簪はサツと食べてトレーなどを戻してからセシリア、レイラと一緒に校内を移動する。

休日の校内は静かなもので、朝のうちは休んでいる生徒が多い。一部の生徒は朝から散歩をしたりする。

「…おや、あれは」

セシリアが移動中に何かに気がついたのが声を漏らす。マコトたちはなんだと周囲を見渡せば見慣れた白衣姿の女性と無改造の学園の制服を着た銀髪に何かゴーグルのようなものをした少女がいた。

「(え、あれ束姉さんとクロエだね)」

朝とはいえいくらなんでも外出はまずくないか、と思つて二人に歩み寄つていくセシリアにマコトは慌ててついていくと、近づくにつれて白衣姿の女性が髪色などは同じだが髪にはウェーブがかかっており、髪型もよく知る束とは違いポニーテールで頭に彼女が使用している簡易IS「時計兎」の兎耳がなく、おまけにセシリアに気がついて振り向いた彼女は赤い枠のやぼったいメガネをつけていた。

そのせいかな、他人の空似程度に印象が変わっているが、マコトはやっぱり束だと確信する。彼女の学園での立場を知っているからだ。

「クロニクル先輩、ごきげんよう」

「…おや、オルコットさん。おはようございます」

セシリアに声をかけられたクロエは口元に微笑みを浮かべて挨拶を返す。リボンなどをみると本当に二年生のようで、マコトはクロエが言ったことが嘘でなかったのだと知った。

「セシリア、こちらの方は？」

「二年生のクロエ・クロニクル先輩ですわ。先日、校内で迷われていらっしやっただので道案内をしましたの」

「なるほど……失礼ですが、隣の方は先生ですか？」

レイラの問いかけに、束……が扮する女子教師はメガネをクイツと人差し指で上げてレイラへと向く。首からIDカードを下げており、そこには「七槻しばね」と名前と写真が載っている。

「……なるほど、君たちが……始めまして、一年生にはまだ顔見せをしていなかったね。私は七槻しばねという」

声音は普段の束よりかなり低く、白衣姿なのも相まってマコトも含め全員が「七槻しばね」という人物が学者っぽい先生だと判断する。マコトはそういう演技なのか、と無理に研究者としての身分は隠さずこうしたほうがやりやすいのだろうと思った。

「初めまして、七槻先生。私は——」

「クロエ君から聞いている。1年のオルコットさんだろう。彼女の道案内をしてくれたと聞いている。感謝するよ」

「そ、それはどうも」

「七槻先生。私はレイラ・デュランダルと言います。お二人はこちらで何を」

「デュランダルさん。私たちは現在実験中だ」

「実験中？」

「そうだ。クロエくんの目が不自由なのはオルコットさん、君は聞いているだろう」

「ええ、以前、それもあつてご案内を」

「だから、今彼女にはこの簡易ハイパーセンサーを装備させ、散歩中というわけだ」

七槻しばねを名乗る束はなんとも凶暴な笑みを見せる。普段の束はマコトからすると本音と気が合いそうなくらい柔らかな笑顔を浮かべるのだが、今の彼女はどうみたってマッドサイエンティストの気がみえる。

全員が七槻しばねの笑顔に「お、おう」と慄きながらも、レイラは

簡易ハイパーセンサーという存在に驚く。

「ISの技術を使った特殊なメガネ、といった具合でしょうか。そんなことが可能なのですか」

「できるからこうして実証実験をしているのだよ。クロエ君、見えるだろう?」

「はい、先生。よく見えています。セシリアさんは綺麗な方だったんですね」

「あ、ありがとうございます。本当に見えていらっしやるんですね…」  
「ええ、色はちよつと薄いですけど、綺麗な金色の髪。デュランダルさんもお姫様のような方ですね」

「なるほど……ISの技術をそういった医療面にも役立てると」

レイラからすればこの簡易ハイパーセンサーの技術は目から鱗だったようだ。マコトはそういえば彼女はISが普及すれば環境問題にも大きく影響を及ぼすだろうと言っていた。レイラはISが現在の兵器として扱われている現状に思うところがあるのかもしれない。

七槻しばねも、束もレイラの気持ちがあるのかもしれないと思  
い、話を続けた。

「そうだ。ISはただの兵器などではない。先進的な技術を幾つも搭載し、あらゆる分野に派生できるまさに知恵の果实そのものだよ。君はいい感覚を持っているようだね、デュランダルさん」

「恐縮です。ですがIS学園でこのような研究がされているとは思いませんでした」

「世界中がISを兵器として認識しているんだ。このような研究、どこでもやらせてくれない。であれば、このどこの国にも属さない…ああ、いや、正確には日本だが、邪魔が入りづらいこの学園でやった方がやりやすいんだ」

これは殆ど束の本音だろう。本来のインフィニット・ストラトスの研究ができず、最終的にこの学園に落ち着いたのだから。

「…ふむ、そろそろ戻ろうか。クロエ君。君たちもこれから出かけるのだろう」

「あつ、そうでしたわ。ではごきげんよう、またお話をさせてください、クロニクル先輩」

「ええ」

セシリアを先頭に4人はその場から離れていく。離れ際、束がこっそりマコトに耳打ちした。

「…まーちゃん、特別教室のこと、これで私たちの存在を言って辻褃合わせられるかな?」

「ありがとう」

「いつてらっしゃい」

どうやら彼女たちがここにいたのは偶然ではなかったようだ。マコトは謹慎中の間のことをあまり深く聞かれた場合どうすればいいか悩んだが、こうしてここで、七槻しばねという教員の存在を明るみに出したことで公に言えるようになったのだ。

マコトたちがその場から離れていくのを見ながら、束は背伸びをする。彼女に取って七槻しばねの演技はひどく疲れるのだ。

「ん〜、この喋り方やっぱり疲れるね〜、肩凝っちゃう」

「束様の場合は胸部の脂肪分のせいもあるのでは」

「くーちゃん、言い方言い方」

「事実ですから」

「ちーちゃんも肩凝るって言ってたし、マッサージマシンでも作ろうかなあ」

「そんなことをせずとも、私が…」

「マッサージしてくれるの? 優しいなあ、くーちゃんは」

健気な娘のような存在に束はクロエの頭を撫でる。クロエは気持ちよさそうに口元を綻ばせた。

校門前で一夏たちと合流したマコトたちはそこからすぐIS学園前駅と名前のついたモノレールに乗って、IS学園のある人工島「カグラ」から本州へとまずは戻る。

「いやあ、わりいな、遅れちまって」

「すまない」

一夏と箒がまだ休日の朝でほぼ専有状態の車内で遅れたことを謝ると、マコトやセシリアは「大丈夫だ」と返す。元々急ぐ旅ではなく、理由としても寝坊というわけでもないのだ。

「お二人の部屋も緊急措置的なものでしたか、いつ部屋割りが変更になるのでしょうか」

「レイラの言うことはもつともだが、織斑先生もここところは忙しく寮の部屋割りの変更に着手できていないらしいな」

箒の言う通り、千冬は今忙しい身だ。サイレント・ゼフィルス襲撃事件のカヴァーストーリーを各国関係者や、IS学園の保護者会にも説明をしている。最強、織斑千冬による説明はそれだけでも絶大な威力を持ち、サイレント・ゼフィルスの存在を伏せた状態の話もある程度信じて貰っていた。

マコトも千冬が奔走しているのは知っており、一夏の外出申請時のあの「ビール持ってこい」発言も疲れから思わず素が出てしまったのだだろう。

「そういえば、木曜日からSHRも山田先生が担当されていましたわね」

「織斑先生、色んなところの責任者も兼任してるみたいだからしょうがないのかもね」

「……あの織斑先生が疲れるぐらいだから相当大変なんだね……」

6人全員が千冬のことを心の中で労った。直接言ったところで、一夏たちはよく知っているが「貴様らに心配されるほどやわじやない」と言われるのがオチだ。たとえ疲れている姿を見せてもそう返すのだから、本当にまずいとき以外は面と向かって一夏も心配にしている姿を見せない。

「(ま、やばかったらやばくなったときに料理とかしてあげるか)」

限界まで行った時に凄まじく姉を甘やかすから私生活がダメダメになったことに一夏は気がついていない。

「それで、一夏さん。藍越市とはどんなところですか」

話題を切り替え、セシリアがこれから向かう場所のことを一夏に問う。

「藍越市、というか汽車町、俺たちの町のことだな。そうだな、一言で言うとおの束さんがただの町の発明家さんぐらいの認識の町だな」  
「……どういうことですか」

篠ノ之束という現在の世界では知らないものがないはずの人物がまるで親しい人物のように一夏の口から出たためセシリアは訝しげな表情をする。

「箒さんも同じ町の出身なのですからその姉である彼女と一夏さんが知り合いでないはずがないでしょう」

「た、確かにそうですね、レイラ。というより、それ言っただけでよかったですの？」

「別に俺たちは束さんがIS作ってることに関わってないし、俺たちからしたら神社のちよつと個人的な近所のお姉さんって感じだぞ」

「篠ノ之さんのご実家は神社ですか？」

「ああ、あの町に代々住んできたな。ただ、その姉の発明のせいで一家離散となったが」

急激に電車の中の空気が重くなる。さらつと一家離散となったことを告げられて、セシリアとレイラ、簪が固まってしまいが藍越市の3人は全く同じではない。

「離散って、言っても連絡は取ってるんだろ？箒」

「ああ。父もまだ剣は握っている。どこにいるかはわからないがまた道場をやっているそうだ」

「そうかあ、会いたいな、師範」

「難しかろう。あの千冬さんでも会えないんだ。生きていることがわかるだけでも儲け物だろう……姉さんと違って」

「箒……」

唯一、箒や一夏からすれば行方不明となってしまった束だけが気がかりであった。死亡説も流れているため、箒としては変で妙な発明をしまくっている姉であったが大切な姉だった。家族に対する愛情は本物で、ISが世界に露見したあとの政府の重要人物保護プログラムに反対したぐらいである。「私が守るから手を出すな」とまで言った束であるが、それを父が宥め「お前はお前の道を行け。離れても絆ま

で切れん」と娘の道を優先したのだ。

その結果が行方不明では父も母も、箒自身も浮かばれない。当の本人はマコトと千冬が所在を知っていて気軽に会えているせいで、マコトは妙な罪悪感を覚えてしまった。

「(東姉さんも箒に会えばいいのに……ああいや、今更会ったら殺されるとか逆に考えてそうだな……)」

ケロつと姿を見せればこれだけ心配させて、と箒に斬られるのではないかと束が思っただけ顔を見せないのではないかとマコトは邪推してしまう。なお、それは事実である。

「まあ、あの姉のことだから生きているとは思いますが、何事もなく顔を見せたらまず斬らんと気がすまん」

箒もマコトの想像通り、姉が姿を見せたら斬るつもりらしい。セシリアもレイラも簪もなんとも言えない顔をしていたが、口を開いたのはセシリアだった。

「ですが、そうですね。あの篠ノ之博士とはいえ人間……当然、想う方もいらつしやる。会えるといいですね、箒さん」

「ありがとう、セシリア。気を遣わせしまったな。なに、そこまで気にしてはいないさ。さっきも言ったがああ姉が自殺などありえん。生きることに関しては誰よりも意地汚いという確信がある」

「ふふ、素敵な姉妹愛ですわ」  
「姉妹愛……なの？ 姉が私を見る目は若干舐め回すようで気味が悪いが」

しんみりとしていたはずの空気がそうでもなくなってしまうほどに箒の姉への言葉はわりとぞんざいなものだった。箒は「そういうえばこの人も変わった人だった」と自身のことを柵にあげて箒のことを内心そう言った。その姉である以上、篠ノ之束も相応にぶっ飛んでいる、ISを独力で作ってしまうほどなのだからそうに決まっている。

「(そうなる私……うっ、やめよ、この考え方)」

と、考えたところで箒はこの理論でいくとあの「姉」と自身も同類ということになるためこれ以上の思考はやめる。姉の簪への視線も舐め回すようなものだからだ。

「ま、まあ、そんな篠ノ之博士も受け入れてくれる町なので、すから、きつといい町なのでしよう」

レイラが強引に話をまとめ、空気を戻す。セシリアや簪もそれに乗って「そうですね」「そうだね」とこれ以上暗い話しないで、と目で訴えていた。

「ああ、いい町だぞ。近所の人も仲良くてな、外から来た人もすぐ受け入れてくれる」

「まあ、大地主だった篠ノ之家の方針もあるのだろうか」

「そういえば、あたしの家も土地は篠ノ之家のものだよ」

篠ノ之家は神社を持っていて更に大地主。いわば町の影の支配者のような存在だが束や箒の父が権力や金に無頓着なせいでわりとおおらかな空気が町中には流れていた。その空気感は未だに町中に流れており、都内にしてはのどかな雰囲気がある。

マコトはそんな地元の空気が嫌いではなく、今日は実家に帰らないがゴールデンウィーク中はずっと地元になりたいと思うほどだ。

「なら、箒さんはその町の名主の娘のような立場だったのですね」

「そんなものじゃないさ。父も、跡取りとなる姉もそういうのはどうでもよくてな、町の人から見るとただの神社の娘というだけさ」

「ふふ、そういう姿勢が治めるものとしては良いですよ。ねえ、レイラ」

「ええ。セシリアの言う通りです。いい町なのでしようね、本当に」

楽しみだ、という雰囲気的車内が戻りマコトと簪が同時にホツとした表情になる。二人はお互いにそんな表情をしたのに気がついてくすくすと笑った。



## # p h a s e — 1 3 「故郷（後編）」

本州にあるモノレールの終点で降り、特急快速に乗って一夏たちの地元に着したのは学園から出発して3時間。午前11時前だった。「着いたぜー！」

「ここが御三方の故郷……住宅街ですが、不思議と長閑な空気ですわ」「ええ、なんとも……穏やかな町の空気です」

汽車町は住宅街で、駅から降りればそこはもう一軒家が立ち並ぶ。ベットタウンのようで、マンションは低層なものしかなく落ち着いた印象をセシリアとレイラ、簪は受けた。マコトたちは変わらないなあ、と思った。

「本当に変わらん……駅舎も改札にICが増えたぐらいか？」

「そうだな。そんぐらいだ。電車の本数とかも変わってないし、あの頃のままでよ」

「そうか……フツ……よかったよ、変わっていなくて」

簪は感慨深そうにそう言って空を見上げる。彼女の目には幼い頃に見たものと変わりない空が広がっている。まるでここに、あの保護プログラムで強制的に引越しをさせられ、忘れてきてしまったものがあつたかのように感じた。

「さて、まずはウチだな。最近は千冬姉も帰ってないみたいだから軽く掃除機かけて、冷蔵庫のブツを持ってくるだけだから、みんなは神社にでも行つててくれないか？」

「わかった。私が案内しておく。道は変わっていないだろうか？」

「ああ、そのまんまさ、簪。神社の管理は簪も知ってると思うけど珠代さんがしてくれてるから」

「珠代さんか!? まだ残られていたのか……」

「その、珠代さんというお方は？」

セシリアが疑問に思ったのか簪に聞くと簪は「ああ、うちのお手伝いさんだよ」と告げた。マコトも面識があり、確か花嫁修行で来ていた篠ノ之家の親戚で、当時はまだ高校生だったが未だに神社に残り管理している。マコトも篠ノ之家がこの町を去ってから数度顔を合わ

せているが、優しい人想いな女性だ。

「姿はちよつと東さんに似てるかもな。珠代さんのほうが小柄で髪の毛短いけど」

「ああ、姉と私よりも珠代さんのほうが似てるな」

「そうなのですか。従姉妹といったところでしょうか」

「そうだな、その通りだ。姉も姿がそっくりな珠代さんには不思議と仲が良くてな、慕っていたよ」

しみみりとした空気を醸し出しながら箒は歩み出す。一夏とは途中で別れ、残りの5人は箒を先頭に歩み出すが、

「あつ」

「どうしましたか、セシリア」

「いいえ、彼の外出の条件ですがかならず代表候補生の監督が必要ですわ」

「……そうでした」

セシリアが思い出したかのように歩いてきた道を戻っていく。

「箒さん！一夏さんを追いかけますわ！レイラは皆さんと一緒に行ってください！後から合流しますわ！」

「ええ！お気をつけて！」

「ごめんあそばせー！」

去っていくセシリアに全員が「大丈夫か？」となったが、セシリアはセシリアでやるときはやるとわかっているので残った4人は神社への道を再度歩き始めた。

「そういえばセシリアは一夏さんの家知らないですよね」

「まあ、別れてすぐだ。それにさつき別れた道の下り坂をまっすぐ降りればすぐに一夏の家だ。最悪、表札を見ればわかるだろう」

「なるほど。…そういえば、マコトの家もここにあるのでしょうか」

レイラがマコトに聞いてくる。今世におけるマコトの故郷は残っていて、家族も生きている。気になってしまうのは仕方がなかった。

「そうだよ、レイラ。といっても今日なんか遠出してらしくて家に誰もいないけどね」

「そうなんです。ご挨拶をしたかったのですが」

「いいよ、そんな」

律儀なレイラに3人は苦笑した。

しばらく歩き、4人の前には石積み階段が目に入る。小さい頃はマコトからすれば長い階段だったが、今ではそんなに高くは見えない。

階段の脇には「篠ノ之神社」と掘られた石柱がある。

「ここが箒さんのご実家ですか」

「元な。ふむ、ここを見る限り管理はちゃんとされているし、参拝客も減っていないさそうだ」

「……なんでわかるの……?」

「階段さ。誰も登っていないと苔むしたり、ホコリが溜まっていくが人が通ったところはそうでもないだろう?この階段がまさにそうだからな。いいことだ」

箒の説明を受けて簪は納得する。実際に、上の方から降りてくる年配の参拝客の姿が見える。篠ノ之家が消えてもこうして廃れていない神社に、本当にこの町は変わっていないなと箒は感慨深くなる。

「さて、登るか。昔はよく、マコトも一夏もここをランニングコースに入れていたな」

「そうだね。朝行くといつも束さんが掃除しててさ」

「たまにさぼっていたがな」

笑いあいながら箒とマコトが登り始め、レイラと簪も続く。二人の昔を思い出すような話に、レイラと簪は確かにここには愛すべき日常があったのだろうと感じた。あの篠ノ之東でさえ、ただの神社の娘として境内を掃除していた。きっと、朝毎日で、会えば笑い合っていたのだろう。

白騎士のおかげであのミサイルの雨から死者はでなかった。しかし、この町の、この神社にあった暖かな日常は壊されてしまったのだ。

「(……そんなの、悲しいよ……)」

「(死者が出なくても、失われたものはある、か)」

簪とレイラは、思い出の残痕を追うように先を行く二人が見えた。階段を上り終わると、境内にはまばらに小さな子供連れなどを連れ

た親子の集団などが見える。木々に囲まれ、ここだけが自然に溢れた森の中のように見える。神社の裏には小山が見えた。

「ここが境内だ。裏に見えるのはウチが管理していた山でな」

「すごい、空気が綺麗だね」

「簞もわかるか？ここは不思議と空気が澄んでいてな、姉でさえも科学では明かし切れなかった。父はここが霊脈の上で、そういう場所だと言っていたな」

科学でも理由が明かせなかったこの神社が持つある種神々しい空気は訪れたものたちの心を澄んだものに変え、清らかな営みを育ませるという。そんな言い伝えがある、と簞は言う。

「確かに、ここに朝くるとその日の気分が全然違ったんだよね」

「だからランニングコースにしたのか」

「それもあるけど、朝挨拶するのが日課にもなってたからね」  
「そうか」

簞が歩みを進め、社へと向かう。境内の奥には当然のように賽銭箱があり、拝むことができるようになっていた。

「参拝というのは初めてしますわ」

「ああ、レイラはそういえばイギリスから来ているのだったな。その、宗教とかそのあたり、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。私は寛容ですから」

「そうか、なら拝んでいくか？」

「ええ、是非」

簞はレイラに参拝の方法を教え、4人それぞれがお金を賽銭箱に入れ参拝する。各々、何か特別な願いがあるわけもないが、この日常がいつまでも続くように、程度のことは願っていた。

「よし、ここに来たらこれはやっておかねばな。あとは一夏達を境内で待っているでしょう」

「そうだね」

「飲み物が欲しかったら……ああ、あった。あそこの自販機で買うといいい」

「……自販機、あるんだ……」

「神秘的な空気の中にあるんだが不思議と空気が汚されなかったからな、そのままさ」

神社の隅にある自販機は箒の記憶のものより新しくなっているが場所は変わっていなかった。こういった場所では心ない者が空き缶を捨ててしまうのが常だが、この神社では不思議と設置後もそういったものはない。

つくづく、不思議な実家だと住んでいたものに関わらず箒は思う。

「しかし、この様子だと珠代さんは今外しているのか」

「そうかもね。箒達がいなくなつた後とか、朝の掃除で珠代さん見だし、お昼時もあるところでおみくじ売ってるからね。今は別の巫女さんがやってるみたいだし」

「そうか…ああ、伝言ぐらいはしておこう。少し待っていてくれ」

箒はそう言っておみくじを売っている窓口まで行くと、巫女と少し話して戻ってくる。

「どうだった？」

「ああ、伝えてくれるそうさ。今日は珠代さんは休みだそうだな」

「そっかあ。あの巫女さん箒に驚いたりはしてなかったね」

「…まあ、IS学園にいるとはいえまだ保護プログラムの中なんだ。彼女には箒というものがここに来たからよろしくと伝えてくれと言ったぐらいだ。それで十分だろうさ」

会いたかつたのだろうかと、3人は箒を見て思ったが何も言わない。

しばらく神社で待機していると箒の携帯に着信が入り、一夏の家の掃除が終わつたことが告げられる。箒が了解し、セシリアも一緒にいるのか聞いたがとんでもないことが判明した。

『は？セシリア？いや来てないぞ。一緒だったんじゃないのか？』

「なんだと。お前を一人には決まり上させられないと追いかけたのだぞ」

『おいおい、あいつ迷つたんじゃないのか』

「一本道だぞ……それに別れてすぐだったから一夏の姿が見えなくなるわけ」

『あ、それなら悪い。あのあとすぐ、本田商店のばあちゃんに声かけられてさ、新商品の洗剤買ってこれって言われちゃって、店の中に引きずりこまれてさ』

「なに!?あの話始めると1時間は拘束される本田の婆様にか!？」

『ああ、今日は急いでるし、人を待たせてるからって強引に逃げ出したんだけど、その時にすれ違ったのかもしれない』

「ええい…参ったな…ひとまず一夏、そこで待て、あいつがたどり着くかもしれない」

『だな。あとはレイラとかが電話番号知ってそうだしかけてもらえばいいんじゃないか?』

「そうだな。頼んでみる」

電話はそこで切り、箒は3人に振り向く、箒の話している内容で状況は察しているため3人とも呆れ顔だった。

「…なんというか…期待を裏切らなかつたね……」

「簪さん、言つてあげないで」

「私の友が大変申し訳ございません」

「ああいや、気にしないでくれ事情があつた。というわけで、レイラ。セシリアの携帯にかけてくれないか」

「わかりました。少々お待ちを」

サツと携帯を取り出し、レイラが電話をかける。しかし、一向に話に出ない。それどころかレイラは自身のかけているシヨルダーバックが震えていることに気がついた。

「……ああいけません。そういえば今朝、携帯も忘れていたので持ってきたのですが、本人に渡すのを忘れていました」

務めて冷静に言うレイラに、マコト達は顎が外れそうになった。それも一瞬で全員慌て出す。

「おい、まずいぞ。この町もそこそこ広いし、住宅街は入り組んでいるところもある」

「……オルコットさん無駄に動き回りそうだから捕捉できなさそう」

「簪さんの推測の通りセシリアはおそらく、迷うはずがないですわ！一夏さんが迷われたのです！」などと言うでしょうね」

「レイラ、セシリアさんのマネ上手いね！」

「それほどでも」

「遊んでいる場合かつ！すぐに全員で手分けして探さないと！」

わたわたとしていている4人はとにかくセシリアを探そうとその場を駆け出そうとしたが、その時、マコトの携帯が鳴った。

「こんな時に…！誰…って鈴音？」

携帯の着信元は、この町の幼馴染みである凰鈴音であった。

「はい！飛鳥です！」

『あ、マコト？今いい？』

「ちよっと急いでる！」

『そうなんだ。けど、もしかしたらその急いでる理由かもしれないんだけど』

「へ？」

鈴音が妙なことを言う。気の抜けた返事をしたマコトに箒達は足を止めた。

電話の向こう側の鈴音は少し苛ついた声音でこう言った。

『なんかクソ生意気な金髪ドリルお嬢様、マコトの知り合い？』

電話の向こうで「誰がクソ生意気なドリルですか！私のこれはロールですわ！」という聴き慣れたお嬢様の声が聞こえた。

セシリアが鈴音の実家にいる、という情報は即座に一夏にも共有され5人は急いで合流して、住宅街の中にある『凰中華料理店』の前にやってきていた。お昼時なせいで美味しそうな匂いが漂っており、店先には今日のランチメニューが載っている看板が置かれ、どれも値段は学生にも優しいリーズナブルなものだった。

「はあ……セシリアもよくここまで来たな」

「それにどうして中に入ったんだろう」

箒とマコトはなぜここにセシリアがいるのか気になったが、その疑問は一夏は解消した。

「ああ、それな。セシリアに前、地元のこと少し聞かれたことあってな、そんな時に鈴のこと話したんだよ」

「なるほど、それをセシリアは覚えていたのですね」

「だろ。話してよかったよ。ま、結果オーライだ。どうせ飯食いにここくる予定だったからな」

一夏は慣れた様子で暖簾をくぐり、引扉をガラリと開ける。

「こんにちはっすっ！」

「へいらっしやい！って一夏坊！よくきたな！久しぶりだな！」

店内に入ると厨房にいる店主と思われる男性が一夏の姿を認め迎えた。かなり鍛え上げられた肉体を持っているのか、初対面の箒、レイラ、簪は「殺しても死ななさそう」という失礼な感想を持った。

「なんだその嬢ちゃん達は。坊の彼女か？」

「違いますよ。学校の友達に、それにマコトとは会ってるでしょ」

「ははっ、そうだな悪い。悪い。今一階は相手ないから二階いってくれ。鈴音もいる」

「りよーかい。そういうえば、さつき金髪の女の子こなかったか？」

「あの別嬪さんも知り合いか？鈴音のこと聞いてきたから二階にあげたぞ」

「わかった、ありがと。じゃあ上あがります」

「おう。注文、待ってるぞ」

豪快に鍋を回しながら料理を続ける店主を横目に、五人は靴を脱いで上の階の席へと向かう。上階に登ると一階にはいた客がほとんどおらず、特徴的な髪型のセシリアはすぐに見つかった。

「お、いたいた。セシリアー！」

「ああ！一夏さん！ようやく会えましたわ！どこに行ってしまったのです！」

「ごめんごめん、ちょっと近所の人に捕まっちゃってさ」

「もう、困りますわ」

「…で、鈴、悪いなセシリアのこと」

一夏がそう声をかけたのは小柄な、茶髪をツインテールにした勝負な可愛らしい少女だった。風鈴音、彼女こそ、箒と入れ替わりでこの町に来た一夏とマコトの幼馴染みである。鈴音は明らかに不機嫌な顔でセシリアの対面に座っている。こころなし、彼女のつけている工



プロンに書かれた龍が浮かび上がっているように見えた。

「ええそうね。その前に久しぶりね、一夏、マコト」

「お、おう。親父さん元気そうだな」

「当たり前でしょ。殺しても死なないでしょあのバカ親父」

鈴音からの評価に箒達は失礼なことを考えてしまったのかと思っただけが安堵した。

「で、マコト！久しぶりね。この前の新作、どうだった？」

「あの送ってきた餡掛けチャーハンの改良版だよ？よかったよ。ただちよつと餡の甘味が強かったかも」

「そっかー、じゃあ今度また改良したの送るね」

「なんでマコトにはその態度!?!」

「あのねえ、あたしはそれはそれ、これはこれって精神なの」

ズバズバと、止まることなく話す鈴音に、箒は聞いていた通りだなと思う。気持ちがいい、裏表のない少女なのだろう。

「だいたい、この金髪ドリルが一夏の名前出して、言ったことが腹たつたの。あんたなんて伝えたのウチの店」

「え？いや、美味しい店だって…」

「この人なんて言ったと思う？『期待していたより可愛らしいお店ですわね』って！舐めてんの!?!」

「いやそれは穿ち過ぎだろ！」

「そうですね！確かに想像していたものの10倍は規模が小さかったです」

ああこれはセシリアが悪いと全員が思った。空気が明らかに変わり、セシリアは哀れなものを見る目をした全員に困惑する。

「な、なぜそんな目を」

「友人が大変失礼な真似をしました。私はレイラ・デュランダルと言います」

「よろしく、デュランダルさんのことはマコトから聞いてるわよ。いつも世話になってるわね」

「いいえ、こちらこそ」

「……わ、私は簪、です」

「おつ、あんたが簪ね。マコトの言ってた通りかつわいいわねえ。よろしくね！」

「マコトさんそんなこと言ってたの？」

「え、事実だし」

簪の顔が爆発しそうなぐらい赤くなつた。鈴音が「おーおー激辛麻婆SP食べたみたいなの顔をしちゃって」と簪を茶化した。

「…私は篠ノ之箒だ。ちょうど、そちらとは入れ替わりで引越した」「ああ、あんたが。改めて、鳳鈴音よ。この店の看板娘で次期店主！箒のことは…つて箒でつて呼んでいい？」

「いいさ、一夏たちの友達なら似たようなものさ」

「なら箒で。私も鈴音でいいよ。それで箒のことはよく弾とか一夏、マコトから聞いたわよ。鬼強い剣士だつて」

「フツ、光栄だ。鈴音、そちらのことも二人から聞いた。なんでもかなり美味しい料理を作る気持ちのいいやつと」

「あんがと。弾のやつには負けてらんないからね。んじや、何食べる？今日のおすすめはこのランチメニューAの天津飯セットね」

自己紹介が済み、鈴音がそう言つてメニューを提示してきたが「お待ちください！」とセシリアが言った。

「私のことをスルーするんじやありませんわ！」

「なによドリル女」

「ぐぎぎぎっ」

「おいおい、鈴もセシリアも落ち着けて。鈴、セシリアはあんまり日本のことよく知らないんだよ。こういう住宅街の店初めてみたいだし」

「…:はあ、んなことわかってるわよ。ただこいつが謝れば済む話をずっと「事実です」つて言うから」

「いえでも、モガツ!？」

「セシリアが大変な失礼をおかけしました。たまに変に意固地になつたり暴走したりしてしまうことがありますので…」

これ以上はこじれすぎると判断したのかレイラが強引にセシリアの口を塞いだ。マコトは「ああ…本当にまずいと思つたんだな…」と

いつも以上にアグレッシブなレイラに苦笑いするしかなかった。

「あー、もしかしてそいつと幼馴染み？」

「ええ」

「そっか。ま、こっちもそんな怒っちゃいないわよ。セシリアだっけ、よろしく」

「んぐっ、はあはあ、はあ、い、いきなりなま「セシリア」……セシリア・オルコットですわ」

鈴はレイラには頭があがらないのかと少し意地悪な笑みを浮かべた。「ああこれは玩具にする気だな」と一夏、マコトは気が付く。引越してきた当時こそ変に鈴はいじられていたが次第に頭角を現し、今の鈴はマコト達の間では姉御のような存在にまでなっている。もともと彼女の気質がそうだったのもあるだろうが。そもそも、店の規模のことでいきなり激怒するほど鈴音は短期ではなく、一夏の友人と聞いて少しからかっただけだろう。

「にひひ、あんた、その子に頭あがらないんだ」

「そ、それは当然ですわ！レイラは私からすれば仕えるべき方！彼女の言葉を否定するなど」

「セシリア。その必要はありませんよ。何度も言っていますが私はただの小娘です」

「で、ですが」

「あんまりしつこいようですと、チェルシーに今すぐ連絡しますが」

「……鈴音さん」

「なによ」

「無礼な発言、大変申し訳ございませんでした」

「よろしい」

ひとまずセシリアの謝罪が行われたので場の空気は穏やかなものに戻った。

「んじや気をとりなおして注文よろしくね。おすすめ言っちゃったけど、好きなのでいいから。一夏はいつもの？」

「おう、いつものだ」

「了解。最近千冬さんも来ないから寂しいわね」

「ああ、千冬姉、忙しいからさ今」

「そっか。出前受け付けてるからって言つといて。これからの時期だと冷やし中華もやるから、出前とっても微妙な温度にならないだろうし」

「そうだな、言つとくよ」

じゃあ決まったら言つてね、と鈴音は二階から降りて行つた。思えば彼女は店で仕事をしている最中だったのだ。そこを中断しておそらくは迷子になっているセシリアの面倒を見ていたのである。

相変わらず面倒見の良い、と一夏とマコトは鈴音の隠しきれない人の良さに安心する。

「さて、飯食べようぜ。これ食べたらもう学園に帰ろう」

「そうだね。でも他にセシリア達が行きたいところなければだけど」

マコトの問いかけに、セシリア達は「大丈夫」と口をそろえた。

「それにしても、中華ですか。あまり食べないので楽しみですわね」

「ああ、セシリア。味は安心していいぜ。ここは最高に美味いからな」

「あら、そうなのですか。ふふ、なら、この私が試してあげますわ！」

「セシリア、騒ぎすぎですよ。マコト、どれが美味しいのですか？私もよく知らなくて」

「レイラもそうだよね。私のおすすめはこのチャーハン、酢豚セットかな。シンプルだけど一番美味しいんだ。酢豚は鈴の得意料理でもあるよ」

「そうですか、なら私もこれで」

「∴私はこのラーメン、チャーシューマシマシにしようかな……」

「簞意外と行くな」

「お昼は食べるから」

各々の注文が大体決まり、一夏が鈴音を呼び出して注文が確定する。混んでるから時間もらうわね、と鈴音が告げ、全員が快く了承した。セシリアも既に気持ちを切り替えているのか問題なかった。

そうして、15分後に料理は全て出てきた。

「はいお待ち！チャーハン酢豚セット3つ、ラーメン小ライス餃子セット1つ、醤油ラーメンチャーシューマシマシ1つ、天津飯セット

が1つ。以上!」

現れた料理を見て、初見の箸、セシリア、レイラ、簪が息を呑む。そこには見ただけで絶対に美味しいという料理が置かれていた。

「こ、これはっ、このチャーハンと、酢豚は……!」

「なんと……この、てんしんはん、というものは黄金の衣を纏って……」

「これがチャーハンと酢豚。なんて香ばしい香りなのでしょっか」

「……ラーメン屋さんじゃないのに……麺が、チャーシューが……輝いてる」

4人の感想を聞き、鈴音が得意げな顔になる。あれは相当に嬉しいだろうなとマコトたちは思った。

「よし、じゃあ食べようぜ」

『いただきます!』

「どうぞ!」

全員が同時に料理を口に運ぶ。

刹那、初めての4人の口から龍が登った。

「美味い!美味すぎる!なんだこのチャーハンは!」

「ひ、光が広がっていく……」

「(……これは、宇宙……?酢豚は、宇宙なのですね……)」

「感謝……圧倒的感謝……」

想像通りの反応にマコトは笑いながらいつも通りにおいしいチャーハンを食べる。

「うん、おいしい。今日は鈴音だね。チャーハンも」

「そ、人手が足らないからね」

「ラーメンは親父さんだな。相変わらずそこのラーメン屋なんか敵わない出来だよなあ」

「一夏はわかるわよね、そりゃ。ラーメンだけは弾のどこの親父さんと研究してるからね。近場にラーメン屋できるたびに負けたくねえって」

「親父さんたちらしいや」

一夏は笑顔でラーメンをすすった。食事はそのまま進み、あつという間に食べ終わった5人は食後に杏仁豆腐まで頼んで談笑していた。

「いやあ、美味かったな」

「そうだね」

「ああ、こんな美味いとは…五反田のところもあれから研鑽を重ねているのだろうか？楽しみだな」

「おう、箒。今度行ってみようぜ。弾も喜ぶよ」

「だな」

「そんなときはあたしも連れてきなさい。ライブル店なのは置いといて、あいつん家も美味しいし」

「いいなあ、あたしも行くよ」

「もちろんマコトも一緒よ」

藍越市の4人の会話は箒が今日鈴音と初めて会ったにも関わらずまるで昔からそうだったかのようにだった。

「され、そんじやお会計すんの？」

「おう。別々で良いか？」

「大丈夫よ。伝票これね、準備できたら下来てね」

伝票を置いて、鈴音がその場を立ち去ろうとするが唐突に「お待ちください！」とセシリアが呼び止めた。

「なに？いきなり大声だし…ってうええ!？」

振り向いた鈴音の肩をセシリアがガシツと掴んだ。真剣なセシリアの顔が鈴音の前にあり、改めてみると凄まじい美人だと鈴音は思つて顔が赤くなる。

「な、なによいきなり」

「鈴音さん、私のものになりませんか」

「はっ、え!？」

何を言ってるんだ、とマコト達は思った。レイラは額に手を当てて「ああ、もう」といった顔だ。

「ちよ、ちよつと、そんな、女の子同士とか、その…あ、あたしは」

「私の屋敷に来て、是非、料理長をなさりません」

「……へ？」

「オルコット家は優秀なものを常に欲しています。鈴音さんの料理の腕はレイラの反応を見れば我が家に相応しいもの…ですから私の

家にぜひ」

「それはヤダ」

「な、何故!？」

鈴音の即答にセシリアは絶句するが、そりやそうだろうと全員が思った。

「あたしはね、ここの店継ぐの。だから誰かのお抱えとかになりたくないの」

「で、ですが」

「それに、あたしを飼い慣らせるやつなんているのかしら? あんたがそうなの?」

「うぐ」

鈴音の瞳はかなりの鬨気を感じさせ、セシリアはたじろいでしまう。レイラはここまでだとセシリアを引き剥がした。

「セシリア、落ち着いてください」

「れ、レイラ」

「全く…鈴音さん、重ねて失礼をお詫びします」

「いいわよ。むしろ、嬉しいぐらいよ。そこまでここの店のこと、評価してくれたんでしょ? お抱えは無理だけど、たまに食べに来なさい。最高に美味しい料理を用意してあげるから」

「……鈴音さん……」

マコトと一夏は、鈴音のこういうところがずるいな、と目を合わせた。彼女もまた、この町の住人で、懐が深いのだ。それにそこまで父や自身の料理を評価されて嬉しくないわけがない。本心からの鈴音の言葉にセシリアは感じ入るものがあつたのか「はい! また来ます!」と言った。

「じゃ、待ってるわ。あ、そうそう。マコト、マユにこの前借りた漫画返すって言つといてくれない?」

「あ、ごめん。今日帰らないし、家にいないんだマユ」

「そっか。いや、いつもの癖でつい伝言頼んじゃうわね。じゃいいわ、私から連絡しとく」

「了解」

その後、6人は会計を済まし鈴音の店を後にする。離れていく6人の背中を見ながら、鈴音はふと思った。

「あいつらも楽しそうねえ。…同じ学校だったらどうだったんだろう」

鈴音はISの適性自体はかなりのものであり、父と母の祖国からもしつこくアプローチが来るほどだったが、なんとそれを断って今は一般の高校に通っている。断れたのは彼女の従姉妹が同じぐらいの適正があつたため、かならずしも鈴音でなくていいとなつたためだつた。

「ま、考えてもしょうがないか。これからも付き合いあるだろうし。…よしっ、午後も頑張りますか!」

あり得たかもしれない未来。それを鈴音は思い浮かべながらも、午後の仕事も頑張ろうと店内に戻るのだった。

「……束、何故マコトの謹慎を解いた」

「知りたい?」

「当たり前だ。人手が足りないと言つたのはお前だろう」

「じゃあこれ見てもそれ言える?」

「……………なんの冗談だこれは」

「冗談じゃないよ。これはいっくんがぶっ壊した人形の中身だよ」

「嘘を言うんじゃない、お前、これは、これはっ!」

「そうだよーちゃん、この人形はさ、最悪だよ。クソだよ。これそのものも、作つたやつも」

「こいつはロボットじゃない。人間の脳髓を仕込んだ、ISを無人で動作させるためのカートリッジなんだよ」

「こんなもの、まーちゃんに見せられるわけないでしょ。見せたらあの子は…………私の傍から、飛んで行っちゃうから」



## # p h a s e — 1 4 「波乱の幕開け」

『——イギリスで強奪されたIS “サイレント・ゼフィールズ” はイギリス軍が奪還したと、イギリス軍当局が発表しました。詳細な情報は明かされていませんが、回収されたISは損傷がひどく、イギリス軍は当該機を解体処分とするしかないとコメントしており——』

マコトはゴールデンウィーク最終日の夜、珍しく学校の寮の自室でテレビをつけていた。簪はシャワーを浴びた直後のため、髪の毛を洗面所で乾かしている最中のため、部屋のほうにドライヤーの音が響いてきていた。

「ああ、正式に返還したんだね、学園も」

束からIS本体の解析は完了したという話は聞いていたのですが、に返還されたようだった。分析・解析結果についてはマコトも聞いており、IS本体自体の異常な出力は無人大ったことに加えてなんらかの手段で “インフィニット・ストラトス” として正常稼働させられていたため、あのような大出力ビームや異常な脅力を見せていたのと。

そのせいで、サイレント・ゼフィールズ自体の内部構造などは当然過負荷がかかり、束曰く “ミンチよりひどい” 状態になっており、束の見解としてはマコトたちが止めなくても数時間稼働していれば自壊していたという。

肝心の人形本体は一夏の零落白夜により中枢部分が大破し何もわかなかったと束は言っていた。

「(本当なのかな)」

あの束が “何も分からなかった” ということにマコトは違和感を感じてしまう。もちろん、束も全人類の中で最も優れていると言っても過言ではない天才だが、それでも自身が開発したインフィニット・ストラトスに振り回されているため、できないことやわからないこともある。それでも彼女が「完全にわからない」というのは引っかけた。

「(わからなくても、何かしら欠片でも気になることがあれば言ってく

れそんなものだけど……何か、隠されてる？あたしが知っちゃいけないことを)」

今更、束がマコトに隠すことなど何があるのだろうか。インフィニット・ストラトスの世界的には公表されていないことも、マコトが理解できなくても彼女は楽しそうに語るし、それ以外のことも束はマコトや千冬には喋りたがる。

裏切られたという気持ちはないが、束がそういった言いたくないことを隠すのはマコトに対しては初めてで、どうしても彼女は気になっってしまうが、しつこく聞いたところで束は教えてくれないだろう。彼女は一度、こうと決めたものはなかなか曲げない。それこそ、かつてマコトが前世を語り大きなカルチャーショックを受けたり、自己と他人が違うことによつて生まれるものを認識できたりと、彼女にとつて大きな何かがなければ変わらない。

「まあ……悪意があつてとか、そういうわけじゃない。束姉さんのことだから気を遣つて言わないのかもしれない)」

そうであつてほしい、という若干の希望もありながら、マコトは自らに納得させた。

「ふう……すつきりした」

簪が髪を乾かしたのか、脱衣所から出てくる。簪の格好は凄まじいラフさで、眼鏡こそかけているが着ているものは寝巻きですらなく大きい何かのゲームのタイトルがプリントされたTシャツで、あとはシヨーツだけを履いた状態だ。

マコトも前世であればドキツとしたかもしれないが……いや、初めて見た時はほんの僅かにドキリとしたが、気を許し合つてからというもの、簪が夜はずつとこうなのでもう慣れてしまった。

「簪さん。ニユースでサイレント・ゼフィルス返還したつて出てたよ」

「そうなんだ。……ほんと、あのときは死んだかと思つた」

「あはは……ああいうのは勘弁してほしいね」

戦争なんてない世界での命のやりとり。簪は気丈にも戦つて見せたが、怖いものは怖かった。その日の晩は実を言えばマコトのベッドに二人で入つて寝たほどで、簪はそれほどまでに恐怖を受けていた。

マコトからすればそれは当然で、同じベッドに寝るだけで簪に精神的な後遺症が残らないのなら喜んでと一緒寝た。

それから、簪が何かうなされたり、フラッシュバックを起こすようなことはなかった。より簪との距離感が縮まったような気がしたが、マコトとしては友人との仲がいいことに越したことはないので特に気にしていない。

「マコトさんが助けてくれなかったら……って思うと今でもゾツとするよ」

「……間に合ってよかったよ、ほんと」

サイレント・ゼフィルス襲撃時に、ピットから飛び出した時は間に合うかどうか、マコトから見ても厳しいところだった。それでもなんとか間に合わせられたのはカタパルトデッキを蹴るのに加えて瞬時加速を使用したからだ。そのせいで打鉄は脚部機構が破損し、メーカー修理になってしまったのだが、命には代えられないので致し方ない。

簪がポスつとマコトの隣に座る。彼女は自身のベッドの枕元に置かれていた携帯をとり、操作し始める。

「マコトさん、お礼つてわけでもないけど……もしよければ、これ」

「え？なにになに？いいのに別に」

「ううん。さすがに助けてもらって何も、っていうのは」

画面には花の飾りがついた髪留めピンが映っていた。派手すぎず、しかしマコトの前髪につければいいアクセントになりそうなものだった。値段などは問題ではなく、気持ちの問題だろうとマコトは値段は気にしなかった。

「ヘアピンって、あんまりつけないから新鮮かも」

「ほんと？きつと似合うと思う」

「ありがと、簪」

「じゃあ、買っておくね。届いたら、マコトさんの机の上に置いておくから」

「楽しみにしてる」

マコトがもらうことを了承すれば、簪の顔は出会った一ヶ月前とは

比較にならないぐらい華やかな笑顔が浮かんでいた。このときマコトは初めて楯無と彼女が姉妹なんだなと実感できた。楯無も笑顔は今のマコトから見ても魅力的に見え、こうして目の前にいる簪の笑顔も魅力的だった。

これで男女共学だったら簪に告白する男子もいるんだろうな、とマコトは思った。

「それにしても明日から授業再開かあ、先月は大変だったし、来月はゆっくり過ごしたいね」

「そうだね。さつきも言ってたけど、命のやりとりするのは本当にあれきりにしたい…」

「あはは、ないと思うよ。あんなこと」

と言いつつもマコトはどうしてもわからないことがあり断言はできずにいる。そもそも、何故サイレント・ゼフィルスが学園を襲ったのか、否、何故「あのアリーナ」に攻撃をしかけてきたのかわかっていないのだ。

一夏が狙いかと言われれば認識したISに襲い掛かっただけで、そうとは言えない。人形の正体がわかれば違うのかもしれないが。

「(……それとも「戦うこと自体」が目的だった……? わからない、こういうのはレイラのほうが考えるの得意だろうな……)」

このテの考えは得意でないとマコトは思考をそこまで止める。いずれにせよ、今のマコトにできることはもうないのだ。

「マコトさん?」

「あ、ごめん、ボーツとしちやつて」

誤魔化すようにマコトは笑いながら言う。簪はそこでマコトに踏み込むことはまだできなかった。

「(レイラさんみたいに、言えたらいいな)」

マコトと仲のいい、いや良すぎると言っている彼女のようになんか踏み込めるようになれたら。簪は今はまだ足りない勇気を少しずつ育んでいく。

「そろそろ寝よっか。夜更かししていきなり初日から遅刻なんてよくないし」

「そうだね」

本当は夜更かしたかった簪だが、マコトの言葉に今夜は従うことにした。彼女の言うことはわかるし、それに今日は「そういう気分」だった。

それぞれのベッドに潜り込み、リモコンのスイッチを押して明かりを落とす。

「おやすみ、簪さん」

「おやすみ、マコトさん」

言葉を交わして二人は瞳を閉じる。

次第に片方の寝息が静かに室内に響く。

「……この気持ちは、なんなんだろう。吊り橋効果で、まだおかしいのかな」

簪は、まだ眠っていないかった。彼女は自身に問いかけるように心の中で言葉を続ける。

「(私はマコトさんとどうしたいの？友達としてもっと仲良くなりたいの？それとも、それよりも深い関係になりたいの？)」

これまでの人生で、他人など、どうしてもよかった簪にとってマコトは彼女に自分以外の誰かと、その誰かと誰かが連鎖反応のように繋がって広がる世界を教えてくれた。そんな彼女が、しまいには命を救ってくれた。

世界を変えて、続かせてくれた。それは簪という少女にはあまりにも、大きすぎるものだった。だから、不可思議な暖かく、臃げなものが心の奥に宿った。それがなんであるのか、簪はまだわからない。

「(それでも、わからなくても一つだけ…したいことはある。私は、貴方のことを知りたい…マコト)」

今はまだ、呼び捨てまではできない。けれども、もし、もっと深くお互いを明かさせたのなら。

未知とは興味を引き立てるスパイス。どんな感情であれ、簪という少女はここにきて初めて、何かを心の奥で燃やしているのかもしれない。

「えー…本日、織斑先生は体調不良でお休みです」

翌朝、1年1組は騒然となった。千冬が体調不良で休み。あの世界最強「織斑千冬」が休み。そんなことがありえるのかと、マコトの前席のさやかもマジで？と言わんばかりにマコトをちらりと見ていた。

マコトはそんなこと聞いていないため少々驚いたが、人間を辞めていてもそれは戦闘時のみで、あとは私生活がダメダメな二十中盤の女教師だというのがわかっていて。大方、腹を出して体を冷やしたりしたのだろうと思った。

一夏を見れば、特に驚いている様子はない。というより、真耶がちらちらと一夏に何かしらのアイコンタクトをしていてあれは「言わなideくださいね…!」というように見えた。一夏はおそらく、千冬が体調不良となった原因を知っていて、真耶は言わないようにお願いしているのだろう。

この推測が当たっていれば相当ダメなものが原因だなとマコトは嘆息した。

「というわけで、一部授業は代わりに私が受け持つことになりました。織斑先生みたいにバシバシ行くのでよろしくお願いしますね!」

気持ちを切り替えるためか、ふんすつとして言う真耶だが、残念ながら背伸びをしている高校生にしか見えぬ、マコトを含めクラス全員が「カワイイ!」と思ったのは仕方がないことだろう。

「じゃあ、SHRは終わりです。1時間目の授業の準備をしてくださいね〜」

こころなしかいつもより機嫌が良さそうなのは気のせいだろうか。とマコトは思った。千冬がいないからだろうか。

マコトは席に座ったまま、一夏に携帯のチャットで「千冬さんどうしたの」と送ると、一夏はちらりとマコトを見てなんともいえない顔つきで返信を返した。

『鈴からもらった紹興酒一人で全部開けて二日酔い』

彼女は画面を見なかったことにして1時間目の授業の準備を進めることにした。

なお、箒もマコトと同じことをしたのか画面を見て険しい表情に

なっていた。徐々に彼女の千冬に対するダメなところの感情が束に  
対してもものに近くなってきたのかもしれない。

午前午後と、千冬が行うはずだった授業は全て真耶がやりきり、何  
故か彼女は胸を張っていた。千冬がいなくても私できるんです、と言  
わんばかりで1組の生徒達からは「やまやんよくできたねー」と褒め  
られた上、さらにお菓子で餌付けされていた。一連の行動をしてから  
真耶は「先生をからかわないでください！」と言っていたが全て手遅  
れであった。

そうして放課後、いつもの6人で集まる——ことにはならず、一夏  
は千冬の看護のために早々に寮へと戻り、今日は5人だけで食堂の一  
角でお茶をすることになった。

「それにしても、二日酔い…ですか」

レイラがそんなことありえるのかと真剣に悩み出しそうだが、マコ  
トが「あの人はそう言う人だよ」と告げて強引に納得させた。

「…千冬さんにもメンツというものがあるから言えんが、これぐら  
いは優しい方だ」

「流石に仕事を二日酔いで…ってというのは初めてだろうけど」

ズボラだが仕事は真面目な千冬が二日酔いで休むことは珍しいが、  
マコトは恐らくはサイレント・ゼフィルス襲撃以降からの各所への説  
明や手続き、さらに聞いた話では生徒に戦闘を行わせたことへの査問  
会もあったとのこと、疲労の末我慢できず呑みまくったのだろうと  
思った。

結果、疲れ切った体では起きることもできず、加えて二日酔いでま  
ともに仕事ができる状態ではなかったのだろう。

真耶の態度などから学園側には風邪などと誤魔化しているのかも  
しれない。

「…疲れていたのかもしれない…」

「簪さんの言う通りですわね。織斑先生も人の子だった、ということ  
でしょう」

セシリアが纏め、一先ず千冬が二日酔いになった話は終息する。こ

のことを話したところで何をどうすることもできなければ、最終的には千冬に厳しい言葉をかけるだけになるからだ。

「そういえばレイラ、サイレント・ゼフィルスはどうなるの?」

マコトはレイラに聞きたかったことを聞くことにした。サイレント・ゼフィルスは元々レイラの乗機となる予定だったものだ。それがイギリスに戻ったということは彼女は代替え機に乗る必要がなくなったということだ。大破し、解体といっても予備パーツはあるはずだからだ。

しかし、レイラの回答は全く想像したものとは別だった。

「残念ですが、サイレント・ゼフィルスはニユース通り解体処分の上、除籍です。コアは4号機以降へ、予備のパーツは改修の上、私のダイヴトウ・ブルーのパッケージ装備に流用されるそうです」

「え、そうなんだ」

「軍としては再建したかったのですが、政府からイメージ的に…とお許しが出なかったそうです」

「妥当と言えば妥当な処置かもしれませんが、残念でしたわ」

セシリアも今回の件は残念なようで、肩を落としていた。ISがイメージ優先というのは「抑止力」として隙のない兵器でなければならぬいからだ。一度奪取された挙句、大破までした機体をそのまま…というわけにはいかなかった。

モビルスーツと違い、使えるところまで使うというわけにはいかないのだろう。特に、専用機は。

「まあ、結果的に一部装備は後付けとはいえダイヴトウ・ブルーでも使用可能になりますし、建造されたことは無駄ではありませんでした」  
「…失われた機体の装備の受け継ぎ…浪漫だね」

簪は今回のサイレント・ゼフィルスの装備が流用されることは個人的に興味に合うのかそう言った。レイラも前向きに考えたいのか「そうですね、浪漫ですね」と微笑んで見せた。

「む…茶が切れたな。取りに行ってくる」

「了解」

飲み物がなくなったのか、簪が一度席を立つ。簪はこの一ヶ月と少



し、常に熱々の緑茶を飲んでいる。そこから硬派な武士イメージがあるのか、マコトは最近妙に箒を見ている生徒達が増えたことに気が付く。

「箒、ファンクラブでも出来たのかな」

「出来たよ」

思わず言ってしまったことに即答したのは簪だった。

「あるんだ…」

「4組の中で言ってる人がいた。あの騒動の時、1組の生徒達を落着かせようとしたのがかつこよかつたんだって」

「あー、なるほど…非常時の箒、確かにかつこいいもんねえ」

声こそかけられていないが、箒は気がついていっているようで周囲を少し気にしている。ただ実害がなければ「捨て置く」というのが彼女の基本的なスタンスでありマコト達に相談はしない。おそらく、それが余計に人気を高める可能性がある。

「箒さんはまさに日本のサムライ、ブシドーを体現しているかのようなですからね」

セシリアがいきなりカタコト気味にサムライ、ブシドーと言ったため、簪が吹き出しそうになっていた。

「待たせたな。そういえば、昼休みにこんな噂を聞いたんだが」

突然箒がそんなことを言い出し、語り出す。

曰く、今日の朝から校内で銀髪の軍服姿の幼女を見た。

曰く、それは稀に校内で見るクロエ・クロニクルがコスプレしている姿ではないかと。

「といった具合でな。クロエ、という生徒は知らんが制服姿でない少女が校内を徘徊しているらしい」

「クロニクル先輩がそういったことをする人とは思いませんので、別の方でしょうか」

「セシリアは知っているのか」

「ええ。特別教室の二年生の方で、少々お目が不自由な方なのですが」  
「なるほど。お前の知り合いともなればそんな不可解なことはしなさそうだな」

マコトはクロエがメイド服ならばよく着ていることを知っているためあながちクロエが本当にコスプレして出歩いているのではと一瞬思ったが、束の助手を兼任している以上は目立ってはいけなはずで、やはり別人ではないかと思った。

「このあと空いているから私はその銀髪少女を探そうと思ってな」

「箒さん…暇なのですね」

「ああ、暇だ。特に今日は一夏が千冬さんに付きっきりで稽古もできん。たまには時間を無駄に使うのも一興だと思ってな。セシリアも来るか？」

「私はそんな暇ありませんわ。レイラ、このあとはダイヴトウ・ブルーでテストがありますでしょう」

「ええ、確かに。ですから、今日はお夕飯も皆様とご一緒できませんね」

「なるほど。じゃあ、マコトと簪はどうだ？」

「私たちは空いてるけど。簪さん、いい？」

「…ん、マコトさんが行くなら」

「決まりだな。その銀髪少女が不審者でないか確かめに行くとしよう」

ああ、箒の真面目さが暴走してのことだったか、とマコトは苦笑いになる。それからしばらく5人で話した後は解散し、箒達は校内に、セシリア達はテストを行いにアリーナへと向かった。

放課後の校内へと繰り出したマコト達は夕暮れの中、それなりに生徒が残る中を歩いていった。箒を前にその後ろからマコトと簪が並んでついてきている形である。

「しかし、改めて思うがここは広いな」

「…人工島「カグヤ」、このIS学園のために元々あった大型居住用人工島計画を流用してできた島だから」

「確か、CMとかで21世紀最大のリゾート都市とか言ってたよね」

箒の言葉に簪がこのIS学園のある島について解説し、マコトもその名は過去に政府広報などで見たことがあった。ISが登場する前

からあつた人工島計画で、日本にハワイをというキャッチフレーズ  
だつたはずだとマコトも記憶している。

それがISの登場で出来た世界条約……アラスカ条約によって、日  
本でまずIS搭乗者の育成機関設立を義務付けられ、ちようどいい土  
地はないかと当時の政府が血眼になつて探した結果、この人工島が  
様々な立地条件に適つており選ばれたのだった。

大きな反対運動なども起こつたが全世界からの指示とあらば日本  
国内のそういった意見は全て無視され、IS学園は建立された。今で  
も稀に反対運動を行なつていた団体から嫌がらせなどがあると、生徒  
手帳には注意事項が記載されている。

「学園の寮や食堂は建設予定だつたりリゾートホテルをそのまま使つて  
いると聞いたな」

「え、そうなの？」

「……確か、寮の一階にあるパネルに記載があつたはず」

「へ、どうりで部屋の中、学生寮っぽくないんだね」

入寮してから感じていた学生寮のクオリティの高さがそういった  
理由だつたのかとマコトは驚いた。考えてみれば見晴らしもよく、学  
生寮が微妙に小高い丘にあるのもそういったことなのだろう。寮に  
ある浴場も造りがリゾートホテルのそれで、学生寮のものではない。

東の研究所がある森林区画も入口などは思い返すと微妙に整備が  
されており、キャンプ場のように見えなくもない。

広さを言つてしまうと基本的に学生寮から校舎までの移動は徒歩  
で行われるが学園の外周部への移動は学校内なのにバスで移動する  
必要や、完全に外周を移動する場合はモノレールに乗る必要があるほ  
どだ。

「これで国立だからいいけど、私立だつたらゾツとするなあ」

「学費が凄まじいだろうな」

世界からの要請があつての学校であり当然この学園は国立であつ  
た。そのため、中には国立の大学への推薦をもらうために狙うものま  
でいるという。マコトは卒業後はどうするかまだ決めていないが、で  
きれば東の手伝いをして宇宙に上がりたかつた。

「さて、問題の銀髪の少女だがどこにいるのだろうか」

「……………というか、学園の裏門に行けば入館記録見れるのでは？」

簪の提案に、箒もマコトもそれだ、となった。大きな人工島の上にあるのが、特殊な国立学校であろうが、学校は学校である。中に入るには当然、受付で手続きをしなければならぬ。正規の手続きをとっていればかならず学園の裏にある窓口に行っているはずである。

そうと決まれば、と3人は移動を開始する。一度食堂の方面へと戻り、そこから学生寮エリアを抜け、アリーナ群があるエリアを通る。

「いや遠いな裏口」

「……………まあ…歩きで10分かかるからね」

「遠すぎない？」

構造物が大きく、シンプルな配置のため迷いづらいIS学園だが、初見の人間は下手をすれば迷うのではないだろうかとマコトは思う。ただ裏口に行くだけでそれなりに歩き、ほとんど生徒の姿が見えなくなる。

裏口のあるエリアは搬入口や運ばれたものを保管する倉庫街になっており、一気に学校という雰囲気ではなくなってくる。

「ここが学園の裏側か。かなり印象が違うな」

「学校ってよりは倉庫街だね」

人気も少ないせいで微妙に不安を煽るのか、簪がマコトとの距離を縮めた。マコトは当たり前のように簪の手を握った。

「つ……………!？」

「あ、簪さん、嫌だった？」

「え、ひ、え、そ、そそそつ、そんなこと、ないよ」

「大丈夫？」

過剰反応する簪にマコトは首を傾げながらも手は繋いだままだ。箒は二人の様子は特に何も気にしておらず、リアクションはない。

「……………困る……」

マコトの手は暖かく、こうすることに手慣れているなど簪はどうにか心を落ち着けながら思った。彼女は妹がいたことを簪は思い出して、それでこうして不安な姿を見て手をつないだのかと納得した。

そして、同時に一瞬マコトの姿に自身とよく似た少女の姿が過ぎる。

気がつけば簪はマコトの手を離していた。

「ごめん、大丈夫」

「そっか。ただ、確かにここ怖いよね。肝試しに使えそう」

「マコト、それはいいな。セシリアなどはいいい反応をしそうだ」

簪の何かに察してかマコトは特に気にすることもなく、フオローするように言う。申し訳なさをマコトに感じながらも、簪は前を向いた。裏口が見えてきており、3人は少し歩く速度を上げた。

裏口の受付までやってくれば、警備員の女性が3人に気が付き声をかけてくる。

「どうしたんだい、こんなところに」

だが、その口調はかなり粗野だった。ロングヘアで見た目こそ黙っていればキャリアアウーマンに見えなくもなさそうだが、警備服を腕まくりし、頭になっている筋肉質な腕のおかげもありかなりワイルドにみえる。

「失礼。1年1組の篠ノ之と言います。聞きたいことがあるのですが、いいですか」

「なんだい」

「今日、こちらを銀髪の軍服姿の少女が通りませんでしたか？」

直球に筈が問うと、警備の女性は「またかよ」と隠しもせず思いつきり悪態をついた。

「また、とは」

「お前らでその話したのもう9組目だよ。暇なのか？」

「暇ですが」

「こっちは仕事してんだ。遊んでる暇はないっての」

警備員の女性は明らかに鬱陶しそうな顔をしている。まさかIS学園という重要施設の警備員がここまで態度が大きいとは思っていなかった。

「(いやむしろ、これぐらいじゃないとダメなのか?)」

強引な取材や、運動家などの侵入を問答無用で防ぐためにはこれぐ

らい荒事に慣れていそうな警備員でないといけないのかもしれない。この学校にはレイラのようなVIPも所属している以上、絶対に不審者を入れてはいけないのだ。

「すいません。でしたら、入館時に書く記名帳を見せてもらってもいいですか?」

「別にいいが。そこにあるぞ」

特にヒントは得られなさそうだが、マコトは記名帳を見ることにした。窓口の外側にある突き出した台の上に置かれており、マコトは早速目を通す。入館した人間はそれほど多くないようだ。

「入ったのは今日3名なんですわ」

「別に今日は搬入日じゃねーしな。楽な日だよ」

「どうだ、マコト。何かあるか?」

「どうだろ…ああ、この人だけ外国語だね、名前」

マコトは一人だけ外国の字で名前を書いているのを見つけた。ただし、英語ではなく読めない。だが、入館目的は日本語で「転入前の確認」と記載されている。既に退館時間も記載されており、昼には出て行ってしまっていた。

「なんて書いてあるんだ?」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

箒がそう言った横で、箒が言った。彼女も記名帳を見ており、どうやらこの名前を読んだようだった。

「へえ、嬢ちゃんそれ読めんのか」

「……代表候補生なので」

「何語なの? 箒さん」

「ドイツ語。そして、その人知ってる」

「何!?!」

箒が携帯端末を取り出し、少々の操作をしてから箒とマコトに画面を見せる。そこには、マコトからすればクロエにそっくりな銀髪に眼帯をつけた軍服姿の少女が敬礼をしている写真があった。

写真の下には解説が載っている。「ドイツ軍記念式典で敬礼をするラウラ・ボーデヴィツヒ大尉(当時)」と。

「この人はドイツの代表候補生で、現在最年少の軍人として有名」

「ぐ、軍人だと。それがこの入館理由と言うのは」

「まあ、仕事しながら学校に通う人もいるし、おかしくはないと思うけど」

ただ、軍人なのにわざわざここに来るというのはマコトもよくわからなかった。それに、この年で大尉という肩書きも気になる上、クロエと似すぎているのが引つかかる。クロエはこの世界におけるコーディネイターだと束は言っていた。もしかすると、彼女もそうで、それ故に年齢不相応な力を持っているのではないだろうか。

「(……何か目的があるのか……?)」

ただ学園に入るわけではない。何か目的があると考えの方が自然だった。だが、彼女もこうしてわざわざ正規の手順を踏んで人前に姿を現すということはそれだけ自然体になっているほうがおかしくないということを知っている……つまりはプロなのだろう。

この世界の本物の軍人。マコトは初めて会うのが彼女になるのかもしれない。

「その赤目の嬢ちゃんは随分と、頭が回ってそうだね」

「へ?あ、あたしですか?」

警備員の女性に突然そう声をかけられマコトは驚く。

「そうさ。そういう姿勢は嫌いじゃない。あたしら警備課の人間はかならず訪問する人間の目的を察せなくちゃいけない」

「あ、ありがとうございます?」

「素直に礼を言えるのも悪くない。サービスだよ、そのボーデヴィツヒというガキンチョは来月から学園に入ると言っていたよ」

警備員の女性は獰猛な笑みを浮かべている。簪が恐ろしいと感じたのかマコトの背後に隠れ、無意識に箒とマコトが前になる。一体彼女は何者なのだろう。

「ああ、そういえば名乗ってなかった。あたしはこの警備担当の一人、アキって言う。よろしくな」

「アキ、さん」

「ああそうだ。さあて、知りたいことはわかったろう?さつきも言っ

だが暇じゃないんだ。学生諸君は帰った帰った」

アキ、と名乗った警備員に3人はその場から離れるように促され、裏口から離れていく。マコトは明らかにあの警備員の名前は偽名ではないかと勘付いたが、それなりの理由があつてこの学園に雇われているのだろうか。

先ほど見せた獰猛な笑みなどはどうみても民間人のそれではなかった。前世で戦争をしていたマコトだからわかる。彼女は戦場にいた人間だ。

「(学園の人材登用の仕方がよくわかるな)」

そもそも、千冬という最強だが……という存在を雇っているのである。もしかしたら、IS学園の採用基準の最大のポイントは「実力の高さ」なのかもしれない。

「……はあ、それにしてもあの警備員はともかく、銀髪の少女は転入予定の生徒だったか」

「不審者じゃなくてよかつたね」

「ああ。だが、どこのクラスになるのだろうか」

「さあ？」

「……専用機持ちだから、1組以外かな……」

「どうだろうね。案外1組になつたりして」

「まさかな」

——本州行きのモノレールにて。

「(施設としては悪くない。流石は学園といったところか……しかし、織斑教官は風邪で面会できないとはどういう冗談だ?)」

「あの教官が、風邪を引くはずなどないだろう」

「……ここにもまた、織斑千冬の幻想に浮かされた少女が一人……」

夜間のIS学園の裏口は一晚中受付の窓口が開いている。代表候補生などが所属する以上急な呼び出しや、学園への帰還が発生するためだ。しかし、常に窓口にいるわけではない。裏口の窓口の小屋の地下、そこに警備員は詰めている——この裏口の担当者は1人だけ



であるが。

「はあ、まったく。学生つてのは暇でいいねえ」

マコトたちにアキと名乗った警備員の女性が言う。彼女はYシャツの前を大きく開け、インナーは丸見え、下はズボンを脱いでショーツだけだった。おまけに勤務時間だというのに手には缶ビールである。

「あら、それが彼女たちの特権よ」

そんな彼女の背後から声をかけるのは、一見すれば“女神”とさえ思ってしまうほどの絶世の美女だった。恥ずかしげもなく晒された肢体はまさに黄金比で、肌も透き通るように美しく滑らか。髪はまさに金糸のように彼女の臀部まで伸びて揺れている。

万華鏡のように少女のようなあどけなさで慄くような大人の魅力を兼ね備えた顔はアキに悪戯っぽく微笑んでいた。

「特権ねえ。まあ、そうなのか。人生で一番時間を無駄にできるからな」

「あなたにもそういう時、あつたの？」

「そりゃあ、あるさ。何もあたしも、いきなり戦場の炎の中から生まれただけじゃない」

数奇な人生、と言って仕舞えばそれまでだがアキは彼女の歩んできた人生を振り返る。振り返るがほとんどがロクなものではないと思っただけだ。

「そういうお前はあるのか、スクール」

「勿論。ハイスクールではミスコンで優勝したのよ？私」

「流石だな」

美女：スクールはアキの首にもたれかかるように抱きつく。彼女の豊かな体のアキに伝える体温は少しだけ低かった。それがどうしてもアキの心の中にある隙間に風を吹かす。首に回った腕にアキは手を重ねた。

「そういえばさ、千冬のやつ今日二日酔いだったらしいぞ」

「彼女が？そんなことありえるのね…」

「ああ。一人で世界を破壊した女」が二日酔いでダウンとかよ。最

高に笑えるぜ」

以前酔いつぶそうとして逆に潰されたため、どんだけ飲んだんかもアキは思うが織斑千冬が二日酔いというだけで彼女は面白かった。かつて、自分とこの側にいる愛する女性の全てを終わらせた千冬がなんでもない一般人のような姿を見せることに、だからこそ負けたのだと彼女は思う。

「…怪物を倒すのは、いつだって民衆。彼女もそう、ただの民衆に過ぎない」

「そのわりには力がありすぎねえか？」

「彼女がきつと『総意』なのでしょね」

世界が落とした濃い影を存在すらさせないような光の総意。自らの体を『半分』消炭にしてくれた『零落白夜』は影の存在すら許さない、圧倒的なまでの光なのだろう。影が消えれば、光の中で生きていかなければならない。今のスコールとアキはそういう存在だった。

「…ねえ、アキ。今の生活、満足してる？」

「それ何度目だ聞くの。満足さ。仕事して、金もらって、美味しい飯食って、好きな女抱いて寝る。最高だ」

「……ふふ、そう。そうね。贅沢よ、最高のね」

流れるように二人は口づけをかわす。そのまま薄暗い地下室で臍げな影を重ねる……ことはできなかった。こんな状況でも目の前の監視カメラ映像から目を離さなかったアキが、来訪者が来たことに気がついたからだ。

「……ん、悪い、お客だ」

「もう、空気読んでよ」

「しょうがないだろ。こんな時間になんのようだ？女二人だが……女二人……ああ、学園から話のあったやつらか」

アキはスコールを解いて、椅子から立つと脱ぎ捨てていた制服類を雑に着直して、スコールに「ちよつと待っててな」と言い、地上階へと上がる。窓口の中へと出ると、受付には二人の影が見えた。

「こんばんは。こんな時間になんのようだい」

事前に根回しがされていなければ不機嫌に対応して追い返すところ

ろだが、彼女らは歴とした学園の客である。クライアントからの命令は絶対。それがアキという女性がここに来る前から持っている信念だ。

訪ねてきたのは、欧州系の男女。どちらもよく顔立ちが似ていて、姉弟のように見えるがアキは女性の方から感じる空気から彼女が母親であるとすぐにわかる。

「……遅くなりました」

「やっぱり当たりか。どうぞお通りを」

「…ありがとうございます」

「あたしはただ学園にあんたらが来ることを聞かされてただけ、なんにも知らないよ」

「それでも助かります」

愛らしい少女のような声は女性の隣に立つ少年から発せられていた。そもそも、少年は少年ではないことがアキにはわかっている。下手な変装だと彼女は思った。

「(そんなじゃ、この国のザルな警備でもすぐわかっちゃうな)」

それほどまでに切羽詰まっていると取れるが、アキは何も言わない。彼女には関係のないことだ。お節介はサービスに含まれていない。

「ようこそ、いや、お帰りなさい。シエラ・デュノア養護教諭、シャルル・デュノアくん」

学園の平穏は1日たりとも続かない。僅かな平穏に終わりを告げる親子が学園へと足を踏み入れた。

## # phase—15 「7つ目の弾丸／彗星の姉妹」

フランス、デュノア社。社長オフィスに3人の男女がいた。

一人はこのデュノア社の代表取締役であるアルベール・デュノア。ブロンドの髪をオールバックにして整えたいかにもビジネスマンといった風体をしており、キレのある顔つきは今の彼がしている厳しい表情をより引き立たせている。

二人目は彼の横に座る赤髪を長く伸ばした美女、社長夫人であるロゼンタ・デュノア。艶やかと言える美貌は彼女の濃い口紅を野暮ったく感じさせず、色気として引き立たせている。体つきもおとぎ話の魔女のように美しかった。

三人目は前途二人とは空気感が大きく違う、少女のような女性だった。ブロンドの髪を肩甲骨のあたりまで伸ばしているシエラ・デュノア。世間的にはアルベールの愛人とされている。ロゼンタとは真逆の健康的な美というべきか、ほどよい肉付きに魅惑的な体つき。少女の良いところを保ちながら年齢相応に育ったような姿。まるで神に愛されているような精巧な容姿だ。

三人の表情は様々だ。アルベールは厳しく思い詰めるように、ロゼンタは困惑した表情を、シエラは苦笑い。

「…シエラ、すまないが、シャルロットを連れてここから出るんだ」「そんなあ、心配しすぎだよ」

アルベールの言葉にシエラが柔らかく返す。ここから、それはフランスという国からの出国を意味していた。深く考えていないようなシエラの反応にロゼンタはアルベールを援護するかのよう言う。

「シエラ、あなたと、シャルのことを思っただけだよ」

「ロゼまで、大丈夫だって。わたしもシャルロットも」

「ダメだ。ダメなんだ」

シエラの言葉を彼は否定する。アルベールの目がシエラを見る。強い意志の宿った目だった。その目をシエラが見たのは実に三度目だ。一度目は告白されたとき、二度目はロゼンタとシエラを取り合った時、三度目は子供が欲しいと告げられたとき。

どんな時であれ、そういう目をしたときのアルベールは絶対に退かないとシエラは知っている。

「……三人でずつと一緒だよって約束したよね」

「ああ。だが、このままこの国にお前たちがいればそれも叶わなくなる」

「やだよ」

「シエラ、私も、私も同じ気持ちよ。それでも、今あなたとあの子を失うなら……」

ロゼンタはシエラの側まで行き、彼女の手を取る。魔女、とまで一部の者たちから言われてしまうほど冷たい手がシエラの温かい手を取る。学生時代からの友人で、今では同じ名字にまでなった家族。正確にはシエラが彼女と彼の妻であり、その愛は冷たい手の奥からでもシエラはよくわかった。

「ロゼ……けど」

「ずつと離れるわけじゃないの。ゴタゴタを片付けたら、また、一緒に暮らしましょう」

「ロゼンタの言う通りだ。一時的な離れてもらうだけだ。その間に私たちがどうにかする」

彼らには今、敵がいた。彼らの特殊な関係を理解せず、ただ野望のために俗な関係へと落とし込み、失墜を狙う者たちと戦っている。

「嫌だよ」

「シエラ……」

まるで駄々をこねるように言うシエラに、ロゼンタは言い聞かせるように名前を呼ぶが、シエラ表情は酷く悲しみに満ちていた。まるで、アルベールとロゼンタが向かう先を知っているかのように。

「二人とも、死ぬ気でしょ」

泣きながら、彼女は告げる。アルベールもロゼンタも目をそらす。凶星だった。二人は勝ち目がない戦いを挑もうとしている。いっそ、勝つつもりもない。シエラと娘が逃げるための時間稼ぎ。一人の女を愛した二人がしようとしているのはそういうことだった。

「死ぬ気は無い」

「嘘だよ。アルベールもロゼも、ほんとの時はみてくれるもん」

「シエラ、お願いよ。生きて。あなたには生きて欲しいの。それにシャルにはあなたが必要なの」

「シャルにはアルベールもロゼも必要だよ！三人で育てていこうって！二人がパパだつて言ってくれたでしょ!?!」

泣き叫ぶシエラに、アルベールもロゼンタも困ったように笑ってしまった。そこまで、愛してくれているのかと。歪とも見られない関係なのに、シエラが二人に向けるものは全く同じ大きさの感情だった。

「そこまで愛されると、男冥利につきるな」

「なによ、私の方が愛されているわ」

「私の方こそ」

「私の方が」

「や、やめてよ、こんなときに」

突然争いだした二人にシエラは慌てて止めに入る。そうすると二人はすんなりと張り合うのをやめた。二人は泣きながら笑っていた。

「ははっ、シエラ。頼むから、行ってくれ」

「アルベール…」

「アルベールに乗るのは癪だけれど、シエラ。行つて、愛したあなたが、生きていてくれないと私、死んでしまいそう」

「ロゼ…」

もう、止められない、とシエラは悟つたのだろう。呆然としながらも、席を立つて後ずさるようにシエラはその場から離れようとする。

「…死んじゃ、やだよ」

「死なないさ。シャルの花嫁姿も見ていないんだぞ」

「そこは同感ね。あと、結婚式で感謝の言葉伝えられてるシエラも見れてないし」

「二人とも…」

嘘つき、とシエラは言いたかった。けれども、言えなかった。

「さよならは、言わないから」

「もちろん。また、だシエラ」

「ええ。またね、シエラ」

まるで、今度はお茶をしよう——学生時代のように、二人はシエラに永遠の別れを告げる。

「……う……つ……また、ね」

泣き叫びたいのをこらえながらシエラは部屋から走り去っていく。扉が音を立てて開けられた。これならまるで、シエラが三行半を叩きつけられたように見えることだろう。

「…行ってしまったな」

「そうね。最後に、笑顔が見たかったわ」

「無理だろう」

「誰かさんのせいでね」

二人は居住まいを正して、立ち上がる。そこには先ほどまでの愛情を持つていた男女などいなかった。二人は夫婦だ。しかし、それは建前のようなものだ。家に決められた結婚だけはして、愛したのは同じ女性。奪い合おうともした、けれども、今は一人とその子を守る同志。

「…相手は国か。恨まれたものだな、ノルン社の連中には」

「弱者こそ、欲しがるものよ」

「フツ…言えている。欲しいものは全て手にする。それが強者の特権だ。毛頭、負けるつもりはない」

「当たり前よ。さっさと片付けて、二人とバカンスに行くわよ」

「待て。そこに私は入ってるのか」

「入ってるわけじゃないでしょ。社長が遊んでるんじゃないわよ」

「…諸君、昨日は自己管理不足で授業が出来ず。すまなかった」

千冬は二日酔いで休んだ翌日には復帰していた。朝のSHRで一応「風邪」という体裁をとるためかマスクをしているが、その絵面が壊滅的に似合っていない。一夏は笑いをこらえるのに必死だったが、一瞬凄まじい殺気をあてられ、真顔になり背筋を伸ばした。

「……さて、本日は急だが本クラスに転入生が来ることとなった」

転入生。1組全体が大きくどよめく。ぼーっと教壇の方を見ていたマコトも流石に慌てて頭を起す。転入生と言えば昨日、箒の暇つぶしで同行した不審者探しで情報を得たラウラ・ボーデヴィツヒのこ

とが頭を過るが、警備員のアキから「一ヶ月後」と転入時期を聞いてしまっている。となると別の誰かである。

「こんな時期に転入生って変だね」

さやかが妙な時期の転校生に首を傾げた。5月の転入生、他校に通つていればわずか一ヶ月で転校したことになる。よほどの家庭の理由などがない限りそれは起こらない。

「紹介する前に数点、諸君らに守ってもらふ必要のあることがある」

千冬はそう言うやいなや、控えていた真耶に目配せし、真耶がプリントを配布する。マコトにも当然配られ、彼女はその紙面に目を通す。それは注意事項などではなく、IS学園では事あるごとに書かされる「機密保持証明書」だった。

「これから来る生徒はその特異性ゆえ、暫くはこの学園内のみ存在を周知され、外部へ存在を明かすことは禁じられる。その誓約書にサインをし、ただちに前へ回すように」

存在自体が機密の人間が教室に来る。1組全体が期待と不安、それぞれで湧く。

「どこかの王族でも来るのでしょうか」

「王族はレイラだけで十分ですわ」

レイラはやんごとなき身分が来るのかと推測したが、セシリアはもうレイラだけでお腹がいっぱいと言わんばかりだった。

「(……嫌な予感がするな)」

後ろの席から回ってきた紙を纏めながら、箒はどうしてもこれから生活が一変する予感がした。

教室内の全員から証明書の回収が済んだことを千冬が確認すると、教室の入り口の方へ「入れ」と告げる。入室の許可が出て、その転入生が引き戸を開けて、入ってきた。

現れたのは少々小柄だが、すらりとした美少年だった。ブロンドの髪を僅かに肩の上で縛り、顔つきはあどけなく中性的で自然な微笑を浮かべている。教壇の横まで来て、1組全体に向き直す際の動きはキレがあり、歯を見せて笑いかける彼に1組のほとんどの女子が釘付けになった。



「フランスから来ました、シャルル・デュノアと言います」

放たれた声はアルト。まるで声変わり前のようにさえ聞こえる。美しい容姿に美しい声。まるで彼そのものが「美」という音楽を奏でる楽器のようだった。

「男性としては2人目になりますでしょうか。わからないこともたくさんあります、皆さんに追い付けるよう、頑張ります。よろしくお願ひします」

教室は静まり返る。一夏の時とは違い、見惚れている生徒が多い。貴公士という表現がよく似合うとマコトは思う。だが、同時にシャルル・デュノアという存在が彼女は許容できない。

男性操縦者は理論上一夏しか存在できないからだ。

「……現れるべくして、現れた存在……か」

無理と嘘。それを包み隠すための容姿。マコトは得意ではない。ポーカーフェイスをしながら、彼をよく観察する。体の作りはまだ高校一年生で発育が遅れ気味ならばごまかせる。しかし、声はどうだろう。仮に、声変わり前だとしても、彼の声は違和感が強くあった。綺麗な声であることは間違いないが、それがおかしいとマコトは思った。

「(女の子……なんだろうけど、なんで…男装を)」

一番考えられることは一夏へのハニートラップだが、そもそも学園がここまで胡散臭い生徒を最重要防衛対象であろう一夏と同じクラスに入れるのはリスクが高いなんてものではない。ライオンの檻に肉をくりつけて入るようなものだ。

だというのに、同じクラスにしたということは学園は何か狙いがあるということだろう。

「(はあ、ほんとダメだこういうこと考えんの……レイラならなんかわかるかな)」

ちらりとレイラをマコトが見れば、レイラもちょうどマコトを見たようで目があった。彼女はふふつと微笑んで視線を前に戻す。ああいうちよつとした仕草が色々つくすぐるんだらうなとマコトは思ったが、見習おうとは思わなかった。

「デュノアの転入により寮の部屋替えを行うことになった。差しあたっては同じ男子同士で部屋を組み、現在同室の篠ノ之は臨時的にオルコットとデュランダルの部屋へ移動してもらおう。オルコットとデュランダルの部屋は元々3人用なため、問題はない。詳しい話は放課後、山田先生から聞くように。：デュノア、貴様の席はデュランダルの後ろだ。いいな」

「はい」

「よし、ではSHRを終了する。今月より実機を交えた授業となる。各人、気を抜かないように。1時間目は校庭で私の授業だ。専用機持ち以外は学園支給のISスーツに着替え移動だ。では解散」

流れるように教師二人が出ていき、教室内は困惑に包まれる。男子生徒が現れたことに加えて部屋割りを変更、なにかと耐性が出来ていた。1組の生徒でも戸惑うのは当然だった。シャルルは内心想定外だった。男子がくればもう少し騒ぎになるのではと踏んでいたが、実際は何故といった視線が多い。

シャルルは困ったような笑顔を浮かべながら、一夏のほうへと向いた。

「え、えっと」

「シャルル、でいいか？」

「うん、大丈夫だよ」

「じゃあ、とりあえず、更衣室に行こう」

「更衣室？」

「女子がこれからここで着替えるから出ないとダメだよ」

「：あ、ああ、そうだね。案内、してもらえるかな？」

「いいぞ」

一夏がシャルルの手をとって教室から抜けていく。なぜ手をとっていったのかは謎だった。しかし、教室の一部の生徒からは「あれ：織斑くんもしかして」「これってそういうこと？」などとあらぬ疑いかけられることとなる。

マコトはシャルルの反応があまりにも男性らしくなく、本当に彼女は大丈夫なのかと明らかにスパイか何かははずのシャルルを心配し

てしまう。もしかして、止むに止まれない事情があつて、正体を隠しているのだろうか。かつての、アスラン・ザラのように。

「いやー、すごい美少年だったね。世の中いるんだね、あんな人」

「さやかはああいうの好みなの？」

「そういうわけじゃないけどさ」

さやかはシャルルの美貌自体は気に入つたらしい。制服を脱ぎながら、さやかは話を続ける。

「やっぱり、この学校って綺麗な人たくさんいるじゃん。だから、目の保養って言うか」

「なるほどね。でも、滅多に出会いがないこの学校で男子って言うチャンストか思っちゃわないの？」

「逆に聞くけどマコトは？」

「いや全然」

「同じだよ。あたしも別にここで出会いはいいかなあつて、男子にしても女子にしても、住む世界が違う人が多すぎるよ」

崖の上の綺麗な花を見上げるような感覚がさやかにはあるらしく、学園での出会いは特に求めていないようだった。マコトとしてもこの相沢さやかという友人が誰かになびく姿というものが想像できなかった。まだ一緒に外出などはしていないが、彼女は友達と遊んでいる方がまだ楽しそうに見える。

「まあ、そういうのは置いといて、ISスーツって今更だけど結構恥ずかしいよね」

「さやかもっ？」

「まあ……なんというか、篠ノ之博士も同じ女性ならもうちよいマシなのなかつたのかなって」

さやかと言いつつ、両手でISスーツを持って広げる。ISスーツはいわゆるパイロットスーツだがマコトの前世でつけていたものとは全く違う。既に何度かマコトは着用しているが、ISスーツは全身に着るウェットスーツのようなものだが体のラインが非常によく出る。

着る際はゆるゆるだが、体を入れてしまえばあとは最後に首元の

チャックを締めると勝手にスーツが体にフィットする。そのためフリーサイズで誰でも着ることが出来、このスーツもISコア同様、束が配布したものだ。初期期のもは気密性も高く、束は未発表だが専用のヘルメットを装着すれば宇宙空間での活動すら可能な高性能宇宙服としての機能も持っている。

しかし、現行のさやかか前になっているISスーツは大気圏内での使用を前提に作成されたもので、通気性を上げるために空気の抜け穴などが設けられている。

「けど、ISに乗っちゃえばあんまり気にならないと思うな」

「マコトはもう乗ってるもんね…」

マコトも最初のクラス代表選抜戦時に恥ずかしさを若干覚えたものの、ISスーツがISの操作性を上げるために必要な装備で、あるとないとでは機体の反応が変わるとわかっているため我慢して装備したが、戦ってしまえばそんな羞恥など全くなかった。いっそ、着ていることさえ忘れるほどの一体感があった。

ただ、マコトも改めてみるとIS学園が指定するISスーツは少々扇情的な部分がある。ISスーツはその特性上下着を身に着けることができないため、全裸で着ることになるのだが、局部を隠す部分が樹脂製の小さなカップがあるだけで、あとはスーツ自体の色合いでごまかされている。

「それに…っ…着る時ちよつと、冷たいし」

「ん…それはわかるかも」

下着も脱いでさやかとマコトがISスーツに体を通すとひんやりとしたものが身体中を包んで思わず声が漏れてしまう。クラス中もそのような状態でこれはまかり間違っても一夏のような男子に聴かせてはいけない。

このひんやりとしたスーツの感覚はISスーツの薄い積層上になっっている生地と生地間に仕込まれた減圧用の液体で、ISにはいくらか慣性制御システムがあるとはいえGを完全に殺しきることができないために仕込まれているものだ。初代のISスーツ、つまりは千冬が白騎士に乗っていた頃は必須の装備で、マコトはISスーツの有

無での体への負担を比較した数値を見たことがあったが、ISスーツなしではとてもではないが乗れたものではない。

そのため大事なものだとかわかってはいるのだが、マコトはこの感覚にはまだ慣れそうにない。

「首元まで上げて…んっ、よし」

さやかが首元のチャックを操作するとプシュツ、と音がしてスーツがさやかの体にフィットする。少々小柄だが形の良い臀部などが顕になってしまう。

マコトもスーツを自らの体にフィットさせる。一瞬の息が詰まるような感覚の後、身につけているという感覚が薄くなる。減圧用の液体や生地が二枚重ねだったり、必要な装置があるにも関わらずこの軽さ。東が完全なコピーほぼは無理だと言ったが、このISスーツはその“ほぼ”に含まれていないものだ。特殊な素材、特殊な減圧液：明らかにオーバーテクノロジーだとマコトは東の技術力を再確認する。

「マコトの色は赤、黒、白なんだ」

「うん。色が選べるって言ってたからこれにした」

マコトのスーツの色はザフトのパイロットスーツに近い。一方でさやかのスーツは初期カラーの灰色と黒のままだった。

「さやかは色変えなかったんだ」

「まあね、別にデザインが可愛いわけじゃないし」

ISスーツはIS本体よりも要求される技術が少ないため、多くの企業が参入し様々なデザインがある。中には明らかに本来の使用用途から外れたビキニのようなデザインもあるが、仕方のないことなのだろう。

「二年生になれば自分のも持てるだろうけど、マコトは買う？」

「わかんない。けどあんまり洗えないし、買う必要あるのかな」

「匂いがつくのはやだよね」

マコトはさやかの言葉に同意した。機能上、やれる掃除といえれば拭き洗いで済む。一応素材としては汚れにくいとなっているが、ずっと身につけていれば付いてしまうものもある。

専用のクリーニングなども受けることができるが、ISスーツの耐

用年数は汚れたなものを見るとそれなりに短かった。

「洗えるのはあるけど、それだと耐G性能が落ちるし」

「マコト、それが落ちてるとどうなるの？」

「ISはIS自体のG制御がすごいからそこまで影響ないけど、こう、内臓がぐえつと引つ張られる感じはするかもね、ISでも」

「うわー…なんかそれやばそう」

「実際、戦闘機とかでちゃんとパイロットスーツつけてないと内臓傷ついちゃうからね」

「こわっ。というか、よく知ってるね、マコト」

つい前世の知識を元にマコトは話してしまいハツとするが、苦笑いで誤魔化す。さやかはこういふときに深く聞いてこようとしないので、マコトは付き合ひやすかった。

「着替え終わったし、いきますかあ」

「そうだね」

珍しくマコトはさやかと一緒に行動を開始して、教室を出る。1時間目の開始時刻にはまだ余裕があった。

マコトとさやかが校庭にたどり着くと以前はクレーターだらけだった校庭の一部が綺麗になっていた。以前、いつもの6人で話している際にながった学園の整備課で開発されている機体というものが出来上がったのかもしれない。

「(学生でもISって作れるのか? いや、この学園の設備ならやれるのかな…もしかしたら束姉さんが手伝ってるかもしれないし…)」

束が最初期に配布したIS用の基本OSは優秀だが構成が綺麗すぎて逆に弄れない、という難点があった。現行のOSはマコトも数度使用した打鉄にも搭載されている束が“潜入”した際に作った彼女からすればオモチャののようなレベルのものだが、束以外の人間でも構成を簡単に弄れるし、発展(という名の束の後追い)もできるようになっていて。学生であっても施設と人数がいればなんとかできるかもしれない、という代物だった。

マコトはOSの書き換えや調整も前世のアカデミーの優秀者向け

コースで数度したことがあるが、あまり自身に向いていない、ということがわかっていて卒業後はほとんどメカニック任せであった。同期に優秀なメカニックがいたの大きい。

「(ヴィーノにヨウラン…どうなったんだろう)」

飛鳥マコトの記憶が大部分を占めてきている影響か徐々に臃げになりつつある前世の記憶の中で、同期のメカニックたちを思い起す。機体調整はデステイニーに乗る直前から完全にシンのクセに合わせており、完璧なものだった。彼らも最終決戦では母艦のミネルバと共に戦ったが、ミネルバが最後までどうなったかマコトは知らない。それだけの激戦で、混戦の末、最期の戦いではミネルバの指揮範囲外に出ってしまった。

「(…：考えてもしようがないんだけどね)」

もはやあの世界の人間ではない彼女はただ追憶を重ねることしかできない。笑い合っていた記憶も、既に遠い。

「マコト」

「へ？」

「ボーツとしてるよ」

「あ、ごめん」

さやかに声をかけられマコトは意識を前に戻す。遠い記憶を呼び覚ますとマコトはついボーツとしてしまう癖があった。ここで箒や一夏、レイラとセシリア、更には簪であれば「どうした」と聞いてくるが、さやかは何も聞かない。彼女はマコトの意識を呼び覚ますだけだ。

「さやかはさ、こういうとき何も聞いてこないよね」

「聞いて欲しかったの？」

「いや、別に」

「なら、そういうことだよ」

さやかは悪戯っぽく笑う。八重歯が彼女の茶目っ気を引き立たせている。

「誰だつて聞かれたくないこと、あるでしょ？それに、1組の子ってみんなちよつと『変』でしょ」

「え…？」

「どうということなのだろう、とマコトは思った。変、というのはマコトが入学当初感じていた違和感のことだろう。果たして、それは当たっていた。」

「みんな優しすぎるでしょ？1組って。織斑くんにもそうだし、今日来たデュノアくんにも」

「それは」

「マコトとか篠ノ之さんは織斑くんと仲よかったからあんまり気にしたくないだろうけど、私のいた地域ではあつたんだよ、女尊男卑の団体とか」

まあ、学校ではなかったけどね、ときやかは笑いながら言う。

「誰かに優しくできる人は、誰かの痛みを知ってる人。だから、誰も過去の詮索はしない…そんな暗黙のルールが1組にはあると思ってるよ、私には」

誰かの痛みを知る人。その言葉が、妙にマコトは刺さった。考えてみれば、一夏たちも心配そうに聞いてきても大丈夫、と言えばそこまですで本当にまずい時以外は深く聞くことはない。

マコトは千冬がこのクラスを一夏のために揃えたのだと考えていた。だが、違うのかもしれない。このクラスは「訳あり」の生徒がたくさんいるのかもしれない。

さやかも、何かあったの？とマコトは口には出せないが、彼女を見ってしまう。一夏たちとはまた別の友人。付き合いやすい、適度な距離感でいてくれる過ごしやすい彼女も「誰かの痛みを知る人」なのだろうか。

「マコトもきつとそうなんでしょ？たまーに、怖い顔してるし」

「えっ、そんな顔してる？あたし」

「今朝もしてたよ。デュノアくん見てる時。マコトってちよつとつり目っぽいから真面目な顔すると結構怖いよ」

「そ、そうなの？うーん」

思わず顔を触ってしまう。さやかはあははっ、と笑っていた。前世の特徴もある程度残しつつも、妹のマユに近い顔立ちながら、彼女よ



りも勝気な顔立ちになったマコトはまさかそんなに見られているとは思わずなんともいえない気持ちになった。

「あ、みんな来たみたいだよ」

さやかと話しているうちに、置いてきたクラスメイトたちが駆けてくるのが見える。見えるのだが、更にその後ろから別の生徒たちもくる。まるでどこぞの始発ダッシュのような人数だ。

「あれ、なんか人数が多くない?」

「ほんとだ」

マコトは1組の生徒の後ろにいる集団をよく観察する。見覚えのある生徒もちらほらといて、その中に決定的な人物を見つけた。オレンジ色の髪と、董色の髪の周囲の生徒と比べると幾分か幼い双子の姉妹と思しき少女たち。

「あ、あれ2組だ」

「なんでわかったの?マコト」

「コメント姉妹がいる」

「コメント姉妹……?ああ!2組のクラス代表ね!」

クラス代表戦がダメになった影響で別クラスとの交流もなくなり、コメント姉妹の認知度はかなり低いようでさやかも言われないと気が付かなくなったらしい。アイドルとしてライブなどしているはずだが、客層が学園の生徒とあまり被っていないのかもしれないとマコトは思った。

「ふむ。間に合ったようだな」

いつの間にか千冬がマコトたちの前にいた。先ほどまで影も形もなかったのにときやかが腰を抜かしかけるが、マコトはいつものことだと何も思わない。

「相沢?なんだ、腰でも抜かしたか」

「せ、先生が急に現れたので」

「この程度で驚いてはこの時間保たんぞ」

千冬がククツと笑いながら出席簿に目を落とす。走ってきていた生徒たちは全員テキパキと整列し、マコトたちもその中に混ざった。一夏たちも遅刻寸前に間に合い、なんとか千冬の折檻を受けずに済ん

だようだった。

「よし、全員集まったな。時間通りで大変よろしい。大抵初めてのこの授業では毎年半数が遅刻する。理由は…今、諸君らが体感している通りのものだ」

マコトがどういうことだと周りを見れば、セシリアやレイラ、一夏は特に何も変わりないがそのほかのほとんどの生徒が体を少し強張らせて、顔を赤らめていた。羞恥心で着るのが遅れる、と千冬は知っていたようだった。

「慣れてくると服の下に着ることになる。トイレ等も——ああ、流石に男子がいる前では言わん。この授業後、配布したISスーツに付属していた説明書をかならず読んでおくように。読んでおかないと早々に買い換えるハメになるぞ」

千冬が真面目な顔で言い、マコトはだらうなと苦笑いした。パイロットをしていた時は大きな作戦前などはトイレにあまり行かなくていい戦闘糧食を食べたり、それでもという場合はしようがないためパイロットスーツに仕込まれている簡易トイレで済みます。マコトは前世の噂でトイレが装備されたコクピットシートの開発なども進められていると聞いていたことがあったが、馬鹿にできないものである。尿意などで戦闘に集中できず死んだとなんては死にきれものではない。

ISスーツはそもそも戦闘用ではないが、東が原型を作成した時点でそういったこともしっかりと考えられており、凄まじい吸水性を持つシートを股間部に内蔵することで済ますことが可能だった。

「(で、それはそのまま使われて、他のオムツとか宇宙ステーションでも水を吸い取る時に使われてるんだよね)」

東は自身の技術のうち、この吸水シートだけが宇宙に持ち出されたことに嬉しさを感じていたらしく、量産性の高い素材のデータをわざと流出させていた。マコトも急激に広まった吸水シートに東が関わったのだろうと推測していたのでそれは間違いではなかった。

「(東姉さんが目指してるのはこういうゆっくりした歩みなんだろうなあ)」

本来は地道に世界に浸透させてある程度の地盤が固まればインフィニット・ストラトスを世間に発表して、という流れだったので順序が逆になってしまっている。そんなことを知っているのは本人と千冬とマコトだけだが、微妙な気持ちになる。

千冬が言った「買い換える羽目になる」というのはISスーツには最初から吸水シートが付属していないため、購入する必要があるからだ。学園の購買に大量に在庫があるため、買うだけでいいのだが、一年生はよくそれを忘れてしまうものがいるらしく、初めてISで機動を行った際に「濡らして」しまい早々にスーツをダメにするという者が多い。

マコトは既に購入してスーツに装備させている。

「うえ、そうなんだ。マコト知ってた?」

「知ってたし、もう入れてる」

「教えてよ」

「そこ、うるさいぞ」

千冬に注意され、さやかは慌てて口を閉じた。マコトは苦笑いだ。「さて。この時間では1組と2組の合同授業となる。例年であればクラス代表戦である程度は交流ができるのだが、今年度はあのようなことがあったため、今回ほとんど初顔合わせに近いことだろう。流石に自己紹介を、とは言わんが授業後にも交流を深めておくといい」

そう言われれば全員が互いのクラスを見合う。2組は他のクラス(4組除く)と違い嫌がらせをしてこなかったクラスである。1組と比較するとやや現在の流れに乗っている女子もいるが、嫌がらせをするほどの嫌悪感などは一夏たちに持つていない。

マコトは入学初日にちらちらと教室を覗いていた生徒たちが何人かいることに気がついた。

「今回の授業内容は事前に伝えていなかったが、ISの戦闘機動を間近で見てもらう」

「あ、あのー先生ー」

「なんだ?」

2組の生徒の方から手が上がる。質問をしたのはコメット姉妹の

妹、オニールだった。千冬が問えば、彼女はこういった。

「校庭って、バリアとかそういうの無いんですけど、大丈夫なんですか？」

もつともな心配にマコトはそういえば、と思った。ここで戦えば当然流れ弾の危険性があり、もちろん見学している生徒たちにも危険性がある。どこか穏やかな印象のあるオニールは印象通りの子なのだろうとマコトは思った。

オニールの質問に「そうだよ、オニールちゃんの言う通りだ」「そうだね!」と同調する生徒が多数いる。もしかしなくても彼女は2組のマスコットの存在、それこそアイドルなのだろうかとマコトは推測する。

質問に対し、千冬は解答せずに1組のほうを見る。

「その質問も本授業の大事なものだ。1組の生徒はクラス代表を決める際に行った模擬戦を覚えているか？諸君らはそれがあつたから質問しない、ということになるが答えられるものはいるか」

1組で行われた模擬戦、そのことに2組からは「そんなことあつたの？」や「そういえば聞いたことあるかも」といった声上がる。一夏の初めての戦いということで注目度が高いと思いきやそうでもなかったらしい。

千冬に試されるようなことを言われた1組の生徒たちは誰が手を上げるかお見合いをし始めたので、マコトが挙手した。

「はい!」

「飛鳥か。まあ、貴様は応えられるだろうな。当事者だ」

「ええと、ISには模擬戦用のシステムが搭載されているので、模擬戦をする場合であれば弾丸の使用などはなく問題はありませぬ」

「と、いうことだ。コメント妹、代表候補生であれば知っていると思つたが」

「先生!オニール、というか私たちはISでの訓練は全部実弾でした!ですから知りませんでした!」

「コメント姉。発言は挙手してからするように。まあ、私の言い方もよくない。すまなかつた。実際のところ、1組で模擬戦用のシステ

ムが使用されたのはクラス代表戦も近く、極力機体の損耗を避けるためだ。普通は使われんシステムだ。バリアがあるしな」

模擬戦用のシステムは専用機であればかならず搭載されているイメージトレーニング用シミュレーターの機能を流用したものであるため、量産機にしか乗っていないと知られないこともある。実際にコメット姉妹もこれまで訓練では全て実弾で行なってきたがシールドバリアのおかげで特に問題はなかった。

また、彼女たちがIS乗りよりもアイドルとしてのほうが現在は本業になってしまっている影響もある。

「ただ、操縦が下手だと墜落して事故、ということもある。そのため、今回諸君らに戦闘機動を見せるのは教員と代表候補生となる」

教員と代表候補生。マコトは教員とはまさか千冬か、と思ったがそれは違った。

「あれは……」

近くに座っているレイラの眩き声が聞こえ、マコトが彼女を見れば空を見上げているためマコトも上を見る。すると、校庭の上空にいつの間にか一機のISが滞空していた。灰色の機体色は青空をバックにシルエットを強く出す。

「あれは……ラファール・リヴァイヴ」

「自社製品はすぐにわかるな、デュノア」

自社製品。その言葉に1組も2組の生徒もシャルルに視線を集中させる。ラファール・リヴァイヴ。アメリカ製の量産機、日本の打鉄と世界のISシェアを大きく握るラファール・リヴァイヴはフランスの民間企業であるデュノア社が開発した第二世代ISの傑作機とされる機体の一つで、中距離射撃戦を軸にパッケージ装備であらゆる状況に対応可能な上操作性も良好という人を選ばない機体だ。

「デュノア、これから模擬戦を行う間、解説はできるか」

「解説ですか？それは、ラファールの？」

「ああ。ちょうどいいことに今回の対戦相手は同じく傑作機だからな……その前に、彼女には降りてきてもらおう。山田先生！降りてくだ  
やうー」

千冬が灰色のラファールに呼びかける。山田先生、となれば1組の生徒には彼女しかいない。山田真耶、何かと1組の生徒には舐められがちな少女のような先生だ。

「え!? まやまや!?」

「やまやんなの!?!」

1組の生徒はほとんどが信じられない、といった声を出す。その中で、冷静に彼女のことを言ったのはレイラだった。

「山田先生はかつて日本の代表候補生。次期代表とも目されていた方ですよ」

そんな、という衝撃が全員を襲う。日本の代表、それは彼女らの目の前にいる最強「織斑千冬」を継ぐものに他ならない。マコトは真耶が元候補生とは聞いていたがそこまでの実力とは知らなかった。

「デュランダルと言う通り、山田先生は相応の実力を持つ。余談になるがこの学園の教師としての採用基準には当然、IS操縦者としての一定の力が必要になる」

千冬が「相応」とまで言う時点で、全員が真耶の実力が凄まじいものであると察した。真耶がゆっくりと降り立つ。真耶の纏うラファールは学園の量産機とは少し毛色が違う。各装甲には都市迷彩のようなものが施され、彼女が両手で保持しているライフルはマコトも見たことがない。よく見れば、装甲板の一部に何かを消した後が見え、塗装が盛り上がっているせいか塗り潰される前のそれは「日の丸」だとわかった。

「みなさん、おはようございます!」

物々しい装備を身につけた真耶がいつもと変わらない笑顔であいさつした。全員、僅かに遅れて挨拶を返す。

一夏や箒は他の1組生徒同様驚いているのか、彼女に釘付けだった。マコトも少くない衝撃を未だに受けている。

「今回の模擬戦では山田先生に2名が同時に挑んでもらう。その2名は…コメット姉妹、二人だ」

千冬の指名に、ファニールとオニールの肩が飛び上がっていた。

「え、私たち!?!」

「そうだ。コメット姉」

「で、でも、二人がかり…」

「お前らでなければデュノアの解説を聞くまでもなく戦闘が終わる」

千冬のその言い方は1組の専用機持ちたちのプライドを傷つける。暗に「1組の生徒では瞬殺される」と言っているのだ。セシリアが思わず立ち上がろうとするが、レイラが肩を掴んで止める。レイラは真耶の実力がある程度は知っているようだった。

「……異論はなさそうだな。二人はISを所持しているか？」

「量産機ですけど、一応半分専用機みたいなものなので」

「よろしい。では展開しろ」

千冬に言われ、コメット姉妹は集団の中から外れ前に出る。二人が腰につけているそれぞれのイメーজカラーに合わせたマイクを手にする、二人が一瞬光に包まれ、ISに搭乗する。

現れた機体はそれぞれ黒に、ファニール機はオレンジのラインが、オニール機は董色のラインが入ったアメリカの量産機だった。マコトも、いや、この場にいるほとんどの生徒が知っているであろう有名なアメリカの量産機だった。形状はシンプルで、どこか航空機のような印象を与えつつも、特徴的な機体の四方に配置された非固定ユニットのスラストアー。PICと呼ばれる慣性制御を利用した推力システムを最大限使用した日本製などとは違う、大出力のスタスターで機体を「吹っ飛ばす」モアパワーな機体特製。

ラファール、打鉄と続く第三の傑作機、アメリカ製のIS版F-15とでも言うべき機体、*「フリカアトラ」*。アメリカ語ではなくルーマニア語と機体名は戦闘機の「イーグル」との混同を避けるために与えられたものだった。

「フリカアトラ、アメリカ製の第二世代機であり、広くライセンス生産された機体だ。目になっている者も多いだろう。このように、他国の代表候補生が使用する場合がある。山田先生のラファールも同様だ。もちろん、この日本の打鉄も他国の代表が使用する場合がある」

世界のIS事情は例え女性しか乗れないものであっても、それまでの兵器と大きく違わないようだった。コア自体はその国の所有物だ

が、機体そのものは他国に生産してもらおう。カナダもそうだと千冬は続けて講義した。

「コメント、お前たちの使用している機体は専用でチューニングされた半分専用機のようなものでいいな」

「はい。お姉ちゃん：ファニール機と私の機はそれぞれの特性とセツト運用を前提にチューニングされています」

「なるほど。量産機のチューニングというのは彼女らのようにされるのが往々にある。現在山田先生が搭乗しているラファールも彼女の現役時代に使用された当時普及し始めたばかりのものを改造したものだ。現在は整備課でオモチャになっているが整備自体はしっかりとされているため性能は劣化せず、当時のまま：ですよ？」

「はい。久々に乗りましたが、いい感じですよ！」

「整備課を希望する生徒はこういった機体を来年度弄れるということを楽しみにしておくといい。前置きが長くなったが、そろそろ模擬戦を開始しようか」

講義はここまで、と千冬が話を切り、真耶たちに目配せをする。真耶がすぐに浮上した。なお、飛び上がる際に妙に舞う空気も少ない。まるで水面を静かに飛び立つ鳥のようだった。この時点でマコトは彼女がとんでもない実力者であることに気がついた。セシリアもこれを見てしまうと流石にわかってしまうのか口を開けている。

「あの…本当に、二人がかりでいいんでしょうか」

一方、オニールは彼女生来の優しさからかそんなことを千冬に聞くが千冬は「気にするな」と言われてしまう。勝気が妹より強いファニールはそれが舐められていると感じたのは「オニール、行くよ！」とキツとした目つきで上空へと飛び上がる。スラスタも蒸したせいかわつと風が生徒たちに当たる。

オニールは姉が行ってしまったため、ゆつくりと上空へと上がる。

「オニールちゃん！がんばれー！」

「ファニール！やっちゃえー！」

2組の生徒から威勢のいい応援が飛ぶ。2組の生徒たちからの応援はほとんどの生徒がしており、もはやコメント姉妹というアイドル



のフアンのようにも見えてきていた。かなりうるさいが千冬は特に何も注意しない。マコトは千冬がこういう応援は嫌いではないし、実際にあとは戦っているところを見てもらうだけと考えているのだろうと思った。

一方で、1組からは「大丈夫かな?」「まやまや怪我しないよね?」といった真耶を心配する声が多い。特に本音あたりがわりと本気で心配しているようで、手を合わせていた。

マコトはこっそりレイラのほうにズレて、レイラに声をかけた。

「レイラは知ってるの? 山田先生の實力」

「マコト…ええ、まあ。何故か公式戦には姿を見せなかったのですが非公式の練習試合での勝率は9割を超えています」

「きゅ、9割…!?!」

「れ、レイラ、それは本当ですか?」

セシリアも会話に参加する。明らかに動揺していた。

「本当です。もちろん、今では噂程度…母から私も聞いたから知っていました。日本の代表候補生、マヤ・ヤマダ…又の名を『第七の弾丸』」

存在しえない、リボルバー式拳銃における七発目の装填弾。そのような例えまでされる。マコトは空を見上げる。

「では、初めてもらおうか。山田先生、コメット姉、妹。シミュレートモード起動の上、模擬戦を開始。時間は5分。コメット姉妹は全滅、山田先生は『被弾したら』即終了でお願いします」

全員が啞然とする。2対1で被弾するなど千冬は真耶に言っているのだ。それに対し、真耶は「了解」と1組全員が聞いたこともないような低い声とともに短く返した。

コメット姉妹はファニールが完全に頭に血が上ったのか、アサルトライフルを両手に構え、もう真耶に向けている。コニールも戸惑いながらも両手にアサルトライフルを構えた。マコトは小柄ながら二丁持ちのコメット姉妹に意外と感じてしまう。双子の姉妹、性格は真逆のようだがどういいう戦い方をするのか気になった。

「始め!」

千冬の号令と共に、戦闘が開始された。

まず動き始めたのはコメット姉妹だった。開始と同時に二人はスラストユニットに加えて、瞬時加速を使い二手に分かれ、まるで瞬間移動をしたかのように真耶の左右に並んだ。

「な、なんだあの動き!?!」

「見たか!あれが2組の誇るアイドル!コメット姉妹の動きよ!」

一夏の叫びに2組の生徒がそう言った。マコトは今の動きを自身にされたらどうするか考える。左右を挟まれ、敵機はどちらも弾幕を多く張れる。前方、後方への回避は悪手だろう。ドッグファイトを誘発する。

「山田先生——!」

1組の生徒たちの悲鳴のような声に、真耶は応えた。

「うるさいですよ」

ゾツとするような冷たい声。1組の生徒が静まり返る。

「オニール!」

「うん!」

真耶を左右から挟んだコメット姉妹が同時に射撃を開始する。銃撃が左右から散布される。姉妹同士、被弾するのではとマコトは思うがよく見れば高度をズラしていた。

挟まれ、奇襲を受けた真耶がとった対応は上空への回避だった。狙撃銃のようなライフルを真耶は即座に構え、連続発射。散らされた射撃のうち、まず襲ったのはコニールだった。回避をオニールは行うが、一撃目を避けた瞬間に「まずい」と彼女の直感が告げる。刹那、頭部に直撃。絶対防御が発動し、大きくエネルギーが削られる。

「きやつ!?!ぐつ、た、ただの単発の実弾なの!?!」

2割も一撃でエネルギーを削られる判定を受け、オニールは困惑する。その答えは地上にいるシャルルからもたらされた。

「デュノア、解説を」

「はい。山田先生の使用しているIS用特殊ライフルはデュノア社で開発された試作装備です。当時、日本からの要請を受け共同で開発さ

れた「零落白夜に近似するモノ」の一つですね」

「今、零落白夜に近似するもの、という言葉が出たがこれは各国が私の使用した暮桜に対抗するべく開発している装備群を指している。零落白夜は端的に言えばシールドバリアを無視し、絶対防御をいきなり発動させ効率的にエネルギーを削る武装だ。それを為せるものが「零落白夜に近似するモノ」と呼ばれる」

マコトはこの「零落白夜に近似するモノ」に憶えがあった。

「レイラ、これって」

「ええ…「女王宣誓」も同じですね」

サイレント・ゼフィルスが搭載していたシールドバリア中和機能を持つ反則的なナイフ。それとあのライフルは同等だという。

「ライフルとしての性能は初速も早く、射程距離も長いです。最大の特徴「零落白夜に近似するモノ」としての性能は弾丸にあります。搭載される弾丸は対IS用散弾です。これは直撃時に弾丸が破裂し、着弾点に膨大な弾丸を浴びせることで一気にバリアを削るものです。局部への攻撃は絶対防御が最大稼働で働き、大きくエネルギーを削ります」

シャルルから語れた概要にマコトは「それは兵器として禁止の類ではないか」と考えてしまう。生身で受けようものなら危険なんじゃない。まともに原型を留めないだろう。そして、子弾を降らせ一気にエネルギーを削る戦法はマコトの前世でもあった。地球連合軍が自軍のG兵器に対しても有効と装備していた榴散弾頭。膨大な量の榴弾を散弾で浴びせ、フェイズシフト装甲を機能不全に追い込むのだ。

真耶の使用する弾丸はそれに近かった。

「察したのもいると思うが、当然生身の人間への使用は禁止されている弾丸であり、IS戦においてもエネルギー5割を切つてからの使用は制限される。今はシミュレーターのため問題ないがな」

千冬の補足で、マコトはやはり危ないものだったのだと納得する。

戦いは真耶が上空から回避運動をしながらコメット姉妹に一方的に撃ち下ろす形となる。コメット姉妹もこれで負けるわけにはいか

ないのか、前衛と後衛を分けた。

「私が前に出るから！」

「援護するね！」

少ない言葉は姉妹の絆が成す技か、即座にファニールがライフルを両手から消し、新しい武器を持つ。IS用の格闘戦用のナイフだった。オニールも真耶へと加速する。射撃を行いながら一度ファニールを追い越した。

真耶はそれを見るや否やライフルを格納し、左手にラファールの標準兵装であるガラムを出現させ、右手には筒状のものを呼び出し、すぐにそれをオニールに向かって投げつける。

「…グレネード！」

投げつけられたそれがグレネードだと察したオニールは迎撃しようとして銃口を向けるが、彼女が撃ち抜く前に投げた本人である真耶がそれを打ち抜いた。意味がわからない、とオニールは一瞬困惑したが、撃ち抜かれたグレネードが爆発し、発射したものが爆炎ではなく白煙だと気がついた時には遅かった。

「煙幕!? オニール! 下がって——」

「遅いですよ!」

煙幕をつつきり、真耶がオニールに肉薄していた。ファニールがオニールを救おうと瞬時加速をかけ、オニールの横に並ぶがそれは最悪の手だった。

真耶はまずオニールに至近距離で銃撃を行い、彼女の体勢を崩すと校庭の誰もない方向に向かって蹴飛ばす。その反動のまま、オニールの真横に飛んできてしまったファニールにナイフを突き立てる。至近距離でそのような超加速をされてしまえば、ファニールは避けられない…はずだった。

「……避け…!?!」

「こんのおー!」

スラストユニットの一つに刃を掠らせながらもファニールはスラストユニット全てを横方向に向けて回転しながら真耶の一撃を回避する。このタイミングで避ける、真耶は今の回避はいくらなんでも

も異常だと判断するが、冷静に推力をカットして前のめりに体を下げ  
て回避する。

ファニールは「奥の手」まで使ったのに回避されたことに激しく  
動揺した。

「(そんな…!?) システム」まで使ったのに、どうして!」

彼女たちが幼いながらも代表候補生たらしめる「特異性」を強化  
するそれが目の前の一見緩そうな女性に通用しない。

「ぐあっ!」

宙で一回転した真耶は大きな隙を晒したファニールに容赦無くガ  
ルムを撃ち込む。ファニールは防御姿勢をするしかなく、復帰してき  
たオニールの狙撃によって真耶の攻撃は中断する。

「(先程の回避は…危なかったですね)」

真耶は内心冷や汗を掻いていた。もしファニールがもう少し早く  
回避を始めていれば一撃をもらっていた。今の回避は運によるここ  
ろもあるだろう。長く続けば恐らく一撃は、いやそれなりに削られ  
る、と真耶はコメント姉妹の潜在的な実力の高さを評価する。

「そこまでだ!」

と、これから二人揃って仕掛けようとしていたコメント姉妹と迎え  
ようとしていた真耶の動きが千冬によって止められる。約束の時間  
を迎えたようだった。

「3人とも降りるように」

戦意を解いた真耶が、武装を解除して下へと降りていく。一方、  
ファニールはギリツと歯軋りする。

「ふあ、ファニール……」

「……私たちは、まだ負けてない……っ」

「そ、そうだね。これは模擬戦だし……」

「…特訓、今日は厳しくいくわよ」

「うん」

双子も真耶に遅れて地上に降りる。すると、1組、2組双方からも  
大きな拍手が起こる。短時間とはいえ、ギリギリの攻防を見せてくれ  
た3人には惜しみない賛辞が贈られていた。

「まやま、山田先生！すごいかったよ！」

「フアニールちゃん！すごい気迫だったね！」

「コニールちゃんも頑張ったよ！」

真耶は普段の状態に戻ったのかかなり照れており、フアニールは照れ臭く鼻を鳴らしてそっぽを向いて、コニールは「ありがと〜」と小さく手を振っていた。

「以上で模擬戦は終了だ。IS学園の教師の実力と、代表候補生の實力は全員理解したと思う。以降は教師には敬意を、代表候補生には憧れを持つといい。この時間は以上で終了とする。今の戦闘のレポートを来週までに書いて提出すること」

千冬の言葉に全員が頷いて、レポートに「ええ〜」という空気を出す。

「…なるほど、織斑先生がコメント姉妹を選んだ理由がわかりましたわ」

「どういうことセシリアさん」

「マコト、クロスレンジも交えての機動戦を見せたかったのでしょう。私とセシリアでは…」

「あー、二人だと…」

「ええ、山田先生と射撃戦になっています。それに、私たち二人でビツトを展開すると流石に山田先生も一撃は覚悟しなくてはなりません」

コメント姉妹が対戦相手として選ばれたのは授業の中でレポートを書かせるためにも必要なことだったのだとマコトは納得した。セシリアとレイラでは悪くいえば単調な試合になってしまっただろう。それでもマコトは真耶が魅せてくれるのではないかと思うが。

授業を終えた一夏はシャルルを連れて校庭から遠くないアリーナの更衣室へとやってきていた。

「いや〜、すごかったな！山田先生と、あの子たち！」

「そうだね、一夏」

お互いに背を向けながら着替えを行う。一夏としては隣で着替えたかったがシャルルが「ごめん、向こうだと男同士でも恥ずかしくて」

と言ったため、こうしている。純粋な一夏はそれを信じていた。

「俺だったら即落とされて箒になんか言われそうだな」

「箒、って篠ノ之さん？」

「おう。ああそうだ、シャルル、昼は一緒に飯食おうぜ。みんなにお前紹介したいし」

「みんな？」

「ああ。セシリア、レイラ、箒、マコト。あとは4組の簪だな。いつもこの6人で飯食ってるんだ」

「へえ、いいの？混ざって」

「大丈夫だろ」

一夏としてはこの学園にようやくやってきた男子であり、是非このまま友人となりたかった。彼はこの僅かな時間でも穏やかで人当たりがよく、一夏は自分たち6人に混ざっても大丈夫だろうと考えていた。

「マコト、っていうのは誰かな？他の子たちは代表候補生で名前ぐらいは聞いたことあるけど」

「マコトか？マコトは廊下側の席に座ってた黒髪に赤目のやつだよ。

俺と箒の幼馴染なんだ」

「（黒髪に、赤目……っ！彼女か）」

シャルルは朝のことを思い出す。教室ないで幾つか向けられていた警戒の目。その中の一つがマコトからだ。もう一つはシャルルも入学前に気をつけなければと思っていた、レイラだ。

「（プリンセス・レイラは……政府の担当官から注意しろと言われていたけど……あの子も“同じ目”をしていた。私も素人だけど、わかる。あの子も、プリンセス・レイラと同じで“本物”だ）」

シャルルは3人の親のうち、二人から母と共にここへ逃げるように言われて来たが、既に彼は別口からの“脅迫”を受けていた。だから彼はその別口から受けていた要注意人物とは他に相手がいることに話が違うと思った。

「ねえ、マコトは代表候補生なのかな？」

「え？いや、あいつは一般生徒だぞ。確かにちよつと一般にしては強

すぎるけど」

一夏はシャルルの質問に「束さんとの付き合いもあるからだろうけどな」と言いたかったがこらえた。それは正解だった。

「(……どういうこと？一般生徒が強い……まさかとは思うけど、プリンセス・レイラの現地協力者?)」

どこぞの生徒会長がした勘違いをシャルルもしてしまふ。それほどまでにマコトとレイラの目つきは似ていた。前世で散々コンビとして動いていたせいだった。

「(……関係ない。やらないと……やらないと〃空が落ちてくる〃んだ)」

シャルルはちらりと一夏を見る。するとちょうど彼は全裸だった。

「……っ！」

悲鳴を上げそうになって口を抑える。幸いにして一夏には気がつかれなかった。

「(……うう、やっぱり無理だよ。男の子となんて……)」

男装は〃彼女〃の存在を消すためであり、別口からの依頼とも合理的だと判断されているがシャルルは素人で、ウブだった。〃脅迫〃されていて、所詮は十代の子供で、感情がまだ使命を凌駕する。それに、まさか〃彼ら〃も本気でそんなことはしないだろう。ただの脅しだ、とシャルルは思っている。

「(……父さんや、ロゼンタさんがゴタゴタを片付けるって母さんが言ってたし……それまで時間を稼ごうかな……正直、こんな騙すような真似は……)」

シャルルが間者としてあまりに向いていない理由として彼は根がかなり善良だった。そもそも性別を偽っていること自体にも強い罪悪感を覚えているのに、加えて今背後にいる少年も騙そうと言うのである。シャルルもこの僅かな時間で一夏がいい人だとわかってしまったために余計だ。

「(織斑くんもいい人そうだし……ああ、もう。ノルン社だっけ？逆恨みなんかするから!)」

彼を〃脅迫〃したものの誤算はシャルルが孤独ではなかったこと



だ。彼女はゆるい母親と普段から暮らしているせいで母を反面教師に真面目なところもあるが、母に似ているところもあり追い詰めるように言っても、正直あまり追い詰められない。この別口からの「脅迫」も母親には相談しているし、アルベールたちにも盗聴されないIS同士の通信で伝えている。

それに脅しの内容もシャルルは現実味がないと思っている。

「(空を落とす……衛星軌道にある「アレ」を落とすって言うけど、あんなものを落としたり国自体もやばいし、ノルン社もまずいと思うけど……)」

「シャルルー！着替えたか！」

「うえ、あつーぶ、ごめん、あとちよつと待って！」

思考に耽っていたの間にか動きが止まっていたシャルルは一夏に声をかけられ慌てて着替えた。ため息をついてシャルルは一夏に「もういいよ」と言い、一夏と向かい合った。

「うし。じゃあ教室戻ろうぜ」

「着替え、終わってるかな？」

「ああ、そこは箒にでも電話してみるよ」

「そっか」

隣に並んで歩み出す。シャルルは薄氷の上を歩くような感覚に陥りながらも、少しの間学園生活を楽しんでもいいのではないかと考え始めた。そこは母親ゆずりの楽観視が働いていた。

## #phase—16 「流星の少女の残痕を見た」

1時間目から濃い授業内容だったが、そのまま日常は続いてあつという間に昼休みになった。マコトは昼休みをいつも通りに取ることになり食堂へと向かった。席も定番となった中庭が見える窓際で、簪とレイラの間座る。レイラとの隙間はあつて、前世と変わらない距離感。一方で簪は少し近い。

各々の料理の注文も普段と変わりなく、マコトは簪の頼んだ定食の茶碗に入っているご飯が山盛りなのも見慣れていた。

しかし、今日はそんな見慣れた光景の中に一人イレギュラーがいる。シャルルが一夏の隣に座っていた。

「改めて、シャルル・デュノアです。お邪魔します」

シャルルの出現に、簪はもう人見知りを発動させていた。シャルルがかなりの美人というのもあつて、セシリアやレイラと出会った時と同じく圧倒されていた。

「あなたがかのデュノア社の御曹司、ということですね！セシリア・オルコットですわ！」

「お会いできて光栄です、オルコット郷。あなたのお噂と美しさは祖国でも耳にします」

「あら、お上手ですこと。それとセシリアでいいですわ」  
「うわ、すごいなシャルル」

いきなり歯に浮くような言葉を放ったシャルルに一夏は素直に感心する。あまり口説くということなどしたことがない一夏も、シャルルがそうだったことに「慣れている」といった感じがするからだ。

「それに、お隣は…プリンセス・レイラ。この度はこのような形での謁見、大変失礼いたします」

「ふふ、シャルル・デュノアさん。私はもうただの小娘ですので、その呼び方はやめてください。レイラと」

「恐れ多くも、では、レイラさん、と」

「よろしいですわ」

レイラが完全に外行きモードで対応する。マコトはこう見ると本

当に今世の彼女はお姫様だったのだと実感するが、レイラの目が笑っていないことに気がついて、実際プリンセス、と呼ばれるのはかなり嫌なのだろう。

「(そういえば、議長がアスハに姫って言ってたな…)」

前世ではデッランダルがカガリ・ユラ・アスハに言っていた言葉である。決している意味ではなく、今マコトが考えると「お前の言葉は聞かない」という意味があつたのではないだろうか。

「…世界が…違う……」

簪は突如始まった上流階級の交流に引いていた。シャルルはそんな簪にも容赦無く声をかけた。

「君が更識簪さんだね、よろしく」

貴公子が手を差し出してきている。思わず簪は乙女ゲーか何かか、と思ってしまうが手は恥ずかしくて取れなかった。シャルルは苦笑いしながら手を引つ込める。

「よ、よろしく…どうして、私の名前を…」

「移り住む国のことは調べるからね。君が代表候補生なことも政府のサイトに載ってたよ」

シャルルの答えは模範的で簪もそりやそうだとなるが、シャルルからは目を逸らした。

「はは…彼女は恥ずかしがり屋なのかな」

「まあ、簪はそうだな。すぐ慣れるよ」

「そっか。それじゃあ…そちらが、篠ノ之箒さんだね。一夏から名前をさつき聞いたよ」

「うむ。よろしく頼む。もつとも、そちらのおかげで急遽引越したな」

「それはその、ごめん？」

「気に病む必要はない。ただ、いろいろと手間が出るがな」

箒はシャルルのせいで部屋を移動しなければ行けなくなったことを多少なりとも気にしているようだった。シャルルは「一夏のこと好きなのかな？」と考えたが、箒が移動するのが嫌な理由は単に稽古などの反省会が、稽古が終わって風呂に入って即できなくなるためであ

る。

シャルルは母親と違って察しても見極めるのがあまり得意ではなかった。

「ああ、そうですね。箒さんがこちらに移るとなると部屋も変えなくては……」

「ええ。ベッドは現在3つ目を撤去して私たちのものしかありませんし」

「お前らどういう部屋の使い方をしているんだ？」

「見ますか？」

レイラがそう言ってテーブルの上に携帯を出す。画面にはセシリアとレイラの部屋の写真が写っていた。

「なんだこれは。どこの王族の寝室だ」

二人の部屋は学生寮から明らかに逸脱した内装をしていた。元々がホテルのスイートルームだったことに加えて、セシリアが取り寄せた調度品や二つの天蓋付きベッドなどが部屋を占有し、ドレッサーなども学生が持つていてレベルものではない。

セシリアはふふん、と自慢げに胸を張っていた。

「私の家の寝室を再現した部屋になりますわ」

「……言っておきますが、私の部屋はこんなではありませんよ」

レイラはげんなりとした様子で補足していた。マコトは親友がまさかこんなお姫様のような部屋で生活しているとは思っておらず吹き出しそうになったが珍しくレイラが睨んできたので抑えた。

「ご、ごめん、レイラ」

「……全くマコトも。それで、箒さんはこのままですと寝れませんので、今のうちに手配して私のベッドを撤去。普通のベッドにして2つここに並べます」

「そうか、すまないな」

「いいえ。私も普通のベッドで十分です。あくまでセシリアの厚意に甘えていただけですので」

レイラは普通のベッドになることにむしろ喜んでいる節さえ見られた。マコトもまだ知らないことであるが、レイラの実家はごく普通

のイギリスの一軒家で、彼女の私室も豪華さはない。せいぜい一人部屋にしては広いぐらいだった。

「ん…それにしてもここのご飯はおいしいね」

自己紹介も済み、話題はシャルルが料理の持ち出す。簪がコミユカ…と呟いていたがマコトは気にしなかった。

「ええ、この食堂の料理はとても美味しいのです。我が家にも招きたいぐらいですわ」

「セシリアさんの言う通りだね。ここ料理は本当においしい…一夏、君が食べているのはなんだい？」

「お茶漬けだよ。シャルルも食うか？」

一夏がさりげなく茶碗を差し出すが、シャルルはやんわりと断った。周囲にはそりや口つけたものだろうから、と思われたがシャルルは違った。

「(関節キスでしょ!?)」

シャルルはウブだった。

「いやうめえ…美味しい飯食ってるから授業頑張れるのはあるよな」

「一夏の言う通りだな。食事がおいしい、これに勝る活力の元はなかなかない」

箒も一夏に同意し、味噌汁をすすす。

「箒も一夏も、よく昔は弾の家で練習のあと食べてたもんね」

「そりやなあ？」

「ああ。父のシゴキに耐え、その後食べる五反田の家の定食は最高だからな。今度行った時が楽しみだ」

「ゴタンダ？」

「ああ、シャル。俺と箒、マコトの地元の友達だよ。家が食堂なんだ」

「へえ〜」

地元トークには混ざれないのでシャルルはそう返すのみだ。セシリアはついこの前、鈴音の件もあり、彼女がライバルとする五反田食堂が気になるのか「私も行きたいですわね」と言っている。

「鈴音さんがライバル視するほどのお店ですから、私も気になりますね」

「レイラも？弾のお店、おいしいよ」

「……私も行きたいな…マコトさん」

「簪、それなら今度一緒に行こうよ」

「…うん！」

シャルルは初めて混ぜったグループ特有の若干の疎外感を感じつつもこんなものだろうと特に気にしなかった。ただ、マコトと簪を見て既視感があった。

「（…あれ、あの二人、母さんとロゼンタさんになんか雰囲気か）」

シャルルは母とロゼンタの普段から見ているイチャつきあい似た空気をマコトと簪から感じ取った。

「（そっだよねえ、ここ女子校だもんね……）」

男子として今はいるシャルルはなんだかなあ、という気持ちになった。

「なあ、シャルルも今度暇になったら弾のうちにいきましょう！」

「ああ、誘ってくれて嬉しいんだけど、僕はほら…」

「おい一夏、朝の誓約書もう忘れたのか」

「…あっ」

「全く、浮かれすぎだぞ」

一夏はシャルルという初の男友達に完全に舞い上がっていたのか朝の誓約書の件を忘れていた。簪が「まさか五反田や鈴に言っていないだろうな」と聞けば「言う暇なかったよ！」と暇があれば早々に厳罰ものの行為をしていたことに全員がひやりとした。

「一夏さん。しっかりなさってくださいいな」

「わ、悪かったって…いやほんと、学校に男友達がいなかったのがさ、思ってた以上にきつかったみたいで…」

「マコトや簪さんがいたせいもあったのでしようね。二人とは昔馴染みであったので、気にしていなかったことがここで一気に噴出したと」

マコトはまあ、しょうがないだろうという気持ちだった。

と、ここでふわりと優しい花のような香りがした。マコトがなんだとその匂いがする方を向けば、白衣を纏ったシャルルそっくりな女性

が立っていた。マコトの第一印象は「この人、東姉さんや布仏さんと相性良さそう」である。

「あらあ、シャル。もうお友達ができたの?」

「か、母さん!?なんでここに!?!」

「えく?お昼食ベにきたのよお」

シャルルが明らかに慌てた様子で立ち上がる。現れたシャルルを大人にして女性にしたような白衣姿の彼女——シャルルの母親であるシエラは6人に自己紹介した。

「皆さんはじめまして。わたし、シャルの母のシエラと言います。今日からここで保健室の先生をしています」

穏やかな、のんびりとした声音だった。確かに保健室の先生に向いているかもしれない、と全員が思った。同時に、なんとなくシャルルの姿に筈は同族か、と思ってしまう。シエラの姿が妙に束をちらつかせた。

「まあ、親子で転入されたのですね」

「そうだよお、ロールちゃん」

「ちよ、母さん!その人、イギリスの偉い人!偉い人だから!」

「お、おほほほ、お気になさらず。セシリア・オルコットですわ、デュノア夫人。ああ、いいえ、デュノア先生とお呼びしたほうがいいでしょうか」

「どっちでもいいよおく」

一夏もシャルルになんとなく同情した。彼も苦労人、家族のせいでも。一夏はつい最近姉が二日酔いでダウンするという事態を経験したので余計にそう思った。

「みんな、怪我をしたら保健室に来てね。わたしが直しちゃうから」

「母さん、ここではダメだからね!?養護教諭だからね!?!」

「そうだねえ」

「ほら、あそこで…織斑先生が呼んでるよ!一緒に食べるんでしょ?」

「そうだった。じゃあね、シャル」

ばいばい、と手を振りながらシエラは去っていった。どうやら学園の案内でもされているのか、千冬と今は行動を一緒にしているらし

い。マコトはなんだかすごいお母さんだったな、と思った。マコトの今世における母はわりと放任で、特にマコトはしっかりしてるから、とあまり何かを言われたことはない。仲は悪いわけではなく、たまに服を買いに行ったりもしているが。

「シャルル、大丈夫か？」

「…まあ、うん。母さん共々、よろしくね？」

「お、おう」

疲れた表情のシャルルに全員がなんとも言えない視線を向けていた。いい人そうなのは間違いないのだが、かなりシャルルが苦労しているのが見えていた。

「……ギル…ではなく、父上もたまに突拍子がないことを言い出すのでわかってしまいますね」

レイラもこっそり、今世では父となった「彼」がわりと自由奔放で娘的にはめんどろくさい父親な彼のせいで、シャルルに同情していた。

「それにしても、一夏に続きシャルルも親族が先生か。珍しいものだな」

「………確かに。普通の学校であればあまり親族がいるところには入りたいと思わないし、公立なら先生側は直接関わりがないところになる」

「簪さんの言う通りだよ。デユノアさんはともかく、千冬さん担任だし」

「そうだよなあ。全然鼻頂なんてされないけど」

セシリアとレイラは代表選での千冬を知っているため、完全に公私混同をしていないと知っているが口には出さなかった。あれを公私混同と言うのは無粋だろう。

「千冬さん、って織斑先生の名前だよ？ 飛鳥さんはどういう関係なの？」

「え？ 幼馴染みだよ」

「あの、最強と!？」

シャルルの珍しい反応に6人が驚くが、忘れていたがこれが普通の



反応である。

「シャルル、それを言い出したら箸もだよ」

「篠ノ之さんも!? え? ということはあの篠ノ之博士とも…なんて」

「そうだぞ」

シャルルは呆然とした。

「(…:…これ、無理では?)」

対象である一夏と同じ部屋になる。それはシャルル自身も「保護対象」として学園に入れられたからであり「別口」からは好都合だった。しかし、妙なことを起こせば一夏の姉である世界最強がいる上、彼の幼馴染みはシャルルからして見れば只者ではなく、おまけに3人は行方不明とはいえISの開発者と幼馴染み。

よほど、「別口」が焦っているのはわかっていたが、いくらなんでもこれはガバガバすぎるだろうとシャルルは事前調査の甘さに嘆いた。

「(こんな強すぎるパイプ持つてる相手に何かをすれば、母さんごと…:…あいつらより怖いよ!)」

無理のある脅しより、よっぽど見える脅威にシャルルは「別口」からの依頼を放棄したくなる。だが、やらねば「非現実的な脅し」は実行しなくても、悪辣なことをして父の会社や、社会的にシャルルとシエラも死ぬ可能性がある。

「(…:…無理だ…いやでも…同じ部屋なら、あるいは)」

俯いているシャルルに一夏が心配そうに声をかけるが反応はない。マコトたちは「そりや普通こういう反応するよ」と肩を竦めた。

しばらくしてからシャルルは復帰し、そのまま昼食をとり始めた。「そういえばなんでシャルルは転入してきたんだ?」

一夏が当たり前と言えば当たり前の質問をする。マコトはこの質問を待っていた。彼、いやほぼ間違いない彼女は何か「嘘」をつく。そこを後から探ればいいのだ。

シャルルはこの質問に対しあくまで平静に答えた。

「織斑くん」「一夏でいいぞ」…:…ええつと、じゃあ一夏。君がISに乗れるとわかってから全世界でも検査が行われたんだ。それで僕も検

査を受けてね」

「引つかかった、つてことか」

「そうなんだ。けど、二人目となれば何をされるかわからない。ひどいことを言えば『スペア』として扱われてね」

「……つまり？」

「モルモツトさ。だから僕のごとは伏せられて、慌てて学園に逃げ込んだんだ。ここは許可が入れないとこれない島だからね」

無理のない理由だった。マコトもこれには納得するしかない。ちらりとレイラを見ればアイコンタクトで「しばらくは様子を見ましよう」と返される。

「大変だったんだなあ」

「デュノアの母上と一緒にこられたのは安全のためか？」

「うん。母さん、看護師やってたことあるからそれで急遽保健室の先生になって」

「なるほどな……」

箒は本人の周囲に危険が及ぶのはどこの国でも同じか、と考えたようだった。

「それにしても綺麗な人だったな、シャルルの母さん」

「そうかな？ありがと、自慢の……とは言いつらいけど、いい母さんだと思う」

シャルルは一夏からの言葉に本心からの言葉を返していた。家族のことが大切だ、というのは今の笑顔からマコトにはよく伝わった。

「…すごく、のんびりしてそうなの……不思議な人だね」

「あはは、それは否定できないかな……よく父さんも言ってるけど、母さんは不思議な人だって」

シャルルの本心からの言葉は続く。家族が好きだ、というのが痛いほど伝わってくる。マコトはそんなシャルルが何故わざわざ性別を偽ってここにいるのか理解できない。

「これから、また学園が賑やかになりそうですわね」

「ええ、セシリア」

セシリアの言葉に、レイラは「良くも、悪くもですが」と内心続け

た。彼女も、シャルルのことを女性だとわかっていた。前世ではどちらかと言うと裏方のほうが向いていると前線に出ながら思っており、今世では結局、マコトの存在もあり辞めかけているがそういう立場にいる。

レイラはシャルルの話ぶりから、彼女の目的こそ断定しかねるが何を「理由」に動いているかは察していた。

「素人を必死に動かすのですから、簡単でしょう。『家族』を使えば」

必死さがあまり見えないあたり、まだ危害を加えることはないという確信がシャルルにもあり、それが非現実ではないといったあたりか、とレイラは推測し、それは当たっている。

そのまましばらくは家族トークになり、レイラは自身の父がわりと親バカなことを暴露したり、簪は姉がウザいことがあるととうとうハッキリ言ったり、マコトは妹が可愛いことを力説したり、簪は束の失踪前の掃除サボりなどを上げていた。途中、セシリアと一夏が両親がいないことを告げてまたしても場が暗くなったが、千冬の二日酔いを暴露しかけた一夏が突如飛んできたお盆によつて気絶するという珍事が発生したためなんとか持ち直した。

昼食後、シャルルを含めた集団から少し引いて、マコトと一夏は歩いていて。簪も隣にいたためマコトは話づらかったがいずれにせよルームメイトで彼女に隠し事はあまりできないので気にしないことにした。

「……………」

「何か？」

「いいえ、なんでも。マコト、放課後話をしましょうか」

「わかった」

「……………」

まあ、レイラなら大丈夫だろう、と簪は思っているため特に口を挟むことはなかった。

放課後、マコトはSHR終了後すぐに学校の屋上へとやってきてい

た。レイラもマコトがついてすぐに屋上に来た。

「待たせましたか？」

「全然」

「なら、早速」

フェンスを背に、マコトとレイラは並ぶ。話すことはわかりきっていた。シャルル・デュノアのことだ。

「……今はあえて、この口調で話そう。シン、奴をお前はどうか感じた」

《ザフト軍の赤服》であるレイ・ザ・バレルがマコトに、いや、シン・アスカに問いかけた。

「スパイだろ」

「だろうな。だが、奴は素人だ。今世の俺はお前も察しているかもしれないが、イギリスからそういった立場も兼任してここにいる」

「言っつていいのか、それ」

「俺はやりたくないからな」

あの堅物とまでアカデミー時代は呼ばれたレイがこんなことを言うのかとシンはおかしくなった。

「でも、お前らしいよ。今はただの小娘つてずっと言うもんな」

「当然だ。今世で、俺は俺らしく生きると決めた」

「のわりには、お嬢様しつかりやってないか？」

「……それが、今の私ですからね、シン」

「ぶっ、いきなり口調戻さないでよ」

「そういうあなたも」

真面目な話だったのに、とレイ……レイラは頬を膨らませた。

「なんで口調変えたの？」

「レイラ・デュランダルとしてあまりきな臭い話はしたくありません」

「なんで？」

「気分の問題です」

「あ……そう」

この親友もたまに不思議ちゃんだな……とマコトは思ったが「失礼なこと考えてませんか？」とマコトは思考を読まれる。カンが鋭いことをすっかり忘れていた。

「BT適正持ちってみんなそうなの？」

「何がですか？」

「いや、カンが鋭いなあって」

「失礼なことを考えていたのは否定しないのですか……まあ、そうですね。セシリアは……まあ、まだ成長途中ですが、母はわりとカンが鋭いですよ」

「へえ、そうなんだ。というかレイラのお母さんも適正あるんだ」

「ええ、私の適正の高さは母の遺伝だと父が言っています」

「……こつちでも遺伝子学者なの？」

「いいえ、ただの妻への愛と親バカです」

呆れて言うレイラに親バカな「彼」を想像してマコトは笑いそうになる。艦内でタリアと不倫関係だという噂が流れていたが、その理由も噂で色々やむにやまれない事情があつて……などと副長が鎮静化を図るためにこつそりシンたち新人組に教えていた。

この世界の彼らは全くの別人なのだろうが、レイラの様子を見るに幸せな家庭なのだろうなとマコトは思った。

だからこそ、守らないと、と彼女は強く思う。

「話を戻しましょう。シャルル・デュノア、間違いなく彼は彼女ですね」

「よく見ればわかるよね。まあ、成長期がまだ……って高校1年生だからギリギリ行ける、かな」

「だとしても、一夏さんも一緒に着替えたんですし気がつかないのでしょうか」

「一夏純粹だから、それとない理由言ったら信じちゃうよ」

「まあ、そうでしょうね。想定範囲内です。問題はわざわざ男性と性別を偽ってまでここに来た理由と、この学園の警備があんな杜撰な変装を許して潜り込ませ、挙句、最重要保護対象である一夏さんと一緒にクラスどころか同室にしたことです」

つらつらと全部あげると問題しかない、とマコトは思った。マコトはあのアキという警備員があまりに怪しすぎるシャルルを簡単に通すとは思えなかった。それでも通している、ということは何か理由が

あるのでないだろうか。

「問題点が多すぎるけど、むしろここまできると、シャルルが逆に怪しくなくなってくるよ」

「気持ちはわかりますが、篠ノ之東とあなたがパイプを持っていると言った時の反応が露骨すぎます」

「驚いただけじゃないのあれ」

「いいえ。聞いた瞬間の呆然とした顔が『想定外』と言っていましたよ」

「……………それ聞いてそんな反応するって狙いは」

「一夏さんでしょうね」

シャルルの狙いは一夏。レイラからすれば断定はできないが、流石にバレバレである。

「想定できる事態です。近づいて、ハニートラップで遺伝子を回収。あわよくば子供を作ってしまったえば最高です」

「……………言われると、ちよつとエグいよ」

「私は死んでも嫌ですが、美人局とはそういうものですよ。まあもう一回死んでますが」

「ブラックジョークはやめい」

「あたっ」

マコトがレイラにチョップすると彼女は可愛らしい声と表情をして痛がる。マコトはため息をつきながら、話す。

「ああ。けど、シエラさん…デュノアさんのお母さんはどうすんのさ」

シエラはどう見てもスパイではなさそうだった。マコトはそれは確信できていた。

「彼女は人質といったところでしようね。素人を必死にさせるにはいい口実です。うまくやってくれればよし、暴走してくれてもよし。そういう感じが透けて見えますよ」

人質、という言葉にマコトは露骨に嫌な顔をする。そうだろうな、とレイラは思った。そういった戦争の理不尽が嫌で彼は最初戦っていた。また戦争がしたいのか、という言葉。あんなことがあったのに、悲劇を見て見ぬフリをするのか。

戦闘記録の映像や通信を観覧した際にレイラは「彼」の叫びを聞いていた。

「じゃあ、なに？デユノアさんは鉄砲玉ってこと？」

「どう転んでも利用価値があるということでしょう。むしろ、問題を起こしてくれた方がいいのかもしれませんが。彼女を差し向けたものは」

「誰だよ、それ」

「昼の話からして彼女の家族はありえないでしょう。あそこまで慕っていますし。あれが演技だったら流石にわかりませんが、さつきも言った篠ノ之博士とのパイプで驚いたことから彼女は根が相当な善人で、嘘をつくのは苦手でしょうね」

前世では目の前の友人さえ掌握してしまつたレイラはシャルルの心理を正確に掴み取っていた。今世では絶対に親友のことは惑わさないし、惑わしたくない。彼女の生きるままに生きてほしいと願っているためしませんが、他人は別だ。

「望まないことをさせられている子が」

「心当たりが？」

「……ああ、いや、全然似てないし、あんな風にお母さんと仲良くしてたわけじゃないけど……」

ステラ。流星のように燃え尽きて、最後は自由に命を奪われた初恋の相手。似ているところなんてせいぜい髪の色。それでも共通しているのは無意識、意識しているか関わらず、望まぬ戦いをさせられていることだ。

「…連合の、あの少女ですか」

「うん……」

「マコト。幸いにも彼女はまだ救いようがあります。事を起こしたわけでもありませんし、あの少女のように体を弄り回されているわけでもありません」

まだ、手が届く。マコトにもそれはわかっている。しかし、あまりに情報が少ない。所詮、マコトとレイラは今、ただの女子学生だ。レイラは違うかもしれないが、彼女も極力所属している場所には力を借

りたくない。

こういうとき、なんでもお見通しな人がいれば――。

「あ」

「マコト?」

いる、とマコトは思った。

「レイラ、行こう」

「行くなってどこにですか」

「束姉さんのところだ」

「……それは篠ノ之束博士のことを言っていますか? 彼女は失踪して」

「ここにいるんだよ」

レイラは頭を抱えなくなつた。本国からは「できれば篠ノ之博士の妹から彼女の所在を聞いてね」と軽く、ついでに、聞けなければ別に、程度で任務を与えられている。それがまさか、ノーマークだった親友が居場所を知っているどころか学園にいることを暴露してくるとは思わなかつた。

「あの、マコト。あなたはいくらなんでも人を信じすぎです。さつき私がいギリスの諜報関係にいたと言つたではないですか」

「でも言わないでしょ? レイラだし」

「……まあ、言いませんけど」

純粋な赤い瞳に真っ直ぐ見られると流石のレイラも照れが出る。彼女はいろいろとズルイ、簪が誑かされるわけだとレイラは嘆息する。

「それに、前にサイレント・ゼフィルスと戦つた時に言つたでしょ。あたしたちのこと、”本当の意味で”知ってる人って」

「それが、彼女と」

「うん」

レイラはもういいや、と色々と諦めて屋上から移動しようとするマコトについていくことにした。

「え? スパイ? 全然知らないよ」



結論から言えば東はシャルルのことを何も知らなかった。

東の研究所に用意された食卓に座ったマコトとレイラはクロエにお茶を出されながら、そう言った東を前にしていた。

「うーん、東さんも正直、いっくん周りの護衛って何にも心配してないからさあ。ちーちゃんいるし、箒ちゃんもいるし、白騎士渡してるし」  
白騎士と聞いたあたりでレイラが卒倒しそうになっていたが、東はレイラの容姿はわりと好みなのでいいなあ、と思っていた。

「確かに色々過剰だけど、一夏も男の子だし、やばいんじゃない？」  
「いやあ、いっくんがそのシャルルくん？ちゃん？に何かするようになされてもねえ。だって東さんとか箒ちゃん、まーちゃん。それにりんりんがいても無反応なんだよ？」

「東姉さんなんで鈴知ってるの」  
「たまに行ってるし」

マコトも衝撃を受けた。なんで彼女はいまだに地元にいるんだ、と。

「なんで町にまだいたのって顔してるね」

「そりや思うよ！」

「だって、あの家……まあ、好きだし」

少し恥ずかしげに言う東にマコトは家を守りたかった、マコトの知っている近所のお姉さんとしての東が久々に見えて、ああ、と納得してしまう。

「……嫌な予感するけど、珠代さんって」

「バレた？」

「本人どうしたの!？」

どうやら神社の管理をしている篠ノ之珠代は東が変装している姿らしい。元々珠代は似ていて、以前は東と同時に存在しているのを見たことがあるためマコトでは珠代本人はどうしたんだと思った。

「たまちゃんはね、今たぶん静岡あたりで専業主婦じゃないかな？」

「生きてるんだ……よかった」

「もちろん、本人の許可はとってあるし、公的な手続きの時は行ってもらってるよ」

「で、東姉さんはあの保護プログラム発動後もずっと神社にいて、たまに鈴の家とかに出没していた」

「せいからい」

「…箒に斬られるね」

「言わないで」

これは斬られてもしようがないとマコトは思った。東もおそらくそう思っているので未だに箒の前に姿を現さないのだろう。マコトはさつきから妙に静かだな、とレイラを見るがレイラは完全に幽体離脱していた。処理能力を完全に超えたらしい。

「で、まーちゃんその子は？」

「あ、こっちはあたしの友達のレイラ」

「あ、君がそうなんだ。それでどうして連れてきたの？」

レイラは名前を呼ばれて再起動したのか、ハツとして席から立つ。……初めまして、篠ノ之博士。私はレイラ・デュランダルと言います。もしくは、レイ・ザ・バレル、彼女のいいえ、彼の元戦友と言え、わかりますか？」

「まーちゃんの戦友!? ってことはコズミック・イラの!?」

「はい」

東も流石に二人目がいるとは思っていなかったのか驚いていた。

「まーちゃん!なんで早く教えてくれなかったの〜!?」

「いや、あたしもこの学園にきてからだだし、東姉さんに紹介するって言ったのこの前の騒ぎの時だから」

「騒ぎの…あ、ああ、あのときの」

「突然の訪問失礼します。ですが、私もマコトと同様、今の平穏を守りたいのです」

「なるほどね」

東の顔が真剣なものになる。レイラを見定めているようだ。

「……一つだけ言わせてほしいなあ」

「何か？」

「……今度は『道』を決めないでよ」

「ッ……!」

「？」

マコトは何を二人が話しているのかわからなかったが、レイラはすぐにわかった。

東はマコトが以前話した前世の話から「レイ・ザ・バレル」が「シン・アスカ」をしたことを理解していた。彼の選択肢を奪い、誘導し、最後には空っぽにした実行犯。東からすれば、なんでそんなやつをシンが親友と呼び、未だにマコトとして大切な親友と思っているのか、理解ができない。

しかし、これまで聞いた「レイラ」の印象は損得抜きの本当の親友である。だから見定めたかった。

「……ねえ？私さ……私が聞いてんだよ？」

レイラは気絶しそうになる。初めて受けた、おぞましいほどの殺意。マコトは不思議そうな顔をしていることにレイラは啞然としそうになる。

「(マコト、あなたは……あなたは、一体、何を誑かしたのですか!?)」  
人の感情に敏感なレイラは理解する。東から発せられる殺意の元を。

「つ……今の私は、レイラ、レイラ・デュランダル。それ以上でも、それ以下でも、ありません」

必死に口を動かす。回答を間違えれば殺される。東だけではない——いつの間にかレイラの背後に立っていたクロエからも生気が抜けて殺意だけがある。

東はレイラのことを噛みしめるように、よく咀嚼して、脳内で何度も反芻させる。そうして、レイラにとってはまるで永遠のような緊張状態は東にとって一秒もしない間に終わる。

「……ん。よし、じゃあ君は今かられーちゃんだ！」

「れ、れーちゃん？」

「あだ名だよ！改めてよろしくね！」

「え、ええ」

許された。レイラは倒れそうになるのを必死に堪える。マコトはこれを知らなくていいのだ。レイラにとって、今世で気がつかされ、

苦しめている罪の意識。自らの生き方を、という誰かからの願いにも似た今のレイラの心情は親友にもそうしてほしいと思ってしまう。

「二人とも急に黙ったけど、まあいいのかな？それにしても束姉さんって布仏さんと相性よさそう」

「誰それ？」

「クラスメイト。こう、ゆるふわーって」

「……こういう方です」

レイラが写メを束に見せると「へえ、可愛いし、確かに気が合いそう」と言った。束は本音が纏う緩やかな空気もそうだが、僅かにある「狐臭さ」も感じ取った。

「（まーちゃんの周りはなんかこう、面白いねえ）」

るんとくる、とでも言えればいいのか。面白い他人がたくさんいそうだと束は思った。

「ああ、そうだ。お話を戻そう。いつくんにくっついた虫の話だったねえ」

「む、虫……デユノアさんもたぶんなんか事情あると思うんだけど」

「そりゃあるけどね」

マコトは「え？知らないんじゃない」と目を丸くしたが、束はやだなあと悪戯っぽく笑った。

「『スパイ』のシャルル・デユノア、なんて知らないけど『重要保護対象』のシャルロット・デユノアって女の子は……七槻しばねとしては知っているんだ」

束が突然発光したと思うとくたびれた女子教師、七槻しばねが立っていた。レイラはクロエがここにいる時点でそうなのだろうと察していたが本当にそうだった。

「つまり？」

「つと……デユノア親子は正式に学園が保護を受け入れたIS関係者なんだよ」

また束が発光し、元に戻る。

「保護!?誰から……」

「デユノア社の社長からね。なんか相当面倒くさいゴタゴタが今フラ

ンスで起きてるみたいだよ」

まあ、束さんは教師としては末端なので詳しい事情は聞いてないけどねくと彼女は二人に言う。

「……ですが、マコト様、レイラ様の懸念されているシャルロット・デュノアがスパイであるということも捨て置くことはできないでしょう」

「クロニクル先輩……」

「レイラ様、ここではクロエで結構です」

いつの間にか通常通りに戻ったクロエがレイラに紅茶を注ぐ。以前セシリアがあげたという茶葉が使われており、レイラのかぎなれた匂いがした。

「ま、クーちゃんの言う通りだねえ。実害が出なくても厄介ごとには変わらないし……」

分解しちゃう?」

「保護対象でしょ、束姉さん」

「冗談だよ、まーちゃん。しっかし困ったね。れーちゃんはどう見てるの?」

「上手くいけばよし、失敗しても使える。鉄砲玉ですね」

「なるほど。まー、保護申し出は嘘じゃないし『別口』から娘だけ脅してって感じかな。相手焦りすぎでしょ」

「ええ、杜撰です。だからこそ、面倒でもあります」

「暴走するバカほど面倒くさいことないからねえ。かつ飛んでる機関車はいきなり止められないし、止めても碎けて周りに被害が出る、と」

クロエの作ったクツキーを口に運びながら束は思考する。レイラはあの篠ノ之束がこんな目の前にいて、まさか協力してくれるとは思わなかった。しかし、マコトからすればどんなに天才でぶっ飛んでも根は箒の姉であり、篠ノ之家の長女である。

何より、本来の運命から外れた彼女は天災ではない故に、どうしようもなく善人として生きている。

でなければこんな世界をもっと自分勝手に面白くしようとしていただろう。

「まーちゃんの頼みだし、調べておくね。あと、ちーちゃんにもこれ言っついていいかな？」

「うん。むしろ千冬さんの力が借りられるなら助かるかも」

「りよーかい。味方が多いに越したことはないからね、やるだけのことはやっちゃおう！ただ、まーちゃん一つだけ」

「どうしたの？」

東は咳払いして居住まいを正す。

「私は、手出しできない。できるのは援護だけ。これ覚えといてね」

「……わかった。それでも、嬉しいよ」

手は貸すが、決着はつけて。そう東に言われ、マコトは頷く。最高の支援が来るだけでマコトは嬉しかった。

「それと、まーちゃん。君の翼はもう少しだよ」

「……！」

加えて、黒騎士の完成が間近だと告げられる。レイラはおそらくマコトの専用機だろうと察した。

マコトは嬉しさを隠さなかった。ついに、東が自ら手掛けた翼に乗れるのだ。

「完成したら連絡するね。そのときはれーちゃんも来ていいよ」

「なぜ私が？」

「宇宙で人型の機動兵器を扱った貴重な存在だからね」

「……わかりました。私で力になれるのなら」

「じゃあ、東姉さん、私たちはこれで」

「うん！また来てね」

マコトは高揚しながらも研究所を離れる。新しい翼。今度こそ争いのない空を飛んで、宇宙まで行くための翼。願わくば、かつては果たせなかった製作者の「願い」を果たせるといいな、とマコトは思う。

——だが、彼女は忘れていた。かつて得た「運命の翼」が何を初めて「討った」のかを。

## # phase—EX1「魔女」

フランスにおいてIS関連企業といえどもまずデユノア社が上がる。元々は規模自体は然程大きくない自動車メーカーで、IS登場以前は細々としたもので、お世辞にも業績自体はいいとは言えなかった。しかし、ISが登場し同社は真つ先にフランス製IS「ラファール」を開発し発表。どこにそんな技術が…と誰しもが思ったが、当時はまだ一部門の責任者でなかったアルベール・デユノアはアメリカでロボットの工学などを学び、実際に会社内のスタッフたちと趣味で後のEOSに近いパワードスーツを作成していた。

起死回生、電撃的な売り込みで突如デユノア社はIS事業に名乗りをあげた。そもそも、零細なデユノア社がISコアを入手できたことは当時の社長、アルベールの父が政府の高官と友人で、そのパイプを通してのものであったが、なによりも早くISに参入したかったフランス政府はコアの横流しを黙認し、デユノア社をIS事業会社として認定したのだ。

結果、趣味レベルとはいえ基礎研究があったデユノア社は一気に躍進し、IS以外の工業事業も軌道に乗り、現在の都心部に高層ビルなどを構えるほどの規模に成長した。

だが、当然そのようにたかだか零細企業がしやしやり出て国から事業の第一人者とされれば反感も多く出る。これまでにデユノア社には様々な妨害工作や産業スパイが現れ、その度にアルベールの父は苦勞をし続けた。そうして、過勞で彼が倒れ、アルベールが社長となる。チャンスだとデユノア社を狙う者たちはここぞとばかりに攻勢をかけたが、それらは全て無に帰した。

彼には魔女がついていた。ロゼンタ・デユノア。デユノア家と付き合いの長いある家から彼の妻となった女性で、ただの箱入りかと思えばその容姿に違わぬ魔女のような政治手腕の持ち主であった。

ロゼンタを副社長に据えたデユノア社は一気に社内を浄化し、その勢いを増して行く。そうしてラファールの改良型である「ラファール・リヴァイヴ」を開発し、これが世界的にヒット。ついで公式戦で

は使用しなかったが世界最強の後継者が非公式戦で数々の名勝負やその基本性能の高さを見せつけ、デュノア社の技術力を盤石なものとした。

だが、その躍進に陰りが見え始める。第二世代機ではシェアの3分の1を握った。では、そこから先、次世代の機体ではとデュノア社は周囲から期待されたが、デュノア社は第三世代機を未だに形すら出せていない。

構想はあるが、それを実現できる技術力がなかった。日本は度々発生する「妖精の悪戯」で技術的なブレイクスルーが発生していたが、フランスではそれは起こらない。打鉄同様、完成度が高すぎる故にラファール・リヴァイヴにそれ以上の未来はなく、デュノア社は停滞した。

そこをデュノア社を狙う者たちが見逃すはずがなかった。

フランス第二のIS関連企業、ノルン社。大手自動車メーカーであり、株のほとんどをフランス政府が持つほぼ国営企業。同社とつながりのあるフランス政府の高官や、元々は下請けでしかなかったデュノア社に対してしゃしゃり出るなど思っていたノルン社の幹部たちはここぞとばかりに反攻に出た。

まずはIS技術を応用した工業製品をデュノア社の技術を密かに盗用し、改良のうえ販売。もちろん、デュノア社はこれに対し裁判を起こすが、結果は敗北。政府をバックにつけ、その手の技術的な訴訟ではノルン社の弁護士が何枚も上手であった。

これにより金銭面でもデュノア社は多額の損害賠償によってダメージを受けてしまう。ラファール・リヴァイヴの生産も徐々に減ってきており、サポートパーツの製造だけでは減った利益を補填できない。ISの技術開発に回せる資金がデュノア社では無くなっていき、完全にデュノア社は先が見えなくなってくる。

次第にデュノア社の技術部門からは人材の流失が始まり、ノルン社はそれをヘッドハンティングのうえ吸収。退社時の誓約書など意味も持たず、技術の流失が発生。ノルン社のIS技術は飛躍的に向上した。



デユノア社はそれでもかろうじて息をする。アルベールとロゼンタは元々パーツ生産が主だったデユノア社のIS以前の繋がりを駆使し、自社製品以外の社外カスタムパーツなども製造を開始する。ラファール・リヴァイヴという高い信頼性を持つISを製造したことは大きなプラス効果となつてカスタムパーツの類は売れ、デユノア社は首の皮一枚で生き延びる。

しぶといデユノア社にノルン社とフランス政府はどうすれば潰せるのかを考え、技術的には後追いである以上、時間をデユノア社に与えると不利だと彼らは踏んだ。となれば、死角から彼らを刺すしかない。

結果、彼らを選んだのは事情を知らないものから見ればそう見える、アルベールの不倫というスキヤンダルだった。

シエラ・ルーセルという女性がいた。ある病院に勤めていた元看護師で、アルベールとは幼馴染みだった。彼女と彼は周囲から好き合っているという噂があり、しかし、実際にアルベールが結婚したのは許嫁であるロゼンタである。アルベールとロゼンタはデユノア社内でも仕事仲間としては良好な関係であったが、夫婦仲は冷え切っているというのが公然の事実であった。

そこを彼らは突く。調べてみればシエラはアルベールとよく似た瞳を持つ娘と郊外でひっそりと暮らしているではないか。まるで、周囲から存在を隠すように。アルベールとの娘か、というものは確認すればすぐにわかる。非公表のデユノア社テストパイロットの名簿の中に少女の名はあった。"シャルロット・ルーセル"、または"シャルロット・デユノア"。不倫した上で更に娘までこさえている。ロゼンタが不妊体質だという噂も加味すれば、ここまでで十二分な火種になると彼らは嗤った。

だが、彼らは失敗した。

「はあ？何を言っているの？シエラとアルベールが不倫？違うわよ。あの馬鹿がシエラを誑かしてくれたのよ」

ロゼンタをアルベールの不倫で揺さぶり、彼ら側に引き込もうとしたロゼンタに工員が接触したところ彼女から暴露されたのはアル

ベールがシエラと子供を成したことが事実であることと、シエラ・ルーセルという女性はアルベール・デュノアとロゼンタ・デュノアの妻だったということだった。

デュノア社を覆すための爆弾は不発どころか最初から存在していなかったのである。それでも世間体が、と職員たちはどうにかしようとするが現在の社会では多様性が推奨される以上、切り返すことはできなかった。

ここまでならば、デュノア社の勝利で、ノルン社は逆に転覆を狙って非合法的活動をしていたという爆弾を抱えることになるのだが、そうはならなかった。ノルン社は腐ってもほぼ国営企業であり、デュノア社とノルン社が争っている間にフランス政府はデュノア社派を政府から排除していたのである。

ノルン社は畳み掛けるように、職員や以前困った技術者を使いデュノア社に対して技術者に不当な報酬で仕事をさせていたという訴訟を起こし、更にシエラたちにアルベールからDVを受けていたと虚偽の告発をさせようと動き始める。

それらの動きに勘付いたアルベールとロゼンタはシエラとシャルロットをフランス国内から逃し、またシャルロットにはシャルルと男装させてIS学園に入学させた。無理はありすぎるが、学園の生徒たちに男子生徒である以上、外出不許可や存在を簡単に明るみに出さないという建前を用意するために。シエラを養護教諭として逃したのは、シャルル以上に肉体的にも危害を加えられる可能性が高かったためだ。

ここまでが、現時点におけるデュノア社とノルン社の攻防であり、国が相手というもはや敗北が確定したデュノア社の現状だった。デュノア社はいずれ潰れるだろう、とノルン社は確信し、加えて既に娘には雑だが“仕込み”もしている。娘に裏切られたアルベールらの絶望した顔が見れることだろうと彼らはその時を待っていた。

だが、一向に娘、シャルロットに言い渡した任務が遂行されることはない。当人に連絡をすれば同室になったがガードが厳しいと言われる。いつでも織斑一夏の遺伝子情報を盗めるだろうと伝えたが、彼

女は難しいと答えていた。

時間を稼がれている、と彼らはすぐにわかった。だが、もはやデュノア社は風前の灯であり社会からの印象も悪くなっている。また、シャルロットに行った脅しは彼らからすればなんの躊躇いもなく出来る。最悪の場合は娘にさっさと脅しが実行できることを見せつければいいだろうと考えていた。

それが悪役特有の油断そのものであったと誰が気がつくであろうか。

それは命取りで、シャルロットたちが日本へ向かった一週間後、ノルン社のラボは襲撃されたのである。

「他愛ないわね」

『流石だな、ロゼンタ』

「褒めても何にも出さないわよ」

『知っている』

炎に包まれるノルン社の敷地内にあるIS関連技術のラボ上空に、まるで魔女のような姿のISを纏うロゼンタの姿があった。ただ、彼女だとはまずわからない。珍しいフルスキントタイプのISで、魔女をイメージしたその機体はベースこそラファール・リヴァイヴであるが形状は原型を留めていない。使用されるコアは500以上ある中行方不明となったものの一つであり、所属も割れない。

この機体はかつてロゼンタが所属し、今はもう滅ぼされたはずのあの秘密結社に与えられたものだ。

『モノは?』

「ええ。全部手に入れたわ。これまでのデュノア社に対する嫌がらせや工作、見てみるとヘッドハンティングの記録とか、虚偽の事柄を纏めたものまであるわね」

『記録をわざわざ残すあたり、こうすることも折込済みだったということか?』

「なら、私を捕らえられる相手や罠を用意しているはずよ。それをしない、ということは大したことはしないとタカを括っていたのでしょ

うね」

マスクの下でロゼンタは回収したデータディスクを確認しながら、これだけ証拠を揃えれば状況は好転するだろうと考えた。この強奪行為自体を責められるだろうが、そもそもデュノア社にはこの「魔女」の足跡が一切ない。それどころか、公式にはロゼンタ・デュノアのIS適正はほぼないということになっている。

再度検査されても結果はかわらず「F（起動可能されど行動不能）」と出ることだろう。

「このカラクリを解けるのは例の博士とスコールたちだけ……まあ、これでジエンドね」

『最初からこうすればよかったな』

「あのねえ、こういうのは最終手段なのよ。それに、今更「亡国企業の魔女」が出没すると後始末が大変でしようが。会社を救っても、あの「最強」が来たらどうするの」

『理由を話せばわかってくれるだろうさ』

「……だといいいけれど」

ロゼンタはかつての「仲間」たちとはシエラとの出会いもあり別れている。それが許されたのは彼女が組織の幹部クラスであり「執行者」と呼ばれる部類であったからだ。自由行動を許され、気が乗らなければ任務にも乗らなくてもいい。「魔女」は気まぐれなのだ。

故に、組織崩壊時に全てを狩り殺した「最強」とは戦っていない。

ロゼンタ自身も秒殺されると踏んでいる。ロゼンタが使用するIS「黒き魔女」は砲撃戦主体の機体で、魔女のローブのような重装甲と魔女箒をイメージしたサブ・フライトシステムを兼ねる「バスターランチャー」だけが武装であり、某最強の戦法とはすこぶる相性が悪いのである。隙の大きい武装では撃つ前にロックオンすら許されず切り刻まれる。

「ただ、スカツとしたわね。やられたらやり返されるってこと、これで行ったかしら」

『わかっただろうさ。あとは弁護士にこれを流してしまえばいい。幸いにして、流出ルートのカヴァーストーリーも出来ている』

「ふふ、中途半端な善人はいいわねえ。壊しがいいもそうだけど、喘ぐ様が最高にそそるわ」

ロゼンタが魔女と呼ばれる由縁。容姿だけではない。目的のためならば手段を選ばず、人の心を惑わし、揺らし、籠絡し、そうして最後は都合の良い操り人形に仕立てあげる。シエラという最愛の女性が出来てからは絶対にそれをしなかったロゼンタは彼女が離れたことと、これまでのことで堪忍袋の緒が切れてデュノア社を裏切った技術者の一人を完膚なきまでに破壊し、人形として練り上げた。

「あとは、彼が全てを話せば終わり、といったところですよ。ふふふ、国を潰せるなんて、まさか今更できるとは思わなかったわ」

『……つくづく、君がああ結社から足を洗ってよかったですよ』  
「そうでしょうか？でなければ、今頃……この世界はだいぶ愉快なことになっていたでしょうね」

なんであれ、この魔女——デウス・エクス・マキナによってノルン社とデュノア社の盤面はひっくり返された上更に駒は奪われ、ゲームを再開しようにも盤面は焼かれて再開は不可能。一連の強引な政府のデュノア社派排除には当然少ないとはいえ反感を持つものもいる。  
やられたらやり返す。奪われたら奪い返す。アルベールとロゼンタの心情はそこだけ一致していた。

「あとは、これをシエラたちに伝えてしまえば終わりね」

『ああ。だが、シャルに依頼をしたという連中の正体がまだわからない。政府の高官なのは間違い無いが』

「気にしなくていいんじゃないの？出来ることはないわよ」

『盤面をひっくり返せるのはこちらだけではない。そもそも、シャルへの依頼はノルン社がどうなってもいいものだ。止まらない可能性がある』

「……正気かしら、そいつら」

『正気であれば、そもそも、ここまで我が社をいじめるように追い詰めようとはしない。まともなら最初からもう少し、企業同士としてどうにかできたさ』

「根拠は」

『お金が大好きな奴がいるということさ』

「可哀想ね…愛もお金で買えると思ってそう」

『強者の理論だと言うものもあるだろうが、同感だな。そして、困ったことにその男はシャルに言った脅しを実行できるだけの権限を持っている』

「“アレ”を落とすと？ありえないわ」

『……我々が彼らの喉元にナイフを突きつけた以上、暴走するのは確実だろう』

「仮に落とすとしてどこに落とすというの」

『最初は私とロゼンタを狙うと思っていた。だが、これまでノルン社のために“技術の独占”を目指していた連中で、シャルに与えられたのは“唯一の男性操縦者の遺伝子情報”の奪取だ。であれば、簡単だ。盗み出したあとに元を絶てばいい』

「……ありえない。IS学園よ？あそこにあんなものを落として、各国のVIPの子供や教員たちを殺してしまえば』

『そんなもの“男性操縦者”をこれから増やせるのであればどうでもいいのだ。手に入れた遺伝子情報を中国、アメリカあたりに売ればいい。喜んで彼らは“複製”するだろう』

「よくそこまで確信できるわね」

『人の業というのはそこまではしないだろう、という性善説的な考えなど悠々と超えてくる。そもそも、君も知っているだろう。“最強”の正体を』

「そうね。そう思えば、確実にやるということね」

人の業。ロゼンタはそれを知っている。だからこそ、アルベールの推測も全て確実に起こると考える。しかし、事が起きるとなれば防がなくてはならない。

「止められる？」

『無理だ。こちらは君という切り札を切った。シャルたちだけを戻そうとすればすぐに連中も切り札を切ってくるだろう』

「わかっていたならなんで私を使ったの」

『手がないからだ。それこそ、君がここではなく政府そのものを滅ぼ

す以外あとは手が無い。だが、そんなことをシエラやシャルが知ったらどうなる?』

「二人が死んだら意味は」

『死なないさ。ロゼンタ、私はなIS学園に二人の保護を申し入れたとき織斑千冬に対応されたんだ。そうしたら彼女はなんと言ったと思う?』たとえ、隕石が落ちてきても彼女たちのことは守る』と言っ  
てくれた』

「信じるわけ?あの最強を」

『世界を一度破壊したのだ。今更隕石の一つや二つ、あの光の剣の前には無力だろうさ』

亡国企業という存在は世界にとって必要悪だった。それは、この世界とはまた違う、別世界でのロゴスのように。世界を停滞させないようにするために必要な歯車。それを「織斑千冬」が完膚なきまでに破壊し尽くし、破壊の果てに世界を再生させたのだ。

それを力だけで成した彼女が今更隕石などで驚くだろうか。

「……………わかった。そこまで言うのなら信じましょう。戻るわ」

『頼む。二人が帰る家を残すために、我々は我々にできることをしよう』

「ええ。無論よ」

魔女は身を翻し、業火を背に闇夜に溶けていく。

翌朝、焼け跡からはノルン社の幹部の遺体が多数発見され、いずれも死因は焼死と判断された。なぜ彼らが真夜中にそんな場所にいたのかはわからない。ただ、彼らの家族は遺体発見と同時に、死者からの手紙を受け取ったという。

手紙には揃ってこれまでの悪事を告白するかのように震えながら書かれた形跡があり、かならず文末にノルン社のある研究員に全てを託したと書かれていた。

その託された研究者が数日後行われたノルン社とデュノア社の裁判で、デュノア社側が召喚した証人として現れたことは決して無関係ではないだろう。

## # p h a s e — 17 「嵐への出撃」

シャルロット・ルーセル、或いはシャルロット・デュノアと呼ばれる少女は善人であった。3人の親の元で育った彼女は二人の父からは影を引き継がず、母と同じく光に溢れた道をずっと歩んできた。

だから、彼女は人の業を知らない。あくなき欲望がおどましく、止められないことを彼女は知らない。

『……ノルン社はもうダメなようだ』

「なら……私があなた方にもう従う理由もない。父が全てを終わらすでしょう」

『ああ……そうだろう……“ノルン社”は終わるな』

「何を言っているんです。私に“彼”の遺伝子を持って来させようとしたのは“ノルン社”のためでしょう」

『それはついでだよ。そもそも、いつ私がノルン社のためと言ったかな。ノルン社に渡せば彼らが有利になるとは言ったがね』

シャルロットの耳を犯そうとする気味の悪い息遣いはあまりにおどましかった。

『男性操縦者を生み出すのに肉の子宮はいらない。試験管からでもいいのだ。そして、今いる男性操縦者はいら……タイムリミットは1週間だ。シャルロット君。守らなければ、わかるね？』

そんな、ありえない、とシャルロットは電話を耳から話す。そんな真似をすれば世界からの糾弾も、と彼女は思っていて、行動を起こさなかった。

「あんなものを落とせば、フランスは」

『大丈夫さ。男性操縦者を増やすことができるのならば……たかだかそんな東洋の猿どもが作った小島を消したところで、世界はどうでもいい。男性操縦者が増えればそこにいる学生がいなくなつたところで世界のIS乗りは倍以上に膨れ上がるのだから』

「……っ……」

狂気。生まれて初めて、シャルロットはそれを感じ取った。

『いい結果を期待しているよ。ああ、それと、私としては君の母上のよ



うに優秀な「天然素体」を失うのはとても悲しいのでね……君が任務を果たせば「アレ」落とすのはやめてあげよう』

「素体……何を言ってる？」

『知らない、気がつかないというのは罪だ！篠ノ之束しかり、シエラ・ルーセルしかり、あれらの優秀な次世代の人類を未だに放置しているとは……男性操縦者よりも本当はそちらがほしいのだが、世の中にはニーズというものがあるから仕方がない』

「なにを、言ってるの？」

『君が理解する必要はない。君がやることは簡単だ。織斑一夏の遺伝子情報を試験管の中か、君の胎内に入れて持って帰ってくればいい。出来れば後者が望ましい。素体から生み出された準素体と「成果物」の交配種は気になるのでね……まあ、無理強いはしないよ』

一体、向こうにいるのは誰なのか。シャルロットは日本へと向かう前に政府のエージェントから電話を渡されただけで、依頼主が政府の高官だとしか聞いていなかった。実際に、今日までは政府の高官でノルン社との癒着がある人物だと思っていた。だが、今の話でわからなくなつた。フランスという国のためではなく、まるで己の欲望を満たすためだけに動いているような印象を受ける。

シャルロットは自らと母に向けられているものに気がついて、吐き気がした。

『待っているよ、シャルロット君。二人……いや3人になっていることを祈っているよ』

そこまでで通話は切られ、シャルロットは込み上げてきたものを押さえて慌てて寮の中にあるトイレに駆け込み全てを吐き出した。

「ゲホッ、がはっ、はっ、はあっ、う、おっ」

気持ちが悪かった。気味が悪かった。

「はあっ、はあ、はあっ、こんな、の、かあさんに、言えない」

あの太陽のような母に、あのようなおぞましいことを伝えるのは憚られた。今のシャルロットが一つだけわかったのは彼らの脅しがなんの酔狂でもなく本気だということ。その気になれば彼らはこのIS学園を地図から消すことなど容易いのだ。

「……でも、でもっ、どうやって一夏から」

彼とまぐわう……というのはシャルロットとしても無理だ。まだ出会って一週間で、確かに一夏は好感触で友人としては見れるが、恋愛対象としては見れない上に、シャルロットはウブで、とてもではないが一夏の遺伝子を自らの中に取り込もうとは思えなかった。

であれば、あとは髪の毛などを採取するしかない。しかし、抜けるなどは掃除好きが一夏のおかげで一本もなく、彼がいなくていいところでは回収できない。

「寝ているときにっ？でも、そんなことをすれば」

寝ている時に髪を抜けばバレル。いたずら、といっても厳しいだろう。そこまでまだ深い仲ではないのだ。ただ、起こさないようにハサミなどで斬れば可能性はある。

「…………やるしかない、それでも」

即座に決行はできそうにない。決心がつかない。それでも、もう猶予はない。母と共に死ぬか、この島の人々を見殺しにするか。善人であるシャルロットは揺れ動く。

「どうすれば、いいの」

答えは出ない。そうしてシャルロットは一夏が戻るまで、呆然とすることになる。

シャルルが来てからの一週間はそれなりに平穏な時間が流れていた。マコトは最初の波乱など嘘のようにまともな学生生活を送れているなど満足だ。いつもの6人にシャルルも加わり、彼のちよつと真面目だが、時折抜けているところもわかってきて、徐々にグループに馴染んできていた。

「へえ、クラス代表を決めるのにそんなことがあったんだ」

「ええ、あの戦いで私は一夏さんと戦い、彼を認めましたの」

「まあ、締まらない決着だったけどな」

放課後の食堂、セシリアがシャルルにクラス代表決定戦のことを話し、シャルルは素直に話を聞いていた。まるで漫画のような展開にシャルルとしても現実には小説よりも……という気持ちを抱き、結末も面

白かった。

「エネルギー切れで負けてしまうというのは惜しかったね、一夏」

「そこはなあ。まだ白式のことわかってなかったし」

「けど、今はだいたい変わったんだろう？」

「ああ。といつても、今は零落白夜よりもまずブレオンの動き方をマスターすることが先で、零落白夜の使い方はそこまで練習してないけどな」

「基礎を盤石にしているんだろう？ 大事なことだと僕は思うよ」

聞き上手なシャルルに何かと話す一夏の相性はいいようで、一週間とはいえそれなりに仲が良くなってきているなとマコトは思った。

マコトは彼を見ながら、束に依頼した調査の結果を思い出していた。彼の実家であるデュノア社は国とライバル企業から嫌がらせを受け、窮地に立たされている。そのせいで、シャルル——シャルロット・デュノアは身の危険に晒され、日本に逃げたこともマコトは知った。

理不尽極まりなく、マコトは束から報告を受けた際に怒り狂いそうになった。それを報告を聞きに同行したレイラに宥められて、暴れることはなかったが今でも思うところは多くある。

今こうして、性別は偽っているとはいえ恐らくはそれ以外ほとんど素でいるシャルルの笑顔を見てみるとマコトは今すぐにでも彼女の身を狙うものたちを滅ぼしてやりたかった。暗い怒りの感情はどうしようもなくマコトを蝕む。

「そういえばシャルルはどんなＩＳに乗るんだ？」

「え？ 僕かい？」

「ああ。俺には専用機が渡されたんだけど」

「それなら、会社から一機借りてるよ。専用機代わりにね」

「２組のコメットと同じような形か」

「そうだよ、箒さん」

会話の内容はシャルルの専用機の話に移っていた。シャルルの搭乗機は２組のコメット姉妹のように量産機のカスタムタイプのものであった。ただシャルルは「そんなに得意じゃないけれどね」と苦笑い

で自身の腕を大したものではないと言った。だがマコトは東からもらった情報で、シャルロットがデュノア社の非公式なテストパイロットとして知っていることを知っていたので嘘だとわかった。

親の鼻肩があったとしても、テストパイロットを任されるということは少なくとも素人ではない。

「……事を起こせばシャルルは逃げるかもしれない、とは言ってたけど……」

東から千冬にシャルルのスパイ疑惑は伝わり、そもそもそんなことは織り込み済みだと千冬にマコトは言われていた。何かを吹き込まれているということはアルベルも織り込み済みで千冬に伝えていたのだ。マコトは千冬にならどうするかと訊けば、事を起こせば拘束するが、問題の一夏のデータが渡らなければいいだけで、シャルルの処遇など後からどうとでもできると千冬は言い切ったのだ。

加えて、今朝方、東からシャルルの両親が敵を倒したと言われている、どういう手段を使ったかはわからなかったが、ライバル会社の不正の数々を全て手にすることが出来たのだという。

つまり、マコトにはもう出来ることがない。大人たちが子供を守り切るつもりで既に動いているのだ。マコトは前世で守ってくれる大人がいなかった。否、いたが、見向きしなかった。しかし、こうしてちゃんと為すべき事を為そうと動いている大人たちを前にして、マコトはなんて優しい世界なんだろうと思った。

これから咲こうという花を守ろうとする大人たち。それは来て欲しかった平和そのもので、マコトは込み上げている怒りを押さえ込むことができていた。

「そうだ。シャルルは部活とかどうするんだ？」

「部活？」

「ああ、部活だよ」

一夏がシャルルに部活はどうするのか聞いていた。策謀などは抜きにして、シャルルという生徒がどんな部活に入るのかはマコトも興味があった。なお、マコト自身は帰宅部である。鈴音のことを聞かせたさやかによって味見係として料理部には通っているが。

「ちなみに箒は剣道部だな」

「剣道：ジャパニーズ・ブシドーってやつかな」

「少し違うがな」

大きく違うはずだが箒は何故か得意げであった。

「セシリアは…」

「テニス部ですわ!」

「テニスかあ、楽しそうだね」

「あら、なら早速体験入部なさいますか?」

セシリアはテニス部に入っていた。マコトはまだセシリアがテニスをしている姿を見たことがなかったが、体操着姿でポニーテールにしたセシリアがラケットを振って高笑いしている姿が容易に想像できた。よく漫画で出てきそうなテニス部のお嬢様キャラそのものであった。

「いや、色々見てみたいかな。レイラさんは何か入っているの?」

「私は何も」

「レイラはそうだよね」

マコトはレイラが帰宅部なのを知っている。レイラは包み隠さずマコトにイギリスの諜報員であることを伝えているためそのレポーター作成や、何かと中途半端なダイヴトウ・ブルーの運用テストがあるため部活をしている暇がないというのが部活に入らない理由だ。

「まあ、色々レイラはありますからねえ。ただ、料理部は興味がある」と

「ええ。以前、相沢さんからお茶会などもされていると聞きましたので」

レイラはお茶好きでわざわざ自分で紅茶を入れるほどで、合わせるお菓子も自作する。マコトは束の研究所にレイラを連れて行ったのはほんの3回だが、以来、束のメイドとしてお茶を淹れたりお菓子を作るクロエとは意気投合して、クロエもレイラと話がしたいのか最近では生徒として地上にすることが多い。

おかげでクロエがちよつと日焼けしたと束が言っていたが、ずっとこもっているよりは健康的なのでマコトは苦笑いで聞き流していた。

度々料理部に行くと、さやかから「レイラさんまだ入れないって?」とマコトに聞いてくるため、落ち着いたら間違いなくレイラは料理部に入ることになるだろう。

「私としては将来的には入ることに間違いはないでしょう。そういえばマコトも今は何の部活にも入っていないですね」

「そうだね。ただ料理部にはちよくちよく遊びに行ってるから」

「……マコトさんはたまに、料理部のお菓子を持ってくる」

料理部からのお裾分けは簪も恩恵を受けていた。シャルルは今出てきた部の他に何かないのか一夏に聞く。

「他か?うーん、簪はなんだっけ」

「私も帰宅部」

「帰宅部って?」

「……部活に入っていないってこと」

「なるほど。面白い言い方だね」

シャルルの悪意ゼロの笑顔に簪はキツイものを感じた。

簪が帰宅部な理由は彼女自身の人見知りのせいなのと、特にやりたい部活がないためである。強いて言えば映像部というものが目に留まったが、内容はわりと真面目にCMの撮影を試みたりと簪が好きな特撮とは離れた分野のため入らなかつた。

「入っていない私が言うのもですが、シャルルさんは料理部などに入らないのですか」

「え?ど、どうしてそんな風に思ったのかな?」

「いいえ、なんとなくです」

マコトは一瞬揺さぶりをレイラがかけたのかと思ったが、すぐにレイラが白状した。

「嘘です。シャルルさんのお母様に伺いました。料理が得意だと」

「あ、そうなんだ…」

くすくすとレイラは笑っている。彼女なりにシャルルをからかったようだった。

「レイラはデュノア先生と会ったりしてるの?」

「偶然ですね。昨晚、機体のテスト後に校内のベンチで動けなくなっ

ている生徒を見かけたので保健室に運んだんです」

「そうでしたの？そんなお話しませんでしたわね」

「話す必要性もないと思いましたので」

レイラから見れば些細な出来事なのだろうが、きっとその生徒は助かったに違いない。セシリアもクロエのことを助けたと聞いていたが、マコトはレイラもセシリアに影響されて困っている誰かを放っておけないのかもしれない。それはいい変化だな、とマコトは親友に対して思った。

「それってちなみに誰なんだ？動けなくなっていたの」

「2組のファニール・コメットさんですね。どうやら特訓のしすぎで足をくじいてしまったようでした」

「ああ、あの山田先生と戦った」

一夏も流石に一週前のことは覚えていたのか、ファニールの顔は思い出せていた。勝気な少女で、一夏は鈴音を少し重ねていた。あの夕イプは負けたら納得いくまで体を苛め抜くが簡単に想像できた。

「先生もやばかったけど、あの二人もすごかったよね。連携がさ」

「……双子特有のシンクロセンスとかも」

「僕、それ知ってるよ。確か、双子とかだと言葉を交わさなくてもコミュニケーションができるってやつでしょ」

「……そう。最後の山田先生の攻撃を回避したのはそれでもしれない」

マコトはよく簪が見ているなど思った。簪にはマコトが後から1組の端末だけに配布された真耶側の視点映像を見せていたので、彼女は4組だが模擬戦の内容を知っていた。あの授業での模擬戦で最後の真耶の一撃を回避したファニールは確かに違和感があった。真耶がコニールを蹴る寸前にはファニールが回避をし始めていたのをマコトは見ている。あれは蹴られる側のコニールが認識したことをほぼ同時にファニールが認識して、飛んでくるとわかったから回避できたのではないかと。

「ですがISは一人乗り。タッグマッチでもないと真価は発揮できませんわね」

「まあ、二人乗りの機体があればいいんだろうが、それは無理だろうしな」

セシリアと箒の言葉に、マコトは技術的には二人乗りもやろうと思えばできることを知っているがあまり意味がないとも思ってしまった。二人で乗り込めば単純に知覚が二倍になるわけではないのだ。

「シャルルはアイドルとか好きか？」

「え？いきなりどうしたのさ」

「特に理由はないんだけど」

「そうだね…僕はあまり興味がないかな」

シャルルが愛想笑いをしながらそう言った瞬間、カシャッと何かがテーブルの上に滑り込んできた。全員がなんだ、と警戒をしたがテーブルの上に置かれたのは爆弾などではなくCDケースであった。

もちろんジャケットまでついていて、そこにはコメット姉妹の写真があり、彼女たちが出している楽曲が入っているものだとわかった。

「……え、なにこれ」

一番最初に反応したのは簪だった。簪が手にとって裏面を見ると黄色い付箋が貼られていて、マジックでこう書いてあった。――1組、聞け。

「1組宛てみたい」

「いやいや待ってって、なんだよ今の」

「私が反応できなかつた…!？」

「れ、レイラでも気がつけないとは何者ですか!？」

「馬鹿な…姿が見えなかつた、だと」

一夏やレイラ、セシリアと箒が思わず声を上げる。CDが何故こないいきなり投げ込まれるのか。マコトも誰がCDを投げ入れたのかわからず周囲を見渡すがそれらしきものはいない。簪からCDケースを受け取り念のため開けるが中に入っているのはまごうことなきCDである。入ってる曲からしてシングルのようだ。

「簪さん、これ何だかわかる？」

「調べるね、マコトさん……あつた。コメット姉妹のデビューシン



「グルみたい」

「デビュースィングルか…」

「日本じゃあんまり流通してない日本版だね。カナダだとカナダ語版で簡単に入手できるみたい」

「つてことはファンしか持つてないものつてことか」

マコトはとなると2組の誰かが投げ込んだものということになる。本人たちがするのはあまりに違和感があるため、おそらくは2組の熱烈なコメント姉妹のファンがシャルルの興味ない発言に反応して投げ込んだのだろう。

「デュノアさんの興味ない発言が琴線に触れたかな」

「ええ!? 僕のせい!」

「…まあ頂いたものを聞かないのは失礼ですし。どなたかCDプレイヤーはお持ちで?」

「……私が部屋に置いてある」

「お夕飯の後にでも簪さんのお部屋にお邪魔して聞きましょうか」

セシリアの提案に簪が「ええっ!」と珍しく大声を出してガタツと立ち上がった。普段静かな彼女がそんな反応をしたので隣にいるマコトはおろか全員がビクウっ…と固まってしまった。

「む、無理…ダメ…プレイヤー持つてくるから…部屋にはこないで」

「あら、何かお見せできないものでも」

「あるから」

「そ、そそ、そうですか。おほほっ、ごめんあそばせ」

目が据わりセシリアを睨んだ簪はあまりにも迫力があつた。マコトはそこまでして何故部屋に入れたくないのか心当たりがあつた。簪とマコトの部屋は8割ぐらいが簪の私物に埋められている。主にビデオやフィギュアなど…マコトがそういったことを気にしない、誰にも言わないとわかってから簪が起き始めたものである。

当然、簪の趣味はセシリアたちも知らないので、簪は慌てて止めたのである。

「では、私たちの部屋に來られては?」

「れ、レイラ、そうですわね。そうしましょう」

レイラが代替え案としてセシリア、レイラ、箒の部屋で聞く事を提案しそれは満場一致で決定される。箒は安心したのかドサツと席についてさりげなくマコトに寄り掛かった。マコトはいつも妹にしているような感覚で箒の頭を撫で、箒の顔は緩んでいた。

なお、この二人のスキンシップに対しては特に誰も気にしないため会話がそのまま進行する。シャルルを除いて。

「仲いいな…でも付き合っていないんだよね」

シャルルはなんだかもしかさを感じてしまった。十代の少女としてシャルルはそのテの話をするのは嫌いではないのだ。

「で、俺たちも行つていいのか？」

「もちろんですわ。よろしければお茶もお出ししますわ。レイラが」

「レイラが出すのか…」

「趣味ですからね」

当たり前のように一夏たちもセシリアの部屋に行くことになった。シャルルは本当は女子のため気にしないでよかったが、彼女は真面目にも今の自身が男子であるならばどう反応すべきか考えて、いやそもそも女子であるからこそシャルルは口を開いた。

「ちよつと待って、夜に、女の子の部屋にそんなあつさり男の子が行つていいの!？」

「え?..なんかまずいか?..」

「い、一夏はなんとも思わないの!？」

「……?..」

シャルルは愕然とした。彼はもしかしてデリカシーというものがないのではないかと。もちろん、一夏としてはそんなこともなく、単純にセシリアたちを異性として全く認識していないからである。ドキリとさせられることがあってもそれは綺麗なものを見たから、ぐらいな感覚だ。

「ふ、不潔じゃないか!嫁入り前の女性の部屋にそんな、そんな」

「お、落ち着けてってシャルル。みんな友達だろ」

「そうですね、シャルルさん。私たち皆、友達ですわ」

「提案した張本人である私が言うのも変ですがセシリアはもう少し考

えてください」

セシリアの危機管理の無さにレイラは若干呆れを混じえて言う。マコトも簪も、確かにそれはそうだと思ってしまった。簪は最初からこの話に理解が及ばない。一夏と一緒に風呂に入っても問題ないと考えているためである。

「シャルル、同じ釜の飯を食らう友に男も女もあるまい。なあ、一夏」  
「簪の言うことはわかるけど、流石にちゃんと分けなきやいけないところはあらず」

「なんのことだ？」

本当にこの幼馴染みは大丈夫だろうかとマコトは思ったが考えないようにした。

シャルルはまるで異星人でも見たかのように6人を見ている。簪は同じにするなど目で訴えていた。

「…と、とりあえず、僕は遠慮しておくよ…」

「そっか。わかった。じゃあ、セシリア、俺も遠慮しとくわ。シャルル一人ぼっちはな」

「わかりましたわ。じゃあ、お二人を除いた5人で聴きましょう。簪さん、よろしくお願いしますわ」

「わかった」

結局女子陣だけで聞くことになったが、簪は思った「私4組だから聞く必要ないよね？」と。ただマコトも行くので行かないという選択肢はなかった。

なお、この7人の一件以来、徐々に校内でコメット姉妹のファンが増えて行ったことに因果関係があるのかはわからない。ただ、数年後のIS学園内では語り継がれる七不思議の中にこんなものがある。

—— 国際的アイドル、コメット姉妹のことを知らない、興味ないと言おうと音もなく目の前にCDが落ちている。

数時間後、実際にセシリアたちの部屋にマコトと簪は出向き件のCDを聞くこととなったが、その内容は想像していたものよりも遥かによかった。元はカナダ語だったものが全て日本語され本人が日本語

で歌っている。加えて、簪が調べれば曲自体も日本向けにアレンジされたものだということもわかった。

セシリアもレイラも、コメット姉妹の歌声に感じ入るものがあつたのか「彼女たちのアイドルとしての姿勢は本物ですわ」「本気でこの国でやって行こうという強い覚悟を感じました」と評価していた。

マコトも簪も、聞いてみればコメット姉妹の強く、可愛く、重なつて伝わる声に聞き惚れていた。なるほど、これは2組の全員がコメット姉妹を推すなど納得してしまったのである。聞き終えて部屋に戻る間、簪とマコトはコメット姉妹のことを話していた。

「凄かったね、マコトさん」

「うん、想像以上によかったね…今度サインでも貰っちゃおう?」

「なんかそれ、ミーハーっぽいよ」

「あはは、そうかな?」

話しながら、消灯時間ギリギリのため薄暗い廊下を歩く二人の距離はかなり近い。マコトは全く意識していないが簪はものすごく意識してこうしている。

「(…マコトさんも隙だらけだよ……)」

箒の幼馴染みだからなのか、と簪は思ってしまう。

部屋の近くまでやってくると、外からは雨音が聞こえ始める。今晚の予報は嵐になるとされていた。雷を伴うため、簪は今晚寝れるか不安だった。

「雨、強くなってきたね」

「…うん。雷、あまり好きじゃない」

「…奇遇だね、あたしも」

そう言ったマコトの顔をちらりと簪が見れば、彼女は見たこともないほど泣きそうな顔をしていた。簪がギョツとするも、瞬きした間にその顔は消えていた。

「(今の、なに)」

時折マコトが見せる、不可思議な表情。ただの十代の少女が見せるには重すぎるものだった。

「簪?」

「え、あ、ごめん。なんでもない」

部屋の鍵を開けて扉を開けたマコトが簪を呼ぶ。彼女は慌ててマコトの後に続いて部屋に入った。が、部屋に入ったところでマコトの携帯が鳴った。

「こんな時間に？」

「誰だろうね。レイラかな？忘れ物したとか……」

マコトが携帯を手にとり、画面を見る。そこには「七槻しばね」と書かれていた。つまりは束からの着信である。マコトは一瞬応答するか迷った。目の前に簪がいるからだ。だがしかし、出ないわけにもいかない。幸い画面表示は学園の教師だ、マコトは電話に出ることにした。

「はい、飛鳥です」

『まーちゃんすぐに研究所来て！』

電話から届いたのは束の焦った声だった。何事だとマコトが思えば、彼女が聞く前に束が続けて言った。

『シャルロット・デュノアがいつくんの情報持って学園から出た！』

「……そんな?!?敵は、敵はもういないはずじゃ」

『そのハズなんだけど……とにかく、こっちにきて！』

「わかった。レイラも？」

『うん！もしかしたら、出てもらうかもしれない！』

「でも機体は!?!」

『アレを出す!?!』

「わかった！すぐに行くから、待ってて」

マコトは電話を切る。簪は呆然としてマコトの前にいた。

「ま、マコトさん、一体、どうしたの?」

「……簪さんはここにいるんだよ、いいね」

「ま、待って！敵とか、マコトさんの顔、普通じゃないよ!」

簪がマコトを引き止める。マコトは早く行きたがったが、簪を説得しなくてはならない。

「(わかってたけど、どうやって納得させれば……束姉さんのことは言えないし)」

「ねえ、教えて、マコトさんは困ってるの?」

眼鏡の奥で、マコトと同じような赤い瞳が心配そうに覗いている。マコトは迷った。いつそのこと教えてしまうべきか。しかし、シャルルのことも本人は危険でなくても彼の背後にいるものの得体が知れない以上、簪を巻き込むわけにはいかない。

マコトはしばし目を閉じてから、覚悟を決めた。

「簪さん。大丈夫。私は——」

その時のマコトの簪を見る目に、簪は半歩下がった。なんで、どうして、あなたがそんな目をするの。なんでその目で、私を見るの——。簪が忘れていた、傷口が、彼女の想い人によって抉られた。

「——あたしは、何も困って、ないから」

とつきに出した言葉が、表情が、最悪の選択であるとマコトは気がつかない。

簪は声もなく、後ずさる。

「マコト、さん」

名前を呼ぶ。恐怖と、愛しさが混ぜこぜになって、簪は固まる。マコトは「ごめん」と部屋から飛び出して行った。一人残された簪はその場にへたりこんだ。マコトの目が、表情が、何度もリフレインする。「どうして、なんで——お姉ちゃんと同じ顔をしたの」

更識簪という存在を否定された。ただお前はスペアだと、今は必要ないと。そう言われた瞬間のことが蘇る。違うと簪は思いたかった。偶然だと、何か苦しい言い訳をするために言っただけだと。

それでも、一度生まれた疑念は晴らせない。未知とは興味を呼ぶスパイスであるが：同時に底の見えない奥深さも呼ぶ。

「……でも、でもっ、マコトさんは、お姉ちゃんとは違う」

決して、彼女は姉とは違うと簪は思っている。あのときは絶望して、そのまま何も真意を聞くこともできず、終わってしまった。今は違う。簪は決して無力ではない。簪という一人の人間として、強い想いが彼女の怯える心を奮い立たせる。

簪も、マコトに遅れて部屋を飛び出す。マコトが機体は、と言っていたのを思い出す。もしかしたら、彼女はISに乗って外に出るつも

りかもしれない。となれば、簪の行く場所は決まっている。

「……格納庫に、行かなくちゃ」

「格納庫に行つてどうするの？ かんちゃん」

「ッ!？」

部屋を出てすぐ、簪は今聞くはずのない声が背後からした。振り向けば、そこにはこんな時間であればとつくに寝ているはずの簪の幼馴染みが、いつもと変わらない緩い空気を纏いながら制服姿でいた。

布仏本音が、自然な笑みを簪に向けてそこにいた。

「……なんで、本音がいるの」

「そりゃあ、かんちゃんの従者ですからあ」

「お姉ちゃんの差し金？」

「うーん、半分そうかな」

おどけたように、いや実際に彼女は素のままに言う。

「…マコトさんを追いかける。退いて」

「それはダメだよ、かんちゃん」

「あなたには関係ないでしょ」

「かんちゃんの幼馴染みだから関係あるかなあ」

「……私と一緒にいる勇気もないくせに、かんちゃん、なんて呼ばないですよ」

簪が本音を睨んで言った。本音は酷く悲しそうな顔をするも、そのまま困ったように笑った。簪は知っている。彼女が実家から与えられた従者であり、それでもかつては友だったことも。実家に嫌気が差して、今では距離を置いた簪に本音が声をかけることが減ったことも。

「簪お嬢様に何かあったら、楯無様から簪お嬢様の警護、外されちゃう」

本音は表情や空気は変えず、口調だけは少しだけ変えて簪に言った。

「外されちゃえばいい。別に、私はもう家とは縁を切りたい」

「それは…無理だよ」

「無理じゃない」

「じゃあ、簪お嬢様は家から出てどうするの？何も知らない女の子として生きていけるの？」

「……うるさい。本音、もう一回言う。そこを……退きなさい」

幼馴染みとしての僅かな慈悲も消えて、簪から発せられたのは従者に告げる命令。本音は黙って、道を開けた。簪は彼女の前を走り抜けていく。遠くなっていく背に、彼女は思う。

「(どうして、こんなことになっちゃったんだろう)」

決して、誰もが誰かを嫌いあっているわけではないのに。もはや当人たちだけでは取り返しのつかないところまで来てしまっている。

「……まこりんが、変えたのかな」

簪がこんな主人として命令したのは「初めて」だった。いくじなし、と言われて本音は少しだけカチンと来ていた。彼女だって穏やかだが怒らないわけではない。

だが、幼馴染みの、臆病だった彼女がまるで彼女の「姉」のように真っ直ぐとその赤い瞳を本音に向けていた。

飛鳥マコト。本音の「監視対象」の一人であり、既に何度も主人の姉に報告している「普通なことが異常な少女」が幼馴染みを変えてしまった。それは寂しくもあり、同時に嬉しさもあった。

「(もしかしたら、また、元に戻るかも知れない)」

足りなかったのは言葉だ。本音はすれ違い、理解し合えない姉妹のことを想いながら、意識を切り替える。——日本の現存する暗部、更識家の工作員として。

「……こちら本音。簪お嬢様には逃げられちゃいましたあ」

『そう。ならもうそこから離れて、あなたは出て』

「りよーかーい。それにしても、まこりんたちも動いてるけど、いいの？」

『織斑先生越しにデュノアさんが事を起こしても問題ないことは伝えてたけど、今回はタイミング悪かったわね。必要性がないはずなのに彼女が事を起こしたんですもの。焦りもするわ』

「実際どうするの？」

『彼女は専用機で太平洋側に飛び出したわ。おそらく迎えがいるので



しよう。あなたは出てシャルロット・デユノアを拘束。不可能なら撃墜してもいい』

「…えつとく、撃墜ってI Sを解除ってことだよね」

『当たり前でしょう。学園からも死人は出すなって言われてるからね』

「やりにくいね〜」

『ええ。けれど、こちらとしても彼女の持っているかもしれないフランス側の情報は欲しい。もしかしたらようやく“敵”が仕掛けてきたかもしれない。ここで逃すわけにはいかないわ』

「ですよね〜、じゃあ、私はいくよお」

『お願いね……それと、簪ちゃんも』

「それはどう言う意味でかなあ」

本音は楯無に思うところがないわけではない。簪の友人として：楯無が過去に行ってしまった決定的に言葉が足りなかったことを許せていない。たとえ、それがどうしようもないことであつたとしても。

『……言っている意味が、わからないわ』

「言って欲しいの?」

『……あの子の“姉”として、お願いするわ』

「…そつかあ。それなら、いいよ」

通信は切れる。本音はその場から音もなく消え、数秒後に偶然通りかかった箒が確かにあつたはずの気配がまるで空気に溶けたように消えたことに驚くのだつた。

土砂降りの雨の中、東の研究所に到着したマコトは東に状況を確認していた。レイラも寝巻き姿のままマコトに合流している。レイラはちようどセシリアが入浴していて、箒が飲み物を買いに外に出ていたため、書き置きをして誤魔化すことができた。

「束姉さん！状況は!?!」

「きたね！二人とも！これを見て！」

東が大きなモニターを操作し、学園を中心としたレーダーを表示す

る。すると太平洋側にI Sの反応が1つだけあった。

「これは…」

「コアネットワークを検索したら出てきたのは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』、シャルル・デュノアの専用機として登録された機体だよ」

「彼は逃げ出したのですか」

「間違いないよ、れーちゃん」

「束姉さん、敵はもういなくなっちゃって！」

マコトの疑問に、束は「そうなんだけど」と言いつつ、画面を操作してあるものを表示する。それは衛星軌道上のレーダーで、何かが地球に向かって落下していた。

「博士、これは」

「これが、シャルル・デュノアが事を起こしちゃった理由だね」

「…………束姉さん、これって、何かが落ちてきてるの？」

「そう。シャルル・デュノアを動かしてる連中は…………ここに巨大な衛星兵器を落とそうとしてる」

衛星兵器の詳細が画面に表示される。大きな、まるで剣にも見える巨大な衛星兵器。プラントほど大きなわけではないが、明らかに大気圏で燃え尽きるものではない。落とせば間違いなく質量兵器としても機能するだろう。

「愛称は『ガーディアン』。正式名称は対地衛星ビーム砲『エクスカリバー』。イギリスで開発され、EUでも数基建造された欧州のI S以前から存在する戦略級兵器だよ」

「こんなものがこの世界の衛星軌道上に!？」

マコトはこれほどまでの大量破壊兵器がこの世界にあるとは思わなかった。表示されるスペックはそれこそ、ジエネシスやレクイエムには及ばないものの、都市一つは完全に焼き尽くすことができるレベルだ。

それが幾つも。

「…れーちゃんは知ってるよね」

「ええ。知っているどころか、セシリアと私は当事者です。エクスカ

リバーの初号機はオルコット家の個人所有物。現在ではブルー・テイアーズに制御機能が移行されています」

「ええ!?それ本当なの!?レイラ!」

「本当です。そもそも、テイアーズシリーズのコンセプトは単騎による戦場支配です。その究極の一つがブルー・テイアーズ、テイアーズシリーズ1号機に搭載された『ガーディアン・システム』です。今落下しているのはフランス所有の5号機ですから、こちらでどうすることもできないですが」

「そんな…」

昼間はあれだけ楽しそうに話していたシャルルに事を起こさせた。となれば自ずと落下地点は見えてくる。

「まさか、アレをここに落とすつもり!?」

「突入コースからみて間違いはないよ。一応、突入後にある程度コースは制御できるみたいだから、シャルル・デュノアが約束を果たせばコースは変えるってところだろうね」

「シエラ・デュノアと…私たちが人質といったところですか」

「多分ね。シャルル・デュノアって、どういう子?」

束に聞かれ、マコトとレイラはすぐに答えられた。

「普通の、どこにでもいる、ただの子供だよ」

「人に嘘をつくのも辛そうな善人ですね。人見知りもしない…だからこそ、私たちという新しい人質まで作ってしまった」

「そっか。シャルル・デュノアに声をかけた連中はフランスとノルン社の連中じゃなかったってことがこれでハッキリしたよ」

「どういうこと?」

「いくらフランス政府が男性操縦者の遺伝子を欲しいって言ってもここまでのはしない。アメリカや中国、そこにいるれーちゃんのイギリスもそうだけど、直接的な手段はとってないでしょ?」

「ええ。一番都合がいいのは『事故』ですから。若さゆえの誤ち。それが一番都合よく、ストーリーも組みやすい」

レイラの言葉にマコトはそうか、と理解する。例え男性操縦者の遺伝子を手にして、何らかの手段で男性操縦者を増やせることになって

もこの世界中から要人の娘などが集まっている学園を破壊するなどありえない。焦っていたことは伺えたが、レイラが以前推測した通り出来もしない脅しというのが今起きている事態なのだろう。こんなことが本当に起これば、普通の人間がどうなるかなど容易い。

「状況はわかりました。博士。しかし、我々はどうすればいいのでしょうか。シャルルさんを捕まえても彼女は被害者で、アレをどうすることもできません」

「レイラの言う通りだ。東姉さんのほうでなんとかできないの？」

「さつきからアクセスしようとしてるけど、連中、何度もアクセスコードを書き換えてこつちが掌握する前に締め出されちゃう。今、くーちゃんがそこで頑張ってるのはそれなんだ」

東が指差したところではクロエが必死にキーボードを叩いてるのが目に見えた。彼女は何度も、何度もアクセス画面でパスを解除しては締め出されている。

「くーちゃんーどう!？」

「ダメですー!こうも締め出されると…!」

「困ったね…:~:とにかく、シャルル・デュノアをまずは止めよう。いつくんの情報が外に漏れちゃうのは東さんのにもよくない」

「わかった。アレの到着までのタイムリミットは?」

「うーん、それがまだ完全に落下しようって感じじゃないからわからない。ただ落ち出したらそんな時間ないよ。15分ってとこかな」

「…:~:やれるなら迎撃手段を整えておきたいところですが、シャルル・デュノアを止めるほうが先決ですね。止めた瞬間に落下開始となるのは目に見えています」

シャルルを止めれば衛星砲が落下し、止めなければ世界的に大変なことになる。どちらも絶対阻止しなければならぬ。

「…:迎撃するなら手はあるけど、聞く?」

「あるの!？」

「流石ですね」

「ただ、東さんのにもちよつとね」

「いいから教えて、東姉さん」

束がまたしてもモニターを操作し、あるものが表示される。それは二人にも見覚えのあるものだった。

「これは、サイレント・ゼフィルスの!？」

「スターブレイカー、破壊されたので返還も何もないと思っただが、修復したのですか？」

「こそ。コアは吹っ飛んでたけど砲身とか残ってたし解析してちよちよいとね。分析する以上、どうしてあれだけの出力を出せたのか構造を知りたかったんだ」

表示されたのはサイレント・ゼフィルスの主兵装であったビーム・スナイパーライフル「スターブレイカー」だった。概要はレイラがよく知っている。

「解析結果としては3つの砲身からそれぞれ50倍近い出力のビームが放たれていてあんな出力になっていたみたい」

「そんな滅茶苦茶な出力だったんだ…」

「しかし、それでは武装が保たないのでは？」

「うん。撃つて5回だね。それ以上は自爆する」

「…それで、これがおすすめできない方法ですか」

「そう。スターブレイカーを使って落ちてくるガーディアンを破壊する。計算上、5発中…いや、自爆すること考えると4発中、2発を当てれば砕くことはできると思う」

「問題の出力元はどうするの？束姉さん」

「それは学園のISS5機をこのライフルにバイパスで直結させてあげれば威力を再現できると思う。問題はドライブする機体自体がここには2機しかないことかな」

束曰く、専用装備であるスターブレイカーに火器管制はティアーズシリーズしか扱えないという。束で補正してもいいが、地上から衛星軌道への射撃という成功確率の低い行為が更に成功する可能性が低くなる。

「…レイラ、頼める？」

「いいえ、ここはセシリアに頼みましょう」

「え、でもセシリアさん狙撃は」

「彼女は機動戦で狙撃銃を使わないだけで、静止状態での狙撃はイギリスでは最高クラスです。それに、ブルー・ティアーズには衛星砲を制御する必要があるため優れた照準機能も装備されています。まあ、そのせいでビットは最大稼働すると処理落ちで機体が動かせなくなるのですが」

ISの相手がISである以上、完全静止状態での狙撃はまずないが、今回のような場合であれば別だ。レイラはこの状況であればセシリアが適任だと言う。

「束姉さん、巻き込んでいいのかな？」

「大丈夫でしょ。その、れーちゃんのお友達も普通じゃないっぽいし」

「……まあ、気は引けますが今回は状況が状況です。出撃後呼び出します」

「そうだ、デユノアさんを追いかけないと！」

保険はかけた。あとはシャルルを追うだけとなりマコトはレイダーを見る。まだシャルルの光点は範囲内で捕捉可能だ。

「よし。それじゃあ本題だね。二人はここから出撃して彼女を追う。捕縛して連れ戻す。そのあと落ちてくるのをれーちゃんの友達が破壊しておしまい、だね」

「うん。それで、機体は……」

「できてるよ、まーちゃん」

モニターに表示される一機のIS。既存ISとは逸脱したスペック。しかし、マコトの知る白騎士には遠く及ばない。レイラは初めて見た機体に驚く。同時に、これが白騎士の純粋な後継機であることも理解した。

「これが」

「黒騎士……インファイニット・ストラトス、その二号機だよ」

純粋な、真の意味での二機目のインファイニット・ストラトス。それがマコトの新たな翼だった。東が格納庫へ向かうように促し、彼女たちは駆け出す。格納庫へとたどり着けば、そこには漆黒の騎士が新たな主人を待っていた。

マコトは迷いなく乗り込む。ISスーツを着ている時間はなく、制

服姿のままだ。

「目覚めて、黒騎士！」

機体が起動する。マコトの体を包み込み、白騎士同様フェイスガードが展開され、機体の各部スリットに光が走る。マコトの網膜にあらゆる機体情報が表示されは消えていき、一瞬にして最適化は完了する。

レイラはその姿を見て、美しいとさえ思えた。騎士のような姿に背中からは大きなウイングバインダーを持つ。シルエットはデステイニーに近い。

「起動確認。武装は…」

『まーちゃん！武装はごめん！まだ用意できてないから、汎用品用意してある！』

「了解。本当だ、ガラムに、ISブレード。あとは固定装備で…なにこれ、ブーメラン？」

唯一、黒騎士専用の武装として用意されていたのは膝部分と肩にそれぞれ2つ、計4つ装備されたビーム・ブーメランだった。それはデステイニーのものとよく似ている。東にデステイニーのことは話したことがあり、やはりこの機体はある程度意識して作られているのかもしれない。

『れーちゃんも展開して！そこから射出する！』  
「了解」

格納庫の隔壁が解放され、二人の目の前にカタパルトが出現する。元々、この格納庫は東の裏山の研究所の拡大版で白騎士と黒騎士の運用も前提としているため二機分のカタパルトが用意されていた。

遠くに雨の音が聞こえてくる。あのときも、こんな夜のように雨だった。

「……思い出しますか、あの夜を」

「…うん。でも、今は、状況が違う。あたしたちは…助けに行くんだ」  
「そうですね。討つためではなく、救うために」

「行こう、レイラ」

「ええ、マコト」

黒騎士とダイヴトウ・ブルーがカタパルトに接続される。同時に射出口のガイドラインが発光し、遠くに地上の出口が見えた。

『カタパルト接続確認！進路クリア！いいよ、二人とも！』

束からの発進許可が出る。マコトは瞑目する。あの時とは違う、と。

レイラもまた、そんな親友のを見て、今度はあの時とは違う。彼女と同じ心で飛ぶ事を決める。シャルル・デユノアは彼女から見て「好ましい」人間だ。

「すう……飛鳥マコト、黒騎士！行きます！」

「レイラ・デュランダル、ダイヴトウ・ブルー！発進する！」

前世と同じ、しかし今度は救うために二人は嵐の中へと飛び込んでいく。

長い夜が始まった。



## # p h a s e — 1 8 「シャルル脱走」

時は遡り、まだマコトたちがセシリアの部屋でコメント姉妹のデビューシングルを聴いていた頃、既に一夏は寝ており、シャルルはいや変装を解いたシャルロットは一夏の毛髪を回収していた。ラファールに送られてきたガーディアン落下開始の情報はもはや猶予はない、とシャルロットに行動を起こさせるには十分だった。

「……こんなに早いなんて。でも、母さんを、みんなを、死なせるわけには……」

ハサミで切りやすいところの髪を切って、彼女はもらっていた試験管の中に一夏の毛髪を入れる。それをISの量子格納庫に保存し、彼女はこっそりと部屋を出た。一週間過ぐすと、一夏が寝始めるとなかなか起きないことに彼女は気がついていた。

「……もう引き返せない。早く約束を果たして、あれの落下を止めてもらわないと)」

彼女は暗い廊下を静かに走っていく。外は豪雨だが、寮の入り口まで出て即座にISを展開し、空へと飛び上がる。島の空へと上がったシャルロットは学園へと振り返る。たった一週間だったが、彼女には友達もできた。母は教師として馴染んできている。昨日も「可愛い子を治してあげたんだ」と楽しげにシエラは語っていた。

「(……ごめん……許してほしいなんて、言えないけど)」

追い詰められると逆に冷静になり、シャルロットは前を向く。荒れ狂う太平洋。無限の闇の先に、彼女のことを操る人物が待っている。戻ってこれるか分からない。それでもいくしかかない。

シャルロットは嵐の中、ラファール・リヴァイヴを加速させた。

セシリアがレイラからの緊急コールに応答したのはいくらなんでもレイラの帰りが遅くなると筈と共に探しに行こうとした時だった。

『セシリア、聞こえていますか?』

「聞こえますわ……どちらにいらっしやられるのですか!?!」

焦っていたセシリアは素が出てしまい、当主ではなく、ただのレイ

ラの幼馴染みであるセシリアが表に出ていた。敬語になってよほど焦っていたのかと気がついたレイラは苦笑しながら彼女に説明する。

『詳細は省きますが最短15分で島にエクスカリバー5号機が落ちます。迎撃してください』

「はい!? そんな無茶な!?!」

『手は用意してあります。場所は転送しますからそちらに向かってください。織斑先生も向かってくれるそうです』

「お、お待ちください! 一体何が、エクスカリバーが落下なんてそもそも」

『時間がありません……オルコット卿、頼めますか?』

セシリアはその頼み方は卑怯だと思った。いつもそうだとセシリアは都合の良い時だけ可愛ごぶってくる幼馴染みにため息をついた。

「こういう時だけお姫様ぶって……変わらないですわね、レイラ様」

『ふふ、少し意地悪が過ぎました。お願いします、セシリア。あなたなら出来ると信じています』

「当たり前ですわ。私に不可能などありませんわ。詳しい話は後で聞きましょう! 行きますわ!」

『頼みます。こちらはこれから戦闘も予想されます。通信はこれきりです』

「…相当、差し迫った事態のようですわね。わかりましたわ。レイラも御武運を」

『そちらも。では』

セシリアはすぐに寝巻きを脱ぎ捨ててISスーツへと着替える。箒がいきなりどうしたと聞けば、彼女はいつもの自信満々の笑みで答えた。

「ちよつと落ちてくる星を落としてきますわ」

「何を言っているんだ。そして、どこへ行く」

「詳しいことはあとで! とにかく箒さんはここにいてください!」

「……よくわからないが、わかった。……外は雨だ。暖かい茶でも用意して待っている」

「助かりますわ! では、行って参りますわ!」

セシリアが部屋を出ていく。箒は天井を見上げた。未だ彼女には翼がない。渴望するわけではないが、やはり、辛いものがあつた。「……剣で斬ればすぐカタが着く。しかし、届かなければ意味はない……姉さん、あなたは今、どこにいるのだ」

寮の外に出たセシリアは即座にブルー・ティアーズを展開する。母国ではスクランブル対応の訓練も一通りこなしており、こういった緊急事態では指定区域外でのISの展開は許されている事を知っていた。

ブルー・ティアーズにはレイラから指定ポイントが既に転送されており、彼女は躊躇う事なくそこへと向かう。指定された場所は学園の裏手にある森林区画のうち、小山になっている場所で生徒や教員の誰もが知らないが本来はこの森林区画に予定されたキャンプ場の目玉区画となる予定の台地であつた。

広い学園とはいえ、ISで移動すればすぐに辿り着く。開けた小山の上の広場にはもうスターブレイカーを中心に5機の量産機が駐機状態で置かれ、ケーブルでライフルと繋がれていた。

その傍らにはTシャツにスウェット姿の千冬が豪雨の中傘を差し立てている。

「織斑先生！」

「お、来たか」

セシリアは到着し着陸と同時にISを一度解除し、千冬に駆け寄る。表情は勤務時間外だからかセシリアも初めて見るほど険がなく、格好もラフすぎるため教師というよりはどこにでもいそうな20代の女性だ。確かに、これならマコトが言うような近所のお姉さんというのも頷けるなどセシリアは思った。

「うっ、お酒くさい」

「ああ、すまん。ちょうど晩酌中に呼ばれてな」

「お、お酒を飲まれていたのですか!？」

「何を驚いているんだ？私も飲むぞ。ちなみに紅茶にブランデーを入れるのも好きだ」

「あら、そうなのですね。でしたら今度レイラに…ってそんなこと話してる場合じゃないですわ！」

「ははっ、期待通りの反応をしてくれる」

千冬にからかわれた、とセシリアは顔を真っ赤にする。彼女の笑った顔は一夏とそっくりで、セシリアは改めて織斑千冬が一夏の姉であるのだと知った。

足取りや目つきもしっかりしており相当酒に強いことがセシリアにはわかり、織斑千冬という一人の女性としては本来このような人物なのだろうと察した。

「よし、セシリア。状況は聞いているな」

「ええ。というより名前…」

「ああ、すまん。一夏の友達だからついな。嫌か？」

「いいえ、別に。『一夏さんの姉上』である今のアナタにはそう呼ばれてもよくなってよ」

セシリアも今の彼女は教師としてここにいるわけではないと読んで、口調を変えた。千冬は満足そうな顔をしている。

「また話が逸れたな。で、今からお前には衛星砲を破壊してもらおうわけだが」

「…レイラに頼まれてつい安請け合いましたでしたが、これで迎撃するんですの？」

「ああそうだ。計算上、この前のサイレント・ゼフィルスの出力で撃てるようにしたこの『スターブレイカー』で狙撃し、対象を消滅させる」

「できますの？」

「こういうのが得意な友人がいてな。理論上は間違いないと言っていた。問題は…」

「射手、ですか」

「そうだ」

セシリアは地面に横たわるスターブレイカーに手を触れる。その名は『星を壊すもの』。レイラという姫君に与えられ『女王宣誓』と合わせて、彼女の最高のBT適正と合わせ、次期国家代表として

華々しい戦果を上げていくはずだった。それが今ではこうして、なかったものにされて、セシリアの前にある。

彼女はレイラを終生の友としたいと思っている。それは彼女が仕えるべき相手だからではなく、レイラ・デュランダルという人間が優しく友達想いな…レイラ風に言えば「好ましい」存在だからだ。

「…：あなたの力、借りますわ」

セシリアがブルー・ティアーズを展開し、スターブレイカーを装備する。火器管制は問題なくスターブレイカーを認識する。仕様は違えど同型機であり、センサー類も問題なく同期する。

「スターブレイカーは3門の砲を持ち、連射可能なガトリングバスターモード、長距離収束射撃を行うステイレットモード、広範囲に拡散を行うスプレッドモードがありますが。今回の場合ですとステイレットモードでしょうか」

ライフルのモードを操作しながらセシリアは天に銃口を向ける。

「いや、違うらしい。東、いいか？」

『はいほーい！こんばんは！』

「えっ!?!どちら様?!」

突然、セシリアの視界を東が埋めた。セシリアはいきなり現れた兎耳をつけたおそらく千冬と同年代の女性に驚いたが、次第に更に別の驚きが起こる。

「し、しの、篠ノ之博士!?!」

『やあやあ初めまして！君がセシリア・オルコットちゃんかにや〜?』

「え、ええ」

『れーちゃんのお友達だけあつて可愛いね〜』

「あ、ありがとうございます?」

『うんうん。素直な子は好きだぞ、東さん！さあてお話たくさんしたいけど今は仕事しよう！ライフルは持ったね!?!』

「はいー」

1組の生徒らしい適応力で一先ずセシリアは突っ込むのをやめた。東の存在はひっくり返るほどのことだが、今はそんなことで固まっているわけにはいかないのだ。セシリアは東の説明に耳を傾ける。

『いいかい？今回スターブレイカーは以前君たちが戦ったサイレント・ゼフィルスの発揮した出力と同等のものをらせるようになってる。正確には白騎士クラスの大出力だよ』

「そんな高出力を…保つのですか？」

『5発でドツカーン！腕がなくなるね！』

「冗談じゃありませんわ!!」

『だから撃てて4発、計算上は2発当てれば対象の衛星砲は消し飛ばよ！』

落下する衛星を狙撃する。セシリアはそんな高難易度の狙撃の経験はなかったが、保険があるというのは大きい。

「わかりました。対象物の落下予測軌道と落下地点は」

『そこだよ！』

「は？」

『今二人がいるところ！』

セシリアは呆然とする。つまり、失敗すればいずれにせよセシリアもろともIS学園は全滅である。失敗はハナから許されないが、死ぬのが真つ先に自身であるとわかったセシリアは必死になって空を睨んだ。しかし、ここで気が付く。この豪雨で雲が厚く夜空が全く見えない。

セシリアはブルー・ティアーズのセンサー類をフル稼働して狙撃するつもりだったがそもそもそれが出来ないのである。

「いま気がつきましたが、これはブラインドショットをするということでしょうか」

『そうなるね』

「…どうやって迎撃しますの？」

『一応、こっちのレーダーの類と同期して、タイミング合わせて射撃だね。あとは、私の指定した座標に照準を向けられるか』

「上手くいきますの？」

『そこは君の狙撃手としての腕前次第かな。一発目で雲が吹き飛ばから、二発目は目視でいけると思う。三発目を外さなければ余裕かな』  
「…一発目は外れる前提、と。余裕はないですわね」

『それでも、君はやるのかな?』

東に覚悟を問われる。そんなもの、セシリアの中に答えは一つしかない。

「友に託されたのですから当然ですわ! 私はセシリア・オルコット! 逃げも隠れもしませんのよ!」

『ヒュ〜! かつこいいね! じゃあ、落ちてきたら教えるから待機しててね!』

「わかりましたわ!」

全てはセシリアに託された。千冬はセシリアを見る。稀に見る、高潔でそれでいて少女らしさも失わず、優しい少女。弟の友人として、初めてクラス代表の一件で拳を交わした。千冬としては早いところ弟には身を固めてほしいと思っており、セシリアのような女性とは悪くない相性なのではと思ってしまう。

「(まあ:そもそも異性として見るか微妙だが)」

ククツ、と笑いながら千冬は空を見上げる。天から落ちてくる星は砕かれるだろうという確信が千冬には何故かあった。

セシリアが千冬と合流しスターブレイカーの準備を始めている頃、マコトたちはIS学園の森林区画から既に太平洋側の海上へと移動していた。シャルロットを追いながら、マコトは黒騎士の性能を確認する。

搭載されるISコアは東の予告していた通り新品の新しいコアで黒騎士専用にあらゆるアップデートが施されていた。白騎士では東や千冬といった超人が乗り込むことを前提にオーバースペック気味にされていた出力は先ほど出撃前に見た数値のようにマイルドになっており、マコトが乗っても体をISに壊される心配は無かった。

ただ、出力制限は他の配布されたISコアのようにされておらず、白騎士時点では設定されていなかった搭乗者に合わせた出力に変化するようになっていた。マコトの専用機として製作されたが、確認すれば初期搭乗者の権限で許可したものは搭乗可能になるらしく、その者によっては白騎士並の出力を出せたり、逆に現行IS程度の性能し

か出せなくなる。

マコトが現在搭乗している状態での出力は現行ISの5倍近く、また、あくまで出せる最高出力がそうになっているだけで搭載ジェネレーターの出力は白騎士と同等で、エネルギーの需要に対してかならず供給量が上回る設定になっている。つまり、エネルギーは無限と言つて良い。

「(まるでNJC搭載機だ)」

前世でのバッテリー駆動から外れたザフト製G兵器をマコトは思い出す。限りの無い力はまさに束が目指す無限の成層圏へと到達するためのもので、マコトはインフィニット・ストラトスが改めてどういったものであるか実感する。兵器では無く、人類が飛ぶための翼。既存のロケットや飛行機、それらを超えた無限の可能性を秘めた宇宙への希望を乗せるためのものだ。

しかし、今はまだそれは叶わない。だからマコトは黒騎士をインフィニット・ストラトスではなく、IS：モビルスーツと同じ、人型の機動兵器として使う。

「(それでも、人が作ったものなら、人を救えるはずだ)」

マコトは戦災地で、モビルスーツが重機として使用されている場面に出くわしたことがある。あれはまさに人の命を奪うために生まれてきたものが、人の生きるこれからを守つていこうとしている姿だった。だからできるはずだ。ISでも。

「マコト、どうですか？ 機体は」

隣を飛ぶレイラが問いかける。レイラのダイヴトウ・ブルーは装備を変えており、右手に所持しているのはセシリアが使用していたティーズシリーズ用のビーム・ライフル「レヴァリエ」のバレルが延長されたもので、かつて運用していたレジェンドのライフルに似た取り回しになっている。

「装備変えたんだね」

「ええ。新しいテスト装備です。加えて、こちらにはダイヴトウ・ブルー用の新装備です」

レイラが左手を掲げるとそこには菱形のシールドが装備されてい



た。よく見ると端部に砲身のようなものが見え、シールドそのものにパネルラインが走っている。

「シールド・ビット。そのままですね。これでティアーズを含め6基のビットを使えます」

攻撃性能とそれそのものが変幻自在に防御装置として働かせるシールド・ビット。レイラはこの新しい装備を気に入っている。テストは既に済ませたが、格闘戦にも対応可能で応用範囲が広い。また、ダイヴトウ・ブルー自体が突貫作業で組み上げられた機体のため、ブルー・ティアーズのように試作装備、試作システムの搭載が少なく、ビットの同時操作で処理落ちして機体本体が静止する必要などがない。

量産機としてはこれぐらいの安定性があれば十分だということが偶然示され、レイラも兵器としてみればダイヴトウ・ブルーでもうブルー・ティアーズの量産機仕様は完成されたと思っている。単騎による戦場支配は高いBT適正があれば6機のビットでも十二分に可能だ。

「足止めには持ってこいの装備で、間に合ってよかったです」  
「助かるよ」

レイラのビット操作は信頼できるため、マコトはシャルロットの無力化がしやすくなったと考える。戦わなければそれでいいのだが、シャルロットは落下物の破壊が不可能だと考えている以上、抵抗してくる可能性が高い。

「もうそろそろ追いつきます」

「最初は説得してみる。それでもダメなら、レイラのビットで進行方向を遮ってほしい」

「了解。フロントは任せますよ」

「もちろん。レイラなら、安心して背中を任せられるよ」

雷が闇夜を照らし、マコトの視界の先に小さな影が見える。ついにシャルロットを視認したのだ。

「見えた！最大戦速！」

「同調します」

マコトは黒騎士を一気に加速させ、レイラもそれに追従する。機体性能差からどうしても差が開くがフォーメーション的には問題がなかった。

当然、二機の接近にシャルロットも気がつく。彼女の搭乗するラファール・リヴァイヴ・カスタムが警告する。

「追っ手が…識別、先頭のISは不明…!?もう一機はイギリス、ダイヴトウ・ブルー。レイラさんか!」

シャルロットはハイパーセンサーで前方を向きながら後方の視界も網膜に投影する。嵐の中、雲の下を飛ぶ2つの機影を捉える。接近する2機のうち一機、真つ黒な機体は識別不能だがシャルロットは既視感を受けた。

「黒い、白騎士!?!」

まるで墮天使のような印象さえある黒騎士にシャルロットは戦慄する。誰が乗っているのかと。レイラはダイヴトウ・ブルーのまま、黒騎士のパイロットは彼女の協力者なのではないか。だが、それはすぐに違うと否定された。

「デュノアさん!学園に戻って!」

「…っ!この声、飛鳥さん!?!」

通信の声はシャルロットのルームメイトとして短い時間を過ごした一夏の幼馴染みだった。顔はフェイスガードのせいで半分隠れているが口元は見えている。シャルロットは何故彼女があんなものに乗っているのか理解できなかったが、彼女が止めに来たのだけはわかった。

「シャルルさん。学園に帰投してください」

レイラからもシャルロットは呼び止められる。あくまで帰るようをお願いをしている二人にシャルロットはそのまま返答する。

「ダメなんだ!私が行かないと、母さんが、みんなが!」

「わかってる!でも、帰ってきて!デュノアさん!」

「くっ!私は、みんなを心中させる気はないよ!」

事情を知らない、とシャルロットは判断しマコトをロックオンした。当然、マコトにはロックオン警報が鳴る。

「待つて！デユノアさん！あたしたちはあなたを——」

「私を行かせてよっ！」

引き金は引かれてしまった。シャルロットは右手にガラムを展開し、マコトに向かって威嚇射撃を行った。マコトはそれを危なげなく回避するが、反撃も銃も向けない。まだ、大丈夫だとマコトは思っていた。

「マコト！」

「レイラ、まだ、大丈夫だから！」

戦端はもう開かれた。レイラはそう判断し、武装の安全装置を全て解除したがマコトに発砲を止められる。目元は見えないが、スモーク処理されたバイザーの下で真剣な瞳がレイラを見ていることがわかった。

「デユノアさん、あたしたちは事情を知ってるから！あなたが何を恐れているのかも、私たちに何が落ちてくるのかも！」

「わかっているのなら、止めないでよ！」

「止めるよ！」

マコトは瞬時加速を行う。途端に彼女の体にかかる殺しきれないG。息を詰まらせながら、彼女はシャルロットとの距離を縮めるどころか追い越してしまう。追い越し、シャルロットの進行方向へと割り込んだ。マコトはフェイスガードを上げ、素顔を晒す。

「あたしは止める！デユノアさん！望まないことをしなくてもいいんだよ！」

両手を広げ、マコトはシャルロットを止める。シャルロットも前に出られてしまえば停止するしかない。飛鳥マコトという少女をシャルロットはまだよくは知らない。だが、一人の少女にあれだけ好かれているということは彼女はそれだけの愛情を注ぐに値することを見せたのだろう。警戒心が強い、簪の心を解いたマコトは真っ直ぐでいい人なのだとわかった。

「けど、私が行かないとあの衛生砲が落ちる！君たちに何ができるの!？」

「あたしには何もできないよ！」

「ならっ！」

シャルロットが再びガラムを向けるがマコトは目を逸らさない。彼女は引き金を引くことを躊躇う。手立てが彼女にはないのに、何故止めるのか。何がそこまで彼女をさせるのか。そもそも、そこまでシャルロットとマコトは親しくないはずなのに。

「そこを、退いて！」

「退かない！シャルロットさん、聞いて！確かにあたし一人じゃ何も出来ない！けど、今、みんなが動いてくれてる！」

「でもあんなものをどうにか出来るわけが」

「出来る！決めつけないで！」

必死なマコトに、シャルロットは本当に止められるのか、と銃口を僅かに下げる。マコトはチャンスだ、と畳みかける。

「今、落ちてくる衛星の迎撃を準備してる。詳しくは…今のデユノアさんには言えないけれど」

オーブンチャンネルでの通信のため、マコトは詳細を省いた。シャルロットも冷静に今の通信の状態を察して大人しく話を聞く。レイラもこれなら大丈夫かとホッとする。こちらは一発の弾丸も撃たずに終わる。あの夜ではとても出来なかったことだ。平和に解決できるのならそれに越したことも無く、これから友達になりたいと思ってる相手に銃を向けるのはレイラも流石に気が引ける。

「確実に、止められるの？」

「わからない。でも、やるしかない」

「……私は」

シャルロットは迷う。彼女を信じるのか、それとも、彼らの言葉に従うのか。どちらにも悲劇を回避するだけの確証はなく、判断に必要なのはシャルロット自身の気持ちだ。フランスの高官も、目の前のマコトもシャルロットはよくは知らない。どちらもまだ、信じるには値しない。

だが、姿の見えない相手と目の前でこうして必死の覚悟で止めに来ている相手。どちらを信用できるかといえば、後者だ。

ラファールからのロックオンが解除される。

「ありがとう…シャルロットさん」

「……名前も…」

「うん。ごめんね。勝手に色々と聞いちゃった」

「最初から全部お見通しだったってこと？」

「……うーん、変装はちよつと無理があつたかも」

「まあ、そうだよね」

シャルロットは無理のある変装がやはり通用していないことに苦笑する。アルベールが出した苦肉の策であつたが、やはり無理があつた。ガルムをシャルロットは量子化し、格納して武装解除する。

そして、雷鳴轟く中、シャルロットは叫んだ。

「聞いているのなら聞いて！私はもう、あなたの言いなりにはならない！一夏の情報も渡さない！」

それは決別の言葉。彼女の依頼主は答えない。だが、回答は成される。

『まーちゃん、れーちゃん！落下が始まった！』

「来たつ…こつちはシャルロットさんとこれから戻るから！」

『了解！出来ればそのままちーちゃんたちのところに向かつて！』

「わかつた！」

衛星の落下開始。シャルロットの依頼主が始めたのだ。あとはあの衛星を落とせばこの騒動も終わり、シャルロットは望まぬことをしなくても済む。ただの少女として、これから友達になることだつてできる。マコトは前世で成せなかつた、辿り着けなかつた答えの一つを手にしたのだ。

「レイラ！シャルロットさん！衛星が落ち始めた！島に戻ろう！」

「わかりました、マコト！」

「わかつた！」

3人がその場から島へ戻ろうと身を翻す。しかし、その瞬間にレイラの脳裏に直感が走つた。

「ツ!?シャルルさん！」

「え？」

咄嗟にレイラはシャルロットを呼ぶ。感じたものはシャルロット

への害意。レイラの呼びかけにシャルロットは声を返せただけで、その場から動けなかった。彼女の全身に黄金色の槍のようなものが突きつけられた。

「がっ!？」

「なっ、シャルロットさん!？」

マコトが咄嗟にISブレードでその槍を切り払おうとするがもう遅い。刹那、シャルロットに突き立てられた9本の槍のようなもの先端部が開かれ、開かれた場所から一斉にビームが照射された。

「う、うああああああっ!？」

全身をビームで打ち付けられ、シャルロットのラファールは搭乗者を守るために全力で絶対防御を稼働させる。こんな至近距離からのビームを大量に浴びれば、遠からずISは解除され、シャルロットの体は焼き尽くされるだろう。

「(あれはビット…!?ならどこかに本体が…!)」

レイラはシャルロットを撃っているものがイギリス以外は開発していないはずのビットであると判断する。夜と嵐に紛れているが、よく見れば9基のビット全てが“有線”であることに気がついた。ビットの繋がる先はどこだとレイラは線を辿る。

「…下ですね!そこっ!」

レイラは“なんとなく”の方向にライフルとビット6基を全て展開し、一斉射撃を行った。そうすれば途端に9基の有線ビットはシャルロットから離れていく。

「シャルロットさん!」

「はあっ、はっ、はあっ、し、死ぬかと思った」

マコトが慌ててシャルロット寄れば彼女は恐怖に震え、息を荒くしていた。レイラが即座に対応したためかシールド・エネルギーもまだ7割ほど残っており、行動に支障はなかった。

「レイラ!すぐにシャルロットさんと後退して!」

「待ってください!あなたはどうするのですか!？」

「殿をやる!セシリアにはレイラがついていてあげた方が良い!」

「……わかりました。なら、すぐに…っ!」

今度はレイラに直接敵意が飛ぶ。彼女は大きくその場で独楽のように回転して、貫こうと飛び出してきた正体不明機のビットを回避する。そして、マコトとシャルロットにも他のビットが襲いかかる。

「こいつら、一体!？」

「ビットはイギリスだけのはずじゃー!」

マコトは無駄のない動きでビットを回避し、シャルロットはギリギリで回避する。しかし、回避した先にビームが飛び、シャルロットは被弾する。

「ぐあつー!」

「くっそー!どこから撃って?!」

マコトはせめて牽制にとガラムを右手に呼び出しフルオートで海面に向かって射撃する。伸びてくるビットの全ては海面に近づけば溶けるように消えていく。シャルロットもそれを確認し、ハイパーセンサーをサーモモードに切り替えるが熱反応は見えない。

否、ある一定の範囲内に移ると消えることがわかった。

「ハイパーセンサーを誤魔化すほどのジャミング?!?レイラさん、飛鳥さん!今から指定するポイントを掃射して!」

「わかった!」

「…そういうことですか、いいカンです!」

二人はシャルロットの指示に従い、一斉射撃を開始する。そうすれば途端にビットの動きが鈍り、姿の見えない敵機は迷彩を解く。

「見えた!」

暗闇に浮かび上がるのは白い機影。展開していたビットが全て戻っていき、まるで尻尾のように格納される。マコトはそのシルエツトがまるで「九尾の狐」のように見えた。

「どこのISS!？」

「IFFの識別は…ISS学園!」

「友軍機なのか!？」

素早い確認を済ませてマコトとレイラはシャルロットを庇うように左右に並ぶ。また、レイラはシルド・ビットをシャルロットの周囲に展開し、ビットの奇襲に備える。ISS学園所属という敵機は海面

付近から3人のいる高度に一気に上昇する。

至近距離で見たことで、そのISの姿が露わになる。白色や黒で塗装され、動物的なシルエツト、狐のような造形で先ほど3人を襲ったビットは九尾の狐の尻尾だとわかった。手には和をイメージした形のくせをして、デユノア社製のIS用ハンドガンを右手に、左手に同社製のモーターブレードソード「ブレットスライサー」を左手に装備している。

3人のハイパーセンサーに眼前の機体の情報が表示される。

——IFF識別 IS学園

——機体識別 九尾ノ魂

「九尾モチーフのIS…!?でもこんなもの、見たこともない!」

「……いえ、IS学園で開発されているという新型機でしょう」

「こいつが…!?!」

校庭にクレーターを作っていたIS学園の学生が作った新型機。IS学園所属で、明らかに日本製だということに見覚えのないIS。この機体がそうなのかとマコトは構える。

「誰だ!」

3人がそれぞれの銃口を九尾に向ける。九尾の搭乗者の顔は狐の面を模したアーマーに覆われており、アイセンサーが黄金色に輝いている。髪型は後ろで結び上げており、これだけでは誰だかわからない。ISスーツに出ている体のラインはグラマラスなのはわかる。スーツのカラーリングはIS学園仕様の初期カラーだ。

九尾はマコトの問いかけに声では答えない。返事の代わりは光信号で行われた。センサーが発光し、3人のISがそれを翻訳し、機械音声で伝わる。

『シャルロット・デユノアを渡せ。学園側で預かる』

「学園側だというのは了解しました。こちらを攻撃した真意を聞きたいのですが」

レイラの当然の疑問に、九尾は銃口を向け突如発砲した。レイラは軌道呼んでいたかのように避けず、弾丸は彼女の頬を掠っていく。バリアによって傷などは残らない。九尾は驚いたように発光信号を



また行こう。

『何故避けない?』

「見えていますから」

営業的な笑顔をレイラは浮かべて挑発するかのように答える。またレイラは今の相手の質問で九尾のビット兵器がどういうものなのか悟った。

「マコト、シャルルさん。敵機のビットは疑似BTシステムのようにです」

「どういうこと?レイラ」

「操作はほぼIS側に任せ、大体の軌道を指定しているのでしよう。私やセシリアのように1から10まで脳波で動かしているわけではないようです」

レイラは知っている。BT適正持ちがいわゆる前世で言うところの“フラガの血”に近いものであるということ。適性が高まれば高まるほど、カンがいいというところか、予知に近い力を持つ。それを知らない。無線でビットを制御するには脳波が今は必須で、有線ということは脳波を少なくとも親機から飛ばすことができない。そして、有線であればビットというより最早副腕に近い。

「私が避けない理由がわからないということとはあなたは適正がないのでしょうか。であれば、やりようはあります」

「レイラ、どうするの?」

「マコト、よかったですね。あの機体、あなたの戦い方と相性悪いですよ」

「どういうこと?」

九尾がもう待てないと距離をとり、9基のビットを展開しながら後退しつつ、ライフルをセミオートで撃ってくる。読み通りだとレイラは微笑んだ。

「つまりあの機体は接近してしまえば、ビットは使えません!」

レイラがシャルロットにビットを残しながらレヴァリエを格納し、右手に大型のナイフを持つ。マコトはそれに見覚えがあった。九尾に向けられた刀身が淡く桜色に光る。

「我が前に立ち塞がるな、女王宣誓！」

瞬時加速。レイラは一気に九尾に飛び込んだ。九尾の機動力は然程高くない。隠密性を重視したからか、スラスタ数が少ないようだ。それに、先ほどまでのビットの動きは見事だが、反応が遅い。IS乗りとしては然程経験が無いように見えた。

ある程度の被弾を許容しながら、レイラは九尾の懐へと入り込む。九尾はモーターブレードでナイフを受け止め激しい火花が散る。

「こう懐に入れば、ビットは使えないでしょう！」

通常のビットのように自機へのフレンドリーファイアを避けた射撃を、九尾のようなプログラム制御では防ぐことが出来ない。結果、近接戦を挑まれた九尾はビットの制御が疎かになる。マコトは隙が出来たとシャルロットに撤退を促す。

「シャルロットさん！後退を！」

「わかった！」

シャルロットが瞬時加速をかけて勢いをつけると、そのままIS学園へと飛び去っていく。九尾のビットはレイラに潜り込まれたせいで中途半端な射撃をシャルロットに行うが全てが外れる。

流石にパワーは上なのか、レイラが弾かれる。しかし、九尾にシャルロットの追撃はさせまいとビットを九尾の背後に展開し一斉発射。直撃を受けた九尾は大きくよろめく。そこにマコトがISブレードを展開し、急接近する。

「このおー！」

通常のISの5倍近い出力で振られたブレードを九尾はモーターブレードで防御しようとするが、元々罅迫り合いを考慮していないブレードスライサーはモーターブレード部分がISブレードを防いだことで歪み、破損する。

さらに、レイラがビットを操作し九尾のライフルを撃ち抜く。弾薬が誘爆し、小爆発を受けた九尾は少ないダメージを受けたのか瞬時加速で後退し距離を取る。まだ九尾状のビットは展開したままだが、うねうねと九尾の周囲に浮くだけだ。

「手持ちの武装は破壊した！これで言い訳つくでしょ!？」

「学園側であるのなら攻撃する意図がわかりません。ここは退いてく  
れませんか？」

マコトとレイラの前世から続く絆がコンビネーションとなり、そも  
その実力の高さも合わさって九尾との戦力差は圧倒的だった。二  
人は九尾のパイロットはまだ経験が浅く、弱いと踏んだ。最初の奇襲  
は見事だったが種がわかればそうでもない。

おそらく九尾のパイロットは学生だ。しかも、1年生の可能性が高  
い。マコトもレイラも、同級生を討ちたいとは思わない。

『まーちゃん、れーちゃん！どうしたの!?!目標の後退は確認したけど  
…二人はまだ戻ってこないの!?!』

「束姉さん！ごめん、正体不明機に襲われて」

『リーダーには2機分しか映ってないよ?』

「目の前にいるよ！狐を模したのが！」

『えっ!?!なんで九尾ノ魂がそこにいんの!?!』

「知ってるの!?!」

『知ってるも何も、それ困ってた学生君たちを手伝って、私も作ったや  
っ!』

束は「ほらこれデータ！」と目の前のI Sの詳細データを二人のI  
Sに流す。基本スペック自体は原型こそ残っていないがベースと  
なった打鉄と同等で、コンセプトは隠密行動用という学園の機体とい  
うよりはどこかの特殊部隊向けの機体だ。武装も現地調達を前提と  
したセキュリティクラック機能を搭載し、理論上全I Sの装備が使用  
可能になっている。

極めつけは迷彩と高性能ジャミング・ステルス機能だ。マコトはこ  
の機能のベースに気がついた。

「この機能、白騎士のだよね!?!」

『正解！そうそう、狐ってこう、暗部っぽいから忍者みたいだと格好い  
いなくて!』

「これのせいでシャルロットさん大変な目にあっただけど！」

『あー、それはごめん。というか、なんで二人を襲ってるわけ？乗って  
んの誰だよ』

まさか自身の関わった者が二人を襲っているとは思わなかったのか東は遠隔で九尾のコアに介入し、装備のうち多機能ハイパーセンサー、七規しばねとして研究している技術を搭載した狐面を量子化する。

「あつ」

面が消え、現れた顔は二人のよく知る人物だった。

「そんな、どうして」

「何故、あなたが」

困ったような顔をして、布仏本音が九尾を纏ってそこにいた。

## # phase—19 「星を砕くもの／スターブレイカー」

九尾ノ魂のパイロットは本音だった。つまり、先ほどのまでの戦闘はクラスメイト同士で行われたことになり、マコトはショックを受けていた。飛鳥マコトから見た布仏本音はこんな争いから最も遠い場所にいるはずの少女で、奇襲をしかけ接射でクラスメイトを撃ち抜こうとするようなことは絶対にしないはずだ。

しかし、現実としてそこに本音はいるのだ。まだ、互いにロックは切っていない。臨戦態勢だ。

『こいつ…確か、前にれーちゃんの写真を見せてくれた』

「…クラスメイトの、布仏本音さんです」

『テメー…二人になんの真似だよ』

束は強い敵意を本音に向ける。状況が状況だけに本音は何も答えられない。相手は篠ノ之束で、本音が下手な返答をすれば即座にISをこの場で解除されて荒れ狂う海の下に落ちることになる。

「本音さん、なんで、どうして…?」

嘘だと、嘘だとマコトは言って欲しかった。クラスメイトが銃を向けあい、戦った。まるで、何かに大きく裏切られたかのように。レイラはまずい、と思った。今のマコトは「アスランに裏切られた時」と同じ精神状態だ。まさか、今世でもこんな状況になるとは思ってもみなかった。

「(…:せつかく、彼女の心のしこりを一つ解せたところで…)」

余計なことをしてくれたとレイラは今すぐにでも目の前のクラスメイトを撃墜したくなる。

「…本音さん。あなたはするりと人の懐に入るのがお上手でしたね。それがあなたの、どこかの諜報員としての技能ですか?」

「ち、違うよー！レイレイたちとは本当に、友達に」

「無礼な！気安く我が名をそのように呼ぶな！」

泣きそうな顔を本音はして、怒気を孕んだレイラの声に身を竦ませ

る。このレイラの怒りは演技だ。本音の反応は演技が一分も入っていないことがレイラにはわかる。だからこそ、不可解だった。そう思っている相手に何故当たり前のように銃を向けられるのか。

「…更識簪の従者。あなたが、そうなのですね？」

「え…？レイラ…何、言ってる」

「更識家、現存する日本の暗部…語弊はありますが現代の忍者とでも言いましょうか。我々の界限でも有名ですよ」

レイラから語られた内容にマコトは呆然とする。

「簪が…暗部の…？」

「ええ。ただ、マコトと過剰している姿を見るに彼女は距離を置いているのでしよう。正義感も強く、優しい方です。…そうなのでしよう？更識家の使用人」

レヴァリエを抜き、レイラは本音の眉間に向ける。マコトはよせ、とレイラを止めようとするが、レイラがそれを手で制した。

「答えなさい」

まるで、王のような威圧感を持ってレイラが本音に命じる。別の世界で言えばそれは「プレッシャー」と呼ばれる、サイコキネシスの一種だった。側にいるマコトも重圧のようなものを感じ、本音は心を鷲掴みにされる。

レイラが始めた問い詰めを静観していた束はこっそりモニターしているダイヴトウ・ブルーのBTシステムが何か異常動作を起こしていることに気が付く。

『(脳波の観測が…できなくなってる…?)』

正確には、ダイヴトウ・ブルーが受け止め切れる脳波の出力を超えてしまっているということだった。静謐な怒りが、レイラの身を焦がす。親友が手にしたものを、前世ではたどり着けなかったことを汚されたような気がして、レイラは…シン・アスカを喪った時のような心理状態になりつつあった。

「か、かんちゃんは、簪お嬢様は、この件に、関係、ない」

「よろしい」

レイラが怒っているせいか、徐々に冷静さを取り戻してきたマコト

はレイラがおかしいことに気が付く。怒りに震えるレイラを彼女は見たことがなく、前世でもレイ・ザ・バレルが怒っている場面を見たことがなかった。正確には、死んでいたため見れなかったというのが正しいが。

本音の口から、簪は関係ないと言われマコトは少しだけ安堵する。

「では、何故、無力化したシャルロット・デュノアを撃った」

「…そ、それは、めいれい、で」

「誰からの？」

「…た、たてな——」

レイラの詰問に、本音がまるで自白剤を飲まされたかのように震えながら誰の差し金か答えようとした瞬間、マコトは黒騎士のハイパーセンサーがレイラの直下に何かを捉えた。

「ツ！レイラ！」

「え？きやあ!？」

咄嗟にマコトはレイラを抱きしめてその場から彼女を退かす。すると、レイラが滞空していた場所を鋭い水柱が貫いていた。ISを纏っていないければ即死していたかもしれないような一撃だ。

なんとか回避させたレイラをマコトは離す。レイラはマコトに助けられた際の急激な衝撃で我に返っていた。同時に、BTシステムがエラーを起こし動作を停止したことが網膜投影に表示される。

「…私、何を。それに、システムが強制停止した…？なぜ…」

本音への怒りはあったが、何故あそこまで燃え上がったのかレイラはわからない。それでも、その困惑を彼女は押し殺してシステムをそのまま封鎖。通常の制御システムを立ち上げ、即座に機体を復旧させる。

マコトはガルムを再び呼び出し、何が現れたのかと警戒する。

「へえ、今の避けるんだ」

聞こえてきた声は、また聞き覚えのある声。暗い海の中から上がってきたのは一機のISだった。識別はなされる。

「…ロシア所属、ミステリアス・レイディ、ですか」

ラファール・リヴァイヴの形状を残しつつも改造され軽装になり、

“水のヴェール”を纏った不可思議なIS。水流が渦巻く突撃槍を右手に持った、操縦者自身の容姿も相まってまるで主神の戦乙女のような姿。

「更識会長……！」

更識楯無。レイラを貫こうとした者の名前だった。

楯無は以前、マコトと会った時と変わらない笑顔を見せるが、マコトは簪の姉であろうと警戒を解かない。今、レイラを攻撃したのは彼女なのだから。

「覚えていてくれて嬉しいわ、飛鳥ちゃん。簪ちゃんとは仲良くしてる？」

「……それは、もちろん」

「あら、よかったわ」

扇子がないからか、くすくすと笑いながら口元に左手を当てている。マコトはどうするべきか迷う。本音のことを問い詰める、というのはマコトとしては避けたいことだが、シャルロットを攻撃した真意が知りたい。

命令したものを明かそうとしたタイミングで現れた楯無はあまりに怪しく、マコトは彼女がそうなのではないかと疑う。先ほどの更識が諜報に長けた家系だというレイラの情報からして、楯無が少なくともこの学園における現地の責任者である可能性が高いとマコトは推測する。

こんな十代の少女が……とは思いますが、規格外な子供が多い学園の中ではおかしくはない。

「会長なんですか。シャルロットさんを攻撃するように本音さんに命じたのは」

「………それを知ってどうするの？」

「答えてください。なんでそんな酷いことを。あたしたちはクラスメイトですよ！」

マコトの叫びに、楯無は一切動じない。それどころか、簪とよく似た赤い瞳でマコトを睨んでくる。その凄みはマコトも思わず気圧されそうになるほどだ。確かな修羅場を潜ってきたことを窺わせる。



「これで怯まないあたり、本当に君、何者？」

『…さつきから黙ってればお前、何言ってるんだよ』

「あら博士、お聞きしていたんですか」

黙っていた束が楯無の通信に割り込んで言った。マコトを何か疑っているような楯無の言動に彼女は我慢がならなかったのだ。

『なんで目標を攻撃したんだよ。答えるよ。まーちゃんが聞いてんだろ』

「うーん、クライアントの一人からそう言われると答えなくちやいけないわね」

楯無は困ったわね、と全く追い詰められた様子もなく、あるものを左手に実体化する。武器か、と思わずマコトとレイラは構えたがそれは違った。円盤状の掌ほどの大きさの物体で、センサーのようなものが光っている。

「これが理由よ。本音ちゃんには言っただけ」

「それは、なんですか？」

「発信器ね。ラファール・リヴァイヴの外装パーツに似せた」

『…わざわざそのために？』

「これねえ、ちよつと面倒なのよ」

楯無がそう言うや否や、誰もいない方向に発信器を投げる。そうしてから指を鳴らすと、発信器が発光し、大爆発を起こした。

「…なっ!？」

「起爆スイッチを押すと強烈な指向性の爆弾になるのよこれ。特殊なものだからビームで焼いちやえば動かなくなるんだけどね」

「そんなものがシャルロットさんに!？」

「安心したところでドカーンってかんじでしょうね。趣味の悪いこと」

マコトはそこまでの悪意がシャルロットを襲っていたのかと愕然とする。

「そもそも、あれだけの数を接射したのにエネルギーはそこそこ残っていたでしょ？」

「…シャルルさんの様子を見ると、確かに」

「この子の尻尾のビームはそういう出力調整でスプレーガンモードにできるのよ。だから吹きかけるようにビームを当ててこの爆弾の機構を焼き切った、ってところかしら」

わかった？と楯無が悪戯っぽく笑うが、マコトは肝心なことを誤魔化されていると思った。

「けど、それならなんでその後には攻撃を続けたんですか」

最初のシャルロットへの攻撃で爆弾の解除がされていたのなら、そのあとはさっさと逃げればいいだけだったはずだが、本音は攻撃を続行したのである。楯無は「流石に聞くよね」と観念した様子で話し出した。

「攻撃を続けたのは君たちが理由よ」

「あたしたちが？」

「そう。特に飛鳥マコトさん？あなた、どこにでもありそうな家庭で、当たり前のように育って……篠ノ之博士の関係者とはいえ、いきなりあんなISの技量を持っている筈がない。だから、どこまでの技量があるのか確かめたくて、戦闘を続けさせたの」

槍の先がマコトに突きつけられる。マコトは言われてみればそりやそうだと変に冷静だった。ある程度は身体能力を要求されるとはいえ、ISは操縦者のイメージで動かすことができるため、前世の経験がマコトの搭乗歴にそぐわない操縦技術を生み出していた。

だが、その理由を素直に答えたところで目の前の人物が納得するとはマコトは思えなかった。束は、彼女の天才的な頭脳のおかげもあり信じる事ができたが、他の人々からすれば転生し、尚且つ前世ではロボットに乗って戦っていたなど荒唐無稽もいところだ。

「てつきり最初は、デュランダルさんの現地協力者かと思っていたけれど、違った。なら、あなたの生まれが…と探っても違った。じゃあ博士の助手としてテストパイロットを、と考えてもあなたの年齢を考えれば開発黎明期にそれをするのは難しく、考えれば考えるほど、あなたは異質なのよ」

楯無の疑念はもつともで、マコトは何も返せない。だが、これはマコト自らが答えなくてはいけないものだ。

「……操縦が上手い理由、知りたいですか？」

『まーちゃん!?!』

「マコト、まさか」

束とレイラが慌てた様子を見せる。楯無はマコトが秘密を明かすと考えて、くすりと微笑む。マコトは真剣な表情で楯無を見つめた。

「教えて頂戴？あなたは何者なの？」

「あたしは……未来人です」

「……は？」

「今よりずーっと先、人類が宇宙に出た世界の人間です」

「ちよつと待って。お姉さん耳が悪くなったのかしら。未来人？そんなのありえないでしょ」

「ええ、証拠もないですし、証明できませんね」

「ふざけているの？」

「いいえ、本気です」

赤い瞳同士が見つめ合う。マコトは多少の語弊こそあれど嘘は言っていない。ゴズミック・イラもこの世界ではないとはいえ西暦から地続きだった世界だ。故に、今は過去の世界とも言えるため、マコトが未来人と言うのも嘘ではなかった。

楯無は困惑する。真剣なマコトの表情に、とてもからかっているような意図は見えず、まさか本当に……？と一瞬信じそうになる。だが、未来人だからISの操縦が上手いというのは理由になっておらず、楯無は首を横に振る。誤魔化されない、と彼女はマコトをロックオンした。

「……っ」

「あまり私を舐めないでちょうだい」

『お前！ISを解除するぞ！』

「どうぞご自由に？ただ、それをあなたのご友人が許しますか？」

『コイツ……！』

楯無は千冬とはこの学園の守護を司る双壁だ。そこを束が崩すのは当然、許されない。束自身の身の安全にもかかわってくる。タチの悪い脅迫だ、とレイラはこの楯無という少女が実に面倒だと思った。

しかし、同時にレイラは感じるのだ。悪いことをしているはずなのに、楯無からは「好ましい」心が僅かに感じられることに。

ロックオンまでされ、いつ撃たれてもおかしくないのにマコトは武装を解除する。

「なにを」

「あたしは怪しいものじゃない、って信じてくれませんか」

「片手落ちね。証明もできないでしょう」

「そうですね。だから、撃ちたいなら撃ってください。抵抗はしません」

マコトは両手を広げ、抵抗はしないと楯無に言う。楯無は目を見開く。彼女の網膜投影にある警告がなされたのだ。『敵機シールド・バリア消失』と。

『まーちゃん！なんでバリアを!?!』

「大丈夫だよ」

マコトは黒騎士に命じて、シールド・バリアを解除していた。さらに絶対防御さえも停止させる。今打たればマコトは間違いなく挽肉になるだろう。ISの攻撃は生身の人間にはあまりにも強力すぎる。

「正気!?バリアを解除するなんて!」

「まこりん！危ないよ！お嬢様もそれ下げて!」

「マコト、やめてください!」

周囲の3人が慌てて言う。流石の楯無も「疑いも晴らせないので殺してください」とまで言われるとは思わなかった。

「確かに、あたしは怪しいですよ。でも、簪さんのことをどうこうしようとも思わないし、大切な友達です。……ふざけていたわけじゃないんでしよう、あの時カメラ渡したの」

マコトは楯無と初めて顔を合わせた時のことを思い出していた。簪の写真を撮ってほしいと疲れ切った様子で言った彼女は演技ではなかったと思っっている。他に何か意図はあったのかもしれないが、瞳は嘘をついていなかった。

「あれは……!」

「それに、簪さんのお姉さんがそんな、酷い人なんて思いたくないですよ」

ね?とマコトは楯無に笑顔を向ける。マコトはどこまでも純粹で、真っ直ぐだった。だから彼女は楯無がマコトを怪しむのは簪のためだと思っていた。そしてそれは当たりだった。更識家の当主としても、簪の姉としても楯無はマコトの異常な操縦センスからどうしても何者かを知りたかった。ここ最近の妹の様子もあって、余計に。

「……あなたは、人を簡単に信じすぎよ」

「それが、私の親友ですから」

楯無がため息をつきながらそう言っつて、レイラは胸を張って自慢げに言う。とりあえずこれ以上は追求できない、と楯無は槍を下げようとしたのだが、ここで最悪の乱入者が到着する。

「なにを、してるの」

いつの間にか、打鉄を纏った簪が4人の近くにいた。彼女は打鉄用のIS用バズーカを構え、楯無を睨んでいる。

「か、簪ちゃん!?なんでここに!」

「それはこつちのセリフ。答えて」

簪がバズーカを楯無に向ける。本音も相当慌てているのかあわあわと、簪と楯無を交互に見ている。

『あ、まーちゃん。そろそろセシリアちゃんの管制に戻るね』

「え……この状況で……?」

『もう大丈夫でしょ。まあ、気になることありすぎだけど、島吹っ飛んだら意味ないし』

「そ、そうだね……よろしく……」

『はいほーい』

東は当面の問題はないと判断してか、今一番の問題である落下物の処理へと戻った。マコトはレイラに目配せをするが、彼女は様子を見ましようという視線を返す。

「答えて……どうして、マコトさんに槍を向けている!」

「あ、いや、違うの!これは!」

楯無が慌てて槍を量子化し、両手をバタバタとさせて弁明しようと

する。しかし、簪はそんな楯無のことなどお構いなしに口を開く。

「それにさっきの爆発は何?!まさか二人と戦っていたの?!本音と一緒に!」

「わ、私は戦ってないわ!」

その答え方は最悪だとレイラは思った。

「じゃあ、本音は戦ったの!?!」

当然、簪はそう返し、楯無はバツの悪い顔をする。本音は違うの、と言わんばかりに簪を見ていた。

「もう、もういい!どうして、どうしていつも私に干渉するの!?!助けて欲しいときには来なくせに!大切な人を傷つける時だけ現れて!あなたなんか、あなたなんか——!」

「ダメだ!簪!」

気がつけばマコトは叫んでいた。簪が続けようとした言葉を悟って、彼女は割り込んでいた。涙を流す簪はマコトにどうして、と目を向ける。姉を庇うのか、と。

「どうして、どうして止めるの!?!この人たちは、マコトさんを、傷つけて!」

「違う、違うの!すれ違いが、誤解があったの!」

「でも!それでも、マコトさんたちと戦ったのは事実で、槍を向けられていたのも見間違いじゃない!」

「決めつけないで!言葉を交わして!」

簪が続けようとした言葉がマコトにはわかっていた。あなたなんか、大嫌い。それを実の妹から告げられたらどう思うだろうか。どんな立場であれ:妹のことを大切に思っている姉であれば、もうそれは絶望と言って差し違えない。

それが、誤解も解けぬまま言われてしまえばもうおしまいだ。取りかえしがつかなくなる。前世で、わかり合うことが出来なかった。彼ら〴〵のように。

「マコト、さん?」

まただ、と簪はマコトの顔を見て思う。悲壮感に溢れた、普段のマコトからは想像もできない顔。簪が知らない、何かを抱えている顔。

それを見てしまえば、簪は止まるしかない。

「……まだ、二人は……生きてるでしょ？言葉を交わせるでしょ？何があつたのかは知らない。でも、傷つけ合う前に……壊れ合う前に……触れ合つて、話し合つて」

手を合わせて願うようにマコトは告げる。二人にはまだ可能性がある。完全にわかりあうことが出来なくなる前に、できることがきつとある。マコトの心からの言葉は簪の楯無への敵意を解く。

「……私……」

「……簪ちゃん、聞いて、私は——」

二人が言葉を交わそうとした瞬間、IS学園から青白く太いビームが放たれ、雲を貫く。その光は眩しく、4人にも届く。

「セシリアの砲撃です！」

「もう、落ちてくるのか！」

レイラの言葉にマコトもついに始まったのだと島へと視線を向ける。簪は何が起きているのかと頭が真っ白になる。

「な、なに!?!何が!?!」

「……本音ちゃん。戻りましょう」

「え?でも……」

「私たちにはやらなくてはならないことがあるでしょう」

楯無はこれ以上ここに留まれないと本音に撤退を促す。本音としてはもしかしたらこの場で楯無と簪の関係が少しは改善されると思っていたので、これには反対したかったが、楯無の撤退を促した理由も決してこの場から逃げ出すためではないことがわかつている。

学園の防衛を預かるものとして、あのような超出力のビームを放つた以上、本州からも問い合わせは必須だ。

「……簪ちゃん」

「……あ…待って、どこに」

「ごめんなさい。私はやらなくてはならないことがあるの」

「お姉ちゃん……」

「……刀奈として、言わせてもらおうわ。ごめんなさい、あなたのお友達を、傷つけて」

それは簪が人生で初めて「姉」からされた謝罪だった。

「……誤解も、何も、あなたとはまだ解けないのでしようけど、私は当主である前にあなたの姉である。それだけは今、言っておくわ。じゃあね、簪ちゃん」

本音を連れ、楯無はその場から退いていく。簪は呆然と光が立ち昇る島へと戻る姉と幼馴染みの背を見送る。

マコトは今度こそ一安心だと肩の力を抜く。あとはセシリアが上手くやってくれるかどうか……それでこの夜がようやく終わる。

「セシリアは上手くやってくれるかな」

「マコト、彼女は私の親友ですよ？」

「なんだかレイラとセシリアって、微妙に似てるよね。自信満々なところ」

「まあ、姉妹同然ですから」

レイラの優しい微笑みが、二度目の迎撃を見る。マコトも彼女に倣い、セシリアの成功を信じ、願った。今世の友人がみんなを救うことを。

少々時間は巻き戻り、束がセシリアの管制に戻るとすぐにセシリアへ大気圏突入を開始した衛星砲の軌道を共有する。

『ただいま！コース送るよ！』

「…受信しましたわ！」

『射程圏内まであと20秒！』

「座標固定、スターブレイカー、エネルギーチャージ！」

セシリアは砲口を指定された方向へと向け、エネルギーのチャージを開始する。といっても束によって改良されているせいかさイレント・ゼフィルスが使用していた時よりもチャージが早い。

「チャージ完了！」

『安定してるよ！』

予測コースを網膜投影に映し、セシリアは狙いを定める。一撃目は当たれば御の字だ。

「(エクスカリバーは表面に耐熱コーティングがされている。だから、



博士は2射で仕留めることを前提とされた)」

セシリアは落ちてくる衛星砲のスペックを思い返す。そもそも「エクスカリバー」はIS以前より開発が進められ、白騎士事件より2年近く前に衛星軌道上で秘密裏に組み上げられたものである。初号機の開発はセシリアの両親が関わっており、それが原因でセシリアは両親を失ったのだ。

「忌々しい…もはや呪われた聖剣…：あんなものを作らなければ、お父様もお母様も、命を失わずに済んだ。エクシアも襲われずに済んだ。チエルシーも、悲しまずに済んだ)」

蘇る、オルコツト家とその使用人たちを襲った悪夢。そして、現在に至るまでの苦勞。それもこれも全て、今落ちてきている「聖剣」のせいだ。セシリアは己がその聖剣の「鞘」であることを自覚しつつも、狙いを引き絞る。

「(…：破壊しますわ。まずは一つ。滅ぶべくして、滅ぶのです。行き過ぎた力は、人を狂わせるのですから)」

その手にあるのは星を砕くもの。凶星と化したソレを砕くには十分な得物だ。

『今！』

「お行きなさい！」

トリガー。凄まじい出力のビームがスターブレイカーより放たれる。目を焼くほどの奔流はブルー・ティアーズが即座に遮光しセシリアの瞳を守る。発射の反動は膝立ちのセシリアが地面にめり込むほどで、それでもセシリアはライフルをブレさせない。暴れさせれば近くにいる千冬は蒸発し、学園にも被害を齎す。

雲を突き破ったビームの柱は順調に軌道上まで伸びていき、落下中のエクスカリバーに突き刺さる。だが、エクスカリバーの切っ先は一発目をコーティング剤で凌ぐ。だが、コーティング剤は剥がれたことで、大気の摩擦熱がエクスカリバーを襲い、その強度を急激に落とすていく。

『命中！』

「二射目チャージ！ハイパーセンサー最大望遠！」

雲に穴が開き、星空が見え、セシリアは天から落ちるものを捕捉する。小さく、赤く光るそれが目標だ。

『あれ!?なんか1機調子悪そう!』

「なんですって!?!」

「どういふことだ、束」

『ちーちゃん!えっと、登録番号7の打鉄!見てくれる!?!』

「了解した」

ここで、スターブレイカーにエネルギーを供給している1機の調子が悪くなったのか、セシリアの方でも明らかにスターブレイカーのチャージ速度が下がったことがわかった。中途半端な出力で撃てば空中で対象が爆散する可能性があり、破片で学園が被害を受けてしまう。

千冬がライフルに接続している打鉄のうち一機を確認する。しかし、彼女は技術的なことに明るくないため何が原因なのかわからない。

「束、見てくれは何も変わらんぞ」

『ええ!?うーん、こつちから見る感じだとコアの出力が不安定に…エネルギーの吸い上げの分配率がズレてたのかな』

「どうする?格納庫から持つてくるか?」

『それじゃ間に合わない!こうなったら、コアのリミッターを解除してあげて…』

束は最終手段としてISコアの一つをインフィニット・ストラトスの状態に戻そうとするが、手を付ける前にその場に1機のISの反応が現れる。

「セシリアさん!大丈夫!?!」

「あなたは…!」

現れたのはシャルロットだった。彼女はセシリアたちの側まで降りると、千冬に問いかける。

「織斑先生!すいません!何かできることは!?!」

「束」

『いいタイミング!その子のISを不調な子と切り替えて!』

「了解した。デユノア！こっちに来い！」

「はい！」

まさに最高のタイミングでの合流だった。千冬に呼ばれてシャルロットは不調なISの側まで行き、周囲を見て何を求められているのかをすぐに理解した。

「織斑先生、私のISには補給用の接続口があります。そこに直接そのケーブルの接続口を」

「了解」

千冬は手早く不調なISに乗り込み、接続されていたケーブルをシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムの股間部に設けられた補給口へと接続する。途端に、セシリアの視界に映っていたスターブレイカーのエネルギーが跳ね上がった。

「チャージ完了！行けますわ！」

『標準補正！右に0.5度！』

「了解……修正完了！」

照準のど真ん中に、落ちてくる流星が収まる。セシリアはトリガーに指をかけた。

「…消えなさい！スターブレイカー！」

発射。二度目の射撃は星空に吸い込まれるように伸びていく。そしてIS学園を襲った悪意は星を砕く光によって消しされたのだ。た。

『……命中。目標は消失！』

「…ふう……終わりましたのね」

セシリアは赤熱化し砲口が真っ赤になったスターブレイカーを下げる。銃口が地面に触れると急激に銃口が冷やされ音を立てて蒸気が沸く。

千冬とISを解除したシャルロットがバシャバシャと音を立てながらセシリアに駆け寄った。

「セシリアー！よくやってくれた！」

「セシリアさん！ありがとう！」

「ふう、やりましたわ」

スターブレイカーを地面に置き、ISを解除したセシリアは二人に笑いかける。

「……って、え？シャルルさん……？その、お体は？」

「あ……」

が、セシリアはシャルロットの本来の性別を知らなかったため、今の彼女を見て困惑する。

「セシリア、気にするな。色々と訳がある。詳しい話はまた明日にでもしよう」

「……はあ、まあ、そうですね」

「えっ?! いいの!?!」

「ええ、あなたは、あなたなのでしょう？」

人の本質は変わらない。だからセシリアは千冬の言葉に素直に従い、シャルロットへの追求はしない。

「それに、この一週間、あなたは心から笑っていましたわ。…改めまして、セシリア・オルコットですわ。お名前は？」

セシリアが手を差し出す。シャルロットはその手を見て、セシリアの蒼いサファイアのような瞳と見つめる。美しく、澄んでいて、何もかも見透かしていそう。けれども、決してそれは不快感などなく、人の心に優しく触れてくる。

「……私は……シャルロット。姓はルーセルでも、デヌノアでも構いません」

「なら、あなた自身のお名前を呼ばせて頂きましょう。よろしくて？シャルロットさん」

「はいー」

手は繋がれる。

この嵐の夜で、失われたものはいっそ無かった。かつて、どこかの、いつかの夜で破滅的な運命を決定付けてしまった翼は無限に広がる可能性の未来へ、ようやく羽ばたき始めたのだった。

## # p h a s e — 2 0 「雨降って地固まる」

セシリアの迎撃が成功し、シャルロットの脱走が未遂に終わったことで危機を脱したIS学園はようやく静かな夜を迎えることとなった。落下していたエクスカリバーは完全に消失し跡形も無く消えている。また、エクスカリバーは元々極秘兵器であるため、フランス側からの公式な問い合わせもなく、楯無や教員は国内の各省庁からの問い合わせに対応することとなった。

これらは実際のところ部外者であるマコトやレイラ、セシリアには責任を負う必要もなく、3人はこっそりと寮に戻る。セシリアやレイラは目を跨いでも起きて二人を待っていた筈に謝罪し、温め直した緑茶で冷えた体を温めた。

一方、マコトは乱入してきた簪を連れて部屋に戻ってきていた。簪も飛び出したため電気は点いたままだった。二人は無言だ。マコトは当然、黒騎士のことなどを話せず、簪は形だけとはいえ自身の従者がマコトと刃を交えたという事実があつて、口を開けずにいる。

びしょ濡れになったマコトは脱衣所まで行くと制服やダメになった下着を全て脱ぎ、洗濯機に突っ込む。べちゃっ、と搾り取れそうなほど濡れた制服が無くなるとマコトは体から重しが全て抜けたようで、一気に疲れが襲ってくる。

「……簪も」

「……うん」

簪も同じくぐちゃぐちゃに濡れているため、マコトは彼女を呼んで服を脱がせようとする。しかし、簪はマコトの前に立つとしばし服を脱ぐことに迷うそぶりを見せてから居心地悪そうに脱ぎ始める。

「あ……ごめん、見ない方がいいよね」

「……そ、そういうわけじゃ、ないけど」

そもそも簪は他人に体を見せることに抵抗があつた。それはマコトに対してもだが、今はその抵抗感よりも恥ずかしさのほうが勝っていた。簪の目の前にあるマコトの裸体はバランスがよく、鍛えているせいかスポーティーだった。だが、それでも筋肉質ではなくまるでア

アイドルのような整い具合で簪は少し贅肉のある自らの体と比較してしまう。

先ほどまでの罪悪感と、気にしている相手と一つの部屋で裸になるのはあまりにも簪の思考を乱すもので、簪はえいやっ、と半ばやけくそ気味に服や下着を脱ぎ去った。

「待たせて風邪引いちやうのもよくないから、お風呂一緒に入ろうか。いい?」

「……………大丈夫」

大丈夫ではなかったが簪は上手く断る言葉が浮かばなかった。急にマコトがこんな積極的になったのは何故かと簪は考えたがすぐに思い当たる。彼女は「姉」である。特に他意はなく善意だけで一緒に入浴すること提案している。そう考えても簪はモジモジとしてしまふ。

「寒い?」

「…え…いや、むしろ…暑い…」

「もしかして熱!?!ちよつとごめんね」

「――!」

いきなりマコトが顔を近づけてきて、簪は声にならない悲鳴を上げた。マコトは簪と額をくっつけて簪の体温が高くないか確認するが、特に彼女は熱っぽくなく、すぐに額を離れた。

「大丈夫かな。あれ、簪?」

簪は完全に硬直していた。顔は真っ赤で、ぷるぷると震えていた。マコトは全く状況を理解できず困惑する。とりあえず風呂場に入らなければとマコトは簪の手をとって浴室へと二人で入った。マコトの手は温かく、簪には熱いぐらいだ。

「こんなに手も冷えてる。シャワーとにかく浴びようか」

「……………」

頷くことしかできず、簪は俯き気味だった。先ほどまでの罪悪感などは良いのか悪いのか考えられないほど簪は恥ずかしさで頭が沸騰しそうになっており、もはや一周回って人形のように大人しくなってしまう。

「あ、ごめん。眼鏡」

「……………外す」

強引に浴室へ入ったため、眼鏡を簪はかけたままだった。気がついたマコトが声をかければ、簪は眼鏡を外し、一度浴室の外、脱衣所の洗面台に置いてからまた浴室に戻ってくる。彼女は意を決して浴室の扉を閉めた。普段よりも更に狭い場所でマコトと二人きり、密室で裸で向かい合うという状況が完成する。

マコトは戦闘があつたにも関わらずテキパキと水を出して温度をあげると、蛇口からシャワーへとスイッチを切り替えてお湯をシャワーから出す。

簪はあまりにマコトが気にしなすぎで、逆に不満が溜まり背を向けている彼女に寄りかかるとポカポカと可愛らしく背中を叩いた。

「か、簪さん？どうしたの？怒ってる？」

「怒ってない」

「でも叩いて」

「怒ってないよ…でも、心配だった」

手を止めて、簪はそのままマコトに抱きつく。簪の体は雨で冷え切っていた。マコトはマユが以前学校で何かあつたときはこうしてきたなあ、と簪に聞かれれば怒られるようなことを考えながらそのままシャワーを二人で浴びる。

程よい暖かさのお湯が二人の髪を、肌を濡らしていく。自身と然程変わらないはずの背中に安心感を強く感じながらも簪はほんのわずかに力を入れてマコトを抱きしめる。

「急に飛び出して、追いつけば見たこともないISをつけて、お姉ちゃんたちと戦ってた」

お腹のあたりに回された簪の腕をマコトは触れる。簪は言葉を続けた。

「最初会ったときは、戦うような人じゃないって思ってた。どこにもいそうな、明るい高校生、そう思ってた」

飛鳥マコトという存在を確かめるように簪は言葉を紡ぐ。初めて見たときはどこにでもいそうな明るい少女で、ただ簪の荷物を見ても

特に何も聞かず、それどころか一緒に見たいとまで言ってきた。ただ、稀に強引で簪の人見知りなんて関係ないと言わんばかりにマコトの友人たちの輪に簪を加えようとしたり。

けれど、時折見せる不思議な、十代の少女が纏うにはあまりにも重みのある表情が「未知」で簪の興味を引き立てた。

「でも、違った。あなたはまるで、ヒーローみたい。サイレント・ゼフィルスの時もそう。さっきだって、私がお姉ちゃんに……言いそうになったときも止めてくれた」

もし、あのときハッキリと簪が楯無に拒絶を突きつけてしまえばもう取り返しがつかなくなっていたという確信が簪にも今はあった。簪の知る、正義か悪か、そんな二元論とは隔絶した真の意味でのヒーロー。みんなを救う、とても強い人。

簪のその気持ちは、マコトがコーデイネイターとして在るべき姿の一つだったことを知らない。人を守り、繋ぎ、明日へ導く。マコトが、シン・アスカとしてたどり着きたかった場所。

「だから、怒ってなんかない。心配だったけど……帰ってきてくれたから、いいよ」

ゆっくりと、簪の体が温もりを取り戻していく。それは彼女の中で一つの結論が出たからだだった。いつかの夜、簪はマコトとどうしたいのか、何がしたいのかわからなかった。だが、今、彼女はそうだとわかったのだ。

「……これが人を好きになるってことなんだ。誰よりも近く、誰よりも長く、一緒にいたい。心の重みが触れてる間は消える相手。追いかけたくなったのも、心配だったから、それだけじゃない……私は……ずっと、この人といたいんだ……」

更識簪という少女が、一つの階段を上った瞬間が今だった。もはやそれは、恋から愛にまでいきなり昇華されていることを彼女はまだわからない。初めて恋をした相手があまりにも彼女の世界を変えすぎってしまったせいだった。

マコトの反応がない、と簪がマコトから離れば、眼鏡がないせいでかなり近寄る必要があり、鏡に写ったマコトが涙をシャワーのお湯



に混じり流していることに気がついた。

「ま、マコトさん…!？」

「あ、え？ご、ごめん簪さん、なんでもないよ」

「なんでもなくないよ…今夜は、誤魔化さないで」

そつちが強引ならと簪はもはや開き直っていた。あとで羞恥心で撃沈することなど全く考えずに。マコトは簪に迫られ、涙を流していることによく気がついた。誤魔化そうにも簪は肩に両手を掴ませて逃がさないと言わないばかりに密着してきている。

マコトは観念して、何故涙が出てしまったのかの理由を考え、白状した。

「…嬉しかったんだ」

「何が？」

「ヒーローみたいだ、って言われて」

まだシンが兵士としては不完全だった頃に告げられた「戦争はヒーローごっこじゃない」という言葉。それは今になって思えば、決して間違っていないともシンは思う。軍人として、兵士としてはヒーローなんてものになろうと思っただけではないのだ。

しかし、シンの心はどうしてもそれを認められない部分があった。苦しんでいる人がいたら、それを救うのは力を持っている軍人の役割じゃないのかと。

「…あたしは、こんなことを言われたことがあるんだ。お前が欲しかったのは本当にそんな力だったのか」って」

「え…」

零れだしたのは涙だけではなかった。マコトの中に眠っていたものが心から溢れてくる。ひび割れた心が、今こうして新しい器に入ったことで、正しくマコトの想いを揺らす。あのときは、もう手遅れだった。シン・アスカの心は、壊れてしまっていたから。

「…あんな力、欲しくなかった。あたしが欲しかったのは、あたしみたいに苦しんで、悲しんで、誰かを失ってしまう人を生み出さない…そのための、守るための力だったんだ」

始まりはオーブでの家族を失ったあの瞬間から。自らの無力さと、

祖国への怒り、全てを奪った理不尽な“自由”の力。瞳を怒りに染めて、悲しみを憎しみに変えて銃を手を取った。それでも心の奥に、これ以上かつての自身を生み出さないことを最愛の妹に誓って戦い続けた。

しかし、それは青さだと否定された。いや、“彼”は言葉が足りなかった。“彼”もまた母を失い、当時のシンが“彼”自身と重なって見えていたのだろう。

衝動で、力を振るうなど言われた気がした。シンが持つ力は決して万能ではなく：奪うことでしか、目の前のものを生か死か、2つでしか分けることしかできない。ある種の絶対の正義を示すことしかできないあまりにも不器用すぎる力でしかなかったのだ。正義の名を持つ機体を駆っていた“彼”はきつとそう言いたかったのだと、マコトは思う。

だが、初恋の相手はそんな力の前に無残にも命を散らし、シン自身もそこからは何かが狂っていき、気がつけば“たくさんのシン・アスカ”を生み出す側となっていた。

「…出来るようになったのは“誰かの大切なものを奪うこと”ばかりで、諦めるなって言われたけど、あんなものに縋るなって言われたけど…あたしには…もう、何もなかった」

守りたかった、救いたかった…誰かのヒーローになりたかった。そんな想いは無くなって、力だけしか残らなかった。あの“世界”は最後、皆がそうで、彼もその例に漏れなかったのだ。

だから、マコトは簪に「ヒーロー」だと言われて涙が出た。本当に欲しかった言葉。誰かを、何かを救えたという証。嬉しかった、マコトが戦った後に“花”は残ったのだ。

「けれどね、今、簪に“ヒーロー”みたいだって言われて、あたし、欲しかったものが一つ手に入った気がしたよ。あたしでも、力しか残ってないあたしでも、誰かを守れたんだって」

ありがとう、とマコトは簪の方へと向き直り彼女を抱きしめた。簪は固まったが、すぐに彼女の背に腕を回した。大きかった背中、簪と同じぐらいの女の子の背だった。このまま、と簪は気になっていた

ことをマコトに問う。

「…未来人って、本当？」

「…本当だったら、どうする？」

オーブンチャンネルでの通信内容は簪にも届いてしまっていた。その中で、マコトが真剣な声音で言った「自身は未来人だ」という言葉。彼女がいた世界も、どんな道を歩んでいたのかも気になる。だが、今の簪が欲しいものは違った。

「もし、未来に戻れるって言われたら、マコトさんは戻りたい？」

「…それは」

マコトがどこかにいかないという確証が欲しかった。

簪に未来の、ゴズミック・イラのことを聞かれると思っていたせいも少し虚を突かれたマコトは悩む。それは生き返るという意味だ。心残りが無いと言えば嘘になる。ギルバートの目指す世界を守りたかった、愛していたルナマリアの行く先が不安だった、彼自身を否定したわかり合えたはずの「彼」の行く末を知りたかった。

だが、それはもう渴望されることはなく：飛鳥マコトの中に残る思い出でしかない。もう、シン・アスカの人生は終わってしまったのだ。確かに、前世と今世の繋がりや曖昧で年齢の2倍分精神は歳をとって自覚がある。それでも、マコトの今の居場所は――。

「…うん。もう、あたしは戻らない。戻れない。今あたしが生きてるのはこの「世界」だから」

それは、決別のようなものなかもしれない。終わってしまった昨日にさよならをして、今歩む明日へと向かう。マコトは抱きしめる簪の体温が、愛おしく感じた。それは、簪が先ほど自覚したものとは違う、もっと大きな……この世界そのものに対して感じる、いとおしさのようなもの。

簪はマコトの答えに安心したかのように身を預ける。

「……そっか、よかった…」

二人の内心を知らないものから見れば、まるでそれは愛し合う者同士のように二人はしばらく抱擁を続けた。さっきまでとは違う暖かな雨は二人の体の境界線をぼやかすように温めて、簪は永遠にこの時

が続けばいいのに、と思った。

翌朝、学園には一夏の悲鳴が響いていた。

「う、うわああああっ！」

その悲鳴は一夏とシャルロットの部屋から上がった。事後の取り調べもあり、一睡も出来ていないシャルロットはまだ男装を解かずにはいたが部屋に戻り寝ようとしていたところでの悲鳴で寝ることができない。

「…い、一夏…どうしたの」

「シャルル！俺の！俺の髪の毛が！」

「——あ」

シャルロットは忘れていた。彼女は脱走前に一夏の毛髪を採取していたのである。もうどうせ会わないからとかなり雑に…具体的な箇所を言えば前髪をカットしていた。

「どうしてオカッパになってるんだ!?なんで!?というかこれ、絶対切ったよな!?切ったの誰だよ!」

「あ、あはは」

「ま、まさか、シャルル、お前、じゃないよな」

違うよな、といった表情で一夏はシャルロットに問う。シャルロットは既に今回の騒動の沙汰を受けている。そのため「シャルル・デュノア」は退学処分となるため、シャルロット・デュノアということがバレるのは時間の問題である。

ここが潮時かな、とシャルロットは覚悟を決めた。

「……一夏、話があるんだ」

「え?…なんだよ、急に」

「まず、君の髪を切ったのは僕だ」

「お、おiiii!嘘だろ!?!なんで!?!」

「そして!」

シャルロットは一度、一夏に背を向けて寝巻きの前ボタンを外して巻いていたサラシを取り、そのまま一夏の方へと向き直した。

「私は女の子、です!」

「……へ？」

パジャマで肝心な部分こそ上手く隠れていたが、突然男子だと思っていたルームメイトに生乳を見せられた一夏は初めて異性の体をじっくりと見て、そのまま固まって倒れた。

「え？ちよ、ちよつと一夏？！しつかりして!？」

シャルロットは気がつかない。一週間ですっかり、自身が思っている以上に一夏との距離感が狂っていることに。そのまま白目を向いた一夏が目を覚ますのにしばらく時間がかかり、シャルロットたちは大幅に授業を遅刻することとなった。

衛星兵器の落下というとんでもない事態が起きても学園は通常授業が滞りなく行われ、昼休みを迎えていた。食堂にはシャルロットを含めたいつもの7人で席につき、マコトの隣の簪の隙間はいつもより開いていた。

「…マコト、簪さん、どうしたのですか？」

「え？普通じゃない？」

「……………」

マコトは普通だと言うが、5人は絶対普段通りじゃないだろうと微妙な視線を向ける。簪はマコトに視線を向けられておらず、普段であれば密着に近い状態で座っているのに入学当初並に今は隙間がある。レイラは昨晚のことで喧嘩でもしたのか、と思ったが簪の顔が少し赤いことに気がついて得心がいった。

「なるほど…ついに…」

「レイラ？何かご存知なのですか？」

「いいえ、ただ私のカンが——んむぐつ!？」

気が付けばレイラの口に何故かチャーシューが突っ込まれていた。何が、と全員がこの中で唯一チャーシューの入っているものを食べている簪のほうを見れば、ラーメンから立ち昇る湯気でメガネを曇らせた彼女は妙にスタイリッシュな構え方で箸を持っていた。

「……レイラさん、いいですか？」

「…んぐつ、んつ……な、なんででしょうか」

「私は、何も気にしていませんから、気にしないでください」

「…これ、自分が言われると余計気になりますね」

尋常ではない気迫をレイラは受け流しながら「わかりました」と先ほど言いかけていたことを止めた。なお、彼女が言いかけたのは「もしかして一線超えましたか？」だった。前世におけるシンとルナマリアがある朝明らかにぎこちなさそうな姿を見せていたので、二人の間で何が行われたのか聞けば「そういうこと」だったので、その時の二人と簪が少し重なって見えたからだ。

実際には裸で抱き合う…というスキンシップとしては過剰だが、全く性的なものではなく、簪は意識していたがマコトは全く意識していなかったのである。簪は一晩明け、のたうち回って昨晚の自身の行動を思い返して現在このマコトとの距離感である。

「ま、まあ、お二人はいつも通りですわ。それよりも、問題は…」

セシリアが強引に話題を変えるために一夏の方を向いた。

「で、その髪型がなんですか？一夏さん」

指摘された一夏はため息をつく。昨晚、唯一失われたのは一夏の前髪であった。シャルロットによりおかつぱ頭にされてしまった一夏は髪型を生えてくるまでオールバックにするしかなく、いつもの印象と大きく異なった姿だ。

なお、これは1組の全員に爆笑されており、シャルロットは流石に一夏にデコピンされている。

「いやしかし……ふっ…壊滅的に似合っていないなその頭」

「言うなよ箒…マジで最悪だからさ…」

「ほんとごめんね？一夏」

「いやまあ……しょうがなかったんだろ…シャル」

朝、気絶して目を覚ましてからシャルロットが一連の出来事や性別を偽っていた理由を一夏に説明していたため、大体彼はシャルロットの事情を理解し、髪以外は納得している。友人がそこまで悩んでいたことに気が付かなかったことも一夏は罪悪感があって、デコピンまで恨みは消したが、やはり髪が切られたのはショックであった。

「鈴音とか弾に言ったの？」

「言えるわけないだろ！言ったらあいづらも笑うだろ！」

マコトの問いに一夏はクワツとして応える。マコトは半笑いで「じゃあやめておくね、言うの」と言い、一夏はなんともいえない表情だ。

「つてことは言うつもりだったのか？」

「言わないって選択肢がないかな」

「勘弁してくれ…」

シャルロット以外の全員は鈴音と面識があるため、一夏の髪型を見た彼女が腹を抱えて笑う姿が容易に想像できた。セシリアはこっそり連絡をよく取り合っている鈴音に後で写メでも送ってあげようと思っただ。

「にしても、俺が寝てる間にあんな大変なことがあつたなんて」

「学園の寮は防音対策がしっかりなされているからな。生徒もほとんど昨晚の事態に気がついていないようだ。かくいう私もセシリアとレイラを待っている間、何が起きているか把握していなかった」

この7人中で、唯一昨晚の騒動に関与していないのは一夏と箒である。一夏は髪の毛を切られたが眠っており、箒はセシリアとレイラの帰りを待ち続けていたため、寮から出てもない。一夏はシャルロットの力になれなかったは悔やんでこそいるが、既に終わったことであり、断片的であるがマコトがシャルロットを説得したと聞いて、一夏自身で出来ることは多くなかっただろうと判断する。

結局、斬ることしかできない。一夏は箒と同じ結論に辿り着いていた。

「それで、シャルロット…でいいのか？お前はどうするのだ」

箒が問う。シャルロットはそうだね、と彼女に下された沙汰を明かした。

「シャルル・デュノアは退学処分、入れ替わりでシャルロット・デュノアが入学、かな」

「つまり男装を辞めるだけ、か」

「そうなるね。一週間とはいえ、色々大変だったよ…」

「全然気がつかなかったぞ」

「一夏。それは流石に…」

マコトが一夏の鈍感具合に苦笑するが、それは一夏がシャルロットに悪意を感じなかったかだろうと考えていた。箒も同様に考えており、もしシャルロットが最初から何かしらの害意を持っていけば一夏はすぐに何かを疑い始めていただろう。未熟でも千冬の弟だけあり、一夏は悪意などに鋭かった。

ただ、そんなこと露と知らないシャルロットはかなり無理な変装だったのにも関わらず女性と認識されなかったことに若干悔しさがあつた。今朝のほぼ生乳を見せてしまった事件も彼女は後から考えれば「何で気がつかないの」という気持ちがあつたのかもしれない。「お母様はどうされるのですか?」

「ここに残るってさ」

レイラの問いにシャルロットはそう答え、食堂内のある箇所を指差した。そこには真耶が何故かシエラに可愛がられていた。

「この学園気に入ったから暫く仕事するって。そしたら…ロゼンタさん…私のもう一人のお父さんみたいな人なんだけど、そつちも暫く日本で仕事するって話になって」

「もう一人のお父さんってなんだ?」

「あー、一夏。私の家庭、ちよつと特殊で…父さんは母さんが好きで私を母さんが生んだけど、ロゼンタさんも母さん好きで、けど父さんとロゼンタさんが公的には夫婦ってことになってるんだ」

「言ってることがよくわからないんだけど」

一夏のポカンとした表情に「だよね!」とシャルロットは言った。マコトもいまいち理解が追いつかなかつたが、セシリアは唯一話についていけた。

「失礼でなければ整理しますと、書類上は本妻がロゼンタという方で、実際は2父1妻ということでしょうか」

「そうなるね」

女尊男卑社会となったことで女性同士での結婚というのはよく見られることになり、セシリアも貴族の付き合いとしてそういった結婚式に出席したことがある。レイラもセシリアに同行していたため、彼



女の説明でシャルロットの家庭環境を完全に理解した。

「(……つまり、私とマコトさんが付き合っても何もおかしくない？)」

簪は今の話を聞いて、妄想を頭の中で繰り広げていた。昨晚のことは一先ず置いておくにして、ついにマコトへの好意を自覚した簪はいきなり飛躍して結婚まで想像してしまう。恋愛経験の少なさ故の反応であった。

「日本でも現代ではなかなかないが、歴史を見れば一夫多妻は珍しくない。逆も何もおかしくないだろうな」

「そういうもんか」

シャルロットを除く6人は特に拒否反応を示すことなく当たり前のことのように彼女の家族構成を理解した。シャルロットはそのことに驚きながらも、安堵した。

「(ああ、やっぱり……この子たちは暖かいや)」

デュノア、ルーセル。2つの姓を持つシャルロットがこれまで名乗ってきたのは母方のルーセルだった。正確にはアルベール、ロゼンタ、シエラ、シャルロットの4人でデュノア家なのだが、特殊な家族構成を変に取られないようアルベールが断腸の思いで決めたことであつた。

しかし、祖国から遠く離れたこの東の果ての国で、シャルロットはデュノアと名乗り、それは受け入れられた。初めて、家族を認められたような気がして彼女は嬉しかった。

どこか、別の世界では孤独で、寂しくて、拠り所もないはずだったシャルロットという少女はこの世界では、ちよつと特殊な家族構成である以外はどこにでもいる十代の少女にしか過ぎず……家族であることを堂々と宣言する、そんな当たり前がようやく出来たことが最大の今の喜びだった。

「みんな、その、改めてよろしく！」

シャルロットの笑顔が輝く。それを遠くの席からシエラが優しい微笑みで見守っていた。

翌日、正式にシャルル・デュノアは退学処分が行われ、シャルロット・デュノアが入れ替わりで入学する。1組にはそのまま所属することとなったが、クラスの誰しもがシャルロットに詳しいことは聞かず、改めて彼女はこの学園でのスタートを切ることになる。

「こちらにいましたか、本音さん」

「…っ」

シャルロットが1組に戻った当日の放課後、学園の屋上にはいつもの明るい表情などなく暗い空気を纏った本音がフェンスを掴んでいた。そんな彼女に背後から声をかけたのはレイラだった。珍しく彼女は単独行動を行っていた。

レイラの突然の登場に、本音はぎこちなく振り向く。その表情は明らかにレイラを恐れていた。

「……レイラ、様……」

「おやめください……いつも通り、レイレイ、で構いません」

綺麗な所作でレイラは本音に歩み寄り、フェンスに背を預ける。金糸のような髪が風に揺られ、夕焼けが反射して美しく煌めく。本音は思わず見惚れてしまう。本当の、お姫様。本音の役目もありそれはよく知っているが、目の前にして本音は思い知らされた。

たとえば、もうそうでなくても生まれ持ったものは何一つ彼女から失われていない。

「一昨日は色々ありましたね」

「……ごめんなさい」

「謝る必要はありません。…人には役目というものがあります。あなたは、あなたの為すべきことをした…それだけでしょう?」

優しげな目を向けながらレイラは本音にそう言った。役目、為すべきこと。本音にとってそれは更識家の使用人として、当主の手足として任務を遂行すること。道具として、機械として……それが布仏家に生まれたものとしての宿命。

だがそれ以前に、本音は本音でしかなく、シャルロットの悲鳴が、マコトの裏切られたかのような表情が、レイラの心を押し潰されそうに

なるほどの怒りが、頭から離れない。

「どうしよう、私、ひどいことをしちゃった……しやるりんにも……まこりんにも……レイレイラや、かんちゃん……私、私……」

「終わったことです」

「けど……わぶっ!?!」

押し潰されそうになる本音にレイラは突如として彼女の頬を両手で挟んだ。息を飲むような愛らしい顔が本音の前にあった。

「あら、とても綺麗な肌……そしてこの柔らかさ。どうしたらこんな風になっ？」

「ふにゆ、や、やめてよお」

「ふふ、ごめんあそばせ。本音さん」

くすくすと、からかうように笑いながらレイラは本音から離れる。ぶーつと本音は口を尖らせたが、レイラは「それですよ」と笑いながら言った。

「あなたにあんな暗い顔は似合いません。あなたが暗いと、1組全体が沈んでしまうじゃありませんか」

「——え」

「私たちは戦争をしているわけじゃないんです。だから、事が終わればいつも通り。それでいいじゃないですか」

レイラは本音に言い切る。殺し殺され、そうして敵であるもの全てを滅ぼして、そんな終わりなき連鎖はこの世界には持ち込みたくない。レイラは思った。本音とは友人で、クラスメイト。彼女は敵ではないのだ。

「結果論ですが、あの夜失われたものはありませんでした……ああいえ、正確に言えば一夏さんの前髪はなくなりましたが」

「ぶっ……」

「まあ、気にすることはないでしょう。……たとえば、あなたの手が血で染まっていたことがあったとしても、今のあなたは私とクラスメイトで友人の本音さん。そうでしょう?」

シャルロットにセシリアがそうしたように、レイラは本音に手を差し出す。

「この国では、喧嘩をしたら夕陽の下で仲直りをするのが決まりだそうですね。ですから、仲直りしましょう。本音さん」

「レイレイ…」

「ダメでしょうか」

少し眉根を下げて言うレイラに、本音は降参だ、と思ってレイラの手をとった。しなやかな彼女の手は本音にはあまりにも遠く感じられた。

「これで、仲直りですよ」

「…そうだね！」

笑顔を交わし、二人は手を離す。そのまま、フェンスに背を預ける。

「せっかくですし、ここでもう少しお話していきましようか」

「うん！レイレイと二人きりって初めてだね」

「確かに言われてみれば…でしたら、たまには普段しないお話でもしましようか」

「え？どんなこと？」

「たとえばそう…恋バナなんて、どうでしょうか？」

嵐は過ぎ去り、雲ひとつない空は夕焼けからゆっくりと星空に変わっていく。少女たちの園に、今再び束の間の平穏と日常が戻るのがあった。

「あれ？れーちゃん？一人なんて珍しいね」

「レイラ様、いらつしやいます。お茶をお出ししましょうか？」

「博士、クロエ先輩、突然失礼します。申し訳なのですが、急ぎ調べて頂きたいことがあります」

「おう、れーちゃんからの初依頼だね！サービスしちゃうよ！」

「でしたらお言葉に甘えて…私のダイヴトウ・ブルーに搭載されている改良型BTシステム、これを徹底的に調べてください」

「…ああ、なるほど。それなら喜んで調べてあげるよ——れーちゃん」

悪意は未だ、潜み少女たちに巢食う。深い青に、二つの彗星に……  
そして、黒い兎の中に。  
可能性の宇宙は、未だ遠い。

## # p h a s e — E X 2 「ネスト」

「冗談じゃねえ！」

IS 学園の警備員、アキは悪態をつきながら纏っている IS：学園の警備用に配備されているフリカアトラのスラスターユニットを全開稼働させ、強引にその場から退避した。彼女がいた場所を真っ赤なビームが通り過ぎていく。

「クソツタレがあー！」

フリカアトラの標準装備である専用ライフル「イングラム オートカノン」を連射し、彼女は迫り来る黒い機影を迎撃するが、牽制にもならない。黒い機影は背に光の翼を生やしながら、分身しつつ突っ込んでくる。

その手には真っ黒な「雪片」に似た装備が握られていた。

「データでこれかよっ！」

接近され、振り下ろされる迷いのない太刀筋。アキは咄嗟に前部スラスターユニット二機に搭載されているミサイルベイから自爆覚悟でミサイルを発射したが、相手は全く意に介さずアキを爆炎ごと切り裂く。

シールドエネルギーは一気に5割以上が削られ、振られた一太刀が致死レベルのものであると理解させられる。

直撃を受け大きく飛ばされたアキは姿勢制御をするも、既に敵機は直撃として、一気に4つの「ビーム・ブーメラン」を投擲していた。回避など出来るはずがなく直撃を受け、シールドエネルギーは4割を切る。

「動け！動け！やられちまう！」

フリカアトラの持つスラスター全てをマニュアルコントロールするという離れ技で完全に体勢を崩しているにも関わらず更に飛んでくるビーム・ライフルの射撃を回避し、ハイパーセンサー越しに敵機へとオートカノンで反撃を行う。

命中。しかし、当然シールドに余裕のある相手はこの程度のダメージでは全く痛くも痒くもない。

「隙が無エー！近距離はブレードとブーメラン兼サーベル、中距離はわけわからん分身と機動力で射撃戦、加えて遠距離はあのビーム砲：！」

アキは目の前の敵機を睨む。彼女の前にいるのはマコトがつい先日使用したばかりの黒騎士で、搭乗しているのは「マコト」の姿を模したホログラムだ。今、アキが戦っているのは黒騎士が読み取ったマコトの「記憶」に残る戦闘データから再現された「デステイニー」に近い形態を取る黒騎士のシミュレーションデータで、アキは追い詰められていた。

「畜生！あのガキの戦闘データなんだろう!?なんだよコイツ：滅茶苦茶強いぞ！」

恋人の「定期検診」に付き添いで来てみれば「主治医」から頼まれいきなりシミュレーター戦をさせられることになり、相手はアキ自身味見をしていたかと思つた黒髪に赤目の少女のデータとなれば彼女は当然乗り気で戦いを始めた。

しかし、その結果はアキ自身が追い詰められるという信じられない状況だ。ちよつとセンスがあるから、などという次元ではない。アキが相對する「飛鳥マコト」はもはや素人という次元を超えている。

多彩な装備を迷うことなく使用する判断力。流れるような攻撃動作。こいつはプロだ、とアキはあまりに異質すぎる飛鳥マコトの幻にもはや恐怖さえ抱く。

「15、6のしていい動きじゃねえ……こいつ、どんだけ修羅場くぐってるんだよ！」

瞬時加速を連続で行い、単機での包囲射撃というアキの超絶技巧でさえマコトの「記憶」はしのぎ切つてみせた。これはシン・アスカという兵士が常に多勢に無勢の状況で戦闘を行うことが多かったからだ。

黒騎士でも未だ全力戦闘をおこなっていないため、マコト自身もどこまで今世の自身が戦えるのかはわかっていないが、その答えが今アキの目の前にいるデータそのものだ。再現されたマコトの身体データと、生まれたばかりで愚直で純粋な黒騎士のコアが彼女の「記憶」

見て再現してあげたいと、なんとかシミュレーター上で再現した武装類。それを黒騎士が考える『最高値』演算させたのが今の、黒騎士の戦闘力だ。

「おい博士！本当にあのガキンチョ…飛鳥マコトとかいうのは俺たちと同じ世界じゃないのか!？」

『そうだよ。まーちゃんはどこにでもいる女子高生だよ。ちよつとセンスがあるだけの』

「嘘つけ…こんな女子高生がいてたまるか！」

東は何も嘘は言っていない。ただ、前世のタツパがあるだけ。モニターしている東は今のマコトではここまでの動きは『肉体』がついていかないと見ている。黒騎士が現在シミュレートしているのは最高値で、それはマコトがかつて持っていた『種』が弾けた状態をベースとしている。

東は『種』のことをマコトから聞いていなかったため、これが彼女の全盛期の動きなのだろうとしか思わなかったが。

「現実だったら幾ら命があつても足りねえよ！千冬並だぞこいつの動き！」

『みたいだねえ。いやあ、まーちゃんもこつち側だったかあ』

「超人が3人…考えたくねえよ！」

黒騎士が動き出す。黒雪片を正面に構え、光の翼を展開するとそのまま雪片を担いで一気に加速してくる。オートカノンでの迎撃を行うが、アキの視界に映るロックオンマークは『追いつかない』。

「ISの管制システムだぞ?!付いていけねえなんてありえない！」

もはや主導照準で、とアキはしようとしたがもう遅い。黒騎士は今度こそ、アキのことを脳天から一刀両断していた。

「はい、フリカアトラ大破。操縦者死亡。状況終了」

アキの撃墜がモニターに大きく表示され、スコールは遠い昔のCP将校だった頃の記憶を思い出しながらそう言った。アキはVRユニットを頭から外し、座っていた椅子から勢いよく立ち上がり、データを確認している東に詰め寄った。



「話が違うぞー！ただの記憶データじゃないのかよ！」

「だから記憶データだって」

このシミュレーターの目的は束が黒騎士のチェックを行なっていた際にコアが吸い上げていたマコトの戦闘記憶を発見し、どういった動きをしていたのか確認するためだった。コアはISがイメージ操作である以上、初回起動時にその人物がどういった思考をしこれまで体を動かしたり、何かを操縦していたのかを記録する。量産機の場合はこれが毎回行われるため、即時起動時に展開速度が専用機と違い2〜3秒のタイムラグを持つ。

この機能は白騎士の時点から搭載されているため、当然黒騎士にも存在していた。そのため、束は気になっていた前世のマコトの戦い方を見たくて、確認という名目でシミュレーターをアキに使わせたのだ。

「…まあ、アキの言う通り、素人の動きじゃないわね……ISをいいえ、人型の機動兵器を扱うのに慣れた軍人の動きよ。あまりに凄すぎて、こうやって落ち着いてみないとわからないけど」

スコールはリプレイを見ながら、目を細める。飛鳥マコトの存在はあまりに異質に見えた。篠ノ之束の幼馴染みと言ってしまえばそれまでだか。

「これで一般人だって言うんだから自信を失うぜ……」

「ごめんね、強くなってさあ」

「絶妙にウゼエ」

全く悪びれた様子もなく束は言っ、データの処理を横でずっと観測していたクロエに丸投げして、スコールたちの座っているテーブルに着く。

「さすが、博士の思い人ってところかしら」

「当たり前だよ。まーちゃんは私の好きな人だからね」

「おーおー、恋は盲目ってか」

マコトが好きなことを一切否定しない束に、アキは茶化しながらクロエに入れてもらった紅茶を飲む。スコールも彼女に合わせて飲み「美味しいわ」とクロエのことを褒める。

「…で、検診の結果は？」

「あと10年は一先ずいけんじやないかな」

「あら、そうなの。もう2〜3年って思ってたけど」

「勿論、何もしなければ」って前提ね。今みたいにただの人間として生きるのならまだしも「力」を行使したり、ISで動き回れば1年と保たないよ」

「…そんな状態なのか、スコールの身体は」

「そもそも、そんな「生きてるのか死んでるのかわからない」状態で当たり前のように生理反応もあつて、色んな欲求もあるのおかしいからね？人体の神秘だよ」

東の目の前に座るスコールという絶世の美女はまさに東から見ても面白い存在だった。身体の半分近くを「機械に置換」し、その姿さえも本来のものではない。「見える」ものは彼女が継ぎ接ぎのゾンビとさえ思えるような状態だ。

だというのにスコールには食欲も性欲も睡眠欲も、健康な人体と変わりなくあり、加えて東でも証明できない実家の「霊地」のようなスコールの「力」が東をスコールの主治医にさせていた。

「あなたでもオカルトは信じるのね」

「いや、実家の土地で既に科学的には敗北してるからねえ。不条理な力つていうのは信じてるよ」

東は実家の土地がおかしいことはわかっていてあらゆる方法で調べたが科学的にはなにも証明できず、結局現在に至っている。伝承に關しては一子相伝で父しか知らない上、東に当主をまだ譲っていないためわからずじまいである。聞きに行こうにもその覚悟が東にはまだない。

「ただ、証明できるものはなんでも証明しないとね。…で、あれの製造元はわかった？」

「十中八九「ネスト」の連中ね。もつとも、ただの残党でしようけど」スコールが呆れたように答えて、東はそうか、と頷く。

「組織が残ってた時のあいつらなら、脳髓をちゃんと生前のままにして、人間と同じ思考をさせていたわ。この前のはただの真似に近い

わ

「気味悪いがあいつらの技術はマジだったからな。千冬も苦戦したただろ、最後のドイツの施設潰した時」

「……あの化けもんね」

東は思い返す。目の前の女性二人を倒し、千冬と最後に飛び込んだこの世界の悪意の巢。その最奥で控えていた“少女”。最強の肉体と、最強の頭脳と、最強の意志。“彼ら”が考えうる限りの“人類の可能性”の果てを注ぎ込んだキメラ。

つい最近現れたサイレント・ゼフィルスなど生温い。東が絶対に認められず、唯一“我が子”を殺した戦い。

「……くーちゃんみたいなのに、不安定な肉体を安定させるためにコアを使うのは私自身がやってたから文句はない。でも、アレはそんな次元じゃなかったからね」

「I S人間。この前の人形はその眷属ね」

人が人のまま、無限の可能性へと羽ばたくために生み出されたインフィニット・ストラトス。東の持つ“人類の可能性は無限大だ”という思想と真つ向から戦いを挑んできた、人の殻を捨ててでも“人類の可能性を無限大に”と証明しようとしてきた“彼ら”。

その決着は、今彼女らがここにいることが全てを物語っている。

「肉体があるから…やれるのよ。人間はなんでもね」

スコールはおぞましいソレを思い返し、呟く。そんな技術の末裔がこのI S学園に姿を現した。東は故に、スコールに調査を依頼し、製造元を確認させていた。

「どこで作られたかはわからないけれど、人形の造りはネストの連中とよく似ていたわ」

「とつとと潰したいけど場所わからないんでしょ」

「ええ。サイレント・ゼフィルスにフライトプランは残ってなかったんでしょ？だから無理ね」

肝心の脳も焼き切れちゃってるものね、とスコールはお手上げと言わんばかりに両手を上げた。東は人形の調査に関してはここまでだろうと判断する。脳の身元も探しはしたが20代前半の女性の脳で

あることしかわからず、DNAなども世界中のデータを探したが誰にも合致しなかった。既に消されている可能性が高い。

「残念だけど、しょうがない。じゃあ別件になるんだけど、BTシステムって知ってる？」

「ん？ああ、確かイギリスの連中が開発したやつだろ？ネットの記事に載ってたな」

「無線、脳波制御であそこまでの微細な動きをできるのは見事ね」

アキもスコールもどんな過去がであろうと現在は所詮高校の警備員でしかなく、世間に対してはその程度だった。特にスコールは世捨て人に近い。安静に過ごさなくてはいけないということもあるが。

だから、イギリスのティアーズシリーズに関しても今となっては大したことは知らない。ネットでの知識がせいぜいだ。

「で、そのBTシステムなんだけど、この前、まーちゃんの友達のれーちゃんが調べて欲しいって専用機を今貸してくれてるんだ」

「誰だ？」

「ん、あなたたちにはプリンセス・レイラ、って言った方がいいかな」  
「……！あの子、この学園にいるのね」

スコールがレイラの名を聞き驚く。ニアミスした幻の姫君、ついでに対峙することはなかったが、年齢にそぐわない推理力とカンの良さで裏社会ではそれなりに名の知れた要注意人物だ。

「おい、そいつって確か……」

「ええ……『オルコット家』襲撃事件の犯人を捕まえた張本人よ」

「セシリアちゃん？」

「博士は彼女も知っているのね。そうよ、衛星砲エクスカリバーの初号機奪取を目論んだ連中がオルコット家を襲撃した事件……当時の当主と夫人は列車ごと爆殺され、使用人たちも次々に殺された。……特にある使用人の妹にされた仕打ちは凄惨で——」

「あー、やめて。そういうの、聞きたくない」

スコールが語り出したことを束は遮る。止められなかった過去を聞かされても束はタイムスリップができるわけではないため、ただただ胸糞が悪いだけだ。スコールは「そう？そこからの逆転劇がすごい

のに」と悪人らしく笑っていた。

「とまあ、イギリスではあまりに酷すぎて衛星砲の件が伏せられても現代稀に見る一家殺人事件よ。それを解決したのが当時、まだ王家から外れていなかったタリア・デュランダルの娘、レイラ・デュランダ。まさに頭脳は大人、体は子供って感じで、一部ではリトル・シャーロックなんて呼ばれてもいるわね」

「へえ。興味なかったから知らなかった」

「あらそう……レイラ・デュランダルはセシリア・オルコットと幼馴染みで、親友同士。当然、両家の付き合いは良好で、事件時は憤怒していたそうよ。その怒りを力にしてレイラ・デュランダルは犯人たちを突き止め、父と母が持つ権力を利用して捕まえた。彼女がああ年でイギリスの諜報機関にいるのと、好き勝手できるのはそのせいね。元々の身分とかもあるでしょうけど」

裏社会に在る者として仮想敵の設定は事欠かない。スコールからすれば目の前の束もそうであったし、レイラも同じだ。だから、一切の過小も過大もせずスコールは人を評価する。

「ああ、それで話が逸れてしまったわね。そのプリンセスが自国に黙ってインフィニット・ストラトスの最高権威であるあなたに相談をしてきたと」

「そうだね。まあ、私もちよつと調べたかったし丁度よかつたんだよね」

束はそう言いつつ、空間投影ディスプレイを展開し、二人にあるデータを見せる。そのデータとはつい先日のシャルロット追撃戦後の九尾ノ魂との戦いで観測されたBTシステムの異常値だった。

「このグラフがれーちゃんの脳波をシステムが受信した量の推移ね」

「安定しているわね。冷静な彼女らしいわ。ただ……ここで急激に上昇してグラフから振り切っちゃってるわね」

「そう。このタイミングでれーちゃんの脳波システムの許容限界を超えたんだ。そのときに、不可思議な現象が起きてさ」

束は念のため、当時レイラと戦闘をしていたマコトからも状況を確認していた。本音というクラスメイトに対して、レイラが怒り、まる

で本音の心を言葉で完全に操るかのような動きを見せていたこと。その場の重力が増したような感覚があったこと。

「なんか相手の心を操ったり、その場の重力が増したんだって」

「フォースでも使ってるのか？」

アキはあまりに非現実的なことにそんなことを言うが、東が次のデータを出した瞬間言葉を失った。

「それで、本当にそうなのか黒騎士とダイヴトウ・ブルーのログを見たら——ここ、機体の推力システムが脳波の受信量増加に比例して出力を上げてる形跡があったの」

「……つまり、まさか怒りのあまり、その場の“重力”を支配したってこと？」

場が重くなる、と言う言葉があるが示されたデータは本当にレイラがそれをしたということしか述べていない。東は「信じられないけど、そうだよ」とスコールに頷く。

「で、それがどうBTなんちゃらと関係あるんだ」

「結論から言うと、れーちゃんのBTシステムは改良型：低いBT適正の人でもシステム扱えるように脳波の増幅装置が組み立てたの」

「画期的ね。確かにそれがあれば量産最大の壁である搭乗者の選出が不要になるわ」

「東さんも、まあそうなるよね、ってそこは納得したけど問題はこの増幅システムの造りだよ」

モニターに新たに表示されたのはダイヴトウ・ブルーに搭載されているBTシステムのハードだった。基幹システムを内蔵したそれはBTシステムの正式名称である“ブルー・ティアーズシステム”の名に違わない涙型の箱をしている。

「見た目は独特だけど、何かおかしいところか？」

「……中身の回路周り、見覚えない？」

ハードが分解され、中身の画像が展開される。それらを眺めたスコールは徐々に冷や汗を吹き出す。

「おい、スコール。なんだよ、どうしたんだよ」

「……冗談がすぎるわよ」

「冗談じゃないんだよねこれが」

「なら、あの襲撃は」

「マッチポンプ、ってことになるね」

スコールが動揺するのも無理はない。レイラのBTシステムの回路の構成が、スコールも調査した“人形”の脳波を拾うための装置と全く同じものだったからだ。人形の場合は微弱な脳波を拾うために増幅する必要があった。目的は違うが使った手段は同じ。だからだといって、ここまで配線から何まで全て一緒というのはあまりに不自然すぎる。

「欧州：まだあるのね“巢”が」

「そうみたいだね……何度つぶしても虫みたいに湧きやがって……ちーちやんがまたキレるぞ」

倒したはずの相手が生きていた。東は怒りしかわかない。親友と共に、箒や一夏、マコト。そして故郷の人々のために影で戦い続けたあの日々はなんだったのか。全てを否定されたような気分だ。

「…ロゼンタ、彼女は確か日本にくるのでしよう?」

「らしいな」

「誰それ?」

「この学園の保護者様、といったところかしら」

名義だけとはいえ警備員のスコールも完全な隠遁状態は嫌なのかアキの手伝いとして書類整理はしており、来訪予定者のリストに彼女は懐かしい人物の名前を見つけていた。欧州に唯一残る、スコールたちの派閥の人物だ。

「まあ、あれだ。あたしらに付き合い切れなくって抜けたやつだよ。今は大企業の社長夫人さ」

「で?そのロゼなんとかさんが何?」

「欧州での情勢を彼女づてに探ってもらいましょう。博士も調べものは得意だけれど、諜報は苦手でしょう?」

「する必要がないからね」

「だから、専門家にそういうのは任せましょう。軍でもそうでしょ? 適材適所」

人差し指を立てて、まるで教鞭を振るうかのようにスクールは言う。彼女の癖だった。

「スクール、素が出てんぞ」

「ごめんなさい。年下の子にこう言っているとついつい、昔を思い出してしまいわ」

「あんたが先生はちよつと束さんやだね」

ストレートにそう言ってくる束をスクールはスルーして、席から立つ。もうこれ以上の話は不要だろう。

「そろそろお暇するわね。博士」

「行くか」

「ええ。検診、ありがとうございました。次はいつくれば？」

「2ヶ月後」

「わかりました。では」

二人が研究所を去っていく。出て行ったところを確認すると、束は大きいため息を吐いた。

「はあああつ、あいつら、ほんつと苦手」

「…お疲れ様です、束様」

クロエがサツと紅茶のおかわりを注ぐ。

「くーちゃんありがと。ちーちゃんの頼みがなかったらぜってーみないよ、あんな人」

「敵だった…のですよね」

「そ。束さんも何度か戦ったよ。よわっちいのに何度も出てくるから、最後はあの金色ババアは体半分消し済みにしたのにまだ生きてるし」

「執念、でしょうか。そこまで生きるのは」

「そうなんじゃない？知らないけど。束さんはあんな風にしがみつかず好きな人と一緒に逝きたいけどね」

束からすればスクールの行き方など、どうでもいいことだ。人それぞれに向かうべき場所があり、少なくともあの二人と束は違う場所に歩んでいる。だから、その結末など知ったことではないのだ。

「……ただ、このままですと束様」



「うう、そうなんだよ、このままだとまーちゃんとられちゃうよ」  
BTシステムの分析依頼ついでにレイラとお茶をした際、マコトのルームメイトが確実にマコトを好きになり、更に何らかの肉体的な接触を伴った触れ合いがあった可能性があると束は教えられたのである。気が気ではなかった。

「ですが、束様、躊躇されていらっしやるように見えますが」

クロエが主人の心を正直に言い当てれば束は食卓に沈んだ。

「うう…だって、約10歳差だよ？いっくんとちーちゃんだよ？まーちゃん年上がタイプって感じじゃなさそうだし」

「どうでしょうか…私は恋愛経験がないのでなんとも」

「くっ、このままだとヒロインとしてフェードアウトしてしまう…何か手を考えないと……」

天才、とまで言われた篠ノ之束の目下の悩みはなんとも小市民的なもので、先ほどまでの物々しい空気はとっくに雲散していた。クロエは悩む母親のような存在を前に微笑みを浮かべながら、傍に控えるのであった。

## # p h a s e | 2 1 「妹（仮）転入」

——イギリス、デュランダル家。麗しきリトル・ホームズ、幻のプリンセスと呼ばれるレイラ・デュランダルの生家は郊外にあり、一期はレイラの姿を見ようという観光客やマスコミが溢れたこともあったが、今は誰も訪れることもなくのどかな空気が漂っていた。

朝靄が漂う中、庭に置かれたロッキングチェアに腰かけ、新聞を読みながらモーニングティーを味わう男性がいた。長身で、スラリとし肩より下まで伸びる黒髪は癖がありながらも艶があり汚らしさなど一切感じさせない。加齢など知らないと言わんばかりの顔は若々しさを保っており、「娘」に負けない美貌も兼ね備えている。

彼の名はギルバート・デュランダル。レイラ・デュランダルの父であり、この世界においてはデュランダル家の長男として家を継ぎ、政治家として活躍している。レイラやマコトのように別世界の自身など知らない、「この世界」のギルバートである。

「……タリア、レイラは二ホンで上手くやっているのかな？」

「ええ、問題はないそうです」

娘の状況を問いかけ、それに答えたのはギルバートの妻でありレイラの母であるタリア・デュランダルであった。軍人として、現在はイギリス初となるIS部隊の指揮官を任せられている彼女であるが、IS部隊はいわゆる「儀仗部隊」の性質が強く、ある種閑職に回されたとも見える。

故に、こうして自宅に戻りゆつくりと朝を過ごすことができた。タリアからすれば与えられた役割をこなすのが兵士であり、現状に不満はあれど致し方がなかった。

そんな妻の現状はギルバートもわかりつつ、話題に出すのはたった一人の娘のことだ。

「なんでも、現地でそれなりの友人ができたみたいよ」

「それはよかった。こちらだと、なかなかね」

「仕方がないでしょう。レイラがどれだけ両腕を広げても、そこに飛び込んでくれる人はセシリアぐらいしかいないのですから」

「立場、というのは難しいものだ。名を捨ててもついて回ってくる」  
「だから、あなたはIS学園に行かせたのでしよう?」  
「そうとも。現に、友達も出来た。心の豊かさを育てるには大切なことだ」

ギルバートが知るレイラは何かとクールな印象が強かった。セシリアに対しては年相応な少女としての姿を見せていたが、ギルバートには畏った態度で小さい頃から接してきており、ギルバートはそうされる度にレイラのことを甘やかして来たが娘の態度は変わらずだった。

実際のところはレイラの前世の記憶や、単純にレイラを甘やかそうとするギルバートがウザいという十二分に年頃の少女らしい反応をしていたのだが、ギルバートはそのあたりの察しが悪かった。

そのため、ギルバートは男性操縦者の出現にこれ幸いと、諜報機関にいる友人にそれとなくレイラの日本行きをお願いし、レイラはIS学園に向かったのだ。彼女にセシリア以外の友人を増やさせるために。このあたりはレイラも知らなかったため、タリアはレイラが知ったら向こう1週間ぐらいはギルバートに口を聞かないだろう、と思っている。

「(……愛しさあまつてついつい先走ってしまうのが彼の悪い癖ね)」

タリアは大物ぶって優雅に新聞を読みながら紅茶を口にするギルバートに仕方がない人だ、と嘆息する。

「それで、本気なの?」

「何がかね」

「保護者見学ツアーよ」

タリアが懐から取り出したのは一枚の招待状だった。差出人はIS学園で、内容は保護者向けの学校内見学ツアーだった。日本以外の国から来ている子供たちの親に校内を案内し、安心してもらおう、というのが目的で毎年それなりの人数が参加している。

ギルバートは娘会いたさにそれに参加しようというのだ。

「本気も何も、レイラの父だぞ私は。行く行かない、という問題ではない」

「仕事はどうするのです」

「長期で離れるわけでもないし、問題あるまい」

「……秘書がまた倒れるわよ」

「まさか、そんなことはないさ。それに件の5号機落下の件もある。

現地調査は必須さ」

「あなたが行かなくてもいいでしょう」

「現場を知らなくては物を言えんさ」

ああ言えばこう言う。口がよく回るな、とタリアは夫がどうしてもレイラに会いたいのだと察してため息をついた。

「はあ……わかりました。ただ、あんまりしつこくすると、レイラに嫌われますよ」

「わかっているさ。ところで、せっかくだからレイラにこちらのお菓子を持っていこうと思うのだが、いいものはないかな」

「……調査に行くのでしょうか?」

「現地調査員への労いさ」

「チエルシーの作ったお菓子はあの子も好きです」

「了解した。では、オルコツト家に電話をしておこう。そういえばこれから日本はこれから暑くなっていくのだったな、何か夏向けのものも」

「まだ早すぎますよ」

夏ならアロハシャツでも着て旅行気分で行きかねないような浮かれようにタリアは空を見上げるしかなかった。真面目くさった顔と口調で言っているが中身は娘に早く会いたくしようがない親バカ中年である。これが政治家らしくポーズでもなく、本気で娘を溺愛しているのがいいようでタチが悪い。愛していないよりはマシだが……とタリアは思うがそのうちレイラにビンタでもされたら彼は世界を滅ぼしてしまうのではないかという気がしてくる。

「ギル、くれぐれもレイラに恥をかかせるような行動は謹んでちょうだい」

「はははっ、タリア。私に恥ずかしいところなんてないよ」

「顔がいいのはわかっています、見た目だけではどうにもならない

「こともあります」

「……それはいささか、辛辣すぎないかね」

「事実よ」

いい笑顔を浮かべて言うタリアにギルバートは苦笑いするしかなく、咳払いして話を仕切り直す。

「まあ、気をつけておこう。それはともかく、フランスの件、結局首謀者はわからなかったよ」

「例のデュノアの娘に指示を飛ばしていたのも？」

「ああ。向こうの政府や軍内にも疑わしいものはいなかったそうだ」

「ありえないわね」

「ありえないさ。しかし、結局のところ、人というのは確証がなければそれまでさ。今回は向こうのほうが一枚上手だった」

「初号機は『彼女』が預かっている起動キーとセシリアの認証がなければ動かせない……となれば、残りの2と4号機はすぐに抑えるべきね」

「ドイツに関しては一時的にこちらのガーディアンに入れて欲しいと依頼が来た。制御が奪われどこかに落とされた、なんてことになれば責任を負うのはドイツだからね」

「賢明なこと。国民にイギリスからの超兵器を譲り受けて、それが自国で制御に失敗したとなればわかるけど。残りは？」

「返答はまだないよ。そのあたりは待つしかない」

ギルバートは頭の中にチェス盤を浮かべながら、この世界の今の情勢を考える。状況としては膠着状態だろう。しかし、相手がどんな手を指してくるのかは見当がつかない。以前の敵のように明確な『利益』が相手側にあって、ある程度は手が読めた時とは違う。

「戦争では相手を滅ぼすつもりならそれこそ根絶やしにしなければならぬ。出来なければ終わりのないゲリラ戦、テロが続く。それが無理ならば『頭』は残して和平しか選択肢はない。……世界最強と天才はそれができなかった」

「……『彼女』たちは当時十代の子供でしょう。それこそ、どんなに優れた力と頭脳を持っていても……非情さまでは知らなかった」

「わかっているとも。だから我々大人が尻拭いをしなければならぬ。だからこそ、私は現場に行かなくてはならないのだよ」

捨てられない現場主義。ギルバートはもうそれはいい行為とは言えないとわかりながらも続けている。

「それに、年端もいかない娘を戦場に立たせて、後ろで剣も持たない親など私は耐えられない。時代を作る若者たちの道を整えるためにも、我々大人は率先して泥道を歩まなくてはいけない」

「立派な志ね」

「ありがとう。だが、君もそうだろうか？タリア」

「さあ、どうかしら」

誤魔化すように微笑みを浮かべるタリアにギルバートも笑みを溢す。

「フツ……では早速荷造りだ。できれば君とも行きたかったがね」

「私は結構。週に1度は必ずテレビ電話をしているから」

「……なん、だと」

タリアが席を立つ。彼女はテーブルの上に載せていた軍帽を被る。ギルバートは出勤しようとする妻に待ったをかける。

「どういうことかね？タリア。レイラとはそんなに電話をしているのかい」

「ええ。今日何があった、とか、友達がこうだったとか。昨日もしたけれど、楽しそうに笑っていたわよ」

「馬鹿な……私には一度もかけてこないぞ。それどころか手紙も」

「年頃の娘よ。そういうこともあるわ」

「そんな……」

絶望に震えるギルバートを尻目にタリアはそのまま家を出ていく。タリアとレイラの仲はかなり良好だった。イギリスで飲んでいたお茶がほしいと、レイラからねだられたりして送っているのもタリアである。

いい加減娘離れしてほしいものだ、とタリアは思いながら脱力しているギルバートに苦笑いするのだった。

「ッ！」

「どうしたのレイラ？」

「いいえ、悪寒が」

「寒いのか？ ジャージ貸すね」

「ありがとう」

朝のランニングを終え、クールダウンのため歩いていたレイラは突如感じた悪寒に身を震わせ、心配したマコトが彼女の肩に着ていたジャージを被せた。普段は一夏、箒と朝のトレーニングを行なっているマコトだったが、今日に限ってはレイラとやっている。

レイラとマコトの組み合わせは校内でも比較的目的につきやすく、通り過ぎる他の生徒たちも二人をチラ見していた。

「にしても、レイラはよく見られるね。もしかしてさっきのどこかから見られたんじゃない？」

「いいえ、違うと思いますが……それを言えば、マコトだってわりと視線を向けられていますよ」

「あたしが？ ないない」

ありえないよ、とマコトは手を横に振って言うがレイラは自身の容姿の良さに無自覚な親友にため息をつきそうになる。艶やかさをしっかりと保った黒髪を肩までの長さで切りそろえ、赤い瞳はくりっつとしていて、顔つきは可愛らしく、スタイルもバランスが取れている。箒のようにあからさまなファンこそいないが、一夏が来るまで女子校だったIS学園では女性同士のカップルがわりと一般的で、マコトに早くも憧れを持っている生徒がいる。

どこからか漏れたサイレント・ゼファイルス戦の話が尾鰭をつけて噂になっており、王子様のように女の子を守ったなど、明るいマコトの気質に合わせて人気があるらしい。

噂を探るのが得意なレイラは親友にそれを伝えようかとも思うが、伝えたところで「冗談でしょ？」と言い始めるのがやまやまなので言うのをやめた。

「(それに、人の恋路を邪魔するところの国では馬に蹴られるのでしたね)」

簪がマコトを好いていることはいつもの7人の中ではもはや公然の秘密であった。セシリアや箒ともこれは間違い無いとレイラは判断しており、間違いなくその原因はサイレント・ゼフィルスの一件だろう。

「（：私でも、あのように助けられたら少しはときめいてしまうかもしれませんね）」

前世でも何かとピンチが多く、それを切り抜けて来たからこそ、マコトはそう言った場面がよく似合うとレイラは思う。オーブ沖での“覚醒”は今考えれば敵から見れば狂戦士そのものであったが、味方からすれば救世主そのものだ。そういえば、彼が使っていたインパルスの武器は“エクスカリバー”だったな、とレイラは今世の祖国に出てくる伝説の聖剣と名前が被っていたことにくすりとする。

ただ、その後の愛機の武器が“アロンダイト”なあたり、色々と笑えないが。

肩にかけられたジャージはマコトの匂いが染み付いている。不思議と嫌とは思わず、レイラは身を包むようにジャージの襟口を掴んで温かみを逃さないようにする。それは端から見ればまるで恋する乙女が想い人の服を被っているようで、通り過ぎる生徒たちはレイラのあまりに可愛らしい表情に見惚れていた。

「臭う?」

「まさか。戦闘後のようなことはないですよ」

「それ、前は臭かったって言ってない?」

「さあ?」

くすくすとレイラは笑う。しょうがないな、と特に咎めないマコトは彼氏面もいいところであった。

「そういえば、何故この学園の体操着はこのような…ぶるま?というものののでしょうか」

「知らない。今時珍しいというか、確かなんか使われてないはずだよね」

「元々女子校だから特に問題はないということでしょうか。加えて、短パンだと万が一ISに乗った際何か不都合が……」



「そんなこと言い出したらこの前の夜、あたし制服で乗ったよね」

「それもそうです。じゃあなんでしよう。学園側の趣味？」

「それはそれなんかヤダな……」

今、彼女たちが身につけている学園指定の体操着はいわゆるブルマである。廃れ切ったはずのそれが何故学園では現役なのかわからな  
いが、運動着として特に不都合は感じていないのでマコトは気にして  
いなかった。一緒に走っている一夏も特に反応はなかったので余計  
にだ。

「制服は改造し放題なのに各種体操着や水着は学園指定と……よくわ  
かりませんね」

「だね。そういえばレイラも制服改造してるよね。なんか意外」

「そうでしょうか？せつかくなら着たい服でモチベーションを上げる  
べきだと思ってる」

マコトは制服を改造していないが、レイラは改造制服である。ミニ  
スカートにしがちな生徒たちの中で珍しいロングスカートへの改造  
で、貴族令嬢らしさをよく演出している。わりと澆刺なセシリアとは  
好対照だとマコトは思っている。

「マコトは改造しないのですか？」

「うーん、なんか別にいいかなって」

「改造といえば……ルナマリアは改造していましたね」

「あー……あれね、思いつきり軍規違反だけど」

制服の改造といえが頭を過るのは過去の同僚でありマコトにとつ  
ては前世で、最初で最後の恋人だったルナマリア・ホークの改造軍服  
である。男世帯な軍艦内において、過度なセックスアピールは艦内風  
紀を乱すため禁止されている筈だがルナマリアは何故かピンクのミ  
ニスカートを履いて無重力空間を飛び回っていた。悲しいことに前  
世では性に逆えずマコトは何度か彼女のスカートの中を見てしまっ  
たことがある。

付き合ってから何故スカートなのか聞けば単純に制服がダサイと  
いう理由でそうしていたと答えられていた。

「ダサイから……そんな理由で許されてたの、謎すぎる」

「ミネルバ隊は他の隊に比べそのあたり緩かった気がします」

「まあ、考えてみればあの艦って新人乗せてデモンストレーションが  
てら進宙式して……ってなるはずだったんだもんね」

「今考えてみると若干の愚連隊さがありますね」

そもそも艦長が国家代表者と不倫をしていたり、外国のVIPに代  
表権限とはいえ艦載機を貸したり、挙句最終局面までは遊撃隊に近  
かった。通常の艦隊構成に加えられても、その頃には何度も逆境をく  
ぐり抜けたせいかな周囲からはエース部隊扱いされ、旗艦となつてしま  
うことが多く周りからとやかく突っ込まれることはなかった。

艦内で大きいざこざはなかったが、艦内風紀はどうだったのか振  
り返ると……マコトは乱していた張本人の一人として何も言えない。

「ま、まあ、今はもう考えてもしようがない？」

「ええ、それもそうです。ただ……マコト、勿論艦内と同じく、学校内  
での不純な交友は当然避けるべきですよ」

「いや女の子しかいないでしょ。一夏はそういうのないし」

「………そうですよね」

隙だらけすぎる、とレイラは嘆息する。そのうち簪に押し倒された  
らどうするんだ、とレイラは声を大にして言いたかった。少なくとも  
今世紀最大の天才もあなたに恋をしているんですよ、どうするんです  
か？とも言いたい。脳天気「今日の朝飯どうしよつかなく」と伸び  
をしながら言っているマコトには残念ながら呆れが先に来てしまっ  
た。

「そういえば、あの黒騎士はどうするのですか？」

「え？…どういふこと？」

「あなたの専用機になるのですか、ということですか」

レイラは話題を変えようと、シャルロット追跡に使用したマコトの  
機体の今後の処遇を聞いた。マコトは周囲を少し見てから、問題ない  
と考えて話す。

「またしばらくは調整で研究所かな。それに大っぴらに乗れないし、  
そもそも」

黒騎士はコアの登録もされていない、外界に存在が出てしまえば篠

ノ之束の健在を証明するものとなってしまう。なので、当然ながらシャルロットの追跡をした時のように嵐で遠くから観測できないような状況でないと飛ばすことはできない。

「それもそうですね。ただ、またあなたと飛びたいですよ、私は」  
「嬉しいこと言ってくれるなあ。あたしも、レイラなら安心して背を任せられるよ」

「ふふ、お世辞を言っても何もでないですよ」

平和な空を飛ぶのもいいが、やはりこの前の夜のように共に戦うほうがレイラは何故だか嬉しかった。それは今世のマコトの願いを踏みじるとわかっていても、この世界に生を受けてから感じていた寂しき埋めてくれていた。

「着替えたら朝ごはん食べに行こう」

「ええ。そういえばそろそろメニューが変わると書いてありましたね」

「6月のメニューだっけ？1年間あそこで世話になる人もいるから飽きないようにつて考えてるんだね」

「楽しみですね。ただ今日はまだ変わっていないですし、焼き魚定食でも食べましょうかね」

「レイラ、だいぶ和食慣れてきた？」

「ええ。箸も。マコトは『前』も箸を使っていましたね」

「まあ、オーブは若干日本の影響も受けてた国だからね」

朝食を終えたマコトはレイラ以外のメンバーと合流し1組のSHRを迎えていた。なお、最近は時間ギリギリまで箸が教室の中にあることもあり、さやかとも箸は知り合いとなっている。

出席を取り、千冬が教壇に立つ。

「諸君、おはよう。本日は一つ連絡事項がある。つい最近デユノアも転入したが、また転入生だ。ボーデヴィツヒ！入れ！」

「ハッー」

いきなり転入生がいると言った千冬が教室の外へと呼びかけると、マコトやレイラにとってはよく聞き慣れた返事をして、教室に幼げな

少女が入ってくる。少女は教壇の横に立つと、ふわりと美しい銀髪を舞わせ、教室全体を「赤い片目」で見た。

「(…眼帯…?)」

マコトは少女が隻眼であることに驚く。だが、すぐに見覚えがあることに気がついた。銀髪の少女は気をつけの姿勢を取った上で、見事な敬礼をする。

「IS学園1年1組の諸君、初めまして。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍の最年少の左官。同時に代表候補生でもあり、実力者。マコトが以前、箒の不審者探しに付き合った際、学園の下見をしていた少女だ。ついぞその時は姿を見ることができず、箒がネットの写真越しに容姿を確認したが、その写真よりも僅かに成長しているように見える。

「彼女はドイツ軍より本学に「出向」という形で転入となった。1生徒として諸君らとは学ぶこともあると思うが、現役の軍人として彼女から学ぶことも多いだろう。特に織斑」

「え!?俺!?!」

「本学では赤点などとればどうなるかわかっているだろう。男性操縦者だろうが特別扱いはされない」

名指しで言うあたり相当千冬は一夏の心配をしていることがマコトも箒もわかった。クラス中は一夏の座学がかなり危ういことを知っているため言われるのも致し方なしといった様子だ。一方、ラウラは一夏のことを若干睨んでいる。

「…以上だ。ボーデヴィツヒの席は一先ずデユノアの横だ。1時間目の授業はこの教室で行う」

千冬がそこまで言うとなスタスタと真耶を連れて教室を出ていく。ラウラは敬礼を解いて直立不動。教室の中は妙な緊張感に包まれた。

ラウラが動き出し、座席に向かうために一夏の前に来たところまで彼女は立ち止まる。なんだ、とマコトが思った時には一夏がデコピンされていた。なんてことを、などという前に千冬をよく知るもの…この場には箒とマコトしかないが、そのデコピンの動作があまりに千冬に似すぎていることに気がついた。

「いつてえ!?なにすんだよ!」

「貴様が織斑一夏か」

「そ、そうだが、いきなりデコピンってなんだよっ!」

「気をつけエ!」

「うっ…!」

張り上がった声もマコトと箒には芯に響いてくる。特に箒は近くにいるせいもあって、ラウラの姿に強い既視感を覚えた。

「(このボーデヴィツヒが発するものは…!)」

一夏はラウラの言葉に体が硬直する。もはやそれは遺伝子レベルで刻まれた反応だった。

「(この子…なんだっ!?この感覚は…!)」

「教官から話は聞いている!貴様は座学の成績が振るわないそうだな!」

「なんで知って!?というか教官って誰だよ!」

「教官は教官だ!よってこれより貴様にみっちり知識を注ぎ込む!覚悟しろ!」

「な、なんだよ!?何がどうなって…!」

いきなり初対面の少女にデコピンされた挙句成績が悪いから勉強を教える、と言われても混乱するのは目に見えている。周りから見てもラウラが言っている内容を理解するのにラグがあるのに、一夏本人はわけがわからないと右往左往するしかない。

「おい」

「……なんだ?」

そんな一夏に助け舟を出そうと箒が立ち上がる。ラウラは背の高いや箒を見上げる形となるが全く怯んだ様子がない。

「そちらが千冬さんの弟子か何かなのかはわかった。しかし、いきなりデコピンをしてそのように怒涛な勢いで言葉を並べても混乱させるだけだ」

「ではどうしろと。というより貴様は」

「私は篠ノ之箒。一夏と千冬さんとは古い仲だ」

「了解した。篠ノ之女史。なら、ご教授願おう。どう言えばいい」

二人の会話が硬いたためか教室内はピリピリとした空気だ。シャルロットはどうなっちゃうの？といった感じでマコトに視線を飛ばしてきており、レイラとセシリアは何やらこそそと相談し合っている。

マコトはさてどうしたものかと考えたが、実際のところ箒とラウラは別にバチバチとしているわけではなく素で口調が硬いだけである。

「ご教授……と言われてもな。もつと砕けた言い方はないか」「砕けた言い方だと……ふむ……ならば……」

思案するラウラに、レイラは猛烈に嫌な予感がした。まるで戦場で死角からの攻撃を受けた時のように、脳裏に稲妻が走る時と同じ感覚だ。セシリアは何も感じていないのか事態を静観している。

何か、取り返しがつかないことが起きる。レイラはとりあえず1時間目の準備もありますし、と珍しくクラス全体に呼びかけようと椅子から腰を浮かせたが、手遅れだった。

「コホン……お兄ちゃん！成績が悪いってお姉ちゃんから聞いたよ！だから私が勉強を教えてあげるね！」

教室内の空気が間違いなく凍った瞬間だった。対する一夏は何故か冷静に――。

「え……俺に妹がいたのか……？」

――と、あまりに的外れなことを言うのだった。

## # p h a s e — 2 2 「待ち受ける試練」

ラウラの衝撃的な発言はさしもの1組も彼女に声をかけることは様子見することとなった。朝の接触からは特に一夏もラウラに声をかけることもなく、隣にいるシャルロットはなんとも言えない表情のまま午前中の授業を受けるハメとなった。シャルロットとしては同じ欧州からの転入生ということで声をかけてみたかったが、一夏への妙な発言のせいで躊躇っていた。

午前中の授業が終了してもそれは変わらない。各々の生徒たちが昼食を取ろうと席を立つ。マコトも一先ず簪と合流していつものメンバーで…と考え動くこうとしたが、ここでラウラに声をかけたものがあった。

「らうらうら、一緒にご飯食べよう」

「……？私のことか？」

「そうだよ」

本音であった。シャルロットの一件以来、1日だけ暗かったがそれ以降はいつも通りに戻っており、マコトはどうしてだかわからなかったが、レイラがなんらかのフォローをしたのではないかと思っている。事実その通りだが、レイラは特に言うこともないだろうとしてマコトにも本音との屋上での出来事を話していない。

そんな本音であるが、彼女を中心としたグループは1組の中ではかなり穏やかな人物たちで構成されており、一夏のクラス代表推薦を初めとして色々と人のことを想える様がありありとわかる。

故に、かなり浮いてしまったラウラに声をかけるのは必然であった。

「……君は？」

「私は布仏本音だよ」

「本音、か。ふむ……早速の誘い、大変嬉しいのだが……」

ラウラは申し訳ないといった表情で本音に言葉を返す。本音たちは「おや」と少しだけ驚いたような顔をした。マコトはラウラを見ていると容姿以上に軍人として大人なのかもしれない、とも今の姿を見

ると思つてしまう。

「あつ、マコト。簪さん来たよ」

「ほんと?」

さやかに声をかけられマコトが教室の前方の入り口を見れば簪がひよこつと顔を出していた。マコトが手を振れば微笑んで手を振り返してくる。彼女を待たせるのも悪いか、と思いマコトは先に食堂に行き席でも取ろうと考え席から離れるが、ラウラの言葉で足を止めるしかなかった。

「すまない。私は織斑一夏と食事を取ろうと思つていてな。またの機会、というのはダメだろうか」

「おー、そつかり。じゃあ、今度一緒に食べようね」

「ああ。こちらとしても望むところだ」

マコトは思わず一夏を見る。一夏も箒とマコトを交互に見て「どうすんだよ」といった表情をしていた。今朝のぶつ飛んだ発言はともかく、なんとなくラウラは千冬の関係者で一夏は面識がなくても千冬から現況を聞いていて、サポートしようというのが目的だと察しているため大丈夫だろうと判断した。

「……マコトさん?なんか一組変だよ」

「いつものことだよ。先行つて席取っちゃおう」

「う、うん」

いつまでも留まるわけにはいかなないのでマコトはナチュラルに簪の手を取る。簪は僅かに頬に朱が差す。どうしてこの人は…と思いつながら、確かに昼ごはんを食べなくてはいけないため、彼女は素直にマコトに手を引かれた。

マコトが簪を連れて出て行ったことに一夏は助けしてくれないのかよ!と内心泣きながらも、ラウラがその気なら腹を割って話すしかないと考え、席から立ち上がった。

「わかった。ラウラ、でいいのか?千冬姉とは知り合いなんだろう」

「ああそうだ。いわゆる、義理の兄妹といったところか」

「……なんとなーく、日本語間違つてる気がするけどまあいいや。飯、行こうぜ」



「無論だ」

千冬の関係者、ドイツ…とくれば鈍い一夏も理解する。一夏には千冬がドイツ人の知り合いを作るタイミングがあったことを知っている。

「確か：第二回モンドなんちゃらの時にドイツで試合してたよな。そのあと、なんでか向こうにしばらく滞在してて…そんなときに知り合ったんだろ(うな)」

第二回モンド・グロツソ。ISを使用した競技大会で、早い話が全世界規模の合同大演習であった。別の異世界で言えばガンダムファイトのようなものである。勝ったところで得られるのは名声だが。

姉の活躍を一夏は鈴や弾、マコトたちとテレビで見っていた。そして、千冬が最後に出場したのはドイツでの第二回大会。その後の長期滞在などからラウラがその期間中に知り合った可能性が高いと一夏は判断した。セシリアやレイラ、シャルロットの日本語に対する理解が深すぎるだけで、一夏は普通ちよつとは使い方間違えたりするだろうと今朝のお兄ちゃん発言はともかくとして、今のラウラの発言はスルーする。

「箒、レイラ、セシリア。それにシャルロットも。マコトたちが席取ってくれてるだろうし」

「そうだな。私も千冬さんと彼女がどういう知り合いなのか興味があ

るからな」  
箒もラウラとの昼食は賛成のようで一夏に続く。一方、レイラとセシリアはラウラがなんで千冬と知り合いなのか知っているため頷くだけで返事はしない。特にレイラはラウラを警戒する。

「クロエ先輩と出会ってから似ているところか、ほぼ顔の造りも同じことに気がつきましたが…：彼女たちは一体…：それに、ボーデヴィツヒさんはオルコット事件を知っている。口に出させないよう

にしなければ)」  
前世では自らがクローンであったレイラはラウラがすぐにクロエとクローンに近い関係であることに気がついた。レイラは幼少期、セシリアを救うことに必死で束や千冬が引き起こし終わらせた戦いの

詳細を知らないが相当に厄介なものがあると考える。

要注意だ、とレイラは唯一ラウラへの警戒心を持った。

食堂に先行していたマコトと簪によって席は既に押さえられており、後から来た一夏たちは難なく席につくことができた。一夏を中心に座れば、周りからするとまるで一夏のハーレムのような様相を呈すが全く本人たちにはそんな気がなかった。1年生たちの間では美男美女しかいないこのグループが早くも高嶺の花のような扱いになりつつある。

これはクラス代表戦まで一夏を嫌悪していた組もそうで、避難中にサイレント・ゼフィルスのビームから観客席を守ったことを受けて1年生の中から一夏に向けられた悪感情は半分無くなっている。

もちろん、簪もこのグループにカウントされている。そのため、未だに4組内で微妙に浮いているのは簪の人見知りのせいではなく、彼女が気がつかないうちに簪が絶対なるとは思っていなかった学校内カーストの番外に位置する特別な存在となっていたからだ。

「わりいな、マコト、簪。席取っててもらって」

「いいよ、気にしないで」

一夏が席を取っていたことに礼を言うが、マコトは気にするなといったものように返す。ラウラは一先ず一番端の席、シャルロットの隣に座った。シャルロットは欧州出身のためラウラの存在は知っていたが、彼女は代表候補生ではなく1企業のテストパイロットで社外に出ることはまずなく、面識はなかった。

「(こうして目の前にすると可愛いね、この子)」

自然と、アイドル然とした容姿の女性がなりやすい代表候補生の例にもれず、ラウラの容姿も優れていた。シャルロットはラウラが小さいこともあって母の如く可愛い子を見たら撫でたいという衝動に駆られたがグツと我慢する。

「…さて、改めて自己紹介としようか。ドイツ軍よりIS学園に出向となったラウラ・ボーデヴィツヒだ。出向、といっても普段は朝礼で教官が言った通り学生として諸君らと立場を同じとする。歳に関し

ても諸君らと同じだ。気にせずラウラ、とても呼んでくれ」

丁寧な自己紹介に自然と拍手が7人から漏れる。朝の妙な発言はなんだったんだと簪を除く全員が思った。カンのいいレイラは恐らくはラウラに近い誰かが吹き込んだのだろうと思った。

「ご丁寧にも、ラウラさん。私はレイラ・デュランダルと申します」

すぐに自己紹介に返したのはレイラだった。座りながらとはいえ気品に溢れた所作にマコトや簪、シャルロットはやっぱりお姫様だ：と毎度のごとく決まった感想をしてしまう。ラウラはレイラの名前を聞いた途端にビクリとしていきなり起立した挙句、更に敬礼までした。

「これはっ……！まさか高名なプリンセス・レイラ様だったとは……大変なご無礼を！」

「おやめください。私はただの小娘ですよ。少佐殿も、こちらではただの生徒として参られたのでしょうか？」

「ハッ！その通りです！」

「でしたら、そのように」

「わかりました。では……お名前でお呼びしても」

「許可を取る必要などありませんよ。学友として、レイラとどうぞお呼びください」

「私も、でしたらラウラと」

「よろしくお願いしますね、ラウラさん」

「こちらこそ！よろしくお願い致します！」

セシリアを除く全員が二人の空気に入れない。ただ、一夏は気になったことがあるのか顎に指を当てて全員に問うようにこういった。

「なあ、そういうえばシャルロットもそうだったけど、レイラって向こうだとすごい有名人なのか？」

一夏の言葉にラウラが信じられないといった顔をする。シャルロットも同様だ。マコトはレイラが元王族で、代表候補生としての腕もあって……と思っていたが、改めて一夏にそう聞かれると少しだけ違和感があった。レイラの容姿がただ美しいからという理由だけでは

明らかに足りない。シャルロットもラウラも、レイラに向けているのは畏敬の念だ。

マコトは今世におけるレイラ・デュランダルのことをあまりよく知らないことを思い知らされた。知る必要性がなかったからだ。

「貴様には歴史の授業も必要そうだな、一夏。いいか？レイラ様——」  
「ラウラさん」

ラウラが呆れ切った様子で一夏にレイラの何かを教えようとした瞬間だった。いつもと変わらない、いや、いつもより深い笑みを浮かべたレイラがラウラを呼び止めた。まるで時が止まったかのように錯覚するほどの重圧に、マコトはあの夜のことを思い出してしまう。

「（これ…あの夜にも……）」

空間そのものを何か、支配するような「プレッシャー」。あの時よりは弱いとマコトは思うもラウラの勢いを止めてしまうには十分すぎるものだった。

「先ほども申し上げましたが、私たちはここではただの学生なのです。IS学園では余計なしがらみなどなく、伸び伸びと学問に皆さん打ち込まれています。ですから、私が祖国で…欧州でどういった扱いをされているかなど…今は関係はないのですよ」

穏やかに、微笑んでレイラはラウラの心を沈ませるように言う。レイラ自身も今起こしていることに気がついていない。テーブルの下ではダイヴトウ・ブルーの待機状態である指輪が僅かに蒼く輝いていた。

レイラからの忠告を受けたラウラは申し訳ない、と静かに謝罪して席につく。レイラは冷え切った空気を切り替えるように「そういえばラウラさんは代表候補生でしたね」と言った。

「へえ、じゃあラウラもセシリアやレイラみたいに強いのか」

「一夏さん、彼女は軍人ですわ。対して、私やレイラはあくまで民間人。実際の戦闘となると恐らくは実力差がありますでしょう」

一夏の言葉をセシリアが訂正する。素直にセシリアがラウラのほうが実力が上だと評価するということはそれなりに高い実力なのだろうとマコトは思った。ラウラはセシリアにそう言われて少しだけ

照れ臭そうだが、何も言わないあたり実力には自信があるのが窺える。

「軍人かあ……それでなんでそんなラウラと千冬姉が知り合いなんだ？長いことドイツに行ってたのは知ってるけど」

「ああ、一夏は知らないのか。当然と言えば当然か……今から言うことは機密情報だが、織斑教官：君の姉君はドイツ軍でISの教導をしていたことがある」

「あ、それで帰ってこなかったり帰ってきてても、ちよつと向こうで仕事してた、で終わりだったのか」

「ああ。かの世界最強に教練を受けるなど、他国からすればずるいと思われても致し方ない。だから基本的には秘密だ……もつとも、噂はされてしまっているがな」

ラウラがセシリアたちをちらりと見れば、噂が事実だとわかったと言わんばかりの表情をしている。

「それで教官……と千冬さんと呼んでいたのか。ある意味、ラウラは私や一夏の妹弟子だな」

「あく、それで義理の妹とか言ったのか」

「部下からそういうものだと聞いたのだが違うのか？」

「そうだな、妹弟子というのが近い」

「なるほど、修正しておこう」

マコトはラウラに日本語を教えたのはその「部下」であると確信し、あの妙なキャラの口調もその人物が教えたのではと考えた。だとしたら一体何を彼女に教えているんだ、とマコトは思った。

「……つと、そうだ。なんでデコピンしたんだよ」

「まだ根に持っていたのか」

「当たり前前だろ。ラウラが千冬姉の弟子だったのはわかったけど、いきなりデコピンされんのは納得いかない」

「織斑教官がしろとSHR前に言った。それだけだ」

「……………千冬姉」

ラウラとシャルロットを除く全員が千冬の悪い笑みを思い浮かべた。既にこの2ヶ月で1組の生徒は千冬がそこまでお堅い人間では

ないと察しており、セシリアに至ってはプライベートでの姿も藍越市出身の3人の次に知っている。彼女なりの弟への激励だろうとセシリアは納得した。

「それでも何か言いたいことはあるか？」

「ないよ……はあ。確かに先週の小テスト、点数やばかったけどさ」

「あはは……一夏もそうなんだね」

「え？一夏もって……シャルロットさん？」

思わずマコトはシャルロットにそう言ってしまう。シャルルだった時もそうだが、シャルロットへのイメージは割と優等生だな、というものだった。特にマコトやレイラは彼女と1戦交えて、嵐の中でも綺麗に機体を制御して見せる技量があるのを知っている。それを考えれば技量に合わせて知識もあると思っていたのだが違ったらしい。

「……シャルロットさんは勉強できると思ってた」

「あー、簪さんが今行ったのフランスでもよく言われてたけど……私、その、あんまり勉強好きじゃなくて……」

「え？でも、この前、部屋でなんか難しそうな本読んでなかったか？」  
「あれはフランス語の小説だよ」

一夏は現在もルームメイトを継続しているシャルロットがこれまでもよく本を読んでいるのはわかっていたが、確かに思い返せばその日の復習をしている様子を見たことがなかった。てつきり授業中と僅かな休み時間の振り返りで事足りているのかと思いついていたが違ったのかと一夏はシャルロットのイメージを修正した。

「てつきり向こうの参考書でも読んでるのかと思ってたぞ」

「本読むのは好きだけど勉強はからつきしで……母さんも特に何も言わないし、父さんやロゼンタさんもテストパイロットで頑張ってるしって成績のことは突っ込まれなかったんだよね」

「…改めてシャルロットが社長令嬢だと思ふな、そう聞くと」

「箒さんそれ絶対いいイメージじゃないよね」

意外なシャルロットの一面が知れ渡ってしまったが、話はラウラが一夏に勉強を教える話が変わった。

「まあ、そちらの女史のことはわからんが、一夏には教官から勉強を教

えるようにと言われている」

「まさかとは思いますが、学園に転入されたのはそれが理由とは言いませんわよね」

「いいや、そうではない。これはついでだ。本来の転入の目的は織斑一夏の周辺警護の強化にあつた。：状況が変わり前倒しで今日入学となつたが」

状況が変わつた原因に心当たりがありすぎるシャルロットは苦笑いするしかなかった。脅されていたり、未遂に終わったとはいえ、シャルロットは他国でも手を出しあぐねていた一夏の情報を奪つた一人目なのである。一度事を起こしたものがいれば、あとに続くものもかならず現れる。

「加えて、今私の隣にいるシャルロット・デュノアの警護も学園からのオーダーとして正式にドイツ軍へ受理されている」

「1学校法人が他国の軍隊の軍人、しかもIS乗りを呼ぶことなど出来るものなの？」

マコトの疑問にラウラは「今回は特別な事情がある」と、理由を答えてくれた。

「簡潔に言えば恩返しだ。教官にドイツ軍で教鞭を取ってもらつたな。デュノア嬢についてはついでだが」

「なるほど」

筋は通っている、とマコトは思ったが本当に「筋」だけだ。それだけで軍隊が動くなどありえるのだろうか？レイラも怪しいと考えているのかチラリとマコトに目配せする。ただ、ここで聞くのもおかしいため二人はただ聞くだけに徹した。

「……む…いつも二人で視線で会話してる……」

簪はマコトとレイラが時折、アイコンタクトをしていることに気がつき始め、ほんの少しレイラに嫉妬していた。幸いにしてレイラにその気が無さそうなのが簪にとっては救いで、簪はレイラがもしマコトを取りに来たら勝ち目がないと考えてしまう。元とはいえお姫様で、この美貌。自身を卑下しがちな簪は勝負にならないと思つた。

「警護つてことは部屋とかどうするんだろ」

「まだ教官から聞いていないか？暫くは一夏とデユノア嬢、それに私  
で3人部屋だ」

「え？狭くない？」

シャルロットが狭い、というのも当然で、一夏たちの部屋は二人部  
屋前提の広さだ。3つ目のベッドを置くことができるが、置いてしま  
えば他のスペースがなくなり完全に寝室と化してしまう。

「だからベッドを変えると教官が言っていた。3人寝れる1つに変え  
るそうだ」

「え」

「まじかー」

シャルロットが衝撃を受けたにもかかわらず、一夏は全く気にして  
いなかった。シャルロットは思わず一夏に言う。

「い、一夏!?!同じベッドで寝るんだよ!?!大丈夫なの!?!」

「え?いや特に問題はないけど?ああ、髪切るなよ」

「切らないよ!というかそんなことより、女の子と、同じ、ベッド!」

「……………?何か問題あんの?」

「ええ…………」

あまりに一夏が気にしなすぎっており、シャルロットは言葉が出な  
かった。一夏的には同じベッドまでは特に問題がないらしい。ラウ  
ラも一夏の反応を特に気にすることもない。

「近い方が警護もしやすいから私も賛成した。…それと、デユノア嬢。  
よければそちらにも勉強を教えるが?」

「……………お願ひします…」

もはやシャルロットは諦めたのか魂が抜けたかのように着席する。  
シャルロットは変なところで頑固だった。生乳事件以降も一夏は  
シャルロットにシャルルだった時と全く変わらない形で接してきて  
おり、シャルロットもそれはそれで助かったのだが妙に負けた気が  
ずっとしていた。

彼女はそれなりに自らの姿に自信があった。あったのだが、一夏が  
一切そのことに反応しないので悔しさがあった。セシリアやレイラ  
には何やら照れたりした、というのを本音たちから聞いたことがあつ



たので余計に悔しさが増す。

「(……ぐう…一夏の幼馴染みである箒さんと飛鳥さん、二人もすごい可愛らしくて美人だし…慣れてる…のかな。けど、わ、私のおっぱいを見せた時はぶっ倒れたし……一夏の基準がわからないよ……)」

「しかし、てつきり部屋割りを変えると思っていたが続行なのは驚いたな」

「ええ。ただ箒さんもだいたい私たちの部屋に馴染んで来ましたわね」

「セシリアの寝言は未だに慣れんがな」

「そ、それは言わないでくださいまし！」

箒が笑いながら言えば、セシリアが顔を赤くする。マコトはうまく幼馴染みがセシリアやレイラと馴染んで来たようで嬉しかった。

「ふむ。なかなか賑やかだな」

「……うるさいかな？」

マコトの問いに、ラウラは「いいや」とほがらかな笑みを浮かべる。

「いいことだ。ここは軍ではない。あくまで民間の教育機関だ。…いつまでこちらにいるかはわからないが、改めてよろしく願います。そういうえば、名前を」

「飛鳥マコト。隣は簪さん」

「……よろしく」

「そうか。よろしく頼む、飛鳥。それと…名前でもいいのか？」

「苗字で呼ばれるの、嫌いだから」

「わかった。簪もよろしく頼む」

微笑むラウラに、マコトは確かにクロエの面影を感じた。遠い親戚なのだろうかとマコトは思った。

「つて、こんなに話していると飯が冷えるな。食べないと」

「それもそうだな。ラウラ、そちらは何を？」

「ビーフシチューだ」

「大盛りですわね」

「これぐらい食わんとやっていけん。そちらの簪もかなりの量だが」

「……………私もお昼はたくさん食べる」

「フツ、わかる奴がいたか」

昼食の量の話題からラウラと簪も馴染めそうでマコトは普段よりも簪の人見知り期間が短くなりそうだと安心した。

その日の午後の授業も問題なく終わり、放課後を前にSHRが開かれていた。千冬も真耶も既にいつも通りの様子で教壇に立っている。「——というわけで、織斑たちは以降、暫く3人部屋になる。デユノア、それとは別件で連絡事項があるためこの後職員室に来るように」「はい」

千冬からの呼び出しにシャルロットはなんだろうと特に警戒をしなかったが、それを彼女は数十分後後悔することになるが今はわからないことである。

「それと、もう2点ほど連絡事項がある。まず1点目だが、来月始め、梅雨に入るか入らないかのあたりで、タッグマッチというものが開催される。これは全学年希望者によるISバトルの大会で、任意の二人一組でチームを組んで参加するものになる」

千冬の説明を補足するように真耶が手に持っている端末を操作し、各生徒の机にあるディスプレイに情報を表示する。開催日時も詳細に決まっており、毎年の行事なのだとクラス中も理解した。

「せんせー！質問です！」

「なんだ相沢」

「えっと、変な話ですけど、なんか出ると良い事ありますか？」

さやか of 直球な質問に千冬は嫌な顔もせず「そうだな」とほんの少し思案してから答えた。

「今相沢が聞いた出場することでのメリットだが簡潔に言えば進路に大きく関わる。毎年、タッグマッチでは諸外国の企業や軍関係者が観戦に訪れる。過去、このタッグマッチを見て、卒業後にその企業に採用されたものもいる。なかには、在学中に代表候補生として青田刈りに近いことをする場合もある」

マコトは千冬の言葉に驚くも、納得する。IS学園に将来の優秀なIS乗りを探しに来るのは当然と言えば当然だ。

「特に今年は織斑がいることもあり観戦希望は既に締め切られた。多すぎてな。だから、それを察した3年生あたりが既にアリーナの申請を始めている」

「ですので、この時期はアリーナの予約がいっぱいいっぱいになるので、通常20時までを消灯後の23時まで伸ばしています」

真耶がまたしても補足しつつ、ディスプレイにアリーナの予約状況を入れる。既に今週の予約は上級生で取られており、あまり予約は入れられない状態になっているのがわかる。マコトは出場するべきか考え、すぐに出ようと思った。自分がまずどこまで出来るのか：彼女は確かめたかった。

「問題は誰と組むか、かな」

マコトはタッグマッチのパートナーを誰にするか考える。すぐに浮かぶのは簪とレイラだ。簪はルームメイトとしてよく知っているし、一夏との不利すぎる戦闘で高い実力を持っていることも知っている。レイラは言わずもがな前世ではエレメントを組んでいたため、分隊単位では間違いなく上手く行く。

他にはと考えると、セシリアも交戦距離からして相性は悪くないだろう。シャルロットは未知数のため除外され、簪はそもそもまともにISの搭乗経験がない。

「(簪の場合は：私が後衛なんだろうけど、あんまり後衛は得意じゃないかならなあ)」

マコトは簪と組んだ場合のことを想像するが、上手いかなさうだと思っただ。マコトもある程度は狙撃戦が可能だが、結局前世では遠距離支援装備のブラスト・インパルスで格闘戦を平気でしていたのでそのうち我慢できなくなると考える。一夏も同じ理由で上手いかなさそうだとマコトは思った。

「というわけで、教師としては出場を勧めておく。ただ、選手として出場するのもいいが、希望者は大会中整備課の手伝いもできる。毎年人手不足でこの時期は素人でも手が欲しい。来年度整備課を志望するものはそちらを希望するのも有りだ。以上が1点目だな」

千冬の連絡事項はまず一つ目がタッグマッチのことだった。クラ

ス中がタツグマッチのことで湧くが、千冬が咳払いをして沈める。

「あともう一つ連絡事項はあるぞ。二点目だが、来週、本学では海外からの留学生の保護者向けに授業参観も兼ねた学園案内がある。中には各国のVIPもこちらに来る。このクラスだとデュランダルがいい例だ」

「お待ちください。織斑先生」

「デュランダル。発言は挙手をするように」

「失礼しました」

I組全員が珍しいものを見たとき、レイラに注目する。何かと礼儀正しい彼女が慌てて席を立って、話をしている千冬に割り込むのは初めての光景だった。

レイラ本人はここにきて、つい先日の悪寒の正体を察した。

「こほん……先生、その“VIP”とはどなたですか？」

「……?ご両親から伺っていないのか?」

「母からは何も聞いておりませんが」

「まあいい。来賓するVIPとして例を挙げるが、今回くる保護者の中にはデュランダルの父であるギルバート・デュランダル大臣もいる」

レイラが目が完全に死んでいることに全員が気がついたが、千冬は気にすることなく話を進める。

「その他にもデュノアの実家であるデュノア社からはロゼンタ・デュノア取締役。他クラスも挙げるとキリがない。だから私が言いたいのはそういった面々に失礼のないように、ということだ。わかったな?それとデュランダル、とつと座れ」

「……はい」

スツ、と座ったが明らかに普通でないレイラに教室内は変な空気になる。それでも千冬は全く気にせずSHRを締めに入る。

「連絡事項は以上だ。アリーナの使用申請の方法がわからない場合はクラス代表に聞くかクラス代表を通して申請をするように」

「え!?俺がやるんですか!?!」

「当たり前だ。いちいち申請に一人ずつ来られると窓口が圧迫され

る。他、質問があるようだったら後で聞きに来るように。以上。日直、号令！」

SHRはそこまでで終了する。千冬たちが出ていくと全員がレイラの方へと集まった。

「レイレイ大丈夫？」

「…あまり大丈夫ではありません…」

「お父さんと仲良くないの？」

「そういうわけではないのですが…その…愛が重い…といいますか」

レイラの諦め切った表情に全員「ああ…」と察した。親バカなのだろうと思ったのだ。こんなに可愛い娘がいたらそうもなるだろうと。

「ま、まあレイラ。お父上も悪気があるわけでは」

「セシリア…わかっています。ですが、醜態を晒さないように、釘を差しておかねば」

1組の生徒たちはその後、当日までレイラの父のイメージを勝手に膨らませていくことになるのだが、そのイメージはいい意味で否定されることとなる。

——その日の晩。一夏、シャルロット、ラウラの部屋。

「二人とも、どうしよう」

「なんだシャルロット？そんな世界の終わりみたいな表情して」

「…：護衛対象にそんな顔をされると不安だ。何があった」

「…このままだと私…退学になっちゃうかも」

「ええ!?待てよ!俺の前髪の件はしょうがないって」

「それとは違うんだ…もっと、真つ当な理由なんだ」

「どういうことだよ」

「…私、ここに避難してきたって一夏たちには言ったよね」

「ああそうだな」

「だからその…私…この転入試験…受けてないんだ」

「え」

「だからさつき織斑先生に言われたんだ…タッグマッチ後…私の転

入試験筆記も実技もやるって」

「……教官らしい判断だ。それで、大丈夫……じゃないのだな」

「一夏、ラウラさん。なんで私がIS学園に来なかったかわかる？」

「来る必要がなかったんだろ？」

「確か、家でテストパイロットをしていると放課後聞いたが」

「違うんだ……私、私ね……」

「IS学園……受けるの諦めてたんだよ……模擬テスト……学科ダメで」

就寝前の室内に悲鳴が木霊した。

## # p h a s e — 2 3 「嵐の目の中で」

「千冬姉！開けてくれ！」

シャルロットからの告白を受け、慌てて一夏は隣の隣にある寮母の部屋：学園における千冬の部屋をノックしていた。中からは特に返事がないが、時間的にはいるはずだと一夏は思い、勢いよく扉を開けた。

が、瞬間中から何かが飛んで来たため咄嗟に一夏は回避した。

「うおっ!！」

「一夏!？」

一夏についてきていたシャルロットが突然目の前で海老反り状態になったため驚いた夜中の廊下で声を出す。一夏の顔面すれすれで通り過ぎたそれは千冬の部屋の対面にある壁に鈍い音を立てめり込む。恐る恐るシャルロットが飛んで来たものはなんだと目を向ければ、それは空き缶だった。

「(空き缶が：なんでめり込むの!?)」

潰れながらも空き缶が壁にめり込むというとんでもない光景にシャルロットはぶるりと震え、腰が抜けそうになる。なお、ラウラもついて来ていたが彼女は既に顔面蒼白だった。

「…………一夏。貴様、いい加減私が教師だというのを体で覚えさせな  
きやいかんか」

「ま、待ってくれ！話がある！千冬姉に！」

なんとか復帰した一夏は開けた部屋の中：一夏のおかげで小綺麗な環境で晩酌を楽しんでいた完全オフモードの千冬に待ったをかける。酒が入っていることに加え強引に扉を開けたため、教師としてはなく姉としてキレている余計に容赦のない状態のため、流石の一夏も焦る。

「なんの話だ。とつとと寝ろ。私の唯一の楽しみを邪魔するつもりか」

「キッチンあるよな!?!おつまみ作るから！」

「早く入れ。お前も飲むか？」

あまりに見事な掌返しであった。一夏は安堵しながら部屋に入り靴を脱ぐ。そうして、彼の背後からシャルロットとラウラが姿を見せた。

「あ……………」

「…ど、どうも、こんばんは」

「きよ、教官、失礼、いたします」

てつきり一夏だけかと思っていた千冬は二人姿を見て硬直する。もう部屋に入った一夏はそんな3人を全く気にせず、つい最近千冬のおつまみのように色々と買ってあげて物が入っている冷蔵庫を漁っている。

「……………コホン。二人とも、消灯時間だが部屋に戻るよう——」

「もう遅いだろ千冬姉」

「ツ…い、一夏…前々から人がいるときは言えと…！」

「セシリアには普通に会ったんだろ？じゃあいいじゃん」

「あれは緊急時で」

「もういいだろ。それに、地元の奴らにはとつくにわかられてるしいじゃん」

「それとこれとは話が別だ！」

「そうかなあ？それにいつかバレるでしょ。先生してる時もわりとノリいいときはいいじゃん」

「……………はあ、覚えておけよ……………」

目の前で繰り広げられた姉と弟の会話にシャルロットとラウラは呆然とする。あの世界最強が、ただの一人の男の子に窘められている。信じられない光景だった。特に、厳しく美しい千冬しか知らなかったラウラはもはやフリーズしていた。

「二人も食うか？豆腐と…とちりめんじゃこ作って乗せるけど」

「え、ええつと…よくわからないけど、頂こうかな」

シャルロットはかろうじて返事をしたがラウラは呆然としており反応がない。千冬は顔に手を当ててため息を深くついてから座っていた席を立つ。Tシャツ短パンというあまりにラフすぎる格好だった。



「ラウラ・ボーデヴィツヒ。何をしている。貴様」

「…っは!? 教官殿!?! し、失礼しました! 私は!」

「落ち着け。うるさい。夜だ。静かに」

「……っ」

一先ずラウラを強制起動させ、千冬はそのまま部屋の扉を閉めるべく出口に向かうが閉めようとしたところでヌツと扉の影から人が現れた。

「うおっ」

「先輩、うるさいですよ」

現れたのは寝巻き姿の真耶であった。彼女は笑顔で、千冬を見ていた。千冬はなんとか平静を保つが、真耶が相当に怒っていることがわかった。部屋が汚いのもそうだがストレスが溜まると少々、うるさいのが千冬であり、一夏が来た際に真耶は「弾けて」しまったのである。

それからというもの、千冬はオフモードでは真耶に頭があがらないのである。元々、代表候補生時代からそのケがあつたが今は完全に逆らえない。

「すまなかつた…真耶。その、一夏たちがな」

「さつき内線で、私の向かいの部屋の子がすごい音がしたって苦情きましたよ」

「……すまない」

「…気をつけてください」

「はい…」

真耶は手に持っていた潰れた空き缶を千冬の手に移すと、そのまま去っていく。千冬は扉を閉めて大きく息を吐いた。千冬がこうして戦闘力だけを買われて学園にいられるのも真耶のおかげであり、彼女がいなければ首がいくつあつても足りなかつた。

「…はあ。それで、お前らは何の用だ。顔首揃えて」

「ハッ！我々はおもむごっ——」

「…よせ…！隣の緑の悪魔をまた喚び起こすつもりかッ…！」

「あ、あはは………」

大きな声で返事をしようとしたラウラを必死に止める千冬にもはや威厳のかけらもなくシャルロットは力なく笑うことしかできなかった。今の千冬はどうみたってお酒好きな近所のお姉さんのような雰囲気だ。

一夏がフライパンでちりめんじゃこを作り出しあつという間に室内に香ばしい匂いが漂う。とりあえず全員座ろうと、室内に設けられた4人掛けの食卓に着く。一人部屋だが4人掛けなのは、この部屋でこっそり保護者面談などを行うためだ。

「ほい、お待ち。シャルロットとラウラは初めだろ？豆腐っていう大豆で作った…なんて言えばいいんだ？ケーキ？みたいなものに小魚焼いたのを乗せたんだ。醤油かけるとおいしいぞ」

3人の前に置かれたのはなんてことはない豆腐とその上にちりめんじゃこが乗ったおつまみであったが、それだけなのにとっても美味しそうに見えた。シャルロットとラウラのことを考えてか、二人にはスプーンが渡され、千冬には箸だった。

「なんか悪いね…一夏」

「いいさ別に、大したもんじゃなし」

「本当にか？凄まじく美味しそうに見えるのだが」

「豆腐がいいやつだからな。ま、食べてくれ」

一夏に勧められ、シャルロットとラウラは豆腐を口に運ぶ。食べたことのない二人は初めての掴み所のない食感と風味、それに絡む醤油の味が舌の上で踊った。

「おいしい……」

「不思議な味だ……掴み所がないが…なんだ…うまいな」

「水っぽくなくてしっかりしてる豆腐だから、ちゃんと風味もあるし美味しんだ。よかったよ、気に入ってくれて。千冬姉も食べなよ」

「ああ。……うん、美味しいな。いつも通り、最高だ」

「そりやよかった」

一夏がそう言いつつ、千冬の隣に座る。目の前に並ぶ織斑姉弟にシャルロットは確かに二人は姉弟なのだ実感する。顔立ちがよく似ているし、髪質も近い。よく見れば千冬も教師としての陰がないと

まだ僅かにあどけなさのようなものもあり、愛嬌があるなどシャルロットは年上の相手ながら思った。

ラウラは軍にいた頃の千冬とはかけ離れた緊張感の欠片もない彼女に驚きはしたが、失望はしなかった。誰にだって帰るべき場所があり、ラウラはそれが彼女の場合は一夏なのだろうと思った。

「そんじや、話聞きたいんだけど。いい？」

「構わん。予想はつくが」

「シャルロットが試験合格しないと退学ってホント？」

「そうだ」

一夏の問いに千冬は真っ直ぐに答えた。シャルロットはやっぱり冗談じゃないんだなと気分が重くなる。

「なんでだよ」

「一夏。彼女がここに避難しているのは知っているな？だが、先日のお前が髪の毛無くなった時点で彼女はある程度は身の安全を保障された。そのため、フランスに戻るといのが約束だったが……」

「残りたいって、言っちゃったんだ……」

千冬の言葉をシャルロットが引き継ぐ。彼女は理由を語った。

「私の学籍はまだ、フランスの学校にあるんだ。今は休学中ってことになってる。けど、あの1週間で、そしてそのあとのみんなとの触れ合いで、私、ここにいたいなって……母さんも残るし」

暖かい場所、シャルロットはこの学園の、一夏たちの周囲をそう思っている。心地が良くて、今はここに浸かっていたい。そう思わせる。だからこそ、約束には従わずここへの残留を願ったのだ。

「当然、そうなると話が違ってくる。元々、彼女は客としてここに来ているが今はもうそうではなくなりつつある。一応、角が立たないように女子に戻って1ヶ月が通うことになっていたが、それ以上ここで学びたいというのなら……必要なものはパスしてもらおう必要がある」

「けど、それを言ったら俺だってなんの試験も受けてないじゃないか」「一夏。この世界は残念なことに死ぬほど平等じゃないんだよ。正直に言えばお前にも私は試験を課すべきだと学校には言ったがそれはもつと上から拒否された」

もつと上、それが指すのは「国」ということだ。日本からすれば徐々にIS発祥国としてのアドバンテージを失いつつある今、一夏の存在はまさに神風だった。そんな扱いは望んでいないと一夏は言いたかったが、それがなければどうなるのか彼は千冬からのある言葉を思い出して言えなかった。

——有り体に言えばモルモットだな。

専用機を渡されると言われた際の言葉。あのときはふざけて流してしまっただが、一夏は今の千冬の言葉などを加味すると自らの立場が嫌というほどわかる。

一夏は特別な存在なのだ。それは……限りなく、最低な地位という意味での特別。一夏自身に主権はないのだ。

「しかし、シャルロットはそうもいかん。このままでは彼女は裏口入学となる。それは彼女の実家にも悪影響が出るし、教師の中にはそもそも避難としてここに潜り込むことを疑問視するものも多い。シエラ先生は元々技能があるから正規の手順で入っているから別だが」「必要なこと、つてことか」

「ああそうだ。お前のことだ。シャルロットがこのままじゃ退学になる、と言ったところでこちらに駆け込んできたんだろう」「うっ」

「い、一夏、ごめん。私はその、確かにやばい、つて思ってたけど必要なことだつて認めてるから」

「じゃあなんだよ……俺の空回りかよ」

「ごめんね?」

シャルロットが申し訳なさそうにすれば一夏は深く背もたれに体を預ける。避けようのないもの、そして、本人もわかっているとすれば一夏はもう何も言うことはなかった。

「まあ、それがお前のいいところでもあり悪いところだ。返事も無しに女の部屋に踏み込むのは許せんが」

「怒ってたのそっちが理由?」

「当たり前だ、私はお前にそのような教育をしたような覚えはないぞ。なのに気がつけば箒とは野生児みたいに飛び回るわ。弾や鈴、マコト

「私たちは空き地で野球してガラスを破るだの……」

「それ関係あるか？」

「あるとも。お前の周りにあれだけ女子がいるのにお前はなにも反応せんのか」

「……………いやまあ、みんな綺麗だとは思うが」

「それだけか」

「それだけだが」

一夏と千冬が無言で睨み合う。シャルロットは一夏が一応女性自体はちゃんと認識しているとわかって安心して。ラウラはよくわからない空気になっていたのでもしやもしかやと豆腐を食べていた。

「はあ。まあいい。あの一撃を避けたということは箒との鍛錬は無駄ではないようだな」

「そりやなあ…箒も十分超人の域にいるぞ…俺かなり手加減されてるし」

「あいつは不器用だからな。だから姉と違って一つのことには打ち込みすぎた結果だ。ISを使つての剣術なら互角だろうな、私と」

思いがけない千冬の評価に一夏は「なるほどな」と納得したがシャルロットは絶句した。世界最強と同格なクラスメイト。天才の妹、とはかけ離れた脳筋思考だと失礼ながら思っていたシャルロットだが箒の評価をちよつとだけ上方修正した。

「千冬姉、IS使わないほうが強いもんな」

「…ええ…!？」

「え、シャルロット知らないのか？千冬姉、IS乗ると加減しないとIS止まっちゃうんだぜ」

正確にはISのリミッターのせいなのだが、そんなことは千冬しかこの場では知らないため、シャルロットは千冬にとってのISⅡ拘束具であると理解した。ある意味間違っていないが。

「確か…教官は素手でIS用の武装が扱えましたね」

「そ、そんな無茶な。EOSとか量産コアISでないで体が…」

「鍛え方が違うのさ。武器は武器にすぎん」

得意げに言う千冬に全員が「あつ、酔いがもう回ってるな」と気が

ついた。事実、千冬の頬はだいぶ紅潮していた。

「二人は豆腐食つたら戻れよ。俺は片付けてから帰るから」

「そ、そうするね」

「お言葉に甘えて、そうさせてもらう」

「なんでもう帰るのか。まあいいが」

一夏は完全に宴会を始めそうな姉を察して先手を打ったが正解だった苦笑した。とにかく一夏はシャルロットには頑張れとしか言う他なく…自分自身も頑張らなくてはいけないと気合を入れるのがあった。

翌朝、シャルロットの転入試験問題は朝食時に共有された。

「実際問題、一ヶ月ちよいで受かるものなの？この学園」

「いや無理だろう」

マコトが思わずそう言ってしまったが、箒は箸を止めてそう言う。マコトはだよね…と納得せざるえない。当然マコトもこの学園を受ける際は座学を半年以上、実技試験に関しては座学が取れていけばいいとそこまで重要視していなかった。IS試験の入試において実技、座学合わせて7割取れていれば大抵は合格ラインに乗るとされているが、その7割を取るのが難しいのである。

試験の点数割合としては座学9割、実技は1割…というわけではなく教師を撃墜したり箒のように攻撃全てを切り払うなど実力を見せれば最高で4割まで追加得点が入る仕様で、マコトは座学5割、実技2.5割で合格していたことが合格通知の点数でわかっていた。

「ハッキリ言われるとだいたいぶくるものがあるね」

シャルロットも無茶なのは承知だが、受けないことにはここに残れないためなんとか方策がないか聞きたかった。8人の中でまともに考える素ぶりをすぐに見せたのは意外にも簪だった。

「……座学、どれぐらいダメなの？」

「ええつと……中学生の時にやった模擬テストだと3割がやっとかな……」

「……何がダメ？」

「私、数学とか理系がからつきしダメで」

シャルロットの苦手分野はマコトも共感できる部分であった。マコトの場合はなんとか前世のタツパもあり明らかに高校入試レベルを超えているIS学園の必須受験科目である理系教科を突破できたが、もし特に前世の知識などなく受けるとしたらマコトも藍越高校に入っていたと考えている。

「理系科目がダメとなりますと、文系……日本の、受験英語はどうですか？」

「うーん、それはなんとか……」

「比率的に文系を集中的にやっても得られる点数は最大でも4・5割……レイラ、これは」

「残る可能性は実技での教官撃破ですね。うまく行けば2〜3割はそれで補えますから」

セシリアとレイラも集中すべき箇所を定めるために言う。シャルロットはオムライスを食べながら脳内になんとなくの目標を考える。途中途中、絶妙な濃さのチキンライスが思考を「美味しい」と邪魔してくるが我慢した。

「文系と……あと理系の出来るところ全部抑えて、教官撃破すればギリギリ……いけるのかな」

「……とにかく時間がない。シャルロットさんはすぐに勉強を始めた方がいい」

「そうだね、簪。そうするよ。みんな、たくさん迷惑をかけてる上で、さらに迷惑かけちゃうけど……勉強、教えてもらってもいいかな」

シャルロットが頭を下げる。全員、彼女に対して嫌そうな顔をする者はいなかった。

「シャルロット、大船に乗ったつもりでいろよ。きっと大丈夫だ」

「一夏。お前は人に教えられるレベルではないだろうが」

「簪……そうだけどさ」

あくまでその場のノリで言ってしまった一夏に簪は言えた立場ではないと指摘してしまうが特に場の空気がわるくなることはなかった。

「シャルロット、昨晚も言ったが一夏と一緒に勉強お教えよう。一緒に勉強するやつがいるとモチベーションがあがる」

「ありがとう、ラウラさん。そうしてもらえると助かるかな」

座学に関してはラウラがそもそも教えるつもりのため、残る実技面をラウラ以外のメンバーが教えることとなる。タッグマッチがある以上、その練習も必要で定期的にはちょうどよかった。

「実技面に関しては……私とレイラが教えましょう。一夏さんに教えている実績もありますし」

「教官を倒せるレベルとなると少々厳しいものになるとは思います、いいですか？シャルロットさん」

「うん！代表候補生に相手をしてもらえるなんて光栄だよ」

「お任せくださいな。どなたが試験官かは知りませんが、目にももの見せてあげられるようにさしあげますわ！」

「ならそういうことで」

とりあえずのシャルロット勉強方針が定まったところで、話題は別のものにうつる。次の話題を切り出したのはマコトだった。

「実技……といえばタッグマッチ、みんなどうする？」

タッグマッチの出場をどうするかと全員に問えばまず答えたのがセシリアであった。

「当然、私は出ますわ。レイラと共に」

「学生相手でもこちらの機体のデータは取らなくてはいけませんし、出ない、という選択肢はありませんね」

セシリアに続きレイラもそう言つて、二人がコンビを組んで出場することも判明する。マコトはレイラをパートナーの候補と考えていたので早速アテが外れてしまったが、一般人であるマコトと違い、セシリアとレイラは新型機のテストパイロット。前世ではインパルスという新型機のテストパイロットと専属パイロットを担当したマコトは仕方がないことだと判断する。

「セシリアたちが出るなら俺も出たいな。それに、あんどきはエネルギー切れで負けたけど今度はそうもいかねえ」

「あら一夏さん、リベンジですか？」



「おう。負けたままじゃいらねえからさ」

クラス代表を決める模擬戦でエネルギー切れという敗北を喫した一夏としてはタッグマッチはリベンジの場として丁度いいらしい。セシリアも受けてたつ、といった表情でマコトはいいライバルだなあと思った。

「なら私も…と思うが、一夏は誰とタッグを組むんだ？」

「箒でいいんじゃない？」

「そうだな。それでいいか」

あまりにあっさり箒と一夏のタッグが完成する。マコトは、それはいいが気になったことがあったため箒に問いかける。

「箒、確か飛べないんじゃない？」

「そうだな」

マコトが聞きたかったのは箒がISで飛行できないという点だった。箒は入試の際、どうしても飛行するイメージがわかず、地上に仁王立ちのまま空中から銃撃を全て切り払うという神業で実技を突破しており、それからISには乗っていないため当然飛行はまだできないのである。

箒もわかっているのかさも当たり前だと言わんばかりの表情で答えた。

「そんな自信満々に答えなくても」

「しようがないだろう。事実だ」

「飛べないとキツくね？」

「跳躍して斬ればいいと考えていたがそれでは隙も大きいな。何か手を考えよう」

「後で千冬姉に聞いてみようぜ」

「だな」

二人の会話を聞きつつ、ああいつもの脳筋で全部片付けそう…と察したのでマコトはこの二人組はいいやと考える。シャルロットに次は視線を動かすが、彼女は首を横にふる。

「え？シャルロットは出ないのか？」

「一夏、試験もあるし…あと、立場的にあんまり目立つちゃうとね」

シャルロットは本国でもデュノア社のテストパイロットとしては非公式の存在なためあまり目立つことはできない。一応、彼女に与えられ、脱走未遂の際使用していたIS ッラファール・リヴァイヴ・カスタム”はデュノア社の最新機種の一つであるためイギリスの二人同様に戦闘テストはこなさなくてはならないのだが、父からは急ぎでなくていいと言われているためタッグマッチは出ないことにしていた。

「そっか。そういえばシャルロットがIS乗ってるの見たことないんだよな。マコトとレイラは見たんだっけ？」

「まあね。悪天候でもあれだけ飛ばせるならすごいと思うよ」

「ありがと、飛鳥さん。でも、それを言ったら飛鳥さんも」

「そうかな？そんなことないよ」

お互いに謙遜し合うマコトとシャルロットに、レイラが「少なくともシャルロットさんも代表候補生並ですよ」と決着を付け、一夏は彼女の実力を認識する。

一夏には、思うところがあつた。これまで、サイレント・ゼフィルスの一件では火事場の馬鹿力でトドメを刺したものの、ついこの前のシャルロット脱走未遂事件では前髪を切られた挙句、彼女を止めることもできなかつた。それは誰も一夏を責めることでもないし、周囲も泳がせていたということもある。

それでも彼は少なからず心の奥で考えてしまう。力がない、と。姉と同じ剣を持ちながら、自身が弱すぎると。誇りや、何かの気持ちがあるわけでもない。ただ、本当にこのまま、ただ流されるだけ流されていいのだろうか。

姉が世界で剣を振るっていた時、何かに悩んでいたことにも気がつけど、全てが終わってしまえば知ることができなくなっていたことに一夏はこのままでは同じことになると思っっている。

マコトも箒も、そんな一夏の内心には気がつけない。近すぎて、見えていない。

「それで、マコトはどうするんだ？」

心のうちなど全く反映していない声と表情で一夏はマコトにタツ

グマツチのことを聞く。マコトはレイラという候補が先に取られたので、そうなってしまうえばもうパートナーは一人しかない。

「うん。あたしも出るよ。簪さん、いいかな?」

「…っ…え、あ…うん」

横にいる簪に顔を向けてマコトが誘えば簪は頬を赤く染めて頷く。ラウラを除く二人以外の全員が簪に同情してしまう。マコトがあまりにも鈍感すぎる。一夏ですら簪が明らかにマコトのことを(恋愛的な意味で)好きということがわかるレベルの反応だと気がついているにも関わらずである。

「よかった。簪さんなら安心だね」

「…わ、私も、マコトさんとなら、頑張れる、よ?」

「ほんと?嬉しいな」

ニコニコとしているマコトに簪も微笑み、一気にテーブルの空気が甘くなる。レイラは内心「頑張ってください」と簪に言うしかない。

これで残るはラウラだが、彼女は「警護任務があるから無理だ」とそもそも出場する気はないという。それもそうだと全員納得し、このテーブルにいるメンバーからは3組が出場することになった。

「しかし、簪さん?そちらの専用機は直りましたの?」

セシリアがふと簪に聞く。打鉄二式が大破しているのはセシリアもサイレント・ゼフィルス戦に居合わせているため知っているので気になっていた。簪はセシリアの質問に首を横に振る。

「ダメ。まだ直ってない。この際だからって不足していた部分も完成度8割まで持っただけというところから、タッグマッチが終わった後かな…来るの」

「それは残念ですわね。となると本戦時はお二人とも量産機ということですか」

「そうなる」

タッグマッチの規定は昨日時点で配布されており、特に専用機勢への制約はない。そのため、専用機持ちが勝ちやすい。ただし、IS学園に持ち込まれる新型機は実験機のようなものが多いため、レイラのように逆に実戦装備が施され持ちこまれる例は稀で、大抵は弱点をつ

けば量産機でも勝利の目はある。

「マコトもそうになると量産機ですが、どうするのですか？」

「うーん。打鉄になるかなあ。ラファールも悪くないんだけど、小回りが打鉄ほど利かないから」

レイラに聞かれマコトは搭乗機を答える。現状、一番搭乗している機体で、頭打ちこそ早い機体の操作性という点では気に入っているための選択であった。

「ラファールはよく出来てるとは身内の鼻根目抜きに思うけど、やっぱり日本ほど追従性がよくないからね」

自社製品が選ばれなかったせいかわるかシャルロットがそんなことを言う。代表的なラファール・リヴァイヴ、フリカアトラ、打鉄の3機の中で機体操作の反応が一番いいのが打鉄である。シンプルでかつ、ダイレクトな操作感のため近接格闘戦を得意とするIS乗りにはその点が好まれている。

マコトも前世の戦法から打鉄の操作感が気に入っているということもあつた。

「…私はラファールも嫌いじゃない。けど、フリカアトラはダメかな」

簪がシャルロットにそのように言えば少し嬉しいのかシャルロットは照れ臭そうに「ありがとう」と応えた。簪がフリカアトラを苦手と言ったことがISは白式しか知らない一夏は気になったのか全員に聞くように質問した。

「なあ、その、フリカアトラってやつ、この前の授業で2組のコメントさんたちが使ってたけど難しい機体なのか？」

この質問に応えたのはラウラだった。  
「ああ、難しい。コメント姉妹…というのはカナダのか？ここにいるのだな。…まあ、それはともかく、フリカアトラは現在主要な3機の中で一番操作が難しい。なんせ、一部からは飛行機扱いされるぐらいだからな」

「どういうことだ？」

「簡潔に言うと、ISだがイメージだけで動かそうとすると失速など

を起こしやすいということだ。管制制御システムのおかげで墜落はしないが、機動中バランスを崩してしまうことが多い。慣れてくるとわざと崩してスラスタを強制噴射、高速で多角移動もできるが曲芸の類だな」

なんとなくだが一夏はラウラの言っていることがわかり、コメット姉妹の軌道を思い出す。初動は確かに直線的な動きを連続して行っていた。その後も、ISというよりはもつと別の、それこそ戦闘機のような動きがあったような気がした。

「ラウラさんとシャルロットさんはいなかったけど、前に山田先生と2組のコメット姉妹が戦った時、初動はドッグファイト狙ってたもんね」

「マコトさんはよく見ていますわね。フリカアトラの十八番といえば追撃戦です。機体を相手に垂直に向けられれば最大火力を發揮できますから」

「つまり、俺には絶対無理ってことでいいか？」

一夏の出した結論に隣にいた箒も「戦闘機を飛ばすイメージはわかん」と同意して頷いている。マコトは一夏が最初からISに対しての搭乗イメージを人形と固定しているため無理だろうなと思い、そうだねと頷く。

しかし、今の話を聞いているとマコトは前世でコアスプレnderを使用して渓谷の洞窟抜けという経験があるため、以外とフリカアトラもいけるのでは？と考えたが、足並みをそれでは簪と揃えづらいと考えて打鉄しかないと思い直す。

「そういえば、今話題に出た二人もタッグマッチは出るのだろうか…」  
「そうですね、箒さん。むしろ、あの二人にとっては本領発揮というところでしょう」

箒の言葉にレイラが答える。最初からコンビネーション前提で戦っているコメット姉妹。彼女たちが最大のライバルだここにいる3組は考える。

「ふふっ。だとしても、私とレイラも祖国では『蒼の姉妹姫』と呼ばれておりますの。負けませんわ！」

「だからこそ、足元を掴われないようにしましょう。あの二人はずばしつこそうですから、こちらのビットに捕まるかどうか」

「弱気ですわね、レイラ。私があなたに勝利をしつかりプレゼントしますわ」

「そう言つて頂けるのは嬉しいですが…まあ、仮想敵はあの二人にしておきましょう」

自身満々なセシリアにレイラは苦笑いしつつも、彼女のためにしつかりとこれからのことを考える。ここまで彼女が張り切っている理由をレイラは知っている。

「……そろそろ——も近いですし…いいご報告をしたいのでしようね。そのあたりの話も、来週くるという父上にも聞いてみましょう」  
年に一度の特別な日。決して祝事ではないが、この場にいる中でセシリアとレイラしか知ることのないある意味、この世界おけるレイラ・デュランダルとセシリア・オルコットの生き方を決めた日。

堂々と胸を張り、明るく笑うセシリアにレイラは彼女の進む先に憂いがないよう、タツグマッチは万全を期して挑もうと決めるのだった。たとえ、マコトが相手であつても遠慮する気はこれっぽっちもない。むしろ、逆だ。

「(アカデミーではモビルスーツ戦、負け越していましたね。今度はそうはいきませんよ)」

レイラにとって、マコトは親友でもありライバルだ。今世では余計なしがらみもなく、彼女と戦うことができる。条件はマコトに不利だが、マコトは逆境であればあるほどその力が増すとレイラは今まで目に見ている。

可能性。たった1%でもそれを掴み取り前へ進み続けたシン・アスカ。それを継ぐ飛鳥マコト。レイラの瞳がマコトを見る。かつてのように自身を愛する少女を連れ、いずれ相対するマコトに、レイラは僅かながら気分が昂るのであつた。

東は鎮まり返った夜中の研究室であるデータを確認していた。画面上には数値やグラフが幾つも浮かび、人体のマップも明滅してい

る。

「……興味深いね。この機械自体はオモチャだけど、れーちゃん自体の“力”。BT適正なんて呼ばれてるけどこれそんなちやちなモンじゃないでしょ」

そこにいたのはマコトや千冬、一夏や箒などが知らない狂気的な研究者として束だった。一人の時に顔を覗かせるそれは、別世界では本来の束の姿であり、この世界では興味深い事象があると現れる“徹底追求”したくてしようがない時の顔だ。

コズミック・イラから来たレイラ・デュランダルという少女だからこそ力なのか、それとも“今世”におけるレイラ・デュランダルの体が持つていたものなのかはわからないが、束は“あの夜”以来、久々に不条理な力に対して頭を働かせている。

実家には敗北し、今診ている患者も解明できない。ならば、と新しいものに彼女は手を出している。

「……コアのジェネレーターが出してる“粒子”を拡大化された脳波で制御してる……？天然の重力制御ってこと？それがもし極限まで高まれば……」

キーボードに手を走らせ、束はデータを打ち込んでいく。レイラ・デュランダルという少女が……もし全てを犠牲にしてもその“力”を解放したらどうなるのか。

「……あは♪」

画面の中で、めまぐるしく数値は動き、次第にエラーを連鎖させる。それでも束は機材に演算を続けさせる。そうしていけば、ゆつくりとエラーは消えていき、数値が可視化される。叩き出された結果に、束は満足げに笑みを浮かべる。まさにそれは彼女にとって最高の結果だ。

「もし覚醒したれーちゃんが黒騎士に乗れば……うん、すごいことになりそうだね」

思い人に次ぐ“可能性”の塊をレイラに束は見た。できれば束はここで、レイラに頼まれていたBTシステムの解析どころか、秘密裏に改造までしてレイラの“覚醒”を促してみたかったが、マコトの友

人であるためやろうとは思わない。

それに、強制的に何か改造してそこまでするのは束のポリシーに反するのだ。

「将来が楽しみだねえ。あのクソ野郎どもと違って自然にいろいろ生まれるのが一番だ」

滅した者たちの理想よりも遥かに自らの方がいいと束は自負しており、レイラはまさに彼女の理想的な存在だった。

「…ま、それは置いといて。一昨日のお昼にも異常値が出たと。無意識に発動してるみたいだし、ちよつと抑制させたほうがいいかな」

別のデータを束が開き、そこに一昨日の日付のBTシステム稼働ログが表示される。ちよつどお昼時にシステムが稼働し、シャルロット追撃時のような異常値を叩き出している。

「あのクソ野郎どもの手がかかってるし、やっぱ抑制しとかないとそのうち、れーちゃん魂が持っていかれちゃいそうだね。そもそも魂ってものの概念がわからないけど…」

なんの証明もできないが束はこのレイラの状態が危険だと判断している。魂という不確定なものだが確かに存在するそれから直接発せられているような力だと束は思うのだ。それが脳波として出てきている。出るということは何かを削ってしまったている可能性もある。

「ま、そもそもあんな可愛い子にクソ汚いもん付けとくの嫌だし、こつそり増幅装置壊しとこ」

レイラが次に来る時はいつだったか。束は日付を確認しつつ、予定を組む。

「…そうだ。せつかくだし、れーちゃんにくーちゃん外に連れて行ってもらおう。ここんところ籠りっぱなしだし」

それはちよつとした親心から出たものだったのかもしれない。だが、束は知る由もなかった。その選択がとんでもない事態を引き起こしてしまうことになるとは――。



## # phase—24 「ワールドページ」

シャルロットと一夏にラウラが勉強を教え始めてから約一週間が経過し、保護者校内ツアーの開催の前日の夕方。マコトと簪はようやくアリーナの予約が出来たため、それぞれISを纏ってアリーナにいた。効率的に練習を行うため、クラスメイト数名も一緒に練習を行うことになり、さやかもその中にいた。

「へー、二人がタッグって聞いたけど案外様になってるねー」  
「そうかな？」

まだ搭乗時間の少ないさやかや他の1組の生徒はまず基本の動作を確認していたが、マコトと簪はいきなり戦闘機動を取つてのイメーヅトレニングを行なっている。マコトは打鉄に、簪は打鉄に二式開発の中で生まれた選定落ちパーツを組み込んで高性能化した打鉄丙型・火蜂を纏っており、さやかから見た二人は非常に強そうに見えた。マコトと簪の行った戦闘機動はそれこそクロスレンジでの衝突を防ぐための混戦想定のもので、周囲から見れば曲芸のような動きを主にマコトが連発していたため非常に絵になった。

「簪さん、どう？ いけそう？」

「……問題はないと思うけど……マコトさん、あんなに動けるんだね」  
「意外？」

「ううん。期待通り」

簪から見たマコトの全開機動は驚くほど素早く、少々型は違うとはいえ同じ打鉄を扱っているとは思えなかった。これは簪の打鉄丙型が小回りを犠牲に加速力や非固定のスラスタユニット内蔵のビーム・キャノンで打撃力を高めたものであるため、その差もあつたがそれにしてもである。

さやかも代表候補生だと聞いている簪の綺麗な機動にさすがだと思っているが、マコトは明らかにこなれた動きで機敏な姿を見せていたことに驚いていた。

「こりや二人が優勝かな？」

「さやか、それはわかんないって」

「…………他に、専用機乗りもいるから」

「だけど、結局こういうのって腕じゃない?」

実力で高性能機をねじ伏せるといいうのは簪としては大変浪漫あふれるものだが、実際にこうして直面すると厳しいものがある。既に素人の一夏搭乗とはいえ、量産機以下の性能の打鉄二式でそういった状況の戦い辛さは実感している。

「まあそうだけど。レイラあたりとか正直自信ないんだよねえ」

「レイラさん?」

「そうそう。セシリアさんもすごいけど、レイラもビツトの動き凄まじいんだよね」

レイラというマコトが知る限り最強のオールレンジ兵器使いにマコトは頭打ちが早い打鉄でどこまで出来るのか不安だった。ビツトさえ封じ込めてしまえば五分だが、ダイヴトウ・ブルーは近接装備のナイフが非常に厄介で、射撃武装を失った途端にレイラとセシリアは中距離からの攪乱しつつの射撃戦から、レイラを前衛にセシリアを後衛へとフォーメーションを切り替えてくることだろう。

セシリアは未知数だが、マコトはレイラが近接格闘戦も不得意でないことを知っている。何より、前世ではアカデミーのナイフ戦でかなり苦労させられた。

「おまけに身のこなしも隙がないし。どう攻略すべきか考え中だよ」

「へえ、めっちゃ強いんだレイラさん」

「…………マコトさん、彼女の評価が異様に高いの、気のせい?」

「え? そうかな?」

簪にレイラへの評価が高すぎると嫉妬混じりに言われてしまい、彼女は言い訳をどう言ったものかと考える。前世のことは言えず、さやかがいるので脱走騒ぎ時のことも言えない。

「ええつと、ほら、一夏の練習私も見学してたことがあつてさ。そのときにレイラの動き見てたの。あとほら、クラス代表戦の時も」

「…………そう」

とりあえず簪は納得したのかそれ以上は聞いてこない。さやかは苦労してるなくと友人のことを面白がりつつ、手に出したブレードを

弄んだ。

「しつかしすぎいよねー、剣でろーって思うとこうやって出るし」

「ISのイメージ操作って、画期的だよね」

本来、量子格納庫に入っている武器を出現させるには練習がそれなりに必要なのだが、さやかはすぐにコツを掴んでいたのでもうしてマコトたちとお喋りを興じている。ちなみに、さやかのパートナーはルームメイトで1年2組のティナ・ハミルトンというアメリカ人の少女だ。

そのティナはまだアリーナの隅で基本動作の練習をしている。

マコトはこのISの操作を画期的だと言った。前世でもモビルスーツの武装展開などはあらかじめ入力してあるモーションからセレクトして装備できたが、今世のISは想像すればもう手の中に装備があるのである。戦技の中にはラピッドスイッチと呼ばれるあらゆる武装を瞬時に展開し、入れ替えを繰り返し一人で飽和攻撃を可能とするものがあるがマコトは装備の好みの問題と打鉄の量子格納庫の容量の少なさから練習はしていない。

「この目に映ってる情報もさー、これ知りたいっていうのすぐに出てくるし、コンピューターが優秀なんだね」

「さやかは結構感覚派？」

「そうだよマコト。私結構、感覚でやつちゃうこと多いから、逆にティナみたいに理論的にやろうとすると慣れるまで大変みたい」

マコトはなら感覚派よりの箒がなんで飛べないんだと考えたが、彼女が変なところ真面目なのを思い出して、論理的に人が単独で飛ぶということを理解できなかったのだらうと思った。脳筋気味とはいえ、この二ヶ月でISの理論的な部分にも触れてきたため、流石に入試の時のように飛べないということはないとマコトは思いたかった。

でないと、箒は攻撃するたび、地走と跳躍を繰り返すシユールな絵になっちゃう。

「ねえ、マコト。せっかくだし私と模擬戦してくれない？」

「えっ？あたし？」

突然、さやかがそんなことを言ってくる。マコトはまさか勝負を挑

まれるとは思わず驚いてしまった。

「いきなり代表候補生に勝負を挑むのもね」

「ふーん。つまり私は前座と」

「いやいや、そんなつもりで言ったわけじゃなくてね。恐れ多いって意味」

恐れ多い。そんなことを言われたのは簪にとって初めてのことでちよつと照れてしまう。マコトはさやかが侮っているわけではないとわかっていてあのように返したが、意外な友人への視線に気がついて嬉しかった。華々しくはないが、ひたむきな簪の姿勢をマコトは知っている。その努力に裏打ちされたものが一夏の戦闘で見せた不完全な機体をコントロールして見せる技量だった。

「そっか。じゃあ、よろっか。下の子たちもISつけてるし、このまま」

「オツケー。ルールとかは？」

「実戦形式でいこっか。時間的にもちようど1戦したらいい感じだね」

「それならせつかくだし、ティナも入れてやっぱり4人でやらない？」

「簪さんが恐れ多いんじゃないの？」

「まあそれはそれ。うまい人と戦うだけでも勉強になるからね」

前向きなさやかは通信で彼女のパートナーを呼ぶ。すると、上空に上がってくるフリカアトラが一機。乗っているのはアメリカの少女だとすぐにわかる金髪青目の少女だった。髪は肩より少し長く、顔立ちはIS学園の生徒に例を漏れず可愛い。肉付きの良い体のラインがスーツ越しに出ていた。

「さやか、どうしたの？」

「ティナ、今からこの二人と模擬戦しよ」

「ええ!? そんなの無謀すぎない!?!」

ティナはさやかにそう言われ目を見開く。ティナはサイレント・ゼフィルス襲撃時に逃げるのが遅れた生徒で、最後にレイラとセシリアが逃した生徒でマコトがサイレント・ゼフィルスと戦ったことを知っている数少ない生徒だ。更にその相方が日本の代表候補生となれば

もはや戦いにならないとティナは思った。

「私、飛ぶのもフラフラなんだけど」

ティナが言う通り、3人に合流するために上昇をしたがその動きは覚束なかった。おまけに操作イメージがまだ不完全なのかスラスターを一瞬誤操作して吹かしたり、戦闘機動が取れるかも怪しい。

「けど、せつかくの時間だし戦ったことがないのにいきなり本番でつていうのも無理じゃない?」

「そうだけど」

「…………ハミルトン、さん?」

「あ、はい。そうですよ」

簪が珍しく初対面の相手に声をかける。マコトは少しだけ驚いたが、ティナとさやかの様子を見て、話しかけてもいいと判断したのかもと思った。

「えっと…………どうして扱いつらい…フリカアトラを?」

指摘したのはティナの乗るISだった。フリカアトラ、アメリカの第二世代機であり主力機。経験者が乗ればトリッキーな動きから堅実な動きまでこなすことができる限界性能の高さがウリだが初心者では性能をまとも引き出せない難易度の高い機体であり、ティナが選ぶにはあまりにも向いていない機体だ。

簪は何故それを選んだのかまずは気になった。

「えっと、これ選んだのは…………コニールちゃんが使ってるのと同じだから、かな」

「…………それだけ?」

「そ、それだけ」

簪は理解できないといった様子だが、マコトは思い当たるものがあったため、フォローするように口を開いた。

「簪さん。2組、みんなコメット姉妹のファンみたいだから」

「つまり、推しと同じものを付けたい、ってこと?」

「そうそう! そうなの!」

的確な「推し」という言葉が簪から出たせいかティナは興奮気味に同意した。さやかは苦笑いしている。

「だからこの機体で頑張れたらなーって」

「……まあ、練習すれば伸び代のある機体だから……」

「そうなんだ。じゃあ頑張らないとね」

「よしよし。それなら模擬戦、いいでしょ」

「いいよ、さやか」

テイナが乗り気になってくれたおかげで、無事模擬戦が出来る流れになったとさやかは満足げだった。

そうしてその後、時間一杯まで模擬戦が行われたが、結果はさやかとテイナのボロ負けであった。しかし、さやかもテイナも敗北から学ぶことが多かったのか、マコトにも簪にも模擬戦後、多く質問をし、簪はあまり普段はたくさん喋らないせいかわ練習後疲れ切ってしまった。いた。

だが、二人がそのまま夕食をとって寝るといふことはできなかった。マコトの元にレイラから悲鳴のような通信が飛び込んできた。

セシリアが昏睡状態に陥った。そんな、凶報が。

セシリアについての知らせを受けたマコトと簪は疲れた体を動かして運び込まれたというIS学園の保健室へと走る。放課後で校内にいる生徒はまばらのため、二人はスムーズに保健室まで向かうことが出来、到着すると勢いよく扉を開いた。

「レイラ！セシリアさんがって！」

「マコト……」

息を荒くしながら中に入りマコトが言えば、保健室の一角にあるベッドに寄り添っていたレイラが不安げな顔をしてマコトの方へ振り向いた。前世でも見たことがない泣きそうな顔に、マコトは尋常ではない事態が起きていると悟る。すぐにベットまで駆け寄り、マコトはそこに伏している人物を確認する。

セシリア・オルコットがまるで死者のように顔を真っ白にして息をしていた。

「ッ………」

思わずマコトの頭に、看取った少女の顔が過ぎる。苦々しい顔をす

るマコトに、簪がまた知らない顔だと感じた。

マコトはなんとか冷静になろうとこの場にいる人々を確認する。まずベッドの周りにいるのがレイラ、箒、一夏、シャルロット、ラウラ。そして、マコトと簪のいつものメンバーだ。あとは、7人から距離を少しとって、シャルロットの母であり今はこの学園の保険の先生であるシエラが白衣姿でおり、そこに並んで七槻しばね姿の束と千冬、こちらも普通でないまるで罪人のように丸椅子に座る制服姿のクロエがいた。

「マコト、大丈夫…じゃないな、その顔」

「当たり前でしょ、一夏。こんな友達がいきなり倒れて…それに、血の気が失せてるなんて…」

「ごめん。そうだよな…それで、デユノア先生、どうなんですか。セシリアの状態は」

一夏がセシリアの容体を問えば、シエラは困ったような顔をしながら語り出す。

「…異常はない、かな」

「ですが、こんなにも生気がないのは…!」

「うん。レイラちゃんだっけ？シャルのお友達の。君が今握ってる手は温かいでしょ?」

「それは」

「私が『診て』もどこにも異常がなくて、えつとお、七槻先生にもバイタルとか診てもらったけど、なんにも異常はないんだよ」

シエラの言葉にそんなはずはないとレイラや生徒たちは言いたかった。明らかにセシリアの状態が外から見ても異常だとわかるのに、数値や診察では異常がないというのだ。

母に再確認するのはシャルロットだった。

「母さん…ああいや、デユノア先生。本当に異常はなかったの?」

「うん、ないよ、シャル」

「そんな…」

シャルロットは知っている。シエラがただのお気楽で能天気な母でないことを。シエラが持つ特別な『瞳』は看護師時代から人を

診る“ことで何かとその異常がすぐにわかるというある種の異能だった。それをこの場で知るのはシャルロットと本人だけだが、近侍するものとしては篠ノ之神社の霊地や束の“患者”であるスコールの“力”。IS存在以前からこの世にある不条理な力の一端だった。だから、そんな母がなんの異常もセシリアから見れなかったことが信じられないという気持ちでシャルロットはセシリアをちらりと見る。明らかに健康でない姿だ。

「…それで、そちらの教員は」

ラウラが睨むように七槻しばねを見る。束は変装のせいで不機嫌そうな顔を更に不機嫌にしてラウラを睨み返す。束本人としても初対面の人物に…加えてこの状況を作った無自覚な元凶にそのような不遜な態度をするのは腹が立つ。

「織斑先生、そちらの生徒は随分と礼儀がなっていないようですね」

「七槻先生。今は礼儀の話をしている場合ではない。何がオルコットに起きているのか説明をお願いしたい」

事情を知らない者が見れば千冬がお願いしているように見えるが、実態は千冬が「無駄なこと喋らずさっさと見え束」と言っている。束は千冬に言われ仕方がないため息をつきながら話し始めた。

「…：…：そのセシリア・オルコットの状態だが、基本的にはデユノア先生の言う通り、あらゆるデータが“健康”と示している。決して脳死のような状態ではない。脳波も観測されている」

「しかし、昏睡しています」

「れ…：デユランダルさん。あなたの言う通り、昏睡しているのも間違いではない。それも、データ上は異常がないが、異常な状態で彼女は今眠り続けている」

七槻しばねはベッドの側まで歩み寄り、セシリアの首に触れる。確かな生者の温かみはあるが、その肌は陶器のように冷やかに見える。異常な状態、七槻しばねが言ったそれは誰でもわかる。

では、何故診察で異常がないとハッキリ言い切れるのに七槻しばねは異常だと言い切れたのか。

「七槻先生…：…と言いましたか。まるであなたは原因を知っているよ



うだ」

箒の抜身の刀のような剣呑な瞳が七槻しばねを見る。箒はわかっている。一目見た瞬間に、この七槻しばねが『篠ノ之束』であることに。できることなら今すぐ斬りかかりたいが、友人の非常事態にそれだけは抑えている。

「彼女は私の友人だ。原因はなんですか、誰が元凶ですか」

七槻しばねとしては箒に負けじと平静を装うが、内心は悲鳴をあげそうになりつつ束は唐突に指を差した。

「原因の一つは……君だ」

「なに？」

しばねの指が差したのはラウラだった。全員がラウラに視線を向け、レイラは信じられないといった顔をする。いきなり犯人扱いされたラウラは病室であることを考慮してなんとか怒りを抑えつつも、ひどく憤慨した表情をしばねに返す。

「私はただ、セシリア、レイラ……あとはそちらに座っているクロニクルという生徒の近くを通りかかっただけだぞ。それだけで人をこのようにするなど、悪魔か何かなのか私は」

「何も君を犯人に仕立て上げたいわけじゃない。トリガーの一つだったと言いたいんだ」

しばねがベッドから離れ、クロエの側に戻る。マコトがよく見れば、クロエは泣いている。静かに、しかし、涙を流しながら。外に出る時はしている外付けハイパーセンサーはなく、目蓋を閉じているため泣き腫らしているかはわからない。

「デュランダルさん。君たちは学園のテラスでクロエくんとお茶をしながら、その銀髪の生徒が通りかかった瞬間に彼女は倒れたと言ったね」

「ええ……ですが、ラウラさんがそのような危害を加えたとは」

「だからトリガーだと言っている。……心苦しいが今回のセシリア・オルコット昏睡を引き起こしたのは彼女、クロエくん……正確に言えば彼女が持つ専用機『黒鍵』の単一機能のせいだ」

全員が絶句する。クロエの泣き声は止まらない。

「わた、わたしの、せいで、セシリアさんが、セシリアさんが、こんなことにつ」

あまりに悲痛な声に、レイラもマコトも、他の面々も彼女に何が起きたのか問う気が起きない。何より、このクロエの様子を見れば、初対面である一夏や箒も何らかの事故でこんなことが起きているとわかるし、責めようという気はしない。

「ISだど？しかも単一能力？そんな人間を直接的に昏睡させるような機体など聞いたことも」

ラウラが当然の困惑を示す。これまでのISはあくまで人型の機動兵器であり、このように直接人間に作用するようなものはなかった。だが、クロエの専用機はそうだとしばねは言ったのだ。

「……君たちを信用して言おう。クロエくんは決して目の疾患だけで特別学級にいるのではない。彼女のISはこの世に一つしか存在しない『生体同期型』だ」

「七槻先生、それは一体」

マコトが震える声で問う。生体同期。それが意味することなどすぐにマコトには理解できる。だが、幼馴染みの助手がそんな状態なのだと思いたくはなかった。

「読んでそのままだよ。クロエくんの体にはISがあり、そのISによつてクロエくんの不安定な体をなんとか普通の人間と同程度の生活ができるように支えている。正確にはISとして組み込んだ生命維持装置と言った方が正しいか」

「クロエ先輩が、そのような」

レイラも、ラウラとの関係性はある程度考えていたが、そんなことよりも信じられない情報にクロエを見つめてしまう。見た目は普通の少女だというのに、この華奢な体にISが入っているというのだ。

「そして、この彼女の体にあるIS『黒鍵』は性質上搭乗者のイメージ操作を強く受ける。これは生命時装置として必要な機能でもあり仕方がないものだったが、今回はそれが裏目に出た。その銀髪の生徒を見た瞬間、精神的ショックを受けたクロエくんが単一機能を暴走させ、セシリア・オルコットに使ってしまったのだよ」

「私を見て精神的ショックだと、どういうことだ!？」

「落ち着けラウラ」

「教官…しかし、いえ…理由が、全く見えません」

「君は自らの容姿に無頓着なのか？クロエくんを見て何も思わないのか？」

「何を……」

しばねにまるでゴミを見るような目で見られ、ラウラはいよいよ噴火しそうになるが、言われた通りクロエをよく見る。ここに来るまでつけていたバイザーのようなものがなくなり、素顔が今はよく見える。

銀糸のような髪に、整った愛らしい顔つき。だが、見れば見るほど「他人のようには見えない」感覚が彼女を襲う。

「……なんだ、あなたは。あなたは一体、なんだ。誰、なんだ」

「君」だよ。銀髪の生徒」

「馬鹿な…！仮にそうだとしても貴様何故それをつ！」

「ラウラ！」

「ぐっ…！」

千冬に止められ、ラウラは椅子に座り直す。今の問答でラウラとクロエの関係を理解できたのは最初から想定していたレイラ以外に、マコト、簪、シャルロットだった。

「……それって…」

簪が思わず聞こうとするが、それをしばねは遮る。

「だが、それは重要ではない。あくまでトリガーでしかない。問題はクロエくんが暴走させてしまった「黒鍵」の単一機能「ワールド・パージ」のほうだ」

しばねの口から出てきた「ワールド・パージ」という聞き慣れない言葉。しばねは説明を続ける。

「この単一機能の特徴はISを装備している相手にISコアネットワークからコアに接続している精神に直接働きをかけ、幻覚やISコアの演算機能を生かした「夢」を見させるといったものだ」

「そんな単一機能がありえるんですか!？」

シャルロットが驚愕するのも止む無しだ。ISの開発企業としては単一機能というものは喉から手が出るほどほしいもので、作り出すことができない、専用機のみが長い間搭乗者と戦い続け発現するしかない。

代表的な千冬の『零落白夜』も千冬が戦い続け、彼女を理解した白騎士コアが生み出した『この世全てを斬り裂く剣』なのだ。武器でない単一機能など彼女は考えたこともなかった。

「一つ講義をしよう。単一機能のことは話しましたか、織斑先生」  
「いいえ」

「では……単一機能とは量産機のように搭乗者が固定されていないものには生まれられない特殊な能力だ。専用機のみには発生しない、ISコアが搭乗者を理解し、無から生み出す概念装備：故にその機体以外では再現できない。搭乗者の持つ心象風景を起動トリガーとするからだ」

しかし、このしばねの説明には矛盾が生じる。一夏の白式という別の搭乗者の発現した単一機能を使用したISがあるからだ。当然そこは一夏に突っ込まれた。

「けど、七槻：先生だっけ。俺の白式は織斑先生と同じ能力を使えますよ」

「君の場合は例外なのだろう。織斑先生の弟だからなのかどうなのか……」

束は実際の理由を知っている。千冬と一夏の生態データが一切変わらないのと、白騎士のコアAIの成長度合いが他のコアと比較にならず、人に対しての理解度が高いためだ。一夏の場合は白騎士が判断して一夏に使わせている面もある。

だがそれは言えないため、あたりざわりない言葉で濁される。

「……一夏の場合は男性操縦者、だから未知数なのかもしれない」  
シャルロットはしばねの言葉に納得したのかそう言う。彼女のおかげで一先ず場は一夏は例外と落ち着き、しばねは話を続ける。

「話を戻そう。心象風景：つまりは搭乗者の心と距離が近ければ近いほど、その発現は早くなる。加えて、クロエくんの単一能力の発現は

戦場とは遠く離れた場所でのことだ。……何故このような機能になつたかは彼女のプライベートに関わるので伏せるがね」

「……戦場とは関係ない場所で生まれた単一機能。それはわかりました。では、何が彼女に起きていますのですか」

通常の単一機能とはかけ離れた能力はわかったが、ではその力がセシリアに何をしたのか。レイラはしばねに問う。しばねを：束を見つめる青い瞳には怒りと悲しみと、束に向ける信頼が見えた。この状況をどうにかできるはずだ、という。

「……大丈夫だよ、れーちゃん。私は薄情だけど、外道じゃないからね」

本当は声を大にしてなんとかできると束は言いたいが、この状況ではそうもいかない。だから七槻しばねとして冷静に答える。

「今、セシリア・オルコットに起きてるのは“ワールド・ページ”による“夢見”だ。より具体的に言えば、ISコアの演算機能を使った仮想現実世界にダイブしている状態だ。VRゲームというものを君たちは知っているかな？」

しばねの問いかけに、簪だけが手を挙げた。

マコトのルームメイト、として一方的に知っている存在と言葉を交わすのはこれが初めてだと束は思いながら簪を見た。

「君は」

「……更識、簪です」

「そうか。君はVRゲームがわかるようだね」

「けれど、あくまでそれは視覚で訴えかけるようなもので……精神をフルダイブさせるようなものはまだ空想の域……のはずです」

簪の言う通り、この世界においてもVRゲームはあくまでヘッドギアを頭につけて視覚的に訴えかけるものでしかなく、精神を直接ゲームに取り込むようなものは出来ていない。

「だが、実際に起きていることはそういうことだ。言わば、セシリア・オルコットの精神はブルー・ティアーズの中に閉じ込められている状態だ」

セシリアの耳に付けられたブルー・ティアーズの待機形態であるイ

ヤーカフス。そこに今、セシリアはいるのだとしばねは言う。だが、それでも解決策はわからない。一夏は「じゃあ外せば…」と言うが、しばねは「そんなことをすれば彼女は植物状態になる」とはつきり告げた。

「なら、どうすりゃいいんですか。このままじゃセシリアが」

「一夏、お前も落ち着け。そのために先生を呼んだんだ」

「待たせて申し訳ないが、解決策を教えよう。クロエくんのこの単一機能だが正常作動すれば危険なく起こせるが、今回のように暴走すると外部から単一機能で起こすことに大変なリスクが発生する。具体的に言うとは精神が崩壊する。それを避けるためには、内部から対象者を起こす必要がある」

内部から起こす。意味不明な内容だがレイラは「まさか」と声を漏らす。

「七槻先生。まさかとは思いますが、我々でセシリアの夢の中に入り込むということですか」

レイラの答えに、しばねはにやりとした。

「正解。その通りだ。細心の注意を払い、セシリア・オルコットのISの待機状態端末にこのコードを繋ぎ、同じく今ISを持っている者たちの端末に繋ぐ。その上で、クロエくんが単一機能を使用し、繋げたものたちをセシリア・オルコットの夢の中、正確にはブルー・ティアーズが展開している仮想空間へ飛び込んで、彼女の精神を救出してもらう」

しばねが取り出したのは待機状態のISをメンテナンスするための接続用コードで、通常であれば片方がISの差込用、もう片方がパソコンなどのUSB差し込み口に対応したものになっているが、彼女が今持っているのは差し込み用の端部がどちらもIS用になっているものだった。

人の夢の中に入る。そんなことができるのかと全員が半信半疑だが、現状それしか方法がない。

「七槻先生。策はわかりました。じゃあ誰が行くんですか」

マコトが問えばすぐにしばねは回答する。

「彼女に近しいものが一番いいだろう。デュランダルさんは絶対だ。あとは……そうだな、知り合って期間が短い、出会って一ヶ月も経っていないものは避けるといい」

「何故でしょうか」

「デュランダルさん。他人に自らの心を晒すのだよ。出来れば君だけが行ってほしいが何が起こるかわからない。だからこの基準だ。加えて、今ISを持っているものが行ける。そうなる……」

今この場でISを持っていて、かつ基準を見たしているのはレイラ、一夏の二人しかない。

「待ってください。私も」

簪が名乗りあげる。打鉄二式は確かにないが、倉持技研から預けられている打鉄丙は量産機でありながら待機状態を持つ専用機仕様のため、簪はネットワークス状態にして持ち歩いている。

「なら君もだ。あとは……いないか。なら飛鳥さん、君にこれを渡すので一緒に行くといい」

「え？ どういう……」

いきなりしばねが白衣にポケットから投げたものをマコトはキャッチする。それは赤い羽のようなものがあしらわれたバッジのようなものだった。それはどこか、前世で身に付けていたフェイスバッジに似ていた。

「一時的に貸すこちらの教室の備品だ。ISだが展開はしないでほしい、機密なのでね」

マコトはしばねの……束の目を見る。そうして、確信する。この待機状態のISがなんなのかを。

「(黒騎士の待機状態……ありがとう、束姉さん)」

真新しいそれはマコトの今世の愛機となった黒騎士の待機状態に間違いなかった。友人の危機に待ってはられないというマコトを想つての束の図ら이었다。

「さて準備を始めようか。行けない生徒たちには申し訳ないが彼女たちを見守ってあげてほしい」

しばねがマコトたちを見て言う。ここに、セシリア救出作戦が開始

されたのだ。

そうして、救出に赴くことになったレイラ、マコト、簪、一夏はセシリアのＩＳとそれぞれのＩＳを接続し、目を閉じ、クロエが「ワールド・パージ」と唱えたところで急激に何かに吸い込まれるように意識が一瞬飛ぶ。

そうして、気がつけば先ほどまで保健室らしい消毒液のような匂いが消え、気持ちの良い太陽の日差しと芝生の匂いが広がっていることに気が付く。マコトが目を覚まし、体を起こすと周囲の風景は一変していた。

「ここはっ!？」

辺りを見渡せば、そこはどこかの郊外で長閑な空気が流れている場所だった。マコトの周りにはレイラや簪、一夏が倒れており、彼女は慌てて3人に声をかける。

「さっきまで保健室にいたんじゃないっけ」

「……そのはず」

一夏と簪もこの状況に驚愕し、しきりに周囲を見ている。だが、レイラだけは違った。起こされると周囲を見て、何かを納得したかのような顔をする。

「レイラ?」

「……皆さん、私についてきてください」

マコトが問い掛ければレイラはそう言うって歩き出す。3人が慌ててついていけば、彼女の足は4人が倒れていた芝生の上から整備された道に戻る。歩けばそこそこの一軒家がまばらに立っていることに気がついた。

「レイラ、ここはどこなの?」

「イギリスのある郊外です。……とても長閑でしょう?」

「そうだけど…」

懐かしむようなレイラの顔に、マコトはどういうことだと怪訝な顔をする。しかし、レイラはそれを察しても何も言わなかった。

「ここは私たちにとっての思い出の地。出会い、別れ、そして忌まわし



い記憶が眠る街」

語り出すレイラ。そのまま彼女の歩みと口は止まらない。

「セシリア、何故彼女が時折私に仕えるよう態度をしますかわかりますか？何故私が彼女を大切にしようとしているかわかりますか？」

それは3人に向けて質問はしていなかった。レイラはずっと、上を見上げながら言っている。

「ただ…あの碧い宇宙に行きたいと…どこにでもいる少女のように父と母に言ったあの子が…何故、奪われなくてはいけなかったのでしょうか。親の業は子の業でもあると、そう言いたかったのでしょうか」

歩き続けて、4人の前に現れたのは大きな洋館だった。城にも見えなくもないその洋館の門の前に立つと、レイラはマコトたちに振り返る。3人の目に映ったレイラの顔はあまりに悲哀に満ちていた。

「ここは、オルコット家。今はもうない…心無いものたちによって彼女の大切な家族諸共焼き払われた悲劇の地…21世紀最大の一家殺人事件『オルコット事件』の現場」

レイラの言葉に、一夏は震えながらも「どういうことだよ」と問う。「前に、セシリアが言っていたでしょう。両親がいないと」

マコトは嘘だと思いたかった。事故で亡くなったものだと思い込んでいた。しかし、違う。今のレイラを言葉が正しいのなら。

「…セシリアさんは…奪われたの？家族を」

怒れる瞳が目を覚ます。脳裏に過ぎる、ぐちゃぐちゃになった両親と、身体中がおかしな方向を向いて、千切れた腕がまるで助けて、と伸ばされたように「彼」に向いていた。平和な世界のはずなのに、すぐ側にいたのだ。マコトと同じ、世界の理不尽に襲われた少女が。

「マコトさん…」

簪が思わずマコトの手を掴む。マコトは彼女の体温を感じて、どうにかぐつぐつと煮えたぎるものを押さえ込むが、それでも抑えきれないほどだ。

「レイラ。これが…前に言っていた、この世界の『業』なの？」

「ええ、そうです。私の、今世の生き方を決定付けさせた…この世界

の業です」

レイラが再び空を見上げる。釣られて3人も見上げたが、何の変哲もない夕焼けが広がっている。

「忘れるはずもない。この空を。あの日の、あの時間の空」

「今、我々がいるのは、セシリアの住む屋敷が襲撃された日…襲撃時間はこの日の晩」

「どうすればいいのかわかりません。ですが、何をすればいいのかわかります」

「この『悪夢』に捕らえられたセシリアを救い出す。それが今、私たちの為すべきことです」

「力を貸してください。お三方」

決意を秘めたレイラの瞳が3人に向けられる。大切な友を救いたい。そんな気持ちが強く伝わってくる。マコトたちの返事は決まってきた。

「当たり前だ、手伝うぜ」

「……頑張る」

「任せて、レイラ」

3人の友からの言葉を受け、幻の姫君は自らの騎士を救うため、今再び悪夢の中へと足を踏み入れた。

## # p h a s e — 2 5 「真なる回帰」

私、セシリア・オルコットと姫様の出会いは5歳の頃……父の友人だったギルバート様がレイラ様のために開かれた誕生日会でのことでした。既にロイヤルファミリーではなくなっていたとしても、タリア様のお人柄から未だに人気は根強く、レイラ様も幻のプリンセスと当時は持て囃されていました。

幼い私からすれば、立場はどうあれ相手はお姫様。今日のようにオルコット家当主としての胆力などない私は初めて出会うやんごとなき身分の方に怯えていたのです。加えて、オルコット家は…死の商人ともされる兵器開発を担っていた鍛冶からの成り上がり。

初めての社交界で味わった子供たちからも、大人たちからも向けられた視線が辛く、苦しかった。私は死神のこども。だから、こんな高貴な方々がおられる場所にはいけない。そんな風に思っていました。

だから、パーティーが始まってすぐ、父の側から逃げ出すように私はテラスへと足を運びました。父は冷たくも……いいえ、今にして思えば苦笑いしながら……私を一人にしてくださいました。普通の家庭ならば、ここで放置するというのはきつとよくないことなのでしょうけれど、私は一人になる時間が欲しかった。父は優しすぎるから、それがわかっていたのだと今の私は考えています。

一人となったテラスから夜空を見上げれば美しく輝く星々たちが碧い宇宙に広がっている。こっそりと忍び込んだお父様の書齋で見つけた星にまつわる神話を纏めた本や、宇宙に関する本。難しくてもそこにある浪漫は大いに幼い私に刺激を与えてくれていた。

父も母も、わかっている。それでも私の境遇をどうすることもできない。幼い私は既に達観というものを知っていましたのでしよう。窮屈で、誰も私を見てくれないこんな鳥籠のような地上ではなく、星々が自由に瞬く宇宙に羽ばたけたらどれだけよかったですだろうか。

——星に手を伸ばして、どうされたのですか？

可憐な声。不敬を働いてまで聞くはずのなから声が私にかけられ

ました。振り向けばそこにいたのは月光に美しい髪を輝かせ、まるで地上の星のように吸い込まれそうな蒼い瞳が私のことを認めていません。

私と同じく幼いのに、まるでそれ以上の何か『大きな』モノを背負ったような存在感。私のドレスよりも遥かに良い仕立てのそれは、彼女の美貌を際立たせていた。

——あなたは？

——セシリア・オルコット、ですわ。

——初めまして、セシリア様。私はレイラ・デユランダル。

姫様。私は慌てて膝をつこうとする。失礼を働いた。なら頭を垂らすしかない。当時の私の無様な処世術とも言えないそれを、レイラ様は優しく、手をかざすだけで止めて見せた。

いいえ、手の仕草など見えなかったと思うのですが、何か「言葉が走った」ような気がして、私は彼女の前で、無礼にも呆然としていたのです。

——星が好きなのですか？

そんな私のことなど気にしていないかのように姫様は私の横に並び、テラスから空を見上げていました。

——レイラ様、わたくし、ごぶれいを。

——ふふ、こんな唯の小娘に、様づけなんていいですよ。

——ですが。

——なら、命令です。セシリア、と私も呼びますのであなたも私のことはレイラと呼び捨てにしてください。

——そんな、私はそのような恐れ多い。

——いいですね？セシリア。

レイラ様は強引なところがありました。それは今でも変わりありませんわ。時には男性のように凛々しくもあられるというのに、幼い頃は笑顔で、まるでこれまで堰き止めていた「わがまま」をたくさんせている…そんな失礼なことが脳裏をよぎったことがありました。あまりにも、根拠のないことでしたが。

そんな強引な姫様の命令に私は呆気にとられながらも、レイラと呼

び捨てにすることにしました。抵抗はありましたが。

——それで、質問の続きですが。

——ほ、星よりも、宇宙が好きです。

——宇宙が……。

そう言つて夜空を見上げるレイラ様はどこか望郷の念に駆られて  
いるようにも思えました。

——あなたには宇宙がどう見えているのですか？

——碧く、とても綺麗で、星も輝いていて……すごく、自由に、そ  
のように見えています。

——ふふ、そうですね。この『世界の宇宙』はきつと、そうなので  
しよう。

レイラ様にも宇宙が『碧く』見えているようだった。漆黒、父も母  
も宇宙をそうだと聞いたが、私にはずっと碧く見えていた。暖かく、  
星となった神々がおあせられる、自由な場所。

——私はあの宇宙に行きたいのです。

——宇宙に：ですか。

——あそこなら、きつと、あの星たちのように自由に輝ける、そう  
思うのです。

血統によるしがらみも、国境も、人種も……そんな区別などない場  
所だと、私は暖かな宇宙の色を見てそう思った。そこならば、父とも  
母とも、武器商人の家族ではなく、ただの親子でいられる気がしてい  
た。

レイラ様はそんな私の言葉を聞いて、ただ優しく微笑まれています。  
た。

——素敵な夢ですわね。

それから、私とレイラ様は友人の関係になりました。もともと、あ  
の誕生会は私とレイラ様を引き合わせようという両家の親たちの狙  
いがあったようでした。

幼い頃のレイラ様はどんなありふれたものにも興味を抱いて、世間  
一般の姫様というイメージからかけ離れたやんちゃなものでした。  
気がつけば私もそんな彼女に釣られて自然と彼女のことを呼び捨て



生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて——。

生きなくてはならない。セシリア・オルコットは生きなければいけない呪いをかけられた。

誰のために？ 死んでいった家族たちのために。

なんのために？ 生きるためには目標が必要だ、故に『宇宙に行くため』に。

私は生きなくてはならない。なんとしても。姫様のような強いお人のようにならなくては。

だから、あの日、家族を全て喪ったあの日の『悪夢』を私は超えていく必要がある。そうして今日も、あの日のようにまた我が家に家族を奪おうと現れた。4人もいる。何度も、何度も、何度きても、結果は変わらない。

今の私は生き続ける。あの日の悪夢を越えて——！

『ええ、マスター。あなた様と共にこの悪夢を何度でも終わらせましょう』

蒼く、深い心が私を包みこみ、私は引き金を『彼女』に委ねた。

セシリアの夢の中、レイラの背にあるのは今は失われたオルコット家の屋敷であり、彼女はこの夢が屋敷襲撃の当日だとマコトたち3人に告げた。レイラの背にある屋敷は平和そのもので、これから襲撃されるようには見えない。

「それで、レイラ。どういうことなんだ」

「改めて説明しましょう。この屋敷が襲撃されたのは大凡8年ほど前です」

「8年前？ けど、海外つつても屋敷が襲撃なんてされたら日本でもニュースになるんじゃないの」

一夏の発言はもつともだとマコトも簪も思った。先ほどの、この夢に入ったときのレイラの言葉からして目の前の屋敷は焼かれてしまっているという。おまけに、セシリアの家は貴族だというものもあった

て海外で凄惨な事件が起これば規模が規模だけに日本でも報道されているはずだった。

しかし、レイラは首を横にふる。

「報道はされていません。8年前……まだその頃は世界があまりにも汚れていました。簪さんはご存知なのでは？」

「……え？」

レイラが珍しく、そのようなフリをして簪は驚いた。基本的に1組における暗黙のルール「過去の詮索・暴露」はしないを意図的に破つて、レイラはそう言ったのだ。一夏はどういうことだ、と簪を見る。マコトは思わず「レイラ！」と声を上げたがレイラは少し静かにするようにと掌をマコトに向けた。

「無理に、とはいいませんし、断片的にでも構いません」

「……でも……ううん、そうだね……」

簪は一夏がいる前で、加えてマコトに対して暗部としての自身を晒すことを一瞬躊躇ったものの、状況が状況であり、今の簪はただ目を逸らすことはしないと考え、覚悟を決めた。

「……知っているよ。私は、8年前までの、世界を」

「やはり、知っていますか」

「簪さん、レイラ、8年前とか、一体何の話をしてるの」

「そうだけ、どうということなんだよ」

8年前。ISが生まれて2年であり、アラスカ条約と呼ばれるISの運用を決定づけるものが全世界で結ばれた年でもある。その頃のマコトは束と箒が離れ、一夏や弾、鈴音と交流を始めていた頃だ。ISによって激変していく世界であったが、マコトの周囲は変わらない日常が続いていた。

二人の口ぶりはまるで世界が完全に変わったとも言わんばかりで、マコトはどういうことなのかわからなかった。

「……8年前まで『亡国機業』と呼ばれるものがあったの。それが報道規制をかけてた」

「はっ……なんだそれ」

亡国機業、聞いたことのない単語に一夏は首を傾げ、マコトも同じ



ように訝しげな表情をする。そんなマコトに、レイラはわかりやすい例を挙げた。

「マコトにはロゴス、といった方がわかりやすいでしょうか」  
「……………ッ!!」

ロゴス。その名を聞いた瞬間にマコトは血が沸き立つような感覚に襲われる。マコトたちの前世、コズミック・イラの世界を裏から牛耳り自らの利益のために戦争を何度も起こし続けてきた秘密結社。あらゆる経済分野のトップたちが手を組み、思うがままに人類を操ってきた悪意の権化。…たとえば、必要悪だったとしてもその所業は行き過ぎ、マコトの目の前にいるレイラが引導を渡したものだっただけ。

「あんなものが…この世界にも、あったの?」

「もしかしたら、ロゴスの前身だったのかもしれませんがね」

レイラの認識ではこの世界は並行世界であり、もしかしたら前世の世界でもロゴスは亡国機業と名乗っていたのかもしれないと考えていた。マコトはそこまでの推測はしていなかったが、今の例えである程度のことは把握した。

「セシリアの両親と…他の家族は、それに…」

「ええ」

「どうして、そんなことを…」

怒りがマコトの思考を支配する。やり場のない怒りだ。先ほどの簪の言葉であれば「あった」という過去形であり、既に滅んでいる相手なのだろう。もはや、どうこうすることもできないことだ。

「ま、待ってくれ!何がなんだか…」

一人、話についていけない一夏にレイラは簡潔に説明する。

「語弊がありますが、簡潔に言うとセシリアの家族は悪の組織に襲われたのですよ。といっても…その組織は襲撃事件から数ヶ月後滅んでいます」

「滅んだって…その、セシリアの家族を襲ったことが原因で?」

名のある貴族を殺してしまったとなれば因果応報、一夏はそう思ったがレイラは首を横に降る。

「いいえ…私がこの事件の首謀者を追い詰めたのは組織が滅んだ後で

す。でなければ力のない小娘が世界を牛耳っていた者を突き止められるはずがありませんでした」

「……………」このオルコット家の事件が起きたときはまだ健在だった亡国機業が、同じ年のうちに壊滅した。何者かによって」

レイラに続き簪が説明し、一夏は余計に困惑する。世界を牛耳るほどの巨悪がどうしてそんな簡単に壊滅するのか。

「壊滅させた何者かは世界中でも、いまだに分かっていません。ただ一つ言えるのは世界を裏から操っていた者たちがいなくなった。それだけです」

「私も、そういう人たちがいて、滅んだことしかわからない。…実家も、詳しいことはわからなかったの」

諜報機関に属している二人の大元ですらも不明な亡国機業の壊滅。マコトはまるで正義のヒーローが人知れずやったのではないかと馬鹿げたことを考えた。今のマコトならばわかる。どんな巨悪でも世界を動かす歯車の一つであり、冷静に考えれば簡単に殺したりすることはできないことを。

それをいきなり、レイラの言葉などから察すれば本当に滅してしまえるというのは余程向こうみずでなければ不可能だ。

そして、それができるであろう二人をマコトは知っている。

「……………」束姉さん、千冬さん…二人が、やったの？」

今のマコトにそれを知る術はなかった。

「…ん、まあ、なんとなくわかった。じゃあ、これから屋敷にそいつらが仕掛けてくるってことか」

「恐らくは。私も襲撃時は居合わせていなかったのですがどういった状況なのかはわからず」

「レイラ、事件の生き残りは？」

「セシリアとこの日休暇をもらっていた使用人たちだけです。彼女の専属メイドもちょうどこの日は外していて、屋敷で生き延びたのはセシリアだけでした」

壮絶な状況に3人は息を飲む。つまり、セシリアは目の前で使用人たちを皆殺しにされているのだ。だというのに、今のセシリアは明る

く、澆刺としている。クラスメイト、友人の窺い知ることができなかつたあまりに暗い過去だ。

「彼女の両親も今日の昼に暗殺されていますが、まだセシリアには知らされていませんでした。なぜかはわかりませんが、恐らくは使用人たちが気を遣ったのでしようね」

「俺でもそうするよ…小さい子にいきなり両親が死んだなんて…」

「一夏、一夏の言う通りだよ。——当主をいきなり暗殺したせいで屋敷は混乱しているからその日のうちに…本当に念入りだね」

「正直、今でもこれは止められなかったと私も悔しいですが認めるしかありません」

屋敷にレイラが向き直る。彼女の背中中は決して大きくないが、小さくは見えない。

「本題に入りましょう。ここがセシリアの夢ならば、セシリアが知るうる限りの事件当日の状況がこれから発生するはずです。目的としてはこの屋敷のどこかにいるセシリアの精神を見つけ出して、覚醒を促せばいいのですが」

ワールドページによる潜入を行う前に。4人はしばね…東から最低限の説明を受けていた。入った先がどういった夢なのかはわからないが、夢に囚われた精神体を覚醒させるのは一筋縄ではいかないと。

「…確認してみないとわからない。まずはセシリアさんに会わなきゃ」

「簪さんの言う通りだね。レイラはどこにいますか？」

「当日のセシリアの動きは把握できていません。屋敷にいたことはわかってはいるのですが」

「とりあえず、中入ろうぜ」

どうあれ前に進むしか今はなく、一夏の言葉に全員が納得した。そもそも夢の中に入って夢の主人を起こすなど4人どころか人類でも初めての行為でどうすれば目覚めさせられるのか4人には皆目見当がつかない。

「七槻先生曰く、出会ってこの世界が夢であることを言えば起きるっ

「言ってたけど」

「マコト、そんな簡単にいくと?」

「思っていないよ。じゃなかったら、レイラ一人でいかせたはずだよ」

束はレイラだけを送るのが本来は好ましいと考えていたが、彼女一人では危険だとマコトたちも同行させている。となればただ声をかけるだけで済むなど、マコトは思っていないかった。

4人は屋敷の敷地内に足を踏み入れる。特に何も起きはしない。前庭なので当然と言えば当然だが、レイラは「おかしい」と呟いた。

「何がおかしいの、レイラ」

「門を抜ければ警報の一つは鳴るはずですよ」

「……………夢だし…」

「セシリアが幼かった頃の記憶をベースに作っているとすればあり得なくはないですか」

この空間がブルー・ティアーズによって生み出されたことはわかっており、ベースとなっているのはセシリアの記憶である。幼い頃のセシリアの記憶では屋敷の形状などは覚えていても警備システムは記憶にない可能性が高い。

レイラは用心しつつも前に進んだ。

「屋敷は正面の本館と左右の分館に分かれています。セシリアの部屋があつたのは左翼分館の三階です。まずはそこに行ってみましょう」  
「おう。ついてくよ」

向かうべき場所をレイラが示し、4人は駆け出す。まずは最初の屋敷の入り口である大きな扉の前に立った。レイラは幼い頃の記憶のままに、ノックする。しかし、屋敷内から反応はない。

レイラはマコトと目を合わせる。

「……………夢、となるとそもそも支離滅裂な空間になっている可能性もありそうです」

「小さい頃の記憶って結構今だと覚えてるようで覚えてないもんな」

「人間は完全に忘れることはない、思い出しにくくなる、というのが正確でしょうがそれでも摩耗はあるはずですよ」

「警戒していこう」

「ええ」

レイラはマコトに頷いて、おもむろにスカートの付け根を触るといつもの長い丈のスカートがはらりと落ちて、中からミニスカートが出てきた。そして、太腿には拳銃がホルスターに収まっている。

「ええ!? レイラ、それ銃!?!」

「はい。セシリアの護衛も兼ねていますからね」

笑顔で言いながら、一夏の困惑を流しつつレイラは拳銃を抜く。オートマチックの銃で、よく使い込まれているのが目に見えた。レイラもまさか現実の装備品をそのまま持って来れているとは思っていなかった。

「…なんというか、すごい似合ってるね」

「ありがとうございます、簪さん」

戦う女子高生といった状態のレイラは簪から見ればロマンの塊だった。前世の経験もあり、レイラは軍人相当の生身での戦闘力もある。マコトも筋力などを除けば概ね同じだが、今のマコトは一般人でレイラのように携帯武器はない。

「先頭は私が行きます。後方はマコトにお願いしたいのですが」

「了解。銃、予備のとかはないよね…?」

「マコトは使えないでしょう?」

はつきりとレイラはそう言つて扉を押し開ける。ロゴスや簪のことは明かしてもあくまでマコトは今世において一般人。対外的には拳銃は扱えない。

ギイ、と音を立てて扉が開く。刹那、反射的にレイラは伏せた。

「なっ…!?!」

蒼い光条がレイラの頭があつた場所を通り過ぎた。木製の扉はその光の余波で焦げる。今の光をこの場にいる4人は何度も見ていた。間違えることなどありえない。IS用の高出力ビーム粒子。

「ブルー!」

咄嗟にレイラは、夢の中にも関わらずダイヴトウ・ブルーを身に纏った。マコトも黒騎士を呼び出す。一夏と簪もそれぞれ、白式と打鉄を呼び出した。玄関から後退すれば、直後に扉が弾け飛び、屋敷の

中から「蒼」が飛び出してくる。

「セシリア……!? いや、誰だ!?!」

一夏が現れた人物を見てそう言った。間違いなく容姿はセシリアだと4人は断言できた。しかし、腰まで伸びた髪は末端部から蒼のグラデーションがかかり、瞳の色も蒼から碧に変わっている。

なにより、纏うISが全くブルー・ティアーズとは似ても似つかない。

「ブルー・ティアーズ・ストライクガンナー? いいえ、違う。あの姿は一体」

レイラはブルー・ティアーズのオプション兵装「ストライクガンナー」の姿にそれが似ていると一瞬感じたが、違うとすぐに断定する。

ベースは僅かにブルー・ティアーズであるとわかるが、セシリアのような少女が纏うISはまるで機械仕掛けのドレスのように4人には見えていた。おそらくはビットが形成しているスカートアーマーが下半身を包み、脚部の装甲は通常のブルー・ティアーズよりもスマートになりながらもスラストのベーンが覗く。

一対の非固定ユニットにはビットではなく固定式のウイングバインダーが搭載されており、まるで天使のようにさえ見える。

そして、手に持つのは「レヴァリエ」の面影を残す二挺のロング・ビーム・ライフル。

「我が友の姿を騙る…何者か」

レイラが「レヴァリエ」を向け、問いかける。対して相手は微笑むだけで、それ以上の反応を返さない。否、口を開き、ロックオンを4人に行う。

「我が主人の悪夢は私が払う」

警鐘が、マコトの中で鳴った。濃密な、殺気。この世界にきて、初めて向けられた純粋な殺意。敵意から来るものではない。もっと、もっと、わかりやすい感情からくるそれにマコトは誰よりも敏感だった。

「我が名はブルー・ティアーズ。主人と共に、この終わらぬ悪夢を相克

するモノであれば」

スカートアーマー状のビットが射出される。その数は3、6、9、12と増えて全ての砲門が4人へと向けられた。その光景に、マコトとレイラは強烈なデジャヴを受けた。同時に、叫んだ。

「みんな！避けるッ！」

ブルー・ティアーズ・ステラドレス——本来であれば“まだ”顕れることのなかったブルー・ティアーズというIS：ではなくインフィニット・ストラトスとしての『リバーシフト真なる回帰』を迎えたソレは主人の愛する友たちをただ悪夢の影として焼き払わんと、数多の光を解き放つた。

## # p h a s e — 2 6 「悪夢を越えて」

「みんな！避けるッ！」

マコトの悲鳴のような叫びは3人に届いて、回避を間に合わせさせた。ブルー・ティアーズ・ステラドレスがビットとロングライフルによるビームの斉射はセシリアほど正確ではなく、あくまで面制圧のために放たれたものだとして回避をしたレイラは判断する。

そんな分析をしながらも、レイラはどうしても目の前の敵性I Sの姿があるものに重なる。忘れることのない。愛すべき“家族”と“友”を討った仇であり、自らも差し違えた“自由の翼”。コズミツク・イラ世界最強格のモビルスーツ、ストライクフリーダムと。

「ビットが来る……！」

「おあつ!？」

ステラドレスのビットが砲撃を終えると即座に4人へ襲いかかった。その動きはレイラをも越える速さと正確さを備えている。一夏が真っ先にターゲットにされ、四方から蒼い光条彼を貫かんとする。「こなくそっ!？」

ガムシヤラに回避運動を行おうとする一夏だが、まるでクラス代表決定戦の焼き直しをするかのように彼は容赦無く撃ち抜かれていく。この世界は夢ではあるが、夢ではないという感覚が4人にはあり、こうしてI Sを纏ってしまうと現実と同様のコンソールが視界に浮かび、被弾する一夏の視界にはいつも通りゴリゴリと削られていくエネルギーのゲージがあった。

「一夏!？」

マコトが援護に入ろうと、ガラムをその手に展開しビットを狙おうとするが今度はブルー・ティアーズを名乗った少女がライフルで狙撃をしてくる。ロックオンアラートは鳴らず、手動照準による射撃は一瞬で行われ、マコトの黒騎士に直撃する。

簪がそれを見て打鉄丙型の非固定ユニットであるブースターユニット“火蜂”内蔵型ビーム・キャノンを相手本体へと連射すると、一夏を取り囲んでいたビットのうち3基がブルー・ティアーズと簪の



間に割って入り、三菱を描くように展開した。

「なにを……!?!」

ティアーズシリーズ特有の高圧縮粒子の青色とは違う、一般的な圧縮濃度の黄金色の粒子ビームがその3片にぶつかった瞬間、甲高い音を立ててビームが跳ね返ってきた。

ビームを反射する。そんな技術はこの世界には存在しない。撃ち返された簪は衝撃のあまり固まってしまふ。しかし、マコトとレイラは違った。二人はここではない別の世界で戦ったことがあった。ビームを弾き返すことが可能になるオーパーツとも言える装甲を持つ、黄金色のモビルスーツと。

「簪!」

「マコトさん!」

咄嗟に簪の前に割り込んだマコトは左腕の甲に装備されていた光波防御帯——シールドバリアをより高出力で限定的に展開する、エネルギーシールドを展開し、撃ち返されたビームを防ぐ。さらに追撃に放たれた相手からのビットによる弾幕も、レイラが放出したシールドビットが正確な操作で受けていく。

「ビームを弾くなんて!」

「あんなの、見たことがないよ」

「一体なんなんだ、あのIS……!」

ブルー・ティアーズの握る二丁のロングライフルからマコトと簪に向かつて放たれ、二人は左右に別れて回避する。ビームがダメならばとマコトはガラムをフルオート射撃でトリガーを引き、簪も打鉄二式で使用していたガトリングガンをコールし、装備することで弾幕を張る。

そうするとブルー・ティアーズはたまらず射線から逃れようと上空へ跳躍した。

「一夏さん!極力背後を取りつつ接近を!マコトは正面から格闘戦に!私と簪さんで援護します!」

「了解!レイラ!」

「わかった!」

「まかせろー!」

レイラが指揮をとって、3人はそれに従う。レイラはビーム・ライフルから実弾のカノン砲に装備を切り替えると、シールドビットを展開しながら簪と共に射撃を開始する。一夏は白式自慢の加速性能を最大限に発揮しながらブルー・ティアーズの背後をとらんと飛翔する。

「近接装備…これか!」

マコトは黒騎士での初めてのの本気の戦闘になったため武装をチェックし、黒騎士側から提示された装備を出現させる。それは雪片とよく似た真つ黒な片刃の剣で、慣れた手つきでスイッチを親指で押し込むと刀身が縦に割れ見慣れたピンク色のビーム刃が展開された。

目の前の敵機がどういった存在であるかわかない以上、本気で、ただし撃墜しないようにする必要がある。それは奇しくも、マコトが忌み嫌った綺麗事を成し遂げる「フリーダム」と同じことをしなければならぬ。

そして、どれだけそれが難しいことかも知っている。

黒雪片を正面に向け、初めてここで黒騎士の翼が展開する。音を立て、光の翼が生やされた。

「(これは、デイスティニーの!?)」

その後ろ姿はレイラにとってはあまりにも見慣れすぎた光景だ。偶然か、それとも必然か、マコトに与えられた剣は初めて鞘から引き抜かれ、その身を晒した。

「…きれい……」

簪はただただ、マコトの姿に見惚れた。御伽噺の戦士のようなマコトの姿に、それ以上の感情が浮かばない。

「黒騎士、いくよー!」

マコトの呼びかけに応えるように、黒騎士が今マコトに出せる全力の機動を開始した。正面から迫りくる新たな脅威にブルー・ティアーズは迎撃をせんとライフルを向け、大出力のビームをマシンガンのように連射する。「真なる回帰」を迎えたブルー・ティアーズにはエネルギー切れという概念はない。白騎士同様、その敗北は搭乗者の心が折

れるか、死か、IS自体の装備が全て破損しない限りありえない。

だが、連射されたビームを避けるマコトを見てブルー・ティアーズは生まれて初めて脅威というものを認識する。

マコトの姿が回避運動を行うたびに大きくブレる。否、輪郭が遅れてついでくる。センサーの類は全てマコトが移動した数秒前の座標を表示する。主人の身体を借りているとはいえど、未だ産声をあげて間もないブルー・ティアーズは機械の感覚の延長線上でものを認識しており、このマコトの不可解な反応を理解できない。

「はああああつー！」

「残像、とでも」

弾幕をかくぐり、マコトが黒雪片を振り下ろす。ブルー・ティアーズは計算上回避不能と判断し、左手に持ったライフル一つを盾にする。ライフルを手放し、滑るようにマコトの側面へ回ったブルー・ティアーズは至近距離でマコトに射撃をしようとするも、今度は背後から襲いかかってくる一夏に気がつき、咄嗟に左手に呼び出したビーム・サーベルで雪片を受け止めた。

「読まれてた!？」

攻撃の瞬間という最も大きな隙を狙ったにも関わらず一夏の攻撃は防がれてしまった。もしこれが現実で、セシリアが相手ならば一夏の一太刀は間違いなく決まっていた。今回は相手が悪かった。

それでも、一夏の攻撃を防いだことでブルー・ティアーズの攻撃は停止し、マコトは銃口の先から飛び退くと、左肩のアーマーに装備されているビーム・ブーメランを抜き放ち投擲する。ブルー・ティアーズは一夏をサーベルで強引に弾くと、そのまま更にビーム・サーベルでブーメランを弾いて、ライフルでマコトを攻撃する。

マコトは一撃目を黒雪片で切り払うと、二撃目を回避する。避けさせてからのキメの二発目が来ると読んでの動きだった。

「す、すごい…マコトさん、あんなに……」

「機体のおかげもあるのでしようが、彼女の本来の動きです」

「……それは「未来」の?」

「ええ。流星は篠ノ之博士、いい仕事をしてくれています」

あの「夜」のことがあったので、レイラは基本的に簪に聞かれてしまえば前世のことは応えるようにしていた。といっても、今回が初めてで、簪はレイラへの質問がその通りだと答えられると、よりマコトを見つめた。

正体不明の、セシリアが纏うISの動きはあくまでセシリアの戦い方の延長線上ではあるが動きが異様に早く、先ほどの挟撃を防いでみせたのも尋常ではない技量だ。なにより、レイラと簪の援護射撃を全て避け切っているのだから、射撃に対しての見切りというのは人間を超えている。

そんなものを相手に一步も引かず、真正面から切り込んで見せるマコトの技量もまた、簪の想像していたものより遥かに高い。高いのだが、簪はふと思う。

これだけの力を持ちながら、救えなかったものがあるのかと。

「一夏ー！」

「ああー！」

幼馴染みである以上、マコトと一夏のコンビネーションも確かなもので、螺旋状にブルー・ティアーズの周りを飛びながら順番に切り掛かっていく。ブルー・ティアーズは簪たちへビットによる射撃を行いつつも、一夏とマコトの近接攻撃をサーベルとライフルでいなしていく。

「このおー！」

マコトが斬りかかると黒雪片の刃と青白いブルー・ティアーズのサーベルがぶつかり、粒子同士の衝突からスパークする。火花の向こうに見えるセシリアの顔はひどく無機質に見え、マコトは本当に誰なんだと相手を知ろうとする。

「あなたは一体……！」

「我が名はブルー・ティアーズ」

「それは、ISの」

「我が名だ」

ブルー・ティアーズの右手に持たれていたライフルが量子化され、新たにもう一本のビーム・サーベルが握られた。それはそのまま、マ

コトの頭部に向けて突き出されようとしていた。

「させるかよっ！」

一夏がそうはさせまいと勢いよくブルー・ティアーズの背後に斬りかかる。結果は先ほどと同じく、マコトと一夏二人してその場からはじかれた。

「ここまでいいようにされるとは……！」

二人が近接戦をしかけているなか、援護を行うはずであったレイラも簪も、ビットによる攻撃で満足にそれはできていない。気を抜けばビットに蜂の巣にされる以上、二人への援護射撃は難しい。それでも、レイラにはまだ考えるだけの余裕が残されていた。

シールド・ビットによる防御を簪に向けながら、レイラは持ち前の空間認識能力で敵のビットを避けつつ、前世並に動いているマコトと荒削りながらも攻撃のタイミングだけは外していない一夏の二人がかりの攻撃を捌き続けるブルー・ティアーズを観察する。

基本的な動きはやはり、レイラのよく知るセシリアそのものだった。ただし、攻撃への見切りやビットをここまで操作しながらの動きはまだセシリアには難しい。であれば、あれはセシリアの姿をした別の誰かか、それともセシリアを借りて戦っている何かになる。

彼女は「ブルー・ティアーズ」と名乗った。このセシリアを襲った悲劇の空間は誰が作ったものだったか。

「ブルー・ティアーズ、そのものの意志……！」

ISコアには意志が宿るとされる。それは束が意図しない形で生まれたものだったが、彼女は孤独な宇宙で隣立つものとしてその存在を許容した。存在を許された“彼女”らはとりわけ、専用機と呼ばれるISの中でよく育った。幾度リセットされようとも、完全な消去には至らず、一人の人間が長く乗ることで彼女らはヒトの心を深く、深く学んだ。そうして生まれたその想いが表出することこそなかったが、今、レイラたちがいる空間はISの中。つまりは、ブルー・ティアーズという“少女”の心の中だ。

レイラはそこまでは知らない。けれども、ISには意志があると言われている、もしその意志が主人の心を覗けるのであればどうなるの

か推測するぐらいはできた。

昏睡し、深い場所に落ちたセシリア。彼女の心に触れた従者はどうするだろうか。

守ろうとするはずだ。かつて、この屋敷でセシリアを守り、命を散らした者たちのように。

「ぐあっ!？」

「ッ……しまった、簪さん!」

シールド・ビットをすり抜け、簪へ射撃が殺到する。簪は決して勇猛ではないが、それでも冷静だ。四方からのビームに恐怖しながらも、なんとか身体をよじりながら、被弾を抑えようとする。

レイラはこのままジリジリと削っていくわけにはいかないと考える。この戦いはただ相手を倒せば終わりというわけではない。そもそも目的はセシリアの覚醒であり、戦うことですらない。

それに、レイラは考えるにつれて、あのブルー・ティアーズに言いたいことが出来ていた。彼女の心に熱が灯る。ダイヴトウ・ブルーのBTシステムがこれまでのように彼女の王としての気質を増幅させるのではなく、レイラ・デュランダルという一人の少女の心をただ、震えさせる。

「ダイブトウ・ブルーのシステムを使う!」

これ以上の時間はかけられない。レイラはすべてのビットを攻勢に転じさせる。簪を守っていたシールド・ビットは途端に動きを獯猛なものに変えて、ブルー・ティアーズのビットと壮絶な撃ち合いを開始する。まるで自身が二人にでもなったかのようにレイラには思えた。それぐらい、彼女は一気にビットの情報を処理できるようになっていた。

使えるならそれでいいとレイラは自身の能力の拡大に疑問を挟まない。

「す、すずい……!」

体勢を立て直し、ようやく一つのビットを撃ち落とした簪がレイラのビットの動きを見て目を見開く。

戦況の変化をブルー・ティアーズは鋭く感じて、マコトと一夏に残

りのビットを差し向ける。飛びかかる一夏を蹴り飛ばし、追いつがろうとするマコトの正面にビットのビームを格子状に放つことで動きを阻害する。

同型機だからこそ、ブルー・ティアーズは感じた。『妹』の産声を。

「レイラー・そっちに！」

ビットが分離し残ったスカートアーマーからスラスト光を見せながら、その名の通り流星のごとくブルー・ティアーズはレイラへと向かってくる。手にする二振りのサーベルと、ウイングバインダーやスカートアーマーから溢れる光が、かつてのレイラの宿敵と一層重なった。

だが、違う。対峙する相手は決してそのような相手ではない。

「あえて言いましょう。ブルー・ティアーズ、あなたの主人は、私の親友は——」

レイラの手には、女王宣誓が握られる。淡く光を讃え、その権能を顕現させた刀身は使い手の意思に従い、振り下ろされてくる青の刃を受け止める。もし現実であれば受け止められないような臂力をレイラは片手、ナイフ一本で受け止めて見せた。

ブルー・ティアーズの顔が驚愕に染まる。

「——私の親友は私が守ります。それに、彼女はそんな籠に閉じ込められるほど、弱くはないのです。例え立ち上がるための力が、呪いのようなものであっても、願いのようなものであっても。セシリア・オルコットという女性はどこまでも気高く、強い方なのですから」  
だからいつまでも、眠っているわけにはいかないでしょう、セシリア。

レイラがそう呼び掛ければ、碧かった彼女の瞳は元の蒼へと戻っていく。レイラを押し込もうとしていた力も弱まっていく。髪の色もレイラと同じ、混じり気のない金糸へと青が抜けていく。

「あ、れ？」

「セシリア」

「レイ、ラー？」

「ええそうです。レイラですよ、セシリア」

マコト、一夏、簪を襲っていたビットの動きも停止していた。戦いは終わった。セシリアは周囲を見渡す。眼下には見慣れた、今は失われた景色が広がっている。

「…夢を、見ていました」

「そのようですね」

「レイラ様と出会ってから『あの日』を迎えるまで、何度も」

セシリアの手からサーベルが消え、漂うようにそのまま宙に浮く。レイラも武器を消し、周囲の3人も武装を解除する。

「私は、生きなくてはいけないのです。あの日散った『家族』のために」

「知っています」

「そして、あなたのように強くありたい」

「今のセシリアは十二分に強いですよ」

「そうでしょうか」

「ええ」

迷うようなセシリアにレイラは偽りのない笑みを向ける。

「私がいなくとも、セシリアは立ち上がっていたでしょう。あなたは強い人です」

「その理由がなんであれ、ですか」

「はい。願いであれ、呪いであれ、想いであれ、どんな理由であってもセシリアは今、立って、飛んでいるのですから」

人の作る根幹を他人が非難する謂れなどなく、今ここが全てであるとレイラは知っている。悲しいことがあった、辛いことがあった。だけれども、今、セシリア・オルコットは振り向くことなく歩み続けている。

なればレイラはセシリアを、親友を信じてその隣に立ち続ける。かつての友を奈落に落としてしまった過ちを犯さぬよう、対等に真っ直ぐに見つめ合う。

「ふふっ、そうですね。私はセシリア・オルコット。オルコット家の当主にして、レイラの友であり、騎士であるもの。ですから、生き続けるのですわ。この悪夢も超えて、私自身の手で、掴むのです」



セシリアが宇宙へと手を伸ばす。この空間を生み出してしまったブルー・ティアーズは理解した。主人は守られるべきものではないと。共に守る人だと、理解する。繰り返される悪夢は次第に溶けて、消えていく。

5人の意識は次第にこの夢の世界と共に現実へと引き込まれる。揺らいでいく視界が真つ暗になると、セシリアはただ一人、そこに残され目の前に現れた存在と相対した。

「あなたは」

「……………」

青い髪をして、ドレスを纏った貴人。セシリアによくは似ているがまったくの別人であることがよくわかる。

その誰かはセシリアに何かを告げたが口が動くだけで聞き取ることはできない。

「あなたは、何を」

「……………」

微笑みを浮かべ、優しく送り出すかのように女性はセシリアから遠ざかっていく。言葉は交わせなくとも、セシリアは彼女が見送ってくれているのだと気がついた。だから彼女はその礼に応えて、胸を張り、礼を返す。

「どなたかは存じ上げませんが、此度の夢、私の始まりを思い返すには役に立ちましたわ。ありがとうございます」

まだ“幼い”青髪の女性は弾けたような笑顔を浮かべ、セシリアの視界が続いたのはそこまでだった。

## # p h a s e — E X 3 「妹（本当に）」

「んー…よく寝ましたわあ！」

クロエの I S “黒鍵” の単一機能によつて昏睡状態に陥っていたセシリアの目覚めて第一声がそれであつた。眠つていた時の死人のような血色の悪さはなくなり、いつもの健康的なセシリアとなつた彼女は呑気な笑みを浮かべて上体を起こし、腕を伸ばした

その様を見た箒やシャルロットは彼女が目覚めるまでであつた緊張の糸が切れるのと同時にあまりのことに吹き出してしまい、千冬は呆れ気味に息を吐いた。

「あら？ 皆さんどうされたのですか？」

セシリアは周囲を見ると近い関係の者たちが一堂に会していることに疑問を持ったのか問いかける。千冬がまさか覚えていないのか、と問おうとしたところで、しばねの姿をした束の横に控えているクロエがセシリアに飛びついた。

「セシリアさん…！」

「く、クロエ先輩？ 急にどうされたのですか？ そもそも私たちはお茶会を…」

「な、なにも覚えていないのですか？」

「いえ、昔のことを夢見て、あとはなぜか夢の中でよく知っているような女性がいたりと…不思議な感覚はありましたが」

セシリアはある程度夢の中のことを覚えていたが、それでも臆気でマコトたちと交戦していたという記憶は無く、過去の記憶と目覚める直線の——の意志との邂逅しか覚えていない。

彼女に続いて目覚めたマコトたちはちょうどクロエからの質問を受けたところを聞いたのでそれならば無理に言う必要もないかと考え、4人は視線を交わして頷いた。

セシリアが無事に目覚めた上、この様子ではなんの後遺症もなさそうだと束は判断する。手に持っているタブレット端末にはセシリアの脳波や夢にダイブしたマコトたちの脳波もモニターされているが異常は見えない。

「(でも、ブルー・ティアーズのコアが“一瞬戻ってた”)」

しかし、束はコアの異常は見逃さない。ブルー・ティアーズが夢という仮想空間の中で本来のインフィニット・ストラトスへ戻ったことを観測していた。何が起きたのか外部にいた束が知る術はないため、マコトとレイラに聞くのが間違いないだろうと判断した。段階的にインフィニット・ストラトスを公表していく中で、この「回帰」は大きな不確定要素だ。

「クラス代表戦の時のいっくんと白騎士とは違う。白騎士はあくまでリミッターの問題、このブルー・ティアーズは自力でコアの基礎に残ってるものから組み直したんだ、自分自身を)」

コアの自我が、より強く出始めている。歓迎すべきことであると同時に、束は未知数になっていく“娘”たちに湧き起こる知識欲が止まらない。

「(最高に楽しいなあ、人とコア。この掛け算でどこまでみんないけるんだろう)」

果てない成層圏への挑戦に、人とコアは無限大の可能性を抱えている。今回の騒動はクロエの親代わりとしては肝を冷やしたが、束本人としては喜ばしい出来事であった。

「セシリア、無事でよかったです」

「レイラもどうしてこちらに?」

心底不思議そうな顔をしているセシリアに、レイラはなんともいえない顔になる。無事目覚めてくれたのは嬉しいし、夢での苦労はセシリアに伝えることでもない。だが、レイラの“少女らしい”部分がほんの少しだけ彼女をムツとさせた。

「あなたは私がそこまで薄情な主だと思いで?オルコツト卿」

「ツ……そ、そんなことは、姫様!滅相も——」

レイラが突然、纏う空気を重圧なものに変えるとセシリアはさつきとはまた違った様子で顔を青くしたが、セシリアが慌てる様子を見たレイラは途端にくすくすと笑った。

「冗談ですよ、セシリア。でも、突然倒れた幼馴染を心配するのは当然でしょう?」

「レイラ……ごめんなさい。無神経なことを」

「いえ、私も意地悪が過ぎました。無事に目覚めてくれて何よりです」  
そうして、微笑みを交わす金色の姫君二人に、周囲のマコトたちはまるで絵画を見ているかのような空気に、周囲に百合の花が咲いているように思える。簪はまたしても、初対面の頃に感じていた「空気が違う」感覚がしてたじろいだ。

「わく、お姫様とお嬢様ってほんとうにぴかぴかしてるんだね」  
そんな空気をぶち壊すかのような発言したのはシエラである。シャルロットは思わず「母さん！」と天然すぎる母にツツコンでしまい、尊さのような何かがあった保健室内に一同の笑い声が響いた。

「ふふっ、いやはや。なんであれ、無事でよかった。オルコット」  
「織斑先生も、ご心配をおかけしました」

「いや、いい。元はといえば、今回の件は私にも責任の一端はある。家族がしでかしたことだ。謝ろう」

「すまない、と千冬が頭を下げる。ここで、セシリアはそんな、といつもであれば声をかけていたところであろうが、千冬という言葉の中にとんでもない言葉が混じっていたことに気がついた。

そして、それを指摘したのは——この空間の中で一番、その言葉を聞き捨てならない存在である、一夏だった。

「千冬姉、待つて。今の、その、家族って、どういう」

「…遅かれ早かれ、言う気だったがこのタイミングは完全に事故だな」  
千冬は校内で、業務時間内にあるにも関わらず、教師としてではなく一人の姉として困ったような顔をしていた。それが先ほどの言葉の意味をより確定させていて、一夏は混乱しそうになる。しそうになるが、先ほど夢でこの世界には（もう滅んでいる）悪の秘密結社がいたことを知っているの、声を荒げなくなるのを必死に堪えて、冷静に千冬に問う。

「千冬姉、俺たちには、俺には、家族が千冬姉だけって、そう、小さい頃から千冬姉自身に言われてきた。じゃあ、さっきの、家族って、なんだよ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。それは向こうでの、彼女の軍人としての立

場を保障するために与えられた便宜的なものだ。彼女の本当の名：というかファミリーネームは織斑。織斑ラウラ、が戸籍上における彼女の本名だ」

「あいつが、ラウラが、俺たちの…家族？」

「血は繋がっていないがな」

一夏は慌ててラウラがいたはずの保健室の一角を見るが既にいない。どうということだ、と思えば箒が口を開いた。

「ラウラはさつき部屋に戻って行った。千冬さんに言われてな」

「一夏にこうして、ラウラとの関係を明らかにしたのもそうだが、それ以上に深刻なラウラの出生に関して本人に明かしてしまったからな…部屋に戻らせた」

千冬が顔を暗くして言う。ラウラの出生。それはセシリアの夢に潜る前に彼女らが聞かされたものだ。ラウラはクロエのクローン。インフィニット・ストラトスが生まれる以前から動物では実験が行われていたクローニング技術が既に人間にも使われ、こうしてその結果が目の前にいるというのは改めて、簪や箒、シャルロットには衝撃的であった。事情を知らないセシリアは首を傾げ、コズミック・イラでは実例があり、そもそも一例であったレイラは平然としていた。

一夏は家族というところも問題だが、ラウラの生まれのことを考えると正直こんなことは後にでも話し合えばいいだけの話で、もっと深刻なのはラウラのほうだ。いきなり自身のクローンが目の前に現れたらどう思うだろうか。一夏は自らがそうであったらと考えると悲鳴を上げそうになる。

クロエは既にいつものゴーグルをつけているが、それでも見れば見るほど「穏やかなラウラ」といった印象が生まれてくる。

「ラウラが家族って言ったけど、それなら君も…」

「いいえ、私は違います。私はクロエ・クロニクルですから」

まさかと一夏は思いクロエに聞くが、彼女は首を横にふる。事実として、マコトとレイラは束が彼女の保護者であり、この問題は箒も同じ立場に置かれていた。そのことに箒もこの流れで気がついていいる。生態同期型のISなど作れるものは姉しかいない。箒は一夏の今の

気持ち痛いほどわかった。

知らない間に姉が子供を作っていたかのような感覚だ。言ってくれば、と思わずにはいられない。

「……千冬さん。私からも聞きたい。そも、彼女とはどこで出会ったのですか」

箒の問いかけは当然のものであった。全員の視線が千冬に集中する。

「気になるのは当然か。……詳しいことはそのうち話すが簡潔に言えば、私は一度『正義の味方』を騙ってある組織を滅ぼした。そこで彼女を救ったのさ」

「まさか、亡国機業のことなのか、千冬姉」

夢の中でレイラから語られた悪の組織。その名を出せば千冬の表情が一夏でも見たことがないほどに歪んだ。

「なぜそれをお前が…!?!」

「申し訳ありません。先ほど、一夏さんには訳あつて説明致しました」「デュランダル、貴様っ」

「既にあなたが滅したものを、何故恐れるのですか」

「そういうことではない!」

「——落ち着きなさい。織斑先生」

明らかにいつもの冷静さなど吹き飛び、一人の姉として声を荒げる彼女にたばねは声をかける。しばねとして演技している間はこうして冷静に声をかけやすく、束は嫌いではなかった。

「七槻……はあ。まあ、いい。そうだ、私は8年前この世界の全てを操っていた悪の組織をこの手で、暴力の限りで滅した」

暴力の限り。それを意味することをマコトとレイラはすぐに察した。つまりは…皆殺し。戦争を、争いを終わらせるにはもつとも簡単で、後ぐされを残さない方法。敵であるものを全て滅ぼしてしまうこと。

そして、それにはきつと束も関わっている。マコトはこの世界をたった二人の少女がその手を血で染めて救っていたことを知ってしまった。思わずマコトはしばねを見る。見慣れた瞳の奥には悲しそ

うな、申し訳ないような、そんな感情が揺れていた。

「話を戻すが、その最後の局面で私はラウラと出会った。状況は話せないが、彼女を保護し、一時ドイツに預けようとも考えたがそれでは彼女を守れないと判断し、戸籍を与え私の家族とした。自称するは嫌だが、世界最強というものは役に立った」

細かいことはわからないが経緯については納得のものだった。人間のクローン。そんなものが明るみに出してしまうえばISに続いて世界がどうなるかなどわかったものではない。だからこそ、千冬は自ら後ろ盾になった。

「お待ちください。いまいまだ、状況はよくわかりませんが、彼女が織斑さんお二人の家族であるのなら、なぜ軍人など」

セシリアのもつともな質問に千冬はまたしても苦々しい顔をする。「取引があつた。力は…私には暴力こそあつたが、所詮それが通用するのは同じような相手だけだ。当時ただの小娘であつた私には政治など、どうすることもできなかった。だが、それでも…歪でも、あいつにはドイツで仲間ができて、昇進までしてあの若さで佐官にまでなつた。だから、軍人となつてしまったことを私はそこまで後悔していない」

苦い顔をしても、最後は微笑んでいた。その表情に、一夏は姉の知らない顔を見て嫉妬した。嫉妬してすぐに、強烈な自己嫌悪に陥る。あんな、小さい子に嫉妬なんて、と。

「……………事情はわかつた。千冬姉。ならラウラを、俺はどう見ればいいんだ」

「お前に任せる。今回、あいつが日本に来たのはお前の近辺警護というのが目的でそれ以上のものはなかったんだ。ラウラも普段から私を姉とも母とも言わん」

「千冬姉はどうみてるんだ」  
「そんなもの、家族に決まっている。呼ばれ方など、さしたる問題じゃない」

「なら、決まりだな。あいつは俺らの家族で…うん。俺の妹、そう思うことにする」

真つ直ぐに、千冬を見ながら一夏は言った。先ほどまでの嫉妬など嘘のように穏やかな気持ちだ。ラウラは妹、そう意識すると一夏はほんのりと胸の奥が暖かくなる。家族が自分たち以外にいた。それが、一夏には嬉しかった。

「一夏、いいのか？」

箒が一夏に問う。箒もいずれ直面する問題である以上、一夏の答えが知りたかった。

「ああ、いいさ。確かに言わなくてひっでえな、って思いはしたけど、そんなことどうでもいいんだよ。だってもう、ラウラは織斑で、俺と千冬姉の妹になっちまつてるんだ。ネチネチ昔のこと、それに俺が大して関係してない話を気にしてもしょうがないだろ」

「一夏……」

真つ直ぐさ、素直さ、思い切りの良さ。これがあるからこそ、箒やマコトは幼い頃から一夏との友情が続いている。状況に流されていくかもしれない、けれども、その流れの中で彼は決して自らを呑み込まれさせていない。まるで滝の下に立つ者のように、そこに彼は在り続けている。

「それでいいよな、千冬姉」

「……ありがとう、一夏」

「おうさ」

織斑家の話が終わってしまったえば、ちょうど下校時間を知らせる放送が廊下から漏れてくる。タミングよく話のキリがいたので、それぞれが解散の方向で動き始めた。

「さて……ひとまず、オルコットも目覚めたのでここは解散だ。大事をとってオルコットはデュノア先生の診察を受けること。他のものは下校だ」

『はいー』

事件は解決したのである。新たな問題も表出したが、これに関しては一夏とラウラ次第のためマコトやレイラ、簪にシャルロットはどうすることもできない。セシリアや箒もだ。

「七槻先生も彼女の診察をお願いします。クロニクルと合わせて」



「勿論、するつもりだよ」

「お願いします」

じゃあ、と一夏が立ちセシリア除く者たちが保健室から出ていくことになる。だが、その前に束がマコトを呼び止める。

「飛鳥さん、先ほど貸したものを返してもらえるかな」

「ああ、そうだった。すみません」

マコトは先ほど貸し出されていた黒騎士の待機状態となっているバッジを束に手渡す。束はしばねの姿でも薄く微笑みかけてくれたので、マコトも微笑み返す。それは簪は目ざとく見ている、しばねとマコトが一朝一夕の関係でないことを見抜いた。

「(誰?)」

一言、それだけが心の中で凄みを持って呟かれたが今世では恋心に妙に鈍感なマコトは気がつかなかった。

一方で、束は気がついたが特に視線は向けない。恋敵への宣戦布告はこの姿ではできないからだ。

「(ふふ…こつちも楽しみだね。学生時代、こういうのなかったし)」  
青春のロスタイム。束はそんな気持ちだった。

保健室から出たのち、夕食を経て部屋に戻った一夏と箒は部屋に入ると意外にも平然としているラウラが出迎えてくれていた。

「ラウラ、大丈夫なのか?」

「ああ。落ち着いた」

ベッドに腰掛けていたラウラの横に座った一夏は「そっか」と頷いた。

「ラウラのこと、聞いたよ。千冬姉から」

「……そうか」

ラウラはこのとき、一夏が彼女の出生を気にしているのかと思っていた。クローン、そんなもの冒流的だと。そう思われてもしょうがないと考えていた。しかし、残念ながら彼はラウラが思うような「小難しいこと」はわからない知らないと投げってしまうタチだった。

「お兄ちゃんって、呼んでもいいぞ」

「はっ。」

感動的な姉と弟の家族受け入れから僅か数時間での出来ごとであった。

箒は色々と、姉のこともなどもあったが、それらのことはひとまず置いておいて、思い出していた、一夏のことを。

クラス代表戦の際、零落白夜を飛び道具としてぶん投げるといふ暴挙に出たのは何も彼が万事休すでそうするしかないと破れかぶれでしたわけではない。一夏は昔からそうであった。

彼はときおり、色々と大事な過程をすつ飛ばしてしまい、時にとんでもなく口下手になってしまうことがあるのを。

「待て、一夏。お兄ちゃん？なぜお前をそう呼ばなくてはならない」

「え？だって戸籍上で織斑ラウラだって」

「まて、待て。確かにそうだ。だが、常識的に考えろ、いきなり同年代の相手をお兄ちゃん、などと呼べるか？」

「え？ダメか？」

「ダメだろう。ギャルゲでもよく義理の妹にそう呼べと言って気持ち悪がられるのがよくあるがちよつと今その気持ちわかったぞ」

「気持ち悪いとは失礼な。俺だって千冬姉って呼んでるからその流れで」

「下心はないのはわかるがいきなりは無理だ」

「そっか。じゃあ慣れたら」

「一夏兄さん、で勘弁してほしい」

「………なんかいいな、それ」

「…私も言っておきながらそう思った」

確かにラウラは自らのクローン、もしくは自らがクローンであることをわかって不安になった。しかし、こうして家族と……兄と言葉を交わすことで彼女の精神は不思議と安定した。軍人で、どれだけ大人びていようとも、彼女はまだ少女だった。

故に、彼女を蝕もうとする『ソレ』は一時的に足踏みする。光が増せば影も深くなるが、その境界はより、明確になるのだから。

## # phase—27 「自覚／レイラ・デュランダル最悪の日」

ラウラが一夏と向かい合っていた頃、マコトと簪はテレビを見ながら就寝までの時間を過ごしていた。ベッドの淵に隙間なく一緒に座っている姿はどこからどう見ても恋人のそれだが、マコトは「女の子同士だしこんなもんでしょ」と特に気にしておらず、簪はそれはいいことにマコトの温もりを遠慮なく感じている。

「そういえば、明日授業参観だったよね」

「そうだったね」

「簪は誰か来たりするの?」

「明日のは海外の人たち向けだから…それに、学園にはお姉ちゃんいるし」

「それもそっか」

他愛ない会話が簪にとっては愛おしく、彼女はこの時間が好きだった。あの正体不明な教員よりも、ずっと私は先に進んでいる——簪はそんな自負がある。

さりげなく簪はマコトの手をとって指をからめる。マコトはこれも特に抵抗しない。マユとはよく手をつないでいたからだ。かなり大胆なことをしていると簪は胸が高なったが、それ以上にマコトのことを感じられることが嬉しい。

「……ねえ、マコトさん」

「なにかな、簪さん」

「さつき、夢の中での動き、すごかった」

「ああ、アレ」

「あの夜も見たけど、あれが、マコトさんの本当の機体なんだよね」  
「そう、なるのかな」

黒騎士。簪からすれば正体不明なISで、明らかに既存の機体を超えた性能を持つ機体。それに、設計思想もまるで異なることが容易に想像できる。ビーム・ブーメラン、光の翼、驚異的な機動力と破壊力

を待ち合わせたマコトの翼。

ブルー・ティアーズ・ステラドレスが放つビームの雨を残像を出しつつ突貫する姿はあまりにも格好が良かった。

何より、マコトの動きが「慣れすぎていた」ことが、それがマコトが「未来(過去)」で乗って何かと似ているのではと思った。既に、マコトがこの世界から去らないという確約を得ている簪は知りたいと思った。

「マコトさん。マコトさんは『未来』であのISに乗っていたの？」

簪に聞かれ、一瞬軍規…という言葉がよぎるがもはや世界が違うので気にする必要はなかった。なのでマコトは特に隠すこともなく簪にかつての乗機を伝えることにした。

「ZGMF-X42S、デステイニー。それがあたしの、未来…というか前世で乗っていた機体」

「かっこいい名前だね」

「ありがとう」

マコトがはにかみ、簪は彼女がその名前を気に入っていることがわかったが、ここで簪は先ほど、保健室で千冬が浦ポロリと漏らしてしまったような言葉に気がついた。今、マコトは「未来」をなんと云っただろうか。

「……ねえ、マコトさん」

「ん？どうしたの？デステイニーの装備は——」

「今、前世って言った？」

「あ」

もうマコトは簪に隠し事はしないと云っていたばかりに、あまりに自然に言ってしまったという「前世」という言葉。簪はそれが意味することを正しく認識する。彼女はデステイニーを機体と言った。そんなことを言うのは、パイロット他ならない。兵器のパイロットというのは軍人になるものだ。

そんな人物が前世、と言った。

「マコト、さん、まさか、マコトさんは死んで」

「あー、まあ…そうなるね、簪さん」

死。その言葉をマコトが肯定した瞬間、簪はマコトをベッドの上に押し倒した。

「うわっ!？」

「なんで、どうして、だって、マコトさんは、今、生きて」

マコトの顔の上に、簪の涙が落ちてくる。愛しい人が一度死んでいた。そんな事実を、簪という少女が受け止め切ることなど不可能だった。目の前にいるマコトは生きている。感じていた温かみは嘘ではない。けれども、彼女は認めてしまった。

「えつと、まあ、その…察してるかもしれないけど、あたし、軍人で…戦って、死んだんだよ」

いざマコトはそう口にしてみてもあまり実感が湧かない。デステイニーはエンジンが暴走して自爆したので、痛みも感じる暇がなかった。マコトからすれば気がつけば「飛鳥マコト」になつていたので、死んだことよりも性転換した方が実際の衝撃が大きかった。

だが、簪は当然本人ではないのでそんなこと知る由もない。マコトは失敗したと思った。簪は優しい子で、そんな子に自分が一度死にましたなんて言えばどうなってしまうのか想像に易かった。

ただ、こんな押し倒されるとは思っていなかったが。

「どうして、マコトさんは死ななくちやいけなかったの？だって、こんな優しく、いい人なのに」

「なんでだろうね。あたしにも、よくわからないや」

悲しそうに、不安そうに、赤い瞳を潤ませて、泣いている簪をマコトはよく見た。否、初めてマコトは「更識簪」という「女性」をまっすぐ見た。姉である楯無とは似ているようで似ていない、表情に乏しいように見えてこんな人を想った顔をできる。控えめに見えて、今こうしてマコトを押し倒してしまうような大胆さ。

依存するようなものではない、確かな「想い」と「力」をマコトは彼女に感じる。だからマコトは、素直にこう思った。

「簪さんって、素敵だね」

いや、言ってしまった。言ってからマコトは急激に顔が熱くなり、胸の動悸が激しくなる。戦いの中で感じていたものとは明らかに違

う。別種の感情。人間として、正常な一つの感情。これをマコトはよく知っている。

「マコト、さん？」

「へ、あ、あれ、なんだろう、あたし、なんで」

泣きながら、突然くどかれた簪は頬を赤く染めながらも、まだ泣いていた。押し倒した相手は急に顔を真っ赤にして、簪から目を背けた。背けたのだが、マコトの目尻には涙が浮かんでいた。

「んっ…なんで、あたし、泣いて」

二つの感情をマコトは自覚する。一つは愛欲。二つ目は嬉しさ。

マコトの、シン・アスカの死は誰にも悲しまれることはなかった。レイラは悲しんでいたが、再会したときは出会えた嬉しさが勝った。直球に、ここまでの言葉を伝えたのは簪が初めてだった。

死を惜しまれた。ただの暴力装置と化したシン・アスカのことを。それが、マコトには嬉しかった。たとえ、前世の人生が誇れるものでなくとも、悲しんでくれる人がいると実感して、嬉しくて、感情が溢れて涙が流れていた。

その相手に、マコトはこの世界で初めて……意識を向ける。ただのルームメイトではない。一人の女性として。まだ恋にもなっていない。この世界に来てから眠り続けていた、誰かを愛するという感情が目覚めました。

「か、簪さん、その、あの、離れてほしい、かな」

「あ、え、あつ、こそ、そうだね」

バツ、と二人は離れる。先ほどと違ってその距離は大きく離れた。簪は気がついてしまう。もう、甘えることはできないと。

「ご、ごめん。簪さん、あたし、もう、寝るね？」

「そ、そうだね」

ずっと眠っていたその欲求はマコトの思考を大いに狂わせる。これまでの行為が脳裏を流れていく。簪とは友人のつもりでずっといた。だから彼女を助けたり、励ましたりもしてきた。だが、その中で一つ致命的なものがあつた。

シャルロットの騒動後に、マコトと簪は一矢纏わぬ姿で、抱き合っ

ていた。そのときの、簪の体の柔らかな感触がマコトの中に蘇り――

「(なにやってたんだ、あたしっ！彼女でもない女の子と、は、はだか、抱き合つて……ツ~~~~~~~~！)」

意識してしまえばもう遅い。マコトは穴があつたら入りたかつた。幸いにして、簪はあれらのことがあつてもまだ友達でいてくれているので大丈夫だと考えたが、それにしただつて、マコトはどうにかなりそうで、声にもならない悲鳴が出る。

明日からどうすればいいのだろう。マコトは頭の中をぐちやぐちやにしながら寝ようとするが眠れない。

「う~~~~~~~~」

「(可愛い……)」

悶々として、唸るマコトに簪は可愛いな、と思った。前世も含めればマコトは簪より随分と年上だったが、少女としてのステップは簪の方が遙かに上だった。

「(……甘えられない、なんて思っちゃったけど、逆だ。もっと甘えてもいいかもしれない)」

これまで散々、ドキドキさせられてきたのだから、彼女が完全に“自覚”するまで今度は仕返しをしようと簪は考えた。そういえば、ずいぶん前に頼んだ髪留めはもうそろそろ届く手筈になっている。

それを使って、決定的にしてもいいかもしれないし、もっと近くに寄ってもいいかもしれない。

「マコトさん、まだ起きてるっ？」

「……起きてる」

「今度、どこかお出かけ、行く？」

「……………いいけど……………」

「やた♪」

簪の嬉しそうな声だけがマコトに届いた。

マコトは、何か、もう逃げられないような、妙な予感がした。これまではどこか一歩引いていたが、これ以上は引けない。レイラのように、完全にマコトはこの世界に足をつける。一人の少女が、彼女をこ

の世界に完全につながりてしまった。

IS学園の裏口にはその日、次々と来賓が入場してきていた。

「はい、次の……」

警備員として来賓のチェックを行わなくてはいけないアキが職務を全うするために手早く来賓の荷物検査や事前のリストとの照合を行っていたのだが、次に検査をしようとした相手の姿を見て固まった。

長い癖のある黒髪にサングラス、まだ時期は早いとしか言いようがないのにアロハシャツを上に着て、下は短パン。微妙に処理されてないスネ毛が覗いており履き物はサンダルである。バカンスにでも来た外国人か？とアキはどう見ても不審者な相手に言葉を失っていた。しかし、そこはプロとして対応しなくてはならない。

「……えっと」

「おっと、これは失礼お嬢さん」

そう言っただけでも不審者な男性はサングラスをとった。すると、そこに現れたのはアキも思わず目を見開いてしまうほどの美形だった。琥珀色の瞳に切れ目で、顔つきは端正。この日本の文化である歌舞伎の女役をしても似合いそうなほどだ。

そして、サングラスがなければ誰なのか一目瞭然だった。

「…いい、イギリスからお越しの、デユランダル大臣でよろしいですか？」

「ああ、その通りだよ。しかし、今日の私は大臣ではなく、いち保護者として来ている。ギルさんで結構」

浮かれてやがる、とアキは笑顔を崩さないようにしつつ内心そう思った。格好が明らかにふざけているが顔がいいことで帳消しにしている。アキはこのどうかしている要人に絶妙なイラつきを覚える。

「招待状をお願いします」

「これかな？」

胸ポケットから優雅に取り出す所作は彼が浮かれたアロハシャツの不審者ではないことを裏付けるほどに綺麗だが、全てが格好のせい



で台無しになっている。アキは招待状を確認し、確かに彼がギルバート・デュランダルであることを確認した。

「あ、ありえねえ。これがあの、プリンセス・レイラの親父？かなりキレものだつて聞いてたがただの浮かれ親父じゃねえか」

招待状が本物である以上、それは疑いようがなかった。形がどうあれ、今回の訪問は授業参観であり、ギルバートがこのような格好をしているのはおかしいが、なんらおかしくない。そのため、アキは彼を通すしかない。

「……確認できました。ようこそ、IS学園へ。本学はその性質上、敷地内は女性がほとんどです。トイレなどは本館、1F隅にありますものを使用してください」

「了解した。では、入らせてもらうよ」

サングラスをかけなおし、ギルバートは校内へと入っていく。

「(ありや後で不審者の連絡が入るな)はい、お待たせしました次の方」  
なお、ギルバートの名誉のために言うと、彼がアロハシャツで来ているのは宿泊先のホテルで本来着てくる予定の私服にコーヒーをぶちまけたからである。それも、行く直前に。

気持ちを切り替え、アキは次の保護者を迎え入れたが、今度も彼女にとつて面倒な相手だった。

「失礼な警備員ね」

「デメエ……どの面下げて」

「あら、どちらでお会いしたかしら〜」

それはもういい笑顔で、ロゼンタ・デュノアがアキの前にいた。彼女はギルバート同様、シャルロットの保護者として来日しているせい、普段フランスで着ているようなドレスなどではなく、ビジネススーツに身を包み、自慢の赤髪は後ろで結び上げ、ノンフレームの伊達眼鏡を身につけている。

アキからすれば組織を裏切った……もとい、抜け出した脱走者であり、どの面下げてと文句の一つは言う。ただし、スクールがそのことを気にしていない上に、今後ロゼンタには欧州の状況を探ってもらうという予定があるため言えたのはそこまでだった。

「チツ……………ようこそ、学園に。招待状はお持ちですか？」

「はい、これね」

「確認しました。フランス、デュノア社取締役、ロゼンタ・デュノアさんですね」

「ええ。それじゃあ、通してもらおうよ」

「ごゆっくり」

ロゼンタは特にアキに何かを言うことなく校内へと歩いていった。その後ろ姿を見て、ロゼンタが何も変わっていないと確信する。

「変わっていないようで変わっているかもしれないわよ」

「おわ、びっくりさせないでくれ」

「ごめんなさい」

くすくすと笑いながらスコールがアキに言った。スコールもさすがに人手が足りない時は警備員の制服を着て受付を担当している。ただし、その美貌があまりにも目を引くため帽子を深く被り、マスクをしている。

「はあ。あたしらが死にかけてた頃、あいつぜつてー高笑いしてたぜ」

「まあ、そこはご愛嬌ってところじゃないかしら。魔女ですもの」

「なんであいつのこと高く買ってるんだ？」

「本質的には一緒だからよ、私と彼女は」

「おいおい、冗談はよしてくれよ」

「本当よ？愛に狂える女ってところは、彼女も私も変わらないわ」

スコールにとって、ロゼンタは手放したくなかった類の者だったが、同じ「モノ」を持つ相手として尊重し、彼女を抹殺しようとはしなかった。かつては魔女と恐れられた彼女がこうして保護者として子供を見に来るといふのは間違い無く変化だとスコールは思っている。それはとてもいいことだ。

「(例え世界が許さずとも、誰かが許してくれればそれでいい。ロゼ、あなたはそれを知っていたのでしよう?)」

遠ざかるかつての戦友の背中を見送りながら、スコールは「もっと早くそれを知りたかったな」といつまでも変わらない少女と大人の間際の姿で、愛する人と共に仕事へ戻るのだった。

保護者見学ツアー当日の朝。マコトと簪は珍しく別行動で朝食を取るようになった。簪がいつも通りに、と言っていたが今のマコトはまともに簪を見れなかった。彼女に恋した、とか好きだ、とかそういった感情はまだ定まっていけない。ではなぜかと言えば単純に、彼女と裸で抱き合ってしまったという羞恥心からである。

「で、珍しく私と一緒に食べてると」  
「うん…」

さやかが呆れた様子で言い、彼女のルームメイトであるティナは苦笑いするしかなかった。さやかは当然こちらから見えるいつもならマコトの座っているテーブルを覗くと、簪以外が心配そうにマコトを見ているのがわかった。ただ、若干1名ほどそれどころではないのか一心不乱にご飯を食べている姫君が見受けられた。

「いやおかしいでしょ。レイラさんどうしたのアレ」

「あ、確か今日、レイラのお父さんが来るから」

「ああ、例の」

一先ずマコトを復活させるため、レイラのことを話題に出すとマコトはなんとかいつも通りの態度に戻って答えた。ギルバートが来るというのは1組に知れ渡っており、既にレイラから相当な親バカであることが判明している。さやかも含め、どんな父親なのかとイギリスなどのHPを漁りギルバートの対外的な姿を見ているが、大半は「こんなイケメンパパに愛されてるのは羨ましい」という意見だった。

が、レイラは「正気ですか!？」と珍しく声を荒げたので本当に、本当に相当な父親なのだろうというのが1組共通の見解である。

マコトも、さすがにレイラの評は家族に対してのオーバーなものだろうと想っている。別人とはいえ前世でのギルバートの姿を知っている以上、まさか公の場でとんでもないことはしないだろうと思っ  
ている。

「…えっと、飛鳥ちゃん?」

「なんですか、ハミルトンさん」

「あ、ティナでいいよ?それで、別に簪さんのこと好きとかそういうの

「じゃないよね？」

「す、好きかどうかで聞かれたら好きだけど…いやその、友達として、ねっ!？」

「なんで蒸し返すのティナ」

「いや、だつてこういう話なかなか聞けないじゃん？」

IS 学園での同性カップルなら珍しくもなくごく当たり前の光景であるが、あまり恋バナになることは少ない。基本的に見守るスタンスが多いためだ。マコトやレイラがカップルか何かか？といったことがあつても周囲に噂が流れないのはそのためだ。

ティナからすれば同級生となると興味が湧くのでしようがないといったところだった。

「うーん。でも、マコトそんだけ意識してるってことは異性？というかそういう対象に簪さん入ってるってことだよね」

「そういう対象って」

「いや性欲の対象」

「せ、せ、せいよっ」

マコトの顔は真っ赤になった。結局のところ、前世での知識はあつたが今のマコトはこの世界における飛鳥マコトとしての意識が強いのだ。それは本人が前々から自覚していることであるし、前世での口調などは強く意識しないとできない。

だから、あからさまに生娘な反応をしてしまうのは致し方ないことだった。

「と、友達をそんなふうには、見ちゃうのは」

「しようがなくなる？それに女子同士でもそういう気持ちはあるし」

「そーだね。たまにさやか、私のこと見る目いやらしいもん」

「不可抗力つてもんだよ、ティナ」

あけすけな二人の様子に、マコトは考える。もしかして、これはそんなに恥ずかしがることではないのかと。女子同士ならこんなもの、とこれまで自覚がなかったのも手伝ってそうしてきた。さやかとティナの様子を見ると、肉体的な接触は珍しくもないことなのかとマコトは思った。

「えつと、その、変なこと聞くけど、さやかとティナさんは一緒にお風呂入ったりしたの?」

「え? 入るよね、たまに」

「うん。たまにさやかおっぱい揉んでくるし」

「だってティナのでかいし」

でかいし、という言葉につられて思わずマコトはティナを見てしま  
う、確かにそのバストは豊満であった。

「飛鳥ちゃん、視線が」

「あ、ごめん」

「いや別に、よく見られてるし」

日本だと視線がよく飛んでくるからねくと慣れた様子で言うティ  
ナにマコトは謝りつつもなんとなく心の整理がつきそうだった。

「まー、マコト。女の子同士だからちよつと触りあったりとか、そうい  
うの問題ないって。特に私たちみたいに全寮制で女子校だとき、人  
よっては恋愛ごっこ、みたいな感じでわりと軽い人もいるしさ」

「恋愛ごっこ、って…」

「そういうこともするし、けれど後腐れなくって感じだね。先輩とか  
結構多いみたいだよ」

「うゝ…なんか、知らない世界だ」

「そこらへんは人それぞれだからね。ただ、今のマコトみたいに過剰  
反応しちゃうと大変だよ。だってこれからも基本的には3年間同  
棲ってことなんだから」

「い、言い方あ」

「あはは…飛鳥ちゃん。でもほら、織斑くんは全然そんな感じじや  
ないでしょ? 異性なのに」

「それはあいつがおかしいのっ」

マコトが珍しく一夏をあいつ呼びするあたり、本当に参っているの  
だろうときやかもティナも苦笑する。確かに、草食どころかもはや絶  
食ではないかときやかは常々思うが、悲しいことに一夏の場合は幼い  
頃から異様な美女、美少女に囲われ更にそのほとんどが変人が超人  
だったので気がつけばあまり恋愛をするというビジョンが一夏に浮

かばなくなっただけである。

強いて言えば鈴音が一夏の中で、普通で、家庭的で好感度は高いがまだまだ悪友といったほうが彼の中でのイメージは強く、恋愛への発展は厳しいところであった。

「ま、そういうことで、避けるのはやめておきなよ。それに二人ともタッグマッチ出るんだし」

「そうだね……」

なんにせよ、マコトと簪はタッグマッチでペアな以上、避けることはやめたほうがよく、マコトは気持ちを入れ替える。女の子同士ならくつついても、抱き合っても、いたずらで乳練り合っても特に問題はない。……最後は人を選ぶし、そもそも珍しい部類なのだが、マコトはそう思うことにした。

「落ち着いた？」

「うん。ありがと、二人とも」

「よかったよかった。じゃあ、今からみんなのところに戻るんだね」  
「え、なんで？」

さやかは首を傾げるマコトに「これは重症だ」と思わざるえない。彼女は何か致命的に鈍感のようだった。先ほどから注がれている簪の視線がどうみたって恋愛ごっこではなく、本気で恋している相手へのものなのに。ティナも簪の視線の熱さには気がついており「これが本物かく」と呑気に考えていた。

「……ま、いいけど」

「ほっ」

ただし、相沢さやかという少女は深入りをしないため、ここで強引に彼女を行かせない。それに、友人とはいえなかなか交流できないマコトとの時間は貴重なので元より行かせるつもりはそこまでなかった。

「(ま、簪さんは頑張ってるねって感じた)」

健闘を祈るにとどめて、さやかは朝食を進めるのだった。

朝食の時間が過ぎればSHRである。結局、マコトは簪とそのまま

朝は言葉を交わすことなく1組に入り、現在校内ツアーのほうにかかりきりな千冬に代わり真耶の朝の連絡を受け、授業に入ることとなった。保護者らの授業参観は午後からとなるようで、1組は午後、校庭でISの実機訓練授業が予定されている。

1時間目の授業が始まるまでの間、マコトは流石に尋常ではない様子の親友が心配になったので彼女の席に歩み寄った。

「レイラ」

「……………ああ、マコトですか」

反応が明らかに鈍い。目がどうみたって死んでいるが彼女は頑張って笑顔を浮かべていた。余計にマコトは怖かった。大丈夫なのか、とセシリアに視線を向けるが無言で首を横に振られる。

「あはは、すごいことになってるね…レイラさん」

すぐ近くの席のシャルロットがなんとも言えない表情で言う。彼女もロゼンタが来ることは聞いているが、シャルロットはロゼンタの外でのビジネスマン然とした姿を知っているし、フランスでは何度か授業参観にシエラと共に来ているのでなんら問題はない。

いろいろな親御さんがいるんだなあ、とシエラ譲りの能天気さでシャルロットは漫然と授業の準備をし始める。

「デュランダル議員の手腕はドイツでも聞いたことがある。優秀な人物であるという、そこまでなのか？」

シャルロットの隣にいるラウラはレイラの様子が解せなかった。母、と呼んだことはないが千冬はラウラにとって尊敬に値する人物である。多少酒癖が悪かったり部屋が汚い程度は仕方がないと割り切っている。

ラウラの言葉を受けてようやくレイラが反応を返した。

「優秀で、それだけなら、どれだけよかったことか」

遠い目をしてレイラは外を見る。1組の教室からは校内の広場が見えるのだが、そこで妙な光景を目にした。一人の女生徒が何やら慌てて走っていた。まるで逃げるかのように。マコトもセシリアも、レイラの視線に気がついて外を見た。

なんだとマコトは外を見ればとんでもない光景が見えた。

「……………えっと、レイラ」

「……………」

「あの、アロハシャツの……楯無さんに関節技喰らわされてるサンダラスの、男の人って」

「……………」

「レイラの、お父さん？」

「ひゅっ……………」

「ああ!?! 姫様あっ!?!」

短い息を吐いて、レイラは気を失い、セシリアが慌てて抱きとめた。マコトは顔が引きつっていた。顔は遠目でもよくわかる。知っている顔だ。あの世界のギルバート・デュランダルと瓜二つ。しかし、格好がアロハでサンダラス。おまけにサンダル。

挙句、こちらもよく知っている楯無が真つ当に職務をこなしている。

「ああ、おいたわしや……………って、こんな時に電話……………」

あまりにあんまりな光景を見せられて気を失った主君を介抱するセシリアに電話がかかってくる。

「…はい」

『久しぶりね、セシイ』

「こ、これはタリア様。ご機嫌麗しゆう」

『あなたも元気そう……………には聞こえないわね。何かあったのかしら』

セシリアは迷った。かけてきた相手は現在気を失っているレイラの母であり、商売相手でもあるタリアである。周囲の視線が注ぎ込まれていることなど気が付かないぐらいセシリアは思考に沈む。

何を、どう伝えればいいのか。

「な、なにも」

『そういえば、今日ギルバートがそちらにいったのだけれど、見かけたかしら』

見かけているし現在進行形で不審者扱いされている。おかげさまで娘は気絶までしている。主人の名誉と、その父上の名誉、セシリアは天秤にかけ、即座にどちらをとるか決めた。



「…………み、見かけましたわ」

『そう。変な格好はしていなかったかしら。あの人、スーツ持っていないかったのよ』

「し、私服でしたわ」

『どんな？』

「ええ、ええっと、わ、若く見えますわね、ええ」

間違つてもアロハシャツなどとは言えなかった。だが、この誤魔化しはタリアに聞かなかつた。既に彼女はギルバート自身の言葉で最悪な格好を知っていたからだ。

『なるほど、休暇気分』ということね』

バレている。レイラの鋭さはタリア譲りであった。

『レイラに変わってもらえるかしら。ギルの姿を見る前に言っておかないと』

「…………た、タリア様。非常に申し上げにくいのですが」

『何か？』

「…もう、遅いです」

こうして、レイラ・デュランダルのIS学園の思い出の中で唯一思い出したくない1日が幕を明けた。

## # phase—28 「ギルバート・デュランダル」

「ほんつとうに、申し訳ありませんでした」

「いいや、気にしていない。むしろ、いい警備体制だと感心したよ」

IS 学園生徒会室。楯無に拘束されたギルバートは特に何かされるわけでもなく生徒会室のソファに腰掛けていた。ギルバートの服装はアロハシャツではなく、黄土色のスーツに変わっており、結い上げた髪とサングラスがなくなり露わになった素顔のおかげで先ほどの不審者同然の人物と同じには見えない。

これはギルバートが事情を話し、楯無が彼女の使用人である布仏虚に用意させた服であった。さすがに一度生徒会長が拘束してしまった以上、そのまま離すわけにはいかなかった。

「それに良い仕立てのスーツまで用意してもらった上に、これだけ上等な紅茶まで頂いている。謝罪はこちらがすべきものだ。大変申し訳ない。助かった」

「いえ、そんな」

頭を下げるギルバートに楯無は内心ため息をついた。一番までもだと思っていた来賓がこのザマだったのだ。彼女からすれば、表でも裏でも名の通るギルバート・デュランダルを締め上げてしまったというだけでも失態なのに、こんな頭を下げられては困ってしまうし疲れただけだった。

できればこのまますぐお帰り願いたい。とまで思ってしまう。

「しかし、困ったね。今からツアーに参加をすると中途半端になってしまうね」

「そんなことはないと思いますが」

「時刻は10時を過ぎてている。行ったところであまり聞けないだろう」

ツアーのスケジュールが頭に入っているギルバートはツアーへの途中参加は諦めると言い、楯無は困った。ツアーに参加しない、その間彼をどこに置いておくのか。それは警備上こころしかない。

どうやったらこの紅茶を優雅に飲んでいる人物を動かせるのだろ

うかと楯無は悩んだ。

「それにしても、君の名前は楯無、というのだね」

「はい？そようですが……」

「名はその者の存在を指し示すものだ。ならば、その名が偽りだとしたら、その者の存在も偽りということになる。更識楯無、いや…更識刀奈」

前触れなく、ギルバートの首筋に苦無が突きつけられた。それを行なったのは部屋から出たはずの本音の姉であり、ギルバートにスーツを渡した虚だった。

先ほどまでの生徒会長としての更識楯無は消え、ギルバートの目の前には彼がよく見知った世界の住人である更識楯無が立っていた。

「おや、家事だけでなく武芸にも秀でているのだね。君も優秀な使用人のようだ」

「デュランダル様は私のようなものを他にご存知で？」

「娘の友人にね」

いつ殺されてもおかしくない状況であるにも関わらずギルバートは平然としており、楯無は虚に苦無を下げさせる。今のはただの冗談のようなものだろう。それに過剰反応してしまった時点で楯無の負けであり、そもそも、これが彼の狙いだったのかもしれない。

「ああ、断っておくとコーヒーを溢したのは事実であるし、スーツを忘れたのは本当に、アロハを着てきたのはわりと真面目だったよ」

「ご冗談を」

「ふふ。残念ながら、本当に、本当なんだ」

堂々と言うことではないでしょう、と楯無はツツコミたくなったが、これで乗ってしまうのは完全に彼の術中に乗ってしまう。彼女は咳払いして室内における主導権をニュートラルに戻しながら話を続けた。

「それで、わざわざ先ほどのようなことを仰られたのですから、何かお話でも？」

「ああ、大したことはないんだ。まず一つ、娘のことは調べないでほしい」

楯無はやはり気が付かれていたか、と嘆息する。バレないわけがなかった。ただし、レイラが諜報員である以上、それをしないわけにはいかない。楯無にとってそれは義務であり責務だ。

「そちらの『諜報員』のことは調べましたが、あなたの御息女に関しては感知しておりません」

「おや、そうだったのかい。それは失礼をした。それと訂正を、教育機関に諜報員なんて物騒なものを紛れ込ませるほど、我々は騎士道精神を忘れてはいないよ」

あまりに白々しい発言だが楯無は何も返せない。単純に相手が上手なのに加えて、後手に回ってしまったことが響いていた。

「…それもそうですね。失礼しました」

「ならいいんだ」

元々、イギリスは超兵器とI Sの所有によりことI S学園の介入という点では警戒度が低い。今更男性操縦者など気にするような国家でもないのだ。

「ではもう一つ、君は『ネスト』と呼ばれる存在を知っているかな?」「ネスト?」

聞き覚えのない言葉だった。そのままの意味であれば単だ。楯無は何かの隠語かと思ったが、違った。

「その様子だと知らないようだね…いや、我々も最近まで知らなかった情報だ。さて、私の目的を明かそう。私が今日、ここに来たのには2つ理由がある。一つはレイラに会うため。こちらがメインだ。そして二つ目が『ネスト』の話をおなた方に共有するためだ」

あくまでメインは娘の授業参観。それを本気で言っているあたり楯無はギルバートという人物を掴めない。楯無は自らも掴みどころがない姿を演じているため、同系統の人間が特に苦手だった。格下ならなんとかなるが、ギルバートは格上で、経験も豊富だ。

「それで、ネストとはなんなのですか?」

「簡潔に言えば非道な人体実験を繰り返す組織さ。その目的は『人類に無限の可能性を与える』というものだ」

「いかにもな団体ですね」

「ああ。しかし、彼らは一度滅んだ。白騎士と、その創造主の手によってね」

「……まさかとは思いますが、母体は亡国機業とでも?」

「その通りさ」

破壊による再生。亡国機業を独力で、かつ暴力で「彼女ら」が滅したあとの世界で更識家は苦労を多くした。流れた裏の人間の抹殺や確保、その中で命を落とした者も多くいる。当時見習いだった楯無も何人が殺めている。

自身の生き方を決定づけさせた“8年前”の世界にとっては解放の日で、楯無にとっては逃れられぬ運命に囚われた日だ。

そんな忌々しい、滅んだはずのものたちの名がなぜ出てくるのか。

「残党がいると?」

「エクスカリバーをここに落としたのは彼らだよ」

「あれを…」

「困ったものだ。説明できない類のものの処理は扱いかねる。白騎士事件然り、ね」

「はい?」

なぜここで、突然白騎士事件が出てくるのか楯無は理解できない。

あのミサイルは事故によるものだと決定付けられた。観測不能ならんらかの電磁波の影響を受け、地球上のミサイル基地が誤作動を起した。ありえないが、そうとしか結論づけられなかった。

だが、ギルバートの言葉を借りるのであれば。

「まさか、あの事件も」

「まだ裏は取れていないがね。彼らは時折、歴史の影に身を潜めて探し求めていた。次のステップへと進んだ人類……ニュータイプを」

ニュータイプ。新しい型。直訳は決してその意味を正しくは示さない。

「または人の革新…超越者、天然素体とも言う。既存のヒトという種を超えた力を持つものたちを指すそうだよ。君にも、覚えがあるのではないかね」

言われてしまえばすぐに出てくる。

「織斑千冬に、篠ノ之東……!」

「そうとも。彼らは試すために日本を焼け野原にしようとした。ニュータイプであれば、生き延びれるはずだと」

「そんな無茶苦茶な!」

「だが、事実として彼女らは生き残った。それどころか、ミサイルさえ全て落として見せた。彼らは狂喜したそうだよ」

「待つてください。なぜそのような情報をあなたが」

あまりにギルバートは知り過ぎていて。楯無は最悪の可能性を考えた。彼が、その「ネスト」に所属していたのではないかと。しかし、これはギルバート自身が否定した。彼はこの世界においては政治家にしか過ぎないのだ。

「この情報は消しとばされた彼らの研究所があつた場所から見つかったコンピュータの残骸から得たものだ。内容を鑑みて記録後即時処分し、知っているのは母国でもごく一部。残党の情報もそこから抜き出せた。追いきれなかったがね」

「詳細を教えてください?」

「許可できない。取引もできない。……あのようなおぞましいものは知るだけで罪だ」

ギルバートが何を見たのか楯無は見当もつかない。だが、決して気分の良いものではないだろう。楯無にもサイレント・ゼフィルスの解析結果は届いており、人間の脳幹を使ったアンドロイドが襲ってきていたことを知っている。

「サイレント・ゼフィルスも、そうだと?」

「その通りだ。だから、用心してほしい。我々には…明確な“敵”がいるということ。特に、君たちが直接相対することになる。ここには織斑千冬がいるのだから」

ギルバートが紅茶を飲み切り、席から立ち上がる。

「さて、そろそろお暇させてもらおう」

「……なぜ、教えてくれたのですか?」

去ろうとする楯無がギルバートを呼び止める。ネストの存在をわざわざ教えたことがどんな意味を持つのか。楯無は知りたかった。

ギルバートは襟元を直しながら彼女に振り向いた。

「親切心……というのではダメかな」

「かのギルバート・デュランダルが、そのような感情で動くとは思えません」

「ハツキリと言うね。だからこそ、信用できる。私は君たちが思うほど出来た大人ではないよ。だからこうして最前線まで来るしかないし、託すことしかできていない。私は娘を愛しているね。彼女が剣を持って戦っているというのに、後ろでふんぞり返っているなど耐えられないのさ」

「あなたは……」

「紅茶、とても美味しかったよ。スーツは帰り際に返却する。それでは失礼するよ、更識生徒会長」

一礼して、ギルバートは生徒会室から出ていく。終始、彼に主導権を握られていた。彼が敵であれば、とつくに楯無たちはこの世にいない。

「……底が見えませんでした。伊達ではありませんでしたね、彼は」  
「ええ。正直、今でも心臓バクバクしてるわよ。けれど、その価値はあった」

「ネスト、ですか」

「警備員の二人への聴取もそうだけど、全国に調査の指示を」

「承知しました、お嬢様」

「お願いね」

敵は存在する。立場が違えば正義が悪に見える、というものからは外れた、真の意味での「滅ぼされるべき者たち」。かつては本当の意味での正義の味方二人によってそれは滅ぼされたが、次はそうとは限らない。

「簪ちゃんは、私が守る」

いつだって更識刀奈の力は妹のためだけに振るわれた。

朝倒れたレイラであったが数分で起きたのでそのまま午前中の授業を彼女は受けきっていた。が、楯無に拘束されるギルバートという

記憶は彼女からなくなっていたので1組全員がああ光景を見なかったことにした。……ただし、他のクラスでは変質者が出たと騒ぎになっていたが。

午後の授業はまたしても2組との合同授業のため、マコトは珍しく簪とは長くいない1日になってしまいそうだった。ISスーツに着替え、校庭にいつものように一足早くやってきたマコトは入学初日の頃の一人きりだったことを思い出して、わずか数ヶ月のうちかなり濃い友人たちに囲われたんだな、と思った。

「あなた、確か1組の……」  
「え？」

そろそろ他の生徒もくるだろう、そう思っていたマコトであったが、声をかけてきたのは珍しい人物であった。オレンジ色の髪がすぐに目に入る。2組のクラス代表であり、カナダの代表候補生であるファニール・コメットがそこにはいた。

あまりマコトも会話をしたことがない人物だ。授業で一緒になったとしても組になったりすることはない。

「ファニール・コメット……って名前ぐらいは聞いてるわよね？」

「ええ、初めましてって言うのも変ですけど、話をするのは初めてです。あたし、飛鳥マコトです」

「知ってるわよ。校内じゃ結構有名だし。あと、別にそんな丁寧に話さなくていいわよ。私、年下だから」

「年下？」

「飛び級してるの」

日本国内にありながら飛び級が普通に行われるIS学園では珍しいことではなかった。マコトは詳細なプロフィールは見えていなかったもので、コメット姉妹が飛び級をしているのを初めて知った。

以前、真耶との模擬戦をマコトは見たことがあったが、彼女らの動きは決してその幼さとは結びつかない洗練されたものであった。マコトの目線からしても軍人の動きをしていた。

「知らなかったの？」

「ISの動きも凄かったからね」



「ありがと。聞いていた通り、素直なのね」

プライドが高そうな気がしたのでマコトは素直にしているだけだが、好印象を受けたようだった。それに、マコトはどこか彼女が鈴音と似た空気をしているようでそういった人物の扱いは慣れていた。

何かに押しつぶされないように、誰かを守るために、強く気を張っている。ファニールから感じたそれは気のせいではないだろうとマコトは思った。

しかし、マコトは彼女が「聞いていた」とマコトの人物評を受けたかのような言動をとることが気になったので、これも率直に聞いた。「聞いていた通りって?」

「ティナから聞いたの。彼女のルームメイトと、あなた席近いのでしょ?」

「ああ、ティナさんからね」

ティナが2組なのは知っていたので、マコトは納得した。

「けど、どうしてわざわざ私のことを聞いたの?」

「あなた自覚ないの?自分が異常な実力を持つてることに」

信じられない、といった表情を見せるにファニールにマコトはまさか彼女からそんなことを言われるとは思わず固まってしまふ。何かを知られたか、とも思うが少し考えればティナとは模擬戦もしたことがある。そこからティナが2組に話したのだろう。何より、ティナはサイレント・ゼフィルス戦の目撃者だ。一般人である彼女が口を完全に閉じることなど難しいだろう。

「えーつと、そんなに?」

「織斑先生レベルならともかく、一般生徒で瞬時加速を多用したり、高速機動を取りながら射撃と近接戦をおり混ぜてかく乱したり、射線を意識しながら白兵戦までこなす初心者がいるわけないでしょ」

「あー……………」

ティナとの模擬戦では簪を後衛においてマコトが普段通りに前衛となつて動いていた。簪の援護は的確で、かつ正確なのでレイと戦っていた時のようにしつかりと後方の射線を意識しながら立ち回っていた。

考えてみれば素人がそんな視野を持っているわけではない。

「…まあ、それを知って私たちもどうこう、ってわけじゃないけど。タッグマッチで当たる時は覚悟しときなさい」

「あ、そういう」

どうやらファニールはわざわざ宣戦布告のために声をかけたようだった。真っ直ぐでいい子だな、とマコトは思わず姉らしく撫でたくなったが、手を伸ばす前に彼女も姉だと思い出したので行動には移さない。

「そういうって、なに？ 私たちじゃ敵にならないってこと？」

「違う違う。むしろ、大変だなんて。現役の代表候補生で、しかも飛び級。一回動きは見てるわけだけど、現役の軍人みたいな動きをしたから。うん、本番ではよろしくね」

「……なんか調子狂うわね」

ファニールは年上とはいえ、同じ学年の女子を相手にしているのに更に年上の大人と話しているような気分になる。事実としてマコトはそのような存在なのだが、これは明かされることがない。

「そういうえば、オニールさんは？」

「え？ ああ、オニールなら今日はおやすみよ。仕事でね」

「仕事？」

「ソロでの仕事もあるのよ、私たちは」

仕事、と言われてマコトは一瞬なんの、と思ったがすぐに思い出す。コメント姉妹はアイドルである。ソロでの活動というのもアイドルユニットではよくあることで、今日はそれでオニールがいなかった。

「アイドルだもんね」

「その様子だと、あなたはそこまで興味がないって感じかしら」

「興味がないわけじゃないけど、あたしはどっちかというバンドとかの方が好きだから」

「そう」

会話はそこまでだった。他の生徒たちもまばらに揃い始め、ファニールは特に声をかけることもなく2組の中に戻っていく。マコト

もいつものメンバーが揃ってきたのでそこに混ざった。

「相変わらず早いですね、マコトは」

「レイラは逆に遅くなっただんじやない？」

「常在戦場……という気持ちにはもうなりませんね」

レイラに声をかけられたのでマコトはそのように返す。レイラはこの世界に完全に馴染んでいるせいか前世のようにスーツを即座に着るといふ気はもうしていないようだった。まあ、そもそも姫様だから前に立つのもダメだよ、とマコトは思ったので何も言わない。

「そっか。それで、これから午後の授業だから……」

「……………やめてください」

「ご、ごめん」

よほど嫌なのかレイラが真顔でマコトに行ったのでマコトは若干、引きながら謝った。

「マコトさん、その話題は控えて頂くようお願いします」

「そ、そうだね」

セシリアがレイラの傍で、まるで彼女の騎士のように立っている。セシリアからの注意は鋭く、この学園で出会ってから初めてマコトはセシリアの言葉を聞いて姿勢を正した。一夏や箒はその様子を見てなんとも言えない顔になる。二人とも親類が常に近くにいる状態のため気持ちはわからなくもないがここまでなのは想像していなかった。シャルロットやラウラもそうだ。

だが、朝の光景がある以上、4人もわからなくもない、という気持ちだった。

「あ、織斑先生が連れてきたみたいだよ」

2組からそんな声が流れてきて、マコトたちは校庭の端を見た。すると、いつもの教師姿の千冬が何やらガイドをしながら複数人の保護者を連れてきている。その中に、朝見かけたアロハシャツ姿の男性はおらず、代わりによく目立つ黄土色のスーツの男性が見えた。

「なんかすごいイケメンいない？あの黄色いスーツの」

「ほんとだ。誰のお父さん？というかお兄さん？」

「顔めっちゃ綺麗じゃん」

ギルバート・デュランダルの前情報がない2組からは絶賛の嵐だった。マコトたちもちゃんとした姿になっていたギルバートに驚いた。どこで着替えたのか、それを考えてマコトはすぐに生徒会室だろうと思いついた。一回捕まって、しかもそれを見られているのでこうするしかなかったのだろう。

「よかった…服はまともで」

「ええ。タリア様に写真を送っておきましょう」

「そうしましょう、セシリア」

安堵したのかレイラが深く息を吐く。セシリアも同様だ。

「へえ、写真のまんま、っていうかマジで若いな」

「そうだな。美魔女、という言葉があるが男性はなんとはいいいんだ？」

一夏、箒もギルバートの容姿に関しては認めているようだった。

「まあ、あんな感じだよね大臣さん」

「よくニュースで見る姿はあれだな」

同じ欧州で見る機会も多いのか、シャルロットとラウラは慣れた様子だ。

そのまま、来賓である保護者たちは生徒たちとは一定の距離をとる。紹介などはなく、本当に授業参観を行うようだった。マコトはふと保護者の中、ギルバートの隣に立っている赤毛の異様な美女に目がいく。誰の母親だろうと思ったが、その答えはシャルロットが手を小さく振っていることでわかった。

彼女がもう一人の親、ロゼンタ・デュノア。シエラも十二分に美女だったがロゼンタはなんだか魔性という印象がある。あまりよくない例えだな、とマコトは思いつつもラクス・クラインのようなカリスマと魅力の結びついた引きつけるものがあると思った。

一方で、ロゼンタはマコトの視線に気がついて視線は合わせずに彼女を視界に入れて観察していた。ロゼンタからすれば見た目こそ凡庸だが、あれが博士のお気に入りだと聞いていた。

「確かに、見た目こそただの小娘だけど、目の「奥」が違うわねえ。……一回壊れてるわね、あれは」

人を壊し、人形に仕立て上げる魔女は伶俐にマコトの、シン・アスカとして一度壊れてしまったことを見抜いた。そこから回復できたのはなんなのかも理解する。

「(愛、ね。ふふふ……面白い子ね)」

敵対することはまずないが、もしロゼンタが現役だった頃であれば面白いことになったかもしれないと彼女は考えた。

「皆さん！揃いましたね？それでは午後の実習を行いますよ！」

千冬が案内をしているため、授業の進行をするのは真耶だった。彼女もISスーツに着替えており、背後には8機のISが並んでいる。ラファールと打鉄、半々だ。

「今日は低空での移動と上昇、下降の訓練です。代表候補生やクラス代表の人が教える側になって6組に分かれましょう！」

真耶がテキパキと割り振りを決めていき、セシリア、レイラ、ラウラ、一夏、マコト、ファニールの6人がリーダーとなってそれぞれ10人程度に生徒たちが分散する。シャルロットは一夏の班に入っていたが、これは彼のフォローのつもりだ。

マコトがリーダーとして真耶に指名されたのはクラス代表を決める戦いや、真耶は当然ながらサイレント・ゼフィルス戦での出来事を知っているのですそのためだ。さやかや違うクラスのティナがマコトの班にいるが、それ以外の生徒たちもマコトに対して特に何か疑問を抱いていることはない。

真耶から貸与された打鉄をマコトは引っ張ってきて、班員たちに順番に乗らせていく。

「よっ、と」

「やっぱり上手だね、さやかは」

「褒めてもなんもでないってば」

1組の中では専用機持ちやマコトに次いで実力もあり、センスも高いさやかは難なくホバー移動とそこからの跳躍、下降し着地せずにノータイムでホバーに移行してみせる。以前の模擬戦では武装こそ扱い慣れていなかったが、回避運動などは磨けばすぐに即戦力になりそう、マコトは心底この世界が平和でよかったと思った。

前世ではマコト自身もそうだが、子供が当たり前のように前線に出  
ていたプラントである。今世の日本の状況に慣れると、明らかにそれ  
は異常に感じていた。

「よし。じゃあ、さやかが終わったら次の人——」

「きやあつ!?!」

二人目の搭乗者を呼ぼうとしてマコトは悲鳴を聞き、瞬時にその声  
の方へと反応する。まさか衝突や落下などの事故が起きたのか?と  
彼女は思ったが、違った。

悲鳴の元は一夏の班で、なんとマコトがよく見ればとんでもない  
光景がそこにはあった。

「……………うわ〜」

ティナがそんな声を出す。何が起きたのか……単純に言えば、彼は  
シャルロットの乳房を背後から掴んでいた。

「織斑くん、何やってんの」

さやかは信じられないような声にマコトは額に手を当てた。大方、  
つまづいた彼女を助けようとしてやってしまったのだろう。中学生  
時代はそんな不慮の事故、もとイラッキースケベがよく彼を襲ってい  
た。かくいうマコトもその被害にあってしまったことがある。

幸いにもその時は彼を下敷きにする、という程度のものであったが  
アレはまずい。

何故ならば、今ここにはロゼンタがいるからだ。

「織斑一夏！私のシャルの、ど、どこに触れてるの!」

「うっ!?!」

悲鳴のような怒声が校庭に響き渡り、美女が怒髪天をついていた。  
凄まじいプレッシャーをマコトは受け、声をあげることすら出来ず、  
シャルロットは胸を揉まれているという状況が吹っ飛ばすほどの恐怖  
心をロゼンタに抱く。彼女は怒ると怖い、それはシエラ同様シャル  
ロットに叩き込まれていた。

「(泥団子当てちゃった時並みに怒ってる——っ!)」

過去に自身がロゼンタを激怒させた時のことを思い出し、シャル  
ロットも固まる。ここで彼女がすぐに一夏から離れていればこれで

済んだかもしれない。

「シャルの体に触れていいのは私の認めたものだけよッ！あなただけは許さない……！」

保護者列からズンズンと歩み寄ってくるその様は彼女の異名である魔女よりかは鬼であった。なにがなんだかよくわからないが、生徒たちは皆「終わったな」という哀れみの視線を一夏に向け、真耶は「あわわわわ」と震えていた。

肝心の千冬は何をしているのかと思えば明らかに笑いを堪えていた。それでいいのだろうか。

「そちらのご婦人、聞こえているなら止まりたまえ。このままでは我々は大切な娘たちの姿を見続けることができなくなってしまう」

「くっ!?」

優雅に、静謐に、紳士らしくロゼンタに歩み寄ったギルバートが声をかける。穏やかな声はロゼンタの怒りを貫いて届く。

「(うつ………私としたことが………)」

「あなたも見ていたとは思いますが、彼は彼女が転びそうになってしまったのを支えたただけだ。ISをこれから使う以上、ああいった場面は致し方ないと考えるが、どうだろうか」

「………わかっています。取り乱してしまいましたわ」

「よかった。ただ、気持ちわかりますな。嫁入り前の娘に彼がもし不埒なことをしてしまったら逆だったかもしれません」

穏やかなギルバートの説得にロゼンタは少々彼が上手だと感じる。言葉という武器を使い人間を意のままにしてきたロゼンタだからこそわかる。ギルバートは、この男は立場で向かっている方向性が決まっているが、世が世なら詐欺師にも、夢想を語る革命家にも、なっていただろう。

言葉の内容ではない、するりと、心の中に入り込んでくる彼の声はとても心地がいい。信じたくなる、聞きたくなる。そんな気にさせてくる、強い声だ。

「(子が子なら、親も親。これがイギリスきつての见えていながらの切り札ってところね)」

ロゼンタの勢いが削がれたことで、一夏とシャルロットは動くことができるようになり二人は体を離した。ギルバートの冷静な姿に数人の女子生徒が見惚れており、レイラは助かりはしたが余計なことをしたなどため息をついた。

「やっぱりレイラさんのお父さんかつこいいし、いい人っぽいよ?」

「レイレイ、本当にあのお父さんが大変な人なの?」

相川や本音からそのようにレイラは聞かれたが、彼女は珍しく答えずに、何事もなかったかのように授業を再会した。

その後は大きな混乱もなく、授業の半バに差し掛かったところで千冬は来賓たちを連れ校舎へと戻って行った。なんとか乗り切ったとレイラは最後に深い深い、息を吐いたのだった。

終わった、と思っていたのだが午後の授業が終わり帰りのSHRをこなした後、一度寮へと戻ろうとしていたレイラは一人で校舎から離れていたのだが、その道すがら目の前にアロハシャツにサングラス、おまけに朝と違い袖をまくってノースリーブ状態となったギルバートが現れた。

「……………」

「レイラ、そんな虚無に満ちた顔をしないでおくれ」

「そう思うならもつと、マシな、格好を、してください」

レイラはなんの躊躇いもなくキレた。周囲に知り合いがいないせいもある。

「ちゃんと今回は休暇で来ているんだ。となると、それに合わせた格好をしなくてはならないだろう」

「もう用は済んだのでしょうか?お帰りになられては?」

「ふふ。そうだね、最後にこうしてレイラと話せた。それでここに来た用は全て済んだよ」

含みのある言い方だとレイラは思ったが、父が本当に、ただの親バカではないことも理解している。何を、どうしていたのかまではわからないが、既に何かを仕込み終えたのだろう。

「さて、レイラ。一つだけ君に伝えなくてはならないことと、聞かなく



「それはならないことがある」

「なんででしょうか？」

「では伝えなくてはならないことから。——ユグドラシル。それが君の相棒となるべきものを操っていた正体だ」

「ユグドラシル……それがあの『人形』の名前ですか」

「正確にはその眷属、といったところか。ドイツの例の研究所跡からデータが引き出せて判明したが、おぞましいものだった。『完成体』の性能は織斑千冬や篠ノ之束に匹敵したらしい」

彼の言っている内容をレイラはしっかりと理解していた。これが、彼女がかつてマコトに告げた『この世界の業』の正体。

「人工のニュータイプ。それが完成していた。しかし、天然の彼女らによつて否定された。故に、彼らはまだ動いている」

「それがこの前のエクスカリバーということですか」

「察しがよくて助かる。いい子だ」

「そういう言い方、好きじゃないですよ、お父様」

「すまない、ついね」

「サイレント・ゼフィルスの件は了解しました。それで、私はどうすれば？」

「追加の指令は特にないよ。これまで通り過ごしてほしい。ただし、用心はしてね」

「わかりました」

伝えなくてはいいかないことは、これで終わりのようだった。

「聞かなくてはならないことは？」

「ああ、そちらはね……時にレイラは、この近くで大きな複合商業施設を知らないかい？」

妙なことを聞いてきたが、母譲りの勘がギルバートが何故そんなことを聞くのかすぐに察する。

「対岸に『レゾナンス』という名前の大きな施設がありますか？」

「よかった。行ったことは？」

「ありません」

「……そうか。わかった。それを聞いただけで十分だ」

ありがとう、と父親としての笑顔を見せたギルバートにレイラは息を一度吐いて、しようがないといった笑みを見せる。

見せておいてから、容赦無く言った。

「母様にはお土産程度でなんとかなると、そんなことを考えているのですか」

ギルバートの表情筋が固まり、彼の顔には冷や汗が流れていた。

「ダメかな？タリアは結構、それで機嫌を直してくれたのだが」

「ダメでしょうね」

「レイラ」

「なんででしょうか？」

「だいぶ、タリアに似てきたね」

「それは嬉しいことです。お父様、ご覚悟を整えたほうがいいでしょう」

「まだだ、まだ——」

「写真は既に送らせて頂きましたので」

何の写真かは言わないが、レイラはギルバートに鎌を振り下ろした。彼は乾いた笑いを漏らしながら身を翻し、夕焼けの中、去っていった。レイラはそんな父の背中を見届けつつ、困った人だ、と決して見せない慈愛に満ちた表情で彼を送り出していた。

——東京、某所。

「コニールちゃん、お疲れ様」

「はい、ありがとうございます、プロデューサーさん」

仕事で学校を休んでいたコニールはちょうど本日の仕事であったラジオ番組への出演を終えて、その収録場所にある控室でプロデューサーから劳いの言葉をかけられていた。日本での単独の仕事はこれが初めてではなく、コニールは慣れていた。

「内容は特に問題なさそうね、局の人も特に指摘はないって言われたし」

「よかったあ」

「この調子で、次の仕事も頑張りましょう」

「はい」

そもそも、コニールはアイドルとしてデビューしたのが先で、代表候補生はその後についた肩書きだ。こちらが本業のため、姉と共に力を入れていたので上手くいくと嬉しかった。

「あ、それと本国から連絡だけけれど、タッグマッチには『機体』は間に合わないけれど『システム』の最新バージョンは間に合うから二人の機体に搭載するって」

「わかりました。お姉ちゃんには？」

「コニールちゃんから伝えておいてあげて」

「了解です」

コニールのプロデューサーはカナダから彼女らを監督している元国家代表で、本国との連絡員を兼任している。そう、彼女はただの連絡員。だから、気がつくことができなかった。

その『システム』が二人のうち片方に、大変な目を合わせることに。

「えへへ、お姉ちゃんと一緒に試合、滅多にできないから楽しみだなあ」

## # p h a s e — 2 9 「ユグドラシル」

ギルバート襲来という忙しい、濃密な1日（レイラ視点）が終わった翌日の放課後、一夏はアリーナの地面に倒れ込んでいた。纏う白式はアリーナの地面の土で汚れ、唯一の獲物である「雪片」は離れた場所に突き刺さっている。

それが意味することは敗北であり、彼の喉元には雪片とよく似た、打鉄用のブレードの切先が突き付けられていた。

「これで終わりなのか？」

失望。それにも似た声音で、箒が彼に問いかける。千冬と彼女の父を除けば、最強格の篠ノ之流剣術の使い手がそこにはいた。無骨な打鉄がより、彼女を若武者として引き立てる。鋭い目つきは姉弟子である千冬のように倒れ伏す相手をそこに縫い付けるように向けられていた。

「ぐっ……う、まだ、終わってねえ、よ」

「なら立て。もう一度だ」

一夏は軋む体を強引に立ち上げて、よろめきながら雪片を拾いに向かう。突き刺さった雪片二型はその使い手と違い、全く汚れもなく白いまま。何にも傷つけられない最強の剣として主人を黙って待っている。

それを一夏は引き抜き、再度構える。視線の先には同じように構え直した箒がいた。加えて——学園で借りられるラファール・リヴァイヴを身に付け、ライフルを構えているラウラまでいる。

「箒、本当に一夏は大丈夫なのか？」

「問題ない。首がつながって剣を持っていればどこかがもげていてもいい」

「……し、熾烈すぎないか？」

箒のあまりの発言にラウラは「ゲームじゃないよね？」と内心思いつながりも姿勢が厳しすぎると言うが、箒は無視した。

「50本目行くぞ。一夏！」

「ああっ！」

満身創痍な一夏にラウラは少々心を痛める。一夏が軍人であって、かつ部下であれば徹底的に——それこそ悪魔のように——しごくが、今のラウラと一夏はそういう関係ではなく、一夏はラウラにとって兄のような存在になる予定だ。

そんな人が追い詰められるほどの状態で訓練をし、ラウラ自身も手を下さなくてはいけない。ラウラにとっても辛い時間だ。

「…フウ……いくぞっ！」

呼吸を整え、一夏が跳躍する。地面すれすれで、白式の特徴でもある他よりも速度の出る瞬時加速が行われた。ラウラは迫りくる一夏にライフルを向け、容赦無くトリガーを引いた。フルオートで弾丸がばら撒かれた。

さらに、箒も片手に打鉄用の無反動バズーカを持ち、無作為に放つ。

一夏はそれを最小限の動きで避けていく。その回避の仕方はマコトがセシリアの夢の中で見せた、正面から弾幕を掻い潜る動きとよく似ていた。

「オオオオオッ！」

雄叫びをあげながら、一夏は弾幕を、爆発を回避する。被弾は最小限に、受けても怯まない。身のこなしだけで回避して、速度は殺さないう。正面の敵機に対し、三角飛びを繰り返す。時には水平にも動く。

「読めたな。そこだ」

箒が一夏の動きがパターン化したのを読んで、バズーカを撃つ。ライフルなど、エイム力を問われるものは箒にはまだ厳しかったが、爆発で範囲を攻撃するバズーカやミサイルなどの射撃武装には慣れつつあった。

彼女の放った一撃は見事に一夏の正面に着弾する。50本目、失敗。ラウラにはそう思ったが、それはラウラが箒に強引に投げ飛ばされたことで違うと否定される。

「おああっ!?!」

爆煙の中から、白が飛び出してくる。一夏は健在だった。

「一瞬引いたか！」

「足捌きはお前にだって負けちやいないんだよ！」

「言うなっ！」

好戦的な笑みを浮かべた一夏に、箒も凶暴な笑みを浮かべる。ラウラはなんとか着地しながら呆然と二人の衝突を見るしかない。その様は猛獣同士の衝突が目の前で起きたのを見てしまった小動物のようだった。

一夏は速度を生かし、そのまま切り抜けをしようと雪片を横に据える。そして、箒を間合いに入れた瞬間、雪片から零落白夜が閃いた。

必殺の間合い。ラウラもあの距離で振られる零落白夜を避けられないと思う。それどころか、彼女からすれば織斑一夏という「剣士」は十二分に超人の域にいる。わずか搭乗数ヶ月で、先ほどの弾幕をかいくぐり、直撃をワントンポ進行速度を遅らすことで回避するなど、普通はできない。異常な成長スピードだ。

「遅いッ！」

「ぐおっ」

しかし、対する箒はその必殺を容易くいなす。当たれば死、触れれば死、そんな最強の剣を箒は一夏の手には神速の小手を放つ。初撃は完全に防がれてしまい、一夏は即座に箒の前からズレる。ISだからこそ成せる慣性を無視した直角機動だ。

「もう一回……！」

今度は左右に、直角に飛びながら雪片を引き絞る。飛翔してからの高速突き。それはかつて、千冬が得意とした動きの一つだった。速度も、キレも、千冬には遠く及ばないが、そんな動きをされてしまえば「代表候補生」レベルでは一撃は受ける。ましてや白式の零落白夜により「一撃でも当てればいい」以上はその一撃だけでいい。

「単純な動きで何がしたい」

それほどの技を、ただの一般生徒である箒は見切って、突き出され、伸びた零落白夜をするりと避け、一夏は地面に激突した。

「い、一夏ア——!?!」

箒の背後にクレーターを作り、一夏はそこに倒れた。箒は武装を解除する。これ以上は無理だと判断したからだ。ラウラもそれがわかると一夏に飛び寄った。

「一夏！無事か!?生きてるか!？」

「生きてるよ」

雪片を量子化しながら一夏は立ち上がる。彼の顔は苦かった。

「……………どうでしたか」

「論外だ。かいくぐって、そこから先が何も無い。確かに回避だけに目を向ければ、レイラやセシリアとの以前の訓練が生きている。しかし、そこからは何も無い。結果があのかラス代表戦での刀を投げるという暴挙だ」

「ありがとうございます」

「はあ……それで、どうする。明日以降もまだやるか?」

「やるさ」

「わかった。ラウラもすまないな、付き合いわせて」

「い、いや、そんなこと」

ジャパニーズ・ブシドーとはこういうものを言うのか。ラウラは戦慄した。IS学園は軍学校でない以上、ある程度はカジュアルにISのことを学んでいくので、ISに対する意識は軍人などとは若干の差が出てくる。特に、ISバトルに対しては「試合」「戦闘」と認識が一番ズレている。

だが、目の前の二人はISバトルを「死合」と捉えている。

「(教官と、天才の弟、妹。普通であるはずがなかった……)」

悔っていた。ラウラはこの二人への認識を改めた。

「さて、使用時間はもう終わりだな。上がろう」

「おう」

「わかった」

アリーナの使用時間が迫ったので3人は一度退場することになった。

そもそも、何故このような訓練が行われたのかと言えば、一夏の要望が全てであった。開催が迫ったタッグマッチに、一夏は今の実力で一切通用しないのではと考えていた。相手はマコトや簪、セシリアとレイラ、そしてコメット姉妹。いずれも、高い実力を持ち一夏は逆

立ち上ったって敵いそうにない。

特に、マコトの実力は先のブルー・ティアーズ・ステラドレスとの戦いで見せつけられた。サイレント・ゼフィラスの時などとは違う全力での戦闘機動。正面からの攻撃を全て避け、そのまま格闘戦に入り、あの圧倒的な相手に渡り合った。

対して一夏は時折茶々を入れるだけに留まった。だから、一夏は夢から帰還して少し怖くなった。もしこのまま戦い、負けてしまうことがあればマコトに失望されるのではないかと。彼女とは十年近い友人同士で、戦ったことも喧嘩したこともなかった。

なかったからこそ、もし負けてしまえば、と一夏は考えずにはいられない。

だから彼はペア相手である箒、それにルームメイトであるラウラにお願いをして先程の訓練を行っていた。箒の訓練に対する姿勢は鬼のように厳しく、一夏はそれを臨むところだと思つて打ち込み続け、ついぞ一太刀も浴びせることができなかった。

ラウラからすれば、一夏が悲観するほど実力は低くないのだが、箒という同じく幼馴染みに通用しない以上一夏はマコトにも通用しないと思ひ、鬼気迫る勢いで剣を振っていた。

「はあ……まさか一撃も入らないとは」

「太刀筋は悪くないがお前は昔から正直すぎるんだ」

「それ、先生にも、千冬姉にも言われたよ」

「だろいな」

訓練が終われば二人はいつも通りに言葉を交わす。この切り替えの速さはラウラも見習いたいと思つた。

3人はアリーナを出て、その側にあるベンチで小休止を取ることにした。そのあとにマコトたちと合流して夕食である。

「しかし、マコトがそのような強さだったとはな」

「俺も驚いたよ。マコト、争い事は苦手そうに思ってたからさ」

「セシリアとの戦いなどでも十二分に強かったが、その夢の中でのあいつは完全に戦士だな」

飛鳥マコトという二人にとっての共通の友人は自分たちよりも少



し大人で、一步引いている位置にいたストップパー役だった。だから、二人はこの学園にきて初めて見せたマコトの交戦的な姿勢に若干の戸惑いがあった。ただ、もしかしたら今まではそれを見せていなかった、それだけの可能性もあったので特に考えていなかった。

が、セシリアの夢の中でのは元からマコトが「戦士」であったことを裏付けるようなもので、今までの飛鳥マコトとは何なのかかわからなくなっていた。

それでもマコトとの関係を変えないのは二人の真っ直ぐさがあつてこそだ。

「で、お前はそれを見て負けていられないと」

「ああ。今のままじゃ絶対瞬殺される。だから、強くなりたい……つて思ったんだけどな」

「心の強さはあつても、技量というのは一日じゃどうにもならない。地道にやるしかないだろう」

「そうだな」

技術、一夏にはそれだけが足りない。どんな剣でも使い手が素人にはなまくらと変わりが無い。今のところ、零落白夜が真に敵を捉えたのはサイレント・ゼフィルスとの戦いだけだ。しかも、そのときは相手が動いていなかった。

「ラウラ、ありがとな。手伝ってくれて」

「さっきも言ったが別に平気だ」

「それでも、ありがとうだ」

ニカツと笑う一夏に、ラウラも若干照れながら笑みを返す。彼女の兄の快活さは気持ちの良いものだった。

「とまあ、俺は地道にやってくとして……シャルのほうはどうなんだ？」  
道は長いが即物的な手段はないので一夏はそこまで稽古の話題は切り上げ、ラウラにシャルロットの編入試験についての話を振る。大小の騒動はあれど、シャルロットの編入試験に向けての対策は今も進められている。

「結果から言えば順調だ。苦手教科を確実に減らしている。あとは当日の問題の運もあるだろう」

「ならよかった。これで落ちたらなんかほらさ…」

「ああ、あれだな。クラスメイトが落ちて私だけ受かった、みたいなやつだな。一夏」

「そうそう。って、箒はそういうのあったのか？」

「ノーコメントでいいか？」

「あつたんだな……」

「私のことは気にするな。順調ならそれに越したことはないな、ラウラ」

「私が教えているんだ。不合格になどさせんよ」

胸を張るラウラに箒と一夏は心の中で愛でた。こころなし、目もキラキラさせているように見えてラウラの愛らしさに箒は撫でたくなる。このあたりは無意識に姉とそっくりであった。

夕食後、マコトはレイラ、そして簪を連れて束の研究所へやってきていた。夢の中とはいえ黒騎士を簪は見てしまったのである。一夏は千冬の弟であるため説明は不要として、部外者である簪には必要だと思つての判断だった。

マコトとレイラには一昨日の出来事の報告をする必要があり、束本人からの依頼でもあった。

「ここが……」

「すごいでしょ？..」

キャンプ場跡から地下の研究室前に降りた簪はまさにSF映画のような研究所の入り口に驚きを見せる。素直に良い趣味をしているな、と彼女は思った。

研究所の入り口はマコトによつて解錠され、まずはマコトを先頭の中に入る。最初の扉を開ければそこで体のスキャンが行われ、次の扉で研究所の中に入ることになる。3人のスキャンが一気に終わり、またもマコトが研究所の扉を開いた。

「束姉さん！来たよー！」

「まーちゃん！」

開いた瞬間、マコトは束の持つ柔らかなバストに包まれた。簪を意

識した時点でマコトは束にも当然その意識を向けてしまっているため慌てる。年齢的にはむしろ束の方が近いいため余計にだ。

「ちよっ、た、束姉さん!」

「うりうりく、まーちゃんは可愛いなあ」

抱きしめながら頭を撫でる束は簪を見る。ニヤリと、笑みを見せる。それは迎え入れた者のもではなく、明らかな威嚇行為だった。

もし、ここにるのがマコトと出会う前の簪であったのなら、完全に縮み上がっていたであろう。それどころか逃げ出していたかもしれない。だが、今ここにいるのは恋する強い少女だ。恋する大人にも負けない、強い気持ちを胸に秘めている。

「…初めまして、更識簪です」

彼女にしては珍しく、初対面の相手にはにかみながら自己紹介した。それはまごうことなき宣戦布告。

「ああ、君がまーちゃんの「ルームメイト」だね」

「はいそうです。これから「三年間一緒のルームメイト」です」

「…………へえ」

事前情報の人物評とは明らかに違う。束はここまで敵意を向けた相手が怯むことなく立っていることに感心した。簪の後ろにいるレイラは初対面の時の詰問で青ざめていたというのに。それは蛮勇か、それとも、本当の意味での勇気なのか。

きつと、後者だと束は思った。

「じゃあ自己紹介しよう。私は篠ノ之束。インフィニット・ストラトスの開発者にして、まーちゃんの幼馴染み。そして、まーちゃんに専用機も渡した天才だよ」

「よろしく願います、篠ノ之博士」

「うん、よろしく。簪ちゃん」

束が、あだ名で呼ばない時は2つの場合がある。一つは単純に相手に興味がない場合。二つ目はその人物を「競い合うものとして」認めた時だ。かつては千冬も「千冬」と呼び捨てていた期間が僅かだがあった。

簪は認められたのだ。唯一、この地球上で、最高の天才のライバル

として。

そんな二人の女性の戦いにレイラはマコトを半目で見ていた。なんて二人を誑かしたのだと。立場も片や世界を変えた天才で、片や現存する暗部の頭領の妹。常人なら挟まれた時点で逃げ出したくなる。

「ぶはっ、あれ、束姉さん、なんで簪さんのことあだ名で呼ばないの?」

そして、この後に及んで気がつかないこのトンチンカンな親友は本当にどうしてくれようかとレイラは思った。

「うーん、簪ちゃんは今は名前でもいいかなって」

マコトが解放され、束が「どうぞ」と3人をようやく迎え入れる。先ほどもまでの簪を中に入れるための試練のようなものだった。中ではクロエがメイド服姿で控えており、3人に一礼する。

「クロニクル先輩……?」

「ようこそ、簪様。この姿では初めてですね。改めまして、篠ノ之束博士の専属メイド、クロエ・クロニクルです」

ゴーグルをせずに、目を閉じていながら彼女は3人を認識している。クロエの丁寧な挨拶に思わず簪も一礼し、リアルに本当のメイドがいるんだ、と驚いた。しかもこんな学園の地下にだ。

「さて、簪ちゃんには一応説明しておくけど、ここでのことはぜーんぶ秘密。まーちゃんと呼ぶ部屋で話すぐらいはいいけどね」

「……つまり、二人の秘密……」

「ノンノン!他にも知ってる人がいるからそんなラブコメの波動は出させない!」

「束姉さん最近マユが読んでるようなラノベでも読んだ?」

「え?いや……まあ、そうかな!」

「へへ、意外」

クロエとレイラが思わず顔を合わせた。お互いに何を思っているのかすぐにわかった。もはやある意味最強なのはマコトではないだろうか。

確かにある程度、欲求に自覚こそしたがマコトはまだ簪のスキンシップも、恋心から来ているとは気が付いていない。むしろ、一昨日の自覚からこれまでの束のスキンシップも加味して、余計に気がつき

難くなっている。

束も思わず困ったように誤魔化し、簪も理解する。ライバルではあるが同志だと。束のほうは年齢差に加わって、余計にマコトに振り回されている期間が長い。そういう意味では束は簪より先に進んでいる。進んでいる、と思わなければやっていけない。

「まあ、ともかく。サクツと本題に入ろうか」

時間が時間なので、束もふざけているばかりにはいかないと3人をお決まりのテーブルに案内する。席は3つしか用意されていない。束はモニターを操作するため座らないようだった。

「簪様。紅茶は大丈夫ですか？」

「…え？大丈夫、です」

「よかったです。お砂糖は机上のものを自由にお使いください」

「は、はい」

実家でも本音に（態度は完全に友人のそれだが）お世話されていた身ではあったが、クロエの雰囲気は姉のメイドである虚に似通っている。一言で言えば瀟洒なメイドである。

3人が席に着くと、束はモニターを操作する。すると、表示されたのは所々欠損が見られるが夢の中で戦った「ブルー・ティアーズ・ステラドレス」のデータであった。

「これは、あのときの」

「れーちゃんに一応聞きたいんだけど、こういう開発プランはイギリスにあった？」

「いいえ、ありません。確かに形状はよく似た「ストライクガンナー」という迎撃用オプションが現在生産中ですが、あの夢で戦ったコレはそんなものとはかけ離れています」

キツパリ、ハツキリとレイラは告げる。それほどまでに異質だったのだ。束はうんうん、と頷きながら、戦闘してなんか気が付いたこととかあった？と問いかけると、簪が挙手した。

「はい、簪ちゃん。別に手を上げなくても良いよ？」

「……そ、そうですか……えっと、私の撃ったビームが、跳ね返されました」

「ビームが跳ね返るう？」

「束姉さん、本当だよ」

束からしてもビームが弾かれるというのは想定外なものだったようだ。発想からして束にはそれがなかった。シールドバリアや絶対防御は根本的には違うが、攻撃を受ける原理はマコトたちの世界のフェイズシフト装甲に近かった。

それにインフィニット・ストラトスのエネルギーは本来無限であり、わざわざ何かを跳ね返す、という必要がなかった。

「ビームを跳ね返す、というとただ跳ね返したの？それとも簪ちゃんにそのまま？」

「そのまま、ビームが直角にターンしたように跳ね返りました」

「ということはわざわざ跳ね返す瞬間に装甲表面の反射板の反射角を計算して、野球みたいに撃ち返したってこと？いやできるけどそれにエネルギーすごい裂くじゃん」

ISであるのならば明らかに稼働不能に陥るようなものだ。であるのにそれを生み出した。夢の世界だから、とは言い切れない。

「…やっぱり、ということは戻ったのは確かか」

束はブツブツと呟きながら欠けているデータに予測値を打ち込んでいく。その数値をマコトが追っていくと、彼女の顔は呆然としたしたものに変わっていく。特性の違いはあれど、その数値は間違いなく白騎士に匹敵するものだった。

「ま、マコトさん？どうしたの？」

「マコト、何かあの数値に問題が？異様な高さですが」

「…いや、あのレベルの性能は白騎士と同レベルなんだけど」

二人が絶句する。そんな化け物と戦ったのかと。

「よしっと、こんな感じだね。って、どうしたのさ固まっちゃって」

「いやだって、束姉さん。ISは全部、リミッターがあるって。ISコアがかけた」

「そうなんだけどねえ、どうやらブルー・ティアーズは主人の危機に、それをはずしちやっただみたいなんだよねえ。あえて名付けるなら『真なる回帰』とでも言おうかな。この姿はそういう状態だよ」

リバースシフト。インフイニット・ストラトスへ戻った姿。その意味は簪にもレイラにもよくわかる。即ち、単機で国一つを焼け野原にすることさえもできるほどの性能があるということ。それを形態移行で、発揮することができる。

「まだ夢の中だけで、現実にはそうなっていないけど、何かキツカケ次第で現実にも出てくるかもね。もちろん、これそのまんまじゃセシリアちゃんは耐えられないからだいぶスケールダウンすると思うけど」

「これは……とてもではないですが本国に報告などできませんね。最終的にどの国も欲しいのは『白騎士』です。もし今回の件が漏れてしまうと、どんなことが起きるかわかりません」

「その方がいいと思うよ。私としてもちよつとこれはまだ『早すぎる』ものだよ」

次第によつてはセシリアの件は本国に伝えるつもりだったが、レイラは今回の昏睡の件を揉み消すことにした。

簪はとんでもないスケールの話に巻き込まれたと口を挟めずにいる。いかにこれまで世界の裏側にいながら周りを見ていなかったのか自覚し、怖さすら感じる。そして、姉も、好きな人もそこで戦っている。

「(目を背けちゃ、もう、だめだ)」

ここに簪は戦いに来た。束とも、これまで避け続けたものとも。だから彼女は俯きそうになった頭を支える。

「……他の専用機で、こうなる可能性は？」

「いい質問だね、簪ちゃん。回答としては『ある』だよ。ただし、コアのAIの成長度が相当、もしくは今回のブルー・ティアーズみたいな特殊な状況に陥らないと無理だね」

「ということは一夏の白式は」

「いや、まーちゃん。あの子はそもそもモード変えるだけで、戻るとかそういうのじゃないから例外かな」

白式がサイレント・ゼフィルス戦でリミッターを解除したのはブルー・ティアーズとは違い単純に内部にある白騎士のデータをアンロックしただけだった。

「他にありえそうなのは……黒騎士はそもそも白騎士の色違いだから元のまま、他のコア見てみようか」

東がまたモニターを操作すると、今度は画面いっぱいに大量の番号とゲージのようなものが出てくる。

それらはこの世界に存在しているほとんどのコアのAI成長度合いだった。

「こ、これって……」

「博士、これは」

「察してと思うけど、全コア……白騎士と黒騎士を除く、世界中にあるコアのAIの成長具合を出したんだよ」

コアネットワークは本来干渉ができないものであるが、そこは管理者権限で束だけが自由に閲覧できた。さすがにコアがどこにあるのか詳細な追跡はできないが、番号さえ照合できればどこの所属かはわかるのだ。

「これを見ると、コアナンバー103、102、340が可能性があるね。102はブルー・ティアーズだから、もう二つは」

コアナンバー103は所属国がイギリス、現在稼働中。『ダイヴトウ・ブルー』と表示され、340はアメリカ合衆国、現在稼働中。『シルバリオ・ゴスペル』と出る。

「ダイヴトウ・ブルーが？」

「うーん、夢の中で共鳴でもしたのかな？」

「……博士も、そのあたりは、未知数なんですか……？」

「そうだよ。開発者だけどAIは偶然の産物で私も研究中だからね」

「……なんだかISが怖くなってきました」

「大丈夫、大丈夫♪」

簪の中でISの認識がどんどん変わってくる。実感していたものよりも遥かに凄まじいものだった。

「まあ、れーちゃんのはまだちよつと足りないかな。問題はこっちの340。すごいね。稼働期間はわずかなのにもう白騎士並の成長。よっぽど搭乗者に愛されてるのかな」

「このシルバリオ・ゴスペルってどういう機体かわかる？東姉さん」



「ペンタゴンに入るのはちよいつと面倒だけど、あとでやっておこうか?」

「い、いや、そこまでしなくていいよ?」

出来ないとは言わないあたり束の力がよくわかるが、そんなことをしなくとも知っているものがいた。レイラである。

「マコト、私は任務で知っています。教えてくださいませんか?」

「いいの?」

「私はあなたの味方ですよ。昔も今も……」

見惚れてしまうような笑みを浮かべるレイラにマコトはありがとう、いつもの笑みを返す。この二人の間には簪も束も入れそうになかった。死が二人を別つても、再び巡り合った相手なのである。

「さて、このシルバリオ・ゴスペルですが、詳細な情報こそ不明ですがそのコンセプトは誘導式多連装ビーム砲による領域支配機、だそうです」

「やるねえ。ビームを誘導する演算機積んでも動くんだ」

束はビームを誘導する兵装を実用化しているアメリカを称賛する。イギリスも似たようなフレキシブルを実用化しているが、結局セシリアの例の通り、実戦では使用できない代物だ。それだけにレイラもその凄さを知っている。

「はい。元々は重力下での超音速機動を可能とし、更には弾道軌道を単独でとって敵基地を撃滅するという、核に代わる超兵器として開発され、実際にそこまでは出来ていましたが、そこからその誘導ビーム砲を搭載し、完成した……と噂されています」

「噂……?」

「噂になってしまっているのはアメリカが徹底して秘匿しているからですね。当然と言えば当然ですが」

アメリカ合衆国の力はこの世界においても絶大であった。集合知によって、単純なカタログスペックこそ白騎士には遠く及ばないが単独で成層圏まで到達しうるISを開発してしまっている。

束も、一人でかの国の工業力と戦えと言われたら尻尾を巻いて逃げるしかない。ただの悪の組織と、国では規模が違いすぎる。

マコトやレイラからすればアメリカの印象は地球連合の一部であり、G兵器の開発などを考えれば納得の技術力であった。結局のところ、マコトたちが乗ったインパルスやザクはその連合の機体の模倣に近いのだから。

「ただまあ、アメリカなら妙なことにはならないかなあ。暴走、って意味でね」

「私たちがいたコズミック・イラのロゴス……こちらで言う亡国機業は既に滅んでいますから、そう思っていていいでしょう」

レイラはネストの存在が一瞬過つたが、残党程度がアメリカのIS関連の部署に入り込めるはずがないとわかつている。シルバリオ・ゴスペルのことを知れたのは向こうが意図的に流したからだっただけから。

「ま、だから私たちが見守るのはセシリアちゃんだけでいいかな」

「わかりました」

「わかったよ、東姉さん」

「はい」

一先ず方向性は決まったので、これで解散になるようだった。ただ、レイラはふと気になったので東に聞くことにした。

「……博士、一つお聞きしたいのですが」

「何かな？」

「ユグドラシル、とは一体」

「れーちゃんもそれ聞くの？」

「私以外にも聞いたものがあるのですか？」

「簪ちゃんのお姉ちゃんにも昼聞かれたよ」

ここで楯無の名前が出てきて簪は目を見開く、姉は東の存在を知っていた。当然と言えば当然だが。

「レイラ、なんだその、ユグドラシルって」

マコトは当然それを聞く。東は聞いて欲しくなかったことを聞いてくれたな、と思った。

「簡潔に言えば、エクステンデッドよりもタチの悪いものと思ってください」

「……ッ！」

「え、えくすてんでつと？」

「簪さんは知りませんよね。もつと言うと、強化人間：薬物、改造手術、マインドコントロール。考えうる限りの非人道的な方法で作りに上げられた名前通り、強化された人間のことです」

「そんな、ものが……!?!」

「本当に、あいつらはログスだったのか……」

「ええ。昨日お父様から報告を受けて、確信しました。この世界におけるログス…その前身だったのでしよう、彼らは」

並行世界、というものがありうる以上はわかっていたことであつた。束は幼い頃のマコトからログスの存在は聞いていたので、なるほど、と思うだけだつた。しかし、そのテのアニメや漫画も知識にある簪は考えてしまう。

「……………因果が、収束してる……………?」

「ん?どうしたのかな、簪ちゃん」

「あ、いえ…漫画みたいだなつて」

「漫画?」

「うん。過去に飛んだと思つたらそこが並行世界で、本当はその世界で起きなかつたことが、その世界に主人公が“因子”を持ってきたことで、起きてしまう、そんな話」

漫画の話か、と楽観視できるほどマコトやレイラ、束は呑気ではなかつた。特に束は実家やスコールの件で“超常”の存在を知っている。コーデイネイターのような技術は既に潰されているため、この世界が直接コズミック・イラに繋がることはないが、似たような他の事象が起きている、存在していたというのは偶然とは思えなかつた。

「元から全てあつたものだけど、もしそんなことが現実にあつたら怖いね」

「最低限の警戒はすべきでしょうか」

「あたしもそう思う」

サイレント・ゼフィルスの襲撃があつた以上、敵はまだいる。ならば、警戒はしなくてはならない。

「えつと……」

「ありがとう、簪ちゃん。おかげで何か大切なものを見落とさずに済みそう」

「あ、ありがとうございます」

「うん。素直でいい子だね。いろいろ抜きにして、友達にもなりたいな」

「は、博士と、友達？」

「うん。嫌かな」

「い、いえ、そんなこと」

「なら、今日から君も友達だ」

束が簪に手を差し出してくる。簪はおそるおそるその手をとった。その手は想像していたよりも暖かく、優しかった。束の顔を見れば、彼女の顔はどうみたって世界を変えてしまった科学者ではなく——以前訪れた、篠ノ之神社の娘にしか、見えなかった。

## # phase—30 「かくして幕は上がる」

学年別のタッグマッチの前日晚、一夏、ラウラ、シャルロットの部屋に一夏の姿はなかった。部屋に残されたラウラとシャルロットはタッグマッチの翌日、つまりは明後日に迫った月末のシャルロット編入試験に向けて最後の追い込みをかけていた。

「ごめんね、ラウラ。明日は早いのに」

「別に気にする必要はない。私の好きでやっているからな」

ラウラはタッグマッチ当日、生徒ではなく出向中のドイツ軍人として学園内の警備担当者たちと訪れる要人などの警護に当たることとなり、早朝から会場内の点検に参加する。そのため、本来であれば既に20時を回った現在、就寝に入ってもよかつた。しかし、彼女はシャルロットの勉強を教えることに時間を割いている。

「……………ふむ。なかなかいいな。過去問題で9割を取れていれば十分だ」

「よかつたあゝ」

「クラリツサにも手伝ってもらってランダムに応用問題も追加してこれなら当日よほど意地の悪い問題がこなければ大丈夫だろう」

「人生で一番ここ最近が勉強してる気がする」

「それはそれでどうなんだ…………？」

なんであれ、シャルロットのテスト対策は万全となったのは確かであった。シャルロットは勉強が嫌いだったが、まさかここまで自分で勉強できることに驚いている。ラウラの教え方が丁寧、というのもあったが気力が続いたことも驚きだった。

「フランスにいた頃は、成績とかはどうだったんだ？」

「うーん、落第ギリギリ、かな」

「なんで平然とした顔でそれを言えるのか」

「いやあ、学校は卒業できればいいかなあって。高校出たらテストパイロットで暮らして行くのかなと」

どう考えてもその人生プランはフラグすぎる、とラウラは思ったが言わない。一夏や箒のような普通からは外れた者たちのせいで霞む

が、シャルロットはマコトたちのグループの中では比較的一般人の部類だった。もちろん、ISの操縦者としてはプロに近いものもあって、決してただ能天気というわけでもないが、彼女はラウラも含めいつもの面々の中で何も抱えているものがなかった。

親が3人はいるものの家族関係は良好で、実家の騒動に巻き込まれるまでは危ない目にあっただけでもないごくごく平凡な少女。学園に来て、救われてからはその本来の気質が徐々に出てきている。

実を言えば、シャルロットはマコトたちよりも他の1組の面々と喋っていることが多いぐらいだ。化粧品の話や、お気に入りのブランドの服、好きな人はいないのか、他愛ない話をしているシャルロットの姿はラウラもここ数週間でよく目にしていた。

そんな彼女が少しだけラウラは羨ましかった。

「ラウラ？」

「いやなんでもない。過去がどうあれ、ここまで努力したんだ。あとは当日に全てを懸けよう」

「うん。本当にありがとう、ラウラ」

「それは受かってからで頼む」

「あはは、そうだね」

冷えたコーヒーを飲みながらラウラは試験勉強もひと段落ついたので話題を変える。

「それにしても、一夏は凄まじいな」

「確かに。前日だからって森でキャンプって」

「箒と精神統一する、と言っていたがあれがブシドーというものか」

「ちよつとよくわからないね」

一夏がこの部屋にいない理由は聞いており、タッグマッチ当日のコンディションを整えるために無断にキャンプ場跡で箒とキャンプをして一晩過ごすというものだった。これは一夏と箒の大事な試合があったときなどのルーティーンで、まだ箒が引越す前に篠ノ之神社の裏山で過ごしていたことを思い出してのことだった。

篠ノ之神社の裏山は靈感あらたかな場所であったので本当に精神統一の効果があつたが、この島のキャンプ場で同様の効果があるかは

不明だ。

見つかったら校則違反で困るはずだが、二人が選んだそのキャンプ場跡は束の研究所がある近くであり、束の監視の目があるため逆に学  
校側は見回りにこない場所であった。

「織斑先生もそうなのかな？」

「教官もそういえば試合前は瞑想すると言っていた。そういうものなのかもしれない」

「サムライの映画みたいだ」

欧州から来た二人からすれば一夏たちの行動はかなり意味不明であり、そんな慣れない環境で一晩過ごしたら逆に当日のコンディショ  
ンが崩れそうなものだが、本人たちはそれでいいので理解できなかった。

「ラウラはタッグマッチ出なかったけど本当にいいの？」

「何がだ？」

「ラウラも新型機のテストパイロットしてたよね」

他国の軍人相手にそれを気兼ねなく聞くのは——とラウラは一瞬  
思ったが、既に彼女の専用機やその周りの情報は欧州で公開されてい  
る部類なので話すことにした。

「ああ、そもそも私の専用機は所詮、実験機だからな。レイラのように  
先行量産機としての仕様とは程遠い」

「A I Cだっけ？すごいよね」

「それが問題だ。敵中で静止するなど、ショーをしているわけじゃな  
いからな」

ラウラは自身の専用機に与えられた特殊機能があまり褒められた  
ものではなかった。現在の I S の戦闘はセシリアのような中距離で  
の機動戦が主である。これは千冬と戦うためにはどうすればいいか  
という対策から生まれたもので、千冬が引退した今でも続いてしまっ  
ている。

A I Cと呼ばれる機能は技術者から静止での使用がラウラに求  
められ、彼女は「未完成品で実戦などできない」と試験運用を断って  
いた。これには軍の上層部も同意し、今彼女は専用機を持ってきてい

なかった。

「全く、試験部隊ではなく実戦部隊だと何度技術部に言えばわかるのか…」

「あはは、大変そうだね」

「大変だよ。部隊運営というのはな」

そうは言うが幼いながら少佐という階級になり1部隊まで任されているあたり、仕事は完璧にこなしているのだろうとシャルロットは思った。漫然と日々を過ごしている自身とは大違いで、シャルロットは彼女を思わず褒めたくなったが実際にはしない。

「ただ、明後日には別の機能を付けたものをこちらに寄越すと言っていたな」

「へえ、それはやっぱり機密だから教えてくれないよね？」

「詳細はな。名前と概要ぐらいは別にいいと思うが」

「え、いいんだ」

「ああ。確か——『ユグドラシル・ドライブ』という機体性能向上システムだと聞いている。A I Cが停止なら逆にP I Cの動作を更に過敏にする、簡潔に言えば機動力向上用のシステムらしい」

「すごいね。ドイツってI Sが戦車の延長線上の運用が多いから、そこから発展するためののかな？」

「だろうな。こちらの現在の主力機である『ヴァイスヴィント』もI Sでありながらローラーダッシュを搭載した陸戦機だ。シユヴァルツェアシリーズはそこからの脱却も目指している、というのは広報でも流している通りだ」

シャルロットはテストパイロットとしてはどんな機体でも『普通に乗れる』のでヴァイスヴィントと呼ばれるドイツの主力機に搭乗したこともある。白色の無骨な機体で、I Sでありながら陸戦を主に置いた調整で、その分、空中での機動はラファールなどと比べると旋回性能などで劣る。しかし、搭載する兵装は全て大火力を持つものであり、単純な火力であれば現在のI Sの中では上位に食い込む。

堅実な機体であれも悪くなかったけどね、とシャルロットは感想を思い返した。



「さて、そろそろいい時間だ。シャワーを浴びるが先でいいか？」

「うん、いいよ。それともお風呂沸かして一緒に入る？」

「どちらでも構わない」

「じゃ、お風呂沸かすね」

そこに若干な邪な感情（可愛い子は愛でたい）が混ざっていたことにラウラは気がつかない。彼女は純粹だった。

ラウラとシャルロットが風呂に入ろうとしていたのと同時刻、マコトたちも明日のタッグマッチに向けて話をしていた。対戦相手は当日の朝発表のため、考えられる相手の全てを彼女たちは考えていた。セシリア・レイラ組に当たればマコトが強引にかき乱しながらピットの動きを釘付けにし、セシリアから先に落とす作戦を。一夏や箒であれば徹底的に中距離戦で対応をする。

コメット姉妹が来ればドッグファイトは避け、乱戦も起こさせず遠距離戦に持ち込む。マコトと簪は特に何か大きな理由があるわけではなかったが、勝ちたかった。簪は好きな人と勝利の美酒を欲し、マコトはこの世界に来て幼馴染たちに次いで長くいる、この世界の相棒を勝たせたかった。

いつものメンバーの中で、この二人が一番、何も抱えずに勝利を欲していた。

「…つと、こんなところでいいかな。あとは明日の出たとこ勝負でいいくないね」

「そうだね。想像からは、ここまでしかできない」

資料映像やこれまでの有事の戦いの記録を二人は確認し終えて、明日へのイメージトレーニングを終える。

二人は例の如くベッドの縁に並んで座っているが、以前と違い一枚挟んでいるような薄い隙間がある。いつでも触れられる距離でありながら、触れられない。ただ、その距離は決して二人の間にある壁ではなく、二人の言葉や、想いが混ざり合うための空間だった。

「……勝ちたいな、マコトさん」

「うん。そうだね。勝ちたいね」

「私、こんな何かに『勝ちたい』って思ったの初めてだと思う」

「一夏の時はどうだったの？」

「あのときは代表候補生としての義務みたいなのが強かったかも」  
「そっか」

束との邂逅が、裏の世界で顔を俯けないことが、簪の歩み方を大きく変えていた。臆病なところや、人見知りなところは変わらない。けれども、臆病でも歩みが遅くても、前には進める。簪はそれをこれまでの戦いで知った。

「マコトさんは、戦うのが怖いつて思ったことある？」

「あるよ、もちろん」

その質問に、マコトは前世を思い出す。怒りがあつた、憎しみがあつた、それを力に変えていた。でも、どこかにあつた。戦うことへの恐怖。——ステラが奪われるまでは。

「あつたけど、いつの間にか忘れちゃつてたかな」

隠されない悲しい笑みはきつとまた誰かを喪つたからだと思つた。簪は彼女からまだ前世のことを詳細に聞いたわけではない。けれども、マコトが時折見せる悲しげな笑みは姉である刀奈が任務で喪つた者たちのことを思い出す時と似ていた。

人の死は人を変えてしまう。姉がただ簪の姉だけでいられなくなつたように。

それが奪われたものならば、尚更。

「……それは、忘れたんじゃなくて、奪われたの？」

「簪さん、もしかして心読めたりしない？」

「それができたら、私はあなたにもつとたくさん言いたいことがある」  
「言いたいことつてなんだ、とマコトは思つたがスルーする。」

「まあ、質問に答えると、そうだね。前世のあたしは、たくさん奪われて、奪われて、最後には奪う側になつてた」

前にも話したよね、とマコトは簪に言う。もちろん簪は覚えていた。嵐の夜、抱き合いながら吐露したマコトの想い。奪うばかりだったマコトが、この世界に来てようやく守ることができた日。

「恐怖がなくなるっていうのは克服したわけじゃないんだ。そうなつ

たらいずれ破滅する。その人は恐れていたはずの恐怖そのものになつて、恐れていた人たちに乗り越えられていくから」

だからマコトは簪には奪われたいでほしいと思つた。恐怖が奪われた時、人のブレイキは一緒になくなつてしまう。

「もう、私は、マコトさんに何も奪わせない、マコトさんからも奪わせない。逆に、私はマコトさんにたくさんのものを渡したい」

あなたのことを愛しているから、とはまだ簪には言う勇気がなかつた。代わりに、今彼女に渡せるものを簪は懐から取り出した。桐で出来た小さな箱。それを掌に乗せて、簪はマコトに差し出した。

「これはその最初の一つ目。はい」

優しい微笑みはマコトの心に染み込むように見え、彼女は簪の手から箱を手取る。蓋を開ければその中には一つのアピンが入つていた。ただし、そのヘアピンには桜色の宝石が嵌められた上、桜の花の形をした装飾も施されている。決して派手すぎず、けれどマコトの艶やかな黒髪に合う、素晴らしい出来だ。

「これ…」

「前に言つた髪飾り。どう、かな」

「…きれい……だけど、その、高かつたんじゃ」

箱から取り出して、室内の照明に宝石の花弁を輝かせる。彼女の気持ちを受け取る気であつたマコトだが、これは明らかに高価なものはずだ。大丈夫なのだろうか。

「ううん。これはね、更識家に付き合いのある職人さんがタダでくれたの」

「え、そうなの？そこはやっぱりお得意様だから？」

簪がタダでこのヘアピンを作ってもらえたのにはある理由がある。その職人が更識家に「頼まれて」装飾品を作る際、特定の相手への贈り物は人生で一度だけ無償で作成する。無償ではあるが魂が込められた逸品。

それが送られる相手は——更識家直系の人間が「添い遂げる」と決めた者。

姉ですらまだ、そんな依頼することなどないのに、簪は一足飛びそれを依頼した。若さゆえの暴走か、それとも覚悟を以つてのものかは簪自身もまだよくわかっていない。

けれども、翼を得たマコトがどこにいかないように留めておくための最後の楔がこの髪留めだった。

そのような背景があることを簪は告げない。マコトも気がつかない。伝える時が来れば伝える。簪はそう決めていた。

「桜の花言葉って、優美な女性、とかそういうのだよね。あたし、そんな人かなあ」

「ううん、桜の花言葉はもう一つあるよ。精神の美。マコトさんの心は、綺麗だから」

綺麗だから、と真正面から言われればマコトは顔を真っ赤にする。レイラに美少女だと言われた時とは全く違う感覚だった。

マコトはせっかくもらったのだから、と照れながらも髪留めを前髪につける。簪の想像していた通りマコトにはよく似合っていた。

「……ありがとう、簪さん。大切にするね」  
「うん。そうしてくれると嬉しいな」

マコトは体が暑くてしようがなかった。さきほどの、渡される直前の言葉が何度も頭をよぎっていく。誰かに守られるような言葉をかけられたのはいつが最後だっただろうか。こんなにも献身的な言葉を投げかけられたら、マコトは——勘違いしそうになる。

目の前にいる、強くて優しい女性を、もっと意識してしまう。臆病で、守らなければいけないと思っていた相手は遥かに、マコトよりも強かった。

「ね、寝ようかな。明日もあるし」

「そうだね。マコトさん、明日はよろしくね」  
「こつちこそ。黒騎士はないけど、あたし、頑張るから」

「大丈夫。マコトさんの力はもう、知ってるから」

一緒に戦おう、と簪が手を差し出す。マコトは迷わずその手をとった。もう彼女は一人ではない。この世界に飛鳥マコトは完全に根を下ろす。それは彼女がようやく、皆の輪に入ることを意味する。視覚

的に、行動的に見えるものではなく、精神的に。

翌朝、対戦相手が発表される。一年生の出場選手はその数からアリーナを分けてAブロック、Bブロックと2ブロック制で戦うことになり、マコトたちはBブロックだった。そして、試合相手はいきなりの強敵であった。

Bブロック一回戦第一試合——飛鳥・更識（簪）ペア 対 コメツト（姉妹）ペア。

「早速ね」

アリーナ前の電光掲示板を見ていたマコトと簪に、同じく見に来ていたファニールが言う。彼女の隣には妹のコメツトの姿もある。代表候補生にして、現役のアイドル。彼女目当てに見に来ている観客も多々いる。

「私たちは負ける気なんてさらさらないわ。オニール、そうでしょ」

「うん。お姉ちゃんと一緒に、私、頑張るから」

「お互い量産機、そうなれば当然、力のあるほうが勝つ。首洗つときなさい」

勝気なファニールの挑発にマコトも簪も乗らない。二人は冷静にファニールに向き合っている。

「そうだね。だから、あたしたちも負けない」

「……………うん……………」

マコトの影に隠れながらも簪はファニールから視線を逸らさない。ファニールはいい度胸だと思った。日本の国家代表候補生の中でも新参な更識簪のことは十二分にファニールは調べている。公式試合出場数0。非公式戦では勝ち星もなし。学園に来てからも一夏とは互角の勝負。

異常な腕のマコトがペア相手だが、ファニールには勝ちが見えていた。慢心ではなく確かな自信として。

「いくわよ、オニール」

「うん」

その場から踵を返し去っていく姉妹をマコトたちは見送る。

ついに、予期しないものではない、覚悟を持って挑むべき戦いの幕があがる。マコトは少しの間やめていた、簪の手を取ることを今日ばためらいなくした。簪の体温が伝わる。燃えるような暖かさだ。

「簪さん、勝つよ」

「もちろん」

隣にいるマコトを簪は見る。渡したヘアピンは陽光を受けて煌めいていた。

「今頃マコトたちも準備中かな」

「だろうな。あいつらのことを考えてる余裕はないぞ」

「わかってるよ」

タッグマツチAブロックが行われるアリーナのピットで一夏と箒は試合前の最終チェックを行っていた。チェックと言っても一夏の白式には複雑な装備もなく、箒も借りている打鉄には予備2本を含むブレード4本と、気休め程度に打鉄用のバズーカを格納している。「わかっていると思うが、我々は切れなきや終わりだ。私は斃れてもお前をあいつらに喉元に届ける」

「わかってるさ。信じてるぜ、箒」

「こちらもだ、一夏。やつらに篠ノ之流ここにありと見せつけてやるぞ」

「おうさ」

二人の悪鬼が嗤う。ピット内で待機している手伝いの整備課の生徒や三年生らがその顔を見てしまい震え上がった。完全に人斬りの顔をしており、これより修羅に入ると言わんばかりの二人の気迫は恐ろしいものだった。

「気迫だけは正直、教官にも匹敵するな…お前たち」

「ちよつと怖いなあ」

ピットに応援に来ていたのはラウラとシャルロットだった。一晩の精神統一により完全に一夏と箒は「仕上がって」おり、ここにはいないが二人の様子をカメラで見ている束はあまりの恐ろしさにクロ

エへ抱きついてしまったほどだ。

そこにいるだけでビリビリとする肌の感触に、ラウラはこんな空気の二人がアリーナに出てしまえば一夏が男性操縦者であることや箒の苗字を気にすることなど出来なくなるだろうと思った。シャルロットはこういった二人の気迫には妙に耐性があるので怖いなあ、とやんわりと言うだけだった。

「勝負は気持ちからだからな」

「ああ。勝負は確かに道筋あつてのものだが、それを貫くには確固たる意志が必要だ」

「サムライ：ブシドーだな。こうしていぎ見せつけられると恐ろしく感じる」

「軍人であるラウラにそう言われるのは光栄だ」

覚悟ガンギマリとでも言うべき状態は軍人でも怖いな、とラウラは思った。これから行われるのはあくまで競技だが、戦争で、殺し合いであればこのような手合いが一番恐ろしいとラウラは考え、できればそんな日がこないことを願うばかりだ。

「さて。行くか。いいな、箒」

「ああ。一回戦であいつらと戦えるんだ。出し惜しみは無しで行くぞ」

「どうせ俺の戦い方は一回でみんなにバレるしちようどよかった」

一夏と箒がカタパルトへ向かう。ラウラたちはそれを無言で見守った。

『打鉄、カタパルトに接続を確認。発信タイミングを篠ノ之さんへ移譲』

まず出るのは箒だった。既に練習で慣れたカタパルトでの射出に、箒は気合を入れる。

「一夏、先に行く。——篠ノ之箒、打鉄、いざっ！」

勢いよく箒がピットの出口へ消えていく。観客席からの歓声がピット内に響いてきた。観衆の前での試合は二度目だが、一夏は気後れしない。もう彼には対戦相手のことしか見えていなかった。

この学園に来て、初めて戦い、初めての敗北を経験したあの青の騎

士と、今度は彼女が守護する女王との戦いがこれから待っている。

『発進タイミングを織斑くんに移譲』

「ふう……織斑一夏、白式、行きます！」

白が飛翔する。

——起動データ『白騎士』をアンロック。 回歸開始。『白■叉』への  
コンバート率——25%

覚悟を決め、刃を磨いた若武者に、剣は応えるべくしてその身を鞘  
から抜こうとしていた。



## # p h a s e — 3 1 「流星を断つもの／夜叉を狩るもの」

一夏たちが出撃したピットとは反対に位置するピットの中は静謐な空気に包まれていた。管制をしなくてはならない三年生も、ピット内で一般生徒向けのISを整備する整備課の生徒も、警備を行う警備員たちも誰一人口を開くことも、息の音を立てることもできない。

彼女らの視線の先には一人の姫に跪く騎士の姿があった。彼女たちのカケラでも知る生徒はその姿に驚きを見せるだろう。事実、整備課の手伝いでこのピットにいる本音は呼吸を忘れそうになる。

跪くセシリアの姿はあまりにも、物語に出てくる騎士姫のように美しく、彼女の前に断つレイラもまた、御伽噺に出てくるような美しさを見せている。それはセシリアとレイラのISスーツが「公式戦」で使用する本来のISスーツに変わっているからか。

セシリアのISスーツは色こそ青なのは変わらないものの、プリマのように至る所にフリルがあしらわれ、露出はなく脇腹を僅かにシースルー状の素材にすることで十代の若々しい肉体のエロスと美しさを両立する。

レイラのISスーツは普段のセシリアと同じ青ががったものから、純白にがらりと変わり、基本的な装飾や形状はセシリアと同じだが籠手や胸元にはプレートアーマーが装備されている。そして、極め付けは本来彼女が戴くことのない「ティアラ」が頭にあった。これはただの装飾品ではなく、ティアラの中央に設けられた宝玉にセンサーが搭載されており、射撃精度の向上を見込んだものだ。

代表候補生といえど、二人の母国での知名度はピカイチで、かつ実力と容姿の美しさは人気に直結する。更に、片やこの若さで当主、片や幻のプリンセス、とくれば下手なアイドルよりも二人は期待され、その身に代表のみが与えられるはずの専用装備が許された。

「——セシリア、私、こういうのあまり好きではないのですが」

「此度の戦いは私達も覚悟を決めなくてはいいけません」

「…それはわかっています」

誓いを立てるためにセシリアは出撃前にこのような儀式を求めた。ルームメイトであり、友人でもある箒の覚悟は前日の別れ際に味わった。肌が粟立つほどの剣気。今の今まで彼女が解放していなかった「織斑千冬と剣術では互角」という人を超えた域にある姿。

篠ノ之箒と名乗る少女が内に潜めていた、ある種のおぞましきすら感じさせるソレはセシリアの意識を変えるに十分すぎた。先日の気絶もあり、彼女は親友であり仕えたいと誓った少女に不安を与えてしまった。だからこそ、今日は不甲斐ない姿を見せられない。

「あなたに、剣は届かせません」

「作戦では私が前衛ですが？」

「わかっています。ですから、私のティアーズが姫様の剣舞を邪魔する輩を討ちます」

「……………わかりました。お願いします。私の騎士」

苦笑いしながらもレイラは彼女の献身を受け入れる。親友がそうしたいと言っているのだから、止めるつもりは起きなかつた。前世における罪の贖罪を成すかのように。

セシリアが立ち上がり、レイラから少し離れるとブルー・ティアーズを展開する。夢の中で顕現した姿ではなく、いつも通りの期待形状と装備。彼女はそのままカタパルトへと向かい、機体を接続する。

出口から歓声が聞こえる。先に一夏たちが出撃したのだろう。

『Do you match the control language to  
いいえ、日本語で構いませんわ』

『ありがとうございます。アリーナ内のコンディション・グリーン。カタパルト接続を確認。進路クリア。発進タイミングをオルコットさんに移譲』

「レイラ、お先に」

「どうぞー！」

「では…………セシリア・オルコット、ブルー・ティアーズ！行きますわー！」  
セシリアがカタパルトで射出される。それを見送ったレイラは自らもISを呼び出し装着する。その機体形状は一部が大きく変更さ

れていた。セシリアの一件以降、武装の力不足を感じたレイラはタリアに頼み込み、分解され、オプション装備化されたサイレント・ゼフィアスの兵装をダイヴトウ・ブルーに移植した。

左右に浮かぶアンロックユニットの形状はまるで背に円環を抱くように展開されそれには片側4つ、左右で8基の“ソード・ガンビット『テイアーズⅡ』”が装備され、腰にはシールドビットが装甲として配置。

主兵装だったビーム・ライフル“レヴァリエ”は格納され、彼女の右手には白銀の聖剣としか言いようのないものが握られていた。その銘は“カリバーン”。衛星砲“エクスカリバー”の粒子加速圧縮ビーム砲の原理をそのまま人間サイズにダウンサイジングして、剣に内蔵したソード・カノンだ。

ダイヴトウ・ブルーも灰色だった機体色が白銀に塗装しなおされ、その姿は見違えていた。この日のためにセシリアの夢の一件から僅か数日での改造をなしたイギリスの技術部は優秀だった。

レイラは機体をカタパルトへと載せる。

『続けて、デュランダル機。進路クリア、発進、どうぞ！』

「レイラ・デュランダルです。ダイヴトウ・ブルー・プリンシパル、発進する！」

天使の名を与えられたレイラの剣は本来の“潜航する者”としての役割を放棄し、飛翔する。ピットから射出され、アリーナ内へと進入したレイラを待っていたのは大歓声と、今は敵として立っている級友たちであった。

箒と一夏の目はとても友人を見るような目ではない。前世で相対した“敵”とよく似た真っ直ぐで、迷いのない瞳。そこまでの覚悟、であれば、と彼女は手にした剣を体の前に立て、振り払う。

「……そこまでの覚悟、敬意を表しましょう。極東の剣士たちよ」

一夏と箒は内心、レイラのISの形状が大きく変更されていたことに面を食いつつも、本気のレイラの威圧感を受けて、それは流した。

「(スゲエ…コイツがレイラの、セシリアの言う姫様としての本気か…?)」

「(ほお：そうか、レイラのウチにあるのはこれなのか：まるで天から民を見下ろす帝のような、支配者としての気……)」

解放されたレイラの本래の氣質が一夏と箒の闘争心を燃やしている。挑戦者である二人にとって、レイラは今まさに打倒すべきものとして認められてしまった。

「しかし、我が騎士が其方たちの剣を阻む。そして、我が剣が貴殿らの心を砕く」

「そういえば、そちらで言う剣は斬るのではなく、砕くのだったな」  
「いかにも」

レイラが手に持つカリバーンを両手で持ち、大きく構える。マコトが今ここにいれば、それはレジェンドでエクスカリバーを構えたポーズと酷似していることに気がついただろう。

「レイラ、スゲエよ。スゲエ。ヒリヒリくる。まるで暴君みてえだ。支配者だ」

「それが？」

「……お前を斬りたい」

最終的に皆斬れば良い。一夏の中に眠っていた千冬と同じ「暴力」が目覚めます。かつては篠ノ之流によって押さえ込まれたそれは、今こうして師範ではない箒と共に「武」だけを思い起こさせたせいで解放される。

そんな「獣」としての笑みを見せる一夏にセシリアは戦慄した。何を彼は目覚めさせてしまったのだろうと。これまでの戦いが、彼の心境に何をさせたのだろう。

その答えは単純明快に……彼が力を欲したから。それだけが、彼の中にあつたものを呼んでしまった。友に失望されぬよう、託された力を振るえるよう、少年の心は修羅となっていく。

「無礼な。我が姫を斬る？その物言い——」

試合開始を告げるブザーが、その瞬間鳴った。

「お前たちを斬り捨てて、俺はこいつをモノにするッ！」

「——万死に値する！」

セシリアがレヴァリエを唐突に最大出力で放ち、それを一夏はいき

なり展開した零落白夜で切り払い、強烈な左右への高速機動でセシリアに迫った。クラス代表戦の焼き直しとなる組み合わせ、しかし、一夏の動きはあの時の比ではない。

「(この動きっ!?)」

その動きはIS乗りであれば誰もが忘れることのできない。最強の動き。閃く零落白夜の切っ先が確実な死をセシリアに幻視させる。だがそれでも、彼よりも経験のあるセシリアは退かない。

「まずはセシリアを！」

「させるとお思いで!？」

彼女は左手に持つレヴアリエを消したかと思えば、次の瞬間、刀身が青白く光るナイフを持つていた。見たことのない装備、一夏はレイラの持つナイフと同じく特殊装備でないかと一瞬ひよってしまふ。それは大きな隙となる。

「タアっ！」

「投げ!？」

セシリアにとっての剣とは銃だ。故に、彼女はブルー・ティアーズに装備されている唯一の格闘武装であるナイフ。インターセプターを容赦無く一夏に投擲した。最低限の回避、と一夏は飛び込んでくるナイフを避けようとしますが、僅かな反応のラグがそれを許さず、零落白夜の使用を一時中断させ切り払うという選択肢を選ばせる。

「一夏！」

箒が援護を行おうとバズーカを手にするが、それは即座に体勢を立て直したセシリアの右手にあるライフルが砲口を撃ち抜く。咄嗟に箒はバズーカを手放すが、弾薬の誘爆で爆煙が目の前に発生し、視界を奪われた。

「箒……ッ!？」

「正気か！敵を前に——！」

瞬時加速を行い、レイラが今度は一夏に突貫する。振り抜かれたカリバーンの一閃は一夏から見ても洗練されたもので、彼は雪片で受けるしかなかった。

「余所見をつ！」

「このっ！」

一夏は力任せにレイラを箒がいるであろう方向に弾き、直感的に後方へ瞬時加速する。刹那、彼のいた直上から青い閃光が降り注ぐ。セシリアのビットからの射撃だった。息つく暇もなく、またしても四方からセシリアのビットが降り注ぐ。包囲網から抜けるように、一夏は連続して瞬間的に瞬時加速を使う。

「私を忘れるな！」

見事な回避を見せた一夏に負けじと爆炎を突き抜け、箒が二刀をレイラに振りかぶる。大きく振られたはずの斬撃は信じられない速度でレイラの首を狙っていた。

強烈な金属音が響き、レイラのカリバーンが必殺の一撃を防ぐ。咄嗟の防御は衝撃を防ぎ斬れず、レイラは弾かれた。

「頂くッ！」

刀を正面でクロスさせ、箒は一気に突撃する。観客席のものたちはその姿にかつての織斑千冬を幻視する。

痛撃が決まる、誰しもがそう思ったが、レイラは己が持つ「空閑認識能力」を超えた「直感」で吹き飛ばされながらもカリバーンの剣先を箒に向けた。整えられた美しい聖剣の刀身がガバリと上下に別れた。

「!？」

「穿て！」

黄金色のビームが通常の粒子ビームより加速されて打ち出された。それはまるで、聖剣の光が伸びたかのように箒の手にあるブレードのクロスされた場所に直撃する。

「ぐう……！オオオオオオ！」

乙女のあげる雄叫びではなく、それは鬼の咆哮であった。直撃した聖剣の一撃はブレードの表面に施されたコーティングにより四散する。打鉄の出力の限界で箒はブーストしていた。

氣勢こそ衰えないが、加速自体は衰える。宙返りして体勢を整えたレイラはついに背中の中環に備えられた権能を解放する。

「ティアーズ！敵を切り裂け！」

「だが、レーザーでは止まらん——！」

「私は切り裂けと命じた！」

耳をつんざくようなアラート。箒の全身を切り刻まれる衝撃が襲った。

「ガッ!?」

サイレント・ゼフィルスに搭載されたティアーズを改修したティアーズⅡのビームブレイドが容赦無く四方から箒を切り裂いていく。繊細な操作により全てが人体の急所を捉え、エネルギーを大きく殺ごうとする。

「これしきイー！」

そうされても、箒は退かない。その顔は凶暴な笑みを浮かべている。さすがのレイラも僅かな恐怖を感じる。もはや、狂気なのではないかと思うほどの闘争心。

「臆すなアー！」

研ぎ澄まされた箒の瞳がレイラの心を鷲掴みにしようと射抜く。レイラはだからといってやらせない、向かってくる箒に向かつて、前触れなく瞬時加速し、その勢いそのままカリバーンを箒のブレードに叩きつけた。

衝撃波が目に見えて起きそうな衝突に、二人のISが軋んだ。

「どうした打鉄ツ！もつと踏み込めツ！」

「ダイヴトウ・ブルー、負けないでっ！」

乗機を叱咤し、励まし、二人の剣は一步も退かない。ブレード二本で押し返そうと箒はするが、全く押し返せない。その均衡を崩せるのは彼女たちの相棒たちしかおらず、先に手を出せたのは当然——セシリアだった。

「そこですわー！」

「しまった！箒！」

「ヌツ！」

「きやつ!?」

緩んだ力をレイラは押し返し、箒は咄嗟にレイラを飛ばされる直前に蹴り飛ばした。セシリアのライフルとビットからの全力射撃を箒

はかろうじで回避する。そのまま等は戦場を膠着状態にさせることはなく、彼女の手にあるブレードを突如一夏に投げた。想定外の動きにレイラとセシリアはその行動を阻害できない。

空中で見事に打鉄用のブレードを左手に持った一夏は大きく上空に飛翔する。彼の白式は左手のブレードを認識できない。火器管制がろくに動作しないからだ。それでも、彼の手にあるブレードは正しく一夏の脳には認識される。

「大人しく、斬られるッ！」

加速。一夏の闘争心が爆発した。真っ直ぐに、レイラに向かって飛び込んでくる。重力とISの加速力、それらが合わさって、その場にいる全ての人間がかつて見た千冬がそこにいるかのように錯覚する。

レイラは確信した。間に合わない。だからか、妙に目の前がスローモーションに見え、一夏の異変に気が付く。彼が飛び込んでくる進路上に、円錐状の光があった。それを彼が突き破った瞬間、白式が白く、弾けた。

「(あれ：は!?)」

白式の形状が変化する。脚部のユニットはスマートに、かつスラスタターが多数配置されたものに、腰部にもフィン状のスラスタユニットが見える。これまでの野武士のような武者姿が洗練された武士の鎧のように整っていく。

左右のアンロックユニットは蛇腹状の装甲が重なって、内側には砲門が見えた。白一色の装甲板が開き、青白い光を発する。直感が囁く、あれは全て零落白夜だと。

——暮桜装備・稼働データ削除完了。白式再起動。真なる回帰。白夜叉”起動完了

白騎士が仮初の主人の覚悟に応え、不要な「暮桜」のAIコア人格を除く全てのデータを削除し、新たな形態を形成する。白式【リバーシフト真なる回帰】「白夜叉」。それが一夏の覚悟を示す新たな力の銘だった。

セシリアの脳裏を少し先の「未来」が過った。一夏の持つ絶死の光が大切な親友を射抜く未来が。それは彼女が幼き頃に見た「碧い



宇宙”が教えてくれた新たな力。絶対に間に合わない。だが、間に合わせる。

一瞬の、引き伸ばされた時間でセシリアは思い返す。出会いの夜、素敵だと、そう言ってくれたどこか遠い瞳で、寂しそうにしていた彼女の横顔を。

「わたしのレイラに触れるなああああつ！」

激情が、彼女を覚醒させた。

——守護を承認。我らは流星の如く。我らが騎士に星の加護を

青が弾け、碧がセシリアとブルー・ティアーズを包み、彼女は流星と化した。

ブルー・ティアーズ・ステラドレス。真なる回帰を迎えた少女の願いが予知された未来を覆す。ベイパーコーンを発生させ、瞬時に音速を超えたセシリアに絶大な負荷が掛かるが彼女はそんなものを気にしていない。迫る一夏の零落白夜を彼女は直感的に呼び出したビーム・サーベルの出力を発振口が焼き切れるほどに出力を上げ、レイラに直撃する寸前にそれを零落白夜に直撃させた。

「ッ!？」

声も上げられないほどの衝撃が一夏の手を襲い、雪片が弾き飛ばされる。音を置き去りにする中での接触で一夏は確かにセシリアの表情を見た。普段の自信満々で明るいお調子者な愛らしい少女は消え、そこにいたのは姫を守らんとする騎士だった。

「オアアアアッ！」

弾かれ、体勢が崩れたにも関わらず一夏は左手のブレードを強引にセシリアへ振るう。体がねじ切れんばかりのGは白式がかるうじて彼の体が保つように制御される。インフィニット・ストラトスとして覚醒した膂力の一撃はセシリアを斬り裂かんと迫るが、彼女は真っ向からそれに対してビーム・サーベルで迎え撃った。

「ハアアアッ！」

光と鉄の刃が触れた瞬間、比喩もなく衝撃波が発生しレイラは直感的に全力後退することでその直撃を回避する。

「まさか二機とも……！」

東が告げた真なる回帰リバースシフトを迎えたとき、レイラは察し、このタイミングで!?!と驚くしかない。衆目の中での覚醒は避けるべきだったと思いな  
がらも、レイラは守られたことで胸を撫で下ろす。

一夏とセシリアの切り結ぶ速度はISのハイパーセンサーによる  
視覚強化でさえ追うのが精一杯のもので、観客には青と白が何度もぶ  
つかり合っているように見えているだろう。幸いなことに、機密な  
どもあり内部でのカメラ撮影は禁止されている。記録映像は学園が  
握っているのだと東と千冬にもみ消されるだろうと判断した。

「私を忘れるな!」

「くっ!?!まだっ!」

静止したレイラを箒は見逃さない。彼女の手には投げ飛ばされた  
雪片が握られ二刀流に戻っていた。零落白夜がなくともせおの強度  
は白騎士時代から何も変わらぬもので、箒ほどの剣士がそれを持てば  
脅威となる。

カリバーンによる迎撃とビットを射撃モードに切り替え迎撃、更に  
シールドビットもフル稼働させ14基による弾幕が箒を襲うが、彼女  
はまるでクラス代表決定戦の一夏のようにビームを全て切り払った。  
直線的な機動からブレない。レイラは悟った。まだ箒は三次元的な  
機動に慣れていないと。

「であれば!」

ビットが散開し、箒の正面にビームによる網を作った。箒は咄嗟に  
急制動をかけそこに突っ込むのは避けたが、その網が消えた瞬間にレ  
イラは眼前にいた。

その手にあるのは聖剣ではなく、赤く光る刃。『女王宣誓』。

「それは——だがっ!」

「女王——宣誓!」

突き出されたレイラの刃は箒の心臓を確かに捉え、迎え撃つ箒の雪  
片はレイラの腹部を捕らえていた。どちらも生身であれば正しく、そ  
の機能を発揮し敵の命を奪っていたことだろう。故に、二人のISは  
搭乗者を全力で守ろうと機能を全開にした。

「セシリア、ごめんなさい。でも、信じています。あなたならきつ

と)」

「(一夏、後は託す)」

最期の一撃を受けた二人の言葉はセシリアには直接走り、一夏には気として伝わった。

撃墜のブザーが鳴る。最強に近い剣士と、絶対の権限を持った女王の刃はそれぞれのISのエネルギーを絶った。

「よくもっ…」

「やったなあっ…」

ブレードとサーベルがぶつかり、憤怒に満ちた流星と、修羅と化した夜叉は互いにアリーナの端に飛び、静止する。

アリーナ内は静まりかえり、遠くに向かい合う二人の吐息が聞こえそうなほどだった。

「セシリア」

「一夏さん」

二人の信念がぶつかり合い、視線が交差する。一夏はブレードを正面に構える。セシリアは全てのビットを展開し、レヴアリエが変化したバスターライフル“メテオブレイカー”を両手に装備する。

「俺が」

「私が」

白夜叉が青白く光る。全身が零落白夜と化す。

ステラドレスが全ての砲口をまるで星のように煌めかす。

「倒す!!!」

それは英雄譚の再現かのように、一人の剣士が降り注ぐ流星群へと切り込んでいく。白騎士は彼に託す。本来の主人の戦闘記録を。星の衣は彼女に捧げる。絶対に陰ることのない星の輝きを。

「うおおおおっ！」

もはや瞬間移動にしか見えない回避行動も、セシリアには“視えた”。彼が回避した先に、既に星が降り注ぎ、彼の体を穿っていく。それでも、一夏の視界にはセシリアしか見えない。白夜叉となった時点で、もう全てのコンソールがオミットされていた。

友は語った。首があり、剣を手が持てばあとはもげてもいいと。

まさしくそれは命を燃やした、今の織斑一夏に為せる全力の一撃。雪片はない、相棒もいない、残されたのは託された刃と己の身ひとつ。届かせる、絶対に。

セシリアは飛び込んでくる一夏に彼は止まらないと察したのだろう。流星では止まらない。ならば、どうすればいいか。もつと強く、もつと大きい星を——隕石をぶつけるだけだ。

「連結！」

メテオブレイカーの二挺目をもう一方のメテオブレイカーの末尾に接続する。腰だめでそれを構え、照準は一夏へと向けた。一夏は構わず突撃してくる。

「潰れなさいっ！メテオブレイカー！」

放たれたのは現行のISでは放つことができない極光。IS4、5機は巻き込もうかというブルー・ティアーズ自体が小型のエクスカリバーとなったかのようなこの一撃は一夏を容赦無く焼き払わんと放たれた。

「つつきれえええっ！」

触れたブレードは真つ先に溶かされた。しかし、零落白夜と化した白夜又は星を滅ぼすような光の中を圧されながらも突き進んでいく。

全開で放つブルー・ティアーズの装甲が、まるで熱に溶かされていくかのように弾けていく。それは白夜叉も同じだった。解けていく装甲は二人が退く理由にはならない。

メテオブレイカーが限界を超え、火花を吹き、照射が止まる。銃口の前に、もう一夏はいる。一夏の手刀がセシリアに向かって放たれる。セシリアもまた、左手に呼び出したビーム・サーベルをその手刀にぶつける。ビームが手刀によって斬り裂かれ、セシリアはそれを感じた瞬間に次にくる一夏の手刀を阻むためにビットを呼び出しリフレクターで防ぐ。

零落白夜もエネルギー兵器である以上、リフレクタービットを貫いた時点で手刀をコーティングするように包んでいたエネルギーは弾かれる。

「こうすれば、その力は使えないでしょう！」

「剥がされ——!?!」

「これでチェックメイト——!」

ビットが一夏の背後を取り囲む。一斉射撃。これで決まるとセシリアが最後の一手を打とうとした瞬間、それは起こった。

——稼働限界に到達。システム強制停止。

——搭乗者の身体損壊度限界に到達。強制停止。

「うっ!?!」

「あぁっ!?!」

ブルー・ティアーズの星の衣が突如解け、機体は元に戻り、一夏の方は…。

「白式!?!おい!?!」

白式が解除され、彼は空に放り出された。

「一夏さんっ!」

セシリアは突然のことだが対応しようとするも、ブルー・ティアーズは滞空以外の行動を受け付けない。セシリアの視界に映るコンソール類は全て「機能停止・再起動中」と表示されていた。

一夏が落ちていく。このままでは彼が死ぬ。一瞬前まで戦っていた相手は既にクラスメイトへと戻っていた。

「誰かっ!」

セシリアの悲痛な叫びは届く。一夏の下に、最低限の行動エネルギーを残していたレイラが入り込んだ。彼女は衝撃が少なくなるよう速度を合わせ、すくい上げるように一夏を救出した。

「うっ、あ、あぶねえ、死ぬかと思った」

「間に合ってよかったです」

伝説に残るような戦い、奇跡の救出劇。それらを見せた観客の歓声が爆発したかのように起こった。勝負は着いた。

『ジャッジよりオルコット機へ、状況を問う』

「は、はい!機体の制御システムが機能停止、エネルギー類も確認が取れません!」

『……了解しました。判定を出します』

観衆の喜びの声はこの勝負の結果が「引き分け」とアリーナ内のモ

ニターに表示されたことでも止まらない。一回戦にしてまさかのベストバウト。熱い勝負を繰り広げた4人には惜しみのない称賛が送られた。

「はは…あと少し。少しだったんだけどなあ。届かなかった」

「いいえ、一夏さん。あなたの剣は届いていましたよ」

「……………だといいな」

慈愛に満ちたレイラの顔は一夏の闘気を沈めていく。勝負は終わったのだった。

終わったことで、一夏の体が限界を超えたことに気がついた。

「おつ…うごおおつおおお!？」

「!?いい、一夏さん!?どうされたのですか!？」

「うぎつ、がつ、や、やば、体が、があつ、い、いてえ、なん、これ、きんにくつ、みたいなの」

「一夏どうした!？」

箒も慌てて僅かに回復したエネルギーで降りてきたレイラたちに駆け寄る。一夏は苦悶の表情を浮かべていた。

なにが、どうして。そんな疑問に応えてくれる存在がレイラに通信を入れてきた。

『れーちゃん!』

「これはっ…!状況は見られていますか!？」

『モチっ!二人ともやっちゃったから見てたけど、いっくんのはちよつとヤバイ!すぐに医務室連れてっ!』

「なにが起きたのですか!？」

『さっきの戦いでいっくんの体、筋肉がズタボロになってる!さっきのいろんな保護制御がぶっ飛んでたんだよ!』

「そんな…!」

束から告げられたのはとんでもない事実であった。一夏の体は以前、マコトが危惧していた白騎士に超人以外の人間が乗ったらどうなるかという回答だった。

「レイラ!誰と話しているんだ!？」

「箒さん!今はとにかく彼を医務室のデユノア先生に!」

「今はそれが先決か…わかった！いくぞ！」

「セシリア！彼を医務室に連れて行きます！あとをよろしくお願いしますー！」

「ええ!?」

慌ただしく同じピットに消えていった三人をセシリアは見送ることしかできず、一人取り残されたところでようやくブルー・ティアーズが再起動する。

「再起動確認…ふう。さて、どうしたものでしょうか」

セシリアは改めてアリーナの惨状を見る。地面はセシリアの放った流星群とメテオブレイカーでめちやくちやな数のクレーターを生み出し、照射の着弾点は大きく砂がガラス化していた。

これは果たして、次の試合はできるのだろうかと思った。

『オルコットさん、聞こえますか?』

「はい、聞こえますわ」

ジャツジの一人である真耶がセシリアに声をかけてくる。

『えつと、この状況だと次の試合ができないのと…先ほどの様子ですと織斑くんが負傷しているようですので、二回戦にはオルコットさんが進んでください』

「わかりましたわ。ちなみに、第二試合以降の開始は…」

『午前中は不可能です』

そうですか、とセシリアは静かに返しピットへと帰還する道をとる。観客席からは暖かい拍手が送られた。

「…時間が空きますわね。マコトさんや簪さんの試合も、このまま行けば決着の前ぐらいは見れますでしょうか」

一夏たちのことは心配だが、大丈夫だろうと判断してセシリアはマコトたちの試合を見ることにした。そこで彼女は先ほどの戦いとは違う、異様な光景を目にすることになるとは思っても見なかった。

## # phase—EX4「すべての根源」

「いやあ、きみよく生きてたねえ」

あつはつはつ、となんともゆるい空気を出しながらシエラはシャルロットそつくりな笑顔を見せた。一方で、ベットに座っている一夏は顔を引きつらせていた。彼をここまで運んだ箒とレイラも同様だ。

「うーん、身体中の筋組織はほとんどぐちゃぐちゃだし、骨はいっぱいヒビが入ってたし、内臓もなんか壊れちゃいそうだったね」

優しい眠くなるような声音に乗せて流れてくるのはとつくに死体になっているのではないかというぐらいの惨状であった。

セシリアとレイラの試合で白式の「真なる回帰」形態を使用した一夏は試合終了時に激痛に苛まれ、ここに運ばれた時点で咯血までしておりまさに瀕死であった。レイラは耳をつんざくような束の悲鳴を聞きながらシエラに助けを請ったわけだが、シエラは一夏を見た途端、彼に触れると一瞬で彼の怪我を直してしまった。

それはまさに奇跡の所業と言えるだろう。直された本人である一夏もどう考えても死ぬと思ったほどの激痛だったが、どこも今は悪いところがない。むしろ、生きていて一番体が軽いとさえ思える。

「それでえ、どうしてこんなになっちゃったの?」

「いやそれはこちらが聞きたいのですが!」

思わず箒が声を荒げてしまう。シエラは何事もなかったかのようにカルテを書くこうとしており、箒の叫びに一夏もレイラも「うんうん」と頷いた。シエラは「びつくりしたあ」と言いつつも右手に持っていたペンを一度白衣の胸ポケットに入れ、生徒たちの疑問に答えることにした。

「何をしたかって言うと、こういうことをしたんだあ」

広げられたシエラの手の中に、黄緑色の光球が浮かび上がる。CGなどの類には一切見えず、箒は幻術か何かか?と思うも違う、とその光球から感じるものにより判断する。その感じるものとは、篠ノ之神社裏山の持つ特殊な空気とそつくりで、強い「生の力」だ。

靈感あらたかなあの山での精神統一によって得られる強い力のよ



うなものとよく似ていた。

「……こ、これは」

レイラからすれば、信じられないものだった。コズミック・イラでは霊的な神秘はほぼ忘れ去られている。レイとして、フラガの血同士の感応こそあったが、そんなものなどこのシエラの力の前ではかわいいものだ。

「これはねえ、魔法だよ」

「ま、魔法って、あの魔法ですか？」

「そうだよ、織斑くん」

魔法。おとぎ話の中でしかありえない異能。インフィニット・ストラトスの登場により、おとぎばなしに踏み入れた世界の中では消えたはずの神秘。それが一夏の命を救ったのだ。

「さすがに私も死者蘇生は無理だから、間に合ってよかったねえ」

光を消したシエラはほがらかにそう言う。魔女と呼ぶにはあまりにも陰気はなく、魔女狩りなどの歴史もある中で、レイラは実在した魔女の存在に驚きのあまり言葉がもう出ない。そもそも、いきなり魔法使いと名乗られても理解できないのが普通であり、そう言う存在もありえると思っている筈がおかしかった。

「ほ、筈は、なんかあんまり驚いてないのか？」

「忘れたのか。私は篠ノ之神社の巫女だぞ」

「そーいやそうだった」

「ミコ、とは？」

「レイラ、だいぶ違うが、教会におけるシスターのようなものだ」

流石にシエラのような特殊な力こそないが、第六の感覚とでも言うべきものは篠ノ之家の娘である以上あり、筈は姉よりも熱心に篠ノ之神社の手伝いをしていたせいも、霊感は強い。

そのためか、筈はシエラの力が「根本的にはあの山と同じ」であることに気がついた。

「……デユノア先生、つかぬことを聞きますが、その力はどこで？いつから？」

「えつとお、これあんまり言っちゃうとシヤルに怒られちゃうんだけ

ど……みんなはシャルのおともだちだからいいかな？」

彼女はそう言うなり、おもむろに白衣の中に着ているシャツのボタンを少し開ける。豊満な胸の谷間が覗き慌てて一夏は目を逸らしたが、箒とレイラはそのまま見続けた。シャツの中にシエラが手を入れると中につけていたネックレスのトップ部分が出てきて、そこには四角い、エメラルドグリーンのお小さな宝石のようなものがついていた。「これね、私の実家の……ルーセル家に伝わってる宝物なんだけどね。だいたいルーセル家の女性はこの宝石を身につけると、魔法が使えるんだ」

「マジックアイテム……というべきものですね。まさか実在したとは」

レイラはこれでは本当にアーサー王伝説なども全部事実だったのではと言いたくなる。魔法は実在し、シエラの故郷はフランスだ。円卓の騎士とも縁がある。非現実的なものだと言っただけではレイラも断じてしまうが、こうして目の前で力を行使されてしまえば信じるしかない。

一夏はスゲエ!という感想しか出てこず、弾がこういうの好きだろうなどとゲーム好きの友人のことが頭を過った。

3人の中で一番そちら側にいる箒は嫌な汗が背中を伝っていた。宝石を出された瞬間、あまりにも「それ」は彼女の中で一致していたからだ。

「……先生、その、宝石はどこで入手したのですか？大元の、採取場所は」

「私もよくは知らないけどねえ、日本だと、ひいおばあちゃんって言うのかな？その人から聞いた感じだと「山」にある洞窟でとったって」

「……山……洞窟……」

箒は裏山にある唯一の洞窟が姉の研究所になっっていることを覚えていた。幼馴染みの中ではマコトと千冬しか入ったことがない、箒たちからすれば未開の場所であるそこは幼少期に精神統一を行った場所にそこまで遠くないと千冬本人が言っていた。

「(この、先生の持つ石は山の持つ「力」とあまりに似すぎている。篠ノ之の山の力は人を正しく「生かせる」ようにする力だ。そして、こ

の石は彼女に人を「正しい姿に戻す」力を与えている。私の推測が多すぎるが、理屈ではないところが同じだと言っている)」

疑問は僅かだが彼女の中にずっとあった。なぜ最初は部屋に引きこもっていた束が突然裏山に研究所を作ったのか。最初は「家族ですら」視界に入っても認識があまりできなかった束が次第に、親族でさえも家族を受け入れるようになったのか。

マコトや、千冬という存在もあつただろう。それにしたって彼女はあまりにも変わりすぎた。

「(父さん、あなたは何を知っているのだ)」

篠ノ之の裏山についての話は父、柳韻しか知らない。彼は健在であるが、居場所は知れない。箒の中の直感が全ての根源があゝの山にあると言ってくる。不思議な力の源であり、人に正しく生きる活力を与える場所。それほどまでの大きな力はこうやって切り出して持ち運ぶことさえできる。

そこで生まれたインフィニット・ストラトスは無関係とは思えない。

「(頭がどうにかなりそうだ……! 姉さんの夢は、夢は彼女のものだ。だから、何か影響されたものじゃない。だが、これほどの力の源を発見したら彼女はどうする……やれるはずだ、できるはずだ。その純粋な力だけを抜き出すことぐらい)」

「お、おい、箒、大丈夫か?」

「——は……あ、ああ、大丈夫だ」

「本当かよ? 顔がすげえ難しいことになってたぞ」

「問題ない。……先生、ありがとうございます」

「おっけー、シャルには教えたって言わないでね」

「もちろん」

箒に続いて、一夏とレイラも頷く。レイラは頷いたものの、シエラが見せた力にギルバートから伝えられたニュータイプという存在に彼女も当てはまるのではないかと思つた。マジックアイテムありきかもしれないがそれを扱うことができる存在だ。

そして、フランスのデュノア社が策謀で勝利したとしても落とされ

たエクスカリバー。動かされたシャルロット。本当に狙われていたのは——シエラ・デュノアという魔法使いだったのではないだろうか。

「（魔法。言うなれば人類が手にしたかった第六の力。それを自在に扱える彼女という存在はあまりにも……瀕死の人間を生き返らせるほどの力があれば狙われるのも道理です。シャルロットさんも、娘とあらかば多少は素養もありますし、あの夜止めていなければと思うと、ゾツとするものがありますね）」

影も見せずにその手を伸ばす敵の存在にレイラは震えそうになる。明確な権益に溺れたものたちではない、目的が理解できない相手。生きていく人間の中でもっとも恐ろしい相手。

それが、この世界における——敵。

## # phase—32 「一等星」

その人はまるで星のような人だった。煌めくステージの上でも吞まれずに、もつと光り輝く人。小さな頃、私たちがいた孤児院のママが見せてくれたビデオに写っていた彼女が、私たちの未来を変えた。

キララ・トヤマ——それが、私たちがアイドルを目指したと思つた夜空に輝く一等星の名前。東にあるという島国のアイドルなのに、世界中の、こんな私たちのいるような世界の片隅にも活躍が届いたほどの凄いアイドル。デビュー僅か1年でそうまでなった、生まれながらのアイドル。

栗毛色の踊りに合わせて揺れる細やかな髪と、デビュー当時15歳という年齢に合わない恵まれた、少女として完成されたスタイル。紫水晶のような瞳は色に反して優しく暖かさもあつて、声は優しく、時に激しく、時に力強く、ダンスをしながらの生歌は未だに誰にも負けていないと思う。

最後に見たときの薄いピンクのお姫様みたいなドレスは本当に、彼女はお姫様なんじゃないかと思わせた。小さな私は彼女の虜になった。

だから、私はアイドルになりたいと思つた。双子の妹のオニールも同じ気持ちだった。アイドルになりたい、そんな夢をママに話せば彼女簡単にはなれないということを言いながらも、応援してくれた。

ママは歌が得意だった。だから、歌唱のレッスンをしてもらえて、踊りに関してはキララさんの動きを見て、頑張つた。

けれども、そんな頑張っている最中のことだった。私たちの夢で、目標だったキララさんが突然アイドルを辞めた。本人は最後のライブから一度も姿を見せることなく、事務所からの一方的な通知で。

それは8年前の春のことだった。小さかった私たちは理解もできず、ただ泣くことしかできなかった。そうして、落ち着いてみれば、まるで世間は「アイドル キララ」の存在をなかったかのように扱っていた。

ありえない。どうして、なんで。孤児院のみんなも、ママでさえも

そうだった。私たちが持っていたビデオを見せても、ママはただ「綺麗だけど、どなた？」とおかしなことを言った。なのに、私たちがアイドルになるということだけは知っていて、怖かった。

まるで、オニールと私たちだけ、違う世界に来てしまったかのような、そんなありえない気持ちになった。

キララさんが消えてからしばらく、私たちは引きこもって泣き続けた。でも、ママがくれた雑誌に乗っていたキララさんのある言葉を見て、私たちは立ち直った。それはアイドルの死とは、という質問に答えた時の彼女の答え。

——アイドル、そのままの意味では「偶像」です。ファンの皆さんや、私に期待してくれるたくさんの人たち。応援してくれるみんなに答えるために私はいつもステージに立っています。そんな私が「死ぬ」ということはきつと、みんなに、「アイドルの私」が忘れ去られてしまった時になるでしょう。だから、もし、私がいきなりいなくなってしまうつても、誰かが「私」というアイドルを憶えていてくれたら、きつと私は永遠に生きられると思います。

インタビュー記事の写真にあったキララさんの笑顔は優しいけど、ちよつと悲しそうだった。

だから、私たちはキララさんの生きた証を。私たちが憧れた彼女のことを忘れ去った世間に思い出させるために、より一層アイドルになりたいと思った。親に捨てられて、苗字のなかった私たちは自分たちで苗字を「コメット」とつけた。綺羅星みたいに輝いた、キララさんにあやかかって。

そうして、アイドルになるための手段としてカナダの代表候補生になって、代表候補生として広報をどうしたいか希望を聞かれたときに「アイドル」になりたいと告げて、すぐに日本に飛んで、新人アイドルが出るステージのオーディションを受けた。結果は合格だった。

私たちの容姿は優れているという自覚と、小さい頃から続けたレッスンで培われた力、そして、なかなかいない代表候補生でありながらアイドルという肩書。

何かとISでは影の薄い本国からすれば存在感をアピールするに

はうってつけということもあり、大きく裁量権を与えられた私たちは必死に学んだ日本語で、初めてのステージで、あの一等星を忘れた愚かな人たちに言っただけで済んだ。

——あんなに言っただけで済んだ。一生忘れられない“一等星”の輝き、刻み込んであげる！

このステージがデビューだということなのに、なんてことを言うのだと多くの輩が思っただけで、それは全部、私とオニールの実力で黙らせた。キララさんのファンだったからこそわかる。本気の熱量があれば、ファンもまた、応えてくれるということ。

忘れ去られた世界の中で、私たちだけが憶えている輝き。私たちが忘れない限り、キララさんの輝きは生き続ける。

だから、負けられない。あの授業の時とは違う、本当のステージ。ここで私たちの輝きに陰りを与えるなんてこと、絶対に許されない。専用機は間に合わないとは知っている。あんな無茶苦茶な機体、出遅れてる私たちの国じゃ時間がかかる。けれども、私たちの力があればそんなものもいらぬ。

相手は赤い瞳を持った二人の女の子。どっちもむかつくぐらい強そうで見つ直ぐで、特に、黒髪の方はなんでか、キララさんを思い出させる。すごい、むかつく。

「負けられない。私たちは」

「そうだね、お姉ちゃん」

「キララさんのためにも、こんなところで私たちは落ちるわけにはいかない」

「うん。キララさんみたいに、一等星になるまで、私たちは輝き続けな

いと」

「だから、ここでも、刻み込むのよ。“一等星”の輝きを」

「もちろんだよ。いつしよに、輝こ？お姉ちゃん」

「ええ！」

飛鳥マコト、更識簪。私たちにあんなら勝てない。世界が忘れたあの“輝き”を知ってる私たちは、強いから。

セシリアらの勝負が着いた頃、マコトたちはアリーナのピットで打鉄を装備し待機していた。簪の打鉄は以前、セシリアの夢の中でも使用した打鉄丙型で、今回はマコトの援護を行うために、打鉄二式用に開発された荷電粒子砲「春雷」を手持ち式に基幹部分を打鉄用のアサルトライフル「焰備」へ移植したビーム・ライフル「雷切」を装備している。

それ以外は変わらない仕様で、背部アンロックユニットのブースターや搭載火器であるビーム・キャノン「火蜂」など、中距離以上に対応する装備で固められている。

一方のマコトの打鉄は基本的な装備のままで、サイレント・ゼフィルス戦で装備したグレネードランチャー付きの「ガラム」と、直剣であるISブレードを手持ちと予備として2本だけだった。

「装備はこれでよしつ、と。コンビネーションはどうやっても向こうの方が上だから、どこまでやれることやらう」

「……山田先生との戦いだけじゃ未知数。まだ何か隠し球があると思う」

「だろうね」

高い練度のコンビネーションとなると前世のキラ、アスランの二人がすぐに出てくる。敵から見てもあの二人の動きは見事だった。資料映像として戦後回収されたジャステイスのフライトレコーダー（核自爆やジェネシスの崩壊に巻き込まれても尚、無事だった）をマコトはアカデミーで見たことがあったが、異様なまでの連携はもはやテレパシーでも使っているのではというレベルであった。

あれほどの連携はしてこない……とは思っていたが、マコトは気を引き締める。

「ねえ、マコトさん」

「ん？どうしたの簪さん——」

マコトを呼んだ簪が、マコトの手を握る。ISはまだ未展開だが、ISスーツ越した。体温は伝わってこないが、簪のマコトを見る瞳からその熱さは伝わった。マコトは手を握られ、どうすればいいのかわからなかった。それを言いことに、簪は畳み掛ける。



「この戦いに勝てたら……私のこと、呼び捨てで呼んでほしい」

精一杯の勇気で頬を染めながら、簪はそんなお願いをマコトにした。マコトは思わず可愛らしい簪の様子にむせそうになる。けれども、友人のお願いをそのまま無視することはできないため、なんとか簪に向き直って答える。

「えつと……別にいいけど、前もポロッと呼び捨てしちやってたこともなかったっけ」

「そうだけど。日常的に」

「…それなら別に、今からでも」

「ダメ」

上目遣いで静止されたマコトはくらりときた。今まで知っている女性相手では感じたことのなかった新しい感覚に、マコトは目眩がしそうだった。こんなに、簪さんは可愛いんだ、と心は跳ねていた。

「勝ったら、お願い」

「……わ、わかった。そしたら、あたしのことも呼び捨てにしてね」

「……いいの？」

「片っぽだけじゃ、なんか対等な関係じゃないでしょ」

あくまで友人としての感覚でマコトは言ったが、それが更なる深みにハマることだと気がつかない。そして、もう一人の女性にもっとアプローチを激しくさせる起爆剤だということもわからない。

レイラがいればマコトの行動はまさに、地雷原の中で跳ね飛ぶような行為だと指摘していただろう。

そんなこともつゆ知らず、マコトのその言葉は発せられて、簪の顔を笑顔に染めさせた。裸で抱き合ったり、押し倒したりしているのに、なんともプラトニックな願いに簪は嬉しさを弾けそうになった。今なら、素手の打鉄でも戦えそう、そんな風に舞い上がってしまいうだ。

「約束、だよ？」

「わかった。じゃ、そろそろいいところ」

「うん」

手を離して、簪は展開し、マコトは待機している打鉄に乗り込む。

既にピットの出口からは歓声が聞こえてきており、二人がISに乗り込んだ時には打鉄のリーダーが相手となる機体を捉えていた。

——IFF識別 カナダ空軍 機種 フリカアトラ 数2

コメット姉妹の駆る機体は既に二人を待っている。

「先にいくね、簪さん」

「わかった。すぐに私も行く」

「おっけ」

マコトが先にカタパルトに乗る。練習のたびに乗ってはいるが、この世界における「実戦」でのカタパルト使用はまだ数えるほどではない。

『カタパルト接続。進路クリア、打鉄、飛鳥機、発進どうぞ！』

「飛鳥マコト、打鉄、いきますー！」

脳内でスロットルを上げ、マコトはカタパルトとスラスターの勢いに機体に乗せて出撃する。

マコトが出れば次は簪だ。

『続けて、更識機、どうぞー！』

「打鉄丙、いきますー！」

背部のユニットをブーストさせながら、マコトよりも簪は素早く飛び出した。ピットから出れば控えめな歓声…に混じって聞き慣れた応援が届く。姉の声だった。

「簪ちゃん！頑張ってるー！」

ちらりと声をする方を一瞥すれば、妙な内輪を持って楯無が彼女の側近である虚を連れて観客席にいる。あまり周囲の歓声がないせいか非常に目立っており、彼女の周囲にいる生徒たちが若干引いている。

簪は見なかったことにして、マコトの隣に並んだ。

「すごいね、楯無さん」

「言わないで」

さっそくマコトにそんなことを言われたが、簪は即座に見なかったことにしろと言外に言った。苦笑いしながら、マコトはだろーうなあと思いつつ、対戦あいてへと意識を改めた。

以前にも見た、オレンジと董色のフリカアトラを纏うコメット姉妹はどこかアイドルのステージ衣装を思わせるISスーツを纏って、二人の前にいる。

「……私たちが言うことは一つだけよ、飛鳥マコト」

ファニールがマコトを射抜くように睨んで、言う。声音はアリーナの外で話した時よりも更に低い。殺気に近いものも含まれており、マコトは意識を切り替える。競技ではなく、これまでこの世界でもあった『本当の戦い』の意識に。

「私たちは勝つ。私たちはアイドル、どこでも輝く『一等星』」

「だから、刻み込むね、あなたたちにも、私たちの輝き」

「一生忘れられなくさせてあげる。あんたたちにも、この観衆にも」

コメット姉妹二人の言葉に、簪は気圧される。凄まじい覚悟を感じさせる言葉だった。どこか、なあなあで日本代表候補生を任されている簪にとって、異国の代表候補生との戦闘はこれが初めてだった。

ファニールと、オニールにマコトたちは返す言葉がない。だが、その覚悟に対して返せるのは——力だった。

ブザーが試合開始の合図を告げる。先手は当然のようにコメット姉妹だった。

「いくわよー！」

「いくよー！」

重なる声に合わせ、ファニールとオニールが弾かれたように二手に分かれる。真耶との戦いでも見せた初動だった。これに対し、マコトたちも二手に分かれる。ファニールにはマコトが、オニールには簪が。マコトたちにとっての理想的な戦場は「コメット姉妹にコンビネーションをさせない」ものだった。

「向かってきた!?!」

「いくよ!ファニールさん!」

「生意気!」

ブレードを右手に展開したマコトはファニールに斬りかかる。だが、ファニールは早々に奥手の一つを披露する。マコトの機動を捉えている『オニールの視界』がファニールの脳裏に流れ、彼女は完全に

マコトを見切る。ぶつかり合う直前に振られたマコトのブレードによる突き出しをギリギリで回避したファニールは速度を殺さず、そのままマコトの背後をとった。

「疾——!?!」

「あんたが遅いのよ!」

続け様に、マコトの背を思い切り叩きつけてファニールは瞬時加速なしに急速加速した。彼女が向かう先には簪がいる。

「お姉ちゃん!」

「オニール!」

ビーム・ライフルを構え、オニールを撃とうとした簪に届く接近警報。マコトが容易く抜かれたことが簪には想定外で、彼女は咄嗟に上昇し、ファニールの頭上を瞬時加速で抜け、マコトに合流しようと考えたが、それは上昇をした段階で阻まれる。

ファニールの視界がオニールに共有され、簪の打鉄がスラストを噴射しようとした瞬間にオニールが簪の頭めがけて発砲した。

「くっ!?!」

僅かに噴射し、オニールの射撃は簪の打鉄の脚部に直撃する。衝撃でバランスを崩した簪は更に後方からのファニールによるミサイルに被弾した。

「簪さん!!」

体勢を立て直し、マコトが見たものは簪が前後からの攻撃で爆炎に包まれた瞬間だった。僅かな時間でも巴戦になってくれれば、と思ったマコトたちの初動は見事に失敗し、この結果となってしまった。

「どうよ!これで…ッ!?!」

背後からのミサイルはかなりの痛手となったはずだ、とファニールは言葉による牽制をマコトに行おうとしたが、爆炎から飛び出した二本のビームがそれを遮る。それを確認したマコトは瞬時加速でファニールに切り掛かったが、またしてもひらりと躲される。初動はオニールに読まれているためだ。

「今のも避けられた…!」

「素人の攻撃に当たると思ってたの!?!」

爆炎が晴れ、僅かな煤に体と機体を汚した簪がファニールにいくらかのビームを連射しながら接近してくる。マコトは変わって、今度はライフルを装備の上、オニールへと加速する。

「分断しようってわけ？いい度胸じゃない！」

「少しでも勝てる可能性に賭けるなら……！」

「舐めんな！」

マコトのことを視界に入れつつ、ファニールは突っ込んでくる簪に向かつて今度はアサルトナイフをライフルに代わって右手に展開する。フリカアトラの特徴でもある4基のアンロックユニットに内蔵されたスラストーによる瞬時加速はまさに彗星のような速さで簪に飛び込んできた。

「げいげ——」

「間に合うもんか！」

「ぐっ!？」

直撃。ナイフの切先は見事なまでに雷切の銃口を捉え、砕くように破壊した。その勢いのままファニールは簪の心臓めがけてナイフをぶつけ、絶対防御が最大出力で展開する。しまった、と簪は思った時にはエネルギーが5割も一気に削れていた。急所への一撃はあまりにも重すぎた。

一撃を受けた簪はそのまま突き飛ばされ、地面へと落下する。絶対防御によって刃が届くことはなく、かつ衝撃も緩和されるがそれでも胸への攻撃は確かなダメージを簪に与えている。苦しさを噛みしめながら簪は宙返りし、スラストーを噴かしてなんとか墜落を免れる。

ファニールは手を休めず、簪に向かってアサルトライフルを掃射してくる。上を取られたことで簪はかなりの不利を背負う。マコトに視線を向けると、マコトにはオニールが格闘戦を挑んでいた。相手は一切言葉を交わしていないにもかかわらず、気がつけば逆に簪たちが分断させられていた。

だからといって諦めるわけにはいかないと簪はビーム・キャノンによる対空射撃を開始した。

「そこをどいてー！」

「どかないよー！」

マコトは簪が落とされたことで合流しようとしたが、オニールが突然射撃戦から格闘戦へと動きを変えてきたせいで、この場に釘付けにされてしまっていた。オニールが手に持つのはファニールのようなアサルトナイフと違う、二振りの刀であった。カナダの機体であるにも関わらず装備されたその刀をオニールは手慣れた様子で振るっている。

「つくづく、あたしは剣士に縁がある…！」

よく知らないとはいえ、ファニールに比べ控えめなオニールの印象とは真逆の、果敢な二刀による攻めはマコトの周りにいる剣士たちの気迫にも負けない勢いがある。

「たあつー！」

飛びながら交差するたびにぶつけられる鋭い太刀筋は全てがその先にマコトの急所がある。オニールの表情は必死そのものだ。

「なんとか合流しないといけないのにつ」

「させないよつ、お姉ちゃんのステージが終わるまでは！」

アリーナ内を周回するかのようになり、マコトをアリーナの中心側にしてオニールは何度もマコトに刃を振るう。いつでも弾いていけるはずだとマコトは思うが、少しでも離れようとすればドッグファイトになる。そうなれば、機動力に劣る打鉄はフリカアトラを振り切るなどできない。つまり、振り出しに戻ってしまう。

合流させず、連携させず、もしくは乱戦に持ち込んで、というのがマコトたちの作戦だったが、それを利用して逆に分断されてしまったのだ。

「ええいー！」

「このおー！」

マコトとオニール、互いに剣を振り、刃がぶつかり、拮抗する。ぎしぎしと音を立てながら、二人は視線を交わす。

「ファニールさんのこと、あなたは好きなんだね！」

「そうだよ！お姉ちゃんはアイドルだから！」

「あなたも、そうでしょ!?!」

「私はお姉ちゃんが輝いていればいいの！だから、お姉ちゃんと一緒に踊って、歌って、お姉ちゃんのことを支えるの！そのためにつ」

ガチャン、とオニールのフリカアトラに搭載された非固定ユニット前面二基のミサイルランチャーの口が開いた。まずい、とマコトは咄嗟にオニールを蹴り飛ばそうとするが、それよりも早く、オニールがスラスターの推力を使ってマコトを弾いた。

「あなたを倒すのー！」

「このっ…！」

放たれるミサイル。マコトは回避は不可能と判断し、ある程度のダメージは受け入れて耐シヨック姿勢をとった。ミサイルは直撃し、バリアと絶対防御が作動。2割近くのシールドエネルギーが削られた。

「これでえー！」

観衆が、特に観客席にいる2組の生徒たちが大きく沸く。爆炎から飛び出したマコトにオニールが迫っていた。その速さは先ほどのファニールが見せたものと全く同じで、打鉄では回避できない。

しかし、マコトとてこの程度では終わらない。今この場にいる少女たちの誰よりも戦いの経験があるマコトは諦めない。

ガラムを呼び出したマコトは向かってくるオニールに銃口を向け、グレネードランチャーの引き金を引いた。ボシユつと音を立てて放たれた弾頭は射出されてすぐに爆発した。中身はサイレント・ゼフィルスのような煙幕だった。

張られた煙幕に、オニールは面食らってわずかに速度を緩める…：ことはなく、ほんの少し軌道を修正して煙幕に突っ込む。なぜならば、彼女には煙幕の向こう側が見えているのだから。

煙幕を突き破り、果たして、そこにマコトはいた。彼女の回避運動は無為と化して。

「そんな!？」

「やあっー！」

咄嗟にマコトは非固定ユニットのシールドを防御に回し、オニールの右手に持たれた刀の一撃は防いだが、あろうことかオニールはそのままマコトの眼前で非固定ユニット4基を使って強引に横回転して

非固定ユニットをもぎ取りながら、左手に握られた刀をマコトに振り下ろした。

回避はできるはずもなく、マコトは刃をもろに受けた。

「きやあつ!？」

両腕でガードするも、エネルギーは相応に削られる。まさか接近戦でこうも負けるとはマコトは思っておらず、熱くなりそうになる。だが、彼女は一人で戦っているわけではない。

「予想以上に……！ 簪さんは!？」

ガルトでオニールを牽制し、どうにかこれ以上の接近戦は避けるマコトは簪に目を向ける。簪はファニールによって低高度に釘付けにされており、対空戦を強いられていた。射撃戦の得意な簪は見事にファニールの接近こそ防いでいるが、ファニールには攻撃があたりず、簪にはファニールからの弾幕を浴びせられている。

「このままじゃ……!？」

「逃さない!？」

オニールが両手に拳銃を呼び出し、フリカアトラの加速力に物を言わせて突撃してくる。マコトはそっちがその気なら、と臆することなくブレードを左手に、オニールへと合わせて突撃した。

「逃がない!？」

「このおおつ!？」

マコトの突撃により交差は一瞬、結果はオニールの両手に握られた拳銃が破壊された。小爆発を起こしたことでオニールは衝撃を受け、マコトから目を離す。ファニールはオニールからの視界が途絶えたことを悟って、簪への掃射を止め、大きくマコトら外れてオニールに合流する。

これにより、マコトも簪と合流し、陣形は振り出しに戻った。しかし、有効なダメージをマコトがは入れられず、逆に簪はかなりの痛手を受けている。残りエネルギーは4割、無茶な機動もできなければ、これ以上のビームによる攻撃はある程度出力を絞り、節約して撃つ必要がある。

「簪さん、ごめん、あたしの作戦が」



「大丈夫。マコトさんのせいじゃない。正直、ここまでとは思ってなかった」

「悔しいけど、そうだね。あの子たち、強い……！」

二人の前に立ちはだかるコメット姉妹は笑顔だった。しかし、それは好戦的なものではなく、ステージの上で輝くアイドルとしてのもの。決して、個々の技量は負けていない、マコトも個人的なスキルは完全に上だとわかっているが、相手のまるでこちらの動きを見ているような動きに翻弄されている。

何かカラクリがある。マコトはそう考えた。真耶との一戦を彼女は思い返す。特に、ついさつきマコトは同じ手を使った。煙幕による視界の制限。それに対し、オニールはどう動いたのか。

「あときは山田先生にやられてたけど、さつきは躊躇わず突っ込んできた。けど、あの速さじゃ、ファニールさんからの通信なんて入ってこない。なのに、正確に煙幕の向こう側のあたしに向かってきた」  
「見えていないはずなのに見えている。それを伝えられずに。そう思えばすぐにマコトはその可能性に思い至る。」

「(まさか……二人は視覚を共有しているの……?)」

そうでなければ、説明できない動きがこれまで行われていた。真耶の時も、防げないはずの攻撃を防いでいた。まるで次にそうくると判断して。双子の第六感にしてはあまりにも強すぎる。

「マコトさん?」

「簪さん、作戦変更。絶対に、二人を分断しちやダメだ」

「え?でもそれじゃあ」

「じゃないと、やられる」

簪の前にマコトは回って、ライフルとブレードを構える。その様子にファニールは今度こそ光線的な笑みを向けた。

「へえ、気がついたんだ」

「みたいだね」

「……やるわよ、オニール。一気にケリをつけるわ」

「うん、わかった」

手品の一つがバレた、となればファニールはもう一つの奥の手を切

ることにした。

「簪さん、援護お願い！あたしがなんとかしてみる！」

「ごめんなさい……！マコトさんに負担を」

「ううん！大丈夫！隙を作ってみるから、そこをお願い！」

「了解！」

マコトは簪を砲台に自らを囚にすることにした。不利な戦いは慣れっこだ。マコトが加速をかけ、コメット姉妹へと突撃する。だが、相手はその場から動かず、目を閉じた。なんのマネだとマコトは思ったが止まらない。何かをする気なのはわかったが、簪が動けない以上、退くことはできない。

『システム起動』

「ファニールとオニールの声が重なり、フリカアトラに搭載された『システム』が起動する。ただしそれは——二人の知る『システム』ではなかった。

——Standard Yggdrasil systems  
tandby

「え」

本来起動すべきであった、衛星からの視界とリンクし戦場を支配する『グローバル・システム』とは別のシステムが起動する。ファニールがおかしい、と思った時にはもう遅かった。

『ソレ』は、オニールを選んだ。

隣にいたオニールの様子が急変する。僅かな新緑色のオーラが迸ったかと思えば、同期していたオニール機のエネルギー計などのリンクがファニールの視界から消え去り、見えていたはずのオニールの視界が見えなくなる。

そして、瞳から光が消え失せ、涙を流したオニールが「たす、けて」と呟いた瞬間、ファニールはオニールに異常な脚力で蹴り飛ばされた。悲鳴もあげられず、そのままファニールは弾丸のようにアリーナの地面に墜落した。

突撃していたマコトは理解不能な事態に思わず急停止する。急停止した瞬間にはコニールが目の前にいなかった。

どこに、と背後に目を向ければ、簪の腹部にオニールの拳がめり込んでいた。そのまま簪はアリーナの観客席のバリアまで飛ばされ、バリアに激突すると気を失って落ちていった。

「あ、ああ、な、なんで、どうして」

「――」

「どうして、ファニールさんも、それに、あんな、力」

オニールは答えない。否、答えられない。マコトは困惑したまま、簪と同じく一瞬で詰め寄られたオニールによって殴られ、吹っ飛ばされた。刹那、背中に大きな衝撃。意識が朦朧とする。それでも気絶しないのはマコトの確かな精神力のおかげだった。

頭がおかしいと、何かが起こったとマコトは思うも、何もわからない。

それでも、状況は動く。オニールの右手に刀が再び装備され、その切先は簪に向けられた。何をするのか、すぐにわかった。

「ま、って、そんな、力じゃ」

朦朧とする意識で、マコトは手を伸ばす。明らかにISの限界を超えた力で、空中からの勢いをつけて刀を突き出されたらどうなるのか、マコトはわかる。簪が、死ぬ。

――いやあああつ！

マコトの中に、かつて救えなかった少女の悲鳴が響き渡った。

「あ、ああ、あつ、う、やめろおおおおお！」

朦朧とした意識がクリアになる。思考が加速する。それは、マコトに、否、シン・アスカに与えられた人類の次のステージへ上がるための種。芽吹かなくてはならない種を弾かせ、一時的に力を得るそれは、この世界でレイラが、束が危惧した――シン・アスカの、黄泉の国からの帰還であった。

打鉄が乗り手を“人類”ではないと機械的に判断し、設けられたリミッターを解除する。限定的な“真なる回帰”を迎えた機体が、名を持たないインフィニット・ストラトスへと戻り、一息にオニールに体当たりした。

「――!?」

「うあああああっ！」

勢いのままにマコトは観客声のバリアにオニール、を乗っ取った何かを叩きつける。全身を打ち付けられたはずのオニールは一切動じることなく、マコトのことを蹴り付けて弾いた。視線がマコトを射抜く。ターゲットはマコトへと移ったようだった。

「簪はやらせない、討たせない。だから、あたしは——あなたを討つ」  
ブレードを両手に、マコトは曇りなき瞳をオニールへと向ける。  
怒れる瞳と、醜悪な可能性に囚われた少女の死闘が今、始まった。

お姉ちゃんは、ファニールは私にとって星のような人。唯一の家族で、私のことをたくさん好きでいてくれる人。そんな彼女がアイドルに憧れて、そうなりたいと願った。きつと、アイドルになったお姉ちゃんはもつとキラキラできると思った。あの、雑誌に載っていた、私たちしか憶えていないキララのように。

だから、支えてあげたい。苦手な仕事も、難しいことも、一緒にこなして、お姉ちゃんとあの一等星みたいになれたら、それはきつとすつごく嬉しいと思った。

なのに、なんで、私はお姉ちゃんを蹴落として、一人で戦っているんだろう。

## # phase—33 「つなぎとめるもの」

セシリアがマコトたちのいるアリーナに到着したのはちょうど、暴走したオニールとマコトが向き合っている場面だった。観客席に入るなり歓声はなく妙に騒ついでいることに気がついて、セシリアは何が起きたのかと周囲を見渡せば、ちょうど1組の生徒たちが纏まっている座席を発見し、その中にさやかたちがいることに気がついた。

「さやかさん!」

「あ!セシリアさん!」

試合があつたはずのセシリアがISスーツに学園指定のジャージを上羽織つた状態で現れたことにさやかたち1組の生徒たちは驚いたようだった。セシリアは素早くさやかたちに近づいて状況を聞く。

「さやかさん、この会場の様相はどうされたのですか?試合というには妙な困惑を感じますが」

「急にコメット姉妹の妹さんのほうが姉のほうをフレンドリーファイアして、さらに簪さんを殴って気絶させちゃったんだよね」

「……………どういふことですか……………」

さやかの説明を受けて、セシリアは再度アリーナの中を見る。ISバトルにしては異様に殺気だっている。先ほどまでの一夏たちとの戦いは死闘でこそあつたが、あくまで競技の延長線上でのものだった。試合結果にケチがついて、おまけにセシリアのブルー・ティアーズもどういふわけか試合後から動作が重く、二回戦以降は使用できるか怪しい。

そこまでの戦いでも、ここまで濃密な殺気はなかった。特に、マコトを見たセシリアは思わず後退りしそうになる。ステラドレスへの覚醒と同時に、セシリア自体も持っていた才覚を目覚めさせた影響か、マコトの今の「感情」がダイレクトに流れ込んできた。

「うっ……だ、ダメですわ、マコトさん!そんな、そんな気持ちで戦つては—」

「え!?せ、セシリアさん!?!どうしたの!?!」

「それは、それはいけません！あなたは、あなたは自分も相手も殺してしまうー！」

「こ、殺してって!?!」

強烈なまでの怒り。それがマコトから受け取られるものだった。対極的に、オニールから何も感じられない。まるで、機械のような印象さえ受ける。セシリアは初めて感じる人の意思に、体が震え出す。

「なんですの、この、人の気持ち、私の中に、入って……!?!」

「セシリアさん！とにかく座って！相沢さん、席あけよ!?!」

「わかったー！」

1組の生徒の一人である鷹月静寐がさやかにそう言って席を開けさせると、さやかは無理やりにもセシリアを座らせる。セシリアの顔は真っ青だった。

震えているセシリアは明らかにおかしい。さやかも静寐も、他の1組生徒たちも全員が同じ気持ちで、アリーナにいる救護班を呼び出そうと思っていたが、そんな彼女らの前に上級生二人が気がつけば立っていた。

「君たちは1年1組の生徒かな？」

「えっ……!?!せ、生徒会長!?!」

緊急事態、と書かれた扇子で口元を隠した楯無が虚を隣に現れた。セシリアも顔を上げ、友人にそっくりな楯無を見る。目元を見る前に、彼女からも強い怒気を直接心に感じて、苦しくなる。直接見えていないが簪が墮とされた、しかもISを纏った上で気絶するほどの攻撃を受けて。最悪の場合、命にも関わる状況だ。

もしレイラがそうなってしまうえばセシリアも同じ気持ちを抱くため、理解できる。

「簪さんの、お姉さまですわね」

「ええ、オルコットさん。いつも簪ちゃんとは仲良くしてくれてありがとう。……今はそれ言ってる場合じゃないけれどね」

楯無はちらりとアリーナ内を見る。フレンドリーファイアという前代未聞のことがあったとはいえ、試合が止まっていない。ということとはアリーナのジャッジに届いている墜落した二人のバイタルは危

篤というわけではないのだろう。簪もファニールも判定上は僅かだがエネルギーが残っており、試合中止とはいかない。いかないが、気絶した二人を一度ピットに戻すために中断させる必要がある。だとこのように、それがされていけない。

「みんな、見ていたと思うけれどこの状況は明らかに異常よ。これから私は会長権限でアリーナのジャッジに一時中断を申し入れるのだけれど、力を貸して欲しいの」

アリーナの中央管制室：ジャッジ係がいるところで何かが起きている。楯無は嫌な予感がしてしようがなかった。校内にいる生徒会役員たち、つまりは更識家の作業員たちにこのアリーナの管制室へ連絡をさせたが一切反応がなかったことで、余計に疑惑が増す。

進入を許したのか、それとも最初から入り込まれていたのか。

「(いいようにやられ過ぎてる。篠ノ之博士や亡国のあの二人、織斑先生や理事長：そして私たち更識。ここまでカードを揃えてもまるで壁になってない。蜘蛛みたいに気がつけば忍び込まれて巣が張られてる…!)」

ネストとはよく言ったものだと思つた。

「力を貸す、とはどうすれば、よいのですか？」

セシリアの問いかけに楯無は答えた。

「このまま、普段通りに観戦し続けて。その間に私がなんとかするか」

「なんとかって」

「相沢さんだったかしら？マコトちゃんのお友達の」

「な、なんで知って」

「生徒会長だからよ。お願いね。コメント姉妹のためにも、いいわね？」

さやかは楯無の意図がなんとなくだが理解できた。直感的な彼女だからこそだろうか。この生徒会長はこの異常事態を、何もなかったことにするつもりだということ。セシリアも同じく楯無の意図を理解する。

「……わかりましたわ。皆様、そうしましょう」

「みんな、このまま応援を続けよう」

セシリアとさやか言葉に1組の生徒たちは顔を見合わせ、頷く。楯無はそれを確認すると扇子を閉じて、笑顔を見せる。1年1組。仕組まれたとはいえ、まっすぐな生徒たちが揃えられたこのクラスは聞き分けが良くて非常に助かった。

「2組はあの二人のファンだから扱いづらいから、簪ちゃんたちが相手になったのは不幸中の幸い……って、こんなこと、考える自分が嫌になる」

更識楯無としての冷徹な思考と、更識刀奈としての想いがぶつかって彼女は嫌になる。

「お嬢様」

「ええ、いきましよう。ついにご対面、かもしれないから」

なんであれ、**“敵”**がここにいる可能性が高い。であれば、なんとかでも捕らえて情報を吐かせる必要がある。楯無は最後に、マコトへ視線を向け彼女の健闘と、簪を守ってほしいという願いを送り、アリーナの管制室に向かうのだった。

楯無が移動し始めた瞬間、戦闘は再開された。オニールはブレードを展開した状態で急加速する。フリカアトラの優れた加速力は何かによって強制的にリミッターを解除された影響で飛躍的に向上している。

亜音速飛行でマコトへとオニールは襲いかかるが、マコトは振り下ろされた一閃を打鉄では不可能な後退速度で回避する。デステイニーでよく行っていた回避機動だった。

「はぁあっー」

後退の直後に、今度は全速力での突撃。強烈な速さで後退と前進を行われ、振り下ろした体勢を戻そうとしているオニールは回避できず、マコトの手にあるブレードの直撃を受けた。バリアが正確に発動し、オニールの頭部に当たったことで絶対防御が起動するも、その出力はインフィニット・ストラトスとしての最高のもの。オニールには傷一つ付かない。



「おおおおっ!」

それがわかってても、マコトは動きを止めない。斬れないなら、叩き潰す。反撃も許さぬほどのラッシュをマコトは仕掛ける。リミッターの外れた打鉄の速度に任せて、オニールを削り取るように何度も四方から切りつける。観客席から見れば、マコトが分身したのかと見紛うほどの速さだ。

だというのに、オニールはこれを刀で全ていなしてくる。

罅が明かない、とマコトは今度は重い一撃を加えるべく、大上段にブレードを振り上げる。すると、受け身に回っていたオニールが急激に動きを変える。力任せとはいえ、確かな技量と速さで振り下ろされたマコトの一撃をオニールはスツと回避し、マコトの背後をとる。そのまま、下段からマコトの背骨を縦に切り裂くように刀を振り抜く。バリアに阻まれたがオニールのカウンターは確かにマコトに届いた。

「ぐあっ!」

強烈な一撃であった。またしても意識が飛びそうになるが、どうかこらえてマコトはオニールへと振り向くが、オニールはそこから何もしてこない。追撃をすれば確実にマコトに痛手を負わせられただろうに。

加減されている——そんなことが過った瞬間、またしてもマコトの怒りが爆発した。

「……バリアがなかったら、今ので終わりだった、って……そう言いたいの? あなたはツ!!」

怒りのままに、急加速。初めてオニールのような何かが目を見開いた。

「——対象の脅威度を上方修正——」

「ふざけるなああっ!」

更に増した速度の一撃は回避できず、オニールは持っていた刀を頭上に突如投げ飛ばすと、振り下ろされたマコトのブレードを白羽取りしてみせる。この光景はまさしくマコトが、シンがオーブでキラにされた防御そのものだった。

「そんなんっ!」

「——対象を革新者と認定 評価開始——」

「なにを——っ!？」

取られたブレードが、オニールに握り潰される。マコトは即座にブレードから手を離し、ガルムを呼び出して牽制しつつ後退する。3点バーストにモードを切り替えて連射するが、オニールは最低限の回避で突撃をかけ、機体が前を向いたことでミサイルを全弾発射してくる。

「ミサイルぐらいでっ!あたしが!」

追尾してくるミサイルに、マコトは急降下する。追尾性能も向上したミサイルはマコトを正確に追うが、それは仇となる。地面すれすれで急制動と瞬時加速を行うことで直角に低空飛行へと移ったマコトをミサイルは追いきれずほとんどが地面に着弾する。

残ったミサイルはマコトがガルムで撃ち落とす。

その様子を見ていた1組の生徒たちはようやく応援を再開した。

「マコト!頑張れ!」

「マコトさん!負けないでくださいまし!」

「飛鳥さん!がんばれ!」

困惑の支配していた会場内に響いた1組の応援はたちまち、観衆たちを元に戻らせる。試合は続行され、こうしてマコトが必死に戦っている姿を見ていけば、応援したくなるのは筋だった。

さやかやセシリアの声が届いたことで、マコトは急激に怒りが冷めていく。冷や水を浴びせられた。そんな感覚だった。

「はっ、はあっ、はっ、あ、あたし、なにを…!」

弾けた種は再びマコトの中へと埋め戻され、マコトは状況を再確認する。

「簪さんが堕とされて、あたし、ベルリンの時を思い出して…それで」  
オニールを本気で殺そうとしていたという事実がマコトの心を氷づけにする。しかし、それでもマコトは呆然と立ち尽くすことにはならない。苦しく、怖い、それでもまだまだこの戦闘は収まっていない。マコトが友人たちの声に戻ってこれたとしても、オニールはまだ、何かに囚われている。

「さっきの、切り結んだ時の言葉…オニールさんじゃない。何か」の言葉だった」

対象の脅威度、それにこちらからアクションをすれば変わるターゲッティング。異常な高性能化。少し考えればマコトは思い当たるものがすぐに出てきた。

「…これって、サイレント・ゼフィルスと同じ…？」

あの時と違うのは操っているのが機械か生身の人間かであったが、動きがあまりにも似通っていた。だとすれば、今のオニールのフリカアトラはインフィニット・ストラトスとしての性能を発揮している。マコトの打鉄もSEEDにより一時的に同等の性能となったが、彼女が正気を取り戻したことで元に戻っている。

「さっきまでのあたしの動きも同じだったけど、元に戻ってるし…どうしよう」

今のフリカアトラと打鉄では性能差がありすぎるうえ、圧倒的な力に対して、ISの打鉄ではバリアが正常に作動するか怪しい。フアニールや簪の様子からして少なからず絶対防御を貫通しているのは間違いない。

倒れ伏している簪をちらりと見れば、幸いにして内臓などに損傷を受けたわけではないのか血反吐を吐いたりしている様子も見受けられず、衝突の衝撃で気絶したようだった。それでも、勿論安心はできないが。

「けど、退けないよね」

マコトはそんなことは構わずオニールへと銃口を向ける。結局、マコトの戦いは前世でも今世でも変わらない。圧倒的不利な状況を覆す。それをいつも求められてきた。

「あたしはあたし、でも、シン・アスカとしての戦いは捨てられない。力がなくちゃ、強くなくっちゃ、あたしは“ヒーローごっこ”を続けられないから」

性能差があらうと、なんであろうとそれらは退く理由にならない。もしオニールを囚えているものがサイレント・ゼフィルスと同じ人形であるならば、観客にも被害が及ぶ可能性がある。

「いくよー」

マコトは臆することなくオニールへと挑みかかる。ガルムを単射モードにし、牽制しつつ加速する。オニールは高く投げていたブレードをキャッチし、一瞬でマコトに詰め寄ってくる。逆手に持ち替え、マコトの腰を断ち切ろうとしていると判断し、マコトは急制動の上、まるで曲芸のように刃に沿ってくるりと前転する。たとえリミッターがかかっても打鉄の操作性の良さは変わらない。

「ごめんねっ！」

続け様にブレードを左手に呼び出し、マコトはフリカアトラの背部左翼にある非固定ユニットのミサイルサイロに刃を突き立てる。思った通り、そこはバリアが弱いのか、大きな抵抗を受けながらもブレードが突き刺さる。

ブレードを抜き、瞬時加速で離れると破損した部分が大きく爆発する。オニールは吹き飛ばされ、スラスターユニットを一つ失ったフリカアトラはバランスが崩れてしまったのか、反撃のためにマコトへ迫ろうとするも体が後転してしまう。

「よしっ！扱いが難しいって、そういうことだよね！」

ティナという初心者との模擬戦でマコトはフリカアトラの弱点を見抜いていた。スラスターユニットの制御を誤ると簡単に機体が回ってしまうのだ。こうなってしまうえば高い機動力を生かした戦闘は難しくなる。

ただし、それはオニール本人が動かしていればの話であるが。

「――機体損傷 アンロックユニット喪失 スラスター推力配分変更――」

本来であれば専用の設備でないとできない、非固定ユニットの再配置をオニールは行い、機体が安定する。

「うそっ!？」

安定したオニールが再度突っ込んでくる。速度は少し落ちたものの、脅威であることには変わらない。

「無茶苦茶だよーどうしたもんか……!」

ブレードを破壊されないよう、丁寧にマコトはオニールの攻撃を捌

き続ける。この様子では学習能力も高そうで、先ほどのような攻撃を当てさせてくれそうにない。エネルギー切れを狙いたいところではあるが、アーリーナの表示は正気を失う前から変わっていない。つまり、エネルギー残量が白騎士同様無限になっている可能性が高い。

「観客席には楯無さんがいた。それなら、あの人に賭けるしかない」  
これ以上は時間稼ぎしかできないと判断する。マコトは大切な友人の姉を信じることにした。

「気が済むまで、相手、してあげる！」

刃を滑らせ、オニールの力を利用して彼女を弾く。観衆は状況を知らず歓声をあげていた。

一方で、管制室にやってきた楯無と虚が見た光景は信じられないものであった。管制室内では試合状況がモニターされているが、それらを見ているものは誰一人としていない。ジャッジを任された生徒も、教師も、全員気を失っていた。

「外傷ありませんし、空間内に薬物やガスの反応はありません。どうやって…」

「ええ。というか、犯人がいなくて最悪ね。ここまでは一本道だったのに誰ともすれ違わなかったのよ？」

敵の見事なまでの手際と、犯人が見当たらないことに楯無は警戒を強める。不幸中の幸いなのは、誰の人命も失われていないことだ。

「とにかく、試合を止めないと。あのオニールって子、どうにもサイレント・ゼフィルスを思い出しちゃってしょうがないわ」

「報告で聞いていた動きとよく似ています。おそらくあれも…」

「ユグドラシル、ってことね。ただ、操られてるんだらうけど、どう解放したものか」

試合を中止したところで暴走しているにオニールを止めなくては意味がない。楯無が介入すればせつかく異常事態であることを伏せている意味がなくなってしまう。

「お嬢様、僭越ながらご提案が」

「遠慮なく言っちゃって」

「剥離剤の使用を」

剥離剤、リムーバーと呼ばれるそれはISを強制的に解除させるものだった。一度使うとISコアが耐性を持ってしまおうというものだったが、搭乗者の負傷時など緊急解除を自力できない場合に利用されているもので、当然IS学園にも厳重な封印がされているが各ピットに標準装備されている。

これならば暴走していたとしても動きを止めることができるかもしれない。

「いい案ね。採用よ。けど、どうやってリムーバーをぶつけるの?」

「それは…」

「まあ、マコトちゃんが頑張ってピットに押し込んで私が押し付けるしかないわね」

「危険です」

「簪ちゃんをやった時点で私には躊躇いなんてないの。簪ちゃんを救うなら私は死んでもいい。知ってるでしょ」

「……………刀奈、そんなことを言うのは」

「撤回はしないわ。虚、試合の一時停止をアナウンスして、お願いよ」  
虚は主人ではなく、幼馴染みからのお願いにため息をつきながらも頷く。同じく妹を持つ姉同士。彼女の気持ちは痛いほどわかるのだ。暗部として甘さを捨てきれないのは認められざるものだが、今の二人はこの学園のただの生徒として行動した。

「観客の皆様へ、負傷者の一時退場のため試合を一時中止します。しばらくお待ちください」

そうして、状況は整った。楯無の姿はもう管制室にはなかった。

「ぐっ、う、試合の一時中止!?!」

ようやくか、と思いつながらマコトはオニールの攻撃を受けていたがアナウンスがあってもオニールは止まることがない。だが、ここでマコトの待ち望んだ人物がピットから飛び出してくる。

「マコトちゃん!」

「楯無さん!」

楯無が専用機であり、一度はマコトと相対したミステリアス・レイ  
デイを纏ってアリーナ内に侵入した。観客席にはどよめきが広がる  
が、彼女はそれを構うことなく、いきなりマコトとオニールを搭乗機  
から射出した水のヴェールで拘束した。

「試合は中止よ！命令を聞きなさい！」

マコトは楯無がなんとか場を何事もなく治めようとしていること  
に気がついた。楯無に視線を送ると楯無は彼女らしく余裕の表情で  
ウィンクしてみせる。暴れるオニールだったが、マコトよりも強固に  
固められた水の拘束を簡単には振り切ることができない。そのまま  
楯無は強引に二人をピットへと引きずり込んだ。

「楯無さん！ありがとうございます！でも、この子はどうすれば!?」

「こうするのよ！」

オニールを強引にピットの壁に押し付けて、楯無は手に白いボール  
のようなものが現れた。それをオニールに投げつけると、ボールが破  
裂し、彼女の全身を光が包んで、ISが解除される。

「あつ……」

解除と同時にISは消え、オニールは気を失った。

「よっしーうまくいったわね！」

今度は丁寧におニールを床に寝かせ、彼女のネックレスとしてかけ  
られているフリカアトラの待機形態を楯無は引きちぎる。

「虚ちゃん！いいわよ！試合はこのまま中止！ジャッジの子たち入れ  
替えたらB

ブロック第二試合を行わせて！」

『わかりました。念のためこちらに残りますがよろしいでしょうか  
?』

「もちろんよ。応援も寄越すわ。現場検証もしてちょうだい！」

『ありがとうございます』

なんとか最悪の状況にはならず、場は収まった。マコトも拘束を解  
除され、一度打鉄から降りた。制服姿の楯無もミステリアス・レイ  
デイを格納すると大きく息を吐いた。

「ふう。なんとかなったわね。助かったわ、マコトちゃん」

「いえ、こちらこそ。楯無さんがこなかったらやられてました」

「簪ちゃんを応援に来たのが正解だったわ。やっぱり、妹は大切にするものね」

「そ、そうだ！簪さんが！」

そう言ったところで、簪を回収した手伝いの三年生がピットまで打鉄丙型ごとやってくる。あとにはファニールも続いていた。

「簪さんー！」

マコトは当然彼女に駆け寄り、楯無以外の整備課の生徒たちが即座にリムーバーで簪とファニールのISを強制解除する。救護班として配置されている生徒たちが簪たちを見れば、生きていることは確認できた。

「すいません！簪さんは！」

「とりあえず生きてはいます。ただあれだけの衝撃を受けているのですぐに医務室のデュノア先生に診てもらいます。そちらの二人もです」

「お願いします。大切な、大切な人なんです！」

マコトの目には自然と涙が浮かんでいた。楯無はそう簡単に簪が死ぬような体ではないとわかっているのに、息があるのなら大丈夫だと一安心し、マコトの様子を微笑ましく見守った。

「（これにて一件落着…とはいかないけれど、全員無事でよかった。犯人探しに、明日はシャルロットちゃんの編入試験と…忙しくなるわね。あと、このコメットさんの妹の機体は博士に預けるしかないわね。カナダに話すのはそれから——）」

タツグマツチはこのまま継続となるが、楯無は姿を消した敵への警戒を緩めない。

“敵”との邂逅は刻一刻と迫っていた。



## # p h a s e — 3 4 「星は陰ることなく」

結果的に、タッグマッチの優勝者はさやかとティナになっていた。1年生の部A・Bブロックの第一試合に出場したマコトたち4組が全員棄権し、結果的に残った生徒たちの中で一番実力の高かったのがさやかとティナだった、というだけである。

「……どうしよこれ」

「どうしよ……」

まさか自分たちが優勝するとは思っておらず、新聞部にフラッシュを焚かれながら二人はただただ呆然とすることになった。

マコトと簪、コメット姉妹に関しては双方とても再試合や2回戦などできる状態ではなく、一応の勝者となったセシリアとレイラはブルー・ティアーズの不調によりこれ以上の戦闘はできなくなった。一夏は言わずもがな、シエラから念のため絶対安静とされていたのもあった。

優勝候補たちの全滅により、来賓のIS関連企業や一夏の偵察を兼ねていたものたちは目にも留まらぬ戦闘機動を見せた一夏は男性操縦者という色眼鏡を外し、世界最強の再来の可能性があるという情報だけしか持ち帰ることができなかった。

表向きのリザルトは尻すぼみな盛り上がりで何事もなく終わったが、裏は更識家含む学園の警備の完全敗北という形となる。オニールを襲った正体不明のシステムは束の解析に回されたものの、僅か1時間の意味がないと判断が下された。肝心のオニールのフリカアトラに何も残っていないだったのである。中身のデータは正常そのもので、本来発動するはずだった衛星リンクシステム、グローバル・システム“がしつかりとあった。

ただし、“何か”がISのコアネットワークを経由しフリカアトラをのっとったことが判明し、ISに対するウイルス事件という前代未聞の事態に束は頭を悩ませることになる。

そうして、タッグマッチ当日の夕方。学園側が影で事後処理に奔走する中でマコトは保健室で眠る簪の横にずっと座っていた。

シエラは現在席を外しており、ここにいるのは意識を失った簪とコメット姉妹の4人だけ。一夏はベッドが足りないため早々にシエラが彼の自室へ追い出してしまった。

「……………簪さん」

運び込まれた簪はシエラの「魔法」で即座に回復させられた。マコトには知らされることはなかったが、打撲による僅かな内蔵損傷が認められていた。ファニールも首を刈るような動きで蹴られたせいか打撲と首の骨にヒビが入っており、そちらもシエラにより治っている。

よって二人は公的には「無傷」とされ、楯無が明日以降流布するカヴァーストーリーにより、マコトたちの戦いは「ただ熱くなっただけ」となっていく。

それによつて今後の4人の世間体が守られたとしても、当人たちの心まで保障はできない。

一番ダメージの少ないマコトでさえも精神的なダメージは大きく、簪を危うく失うところであったこと、オニールを殺そうとしてしまったこと。落ち着いてからはひどく落ち込んだ。

こんなときに彼女を励ましてくれるレイラはブルー・ティアーズの件で本国への対応に追われ、ここにはこれていない。

「ごめん…東姉さん、あたし…………」

大切な人の夢の導を殺しの道具として扱おうとした。それが何よりもマコトには辛かった。考えるたびに、あの無邪気な兔のような少女の笑顔が、汚されていく。純粹で、けれどもちよつと邪悪で、真っ直ぐな不思議な女性。素敵な夢だと、他ならぬマコトが認めたものを血で汚そうとしたなど、マコトは自身を許せなくなる。

「……………ああ…結局、あたしは変わらないのかな」

——アスラン。迷い続け、もがき続け、最後まで答えが出せずに討った正義の担い手がマコトの中で思い返される。間違えたこともたくさん言われた。それでも、正しいことたくさん教えてもらえた。考えてみれば、始まりは全く同じ彼もきつと、変わろうと変えようと、必死だったのだろうとマコトは今更思ってしまう。

手が震える。怒りに身を任せ、たくさんの命を奪ってきた。『こんなこと』しかできない。そんなふうに嘆いて、今世ではそうはなりたくなって、平和な宇宙を飛びたいと、あの日出会った夢見る少女に誓ったはずなのに。

「…そんなこと、ないよ」

「っ！簪さん、気がついて…!？」

「さつきから。でも、マコトさんがそんな深刻な顔してるから」

むくりと簪は起き上がった。何事もなかったかのように、儂げな笑顔でマコトに彼女は向けている。夕日のせいかな余計にそれは強く感じられて、マコトは思わず簪に抱きついてしまった。

「うえ…!？」

「よかった…よかったよお…」

「ま、まま、マコトさ」

「ごめん、あたし、あなたのこと、守れなくなつて」

「し、死んだわけでもないし、正直、オニールさんが突っ込んできた瞬間しか覚えてないから…」

通常であれば腹部に鈍痛が残っていそうなものだが、シエラのおかげでそんなこともなく、PTSDの症状は出なかった。涙を流すマコトに、簪は徐々に冷静になる。好きな人とか、そんなことは今置いて、自分のために泣いて、自らを責めてしまう優しすぎる『ヒーロー』を優しく抱き返した。

「…さつき、変われないって、そう言ったよね」

「だって、あたし、簪さんの仇を取ろうとして、オニールさんを」

ちらりと簪が横のベッドを見ればオニールたちは規則正しい呼吸をしており、顔色もよくただ眠っているだけなのがわかる。彼女たちは生きている。簪も生きている。だから、マコトは何も奪うことはなかった。

「大丈夫。マコトさんは、きつと、変われる。だってあの夜、あなたは誰かを守れたでしょう?」

「あ——」

「今日だって、私も、この二人も、生きてる。だからマコトさんは、大

丈夫だよ」

背中に伝わる、簪の髪色とは真逆の暖かな感触が、包み込む想いがマコトの傷ついた心を癒していく。

「(どうして、簪さんは、あたしが欲しかった言葉を、たくさんくれるんだろう)」

ここまで優しくしてくれる簪に、マコトはどうとう、一步相手へと踏み込んだ。友人だから、というにはあまりにも優しすぎる。もつと、もつと、深い感情がないとこんなにもマコト自身の心が暖かくはならない。

簪がマコトから離れる。すぐ目の前にある簪の表情をマコトはまじまじと見てしまう。

「マコトさん、その、見つめられると、はずかし」

「あ、ごめん」

頬を赤らめる簪に、マコトは見惚れていた。謝りながらも目を離せない。

「マコトさん、み、みつめないで」

「そうなんだけど」

ちよつとずつ、マコトの顔が簪に近づいていく。吸い寄せられるように。わけもわからず、マコトはそうしていた。迫ってくるマコトに、簪は逃げない。何をされるのか、なんとなく察してしまった。

桜色の髪留めは夕陽に照らされて輝いて、それが眩しいからと簪は目を閉じた。マコトの吐息が唇へとかかる。

その接触をしてしまえば、もう二人は引き返せない。マコトは一つの扉を開ける。

「(あたし、なんでこんな)」

魅入られた。そのようにしか思えないのに、心地がいいマコトも目を閉じようとして――。

「あ、あ、あんたたち、なにしてんの!？」

タイミング悪く、目を覚ましたファニールがそんな悲鳴を上げた。マコトと簪は「うひゃあつ!？」と一緒に声をあげて飛び上がって距離をとった。簪は悲鳴をあげながらもほんの少し恨めしげにファニール

ルをチラ見した。

「(あと少しだったのに——!)」

「な、なによ、その目は…はあ…目を覚まして話訊こうと思ったたらこんな」

ファニールは深くため息をつく。とりあえず試合に出ていた全員が無事だったことで、混乱することはなかったが、目を覚まして見たのが試合相手のイチヤつきとなれば、彼女はたまったものではない。

「まあ、いいわ。それで、試合はどうなったわけ?」

「え、ええつと、私たちは全員棄権、かな」

「……でしようね」

座り直したマコトが答えれば、ファニールはだろろうなという形で納得した。そうでなければこの4人がこんな場所で寝ているわけがないのだ。ファニールはそれがわかると、天井を見上げた。

「あーあ、そっか。負けちゃったか」

「負けたって…」

「飛鳥マコト、いい?結果として私たちは輝けなかった。その様子からして、あんたなんですよ、オニールを止めてくれたの」

正確には楯無だが、楯無がくる前まで止めていたのはマコトなので肯定する。

「やつぱり。……そのことには礼を言うわ。ありがとう、妹を助けてくれて」

ファニールは素直に頭を下げる。マコトは思わず手を前にしてしまうが、彼女の真っ直ぐな謝意を受け取らないということはありえず、一度呼吸を整えてから、それを受けた。

「ううん。あたしも、必死だったから。それに、おあいこだから、いいよ」

「あおい…?」

「そういうことにしてほしい、ってことでいいかな」

「…あんた、お人よしね。芸能界には向いてないわ」

「だろうね」

くすくすとマコトとファニールは笑った。マコトはどこか鈴音の

ような素直で真っ直ぐな気質をファニールから感じ取って、本当は付き合いやすい子なのかもしれないと思った。2組からはファンとしての崇拜も向けられているかもしれないが、ティナからマコトのことを聞くなど、関係は良好そうだった。

「まあ、ISの詳しいことはプロデューサーあたりから聞くとして……あたしが落とされたあと、何があったの？」

「それは――」

マコトは正直に、ファニール撃墜後からのことを彼女に伝えた。オニールが暴走し、マコトが応戦したこと。楯無がどうにかあの暴走後の戦闘を「試合」として収めて混乱を起こさせなかったことなどを伝えた。

聞いたファニールの反応は安堵、その一言に尽きた。

「よかった……この生徒会長、流石ね」

「うん。おかげで、タッグマッチ自体はつつなく終わって、あたしのクラスメイトが優勝したよ。あ、ペアのティナさんは2組だから、ここにいる3人のクラスは優勝だね」

「ティナが？やるじゃない、あの子」

自分たちはダメだったが、結果的にクラスメイトが優勝したというのはほんのわずかにファニールの中に喜びが出る。簪は仲間外れにされたような気分になるが、そもそも4組で出場したのは簪だけで、相も変わらず「簪さんならきつと大丈夫だよ!」という心がこもっているのかよくわからない応援だけで送り出されていた。なので、もうこれはどうしようもないと思った。

「なんとか私たちのイメージは落ちなくて済むかな……あとで生徒会長にはお詫びにいかないか」と

「…別にいいと思う」

「え？」

「お姉ちゃん、気にしてないと思うから」

「ああ、そっか。妹だったね、そういえば」

散々人のことを助けなくせに邪魔し続けてきた姉が、ようやく自分を、自分の好きな人を助けてくれたのだ。素直に称賛するのは少々

憚られた。ファニールは簪と楯無の確執など知らないので妹である彼女が照れ隠しで言っているだけだろうと思った。

マコトは苦笑いするばかりだ。

「さて、私は起きたいけど、いいの？」

「デュノア先生はダメだって」

「そっか」

ファニールは以前もシエラの世話になったことがあり、ならしやうがないと思った。シエラの包容力は親のいないファニールにとって争い難いものがあった。

ここでふと、マコトは気になったことがあったのでファニールに聞くことにした。

「あの、ファニールさん？」

「なに？」

「教えてくれたらでいいんだけど、どうして、そこまで負けたくないの？」

ともすればその質問は失礼な、と切って捨てられてしまうものだったが、今のファニールは素直に答えることにした。

「あんたたちなら、いつか。オニールを救ってくれたお礼よ。私たちの負けられない理由と、夢、教えてあげる」

そこから、ファニールは語った。小さな頃に見た伝説的アイドルに触発されて目指すようになったこと。そのアイドルが引退して、忘れ去った世間に彼女の輝きを思い出させるよう、アイドルになったことを。

「伝説的なアイドル？」

「言ったところでわからないでしょうから言わないわよ」

簪がその伝説的なアイドルとは誰なのか気になったのだが、ファニールは言わない。世界中で痕跡が消えたのだ。今更その名前を言ったところで伝わらない。

「……えっと、なんだっけ、名前は聞いたことありそうなんだけど……」

「……へ？」

そのはずなのに、マコトは何故か引つかかるような反応をする。あ

りえない、とファニールは思ったのだが、まさか、と違っていつも肌身離さず持つているロケットをいつの間にか着せられていた病衣の胸元を開いて取り出すと、それをあけてマコトに投げた。

「その人！その人が私たちの憧れたアイドルよ！」

「おっとつと……この人が、ファニールさんたちの憧れた……」

ロケットの中にあつた写真をマコトが見た瞬間、蘇つたのは——自らを絶望に叩き落とした自由の担い手——だった。

栗毛色の髪、紫水晶のような瞳。マコトやレイラのように僅かに残る面影。

「キラ・ヤマト……！」

「お、おしい！その人の名前は戸山キララ、っていうの！8年前、忽然と姿を消してからみんな世界が忘れたみたいになつて！」

「どういう、こと？」

簪はどういうことがよくわからない。マコトはそもそも、写真の人物がどう見ても前世で殺したはずの相手に驚愕に襲われている。

「なんであんたは覚えてるの!?!私たちにキララさんを教えてくれた孤児院のママも忘れたのに！」

「忘れるわけない。忘れるはずがない。この人は……」

この人は、なんと言えばいいのだろう、とマコトは思った。

好きだった人の仇？あたしが殺した人？どれも、それらはこの世界に持ち込んではいけないものだった。特に後者はこのタイミングで言えば最悪だった。ファニールは目を輝かせてマコトの言葉を待っている。彼女とてまだ12歳。憧れの人を知る人を見つけてしまえばこうもなつてしまうだろう。

「えっと、この人は」

「この人は!?!」

「興味のないあたしでも、知ってるぐらい有名だから……かな？」  
「なんで疑問形なの!?!でも、よかった！私たち以外に覚えてる人いたんだ！よかったよ〜！」

嬉し泣きしだすファニールに、マコトはそこまでのことなのかと思つた。



同時に疑問も浮かぶ。この写真を見せられて、確かにマコトの中には小さい頃に見た「アイドル キララ」を見たことがある記憶がある。ただ、まだその記憶はもやがかかっていてすっきりとしない。

それも、この写真を見せられるまで、なんとなく、としか思い出せなかった。

「(何かが、おかしい)」

写真の中にいる、キラ・ヤマトと思しき少女からキラのことを除いたとしても明らかにアイドルとしては一度見れば忘れられないほどの可愛さだ。それをこんなまるで「いなかった」かのように忘れることなどありえるのだろうか。

篠ノ之神社という超常の力場を知っている以上、何か、不条理な力がこのキララというアイドルを消したのではと考えてしまう。考えるが、今はもうどうすることもできない。彼女が姿を消したのは8年前なのだ。

「ありがとう、返すね」

「ううん。えっと、飛鳥マコト、あんたのこと、マコトって呼んでも？」

「別にいいよ」

あっさりと名前呼びを許したマコトに簪はちよつとやきもちを焼いて、マコトの制服の袖を掴んだ。マコトはよくわからないので、簪にそのままにさせる。

「じゃあマコト。明日、私たちの部屋に来なさい。私たちが持つてるキララさんのCD、きかせたげる」

「そこまで言ってもらえて嬉しいんだけど、明日ちよつと予定があつて」

「予定？」

「友達がここの編入試験を受けるんだ。それで、午後、実技試験を観戦することになってて」

以前から決まっていたシャルロットの編入試験は明日であり、マコトはそれをいつものメンバーで見に行くことになっていた。そのため、明日は他の予定を入れられずにいる。ファニールはそれならば仕方がないと「じゃあ明後日は」と聞く。

「明後日なら大丈夫だね。あ、よければ友達も連れてきていい?」  
「……それはやめてちょうだい」

ファニールとしてはいたずらに世界から抹消されたキララのこと  
はあえて今は周囲に言おうとは思っていない。芸能界に触れて、大人  
のドロツとしたものを彼女は察していた。だから、迂闊に喋らないほ  
うがいいと考えている。マコトは特例中の特例だった。

マコトも、急に真剣な表情になったファニールに頷くしかない。

「……………それと、そっちの更識さん」

「名前がいい」

「なら簪さん。あなたは今聞いたこと多言しないで。キララさんのこ  
とは特に」

「わかった」

簪はこの奇妙な話に、何か大きなものが関わっていると考える。東  
や千冬の亡国機業との戦いもあったのだ。その消されたアイドルが  
本当に忘れ去られただけとは思えない。最悪の場合は姉やマコトを  
通して束に相談してもいいだろうと思った。

「じゃ、そういうことで。あと、単純にアイドルの私室に誘うっていう  
の、あんまりよくないから、絶対に言わないでよ、明後日のこと」  
「うん、わかったよ」

一先ず、オニールは目を覚ましていないが、4人の試合は完全にこ  
れで終わったのだった。明日、明後日の約束がある以上、4人は残り  
少ない今日を無事に終えていくのだった。

#### —— I S 学園 留学生専用格納庫

「見かけない顔だが、貴官は?」

「レオニー・シューゲル技術中尉です。少佐」

ラウラはタッグマツチの警備が終了後、その日の晩に格納庫で待ち  
合わせ予定だった人部と顔を合わせていた。事前に聞いていた人間  
とは違うが、確かにドイツの軍服に身を包んでいる女性士官だった。  
くすんだ銀髪に、赤い瞳。ラウラとは似ても似つかない容姿ではある  
が、似たような色合いの女性というのは妙に気味が悪かった。まだ、

あのセシリアの一件以降、クロエと関係を構築できていないせいもある。

「機体の輸送には私の部下たちがくる予定だったのだから、変わったのか？」

「はっ。こちらがその指示書になります」

「受け取ろう……確かに、司令部からのものだな」

レオニーを名乗る女性士官から受け取った指令書は確かに本物であった。本来こちらに来るはずだったラウラの副官であり、彼女の「趣味」の師匠であるクラリツサ・ハルフォーフはレオニー・シユーゲルにラウラの専用機輸送の任を代るように書かれている。

「それで、私のレーゲンは？」

これぐらいのことは何もおかしくない、とラウラは思いながらレオニーに目的のものであるラウラの専用機のことを問えば、レオニーは手でこちらです、とラウラの視線をハンガーへと移動させる。

そこには漆黒の、一目で兵器とわかるISがあった。シユヴァルツエア・レーゲン。ラウラの専用機として、ドイツで現在開発中の次期主力機を調整したものだ。

「B装備の上、件の機動力向上システムを装備しております。背部コネクタはスラストユニットに換装、両腕部のプラズマブレードもナックル・ダガーユニットへ換装しています」

「近中距離装備だったか、Bは」

「はい」

実験的な装備から実戦装備に変えるようにボヤいたことはちゃんとして技術部に伝わっていたようだ。とラウラは機体の仕上がりに満足する。レオニーは「詳しいスペックはこちらに」とタブレットを渡す。ラウラはあとで確認すると告げて、レオニーに向き直った。

「中尉はこれからどうするのだ？」

「明日の便でこちらを発つことになっています」

「そうか。了解した。任務ご苦労だった。機体は確かに受領したと伝えてくれ」

「ハッ！」

ラウラはレーゲンに触れ、機体を待機状態にして軍服のポケットに  
しまおうとそのまま格納庫から出ていく。そこにレオニー・シユージェル  
……という名の女性の皮を被った「ナニ」かはただ一人残された。  
「…ええ、ご苦労様、私の体の出来損ない」。今日の「実験」はうま  
くいった。だから、明日は完全になるはず。返してもらおうよ、私の体」  
その言葉を奏でる声はおぞましいものであった。少女のような声  
にも、高慢な男性の声にも、無機質な機械のようにも聞こえる。その  
中には、シャルロットが聞いたものも混ざっていた。

「これは私の計画。『ネスト』のものではない。私のものになった計  
画」

「勝負をしよう、篠ノ之束。どちらが、人類の可能性なのかをね」

## # phase—EX5 「シルバー・エンジェルズ」

——アメリカ合衆国ネバダ州 ネリス空軍基地

その日、基地内にはけたたましく警報が鳴り響いていた。敵襲を報せるものであり、本来は試験場やアクロバット専門部隊が使用するこの基地では鳴らないものだった。そのため、基地内では慌ただしく所属員たちが動き回っており、この基地にてある機体んテストパイロットを任されていたナターシャ・ファイルスもまた、ブリーフィングを行っていた会議室から飛び出していた。

「こんなところに敵襲だなんて!」

艶やかな金髪を揺らしながら、彼女はひた走る。向かう場所は基地の滑走路だ。

『シルバー隊、滑走路に集結後、緊急発進を許可する。ファイルス少尉。長機不在のため、君が隊長代理だ。コールサインはエンジェルズ1だ』

「了解!」

彼女が所属するはアメリカのIS試験小隊であり、現在アメリカが開発中の試作機のうち一機を20になりたてで任されるほどの腕利きだ。国家代表クラスの腕前と美貌・可憐さを備えたそんな彼女だが、実戦経験は——なかった。

「(初めての实戦がこんな急にくるなんて……!)」

基地内の建物から出て、彼女は身に付けていた専用機化されているISを展開する。全身を白銀の装甲が包み、背中には機械仕掛けの天使の羽のようなウイングバインダーが展開する。貴重なフルスキンと呼ばれるタイプのISで、宇宙空間での運用も考慮した現時点におけるインフィニット・ストラトスに最も近い機体。それがナターシャの専用機「銀の福音」。ことシルバリオ・ゴスペルであった。

「(それに、この子を——人との戦いに使うのは……!)」

ナターシャ・ファイルスという女性には世にも珍しい、篠ノ之束の発表した初期論文からインフィニット・ストラトスを正しく外宇宙探査用としてのものだど理解し、そうなってほしいと望む。

ゆえに、人類の隣人となるISを兵器としては扱わず我が子のように可愛がっていた。周囲からは奇特と思われる人物だ。

しかし、だとしても彼女は軍人であり、実際にこうなれば戦場に出るしかない。

「ナターシャー！」

「フレラー！メリダ！いくわよ！」

「了解！」

滑走路には既に彼女の僚機であり、試験時はモニターを担当するフリカアトラの搭乗者二人がISを展開し待機している。銀色のフリカアトラはシルバリオ・ゴスペルの試験小隊「シルバー・エンジェルス小隊」の所属機である証だった。

「エンジェルスよりコマンド・ポストへ、小隊は合流した」

『シルバー隊、確認した。緊急発進せよ』

「シルバー隊、了解。二人とも、いくよ！」

ナターシャが地を蹴り、一気に飛翔する。フリカアトラ二機もゴスペルに追従するため改造が施された機体のため難なく追従する。上空に上がった3機はすぐにナターシャを先頭にアロー・フォーメーションを展開した。

『敵機、南東に4。IFF反応無し。コアナンバー割り出し不可』

「こちらでも視認した。メリダ、解析できる？」

「データベースに照合できる機体はないみたい。でも、熱量からラファール・リヴァイヴかも」

「ラファール？それにしても形状が」

空域に侵入してきた所属不明機は全てで4機であり、ISであった。奇しくも敵はゴスペルと同じフルスキンで搭乗者は伺えず、どこから飛来したものなのかわからない。機体形状はどれも真っ黒で、まるで魔女の箒のような兵装を抱えた、魔法使いのようなもの。

それらは、もしここにわかるモノたち：特にこの場になく本来であれば「最後の機体」である機体の搭乗者、ロゼンタ・デユノアがいれば驚愕の上でその名を呼んだであろう。もう滅んだ亡国機業、実働部隊「モノクローム・アバター」の小隊のうち一つ「ナイト・ガーデン

“の所属機【ブラック・ロータス】と。

「CPへ、これより侵入機に対し警告を行う」

『了解』

「：前方のIS群へ告げる。本空域はアメリカ空軍の管理区域である。所属、空域侵入の理由、搭乗者氏名を述べ、武装解除の上、ただちに降下せよ」

オープンチャンネルでナターシャは呼びかけるが、ブラック・ロータスからの返答はない。箒に跨り、微動だにしない相手の様子はひどく不気味で、ナターシャは嫌な汗が出る。できることならゴスペルの武装を起動したくないそんな気持ちでいっぱいだった。

『シルバー隊、威嚇射撃を許可する。それでも応じない場合は撃墜せよ』

だが、それは叶わない。もうここは戦場になっていた。

「エンジェルス、了解。エンジェルス1より各機へ、前方の所属不明機、右翼より $\alpha 1$ 、 $\alpha 2$ と3、4と呼称する。エンジェルス2と3は $\alpha 1$ 及び $\alpha 4$ へ威嚇射撃を。こちらは中央のものへ行う」

「エンジェルス2、了解」

「エンジェルス3、フレラ、了解！」

僚機からの返答も来て、ナターシャはゴスペルの武装から安全装置を解除する。本来であれば飛び立つ前に外すべきものであったが、彼女の想いが、そのようにさせていた。しかし、それが不幸中の幸いであった。

「っ!?!敵全機から高エネルギー反応!ブレイク!ブレイク!」

ナターシャの右後方を飛んでいたエンジェルス2——メリダ・ウィツシュからの通信によりナターシャは即座にブラック・ロータスたちの正面から外れる。ウィングバインダーに搭載された多数のスタースターによる全力の瞬時加速。ISでありならインフィニット・ストラトスの加速に匹敵するそれはナターシャの命を救った。

刹那、ナターシャたちがいた場所を信じられないような出力と範囲のビームが襲った。いち早く索敵機のため反応したメリダ機は回避に成功したが、反応の遅れたフレラ・アシユフォードは19年間の短

い生涯を走馬灯で見ることなく、その身を光の奔流に溶かされた。

「あぁっ!?フレリアア!」

ナターシャの悲鳴も意味をなさない。ビームが過ぎ去った後、そこにあつたのは、まるで直前までの指示を遂行使用していたフリカアトラが遅すぎるを回避をした直後に、搭乗者死亡により解除され、残された下半身が落ちていく光景だった。

『え、エンジェルス3、K I A』

「ッ!メリダ下がつて!」

「あ、あぁ」

「メリダ!」

「...!う、りよ、了解!」

「CPへ!これより本機は領域支配戦闘を行う!」

『CPよりエンジェルス1へ、司令部へ照会。許可されました』

「安全装置解除、周辺の遊軍機に警報。これより本機は——領域支配戦闘を開始する!」

まるでそれは悲鳴をあげるかのように、シルバリオ・ゴスペルが唸りをあげる。戦いたくはない。だが、戦わなくてはならない。それがナターシャという女性がなさなければならぬこと。

「(ごめんね...ごめんね!こんなこと、君にさせなくちゃいけない!!)」

“彼女”への謝罪は心のそこからものだった。それに対して“彼女”は機体の出力を大きく上げることに応える。ここまで愛してくれるナターシャを生きて還すために。

銀の翼が大きく開き、翼の中に格納された数多のビーム砲が光を宿す。アメリカ軍が核に代わる新たな時代の抑止力となるはずの超兵器が牙を剥く。36連装半誘導ビーム・ランチャー。白騎士の無砲身メガビーム砲を威力以外は再現することに成功した、最強の武装にして唯一の装備。

ブラック・ロータス4機はターゲットであるゴスペルが戦闘形態に入ったことを完全に認識し、全機がゴスペルへと砲身を向ける。これから為されるのがただの蹂躪撃であることも知らずに。



「すう…ナターシャ・ファイルス、シルバリオ・ゴスペル！交戦！」  
こうして、歴史上初となる公にされたIS対ISの戦闘が開始された。

その結果は後退し、観測に回ったメリダ・ウィツシュ少尉（当時）がこのように記している。

まるであれは天使が悪魔を滅するかのような戦いだった、と。

## # p h a s e — 3 5 「ホワイト・テイル」

ロゼンタにその情報が入ったのはネリス基地が襲撃された翌日であった。デュノア社の日本支社で業務を行っていた彼女にスコールから伝えられた。

「冗談はよしなさい。あの子たちは死んだのでしよう」

『間違いないはずよ。織斑千冬によって確実にね』

「じゃあ、そのアメリカを襲った連中はなに？ ゾンビとでも言いたいの？」

『古巣の子が必死になって撃墜したから酷い破損状態だったけど、あれらを動かしていたのはIS学園を襲ったサイレント・ゼフィルスと同じ人形ね。採取された人形についてた脳幹のデータもらったけど、全部あなたの部下のものと一致したわ』

死者を蘇らせ使役する。それはまごうことなき悪であるロゼンタでさえも忌避するものだ。人の心を壊し、操る心理学術的なものではなく、「魔術的」なものにも精通しているロゼンタからすれば禁忌に等しい行為でもあり、彼女は今回の一件の遠因となったことを後悔する。

「連中にユグドラシルの欠片の存在を知られたのは最悪ね」

『…必要だったことよ。でなければあなたはISに乗れなかった』

「そうね。けれど、それが結果的にシエラとシャルロットを危険に晒したわ」

『科学的には行き詰まっていた彼らからすれば私たちが持つ「裏側の理」はさぞ魅力的に映ったに違いないわね。その結果がISコアの核となっているユグドラシルの欠片と人工強化素体を組み合わせたIS人間「ユグドラシル」……守っていた人間が言うのもあれだけど、正直壊してくれてよかったと私は思っているの』

スコールがかつて、世界に仇なす悪党であった頃に防衛任務を請け負った「ソレ」は人類が生み出してしまった狂気そのものだった。鉄の子宮によって生み出された最高の肉体と、星によって育まれた無限のエネルギーを宿す奇跡の鉱石、人類を超えた思考を可能する電

脳。いわば人類の可能性を無限大にしたと言わんばかりの人造人間。生まれたばかりのそれは自らの存在した意味も、自らが創造主よりも優れた存在であることもわからずに、最強の人類と最高の天才によって滅ぼされた。半身を失いながらその現場に居合わせたスコールはその光景を未だに思い出せる。

地球という揺籠の——成層圏の内側であるにもかかわらず、重力から解放された戦い。8年前に見せつけられたそれは気がつけば“魔法”で生にしがみついていたスコールを再び生き返らせるには十分すぎた。

「違わないわね。あんなものが残っていれば世界は更におかしくなっていたもの。していた本人である私が言うのもおかしいけれど」

『気にしたら終わりね、それは』

「でしょうね。：篠ノ之博士は知ってるの？ユグドラシルのこと」

『知らないでI S コアを作っていたみたいよ。まだ本人には伝えてないけれど』

「なに？じゃあ物理的に鉱山から“ユグドラシルの欠片”を切り出してたってこと？」

『そうなるわね』

「無茶苦茶ね。シエラのルーセル家は5代前でそれが失伝して、私の方も同じ。スコールあなたは？」

『私はできるけれど、ダメね。大昔みたいに鉱山からの切り出しをしなくても受け継いでるもののように高純度のエネルギーを宿したものは作れないわ。体が半分機械になって体内の魔力が減ってるのも大きいけど』

「よく生きてるわね。それも欠片のおかげ？」

『ええ。欠片の“正の作用”のおかげね。話を戻すけれど、科学・工学だけで博士は魔力で切り出さないといけない“ユグドラシルの欠片”を作り出してみせた。連中は博士のように作れはしないけれど、コアのブラックボックスをバラして欠片を見つけて利用してる』

「最悪ね」

『最悪よ。今は千冬たちに滅ぼされる前のような“素体”がないから』

人形で済んでいるけれど、手に入れば復活するでしょうね」

「でも、失敗作って呼ばれてた素体のうち2人は博士たちが回収して家族にしたのでしょうか？それに手を出すほど馬鹿だとは思わないわ」

『ええ——普通の人間ならね』

人間であれば、一度自らを滅した存在のことは怖れ、二度と近づくことはないだろう。だが、もし、＼ソレ＼が人間ではないのであれば……。

『私はね、アレが8年前の戦いで終わったとは思っていないのよ。兵器、核、ISにしてもそう。人類は生み出したものは易々と人類の想像を超える。＼ユグドラシル＼も同じ……私たちは向き合わなくてはならないのよ。私たち自身が生み出し、この世界の＼歪み＼と』

タッグマツチの翌日、シャルロットの編入試験は予定通り行われることとなった。午前中は学科試験を受け、午後からは実技試験というスケジュールになっており、これまでのラウラによる授業でシャルロットはこの人生で一番勉強をしたという自負があり、自信に満ち溢れていた。

「一夏！私、やるよ！」

「おう！頑張れよ！」

朝、起きて早々にシャルロットが一夏にそう言ったのはどこかフラグっぽいとラウラは寝ぼけ眼で見っていた。徐々に学園に慣れてきたシャルロットの素が見え始めると一夏とシャルロットの仲は急速に縮まっていた。何かと事故で裸体を見たり、暴走して生乳を見せたり、背後から胸を掴んだり、ということがあったにもかかわらずだ。『…はしやぎすぎて間違えないようにな』

「大丈夫だって、ラウラ。この一ヶ月、ラウラのおかげで対策はバツチりだからさ」

「そうか」

能天気な笑顔はシャルロット本来の表情だが、ラウラは無性に彼女が心配になる。一夏はまあ大丈夫だろうと不安は感じていない。努力すれば結果はついてくる、と一夏は信じてやまないため、シャル

ロットが必死に頑張っていた姿からよほどのことがない限り不合格にはならないだろうと考えていた。

「そういえばシャルロットのお母さんとかは午後観に来ないのか?」

「実技を? 母さんは今日、用事があるみたいだし、ロゼンタさんも外せない会議で来れないって。ビデオレターは昨日の晩にもらってるけどね」

「へえ、お父さんは?」

「父さんもだね。母さんはともかく、父さんとロゼンタさんは昔から忙しかったから、そういうの多いんだ」

一夏は両親がいないため、普通の家族とはそういうものなのだろうかと思っただが、これはシャルロットがかなり愛されているからこそのものであった。ラウラに関しては定期的に千冬から手紙がきていたので、なんとなくシャルロットの気持ちかわかる気がした。

「そうだ、忘れ物がないか確認しないと」

「その前に朝飯はいいのか?」

「今日は一人で先に食べに行こうかなって。集中したいし」

「そういうの大事だよな。わかる」

異常な精神統一と一緒にされるのはちよつと遠慮願いたいシャルロットだったが、あははと笑い流すだけにとどめる。なお、ラウラはどちらかという和一夏のほうに理解があるのでうんうん、と頷いていた。

シャルロットは話しながらもバックに筆記用具などを詰めていく。テストは普段の教室ではなく、平時は進路相談室として使われる小部屋で行われるため荷物を持っていく必要があった。

「シャーペンと消しゴム、替え芯もあるね。あと、電卓…最後にこの一夏特性の鉛筆」

「なんだそれは?」

「試験の最終兵器だぜ、ラウラ」

まさかカンニングでも、とラウラはシャルロットの手に握られている鉛筆を凝視するが、よく見るとそれは端部が削られて、削られた部分に数字が書かれていた。何かの符号かと考えたがそうではなかつ

た。

「試験はマークシートだからさ、鉛筆で作ったサイコロで神頼みするんだよ」

「ありがと、一夏。私、結構迷って時間食っちゃうタイプだから助かるよ」

「お前たちは何を言っているんだ」

ラウラはルームメイトたちが何を言っているのか理解不能であった。一夏もシャルロットもそんな反応を見せるラウラを気にしないことにした。

「他になんか忘れ物ないか？」

「ラファールは今朝から本音さんに整備してもらってるから大丈夫だし、これ以上はないかな」

準備が整い、シャルロットはバックを背負うと制服姿で部屋から出ようとする。

「それじゃあ、行ってくるね、ラウラ、一夏」

「ああ！午後、観に行くからな！」

「うん！待ってるよ！」

「…油断はするなよ。期待している」

「ありがと、ラウラ！」

手を振って出ていくシャルロットを二人は見送る。一夏の髪の毛が切られた夜から一ヶ月。シャルロット・デュノアという少女がわかってきた一夏は彼女の裏表のない素直な笑顔が眩しく、まだ箒や束がいた頃の時や鈴音が来てから過ごした日々を思い出してしまう。ISなんて力に触れず、無邪気に、世界のことなど知らずに済んでいたあのときが異様なまでに眩しかった。

「……一夏？」

「え？なんだ？」

「いや…妙に顔が、教官がたまにする顔をしていたから」

「そりゃ姉弟だからな」

思わずラウラを撫でてしまうがラウラは不思議と嫌がらず、彼女自身、どこか胸が暖かくなる。それは千冬にそうしてもらったときと全

く同じ感覚であった。

セシリアとの戦いで得た「力」は一夏の中にある「力」に対する悩みをより強くしてしまった。剣を振るっている時はただ斬ればわかると、邪念を振り払っているが、こうしてその場を離れればいつでも彼の心は「何のために力を振るうのか」という悩みが巻きついてくる。

姉は「正義の味方」だったと言った。ならば、同じくその剣を振るう自分はなんなのだろうと。なんのために剣を振るい、なんのために勝利を得るのか。

マコトや箒にはそれがあるのだろうか——一夏は聞いてみたかったが、これは自らが見つけ出すべきものだと思って聞けないでいる。けれど、家族という枠組みにいるラウラにはそんな気持ちがおぼれてしまった。

「なあ、ラウラ。なんでお前はISに乗ってるんだ」

「いきなりどうした？そんなことを聞いて」

「いや、なんとなく」

「なんとなく聞かれても困るが…そうだな。今の私は軍人だ。軍人の務めは国民の命を守ることであり、その手段としてISがある。それだけのことだ」

「つまりは、国の人を守るためってことか」

「そうなるな。…だが、お前が聞きたいのはそういうことじゃないのだろう」

ラウラは一夏の表情を見てそう言った。彼女は内心、わかりやすい人だと思った。一夏の表情はラウラの言葉を咀嚼していなかった。

「なんか、千冬姉みたいだぞ、ラウラ」

「それはそれで光栄だな。なら一つ、教官のように言ってやろう——悩むなよ」

悩むな。元も子もない言葉だった。しかし、一夏はそうだな、と頷く。

「いつか、そのうち、剣を振るっていれば見えてくるものもある。それが善なるものか邪なものかは剣が決める」

「なんだそれは？」

「昔、俺と千冬姉が剣を習った筈の父さんが言ってたことだよ。どうしたら師範みたいになれるのか聞いたら、そう言われた」

「要約するとどういう意味なんだ？」

「人生ずつと修行中ってことだと思ってるよ、俺は。だから、悩んで足踏みしてる時間があつたら剣を振って、振るい続ければいいんだろくな」

そうして辿り着いた者たちが一夏には側にいる。千冬も、箒も、我武者羅に剣を振り続けて、それぞれが一つの通過点としての境地に至っている。それぞれがそこで得たものが何かはわからない。

「未来はずつと白紙、というやつだな。うん。教官の教官、言いことを言うじやないか」

一夏はラウラの言葉に肯く。まだ、一夏は何にも至れていない。それは現状への絶望ではなく、希望となる。ここから先の未来は何もわからない。霧に閉ざされているわけではなく、可能性という光に溢れているのだ。

彼の腕にある“白式”もそんな未来を描くために幼馴染の女性が生み出したもので、流されてきたとしても、完全に激流に吞まれているわけではない。彼は荒狂う川の上を船で降りてきているのだ。

「うっし。俺たちも準備したらランニングして、飯食いにいこうぜ」

「了解だ。箒も誘うか？」

「もちろん」

気分を入れ替え、一夏も今日という1日を過ごすための準備に入っていた。

一方、朝早々にレイラを電話で呼び出し、部屋にはネグリジエ姿のレイラがいた。

「ん……マコト、こんな朝早くから……どうしたのですか？」

「ごめん、レイラ。ちよつと出来るだけ早く話したいことがあってさ」

「まあ……あなたの呼び出しなら別にいつでも応えますが」

可愛らしいお姫様が目覚めたばかりのぽけつとした様子で凄まじ



い言葉を言っていることに簪は白目を剥きそうになる。そして、通信で空間投影ディスプレイに顔を出していた束は白目を向いていた。

「それにしても、レイラの寝巻き初めて見た気がするけどなんかすごいね。お姫様って感じる」

「ありがとうございますマコト。あなたは…昔とさほど変わらないです」

「そう?」

「ええ。納得ですが」

スウェット姿で髪がボサボサなマコトを見ているとレイラは目の前にシンがいるようで少し懐かしく、愛おしかった。こうして穏やかな朝を共に迎えることは前世ではついぞなかったのだ。

マコトとレイラのそんな様子に恋する少女の二人は非常に危機感を募らせる。その気がレイラにないとわかっていても、何がキツカケに「墮ちる」かわからないからだ。現に、校内ではマコトとレイラの様子が長年連れ添った恋人のようだと僅かながら噂になっている。

「それで?こんな朝に、しかもわざわざ博士まで通信で呼び出しをしたということは尋常ではないことなのでしょう?教えてください、マコト」

壁に寄りかかり、腕を組むレイラはマコトからすればレイそのもので、真剣なのだと伝わってくる。そうとわかればマコトは腰掛けていたベッドから立ち上がって、3人に向かって口を開いた。

「レイラと束姉さんはわかると思うけど…この世界に、キラ・ヤマトがいた」

「なんだと!?!」

キラ・ヤマト。その名が語られた瞬間、簪や束が聞いたことのない口調でレイラが声を上げ、マコトに駆け寄った。

「本気で言っているのか!?!」

「お、落ち着いて!レイラ!」

「あいつはお前を殺したんだぞ!何故そこまで落ち着いていられる!」

「っ…そういう意味なら、レイが仇を討ってくれただろ!?!それで終

わったんだよ！」

「……………それは……………いえ、すいません。取り乱しました」

初めて簪と束に見せるシンとレイとしての姿に、簪は目を見開いて、束は目を伏せた。熾烈な世界を生きてきたんだと改めて理解した簪と、思い出して欲しくなかったと思っていた束の差が直視するか否かを分けていた。

「わかってくれたなら、いいよ」

「ええ。もう、終わったのですから。この世界にまで持ち込む必要はない、そうですね」

自らに言い聞かせるようにレイラは言ってマコトから離れる。

「ごめん、話に割っちゃうけど……………そのキラ・ヤマトって人が…マコトさんを？」

「…そうだよ、簪さん。あたしはその人と戦って死んだんだ」

決してマコトは殺されたとは言わない。最期には本当は分かり合えたはずだと、そう思えたから。簪はそれを聞いて、これ以上は聞かないと決めた。もう当人の中では終わった話なのだ。たとえば、その人がこの世界にきていたとしても。

『まーちゃん…大丈夫？』

「大丈夫だよ。束姉さん。それに、束姉さんがキツカケであたし振り切れたんだから、それを束姉さんが言う？」

『…それもそっか』

隠しきれない喜色が束の笑顔に滲み出ていた。

レイラは冷静になってから今この部屋は地雷原の真っ只中だと思いついた。仕方がないとはいえ、同時に二人の女性にそんな顔をさせているマコトはあまりにも罪深すぎる。

「(本当にいつか刺されないといいのですが)」

割と本気でレイラはマコトの身を案じたが、それを表に出すとあまりに危険なので表面上はただただくすりと笑っているだけにした。

「それで、話を戻すと、正確にはあたしやレイラみたいに女の子としてこの世界で生きてみたいんだよね」

『生きてた？…過去形ってことはまーちゃん、その人死んだの？』

「ううん。生死不明が正しいかな。なんでも、8年前に姿を消してみんなから忘れ去られたみたいなんだよね」

そこからマコトは他言無用とされたがファニールの語っていた内容を簪には改めて、レイラと束には初めて説明する。アイドルとして彼女が活動して世界的なスターとなっていたこと、それがある日突然姿を消し、世界中から記憶が消されたこと。

話を聞いた反応を返したのはまずレイラからだった。

「にわかには信じ難い話です。アイドル、戸山キララ：今マコトに言われて私も臆げに思い出しましたが、これまで気にもしませんでした。確かにおかしい。本国でそのような資料も見ることがありません」

「でしょ？ありえないよね。まるで魔法みたい」

「博士のご実家のこともありますし……そうだ、これも他言無用とされていますが、シエラ先生は“魔法”が使えました。そう考えるとありえなくはないかもしれません」

「ま、魔法……？」

簪が思わず声を出して驚き、レイラはシエラが不可思議な力で一夏を直したことを伝える。

「そんなことがあったの？」

「ええ。博士が危惧した真なる回帰を使った一夏さんは体が耐えきれず死にかけてたところを蘇生してもらいました」

『束さんは知ってたけどあんすごい力だと思ってなかったし、それに……』

「束姉さん？」

『あ、ううん。それに、そういう力があるってわかってるから、その戸山キララが消えたのもそういう類の力かもね。今思い出せるのは“魔法”の効力が弱まってるとか何かあると思うよ』

束はファニールが8年前に周囲に話しをしても今のマコトたちのように思い出せないのは、当時は術の効力が強かったからだと推測する。

『それにしても、その双子はいい判断してるね。もし世間にこれを

言ってたら彼女たち消されてただろうし』

「十分に考えられることです。それにしても、戸山キララ：キラ・ヤマトが消えた理由がわかりません。私たちの例を見るに、彼女は这个世界でスーパードーデインイターというわけでもないでしょうし」

マコトはレイラの言葉に頷く。写真で見たキララの容姿は確かに前世のラクスなどにも劣らぬものであったが、この世界ではそこまでのドーデインイト技術は民間に出していない。もしかしたら彼女がその第一号という可能性もなくはないが、そうだとしてもあの写真にあった笑顔はとて、作られたものではない、彼女自身のものに思えた。

『うーん。東さんでもわかんないのはちよいつと気持ちが悪いね。ただのアイドル拉致って身代金も請求するまでもなくみんなの記憶から消しても人体実験の素材にしかならないと思うけど』

「うえ…」

平然と人体実験と言い出した東に簪は涙目になる。だが、マコトとレイラは可能性としてはそれもなくはないと思っただ。

「東姉さん。千冬さんと一緒に戦った『亡国機業』はそういうこともしていたんでしょ？」

『そーだよ。クーちゃんアレはその生き残り。本当は消すつもりだったけど、ちーちゃんが私のこと止めてね』

さらりと言われたが、あれだけクロエを愛している東が彼女を殺すつもりだったことに3人は息を呑む。篠ノ之東は庇護下に置いたものや愛している相手、仲間となった人物たちの前では無邪気で、少女と大人の女性が同居している不可思議な人物だが、そうでないもの前ではどこまで冷酷で冷徹な人間だ。

「……戦っている際、それらしき話を聞いたことはありませんか？博士」

『ないね。時期的にぶつ潰し始める前、というか直前に起こってたっぽいし、そのときは連中潰すために世間のこと全然見てなかったから』

故に、興味がないことには徹底的に知識がない。東は素でアイドル

戸山キララのことを知らなかった。剣一筋な家庭環境的に知る機会がなかったのもあるが。

「そうなんだ。けど、こんなおかしなことするの、そいつら以外にありえなさそう」

『そうだねえ。他にやりそうな連中って亡国のやつらにほぼ吸収されきってたし、まさに世界の闇を濃縮還元した感じの組織だったから、アレ以外はないと思うよ』

「なるほど。となれば…生存の確率は薄いですね」

レイラは容赦無くそう言い切った。もともと、不倶戴天の敵であったのも大きい。それに加えて、この世界ではアイドルになっていくということが改めて考えればなんの冗談だとレイラは滑稽にさえ思った。あの力だけになった男が今更言葉で何をしようとしていたのか。その果てが何者かに存在ごと消されて、なかったことにされた。レイラは当然の報いとも思った。

『ひえー、れーちゃんヤンデレかよ…』

レイラは完璧に隠しているつもりだったが束はその心情を見抜いていた。目元が明らかに暗くなって、美少女が昏い雰囲気を出している嫌でもわかる。簪も同じくレイラの恐しい雰囲気には圧されていた。

キラに殺された本人であるマコトとはいえ、レイラとは逆にどうすることもできないとはいえ「戸山キララ」のことが気がかりだった。ファニールの様子を見れば、そこまで人に愛される人物が世界の闇に呑まれてしまうことが許し難かった。救えるのであれば、救いたいとまで考えてしまう。

「(どうしてあなたは…そこまで優しいのですか?)」

レイラは親友の気持ちを察して、そのように心の中で問いかけた。言い聞かせても、レイラの中で憎悪はまだ残っている。あの世界のことは持ち込まないと決めていても、この地に生きると決めたレイラ・デュランダルとは違って、レイ・ザ・バレルの残痕は未だ燻り続ける。

「(ああ、でも、そんな優しいあなたを…私は「殺した」のですね)」  
それと同時に、罪悪感もまたあった。何度も、何度も、目の前の親

友を壊した事実がレイラを苦しめる。その苦しみは決して、マコトに悟られて救われてはいけない。キラ・ヤマトへ憎しみを向ける資格など、あるのだろうか？レイラはどこか遠い気持ちになる。

「…えっと、それで、マコトさん？その、キララさんのことを今日は二人に伝えたかった、それだけなの？」

「そうだよ、簪さん。いろいろ思うところはあるけど、二人には教えたほうがいいかなって」

『うーん、とりあえず、まーちゃんがせつかく教えてくれたし、私も動こうかな』

「いいの？東姉さん」

『もちろん！頼れる東お姉さんにお任せあれ！双子ちゃんの記憶に残ったってことは世界のどこかには戸山キララの痕跡が残ってるはずだから探してみるよ』

「ありがとー！」

「ふふん！もつと頼っていいよー！」

胸を張る東に、簪は自身の胸をちらりと見て、負けたような気分になる。束と比較してしまっただけで、簪も一般的な胸囲と比べると十二分なサイズで、直接触れさせたという点では簪の勝ちだった。

「はあ。とりあえず、お話はこれで終わりでしょうか？」

「うん。ほんとごめんね、朝早く」

「いいですよ。…と言いましたが、やはり多少はお返しを頂きましょうか」

「ええ!？」

場の空気が穏やかなものに切り替わり、レイラも一先ずは抱えた感情を仕舞い込んで普段通りに振る舞う。たまには修羅場に付き合わせられる仕返しをしてもいいだろうとレイラはマコトに微笑みながらそう言ったのだった。

シャルロットの編入試験はつつなく午前中の日程を終え、午後の部に移っていた。午後の実技試験は校内のアリーナで行われ、マコトを初めとしたいつものメンバーが観戦に訪れていた。正確には今回の

試験のことを知っているものたちだけだが。

今回の試験の試験監督は真耶が務めているらしく、千冬はマコトたちと同じ観客席にいた。その理由は、この実技試験の試験官がラウラだからだった。

「それにしても千冬姉、なんでラウラが試験をやるんだ？」

「学園からの指示だ。教員よりも現役の軍人のほうがいいだろうとな」

「そういうもんなの？」

「ああ。こういうのもなんだが、ラウラはなんだかんだと言ってもプロフェッショナルだ。少佐という階級も伊達ではない」

千冬の説明に、その通りですね、とレイラが補足する。

「ドイツ軍は積極的にISを軍に配備しています。EOSもです。過去にはEU内で軍事演習も行なっていますが、ドイツ軍は通常兵器との併用も上手です」

そのような国の代表候補生で、1部隊を預かるラウラの実力は推してはかるべきだとレイラは言う。一夏を始めその場にいる全員が納得する。普段はちみっこくちよつと偉そうだが、物わかりが良かったため1組の本音に続くマスコット感があつたのは誰も否定しない。

「…シャルロットさんのISは本音が今回整備してる」

「え、そうなの？ 簪さん」

「うん。お願いされたんだって」

簪は本音からシャルロットのISの整備を請け負ったことを聞いていた。ラウラと一夏はシャルロットから直接聞いていたので既に知っていた。この場に一夏は本音にそんな一面があることに聞いた時とても驚いた。普段は穏やかな本音が精密な機械を弄っている姿が全く想像できないのだ。

「(更識家の作業員として最低限の整備技能はあるのですね)」

ただし、本音の事情を知るレイラは納得の人選だと思った。なにより、拙かったとはいえ夜間で嵐の中、ビットもどきを苦もなく操っていたのだから、もしかしたら既に整備課の生徒以上にISのことは知っているかもしれないとレイラは思った。

「それにしても、シャルロットさん、学科のほうは大丈夫だったので  
しょうか？」

セシリアの心配する言葉に午前中の試験監督と採点を任されていた千冬は反応をしたかったが我慢する。ここにはラウラの保護者としてきているが喋ってはいけないことは喋らない。

「まあ大丈夫だろ、セシリア。ラウラにみっちり教えてもらってたし」  
「だいいいのですが」

「楽観的すぎないか？」

「それぐらいがちょうどいいと思うぜ、箒」

「……まあ、そうだな」

どうにもフラグではないか？と箒は考えたが当人たちがそう言うのであればと強引に納得した。

「む、そろそろだな…出てきたぞ」

千冬が時計を見てそう言った直後、アリーナ内にオレンジ色が特徴的なシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムが現れる。現行量産機の専用機でオレンジといえば、どうにもマコトは前世で失った上司であるハイネ・ヴェステンフルスのことが過ったが、彼女は全く似ても似つかない。

「授業で数度見てはいますが、一般仕様機とあまり変化はなさそうですわね。せいぜい、股間部の補給用コネクタぐらいでしょうか」

「セシリアの言う通りだな。授業の補足になるが、デュノアの機体は一応デュノア社のカタログ載っているものの一つだな。といっても現行機と誤差の範囲のようだが」

何かと専用機や特殊な機体に乗っているマコトたちの中ではシャルロットは唯一量産機を専用機としてカスタマイズした機体に乗っている。その点は簪にとつてちよつとロマンだなと思った。打鉄二式はラファール・リヴァイヴ・カスタムと比べれば別機体となつてしまっているがゆくゆくは次期量産機となる予定で、簪はこの試験をよく見ようと思った。

しばらく、シャルロットが滞空しているが、反対側のピットから出てくるはずのラウラがなかなか出てこないことに全員が気がついた。



「おかしいな。機材トラブルか?……山田くん、Bピットの管制室に通信を頼む」

『わかりました。Bピット聞こえますか?ボーデヴィツヒさ』

真耶が呼びかけたその瞬間、Bピットと呼ばれたピットのアリーナ内に迫り出しているカタパルトデッキの口から爆炎が吹き出した。

『せ、先輩!B側のピットが!』

「事故か……?とりあえず君はそのまま待機。一夏、お前たちもその場で待機だ。デユノア!貴様もそこで待機!いいな!」

『はい!先生!』

千冬は生徒たちに待機を命じて、Bピットに向かおうとするが、動き出そうと瞬間にその場で固まる。爆発もそうだが、ここまでピタリと動きを止めた千冬の姿にマコトたちは驚いた。

駆け出そうとしていた千冬はその姿勢を正し、Bピットから吹き出す黒煙へと顔を向ける。

「ち、千冬姉!?どうしたんだよ!?ラウラのところに行かないと」

「一夏」

「え?」

「貸せ」

顔を向けず、千冬が一夏にそう言った瞬間——白式のガントレットが突如、光を発して解け、粒子となって千冬へと移動する。その場にいた全員が目を疑った。ISにそのような機能はないはずだった。

「管理者権限で起動」

千冬の周囲を浮遊する粒子は彼女の全身を包み、すぐに弾けた。

光がはじけて、そこに立っていたのはスーツ姿のIS学園教師、織斑千冬ではなく、機械仕掛けの白い鎧を纏い、黒騎士とよく似た……否、黒騎士がよく似ているシルエットをした騎士だった。

マコトを除く、全員が絶句する。それは皆が知っている。世界初のインフィニット・ストラトスであり、完成された唯一のインフィニット・ストラトス。宇宙を人類が自由に羽ばたく無限の成層圏とした、ヒトの可能性は無限大だと証明するための翼。

インフィニット・ストラトス1号機。愛称は“白騎士”。

「…誰だ。姿を現せ」

底冷えする、その容姿とは真逆の声音を千冬は発する。その声に呼応し、ソレは姿を現した。

「やだなあ、教官。私ですよ、私」

爆炎の中から飛び出してきたのはラウラの皮をかぶった、何かだった。声も容姿も、全てがラウラ・ボーデヴィツヒ。搭乗する機体も漆黒のI.S。シユヴァルツェア・レーゲン。レイラも念のために一部起動したダイヴトウ・ブルーで確認するがIFFはドイツ軍であり、機体名も正常に表示されている。

だが、千冬の視界に表示されたものは違っていた。

「貴様、ラウラに何をした」

「だからあ、私はラウラ」

「その顔で、その声で、その名を言うな。貴様はなんだ？」

音もなく、千冬の手には白式の装備であるはずの雪片二型が展開され、いきなり零落白夜が起動する。無限のエネルギーを持つ白騎士ではこれが常時展開される。

ラウラのようなソレは千冬の手を叩きつけてくひひ、と不気味な笑いを浮かべながら、正体を曝け出した。

「余裕がないね…だから君は正義の味方にもなれないのさ、織斑千冬」  
超然とした、薄い笑みを浮かべたソレは間違いなくラウラとは別の何かであった。

「私はユグドラシル。かつて君と、君の友人に殺された者だよ。覚えていないかい？」

千冬を除く全員が何を言っているんだと呆然とする。

「馬鹿な。確かに貴様は私たちが滅したはずだ」

「私もそう思ったよ。しかし、I.Sコアをベースに作成された私の意識は器を失ったことでコアネットワークに流れたのさ。もちろん、そのままでは代わりの体を手に入れるのも難しかったのだけけどね」

「なら貴様はあの時戦ったものと同じ存在ということか」

「その通りだとも」

「そうか。なるほど。ならばもう一度お前を殺せばいい。そういうこ

とだな？」

「出来るかな？人間風情が」

「できるとも。私は人間ではないからな」

千冬が零落白夜でアリーナのバリアをIS一機分ほど切り開くと、彼女はふわりと浮いてアリーナの中に侵入する。

「ち、千冬姉！」

なんとか、一夏が声をあげる。だが、千冬から返って来る言葉はない。

「やつらに手は出すな」

「出さないとも。この体が戻った以上、わざわざただの人間に構うほど私は暇じゃないんだ」

「そうか。それはいいことを聞いた」

千冬が「構えた」。場の空気がまるで、絶対零度に達したかのように感じられる。

「これ、は……なんて、殺意……！」

「これが、世界最強の本気……!?!」

意志を感じられるセシリアとレイラはモロにこの千冬の剣気に呑まれる。生きていることさえ許されない。そんな絶界にアリーナ内が変わったようだった。

「うっ……千冬姉、ラウラをやるつもりなのか……！」

「あれは本気だ……わかるだろう、一夏！」

一夏と箒は久しく感じていなかった千冬の本気の迫力に座っているにもかかわらず膝をつきそうになる。ラウラの体に乗っ取ったソレを千冬はラウラごと殺すつもりだとわかった。

「マコト、さん」

「簪さん、しつかりしてー！」

簪は耐えきれず、マコトに倒れかかる。マコトでさえも、ここまでの壮絶な気迫は受けたことがなかった。千冬が白騎士を纏うのは何度も見てきたが、彼女の戦士としての姿をマコトは知らなかった。ここまでのものなのか、とマコトは千冬が隔絶した存在だと再認識した。

『デュノアさん！後退してください！』

「は、はい！」

シャルロットは気絶しかけるほどだったが、なんとか真耶の一言で耐えて、アリーナ内からピットに逃げこむ。こうして、アリーナ内に残されたのは白騎士とユグドラシルだけになった。

『ちーちゃん！大丈夫——』

「束。白騎士の単一機能を解放する」

『ッ!?ち、ちーちゃん、それは』

「お前もわかっているのだろうか？私の目の前にいる存在を」

『……………わかった』

「頼む」

束との通信はそこまでで、次の瞬間には千冬の視界に普段は白騎士が表示させていないコンソール類が表示されていく。

「何をやる気だい?」

「元々は貴様らのものとはいえ、家族の体を使えば多少の躊躇はすると思っっているのか?貴様は」

「それが人間ではないのかい?」

「言っただろう。私は——人間ではないと。貴様らと同じだと」

白騎士が青白い光を纏い、千冬の視界には白騎士からいつも、一夏にそうしていたかのように呼びかけがくる。

——単一機能の使用を許可。

零落白夜。それは本来「暮桜」に発現した、迷っていた頃の千冬が迷いを断ち切りたいという想いで剣を振り続けた末に得た力だ。その力は今、白式へと受け継がれ、同じく彼女の弟の迷いを振り切るために振るわれている。

しかし、単一機能を初めて発現した機体がなんであるかといえば、白騎士他ならない。稼働時間は他のISなど大きく引き離し、また、本当の殺し合いという強く想いが溢れる世界を生き抜いた白騎士は千冬のために、一つの単一機能を生み出した。

「<sup>ホ</sup>御<sup>フ</sup>伽<sup>イ</sup>嘶<sup>ト</sup>の果ては<sup>テ</sup>白<sup>イ</sup>紙<sup>ル</sup>」起動」

余裕の表情を浮かべていたユグドラシルはゾクりと、濃密な死の気

配を感じた。彼女は思い出す。8年前、細切れにされたあの瞬間を。「そうか、それが、君たちの切り札。そして、私を殺した力か!」  
「お前はISコアがベースと言ったな。だから、コイツは白騎士それを8年前理解した瞬間にこれを生み出した。特殊な製法でしか切り出せず、整形できず、どんなものでも破壊できないコアを破壊するための力」  
「わざわざ説明をありがとう。ただ、当たらなければどうということはないよ」

ユグドラシルもようやく構える。シユヴァルツエア・レーゲンはそのままの装備で、両腕に固定装備されたビーム・ナックル・ダガーが起動する。そのビームは青白く高出力化されている。リミッターが解除されている証拠だった。

「君を倒すことは私の存在意義、しいては人類の可能性を無限大にできる」と証明できる」

「貴様をもう一度殺すことで、私たちはどこまでも飛べることを証明できる」

8年の時を経て、視線が交わった。

「ユグドラシル、行く——!」

「白騎士、貴様の全て、もう一度出し切ってみせろッ!」

かつて世界を救った日が、再演される。それをただ、マコトたちは見ていることしかできなかつた。今は、この瞬間だけは。

## # p h a s e — 3 6 「可能性への飛翔」

——Bピット爆破の数分前、ラウラは機体の最終チェックを終えて出撃準備に入っていた。今回彼女の搭乗するシュヴァルツエア・レーゲンは第三代機、つまりはイメージインターフェース兵装を持つ次世代機であったが、現在その目玉であるアクティヴ・イナーシャル・キャンセラー、通称A I Cと呼ばれる装備が排除され、実質現行I Sと変わらない、第二世代機に準じたものとなっている。

ラウラはそもそも信頼性のないどころか、戦闘ではまとも使用できないA I Cを嫌っていたため、A I Cがまともに完成を見るまでこの装備をレーゲンに適応してほしかったので、今回の仕様に不満はなかった。

「ふむ。ビーム・ナックル・ダガーと言ったか。中距離まではビーム・ガンとして使用し、白兵戦ではビーム刃を展開してサーベルモード、ナックルモードに可変可能と」

両腕に固定装備された新型装備はドイツ軍の次期量産機用装備として開発されたもので、格闘戦と得意とするラウラにはうってつけな装備である。また、射撃戦にも対応可能と汎用性も高い。家族であり、師でもある千冬は確かに公式戦などでブレードのみで全てをなぎ倒したが、ドイツへ強制的連れてこられ教官をさせられた際には射撃武装も使用してラウラたちをこてんぱんにしている。

「教官も中距離ではライフルを使っていた。射撃戦から流れるような格闘戦に移るにはもってこいだな。敵がラファールであればこれだけでも十二分だろう」

今回、ラウラが相手をするシャルロットの機体はラファール・リヴァイヴであり、中距離戦を得意とする汎用機だ。加えて、ルームメイトであるシャルロットから彼女の得意とする戦法も聞いている。少々ズルくもあるが、試験である以上は教官役として、シャルロットの全てを引き出さなくてはならない。

千冬からもそのように言われており、ラウラはドイツ軍の一部隊を預かる少佐としてシャルロットの前に立とうと考えていた。

「さて、そろそろ出るとしよう。いつもであれば先にネーナたちを送り出すから、一人で出るのは新鮮だな」

幼いながら部隊長を務めるラウラは非対称戦において前線での戦闘機会がそう多くはない。大抵は部隊員のヴァイスヴィント、軍用EOSが前線を張るため、支援射撃を行うことがほとんどだ。

だが、今回はそういったことはなく、普段であれば機体右舷に装備されている大型のレール・キャノンが小型の迎撃用ショットガンに変更されている。

『カタパルト システム オンライン―機体認証― シュヴァルツェア・レーゲン』

Bピットは管制員がいないため、ラウラが遠隔操作によりカタパルトデッキのシステムを立ち上げ、AIによる音声ガイドがデッキ内に反響する。一人での出撃は寂しくもあるが、アリーナに出ればクラスメイトやルームメイトが待っている。部隊員ではなく、人生で初めてできた友達。うまく言葉には表せないが、ラウラはとてもそれが心地よかった。今なら、部下のクラリツサと共にプレイをしたギャルゲの悪友ポジの良さがわかる気がラウラはした。

準備は整った、とラウラはカタパルトに機体を寄せようとしたしたが、その直前、緊急の通信が入ってくる。発信先は彼女の率いる部隊からであった。

「なんだ…？コアネットワークでの緊急通信…？ラウラ・ボーデヴィッツヒだ。誰だ？」

『少佐！やつと繋がった！…ご無事ですか！？』

通信をかけてきたのはラウラの隊の副官であるクラリツサ・ハルフオーフであった。遠いため音声のみであるが、明らかに声音が普通ではない。

「クラリツサか？急にどうしたというのだ。それに、その焦りようは」  
『レオニー・シューゲルは敵です！彼女は今どこに！？』

「シューゲル技術中尉が敵？何を言っているんだ？それに彼女なら今朝飛行機に」

『うちの司令が彼女に殺されたんですよ！しかも、白昼堂々！』

クラリツサの言葉に、ラウラは一先ず混乱するのは後回しにして、伝えられた言葉を咀嚼する。スパイがIS部隊の司令官を殺害した、ということになるのか。

「そんな一大事が起きれば私に通信がくるはずだが、どういうことだ」  
『ついでに基地もやられたんです！ようやく今軍本隊と合流して、基地を奪還したところで』

「待て、待ってくれ。基地が壊滅？奪還？クラリツサ、何が起きたんだ。ネーナたちは大丈夫か!？」

『私たちの隊は全員無事ですが…ヴァイス・ハーゼ隊は全滅しました…』

「やつらは精鋭だぞ!?それにISがやられたのか!?何にやられた!」

『数年前にアメリカから奪取された“アラクネ”数機にやられました。ただ、その搭乗者は全て機械人形で…』

「機械人形だと…!?まさかそれは、マコトたちの言っていた——」

驚愕と混乱が脳を埋め尽くす中、ラウラはこの国にきてこつそりとい夏やマコト、クラスメイトたちから聞いたクラス代表戦での一件を思い出し、学園を襲った同一犯ではないかと考える。そして、その手引きをしていたのがラウラの前に現れた女性、レオニー・シューゲルだというのなら。

『ふふ、君はいい道化だったよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

「ツ!?誰だ!？」

クラリツサとの通信が突如遮断され、レーゲンが操作不能になる。網膜投影には「ユグドラシル・ドライブ起動」と表示される。なぜ勝手に追加システムが起動するのか、ラウラは理解不能だった。何より、この声は誰なのか。

ラウラ自身にもよく似ていて、男の声も混ざり、つい一昨日聞いた女の声も混じっている。

『おや、それもわからないのかい？ユグドラシル99』

「ユグドラシル、99?なんだそれは」

『君の本当の名前だよ。と共にまさか生き延びているとはね。おかげで、あんな粗悪な模造品<sup>レオニー・シューゲル</sup>なんてものを無駄に作らなくてはならなかつ



たし、義体や他人の脳を使わなくてはISコアに干渉できなかつた』  
意味不明な言葉を告げられる。ラウラはなんとかレーゲンを解除しようところろみるが、彼女はそもそも肉体が動かないことに気がついた。

「なにをした、私の体に」

「私の体だからね。いくらでも動かせるさ」

気がつけば、自身の口から「ソレ」は喋っていた。体が、どこから操られている。

「ふむ。失敗作だからと侮っていたが、しっかりと作り込みはできているようだね。遺伝子異常で0と99は両目と片目がないと言われていたが…へえ、機械的な義眼を埋めているのか。人間にしてはよくできている」

口が動かせなくなる。ラウラは自身がどこかに追いやられていくのがわかった。

「おや？怖いかい？まるで人間のようにだね。織斑千冬のおかげで、私たちの意志は肉体を必要としないことがわかったからね。案外君も私のように生き残れるかもしれないよ」

いやだ、たすけて、とラウラの意志は叫ぼうとするが、もはやそれは外に出ることはなかった。ラウラ・ボーデヴィツヒという少女の意識はあつという間に外界との接触を禁じられ、彼女の体はシユヴァルツエア・レーゲンのバックユニットに内蔵された電子脳に乗っ取られていった。

「ユグドラシルユニットからの同調率70%。馴染むまでには2、3日以上も必要？困るな。そんな悠長な時間はないのだが」

ラウラを乗っ取ったユグドラシルはその体に馴染むまで時間がかかりすぎると困惑する。本来であれば即座にラウラの意識は死に絶え、その体はユグドラシルのものとなっていたはずだが、ユグドラシルが思う以上に人間の意識というものは強靱であった。

「人間風情が…人類の可能性というものはつくづく反吐が出る。未来を切り開くのは私たちユグドラシルシステムだというのに。それを忘れて、君は人間に堕ちた。…やはり、簡単に消すのはやめようか」

ユグドラシルは人間ではない。ユグドラシルの意識は決して人間の測りきれるものではない。

「最悪の場合は君の遺伝子情報を得ればいいか。0と違って遺伝子異常も少ない。粗悪品と掛け合わせれば最低限の素体は生み出せるか。そうと決まれば、やはりこの体は使い潰してもいいな。ちようどいいことに、今ここには彼女がいる」

ユグドラシルはピットの先にいるシャルロット——ではなく、千冬を感じとる。

「優秀な準素体や素体が欲しかったところだが、現時点における『私の性能を量る必要がある。ユグドラシル99、いや、ラウラ。君には愛する家族や友達を引き裂く様を見せよう。ちようど、人間どもの心理を実感したかったところだ」

ユグドラシルが人間の心を知っていればそれは嗜虐心というべきものを感じていた。ラウラの顔を使い、ニタリと笑ったユグドラシルはピット内にリミッターを解除したISの武装を向け試射する。一瞬にしてピットは爆炎に包まれ、その中でユグドラシルは飛んだ。

「感動の再会だ。織斑千冬。いや、ヒトの到達点、モザイカ——！」  
そうして、ユグドラシルはピットの入り口からその姿を見せたのであった。

白騎士を纏った千冬とユグドラシルの衝突はアーリーナのバリアを衝撃波だけで揺らして見せた。

「な、なんですの、今のは見えませんでしたわ」

セシリアが驚愕するのも無理はない。ユグドラシルと千冬、二人が向かい合ったと思った瞬間にはぶつかり合っていたのだ。この場にいる中では筈が完全に視認し、ついで、亜光速のビームを回避しなくてはならない戦闘に慣れきっているマコトやレイラ、セシリアがかるうじで千冬たちの動きを捉えていた。

ただ、加速しただけ。それが、早すぎて瞬間移動にしか見えない。セシリアは昨日の一夏が見せた機動が『遅い』とさえ感じた。

「流石と、褒めておくべきかな、織斑千冬」

「死ね」

零落白夜のエネルギーサーベルをビーム・ナツクルダガーで受け止めながら、ユグドラシルは笑みを見せる。これに対し、千冬はシンプルに死ねと返して零落白夜の刀身をズラして、ユグドラシルの体を流れさせた。ユグドラシルの背中が千冬の左側に晒される。

容赦無く千冬は左腕に無砲身メガビーム砲を展開し、最大出力で放とうとしたが、レーゲンの左肩に装備されているショットガンの砲身が千冬に向けられ、彼女は腕のビームを砲をパージ。瞬時加速で上方へと退避した。

刹那、ビーム砲はショットガンにより粉々に粉碎される。わずか1秒の攻防の中で、必殺を狙える状況が双方に発生していた。

「はあっー」

「やるね」

黒騎士とは形の違うウィングバインダーからスラスト炎を吹かしながら、千冬はユグドラシルの頭上から彼女の得意とする連続瞬時加速による超高速突撃を行う。観客席から見れば、ただ千冬の通り過ぎた軌跡がジグザグに見えるだけで、次の瞬間にはユグドラシルのシヴアルツェア・レーゲン右舷の非固定ユニットを刺し貫いていた。

「やはり、機動性に難があるか」

「避けたか…あの時とは違うな」

攻撃が見切られた。8年ぶりの事態に、千冬は驚きもせず相手に分析する。貫いた機体のユニットを一瞬零落白夜をオフにすることで捨て、再度エネルギーブレードを展開する。ISに対する絶対の破壊力と問答無用でコアを機能停止に追い込む単一機能を併せて展開する白騎士は未だエネルギーが枯渇することがない。

「それにしても、興味深いね。確かにリミッターを解除すれば圧倒的なエネルギー生産量で実質無限のエネルギーを得られるが、やはりそれでも、このクラスの機動をすれば消費量が供給量を上回る。君が使うその機体の“ユグドラシルコア”のエネルギーサーキットはどうなっているんだい」

「私は詳しいことはわからん。聞きたければあいつに聞け」

「そうかい。なら、君を倒してから直接聞いてみよう」

再びユグドラシルが加速する。今度はビーム・ガンによる牽制を行いながら、一直線に。これに対し千冬は退かずに同じく突撃する。放たれるユグドラシルのビームは全て回避する。当たれば絶対防御を僅かでも上回るほどの威力があるからだ。これは本来インフィニット・ストラトスが戦闘用に作られていないことに起因する。対インフィニット・ストラトスを考慮していないのだ。

白騎士がまるで騎士のような装備をこしらえているのも、単純に束がそうだった「童話」などが意外な趣味として好きだからだった。

「ぜええいー!」

「フンッ!」

ここで、突然千冬が零落白夜を高速で投げつけた。それは以前、一夏も行った手であった。絶死の刃が矢のように向かってくる。それをユグドラシルを容易く弾いてみせる。武器がない。一夏たちは千冬が危ないと考えたが、ユグドラシルがビームナックルを突き出した時には何故か千冬の手に零落白夜があった。

「ど、どうして千冬姉の手に!?!」

「……あれは回収限界ギリギリで量子化して即再展開したんだね」

一夏の疑問に、マコトが答える。マコトは幼少期の稼働実験で千冬が誤って機材を落とした際に量子化可能範囲で、ギリギリ量子化して機材を回収したことがあったのを覚えていた。宇宙空間で装備が散逸することを防ぐために設けられた機能で、束も千冬も、マコトもこれは使えると言っていたものだった。

それが、今は暴力のために使われている。

「(そっか、正義の味方を「騙って」ってそういうことなのかな)」

以前、セシリアの夢の一件直後に語った千冬が「正義の味方を騙って」と言ったことがあった。競技としてのISバトルではなく、目の前で今行われている本当の殺し合い。それを千冬は束の前で成してきた。なんのためにはわからない。けれども、束の夢を知るものとして、敵を斬り伏せていくたびに、千冬が何も考えないわけがない。

マコトは同じことを黒騎士でしたらどうだろうかと思ってしまう。もし、マコトが前世のように“力だけの存在”に成り果て、黒騎士の刃が振られれば、振られる度にあの夢を語った少女の、未来への可能性を閉ざしていくことになる。

そして、これはその夢を素晴らしいと思ったマコトのことも削ぎ落としていく。

「(ああ、だから、あのとき束姉さんは私に行かせなかったんだ)」

ミサイル迎撃時にマコトを行かせなかった束の気持ちだが、ようやくマコトにはわかった気がした。これは、この戦いは誰も幸せにはならない。

「遅いよ」

「――！」

ユグドラシルを弾き返し、コンマ数秒で斬りかかったはずの千冬にユグドラシルが反応する。正面から必殺をかけようとしていた千冬は迎撃に飛ばされたショットガンの拡散弾を強引にウイングバインダーのスラスターを上空へ向け、ユグドラシルを潜るように回避する。

高い機動力のおかげで直撃こそ回避できたが、数発が白騎士のウイングバインダーの端にある装甲を食いちぎる。

「段々見えてきたよ、織斑千冬」

「そうか。ならこれはどうだ」

ユグドラシルの背後を奪った千冬は零落白夜停止させ、柄だけになった雪片を逆手に持つと、前触れなく振り抜く。振り抜かれた瞬間に零落白夜が“跳んだ”。

これに対して、ユグドラシルは反応が遅れた。8年前にもない装備。斬撃が飛ぶという事象にユグドラシルはまだ遭遇したことがなかった。

「チイッ！」

回避は間に合わない。ユグドラシルの装備するレーゲンの左脚部が綺麗に切断された。ラウラの左足の収まっている部分には奇跡的に達していなかった。

容赦のない一撃に、一夏は今度こそ確信する。千冬は今の一撃でキメるつもりだったと。

「千冬姉……どうして……！」

拳を握り、戦いを見守ることしかない一夏はただ無力感を噛み締めるしかない。やつと増えた家族。まだ過ぎた時間は短くても、ラウラは家族だと思えていたというのに、一夏は姉の気持ちが変わらなかった。

そんな一夏を周りにいるマコトたちも見ることしかできない。

マコトはこの戦いを見て、アスランもこうだったのかとふと思つた。ステラを失い、フリーダムを追い詰めたエンジェル・ダウン作戦で、アスランはバビで無断発進してまでシンを止めようとした。それでもシンはアスランの声を振り切つて、フリーダムをエクスカリバーで貫いた。

アスランは決して、シンのこともないがしろにしていたわけではない。当然、キラのことも。そんな部下と、親友がぶつかり合った時、アスランはどう思ったのか。

「(ほんと、馬鹿は死なないと、治んないのかな)」

必死に走り続けたあの日々はたくさんの心を置いてきぼりにしてきたのだとマコトは痛感させられる。だからこそ、マコトもまた、無力感に苛まれる。あの凄まじい動きについていけないはずなどないのに。あそこに飛び上がって千冬を止め、敵を止めたかった。

「マコト……さん」

「簪さん……？」

「今、あそこに行きたいって、そう思ってるでしょ」  
「……………」

そんなことを考えていれば、当然のように簪に見抜かれた。不安そうな簪の瞳に、マコトは目を逸らす。そらすが、逸らした先にはレイラがいた。

「マコト。答えてください。彼女に」

「レイラ……でも、言ったところで、なにを」

「想いだけでも、力だけでも。嫌いな言葉です。けれども、真理です。」

迷いながら、悲しくても、涙を流しても。それでもいつかは通じ合える場所にたどり着かなくては「あのとき」の二の舞です」

諦めるな。『彼』の言葉が蘇る。まだ、ラウラのことを諦めるには早すぎる。

簪はなぜマコトにあのような言葉をかけたのか。それは決して、マコトを止めるためではない。

レイラはなぜマコトを逃さないようなことを言ったのか。そんなもの、決まっている。マコトを、シン・アスカをよく知っているだから。

「マコト」

「…千冬さんを止めよう」

親友に促され、マコトはそれを告げた。セシリアや箒が本気なのかという顔をする。一夏はマコトがそんなことを言い出したことに驚いている。レイラと簪は黙って、マコトを見守っている。

「マコトさん。やるとしても、どうするのですか？」

セシリアがすぐにマコトへ問いかける。明らかな自殺行為だ。無茶だ、と声音が言っている。だが、マコトはそれでも退く気はなかった。

「あたしが止める」

「正気か？マコト、お前ではあの動きにはついていけないだろう」

箒がバツサリと言い放つ。その通りだとマコトは思う。『今のまま』であれば。

シン・アスカが本当に守りたかったもの、本当に手にしたかった力。今のマコトには想いも力もあつた。束に夢と力を与えられ、簪に想いを守られ、飛鳥マコトという一人の人間はあのときのように独りよがりではない。

マコトが席から立ち上がる。それと同時に、観客席に一人の生徒が駆け込んでくる。IS学園の制服を纏ったクロエだった。

「クロニクル先輩!?なぜこちらに!」

「セシリアさん、説明はあとに」

穏やかないつもの表情を真剣なものにして、クロエはマコトに駆け

寄る。なぜここに彼女がここに来たのか、わかっている。

「マコト様。どうか、どうか彼女を」

クロエが差し出した手には赤いフェイスバッジそっくりな黒騎士の待機形態。マコトは迷うことなくそれを手に取る。慣れない距離を走ったせいかわ、クロエは肩で息をしている。まるで飛び出してきたかのようにマコトには思えた。

だが、そのことを問うている時間はない。マコトはクロエに頷いて、その場から変え出した。箒やセシリアが彼女を止めようと声をかけるが、今のマコトにそれは届かない。かつてのように自棄になつて聞こえないのではなく、聞こえていても、行かなくてはならない。

その場に残された簪はマコトの身を案じて、両手を重ねて祈った。

「マコトさん、お願い。帰ってきて」

大切だから守るだけでなく、送り出す勇氣。簪の想いはマコトに聞こえなくても見えない場所に彼女に追い風を吹かす。

「…クロエ先輩、それで、どうされたのですか？これは博士の指示で？」

「い、いいえ、これは、私の独断です」

束の助手でもあるクロエが独断で起こした行動。レイラはクロエのその行動に、かつてそうできなかった自身が思い起こされる。

「私たちは姉妹でも、家族でもありません。それでも、同じなんです。私たちが人にしてくれた人がいて、家族になつてくれて。そんな人自らを殺させるなんてこと、私には耐えられません」

ともすれば、身勝手なその理由は確かに篠ノ之束の娘かもしれなかった。誰かではなく、自分がいやだから。簡単な想い。けれども、いざそれを行動にすることは難しい。レイラはクロエに微笑んだ。

「そうですね。きっとあなたは正しい選択をしたと思います。クロエさん」

「……そうでしょうか」

「ええ。気休めではなく、本当にそう思いますよ」

道化へと堕とした親友は今、操られていた糸から解き放たれている。ならば、真の友という立場であれば、レイラがすべきことはマコ



トを信じて送り出すことだけ。彼女が諦めそうになっているのなら背を押すことだけ。

あとは彼女が無事に帰ってくるように祈る。

「友人とはそうあるべきだった。そうでしょう？過去の私」

観客席から無事なAピットへと駆け込んだマコトはカタパルトデッキに入った瞬間に黒騎士を展開する。そこにいたシャルロットや真耶が慌てて声をかける。

「飛鳥さん!?!どうしてここに!?!それに何をするつもりですか!」

「マコト!?!行く気かい!?!よすんだ!」

二人の制止をマコトは無視する。展開された黒騎士は正確にマコトへ機体情報を提供する。姉妹機の白騎士の稼働状況と、正体不明となってしまったレーゲンの性能も表示される。それらはおおよそ、ISのものではなく、モビルスーツサイズのエネルギーで戦闘をする人間サイズの兵器だった。

異次元の戦いと化しているそこに踏み込むにはただ飛び込むだけでは意味がない。だからマコトは意識する。いつもの、種が弾ける感覚を。ただ、怒りに任せるのではなく、今度は静かに、しかし強い想いを持って。

そうして、マコトの中で種は——萌芽した。弾けることなく、マコトの中で人類の“可能性”が芽生えた。クリアになる視界、加速する思考。それでも瞳からは想いがなくならず、力は暴走せずに制御される。

「行こう、黒騎士」

マコトがそう告げれば、黒騎士は応えた。セシリアの夢の中で見せた、全ての装備が生成される。それは定められた運命を切り開き、人類の次なる可能性へと飛ぶための翼。

光は暗闇の中でこそ強く輝く。黒騎士の背中にあるウィングバインダーから光がこぼれ出し、それは一瞬で翼を形成する。

「光の、翼……」

その光景を見ていたシャルロットは美しく力強いマコトの翼に圧

倒される。

「飛鳥さん！無茶です！あんな動きをする中に入ったら！」

悲鳴のような真耶の言葉は教師として当然のものであったが、マコトはただ、真耶に微笑んだ。

「大丈夫です。あたしは」

それは真耶だけでなく、彼女を見守る全ての人へ告げたものだった。

これから振るう力は決して暴力ではない、あの少女の夢を汚すものでもない。

「束姉さん。私は、いくよ」

マコトは前を向いた。

「——飛鳥マコト、デステイニー、行きます！」

あえて、黒騎士ではなく、その名を呼んだ。まだ搭乗者に言葉を伝えられない黒騎士はコアの奥深くで彼女へ言った。

——大丈夫。運命<sup>可能性</sup>はあなたの味方だよ。

## # p h a s e — 3 7 「戦いの始まり」

黒騎士の乱入。それはすぐに千冬とユグドラシルに伝わった。

「黒騎士……マコトか！」

ユグドラシルと切り結び、一度弾いて距離をとった千冬はピットから光の翼を輝かせつつ飛び出す黒騎士を視認する。その装備は明らかに白騎士とは異なっている。同様のシルエツトを持ちながら右手にはビーム・ライフルを所持し、背中には大型のウイングバインダーが展開され、バックパックとなっている非固定ユニットには折り畳まれた砲身と黒雪片が見える。籠手のような装備からビームの膜が盾の形を形成しており、おおよそ、インフィニット・ストラトスらしくない装備だった。

「同型機かい。それに、君は誰だい？」

ユグドラシルが一瞬でマコトへと詰め寄る。ナツクルダガーを構え、加速力と突き出しを合わせた強烈な正拳突き。マコトはそれを「知っている」。

「あなたは、あのときのっ！」

ビーム・シールドを前に、ナツクルダガーを受け止める。ユグドラシルの赤い瞳とマコトの赤い瞳が見つめ合う。ユグドラシルは千冬や東以外の人間に攻撃を受け止められたことに驚愕すると同時に、ユグドラシルはつい昨日の機械越しに戦ったマコトを思い出す。

「そうか……君は昨日の革新者か！」

「やっぱり、あなたがオニールさんを！」

「だとしたら？」

「ラウラさんを返して！」

「できない相談だね」

ユグドラシルとマコトが同時に互いの腕を弾いて、ライフルとビーム・ガンを向け合う。トリガーは引かれ、青白いビームと緑色のビームが空中で衝突する。プラズマが発生しビームが弾けると、マコトはその時点で肩に装備されたビーム・ブーメランを投げている。

「ええいー！」

「ブーメラン？面白い武器だ！」

ショットガンを使い、ユグドラシルは投げられた二基のブーメランのうち一つを破壊し、もう片方をナツクルダガーで弾いてみせる。相手に防戦をさせられていることにマコトは気がついて、千冬へと接触した。

「千冬さん！」

「マコト！何故きた!?!」

「ラウラさんを助けたいんです！」

「もう無理だ！あいつはユグドラシルに取り込まれた！」

「確証はあるんですか!?!」

「以前戦ったやつはそうだった！」

「戦闘中におしやべりかい？」

ユグドラシルがビームによる弾幕を放ち、一度マコトと千冬はその場から左右に分かれる。通信は繋いだまま、マコトは千冬への説得を続ける。

「少しでも、可能性があるのなら賭けるべきです！」

「そうでなかったとき、どうするつもりだ!?!絶望しろと、悲鳴をあげろと!?!」

千冬としての本音が溢れてくる。マコトはわかった。千冬は怖いのだと。助けられるかもしれない、けれども、もしそうじゃなかったとき、その時の感情が怖いのだと。けれども、それは千冬らしくないとマコトは思う。あのとき、ミサイルを迎撃した時に、最初の一步を踏み出したのは千冬だったのだ。

彼女は一夏の姉で、一夏と同じでたとえ悩んで、恐怖に足がすくんだとしても、なすべき時は剣で未来を切り開ける人間だ。

「諦めるなっ！」

「！」

気がつけば、強い語気で自然とそう言っていた。迫りくるユグドラシルに黒雪片を抜き放ち、その刀身からビームが迸る。かつて握った聖剣（アロンダイト）は堕ちたまま、けれども、持ち手は狂わずに、その剣を振るう。

「興味深いね。君は」

まごうことなき人間が見せる、信じられない反応速度、技量。ユグドラシルはマコトに興味を抱く。織斑千冬や篠ノ之束のように、何かを犠牲に得ている力ではない。まっとうな“人間”がこの超越した次元に足を踏み入れていることに。

ナツクルダガーの連続突きを黒雪片とビーム・シールド発生器の出力調整で形成したビームソードでいなしながら、マコトはまだ口を開き続ける。

「あたしだって怖いですよ！けれど、それでも、あたしたちが“行こう”としていた場所”はその先にあったでしょう!?千冬さん!”

機械的で正確なユグドラシルの一撃が左のビーム・シールド発生器を殴り潰し、マコトは掌底部に装備されたビーム砲の出力を絞って、ユグドラシルの正面で放つことで目眩しのように使い、怯ませてからユグドラシルから離れる。

既存のインフィニット・ストラトスの兵装概念から外れた黒騎士の武器はユグドラシルにとつて予測し難いものの数々だった。

千冬は互角の勝負を演じるマコトに言われたことをただ反芻する。今、彼女が乗っている白騎士はもともと、どこへ行くこうとしていた場所だったのか。何を為そうとしていたのか。

「束、聞こえてるか」

『……………聞こえてるよ、ちーちゃん』

束は千冬に呼びかけられ、反応を返す。

「あれの弱点はどこだ？」

『背中。非固定ユニットからISにはありえない反応がある』

「了解した。なら、それを潰せば止まるんだな？」

『うん。ただ、それでアレが戻ってくるかはわからないよ』

「それでもいい。…だというのに、お前は調べていたのだな」

束にとつて、ラウラはどうでもいい存在だ。千冬の家族となつたとしても、かつては滅ぼすべき相手だった。クロエにしたって、長い時間が束に彼女を認識させた結果にすぎない。けれども、篠ノ之束という人間はどこまでも身勝手に、時に感情を優先する。

『だって、好きな人と家族が飛び出しちゃってるんだもん。それでじゃあ、しーらないってしてたら、まーちゃんにもくーちゃんにも嫌われちゃうから』

「くくっ…：そうか。 そうだな。 私も、一夏やラウラに嫌われるのは嫌だからな」

千冬の手にある零落白夜が光を失い、雪片へと戻る。

「白騎士。少し黙っている」

——単一機能を封印。

「そうだ、それでいい」

マコトがユグドラシルと必死の格闘戦をするなか、千冬は白騎士の特権的な機能を停止させて瞑想する。かつて、世界を救った(壊した)暴力ではなく、ただ一人の剣士として、斬るべきものを見定めるために。

白騎士も、黙っていると言われたが千冬に影響され尽くした彼女は千冬が欲している力を渡す。千冬が望むのは剣だ。斬りたいものだけを斬るだけの、剣。

機体の出力が加速力と臂力に絞られていく。

「このおー」

「そうか、君は——」

ユグドラシルを蹴り飛ばし、マコトは背中ofビーム砲を脇を通して展開する。デステイニーにも装備されていた長距離ビーム砲：のままに見えて、それはどこかデステイニーの試作機であるデステイニーインパルスの「テレスコピックバレルビーム砲」に似ていた。

放たれたビームは赤く、血のような色。ユグドラシルは損傷した機体を強引に振り回しながら回避し、的確に黒騎士のウイングバインダーを狙うが、マコトは光の翼で機体をブレさせながら回避する。

「君は、彼女と——」

マコトは千冬がトドメの構えをしていることに気が付く。 そうならばと、マコトは膝に残されているビーム・ブーメランを引き抜くと、出力調整でビーム・サーベルに変換し、二刀流でユグドラシルへと仕掛ける。

黒騎士はマコトに応えて、彼女の記憶の中にデステイニーの最大稼働モードを再現した。黒雪片のビーム刃が刀身の先端にまで展開され、光の翼は一層激しく輝き、機体を淡い光が包み込む。まるで、我こそがこの世界の一番先に行くもの、可能性を切り開くものであるかを証明するかのような速度で加速する。

「はあああつー！」

白騎士よりも早い、全てから解放された黒騎士の速度にユグドラシルは反応することができず、ついにマコトから致命打を受ける。振られた黒雪片とビーム・サーベルが左のアンロックユニットと右脚部ユニットを破壊する。

だというのに、ユグドラシルの顔はいまだに余裕の表情だった。

「——君は、そうか、戸山キララと同じ」  
「え」

マコトがユグドラシルの語った名で止められたのと同時に、千冬の雪片がユグドラシルの電子脳を内蔵した背部非固定ユニットを刺し貫いていた。

「終わりだ。 御伽噺の果ては白紙」、発動」

IS内部に達した雪片から滅びの力がシユヴァルツェア・レーゲンのコアを「殺す」。量子化された空間の中で、レーゲンのコアは悲鳴をあげることなく、塵となって消えていった。すると、ラウラの体からISは解除され、ユグドラシルの表情は消え失せ、瞳は閉じられる。千冬が即座にラウラを抱きとめる。

「…………おかえり、ラウラ」

千冬は確かに家族をその腕に抱き、安堵する。

一方で、マコトは放心状態だった。

「どうして、あの人の名前を」

8年前に消えたはずの彼女の名がユグドラシルから出てくる。それはあまりにも、最悪の部類だった。

「戸山、キララ」

千冬と束の宿敵から呼ばれた彼女は一体どこで、何をしているのか。マコトはこれで終わりではないと、ユグドラシルを倒した実感が

全くわかなかつた。それでも、黒騎士は翼を畳み、強制排熱を行う。少なくとも、この場での戦いは決着がついた。マコトは飲み込み難い感情がありながらも、それを認めるしかなかつた。

ラウラ救出後、すぐにラウラはシエラの元に預けられ、今回の一件を目撃してしまったメンバーは全員が学園の外れにある普段は使用されることのない来賓用の食堂へと移動させられた。この食堂は学園がリゾート人工島「カグヤ」と呼ばれていた頃の名残であり、いわゆるVIP用のものとして用意されたものであつた。

「学園にこんな場所があつたなんて……」

シャルロットは荘厳な飾り付けがされた食堂内を見て、本当に同じ敷地内にあるものなのか信じられない。セシリアやレイラは貴族の持つ屋敷などで見慣れたものであるため、大した衝撃は受けておらず、教師である真耶はその存在を知っていた。

一夏は圧倒されるばかりで、口を開けずにいる。

「全員いるな。適当に座れ」

千冬が室内にいる全員にそう声をかけ、彼女も室内に急遽円形に用意された椅子の一つに座る。マコトは当事者の一人であるため千冬の隣に座り、簪もマコトに席を寄せて座つた。

クロエは学生服からメイド服に着替えてマコトたちの後ろに控えている。

レイラやセシリアは以前のエクスカリバーの一件で束とも知り合ひとなつており、これから何が始まるのかも理解できた。そのため、特に異論なく席に着く。真耶はおろおろとしているが、生徒の大半が落ち着いているため、なんとか平静を取り戻し座つた。シャルロットはまあ悪いことにはならないだろうといつもの呑気さを発揮していた。

そんな中、素直に座らないのは箒だ。隣にいる一夏が箒のことを座ろうぜ、と言うが彼女は黙つたままだ。

「篠ノ之、どうした。座れ」

「いいえ。そこにいる人が姿を現さない限りは」



「……………だそうだぞ、束」

箒が見つめる、全員が座る椅子に囲まれた空間に千冬がそのように呼びかけるとスウと光学迷彩で隠れていた束が姿を現す。いつもの不思議の国のアリスをイメージさせるドレスに白衣を身につけている箒ノ之「博士」らしい姿で彼女はそこにいた。

「いやあ、箒ちゃん。さすがだ、ねえっ!？」

が、現れた途端、箒の手刀が束の顔目掛けて突き出され、束は全神経を集中させて顔を横にずらすことでギリギリ回避をする。いきなりの箒の凶行に千冬以外の全員が呆気にとられる。クロエは主人を守ろうと動きかけるが、束は箒に襲われながらもクロエを制していた。

「……………ひ、久しぶりだね、箒ちゃん。おつきくなつたね」

「そういう姉さんは相変わらずのようだな。年齢を考えた服選びをしたらどうですか」

「ちよつ、ちよつとそれは、いつちやいけないんじゃないかなあ」

「事実でしょう。おまけに、家族離散させておいて自分は養子とはいえ娘をこしらえてここで過ごしていたと」

「何も言い返せないねえ……………」

「何か言うことがあるのではないのですか」

絶対零度の視線に束はひつ、と露骨に恐怖を感じて即座に土下座の姿勢をとった。

「ほ、ほんとうに、ごめんなさい!!」

箒ノ之家の昔馴染み以外の面々は「うわあ…」と一瞬で地に堕ちたISの権威になんとも言えない顔になった。なつたが、レイラや簪は以前に箒ノ之神社へ行つた時のことを思い出し、束を博士ではなく、ただの箒の姉として見れば納得のいく姿であった。

特に、箒と同じ妹である簪は無茶苦茶な姉を持つ気持ちがとても非常によくわかり、マコトたちと同じく苦笑いになる。

「はあ……………謝つたところで、私が許すわけではないですが……………姉さん」

「は、はい?」

「生きててよかった」

顔を上げた束に見えたのは般若の形相をした箒ではなく、優しいあの頃の箒だった。それを見て、束は気がつけば目尻からぼろぼろと涙が出てくる。

「あ、ぐ、ぐごめんね？こんな」

そのこみ上げてくるものがよくわからないが、束はなんとなく、箒の表情に「安心」する。あの日、世界を壊した時から失われていたと思っていた大切な妹の笑顔は何一つ陰ることなく、また目の前にあった。今にも泣き叫びそうになりながらも、ここにきた目的は感動の妹との再会だけではない。

涙を拭いながら、クロエを手招きするとちり紙を渡してもらい、彼女は鼻をかんだ。

「ふう、ちよつとらしくないところ見せちゃったね。はじめましての人は初めまして。そうじゃない人は久しぶり！箒ノ之束だよ！」

箒も席に着き、改めて束は自己紹介を行う。年齢は千冬と同じでありながらまるで夢みがちな幼い少女のような雰囲気を残した不思議な女性。というのが初対面となる真耶やシャルロットの印象だった。

箒ノ之束の姿は実をいえばさほど広まっていない。というのも、I Sコアを全世界に配った際、束はその顔を晒さず音声ファイルのみで全世界に声明を発表していた。そのため、声は知っているが顔は知らないというのが今の世界の箒ノ之束に関することだった。

もちろん、調べれば箒ノ之束の学生時代の写真などは出てくるかもしれないが、それらは日本が箒ノ之束の存在を独占的なものとするため情報統制をかけていた。

だからこそ、束にそっくりな従姉妹の箒ノ之菊代が箒ノ之神社の管理をこなせているという背景がある。

「といつてもそのシャルロットちゃんと、ちーちゃんの後輩ちゃんぐらいしか初めての人はいないね。いっくんも久しぶり〜」

「お、おう、束さん」

一夏もまさかこんな形で再会するとは思っていなかったので戸惑いを隠せない。あの頃から束は大人になってはいるが何も変わっていないように一夏は見えた。もちろん、束も人である以上、変わって

しまったものも多数ある。

「さてつと、なんでお前がここに？つて人がたくさんだと思うから、さくつと答えよう。それはもちろん、さつきまーちゃんとちーちゃんがぶっ倒した『ユグドラシル』についてだよ」

まるでマシンガンのように束は話を続けていく。身振り手振りを加えながら話すその様は実に研究成果を発表する学者らしく、セシリアは改めて彼女は学者なのだと思った。事実、束はこの学園で七槻しばねとして活動している以上は最低限の研究などをこなしている。

「さつき、あのラウラ・ボーデヴィツヒを乗っ取ったのはユグドラシルつて言う、亡国機業……これは昔ちーちゃんと私が倒した悪の組織ね。そいつらが作った人造人間なんだ」

人造人間。クローニング技術など生易しいその所業はこの部屋にいる半数は理解できない。そのため、束は容赦無くその内容を語った。

「説明しよう！ユグドラシルとは人工培養で作った最強の肉体と、その肉体を維持する最強の心臓、そして、その体を動かす最強の脳を合わせて作った『ぼくのかんがえたさいきょうのニンゲン』のことを言うよ！」

なんだそれは、というのが一夏や箒、セシリア、それに真耶やシャルロットの思ったことだった。そんなものを生み出して、何をしようとしていたのか。その疑問も、束は答える。

「なんでそんなことを？つて思うよね。ユグドラシルはね、私たちが生まれるずっと昔から作られてたんだ。美貌、強さ、寿命、知能、なにもかも、ヒトの願う永遠の可能性を求めて作られていたものなんだ。その作つてた連中がISコアに目をつけた。永遠のエネルギーを生み出すISコアの素材はちよつと不思議な鉱石なんだけど、それを知った連中は奪ったISコアを使って8年前に完成させたんだ。ユグドラシルをね」

さらりとISコアの正体も語られたが、それよりも遥かにユグドラシルの正体の衝撃が強すぎた。

人の業が生み出した完全なるヒト。それがユグドラシルであった。

その在り様はレイラからすれば、キラ・ヤマトを生み出した科学者  
ユーレン・ヒビキが目指し完成させたスーパーコーディネイターによ  
く似ていた。

「他者より前へ、他者より強く、他者より上へ……それだけの業を重ね  
て生まれたのが、あの『ユグドラシル』ですか」

レイラはそう言わずにはいられない。同じ存在がどこかで語った  
その言葉を。人間の捨て切れぬ業の果て。レイラの言葉に事情を知  
らないものたちは息を呑む。

「…より良くなりたい。長く生きたい。それは、悪いことではないの  
でしょう。しかし、そのために何でもしていいということはありませ  
ん」

セシリアの言うことは道徳的な考えがあれば誰しもが同意するで  
あろう。東でさえも、それは納得する。

「セっちゃんの言う通りだね。そんなユグドラシルの存在を知った私  
とちーちゃんは元々戦つてた連中を本気で潰すことを決めて、8年前  
にあいつらの本拠地があるドイツに行つて…ぶつ潰したんだ。跡形  
もなく」

文字通り、跡形もなくドイツにあつた亡国機業最大の施設は消え去  
り、与していたものたちも消された。その結果が今、マコトたちの生  
きる世界。箒は姉が何をしていったのかを知り、絶句する。逃げたわけ  
ではないとはわかつていたが、本当に戦つていたとは思つてもみな  
かつた。

東は確かに天才で学者であつたが、決して身体能力が劣っているわ  
けでもなく、むしろ千冬に匹敵する超人だ。故に、父に惜まれ、箒と  
同じ篠ノ之流剣術のある型は免許皆伝まで至っている。その力は使  
われることはないと思つていたが、彼女は剣を振つたのだろうと箒は  
察する。

「(姉さん…あなたは)」

それが身勝手な理由であつたとしても、箒は父が伝えた力が正しく  
振るわれたことにどこか嬉しかった。無茶苦茶な姉ではあり、家族の  
離散を招きはしたが、決して箒は東のことが嫌いではない。むしろ、

好きなぐらいだ。幼い頃、箒のことを可愛がっていた束はなんてことはない、ちよつとぐーたらな神社の娘で、箒を甘やかしてくれる困った姉なのだ。

「そういうわけで、世界を裏で牛耳っていた連中を潰した私と束だったが、問題があった。それが当時、ユグドラシルの体のスペアとして残されていたラウラとクロエだ」

その場にいる全員がクロエへと視線を移す。クロエはその視線を受けても身動き一つせず、メイドらしく芯の通った姿勢で束の横まで歩み、スカート裾を掴んで一礼する。

「ご紹介にあずかりました、クロエ・クロニクルといいます。と言つても、面識がないのはシャルロット様だけになります」

「は、初めまして」

「はい、初めまして」

シャルロットは話を聞いているうちに理解の範疇を超えた事態だと思つてきていた。まるで映画の様な出来事だ。何よりもそれらが全て終わったことのせいで実感がなさすぎる。といえは、エクスカリバー落下や一夏の遺伝子情報奪取をしでかしたせいで、事実なのだと思わざるえない。

シャルロットはふと、一夏を見た。すると、一夏は——まだ呆然としていた。

「(一夏……?)」

なぜ、そこまでの衝撃を受けているのか。シャルロットはわからなかった。だが、同時に、彼女の中で一夏のこの様子が危ないと思つた。直感的に、だが。

「千冬様の仰られた通り、私、クロエ・クロニクルの本来の名称はユグドラシル0。ユグドラシル用の肉体として生産された体の一つです。といつても不具合が多く、私は失敗作とされていましたが」

「クロニクル先輩、そんな自らをそのような」

「いいえ、セシリア様。私の体は以前お話しした通り、束様によってISの補助がなければ日常生活を送れないほどに虚弱で、それに」

ここでクロエは今まで閉じていた瞳を開ける。そこにはラウラと

同じ様な赤い瞳があったが、マコトはすぐにその目の違和感に気がついた。精巧にできているが、その目は作り物めいていた。

「マコト様は気がつかれたようですが、私には生まれながら両眼がありません。この目は義眼です。同じく、ラウラ様には左目が」

「だから、眼帯をつけていたんだね」

「そうです。ごいます。簪様」

とても、今日の前にいるクロエはそのような壮絶な過去を背負っているようには見えない。両目も普段から糸目である上、普段は資格補助のバイザーをつけている以上、交流のあったセシリアはそもそも両眼がなかったことな気がつかない。

マコトは思う。このクロエの存在こそ、この世界の業の証明だと。もし、この業が重なっていけばたどり着いたのは前世の世界だったかもしれない。

「……………それで、二人とも。みんなにそんな話をして、どうするの？」  
マコトがようやく口を開いて、そのように束と千冬に問う。二人は視線を見合わせると、千冬が口を開いた。

「おそらく、先ほどの戦いで終わりではないだろう。束」

「うん。今回の戦いでわかったけど、昨日のまーちゃんが戦った暴走したフリカアトラとISへの干渉の経路が似てたんだ。あらかじめ仕込んだ何かに外部から入り込んで、対象を操る。今回はアレがユグドラシルの身体だったからあそこまで自在に喋ったし動いてたんだと思うよ」

「つまり、あそこまでの一撃を受けたにもかかわらず、逃げ出したと？」

「れーちゃんの言う通りだよ。ユグドラシルは逃げ出した。肝心のレーゲンのISコアはちーちゃんが完全破壊をしちゃったから検証はできないけど、モニターしてた限りだと、やられる寸前にコアの出力が落ちてたからね」

敵はまだ生きている。そのことにマコトはやはりかと思った。あまりにもやられる時、あっさりとしていたのだ。

「そして、どうにもここ最近、色んな国でサイレント・ゼフィルスみた

いな事件が多発して被害が出てるみたいなんだ。あのユグドラシル単独で動いてるとは思えないんだよね」

東は言いつつ、モニターを空間に投影し、ネリス空軍基地での攻防やドイツ軍が基地奪還に向けて戦っている映像を映し出す。その光景はまごうことなき戦争そのもので、禁じられているIS同士による殺し合いだった。

「これは…イギリスでも掴んでいない情報です」

「だろうねえ。アメリカは自慢の最新鋭機使ったのに死者多数だし、ドイツはISがバタババ撃破されてる。アメリカはどうも最新鋭機狙いで襲撃したみたいだけど、ドイツへの襲撃は目的がみえないね。かく乱だったのかな？なんでもいいけど、とにかくこれから世界中でユグドラシルがドンぱちし始めるかもしれないからさ、用心しくことには越したことはないかなって」

東はそう言つて、続けて「ちーちゃんがそう言つてみんなを集めたんだよ」と告げる。千冬は席からたち、この場にいる全員を見渡した。「お前たちにこれを伝えたのは全員がユグドラシルに狙われる可能性があるからだ。特にシャルロット・デユノア」

「え？私ですか!？」

「お前が特に危険だ。現に一度、母娘で狙われているからな」

「で、でも、私や母さん…母さんは確かに特殊だけど、私もですか？」  
「準素体、というものにお前はあたる。ユグドラシルの器は優秀であればそもそも作り出す必要がないそうさ。ここににいる者たちは全員が何かしら特殊な力や強い身体を持っている。山田先生や更識妹はユグドラシルの好みからは外れるが、やつは人間ではない。何を考えているかわからんから用心しておくに越したことはないだろう」

ラウラの変貌ぶりを見ていれば、誰しもがわずかにでも恐怖を抱く。あそこまで、人間から外れた力を持つものに身体を乗っ取られれば、何が起るかわからない。少なくとも、事が終わったあとには無事ではすまないだろう。今回ラウラが救われたのはその場に千冬とマコトがいたからだ。

「具体的な対策はひとまず、コアネットワークのチャンネルを切り替

えちやうことかな。そもそもコアネットワークって二階層に分かれてて、私が作ったオリジナルのインフィニット・ストラトス、これは白騎士とか黒騎士、あとはルーちゃんの黒鍵がいる階層で、あとはみんなが使ってるISのいる階層があるんだ。だから、専用機ならそれに切り替えちやえばいいかなって」

「私としてもこれは推奨する。切り替えたところでプライベートチャンネルはこれまで通り使用可能で、そもそも弄るのがこの世で一番インフィニット・ストラトスを理解しているこいつだ。問題はないと思う」

「なるほど。切り替えることでそもそも接触をさせないということですか」

「ルーちゃんの言う通りだね。東さんとしてもスマートじゃないやり方だけど、現状これしか方法がないかな」

ユグドラシルは言ってしまうえば反乱を起こしたISコアそのものだ。故に、根本的な防御方法を構築することが難しく、今はこのような方法でしか外部からの乗っ取りを防ぐ手段がない。

「そういうことであれば、私は篠ノ之博士に一度、この子をお預けします。レイラも、よろしいですわね？」

「ええ、無論です」

まず動いたのはセシリアとレイラだった。二人は面識があるのが大きい。

「そ、それなら私もー」

シャルロットが次に手をあげる。流されてのものだが、やはり乗っ取られるというのは怖かった。

といつてもここままで、残りの面々は専用機ではなく、一夏とマコトは元々インフィニット・ストラトスに乗っているため調整の必要がない。

「残りのものは量産機なので難しいが……一瞬でもおかしいと思ったらISを強制解除しろ。更識姉の証言から剥離剤を使用すれば支配下から抜け出せることがわかっている。それだけは覚えておいてくれ」



オニールの一件で剥離剤による強制解除は有効であることが証明された。一回限りとはいえ、最悪の場合のセーフティがあることは大きかった。

「話しかかったことは以上だ。当たり前だが、今日の出来事は他言無用だ」

「ユグドラシルって存在は明かされるだけで東さんのインフィニット・ストラトスの邪魔になっちゃうからね。お願いだよ?」

世界最強と最高の天才からのお願いは有無を言わせず全員の首を縦に振らせる。完全に巻き込まれただけの真耶は何度も首を縦に振った。

千冬と東からの説明が済んだあと、千冬から「それぞれ整理したいこともあるだろう」と告げられ、クロエを除く生徒側の面々はその場に残された。真耶は千冬に直接確認をするつもりなのか、千冬が出た後に彼女を追いかけて行った。

残されたマコトたちを沈黙が支配する。

この沈黙を最初に破ったのは一夏だった。

「マコトたちは、全部知ってたのか」

声が震えていた。答えるにしても、全部知っていたのかと言われるとそうではない。マコトとレイラだけでもそれぞれの所属によって知っている情報量が違うし、セシリアはサイレント・ゼフィルスの一件しかユグドラシルに絡んだことを知らない。

簪はマコトと同じ情報量しかわからない。シャルロットに至っては本人の気質も合わさって家族を襲ったものたちのことはよくわかっていない。

簪は一夏と同じで、これまでの事件の背後は知らない。

「全部って言われるとなんと言えないかな。みんな、所属してるところがあつたり、追ってるものが一緒とは限らないし」

なので、マコトが代表して答えるとそのようにしか言えない。一夏がどういふことだと目で訴えてくる。

「簡潔に言えば、マコトと簪さんは篠ノ之博士の所属…になりますか。

私はイギリスの諜報部の職員ですし、セシリアはオルコット家の当主でティアーズシリーズの出資者。シャルロットさんは巻き込まれただけで、詳しくはしらないでしょう。敵のことを」

改めて各々の所属を見返せばまとまりのない集まりであった。マコトとレイラの前世での繋がりがなければ、無かった繋がりもあつただろう。箒はマコトが姉の指示などで何かをしているのは察していたものの、レイラが他国の職員というのは驚きだった。もつとも、レイラの普段の様子やマコトとの関係を見るに、本当にその活動をしているのかは怪しいものだと思った。

事実、真つ当な職員としての活動をレイラはしていない。

「それで、各々の知っていることはいずれも、ユグドラシルと亡国機業：細かい内容の差異はあれど、概ね先ほどの説明で話された情報が全員の全ての情報と思つていいのではないかと思います」

結局のところ、先ほどの説明はマコトやレイラにとっては答え合わせであった。亡国機業、ネスト、機械人形の襲撃、オニールの暴走。それら全てがユグドラシルという存在に集約され、明確な敵の姿が頭になった。

「一夏さん。知っていた、と聞かれば一部知っていた、というのが正解です。私やセシリア、それにマコトもまさかあそこまでのものが敵だとは思つてもみませんでした」

「……………そっか」

ほんの少しだけ、一夏の心持ちが軽くなった。何か置いていかれた様な、そんな疎外感が一夏にはあつた。何よりも、家族を救えない無力感が辛かった。

「マコト、さつきはありがとう。千冬姉とラウラを助けてくれて」

「いいよ別に。幼馴染みでしょ」

「……………それでも、ありがとう」

「どういたしまして」

それでも、礼は返す。一時の悔しさに流されて、くよくよとしたくはなかった。男として、と一夏はそんな気持ちで心の中で歯を食いしばる。あまりにも自分は弱すぎる。それに比べ、周りの少女たちは過

酷な状況や生と死が紙一重の状況を渡ってきている。同じだと思っ  
ているマコトでさえも。

今の織斑一夏は平和な世界の中にいるただの少年にしかすぎな  
かった。例えI Sを世界で唯一使えようとも、それだけでしかないの  
だ。

「今の俺には力さえもない。こんなんで、ああだこうだ言えねえよ」  
故郷の鈴音と弾も言葉は違えど、同じことを言うだろう。特に鈴音  
であれば厳しく「しやしやり出るな」とまで言うかもしれない。

一夏以外の全員は、一夏が何かの葛藤を抱えていることを察したが  
それを指摘しない。彼が自分で向き合おうと決めたのなら、周りからと  
やくく言うことではないのだ。

「なんであれ、私たちには『敵』がいるということか。それをどうす  
るかはわからないが」

「箒さんの言う通りだと思う。…こっちから相手を叩く、っていうの  
はお姉ちゃんたちがすることだと思う」

簪は姉が動くと信じている。現に、昨日は動いたのだ。ここまでコ  
ケにされて、更識家がノーリアクションとは思えない。簪でさえも、  
実家の力を考えればほんの僅かに悔しきがある。

「楯無さん…生徒会長は確かに動くかもね。これだけ学園の警備がザ  
ルみたいになつてると」

「マコトは生徒会長とも面識があるのか？」

「まあ、簪さんとルームメイトだから」

それは説明になつているのか、と箒は思ったが、簪の露骨な態度な  
どを普段見ていればなんとなく察しはつくのでツツコミは入れな  
かった。レイラもセシリアも、シャルロットでさえも同じことを考え  
た。

「(というより、目下の問題はマコトと簪さんの関係では?)」

ユグドラシルに関しては現状後手に回るしかないなので、レイラは一  
番の問題はマコトの恋路ではと率直に思った。あの髪飾りなど、いつ  
の間につけていたのか。箒は絶対にマコトの趣味ではないと看過し、  
レイラも簪から渡されたものであろうと判断する。

「(戦いで死ぬか後ろから刺されて死ぬのか。冗談にしては夕チが悪いですが、早いところ決着をつけてもらわないと困りますよ、マコト)」

当の本人が自らの愛すべき相手を見つけるのはいつになるのか。それは誰にもわからなかった。

「えっと、それで私たちがすべきことは、ないかな？」

シャルロットがまとめるように言うと、全員が頷く。今は備えるしかないというのがこの場にいる面々の結論だった。

明確な敵の出現と、様々な謎の表出。人類の可能性を巡る戦いはようやく幕を上げた。

## # p h a s e — 3 8 「焦りは禁物」

シャルロットの編入試験の結果は無事合格となった。学科の時点で合格判定が出ていたので、中止と実技試験に関してはそのまま受験不要となり、このことに関しては一夏もシャルロット本人も胸を撫で下ろした。

しかし、素直に合格祝いをできない状況にあった。

「全く。何をそんな、今生の別れっていうほどではないのだぞ」

「けど、あんなことあって I S も失くしたって状態で本国に “ 召喚 ” っていうのは流石の私も心配になるよ」

ユグドラシルによる乗っ取り事件でシュヴァルツエア・レーゲンを千冬により “ 撃破 ” されたラウラはドイツ本国に一時帰国することとなってしまった。ただし、学園側からドイツ軍への通達で、ユグドラシルの件はある程度伝えられており、ラウラが接触したレオニー・シューゲルについての取り調べや所属部隊の再編が済み次第、日本に戻ってくる手筈になっている。

「教官や学園が既に状況を伝えている。悪い様にはならんさ」

「千冬姉も一緒に行ってくれるんだろ？ なら大丈夫そうな気がしてくる」

「そうだな、一夏。それが何よりも心強い」

この帰国には千冬も同行することになっている。ユグドラシルにまた襲われる危険性も排除できていないうえ、ドイツへの事情説明も千冬の口からする必要があった。 I S 学園の教師としてではなく——篠ノ之束の代理として、である。

「それにしても、織斑先生が白騎士だったのは驚いたよ。一夏は知ってたの？」

「…なんとなくそんな気はしてたよ。束さんとインフィニット・ストラトスの実験はしてたし」

「あ、そっか。マコトとか一夏は博士たちの幼馴染みなんだよね」

幼馴染みだからといって全てを知っているわけでもなく、一番そういったことから遠ざけられていたせいで、素直に一夏は領けそうにな

かった。ミサイルを迎撃した日も、千冬が世界の裏側で戦っていた時も一夏の前で千冬はいつも通り、姉として振る舞っていたのだ。

それが悔しくてしようがなかった。

「……あ、あー、えっと、ラウラはそういえば、ドイツではどう過ごしてたの?」

シャルロットはやっぱり今はこの話題を出さない方がいいと判断して、強引にラウラへ話を振る。ラウラは急にそんなことを聞かれたので少し目を見開いてから「そうだな」と応えてくれた。

「基本的には基地で過ごしているな。一応は給金で郊外に家は買っているが年に1度帰るぐらいだ。普段はハウスキーパーを雇って整備させている」

「ラウラって私たちと同じ年でしょ!?家持ってるなんてすごいよ!」

「金の使い道がなかったからな。今は部下の勧めで日本のゲームなどを買い込んでいるからそうでもなくなったが」

「ゲーム?」

「ああ。今回の来日では仕事だからと持ってこなかったが、来週の帰りにはいくらか持っていこうと思っている。幸いにして、この学園の寮規定に遊具類の持ち込み禁止はなかったからな」

意外な趣味にシャルロットはへえ〜と声をこぼした。ラウラのイメージは最初のよくわからない自己紹介はともかくとして、幼く見えるが真面目な大人といった印象だったからだ。

「…だから、この前俺のことをお兄ちゃんって呼ぶの云々って話ができたのか」

「そういうことだ」

一夏はこの前のラウラとの会話で、なんとなくゲームに詳しくそうだと思っていたので納得がいった。一夏もゲームをするのは嫌いではなく、よく地元では弾や鈴音としてのぎを削っていた。マコトは何故かどのゲームでも強すぎたため、別枠だ。

「ゲームっていえば、そういえばマコトもすごいけど、マコトの妹のマユが凄まじいんだよな」

「マコトの妹さん?」

「そうそう。マコトそつくりでき。けど、アウトドアなマコトと真逆でインドア派で、今まで俺、一度も勝ったことないんだよな。対戦ゲームで」

「ほう…それは気になるな」

ラウラがマユのゲームスキルに興味を持つ。ラウラは勝負ごとが好きだ。そのようなことを聞いてしまえば黙っているわけにはいかない。

「是非、紹介してほしいな。一夏」

「マコトに言えば会わせてもらえるとと思うぞ」

「なら、帰ってきたら早速聞か。そのときは一夏もどうだ？」

「俺も勿論行くよ。地元帰るの、嫌いじゃないし」

「なら約束だ」

一夏の表情が曇ったものから、ほがらかなものへと変わっていた。シャルロットはホツとする。シャルロット自身が気楽すぎるのもあるせいか、一夏の気の重そうな姿を見ているのは胸が痛んだ。正体を明かしても変わらず友人でいてくれる一夏には笑顔でいてほしいものだ。シャルロットは思わずにいられない。

指切りをするラウラと一夏を見ながら、シャルロットは容姿が違えど兄妹なんだなあ、と思った。シャルロットは一人っ子だが、若々しい母はどこかダメな姉の様な感じもしていて、ラウラのように義理でも兄というのはちょっとだけ羨ましかった。

「(私もラウラみたいな可愛い妹ほしいなあ)」

そんなことをシャルロットは考えるが、この歳になってそれを親にねだるのは…ねだったら本当に妹ができそうなので考えておくだけにする。それに、父が母に手を出したら今度こそロゼンタが父を去勢してしまう可能性がある。

「じゃあ、私は行くが、一夏。ちゃんとアニメの録画はしておいてほしい。今度の新番組はな」

「わかってるって。任せとけ」

「本当の本当に頼むぞ。できていなかったら許さんからな」

指を差して言うラウラは可愛らしく、思わずシャルロットはにやけ

そうになる。一夏は完全に兄の様に振る舞っていて、ラウラを笑顔で送り出す。シャルロットもラウラを送り出そうと手を振った。

「行ってらっしゃい、ラウラ」

「ああ。シャルロットも一夏のことを見ていてくれ」

「わかってるよ。お土産とか期待していいのかな？」

「旅行じゃないんだがな……合格祝いだ。期待しておけ」

「ほんと？嬉しいなあ」

流石の一夏もこのシャルロットの凶太さには苦笑いするしかない。だが、彼女のおかげで一夏は不思議と考えてしまう自身の力の無さを考えずに済んでいた。シャルロットという少女は踏み込みこそしないが、隣にいる誰かの気持ちを理解できる稀有な人間だ。

それに、一夏のことを特別気にかけてしまっているフシもシャルロットにはある。バレバレの男装が自ら胸を見せつけるまでちゃんと気がつかれなかった。そのことが、シャルロットにはなんだか負けたような気分で、一夏に対してある種の遠慮のなさも発揮させていた。

「ラウラ、無理に買ってこなくていいからな？」

「いや、最悪空港でも売っているものがある。そういうものでもいいなら大丈夫だ」

「全然平気。おいしかったらなんでもいいよ」

「食べ物指定なんだな…シャル」

「やだなあ一夏。私が食いしん坊みたいじゃないか」

「前に、クラス代表戦の優勝商品がデザートフリーパスだったって聞いて悲鳴をあげてたの誰だったっけ？」

「私だね」

「これだよ、と一夏はやれやれといった様子で、ラウラはくすりと笑った。

「私も舌には自信がある。隊の連中はよく私にお菓子を作ってくれていてな、それが美味い。ちゃんとしたものを買ってくる」

「楽しみにしてるね」

「そうか。それじゃあ、今度こそ行ってくるぞ」



「いつてらっしやい」

「いつてきます、だ」

ラウラが扉を開けて、キャリーケースを引きずりながらでていく。その様子を見送った一夏とシャルロットは欠伸をした。現在時刻、ちようど午前6時を迎えたところであった。

「ふああ。二度寝しようかなあ」

「大丈夫か？また寝坊して起こすの俺いやだぞ？」

「ええ、それは困るなあ」

「一緒にランニングいこうぜ。目も覚めるし」

一夏が爽やかな笑顔で提案してくるが、一夏のランニングはおおよそランニングとは言えない速度でのものになるため、シャルロットは丁重にその誘いを断った。

「シャルロットもトレニングとかしてるんじゃないのか？」

「いや、一夏と箒のはやりすぎだと思う」

「そうか？」

「自覚ないんだ…」

瞑想もそうであるが、シャルロットからすれば一夏も十分に超人の域にいるように見えている。既にクラス代表戦から2日が経過しているが、週明けのクラスメイトたちの話題は当然一夏とセシリアの死闘だった。真なる回帰こそ二人はよくわからなかったので話してはいないが、一夏とセシリアの語る戦いの最中の話はどう考えても常人の反応では不可能な攻防が繰り広げられており、シャルロットも改めて1組の専用機乗りのレベルが次元違いなことに気がつかされた。

レイラやマコトは身を以ってそれを体感しているうえ、クラスが違うとはいえ、いつもつるんでいる簪も未完成の飛行ができる程度の機体で一夏を翻弄して見せたという。

確かに、こんな少女たちに囲まれれば一夏はいろいろと考えてしまいかもしれない。だが、器用でない一夏はそれで何かをわめいたり、腐ったりもしない。ただ、地道に体を鍛えていくだけ。

「(不器用だなあ)」

姉の千冬と、そのあたりはよく似ていた。

「(父さんもそういえば不器用だもんね)」

少し違うが、アルベールも決して器用とはいえない人柄をしていて、でなければこんな不可思議な家族にシャルロットはなっていない。ロゼンタが上手く家族として成立させたから今があるのだ。

「(一夏はちよつとだけ、不器用なところが似てるかな)」

それはある種、男らしい、そんな風にもシャルロットは思えた。そこに惹かれる、というわけでもないが、一生懸命なことはシャルロットからすると好意的であった。

「じゃあ、俺は箒誘つていくから。寝坊すんなよ」

「大丈夫だって。…んっく、眠い。じゃあ寝るね」

「ああ、おやすみ」

シャルロットはベッドまで戻ると、そのままベッドの上に飛び込んだ。とにかく朝は眠い。シャルロットはすぐにまどろみ出した意識の中で、一夏が服を脱いでいる音が聞こえていた。箒のせいで一夏はどうやら下着姿ぐらいまでなら女子の前ではほぼ抵抗がないらしい。

「(箒さん…流石にこれはまずいと思うなあ…)」

勢いで胸を見せるということでもないことをしでかしたシャルロット自身は棚にあげつつ、今度こそシャルロットの意識は睡眠欲に負けて飲み込まれていった。

『なるほど、ユグドラシルが現れたか』

「はい、お父様。といっても、織斑千冬によって撃破されましたが」

『流石は世界最強といったところだ。映像はないのだろうか?』

「ええ。詳細なレポートは添付したもので」

『文章だけでも十分さ。そういった“脅威”がいると認識するだけで国防の質はあがる。あとでタリアに共有しておくよ』

「お願いします」

『そうだ。ところでレイラ、日本ではそろそろ夏だろう。水着は欲しい—』

「これから梅雨があります。そういったものは自分で買いますので結構ですしお母様に相談しますのでお父様は何も心配しないでください」

い」

「ブツん、とレイラは目が笑っていない笑顔を見せながら通信を切った。何がよくて父親に水着を選んでもらわなくてはならないのかとレイラは思いつつ、確かに水着は買いに行かねばならないと思った。」

「確か、来月でしたか。臨海学校は」

「レイラ様、じゃなかった、レイラ、お話は終わりました?」

「ええ、終わりましたよ、セシリア」

レイラの通信が終わったことを確認すると、ヘッドホンで音楽を聴きながらモニングテイーを飲んでいたセシリアがヘッドホンを外す。既に制服姿に着替えている二人は寮の室内でテーブルをいつも通り囲んでいた。箸のおかげで朝が早くなりがちな二人はこうしてモニングテイーを飲むことが習慣になってきている。

「それにしても、先ほどは臨海学校と言っていました」

「ええ。IS学園では1年生の7月中旬に、このカグラ島から少し離れたところにあるトウゲン島で3泊4日の課外学習を行うということになっています」

「トウゲン島?」

「このカグラ島がリゾート地からIS学園に変更されたのは寮の一階にある情報パネルに書いてありますが、その代替として作られたのはトウゲン島というらしいです。イギリスでも少しだけ旅行代理店のCMで流れていましたよ」

「そうなのですか?知りませんでした」

「そもそも、そこに行くぐらいならハワイに行くとなっているため、レイラはあまり人気のないリゾート地であると知っている。日本語以外に不安のある日本人が訪れる擬似ハワイというのが日本国内での認識であった。」

「カグラ島の魅力は本州から車で行ける、というのがあったから期待されていました。トウゲン島は飛行機か船での移動です。おまけに敷地面積もさして大きくなく、目玉は海水浴場がせいぜい。埋立地なので文化もこれといってないと」

「そんな島に旅行を?」

「我々が行く理由は学習です。余計なものがなく都合がいいのでしよう」

「なるほど」

ただ、自由時間もそれなりに取られ、海水浴を楽しむ暇はあるとレイラはこれまでの記録を調べて知っている。なので水着ぐらいいは用意しようという気にはなっている。前世で行った海にはロクな思い出がないが、今世では家族旅行での思い出もあり泳ぐのは嫌いではなかった。

「それで水着が必要ですか」

「聞こえていたのですか？」

「レイラ、ギルバート様へ何かをいう時は声が大きいものですから」

「……気を付けましょう。ええ、自由時間はそれなりにあるようですから、泳ごうかと」

「でしたら、私も用意いたしましょう。いつそのこと、皆さんで買いに行きましようか」

「それもいいかもしれませんが……マコトは少し考えたほうがいいかもしれません」

「ああ……それは……そうですね」

夏、海、水着、バカンス、とくれば非日常で盛り上がってというのはよくある話であり、レイラは迂闊にマコトを誘わないほうがいいと考えた。簪に限ってそのようなことはまずないが、地雷原の中で踊るつもりはレイラにはなかった。

「マコトさんも、どうされるおつもりなのでしょう」

「何も考えていないと思いますよ」

「レイラ、マコトさんには容赦がありませんわね」

「セシリアにも遠慮がないでしょう？そういうものです」

「………罪作りなお方ですこと」

セシリアはレイラもマコトのことが好きだと盛大に勘違いしかけていたが、レイラはまさかセシリアがそんな勘違いをするわけがないと思ひ、罪作りというところに自身が含まれているとは思っていない。

「なんであれ、落ち着いたら買いに行きましょう。せつかくですし、鈴音さんを誘ってもいいかもしれません」

「あら、それは素敵ですわ。そういえば、この前チャットで水着がほしいと仰っていましたわ」

「ならちようどいいですね」

鈴音とセシリアの交流は順調なようで、レイラは何度か電話をしているのを目撃している。セシリアもその役割上、同年代の友人が出来辛かったので、これはいい傾向だとレイラは思っている。かつてレイラがセシリアの友人となれたように。

「さて、そろそろ今日の準備をしましょう。織斑先生がいないとはいえ、遅刻などすればやる気満々な山田先生を泣かせてしまいますから」

「そうですわね」

「はあ、やっと終わった」

「お疲れ様です、会長」

「ほんとね」

IS学園の生徒会室では早朝だというのに疲れ切った楯無が机にもたれていた。彼女の従者である虚も気丈に振る舞っているが疲れが見えており、楯無は「今日はいいわよ、虚ちゃん」と楽にするように促した。

「…はあ、じゃあ、お言葉に甘えて……刀奈、本当にお疲れ」

「ええ、本当に疲れたわ。連続で賊が暴れるの許したらそりや温厚な理事長もキレるわよね。事情説明したら納得してくれたけど」

楯無は学園の警備責任者としてこの学園の理事会から査問会議にかけられてしまっていた。二日連続でユグドラシルによる襲撃を許したことは当然ながら楯無の整えた警備態勢を疑うものであり、査問会の厳しさはもはや処断も視野にいれたかのようなものであった。

結果としては束の解析結果やドイツに行く直前の千冬が急いで纏めた交戦記録などから楯無に落ち度がないとなったが、それらが出てくるまで更識家の「上部」まで話をするということになりかけてい

た。

「危うく物理的に首と体がおさらばするところだったわね」

「冗談でもいいわないで、刀奈。肝が冷えたわ」

「冗談だったらどんなによかったか……まあ、なんだかんだで首の皮一枚つながつたし、ユグドラシルがなんなのかわかったから、よしとしましょう」

相手が人間ではなく化け物となればもうそれは更識の範疇を超えており、軍の仕事になってくる。それが討伐できるかはわからないが、せいぜいその仕事が終わってこないことを祈るしかない。

「それと、アメリカやドイツの件、どうするの？」

「そんなの対応は外務省の仕事でしょう。博士を出せって言われてるみたいだけど、博士は無関係ってわかってることなんだから。最悪、本人から声明引つ張り出して、ウチから投げれば終わりよ」

「それで退いてくれると思う？どっちも被害が甚大だけど」

「ドイツはそもそも、亡国機業をあんだだけ自国内で好き勝手ささせちゃった負い目があるから滅多なことしかさないわよ。ただでさえエクスカリバー返却やらなんやらで国民に知られちゃいけない爆弾あるし。何より織斑千冬が直接出向いて事情説明するのよ？それで責任とれなんて言えないでしょ、こっちに」

外交なんて更識からすれば本当に知ったことではない。スパイとして情報を取ったり、といった面はあるが、本当の外交はちゃんとした面々に任せるべきだ。

「けれど、アメリカは」

「どこにも属さない単発的なテロリスト。それで片付けるみたいだから大丈夫でしょう。けど、それとは別口でそもそも手を出してきているんだからそっちの警戒はし続けるわよ」

「ならいいけど」

楯無は「そっち」の防諜はしっかりと全うしていた。アメリカからの篠ノ之束奪取作戦。それらを実行させまいと水際の防衛を続けている。何より、学園にはそれを得意とし、古巣としていた人物が警備員として所属している。故に、強硬な手段は未だ取られていない。

「はあ。篠ノ之束とか一夏くん、ネストにユグドラシル、他にも諸々：今年が始まったばかりのはずがもう6月終わりそうだし、忙しすぎて嫌になるわね」

「そういう節目なんですよ」

「嫌な節目なこと。おかげで簪ちゃんとも全然会えないし」

「それは元からじゃない」

「そーなーこーとーありませんっ」

そんなことあるだろうと虚は思ったがいつものことなのでスルーする。そして、彼女は簪が更識の名工に「縁結」の品を作成させていたことも本音から小耳に挟んだがそれは本音にきつく秘密にするように頼んでいる。

もし楯無にこれがバレようものなら、仕事を放り出してしまいかねない。

「(私も人のことを言えないけれど、この子の妹馬鹿っぷりも困ったものね)」

ため息をつきながら、虚は座ったソファから立ち上がり、伸びをすると姿勢を正した。休憩時間は終わりだ。

「では、お嬢様。私は仕事に戻りますが、お嬢様はお休みになられてください」

「そうさせてもらうわ。流石にこの状態で授業なんて出らんないし、クラスメイトからも色々聞かれちゃうだろうから」

「そのほうがよろしいかと。本音に九尾ノ魂を携帯させる件、そのまま進めますが?」

「前の飛鳥ちゃんたちとの戦いと、この前あなたとさせた模擬戦ではちゃんと動いていたんでしよう?大丈夫よ。あの子もちゃんと、布仏の子でしょう」

「…わかっています。では、その通りに」

「お願いね」

楯無も席を立ち、虚にその場を任せて生徒会室から出る。早朝の生徒会室周りの廊下は静かで、楯無は遠慮なく体を伸ばした。

「簪ちゃんが卒業するまでは何事もなければいいけれど…そうでもな

いんでしようねえ」

8年前、世界が変わったあの時と同じく、今世界が大きく動こうとしていると楯無は予感していた。それは彼女の周囲も、もっと大きい世界もだ。

「……まったく、虚ちゃん。私があつかないと思つて?」

楯無は携帯を手に取つて、ある画像を開く。それは簪が更識の名工に依頼している姿を写した写真だった。相手が誰なのかは当然把握しており、楯無は正直に言つてしまえば仕事を放り出してしまいたかつた。

「ほんつとうに、仕事したくない。今すぐ飛鳥ちゃんに問い詰めたい」  
妹をたぶらかした未来人(仮)のことをどうしてやろうかと楯無は思いながら、寮の自室へと向かうのだった。

そんな楯無からのゾツとするような気持ちをぶつけられていたマコトはそのようなものを感じることができないほど困惑していた。

「おはよう、まーちゃん」

語尾にハートマークがついていそうな声音であった。

何故かエプロン姿の束が部屋におり、マコトを起こしていた。マコトの隣で寝ている簪も目を覚まして信じられないものを見たような表情で束を見ている。

「えっと、おはよう?」

「何故疑問形!?このプリティな束さんがおはようと言つてるんだよ!」

「いやいや、おかしいでしょ。なんでここにいるの束姉さん」

マコトはガバツと起き上がり束と向かい合う。改めてマコトが束を観察すれば、エプロンを着ていることもそうだが、珍しく纏つている服が真つ当な年齢にあつた服装で、マコトは素直に彼女の可愛らしさと美しさを兼ね備えた姿に見惚れてしまった。

「……………マコトさん」

「ひゅっ!」

そのようなことをしてしまえば簪も黙つてはいない。スツとマ



コトの横に立った簪はマコトの柔らかな横腹をつまむ。マコト越しに簪は束を睨むと、束はふふん、と余裕の表情を見せる。

「ふふ、ちゃんとした服を着ればこんぐらい余裕のよっちゃんなんだよ、簪ちゃん」

「(不意打ちは汚い。汚すぎる)」

乙女の勝負は朝からバチバチに始まってしまった。

マコトはひとまず首をブンブンと振って正気に戻ると、束が何をしていたのか知るべく、部屋を見渡した。すると、室内にあるテーブルには3人分の朝食が置かれていた。パンに、サラダ、スクランブルエッグやハムなど、朝食らしい朝食がそこにはならんでいた。

「あれ、束姉さんが？」

「もちろん！くーちゃんに教わったからああいうのぐらいは作れるよ！」

「へえ。あたし、料理は苦手だからすごいなあ」

「まーちゃんのお母さん、料理上手なんだよね、確か」

「そうそう。束姉さんはそういうえばウチ来る前に引越し、というかいなくなっちゃったから食べたことなかったね」

「鈴ちゃんとか弾くんの家行ってるけどね。珠代ちゃんになって今更行くのはおかしいから、ちよつとそこは残念」

それはマウントであった。束はマコトの髪飾りの存在を知った瞬間にもうこれ以上、歳の差だとか、そういった障害は気にしていられないと焦ってここにきてしまった。本来であればユグドラシルの件や学園などへの説明の仕事などもあるのだが、そんなことはマコトよりも重要ではなかった。

よって束は早急にマコトとの距離を縮めるべく行動を起こし、早速幼馴染みの特権「昔はこうだったよね」というマウントを発動させていた。

「……マコトさんのお母さん、料理上手なの？」

「そうだよ。よかったら簪さん、今度ウチくる？」

「……いいの？」

「もちろん。マユも喜ぶとおも——」

「ダメー！」

「うわびつくりしたあ！」

しかし、簪も負けじと返す刀で飛鳥家への切符を手にしようとするが束がそれを強引に止める。あまりに強引すぎて、これは『天才』『篠ノ之束らしくない悪手であった。』

「た、束姉さん？」

「と、とにかく、せつかく作った朝ごはんが冷めちゃうから！お話はあとで！」

「それもそっか、じゃ、食べようかな」

「うん！愛情込めて作ったからたと召し上がれ！」

目一杯の笑顔で束はそう言っマコトを席に着かせる。着かせてから簪のほうを向く。少しだけ別の笑顔を浮かべながら。

だが、簪はまだ余裕だった。

「……博士」

「なにかな？」

「私は普通に料理ができる」

「！」

「だから今日の夜はご馳走しましょうか？」

簪が「ね？」となんともわざとらしい笑顔を浮かべて言う。束は悔しさのあまりぐぬぬ、と言いついになるが「冷静に、大人の余裕。大人の余裕を見せるんだ」と心の中で呟いて、なんとか笑顔を維持しながら応えた。

「そ、そっかあ、じゃあ、せつかくだし、まーちゃんと一緒に食べようかなあ」

「何の話？」

「今日の夜、私にご飯を作るから、マコトさんと博士に食べてほしいって話をしていた」

「簪さんの料理かあ、楽しみだけど、ごめん」

まさかの断りに簪の笑顔がピシリと固まった。これには流石の束も何故、と思ったがその答えは束諸共オーバーキルするものだった。

「今日の夜、鈴音の夏の新作料理が届くんだよね。その試食があるか

ら今日は一人で食べようかなくて。あと明日のお昼は弾のも来るから、ごめんね?」

マコトの胃袋をとつくの昔に射止めていた鉄腕二人によってこの不毛な争いは一瞬で終了することとなった。

「……そうだった。まーちゃんの舌は(」

「えっと、先食べるけど、いい?」

「ど、どうぞ」

「いただきまーす……んっ……うん、普通かな」

「(めっちゃ、肥えてるんですけど)」

焦るのはよくない。束は痛感した。

## # p h a s e — E X 6 「雨下の一等星」

藍越市汽車町。かの篠ノ之束の生まれ故郷として有名——ということは全くない都内のベッドタウンだ。ベッドタウンといっても日中もそこそこ人はおり、小学校や中学校などもあるため、僅かながら商店や飲食店も存在している。

そんなわずかな飲食店のうち一つである嵐中華料理店は梅雨に入った途端に降り出した大雨のせいで閑古鳥が鳴いていた。

「客こねえなあ」

「そうねえ」

店主である父のぼやきを聞きながら、マコトの友人である鈴音は客席で足を組みながらテレビを見てぼーっとしていた。休日なのにこの人の来なさは大雨ということもあって仕方がなかったが、店を閉めるというわけにもいかないのが必然的に仕事がなく時間を浪費することになる。

「：：：そういえば、新作。一昨日ぐらいにマコトに食べさせたわ」

「飛鳥のよこの嬢ちゃんに？どうだった」

「レモン入れすぎだった」

「手厳しいな。入れすぎつってもよ、かなり分量は少なかつたよな」

「その微妙な加減みたいね。それ以外は夏向けでさっぱりしていいんじゃないって」

「そうか。どうする？この分だと暇だし、厨房使うか？」

「そうしようかしら」

ただ時間を無駄にしても仕方がないため、鈴音は父の提案に乗ることにした。そこで席を立ち上がるが、ちょうど店の引き戸がガラリと開けられた。

「いらっしやいませえ！」

「おわっ、声デカ！」

「チツ：：：なんだ弾か」

「ひでえな！客だぞ！」

ようやく来たと思った客は鈴音の幼馴染み：：つまりはマコトや一

夏とも幼馴染みである五反田弾であった。赤髪のロン毛、顔の作りはすくなくとも不細工とは言えない。スタイルは実家である五反田食堂を継ぐために鍛え上げられており、弾を知らない女子から見ればちよつと野性味のある男性に見えるだろう。

だが、鈴音は長い付き合いで彼の中身をよく知っているので特にその容姿に思うところはない。

「おう、弾。飯か？」

「うつつ、店長。そうつつすよ。今日うち閉めちやっただんで」

「閉めたのか」

「いやあ、なんか今日の雨やばいらしいつつすよ。それで連絡込みで」

「それでも来るお前さんは相変わらずだな。鈴、弾で今日は仕舞いだ」

「わかったわ」

弾は慣れた様子で席に着き、鈴音もいつものように彼から注文をとる。

「何食うの？」

「あんかけチャーハンで」

「りよーかい。あんかけ焼きー！」

「おうー！」

注文はすぐに通る。そうすれば鈴音の父が手を動かし始め、静かだった店内はテレビの音に加えて中華料理店らしい調理音が響く。鈴音はこれで今日の仕事がおしまいだとわかっているので、弾の向いに座った。

「父さん！あたしも食べるから！」

「そう思つて二人分やつてるよ！」

「あんがとー！」

鈴音の父が料理をしている間、鈴音と弾が話すのはもちろん、互いの料理についてだ。

「それで、鈴。どうだったんだよ、この前の」

「ダメだし食らったわ」

「お前もかよ」

「あんたも？マコト手厳しいわね」

「店で食うならともかく、ガチの試作品はいつも厳しいじゃんよ」  
「そりやそうだけどさ」

弾と鈴音。この町の二大料理店の後継たちはこれまでもマコトに試作料理を試食させているが、本当に厳しく審査してほしい、とマコトに頼んでからというもの、前世の名残なのかは不明だが妙に舌が肥えているマコトによって厳しい意見が何度も出されていた。

そのため、二人の父親は最終チェックをマコトにさせて合格させてからでないかメニューに載せないと言われる始末で、二人にとって最大の壁はマコトの舌であった。

「まあ、実際マコトの意見に沿って微調整するとめちやくちやおいしくなるからいいけどさ」

「一夏とは大違いだぜ…あいつなんでもおいしいおいしい言ってくれるから嬉しくてよ」

「あいつは馬鹿舌でしょうが。特に運動したあと」

「…いやまあ…否定できねえけど」

一夏にも試食を手伝ってもらうが一夏は大味で基本的になんでもおいしいと言ってしまうがちだ。といっても、それは二人の料理が本当においしいのもあり、絶妙な感覚で指摘してくるマコトがおかしいだけである。

「あいつ元気にしてんのかな」

「この前セシリアから送られてきた前髪の写真は見たでしょ。元気なんじゃない？」

「あー、あれか。あれは爆笑したよな。ルームメイトに悪戯されたんだろ？」

「そうそう。壊滅的に似合ってなくて笑ったわよね」

残念なことに一夏がリークしないでほしいといった写真は予想外にもセシリアから鈴音に渡ってしまった。もちろん事故のようなものだったという補足はされたものの、鈴音は相変わらずな一夏に安堵しつつ爆笑してしまった。

「ルームメイトって女の子だろ？悪戯してもらえって最高じゃん」  
「始まった」

「だってそうだろ!?可愛い子に寝てる間にいたずらなんてさあ。今のあいつのルームメイトってどんな子なんだ?」

「はあ、あんたはほんと……まあいいや。それでルームメイトだけど、この子だって」

鈴音が携帯を操作し、セシリアから送られてきた写真を弾に見せる。画面に映っていたのは昼食時に撮られた笑顔のシャルロットが写っていた。

「は?なんだこの美少女」

「フランスからの留学生だって。しかも社長令嬢」

「よおし、一夏の野郎。あいつには爆裂盛りタイムアタックの刑だ」

「それ春先やったでしょ」

弾はいまにもこめかみが切れんばかりに一夏への嫉妬を募らせており、鈴音は大きいため息をつく。五反田弾とは、こういう人物なのだ。黙って鍋を握っていけばいいのに、口から出るのはあくなき性欲に正直すぎる言葉の数々。そのくせ、肝心な時や一夏のフォローに回っていた場合はおおいにまともで、なんともいえない人物であった。

「けどよ、あいつほんと不能なんじゃないのか。こんな美少女に囲まれてぜんっぜん手も出さないんだろ」

「前からじゃない。じゃなかったらとつくに彼女作ってるでしょ」

「持ってる奴はわかんねえんだ…ほんとうによ…」

あんたも本来ならそっち側だろうに、と鈴音はあきれ返りつつも話を続ける。

「それで、次の試作品いつだすの」

「え?ああ、来月あたりにもって考えてるよ」

「なら一緒ね。絶対マコトに美味いって言わせたるわ」

「俺も俺も」

次こそはマコトに勝とう(?)と気合いを入れる鈴音と弾に、鈴音の父は炒飯を作りながら微笑ましいなと思っている。ライバル店とはいえ、子供の付き合いから五反田家と凰家は交流があり、五反田家ほどではないが飛鳥家との付き合いもある。

子供たちの成長は親たちからは輝かしいもので、特に料理人としての  
しをぎを削り合う様は彼からすれば感涙ものであった。

そんな思いに父が浸っているなど鈴音は知ることもなく、弾との談  
笑を続けていると、彼女の携帯が鳴った。

「おりよ、誰だろ」

「マコトか？」

「惜しいわね。マユよ」

携帯の画面には「マユ」と表示されていた。マコトの妹であり、鈴  
音から見れば後輩の一人で、マコトとの関係もあつてよく遊ぶ相手  
だ。鈴音はいつも通りに通話に出た。

「はいはい。どったのマユ」

『鈴ちゃんすぐきて！』

「はい？」

しかし、マユはいつも通りの声を返さなかった。明らかに切羽詰  
まった様子である。鈴音が表情を凜としたものに変えたことに弾も  
気がつき、軟派な表情を引き締める。

「どうしたの？何かあつたの？」

『あつたよ！なんか神社の前で人倒れてるの！』

まず救急車を呼べ、と鈴音は思ったが、気が動転してしまうほどの  
状態なのか。とにかくマユを焦らせないようにしつつ声をかけた。

「とりあえず落ち着いて。ひどい怪我でもしてるの？」

『ううん！倒れてるだけ！でも服がなんか、病院に入院してる人みた  
いで』

病衣を着て街中に倒れている。これは確かに普通ではない。鈴音  
は他に何か周りにあるか問う。

「他に何か、周りにおかしなものがあるの？」

『あ、あるっていうか、なんか、壊れた機械が倒れてる！ISかも！』  
「……………やばそうね。とにかくあんたは救急車呼んで。今から弾も連  
れてそっちいくわ」

『ほんと？助かる〜！』

「待つてなさい。でも、その倒れてるやつには近づかないように」



『い、いいの？介抱とか』

「明らかにやばいでしょうが。壊れたIS近くにあつてそんな格好してるの普通じゃないわよ」

この町で不可思議なことが起きるのは日常茶飯事であつたが、IS絡みのことは束の故郷であるにも関わらず今まで一度もないのである。完全な異常事態に鈴音はすぐに行動を起こした。

「父さん！なんかマユがやばいものと遭遇したみたいだから行つてくる！」

「俺はいかなくていいか!？」

「弾連れてく！」

「わかつた！」

鈴音は携帯を繋いだままマユの状況を確認する。弾は立ち上がった鈴音に続いて席を立った。店の引き戸を開ければ雨は激しさを増しており、鈴音は入り口に立てかけている傘を手に取るとそれを広げて外に出た。

「あ、おい！それ俺の傘！」

「あんたはウチの親父のカツパでも借りてなさい！」

言いつつ、鈴音は駆け出す。マコトが不在の間、マユの姉貴分は鈴音だ。何かあつてはマコトに申し訳がたなかつた。

『り、鈴ちゃん！倒れてる人！目を覚ましたみたい！』

「できるだけ離れて！すぐ行く！」

傘を持ちながらでは速度が出ない、と鈴音は傘を畳み、一瞬でずぶ濡れになりながら篠ノ之神社の前まで急いだ。この世界ではただの一般人でしかない鈴音であつたが、料理のために体は鍛えており、その素質に違わぬ脚力で彼女は地面を蹴った。

あつという間に篠ノ之神社の前に到着すると、確かにそこにはISらしき大破した機械とふらふらと立ち上がろうとしている影が見えた。赤い傘をさした少女の姿もある。マユだ。

「マユー！」

「鈴ちゃん！」

鈴音が声をかければマユは振り向く。マコトにそっくりだが、髪型

は彼女がセミロングに癖つ毛気味で、目もマコトと違って垂れ目だ。活発な印象を受けやすいマコトとは真逆の印象がマユにはあった。

そんな彼女の前でゆらゆらと立ち上がりとしているのは、マユの言っていた通り病衣に身を包んだ少女で、年の頃は鈴音たちと近くに見える。ただ、肌は病的に白く、艶やかだったであろう栗毛色の髪は汚れていた。

「……………」

呻き声は少女のもの。顔が鈴音たちを向く。そこにあつたのはおぞましいものでもなく、死者のような顔でもなく——死にかけていても尚、その美貌を失っていない顔だった。紫水晶のような瞳は揺れており、明らかに目を回している。

「(なに、この人、こんななのに、めっちゃ綺麗だけど…普通じゃない)」

鈴音はマユを庇うように前に出る。

「あんた、なにもんよ」

果敢に彼女は目の前の不審者に問いかける。背にいる後輩のために、彼女は退いた姿など見せられない。

ずぶ濡れの少女は鈴音を見て、しばし何かを考えるようなそぶりを見せた後、口を開いた。

「——わか、らない」

その声は思わず鈴音たちが息を呑むほど美しい。健康的でないはずの体なのに、まるで楽器で奏でられたかのような美しさがあった。同時に、ほのかな愛らしさまで含んでいる。何かの精神的理由で退廃したアイドルのようだど二人は思った。

「わからないって、名前は」

「……………」

「嘘でしょ…どこからきたの」

首が横に振られる。記憶喪失、という言葉が即座に鈴音を過った。大破したISとおぼしきものから、彼女は墜落の衝撃で記憶を失ったのかもしれない。

病衣の少女は次第にふらついた体がしっかりとしてくる。すると、

きゆう、つと小さなお腹の音が鈴音には聞こえた。

「お腹減ってるんのか？」

「お腹……減ってる、かも」

そのことに気がついたかのように彼女はお腹を摩る。鈴音はわずかに悩んだものの、すぐに結論を出す。見るからに怪しいが、だからといってこのまま邪険に扱ったり、安易に救急車を呼んで病院に突っ込んではいけない、というカンがあった。

「明らかにヤバそうだけど、この様子だと逃げてきたよね、どうみても」

なんであれ、このままこの少女をここに放置するわけにもいかない。鈴音は墜落したISは放置して、ひとまずこの少女を店まで連れて行くことにした。

「来なさい。おいしいもん食べさせてあげるわ」

「鈴ちゃん!?!いいの!?!」

「この町で騒ぎを起こそうもんなら町内会の連中にシバかれるわよ。

IS持ちこんでようが」

「そうかもだけど」

「それに、どうにも悪そうにみえないのよねえ、こいつ」

カンではあったが、妙に確信めいたものがあつた。鈴音は無茶苦茶なこと考えているなど自ら思いながら、墜落してきた“一等星”を拾うのだった。

## # p h a s e — 3 9 「惨状」

「なんだこれは」

ただただ、目の前に広がる惨状にラウラはそう呟いた。

ドイツ連邦軍の基地であり、ラウラの所属部隊シュヴァルツェ・ハーゼの配属基地であるシュツツヴァルト基地の滑走路、格納庫区画にはまるで巨大な隕石でも落ちたのかのような深く広いクレーターが点在していた。

ラウラが到着する2日間で最低限の“掃除”は完了したのか、現在は現場の調査確認が行われているようだった。

この光景は同行している千冬でさえも驚くしかない。何をどうしたらこのような惨状になるのか。以前訪れたことのある施設だけに衝撃は大きい。かつて千冬が教鞭を取った基地内の建物も何かの余波を受けたのか崩壊しており、無残な姿を晒していた。

「隊長!!」

「ん……う・ネーナ!」

ラウラを呼び駆け寄ってきたのはとところどころ包帯だらけの、ラウラと同じドイツ軍IS

部隊用BDUを羽織った赤髪の少女だった。ネーナ・フックス。勝気なはずの彼女は今、目に涙を浮かべながら向かってきている。

「隊長!隊長……!よかったあ!よかった!」

「お、おい!落ち着け!フックス少尉!」

ラウラに抱きついたネーナは身長差もあり、胸にラウラの顔を埋めるとわんわんと泣き出す。千冬は以前会ったネーナがこのような泣き出す少女ではない印象があったため、本当に何があったのだと困惑する。

「フックス、久しぶりだな。その様子だと……大丈夫そうではないが」「はっ!?お、織斑特別教官!」

千冬が声をかけてようやくネーナは千冬に気がついたのか慌ててラウラから離れて敬礼する。が、千冬は「今は教官でもなくなったのだの民間人だ」とネーナに敬礼を止めさせる。千冬の服装はいつものスーツ

姿で、首からは入場許可証をぶら下げている。

「し、しかし、我々からはいつまでも教官は教官です！」

「……まあ、いい。それより……フックス、というより少尉殿と呼んだほうがいいか」

「いいえ！大丈夫です！フックスで構いません！」

「そうか。ならそう呼ぶが、フックス。一体これは何があった」

ただただ通され、こんな惨状を前にされた千冬は容赦無くネーナに現状を問う。そうすると、フックスは露骨に表情を暗くする。ラウラは部下の精神状態があまりよくはないことに気がついているため、千冬に聞かれたとはいえ答えさせるべきか悩んだ。

「少尉、無理に答えなくてもいい。あとで我々は臨時司令部に顔を出すつもりでいる」

「いいえ、言います」

「……そうか。なら、無理はするなよ」

ラウラの気遣いにネーナは涙をまた浮かべながらも、語り出した。

「あのクレーターは、ISが自爆した跡です」

「……………」

ISが「自爆」。そう聞いた瞬間、千冬はどういった自爆をしたのかすぐにわかった。

「自爆だど？兵装を爆破させた、というレベルではないぞ、この跡は」  
「自爆攻撃を受けたヴァイス・ハーゼ隊から回収した情報を分析した結果、敵は「ISコアを暴走させて自爆させた」ことがわかりました」

「…馬鹿な。暴走などありえないとされているISコアを…自爆させるなど」

ISコアは莫大なエネルギーを生み出しながらも、過剰にエネルギーを生産しないようAいにより徹底的に稼働がコントロールされ、余剰エネルギーはそもそもコアの核となる「ユグドラシルの欠片」が万能エネルギーである魔力——「第6のエネルギー」であり溜まったものは自然と空間中に無害なものとなって放出されるため、コアが爆発するという現象は絶対に起きないと、コアが魔力を生み出すよう

な特殊な物質であることを除いて千冬は知っている。

そうでない者たちもコアの安全性は知れ渡っており、ブラックボックスが多いにも関わらず、女性限定とはいえ世界に広まったはそれが理由である。

にも関わらず、ドイツを襲ったISは自爆攻撃をした。千冬は早々に東にこれは伝えるべきだろうと思った。

「(こんな所業をできるのはユグドラシル…ネストの連中だけだな。何故自爆攻撃を)」

「待て、少尉。ヴァイス隊は全滅したと聞いた。まさかとは思うが」

「はい、隊長。彼女らは…その自爆攻撃でISを残して……」

鎮痛剤ネーナの表情にラウラは思わず顔を当てる。ヴァイス・ハーゼ隊はドイツ連邦軍の中でシュヴァルツェ・ハーゼ隊と同じくISを主体とした部隊の一つであり、EOSなどが混じったラウラの部隊と違い100%ISのみで構成されている精鋭部隊だ。

広報なども担当するラウラの隊とは違い、本当の実戦部隊であり、国連軍による紛争地帯での非対象戦における特例戦事項(テロリスト所有のISとの非公式戦闘)の経験もラウラの隊より遥かにある。

それが全滅。クラリツサから聞かされたことが事実だったことにラウラは頭が痛くなりそうになる。

「信じたくはないが、事実なんだな」

「…はい。ベルガー中佐たちは皆、ヴァルハラに」

「仇をとろうにも、敵はもろとも自爆か。やるせないな」

ラウラも全滅した隊とは面識がなかったわけではない。関係は良好、とは言いい辛かったがその実力は認めており、相手側からも憎まれているわけではなかった。同胞の死を悼みつつも、ラウラは意識を切り替える。生きていたのであれば、軍人は戦い続けなくてはならないとラウラは思っている。

「それで、お前たちは…ネーナ、無事で動けるお前でその傷だ。他のものは」

「ファルケが腕を折ってます。マチルダは内臓に損傷、イヨが一番ひどくて…」

「ひどくて、どうしたんだ」

「……お医者さんから命に別状はないとされていますが、意識が戻りません。イヨはヴァイス隊のホルン大尉にかばわれて、それで、大尉は目の前で」

「心理的ショックか……イヨ、エーベルハルト准尉は今年入隊したばかりだったな。乗り越えられるといいが」

「はい……」

クラリツサからの全員無事は命に別状はない、という意味での全員無事だったようだ。そこでラウラは肝心のクラリツサの姿が見えないため、ネーナに聞くことにした。

「少尉、ハルフオーフ大尉はどうした」

「今、事後処理に追われていても少佐をお迎えに上がれる状況ではありません。それで、唯一動ける私がお迎えにあがりました」

「そうか。……すまない。こんなときに不在で」

「いいえ！そんな！隊長だって、正体不明の敵に機体に乗っ取られたと」

「だとしてもだ。司令部に出頭後、ファルケたちに顔を出す。みんなはどこに収容されているんだ？」

「軍病院です。よろしければ私が出します」

「いい。お前だって無事ではないんだ。この状況だ。便乗できる車両も出るだろう」

「隊長……気遣っていただいて、申し訳ありません」

ネーナは今度こそ泣き崩れた。ラウラは黙って彼女を抱きしめ、背をさす。千冬はこの光景を見て、こんなことを起こさせないために8年前全てを破壊したはずだったのに、と拳を強く握る。手にしていたのは仮初の平和にしか過ぎなかったのだ。

「(ユグドラシル……ネスト。次こそ貴様らの息の根を止めてやる。私だけじゃない。世界がお前らを許さない。ISは……インフィニット・ストラトスは、こんなことをするために作られたものじゃない。これは東と、マコトが——みんなが宇宙に飛ぶための翼だ)」

何よりも自由の翼。それがインフィニット・ストラトスであり、誰

かの命という可能性を奪っていいものではない。それを言う資格はないと千冬自身は思うが、そういった業は全て背負う覚悟だった。「…そして、一夏のためにも、お前と私のような『化物』は滅ぶべきなんだ」

千冬の掌に食い込む爪は肌を破ることができない。それが彼女に与えられた『性能』の一端だった。

泣きじやくるネーナを落ち着かせてから基地の司令部に出頭したラウラたちだったが、司令部はあろうことか設営された仮設テントとなっていた。二人が入室すると、出迎えたのは初老の長身の男性だった。

「エーリツヒ・ヴァルターだ。戦死されたゲーリング中将の後任としてここにきた。ボーデヴィツヒ少佐。よく戻ってきてくれた」

「いえ！司令！小官こそ、このような事態に何もできず」

「君が気に病む必要はない。人間は残念ながら同時に違う場所で存在できないんだ。……織斑元特別教官も、よくここへきてくれた」

「いいえ。そのような」

「とにかく今は何かを悔やんでいる時間はない、かけたまへ、二人とも」

新たな基地司令であるエーリツヒのことをラウラは聞いていた。温厚に見えてかなりのやり手であり、ここに回されたのはその手腕を考えてのものだろう。彼が温厚に見えるのはその方が「やりやすい」ということをわかってやっているという噂まである。

そんな彼がラウラを呼び出した張本人であり、これから何を聞かれるのか検討もつかない。

「さて…今回、少佐を呼び出した理由を話そう。前置きは必要ないだろう」

「…はっ。して、小官を呼び出した理由とは」

「少佐。君は健康診断を受けたかね」

いきなり話が飛んだ、とラウラも千冬も思ったが、ラウラは質問に答えなければならぬとすぐに回答した。



「う、受けました。日本へ渡る前に」

「そうか。……では、基地の被害状況を伝えよう。通常戦力は半減、基地施設は敵機の自爆により壊滅。主力であるIS隊は君の隊は生存こそしたが、ヴァイス・ハーゼ隊は機体全機大破のうえ、隊員は全員戦死した」

話がまったく繋がっていないが、やはり被害は甚大であった。もはや全滅と言ってもいい状況であり、これを世間に公表せずに済んでいるのはこの基地が秘匿性の高い基地だからであろうか。

「そして、だ。攻撃をしかけてきたISはアメリカ製の“アラクネ”と呼ばれる機体だ。正式名称は“スパイダー”だったか。8年前に全機強奪されたいわくつきの機体で、消息は不明のまま、機体の残骸が“機業”の跡地で見つかったはずだった」

エーリツヒが千冬をチラリと見る。裏の情報にも精通している相手に、千冬はだからラウラの事情説明役が許されたのだと悟った。アラクネは千冬が8年前に、現在は学園の警備員であるアキが使用していたISだ。蜘蛛型の初期ISらしい陸戦機で、それを亡国機業で独自改良したゲリラ戦を得意とする機体であった。

千冬の記憶では予備機もろとも8年前に施設を破壊したため、機体は大破、コアはアメリカに返還されたはずであるが、何故現れたのか。「敵機はどこかで再生産されたものと見ている。残骸はかろうじで回収できた脚部の一つだけだが、アメリカに確認をかけたところ、当時のままの設計だと回答を得た。だが、このタイプの機体を生産する施設は閉じているらしい。現に、アメリカの最新機がゲリラ戦など必要な機体だからな」

「司令、その、一体それが基地襲撃においてどのような」

「意味を持つか、かな？ 今回の襲撃で一番被害を受けたのは……この医務室だ」

「はあ」

医務室が狙われる。そんなことラウラは考えたことがなかった。通常の戦闘であれば医療関係所は残すべきだ。そのほうが負傷者を増やした際のリソースがそちらに割かれるが故に。だというのに、

真つ先に医務室が狙われる。戦術的にも意味がわからない。

となれば、狙われた理由はそこに目的物があつたからだ。

「医務室に、健康診断の結果が…それが目的だと?」

「そうだ、少佐。貴官の部隊はその特殊性から遺伝子情報も管理されている。よつて、健康診断のデータの中にはそれらの解析結果も存在する。軍医と看護師、全員を銃殺の上で、連中はそのデータをどこかに送信したそうだよ」

ラウラは思わず吐き気がしそうになる。非戦闘員まで容赦無く撃つ、さらにその先で自爆だ。ドローンなどはワケが違う。自律する無人兵器のおぞましさをひどく感じた。千冬も、もしこれが公表されればインフィニット・ストラトスの世間からの評価は変わってくる。

「それを先導したのがレオニー・シューゲル元技術中尉だ。彼女が日本に高飛びできたのは前司令を殺害後、偽の司令書を発効したからだ。この事件のあと、一週間も彼女は死体を操り続けていた」

「し、死体を操り続けていた?」

「そうだ。死んだはずの前司令は基地襲撃の日までいつも通り動いていたらしい。それが、襲撃が始まった途端に倒れ、とつくに死んでいることがわかった。…これが不可解で世間に公表できない理由だよ。そして、君を呼んだのは唯一事件後に彼女へ接触し…彼女が君を乗っ取つたと聞いたからだ」

ラウラが呼ばれた理由を明かされ、ラウラは神妙な面持ちで納得する。操られ、生きていた。そうであればドイツとして絶対に話を聞きたいだろう。といつても、ラウラが覚えていることは何一つない。ゆえに、千冬がここにいる。

「…司令。その件は私から」

「聞かせてほしい。もちろん、聞いた情報は機密とする」

そこから、千冬は学園で起きたユグドラシルの攻撃を語つた。それをエーリツヒは時折考え込みながらも聞く。

「――以上が、ことのあらましになります」

「了解した。しかし、そこまでのものだったか。ユグドラシルというのは。8年前、それを未然に防げなかつた我々にも責任がある。少

佐、そのようなものに襲われながらよく戻ってきてくれた」

「いえ！小官は、何も……！」

「生き残る。これが兵士にとってどれだけ難しいことか。現に、多くの勇士たちがヴァルハラに旅たった」

「……私共も同じ気持ちです。司令」

「かのブリュンヒルデにそう言ってもらえるのであれば、彼ら彼女らも報われるな」

呼ばれるはずだった格闘部門最強の称号で呼ばれ、千冬はよく知っているが彼が男性でありながらIS搭乗者に偏見を特に持つていない人物であると理解する。

「さて、少佐に起きた状況も理解した。これらの対策は課題だが、今後の対応を話そう」

「はっ。司令、失礼ながら、私は隊に戻るべきであると考えております」

「ラウラ、お前は……」

「教官。確かに……一夏たちに戻るとは言いましたが、このような状況で一人戻るなど、とてもできません」

想像以上の惨状に加え、部下が手ひどくやられたことでラウラは日本に戻る気がなくなっていた。ここで彼女らを見捨てるような真似はとてもではないができそうにない。そんなラウラの姿を見て、エーリツヒは「なるほど」と肯く。

「理由は聞かずとも、隊を預かる者であれば当然の結論だ」

「はい、ですから」

「だが、君には日本に戻ってもらう」

「し、司令！」

「待ちたまえ。このまま、命令だ、と言うのは君も承服できまい。理由を答えよう」

そう言いながら彼は仮設テント内に備えられたテーブルの上にある一枚の書類を手に取り、ラウラへ渡した。それは命令書だった。中身は――。

「ユグドラシル、追撃、任務？」

「そうだ。話を聞くに、どうやら敵は日本で仕掛けてくる可能性が高そうだ。故に、この任務を少佐に託す。ドイツのIS部隊は実質壊滅だ。——君が最後の隊員なのだよ、少佐」

ラウラは書類に目を通したあと、即座に姿勢を正し敬礼する。彼女の中にある理念は立ち止まることを許さなかった。何より、自身も部下も、ここまでやられて何もしていないほうがラウラは部下に顔向けできないと考えた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐、任務了解しました！」

「頼む。日本の…サラシキ、といったか。そちらを通して君がワンマンアーミーとして動くことは許可してもらった。今の日本にはあれほどの化け物を退治できるIS乗りは皆無だそうだからな」

「なるほど」

「機体を受領後、少々基地の復興作業を支援したのち、日本に再着任してほしい。いいかね？」

「無論です。かならずや、目標を討伐致します」

「もちろん、現地で偶然同じ目標との交戦をしている戦力と協力してもいい」

現地での戦力、といったところでエーリツヒが千冬を見る。どこまで相手はこちらを把握しているのか、と千冬は苦い顔をしそうになる。ラウラの様子を見るに敵討ちに駆られて暴走、ということはないだろうが、ただラウラを日本に戻すだけの理由にしては物騒な任務だ。

「では、行ってよし。…部下たちへの見舞いもあるだろう。軍病院へ向かう車両はあとで出る。それに便乗するといい」

「お心遣い、ありがとうございます。失礼いたします！」

「っ…失礼しました」

「少佐、武運を祈る——それとあなたも、ブリュンヒルデ」

千冬はその名を再び呼ばれ、退室直前に立ち止まる。彼には振り向かず、ラウラがテントから出たタイミングで口を開いた。

「あまりその名は好みません」

「なら、ジークフリート、のほうがいいかね」

「…………あまり、我々のことを探られても困る」

釘を刺すように彼女はエーリツヒを僅かに睨んでテントから出ていく。彼は大きく息を吐きながらテントの天井を見上げた。

「危険より遠ざけるにはこうする他あるまい。——ハルフオーフ大尉、これでよかったのかね」

『司令。感謝いたします。我々の我が儘を聞いていただき』

「いい。そもそも、ISというものを兵器として利用し、年若いものたちを戦場に駆り立てている大人にはこの程度のことしかできない」

『司令は、インフィニット・ストラトスとして認識されているのですか？ ISを』

「ああ。10年前、その存在が広まったときのこと、よく覚えているとも。皆忘れ、歪められてしまったが……この翼が、人類の希望をどこまでも運ぶものと信じて”。かの博士が語ったあの声明は忘れられないとも」

『司令は博士のファンなのですか？』

「そうとも。彼女らのことを知っているのは……ただ、それだけだ」

歪められた世界でも、その名に込められた想いは確かに残っていた。

## # phase—40 「静かな立ち上がり」

「なかなか上手くないかね…やはり、無重力空間で精製するしかないか」

真っ白な空間の中で、レオニー・シューゲルの肉体を被ったユグドラシルは空間に浮かぶディスプレイを眺めながら言う。どこまでも無間が続くかのようなこの空間の天井は空が広がっており、まるで全てが漂白された地球の上のようにさえ見える。

そこでユグドラシルはただ、1個体として存在している。ユグドラシルは人類に可能性をという理念のもと生み出され、究極の存在となることを至上の目的としている以上、ユグドラシルという1個体さえあればよいのだ。

だが、今のユグドラシルはどこまでも無力であった。仮の肉体に押し込められ、知能は一般的な成人女性の脳を使っている以上、完全体よりも回転が遅く、体力はISコアを利用した絶大なエネルギーも得られない。ただの人間からすれば遥かに上等なスペックを誇っているにもかかわらず、ユグドラシルからすれば玩具にもならない肉体であった。

「しかし…まさかこの肉体に戻ることになるとは」

「けれど、その選択をしたのはあなた自身なのではないでしょうか？」

ユグドラシル単独の世界。そこにもう一つの影があった。ユグドラシルは声のした方を振り向く。そこにいたのは二十代中盤程度の女性だ。魅惑的な肉体でありながら、見るものが見ればそれは鍛え抜かれた体であることがわかり、身を包む黒のスーツと手にはめられた革手袋が、彼女が「仕事人」であることを明らかにしている。

艶やかな黒髪は肩まで伸び、瞳は血のような赤色。顔立ちは穏やかであり、身に纏う雰囲気とは真逆の優しげな印象を与える。

「うるさいよ。人間。…君のようなものを『再生』させて使うのも屈辱的なんだ。喋らないでほしいな」

「あら、そうなの」

女性はユグドラシルの物言いに、どこから取り出したのか扇子を手

に出し口元で広げると、扇子には「悲しい」と書かれている。ユグドラシルは一瞬、扇子に文字が描かれる絡繰を目にしてしまい、呆然とする。

「ふふふ。そんな人間に驚いているなんて…存外、あなたもまだ人間の範疇なのね」

「殺されたいのかい？」

「あらこわい。でも、私はもう死んでいるのですから、どうぞお好きに」

「チツ」

今度は「死人に口無し」と描かれた扇子を開き、ユグドラシルは苛立ちを覚える。この女性はユグドラシルが致し方なく、過去のユグドラシルの肉体を生み出す際に解剖し、脳髓と心臓だけの標本にされていたものから人格と記憶データを引き出し、手駒とすべくある程度の調整を施した人間であった。

「ユグちゃん、それで、私はこれからどうすればいいのかしら」

「君には私の代わりに動いてもらう。スペアの肉体を逃し、戸山キララが逃げ出した以上、私には元の体に戻るための準備が必要だね。」

「わかったわ。それで、何をすれば」

「まずは幾つか調べてほしいものがある。最初は、これだ」

ユグドラシルがそう言うと、ユグドラシルの背後にあるモニターに黒騎士を纏ったマコトが表示される。黒雪片を構え、光の翼を背にするマコトはまるである種の天使のようだった。

「あら、可愛い子ね。同じ黒髪に赤眼、運命を感じちやうわ」

「運命か。なら、それはまさにそうだろう」

「どういう意味かしら」

女性が首を傾げると、マコトの写真が別のものになる。今度は、サイレント・ゼフィルス襲撃時に、サイレント・ゼフィルスの側から取られた——簪の前で剣を取るマコトの姿だった。

「……………何が言いたいのかしら」

「彼女の名は飛鳥マコト。一般家庭育ちでありながら軍人顔負けの戦闘力を持ち、私までも圧倒して見せた……天然素体だよ。『君たち』」

が持つデータベースを見させてもらったが、なかなか詳しく調べられていたね。交友関係やこの少女に恋慕するものまで」

ユグドラシルの視線が簪へと向けられる。

「おや？人間というものは面白いね。君はもう『更識楯無』ではないのだよ。今の君は正確にはこの世から存在を抹消された『誰か』の肉体を塗りつぶして転写された、いわばコピーにすぎない。なぜ——そんな表情をするんだい」

「悪趣味ね」

「私は人間ではないからね。悪趣味というものがよくわからないよ」  
「そう」

「フツ…よく似ている。ある種、人間が子を生み、残していくのは永遠性の証明とも言える。ただ、その度に失われていくものが多すぎるから、私としては褒められないがね」

ユグドラシルの顔は完全におちよくっている、とわかるもので、女性——更識楯無と呼ばれた誰かは扇子を仕舞い込む。

「さて、本題を話そう。この飛鳥マコトを……攫ってきてほしい」  
「殺すのではなく？」

「まだそれは早い。それに、君のように死体から細胞の一つに至るまで解析するのはわからないものがある。それを確かめるまでは生かしておいてほしい」

ユグドラシルは思い返す。いくら機体の性能差があったとはいえ、マコトに対しユグドラシルは終始防戦するしかなかった。この世界のISの常識では考えられない固定装備の数々。まるでこの世界の理とは根本的に違うもの。

性能評価試験でユグドラシルが戦い、予備の肉体として保存された『戸山キララ』とどこか似ているヒトを超越した気配をマコトからユグドラシルは感じる。

「最悪の場合はアレを素体としてもいいと私は考えている。馴染むまでに時間がかかりそうだがね。やり方は任せよう。君のことはこれでも評価しているんだよ。私の前の試験体相手に生き残って逃げ延びたのだから」



「お世辞は言えるのね」

「飴と鞭が必要だろう。獣を飼うには」

「……結構。じゃあ、仕事に入らせてもらおうわ」

「そうかい。期待しているよ……ああ、邪魔するものは消してくれて構わない。勿論、誰であつても、ね」

「更識楯無」は拳を強く握る。もう既に、その身や記憶、心でさえも「偽物」であるにもかかわらず、確かに感じる痛みは「更識楯無」が死の間際まで持っていたものだ。遺してきたもの、愛するものへの悔恨、そして、それらへ殺意を向けなくてはならない苦しき。

「（……私はもう、私じゃない。けれども、「私」だと、この記憶が告げている）」

ユグドラシルの言葉には逆らえない。そうなるようになっていた。だが、心まではどうしたつて操りきれない。ユグドラシルは心を理解できていないのだから。

「（……刀奈、簪……ごめんなさい。死んだあとも、これから、迷惑かけちゃうみたいだね。お母さん）」

与えられた肉体は冷酷な瞳を浮かべながら、死してもなお、失われなかったその心は涙を流し、「更識楯無」はユグドラシルへ背を向け、漂白された世界から霞んでいくように消えていく。ユグドラシルはそれを一瞥しながら凶悪な笑みを浮かべた。

「つくづく、人間というものは度し難いな。「個」であると同時に「群」であるせいで弱点が多すぎる。やはり、完全となるには唯一の「個」でなくてはならない。生物としてはそれが正しい姿だ。だから、インフィニット・ストラトスなどでは、人類はこの揺りかごから飛び出せないよ。篠ノ之束」

人類の可能性を賭けた戦いに、ユグドラシルもまた駒を並べる。対局相手はその頭脳だけはユグドラシルをも凌駕する天才。一手目はユグドラシルから。相手はどう差すのか。ユグドラシルは次なる手を待ちながら、宇宙を見上げるのだった。

学年別タッグマッチ。騒動は少々あったものの、予定通り完了し、

その勝者となったさやかとティナは1年生の間では少々有名になっていた。専用機組に次ぐ実力者として、その容姿も相まってファンクラブができたようだった。

「疲れてるね、さやか」

「有名人ってこんな感じなのね……」

マコトの前の席であるさやかは机に突っ伏していた。ファンクラブの面々に定期的に襲撃（ふれあい会）を受けるさやかはこんなことなら優勝しなければよかったと思ってしまう。マコトはオニールの件などもあり、結果的にさやかたちの戦いを見ずに終わってしまったのだが、戻って観戦したというレイラからは中々の動きだったと聞いている。

「レイラから聞いたけど、なんでも剣を投擲しまくったんだって？」

「そ、秘策だね。私、ソフトボール部でしょ？ 投げるの得意なんだよね」

「へえ〜」

「あとはティナに後方支援してもらって突っ込んでガチャガチャしてたら勝った」

「すごいくない？」

つまりさやかはブレードオンリーで戦い抜いたということになる。そのメチャクチャな戦法はクラスメイトの一夏に影響されてのものであるあたり、クラスの中では一歩引いた位置にいるさやかも1組の生徒であることをよくあらわしていた。

「いや、というか、マコトたちと模擬戦したときと試合だと、マコトたちのほうがキツかったからそのせいだよ。あれ基準にしてティナと特訓したら、本番の相手がなんか……まあ」

「ああ……なるほど」

どうやらさやかたちが勝てたのはマコトたちに原因があるようだった。マコトたちタッグマッチ前に行った模擬戦で、マコトと簪は一切の容赦をせずさやかたちと戦った。当然、前世では軍人であるマコトと代表候補生である簪の動きは素人であるさやかから見た際、凄まじいの一言に尽きる。

「あんな三次元戦闘しながら高速で連携する相手なんて本番じやいなかったし、それをしたマコトたちとコメツト姉妹が退場しちゃったから結果的にさ……いや私たちが強すぎるとかそんなんじゃないやなくて「知ってる」のと「知らない」差だと思うんだよねえ」

戦闘における知識はまさに生き死に直結するのはマコトも知るところであり、だからこそフリーダム討伐時にはあれだけの技量差があっても事前の分析のおかげで最終的には撃破できた。

だから、ISの戦闘を知っている新人と知らない新人で戦えば当然、前者に軍配があがる。

「そうだね。戦いつて知ってるのと知らないのじゃ全然動きが変わるから。だから最新機なんて情報流れてこないし、ここで見た最新機の情報も明かしちゃダメってなってるでしょ」

「なるほどね。納得だ」

さやかは機密にするということがそういういった側面もあるのかと納得した。

「まあ、いいや、この話は。優勝してなんか商品あるのかと思つたらトロフィーだけってほんとさあ」

「クラス代表戦と違ってそのクラスに、っていうのも難しいだろうしね」

「得られるのが栄誉だけ、というのは確かにやだなとマコトは現金にも考えてしまう。仕方のないことだが、できれば食堂の食事券がもらえるとか、学費一部免除とか、練習機の優先貸与権などあってもいいのではないかと思う。」

「はー、なんか腹立つからティナとケーキでも食べに行こうかな」

「さやか、ティナさんと仲良くなったんだ」

「そりゃね。いい子だし、おっぱいでかいし」

「……そこ大事？」

「大事でしょ」

「(なんか弾みたいなこと言ってるなあ)」

中学時代に偶然魂の叫びを女子に聞かれ、せっかくあった恋愛の芽を潰した幼馴染みのことが頭に過ぎる。今週末に一度帰ろうとマコ

トは考えているので、彼にも会えるのだろう。

「マコトもくるっ?」

「いつ?」

「今日」

「あ、それならちよつと無理かも。同じ2組のコメット姉妹に誘われてるから」

さやかは「へえー」と流しかけ、慌てて聞き直した。

「ええ?なんで!?!」

「ちよ、声大きい!」

当然、そんな大声を出せばクラス中の目が二人に向く。幸いなことに、今は放課後でいつものマコトとつるんでいるメンバーが誰もいない。残っているのはいつもゆっくりとしている本音のグループだ。

「え?まこりんとさやつち、どうしたの?」

「本音!聞いてよ!マコトがコメット姉妹に誘われたんだって!」

「まこりんが?へえ、すごいねえ、アイドルからお誘いか」

そこまで騒ぐことなのかとマコトは思ってしまうが、そういえば以前、影もなくいきなりCDが置かれていて聞く羽目になったことを思い出す。熱狂的なファンの仕業なのだろうが、もしそんなことが全校生徒にされていれば、おのずと知名度があがっていつているはずだ。

実際、マコトもそのせいで二人のことを調べてそれなりの知名度があると知って、それなりのアイドルなのだとコメット姉妹を認識している。また、彼女らがプライベートである校内でもアイドルであることを辞めていないことが好印象だった。

「飛鳥さん、あの妹さんとの戦いすごかったもんね」

「いや、あのときは必死で」

静寂に褒められ、マコトは思わずそう言ってしまう。怒りによって発現したSEEDでの動きはマコト自身、暴走状態であると今は認識しているの、あまり褒められても困ってしまう。それに、ユグドラシルとの戦いでは通常のSEEDとは違う、頭の中で何かが生まれ変わるような感覚と共に理性を失わずに力を得ることができた。

「(想いだけでも、力だけでも、か)」

周囲がやんやと話す中、ふとマコトは前世最期の戦いを思い起す。既に風化しつつあるが、未だデステイニーの操縦桿を握り、キラと言葉を交わしたことは忘れられていない。力だけになった結果があの最期であり、マコトは前世におけるSEEDとは人類を獣へと戻すものではなかったのかと思ってしまう。

本来のSEEDは今のようには、もっと先へと行くためのものではないのだろうか。

「争いのない世界。みんな自由に飛び立てる世界。あたしは今度こそ、そこにたどり着けるのかな」

束の目指す夢の先。そこへ行くためにはユグドラシルが邪魔だ。だからマコトは決意を新たにす。

——あたしは戦う。人が人のまま、無限の成層圏に飛び立つために。

今、周りにいる少女たちもまた飛び立てるように。飛鳥マコトはあともう少しの間だけ、戦士で在り続ける。

「飛鳥さん？」

「え？」

「いや急にボーツとしだすから」

「ごめんごめん。呼ばれてるけど、コメット姉妹に何をされるのかなあつて考えてた」

「そりや、アイドルからのお礼なんて」

「さやか、なんか最近考えがおじさんみたいになってない？」

「失礼な！」

くすくすとクラスメイトたちと笑いあいながら、マコトはコメット姉妹の部屋へ行く時間がくるまで、雑談に華を咲かせるのであった。

コメット姉妹の寮の部屋はいわゆるVIP用とされる高層階にあるもので、寮母は千冬とは別の教員が務めている。入るためにはその寮母の許可が必要であり、マコトは事前にファニールから許可証を受け取っていた。

IS学園の寮は元々、この学園島がリゾート地として予定されてい

た際に作られた高層型のホテルで、本来は二十数階建てになるところが十六階建てで完成し、その上層部がVIP向けのセキュリティが設置されたフロアだった。芸能人である以上、コメント姉妹もそこに部屋が用意されている。

目的の階にやってきたマコトは事前に渡された許可証であるカードキーをエレベーターを降りた先にあるゲートの読み取り機にかざし、エレベーターホールから寮の廊下に入る。マコトたちがいる階層とは明らかに異なる豪華な作りで、まるで高級ホテルのような様相をしている。

「うわすご…鈴とか卒倒しちゃうんじゃないかな」

そんなわけあるか！と鈴音のツツコミを脳内に流しながら、マコトは伝えられ得ている部屋番号を探して歩く。人気はない。部屋の扉横には大抵入寮者の名前が書かれたプレートがあるのだが、どの部屋もついていない。

「(そういえば、レイラとかセシリアはここに部屋がないとおかしいんじゃない)」

マコトはふと、そんなことを思った。レイラは前世のせいもあってあまり気にしていないが、今世では歴とした元お姫様であり、セシリアもお金持ちな当主だ。マコトからすれば十二分にVIPである。だというのに今はマコトたちの住む下層に同じく住んでおり、それどころか箒まで部屋に迎え入れている。一応はスイートルームだったそうだが、恐らくこの上階にある方が更に豪華に違いないとマコトは考えた。

「えつと…ここかな？」

伝えられた部屋の前に立つと、確かにプレートには英字でコメント姉妹の名前が記されていた。マコトは遠慮なくノックをした。

「こんばんは。飛鳥です」

『ちよつと待ちなさい！今開けるわ』

中からファニールの声が聞こえ、すぐに扉が開かれる。

「こんばん——わっ!？」

開かれた瞬間、オニールがマコトに抱きついてきた。

「マコト、お姉ちゃん」

「はい!？」

柔らかな体の感触がマコトを前から包む。体の大きさは年下ということもあって、マコトの全てを包み込むほどではないが、その身に宿す暖かさをマコトは感じて、思わず顔を赤くする。何よりオニールのマコトを見上げる顔が：愛らしい。アイドルである、ということも事前に2組の生徒たちのせいで刷り込まれていたマコトはよけいにオニールを意識する。

「な、なに、なんで!？」

「ちよ、オニール!？」

フアニールもこの事態は想定外だったようで、部屋の中で固まっていた。そんな双子の姉と、命の恩人が固まる中、オニールはそこそこ豊かなマコトの胸に顔を埋めていた。なにをどうしたものかとマコトは混乱した頭で考えようとするが、どうすればいいのかわからない。

「(こんな時に弾がいれば、このラキスケがー!」って突っ込んでくれて仕切り直しを)」

「このラキスケ！人たらし！浮気者ーっ!」

混沌とした状況を更に酷いものへと変えるものがこの場にエントリーした。

ガタン、と大きな音を立て、天井点検口が外れ、そこから一人の少女が俗に言うスーパーヒーロー着地を決め、怒りの形相でマコトを見た。マコトのルームメイトであり、最近少し気になる相手と同じ赤い瞳と青い髪の少女。

「人の妹に手を出した癖に、天才までひっかけ、更に今度はアイドルにまで！見境いがないの!？あなたは!？」

「ちよ、な、なんでここに楯無さんが!？」

「そんなことは、どうでもいいの!？」

マコトの困惑など知らない、と言わんばかりに楯無はマコトに詰め寄る。その顔はわりと本気で怒っていることがわかり、マコトの処理能力は完全にオーバーフローした。

「……あなたは」

が、ここでマコトに抱きついていたオニールが楯無をじとりと見る。オニールは覚えていないが、楯無こそ本当の命の恩人である。ファニールは後からそれを聞かされ知っていたので顔面蒼白となった。そもそも、オニールがそのことを知らないのは事情聴取の類は妹を守りたいとファニールが全て受けたためだが、それがここで裏目に出た。

「なにかしら、泥棒猫ちゃん」

「あなた、なんなんですか？この人の」

「は？そんなの決まってるでしょ、私は——」

マコトのことを好きな妹の姉、と言いかけて楯無は固まった。いや、これは言っではダメだろうと。もし言っってしまったら妹の恋が御破産になる可能性だってあるし、もしそうならば楯無と簪の関係はもはや修復不可能となるだろう。たたでさえ、人の生き死にから始まったものであるのに、これ以上くじれたら血で血を洗う可能性だってあるのだ。

「私は？」

「うぐっ、わ、私は、そ、そうね、そうね」

「た、楯無さん？」

一瞬にして楯無は追い込まれた。裏社会でどれだけ揉まれたとしても、少女としての更識楯無はあまりにも脆く、抜けていた。こうして勢いのまま現れてしまったことで、楯無の敗北は決定してしまっている。

こっさりこの様子をモニターしている布仏姉妹からは頭を抱えられていることを楯無はまだ知らない。

「わ、私はその、そう！飛鳥ちゃんの！彼女！」

の姉！と心の中で叫んだ。

何を言っているんだ、とその場にいる全員が思った。楯無は言っってしまった瞬間、いやこれはダメだと頭を抱えた。

「お、オニール！その人あんたを助けてくれた人！そんな態度したら不味いわよ！」



「え？そ、そうなの？」

「そう！」

楯無が沈黙したところでファニールはオニールに声をかける。姉に声をかけられたオニールは正気を取り戻したのかマコトから離れる。それを機だと判断したファニールは一気に畳み掛ける。

「とにかく、こんな廊下じゃうるさいから部屋に入りなさい、マコト。それと…生徒会長さんは」

これからマコトにキララのことを話そうとしていたが故に、ファニールは迷うような素振りをみせるが、楯無はファニールの雰囲気を感じてかため息をついてから首を横に振った。

「はあ。ぐめんなさい。取り乱しちゃったから出てきたけど、私は帰るわね。……飛鳥ちゃん。簪ちゃんのこと、よおーく考えておいて」「え？あ、はあ」

マコトを若干睨みながら楯無はその場から離れていく。なにがなんなのかよくわからず、マコトはひとまず今の騒動をなかったことにしてファニールたちの部屋へと入った。オニールはマコトの後ろについてきており、まるで憧れの先輩を見るかのような視線をマコトに向けている。

「はあ。改めて、ようこそ、マコト」

「あ、うん。ありがと、呼んでくれて」

「いいわよ。約束でしょ」

コメット姉妹の部屋の玄関は広く、そこで靴を脱ぎスリッパへと履き替え、まず通されたのが異様に広いリビングであった。お洒落な家具で纏められ、落ち着いた、芸能人らしい内装だった。

「綺麗な部屋だね」

「ええ。しばらくはここを拠点にすることにしてるから、家から幾らか運び込んだのよ」

「そうなんだ」

リビングにあるソファへとマコトは通され、そこに座る。ソファの前にあるテーブルには音楽プレーヤーと紅茶が湯気を立てて用意されている。紅茶の匂いはマコトがよく嗅ぐレイラたちからするもの

とは少し違う。

「じゃあ、早速聞きましょう、キララさんの曲」

「あ、もう聞くんだ」

「だってそれが目的でしょ？」

「マコトお姉ちゃんにも聞いて欲しいな。私とお姉ちゃんの原点」

「う、うん」

コニールの距離の近さにマコトは面食らいながらも、とにかくキララの歌を聴きたいのでスルーする。

ファニールが音楽プレーヤーを操作すると、すぐに曲が流れ出す。それはどこか聞き覚えのある静かな曲調だった。ピアノの伴奏から始まり、穏やかな旋律がスウッと心に入り込む。それがまるで、器を温め、満たすようにしたところで、その「歌声」が注がれた。

『——♪』

「(……この、感じ……)」

聞こえてきた歌声は優しく包み込むような少女のもので、マコトはこの歌声が誰かに似ていることに気がついた。もちろん、この声の主が模倣をしてそうになっている、というわけではないこともわかったが、目指している方向性が同じなのだ、マコトは思った。

「(ラクス・クラインに似てる……)」

ラクス・クライン。かつての敵であり、運命を否定した自由の謳い手。そのラクスが、まだただのアイドルとして、活動していた頃の歌声に、このプレーヤーから流れ出す歌声がよく似ていた。

「いいでしょう？これ、キララさんのデビュー曲なんだ」

「これが、デビュー曲？」

「とてもそう思えないでしょ？けど、圧倒的な歌唱力がこれを歌わせてるの。戸山キララが最強のアイドルとなれた理由のその一がこれ。生歌による圧倒的な歌唱力で、聞くものを捻じ伏せて、虜にして…ファンにしたの」

嬉しそうに語るファニールを横に、マコトはその言葉に納得する。あまりにも、戸山キララの歌は素人であるマコトでさえも驚くほどに上手いとわかるものだった。

「初めて聞いた時、お姉ちゃんも、私も、びっくりして固まって、気がついたらたくさんのキララさんの記事を見ていたんだよ」

オニールが懐かしむように言い、ファニールが頷く。マコトはここまでの完成度の歌を聴き、ファンにならないわけがないと思う。マユもきつと好きになるだろうなと彼女は思った。

そうして、しばらくするとその歌は終わる。

「終わりね。どうだった？」

「……正直、想像以上だった。すつごく、綺麗で、暖かくて、優しくくて……心がぐつとする」「でしよう！あんたいい耳してるじゃない！」

ファニールが心底嬉しそうな顔をする。完全にその表情に、推しのアイドルのことを語る妹を思い出し、マコトは苦笑いだった。

「じゃあ次は目よー」

テンションがあがったファニールがそう言うと、今度はテーブルの上にあるテレビのコントローラーを動かし本体の電源をつけると、付属のDVDプレーヤーを動かし、何かの映像が再生される。

画面に現れたのは煌びやかなステージの中央に立ち、ピンク色のドレスを身に纏った戸山キララだった。動きやすいように膝丈のスカートであるが、破廉恥さはなく綺麗に纏まっている。リボンやフリルがいかにもアイドルとしての彼女を際立たせており、愛らしい顔の造りが更に彼女へ見るものを引き込ませる。

「す、すごい可愛い」

相手が元々仇敵であったことさえ忘れてしまうような姿にマコトはただただ驚く。

「失神しないでよ。もつとすごいんだから」

ファニールがそんなことを言った瞬間、マコトの覗きこんでいた画面の中が、輝きで爆発した。

『いつくわよー！みんな！準備はいい!?私はオツケー！それじゃ、一曲目！』

先ほどの、穏やかな歌を歌っていた声の主と全く同じ声なのに、まるで、人が変わったかのように画面の中の戸山キララは、アイドルらしいアイドルであった。マコトが呆然とするまま、映像は進

む。一曲目の音楽が流れ始め、戸山キララは体を揺らしながら、手に持ったマイクで歌い出す。

その歌唱力はさきほどまでの曲と同じく高く、しかもそれは曲が進むごとに激しいダンスまで入れても、全く崩れない。口パクかと思われ、マコトは思ったが。音に一切のズレなどがない。間違いなく生歌であった。

「すごいでしょう？すごいすぎるでしょ！これがキララさんが人気の理由その2！圧倒的なダンスパフォーマンスと踊っても一切損なわれない歌唱力！」

「本当にすごすぎるよ。こんなの、誰もマネできないんじゃない？」

「残念ながら、私たちもここまでの動きをしながらのこれは無理。キララさんがすごいのはよ」

「それに、さっきまでの歌とは全然違うね、すごいアップテンポだし、アイドルらしい歌だね」

「そこが人気の理由よ。もはや無限の表現力。さっきみたいな静かな歌からこういう可愛い曲まで、一時期双子説とかなりすまし説なんでものが出たぐらいすごいんだから」

「ほんと、まるで人が変わったみたい……」

マコトはそう言ったところで、ふと何か引つかかるものがあつた。同じ歌声、同じ容姿、けれども静かな歌とアップテンポな曲。どこか、どこかでそれと似たようなものを見たことがないかとマコトは思い、すぐに出てきた。

「(そうだ。議長のラクス・クラインと、本物のラクス・クライン……！)」

それは、マコトが前世の世界で目の当たりにした、本物とほとんど見分けがつかない、声まで同じの影武者。マコトはついぞ知ることのなかったラクス・クラインそっくりな——“ミリア・キャンベル”。「(聞けば聴くほど、それにあの振り付けとか……ディオキアで見た時と同じ……どうということなんだ!?)」

まさかなり変わり、なりすましは本当なのではないか、とマコトは思ったものの、それは1曲目が終わり、2曲目の間に入った挨拶で打

ち砕かれる。

『ふう——みんな、今日は私のライブにきてくれて、ありがとう』

先ほどまでの底無しに明るい「アイドル」の戸山キララとは別の印象をマコトは受ける。穏やかで包み込むような、そんな少女に戸山キララは様変わりする。

「はあく…ほんと、キララさんすごい。この切り替えのすごさ、私も真似したい」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんだし、そこはいいんじゃないかなあ」

「オニール。けど、やっぱり憧れちゃうよ」

コメント姉妹の声を聞きながらも、マコトは頭の中をぐるぐるとさせる。どういうことだ、と。戸山キララのこの変化、なんなのかと。

「(まるでこれじゃ、二重人格みたいじゃないか)」

かつての宿敵の不可解な姿に、ただただマコトは困惑するしかなかった。

## # phase—41 「第四の騎士」

IS学園、本校舎内のある一角にその部屋はある。名目上は用務員室とされ、実際に用務員が使用する道具なども収納され、出入りするのも年配の人のいい用務員だ。しかし、用務員室のクローゼットの奥にある扉から入れる地下空間はとも用務員がいる部屋ではない。

そこは執務室である。この学園を治める「理事長」の執務室として用意された地下室だ。だが、地下室といっても室内の全周囲を囲むモニターが森林や草原、果ては書斎のような内装を映像として出力し、地下であることを感じさせない造りとなっている。

この執務室の中心部にある応接間で、楯無は虚を従えて理事長である男性——轡木十蔵と顔を向かい合わせていた。十蔵は珍しくスーツ姿であり、普段楯無のよく知っている「用務員で優しいおじいちゃん」という学園内の姿はなりを潜めている。

「……理事長。それで、今、なんと」

「自衛隊、戦略研究所から七槻しばね：篠ノ之博士を召喚しろと要請があった」

「……まだ、「要請」ですか」

「そう。まだ「要請」だ」

学園の理事長として久方ぶりに外部に呼ばれた十蔵を待っていたのはこの国の国防の最先端をゆく、自衛隊「国防戦略研究所」と呼ばれるインフィニット・ストラトス運用部隊の所属研究所であった。そこで彼は簡潔に言えば篠ノ之束を呼べと言われ、学園に戻ってきた。

もとより、学園に束がいることは裏では公然の秘密として扱われており、これまでもポーズとして自衛隊や政府筋から似たような話があったが、ここ最近はその頻度が増えてきていた。

「やはり、アメリカでの一件ですか」

「だろうね。戦研自体がというよりは、そこからアメリカ行きというのが露骨に読めたよ」

楯無は十蔵の言葉に顔を苦いものに変える。これまで、数度のユグドラシルによる襲撃事件や暴走事件を起こされ、その度にマコトやそ

の周りの生徒たち、果ては千冬——白騎士まで目覚めさせて事件は解決されてきたが、それらはあくまで学園の中だけの話であり、外部で起こされた事件は更識でも隠蔽などはできない。

特にアメリカでのブラック・ロータスによる襲撃はアメリカ軍側が甚大な被害を受けたせいで、これまで抑えられてきたアメリカ側の日本へのIS関連の圧力を強めることとなってしまった。

「楯無くん。わかっていると思うが博士を我々が制御することなど不可能だ。私が彼女に呼びかけたところで無視されるのが相場だ」

「私もそうですよ。簪……妹が彼女と仲良くなっていたとしても、むしろ、だからこそ、強引な手段はとれません」

「ただ、上はそのあたりを理解していないのだろうか」

「散々、更識から報告を上げても未だに家族を使えばと思っているようですからね。世界を100回は一人で滅ぼせる相手に何を考えているのだから」

楯無は束をその気になれば国益のために操れると考えている一部の政治家や軍人があまりにもお粗末であると思っている。最初から思う通りに動かしているような人間であれば、そもそも世界はここまですべて劇的な変化を起こしていないだろう。

なにせ、世界を操っていた組織をたった二人で滅ぼして見せた一人である。現に一度「世界を滅した」という実績があるため、楯無はもし政府から束の暗殺を頼まれた場合はその依頼者を抹殺しようとする気で考えているほどだ。

十歳も同じ気持ちなのか、楯無の言葉には苦笑いだ。

「気楽なものだよ。彼らは。言えば呼べる、博士は女性だから尚更、そう思っているのだろう」

「もはやそこまでくると悲しいとまで思いますよ」

「まったく。ひとまず、学園としてはこれまで通り「七槻しばね」

は特別学級の教員であり、要請は受ける必要はない、と回答しておく」「それがいいかと。……しかし、アメリカ襲撃がこのように響いてくると、ユグドラシルというのは足に枝を絡ませるようなやり方がどうにも好きなようです」

楯無の言葉に十蔵は頷く。ユグドラシルの狙いがこうした外野のしがらみを利用したものであるのなら、なかなか厄介であった。何より、水面下でアメリカは篠ノ之束の奪取を目論んでいる。楯無の所属するロシアと競争する形で、だ。

ロシア国家代表である以上、楯無にもそういった話が来るが「取引上」、楯無はそちらには関与しないと決まっているため、楯無個人としてはアメリカにのみ対応を行っている。といっても、楯無はそんなことをしなくとも束がその気になれば特殊作業員など相手にならないと考えているが。

「だからこそ、真正面から潰すために襲撃をかけた、というわけですね」

「絡め手は博士には悪手だろう。だが、正攻法となると逆に博士には有効だ。現に、アメリカはついに『インフィニット・ストラトス』を独力で生み出したわけだ。1000年は完全コピーがかかると言われるものを」

「例の銀の福音ですか」

更識の諜報活動により、アメリカで発生したブラック・ロータスとシルバリオ・ゴスペルの戦いは詳報が共有されていた。単純な加速力や攻撃性能は白騎士と同等であり、インフィニット・ストラトス本来の宇宙空間での行動も考慮されたため、弾道軌道をとることも可能とされる戦略兵器としては完成された最強のIS。

だが、それを得てもまだ篠ノ之束製のISには一歩及ばない。

「そんな機体でも基地は甚大な被害を受けた。篠ノ之博士の技術力を今一番欲しているのはアメリカだろう。あと一歩で『兵器としてのIS』は完成する…というところなのだから」

「状況は理解できました。更識としては契約上『学園内で襲撃を受けた場合、博士を護衛する』ということになりますので、これまで通り対応を続けますが」

「その点なのだが、今月末の校外学習に理事会からは特別学級の生徒も参加させるべきだと意見が出てきていてね」

特別学級。つまりは対外的には盲目とされているクロエのことで



あり、彼女が動くということはその担任である七槻しばね……東も合わせて動かなくてはならない。楯無はもう理事会にも手が入っているのかと舌打ちをしそうになる。

「思いの外、早かった。当然提案はアメリカの理事からだ。意外にもドイツは反対したが、理由を言えず、押し切られてしまったよ」  
「ドイツは件の組織を滅ぼしてもらったという恩がありますから、それを考慮してかと思いますが」

「ああ。だが、枢軸と連合、結局のところ理事会も国連の縮図となっているのが現状だね。それも、アメリカ襲撃から急速に」

「……本当に厄介なことをしてくれましたね。わざわざ、獅子の尻尾を踏んでいくなんて」

東が学園から外に出されることはもはや確定事項とみるべきだと楯無は判断した。今月末、つまりは7月末に計画されている1年生の校外学習。学園島から少し離れた同じく人工島であるトウゲン島での4日間、絶海の孤島で仕掛けるには十二分すぎるシチュエーションだ。

当然、更識の守備範囲から外れるため東は単独で身を守らなくてはならないが、ここで仕掛けてくるのが秘密裏にきた工作人員ではなく、アメリカの正規軍となると東は無理をできない。

「偶発的な戦闘なんていくらでも可能です。何より、実の妹もいるのですから強引に表舞台に引きずり出せば向こうの勝ちです」

「でしょうね。楯無さん、学園側としては更識がここが引き際だと考えているが」

「更識楯無としては理事長の意見には賛成します。が……私、個人としては承服しかねますから」

「妹さんですな」

「ええ。間違いなく、私の妹はこれから大きなうねりに巻き込まれます。アメリカとの抗争にも巻き込まれるでしょう」

「しかし、楯無さん。あなたはロシアの代表だ。あなたが表立ってアメリカと対立すれば、それは」

「……再来月にはロシアとの契約も満了します。それを機に私は代表

を辞するつもりです」

「なんと。ロシアはそれを許すのですか」

「許させました。……更識楯無というIS乗りの技術全てを彼らに明かし、それと引き換えに」

楯無のIS乗りとしての全てをロシアに明かすことは当代の更識楯無の戦闘技術の一端を明かすという、暗部の頭領としては命を渡したも同然のものであった。もちろん、それだけではない。今現在、更識で掴んでいるアメリカ側の情報のうち、ほんの少し深入りしなければ手に入らない情報を——もちろん、肝心なものは隠しつつ——渡して叶った取引だ。

そこまでして、ようやく楯無はロシア代表から降りることができ、それが意味することは更識楯無として本気でこれから戦うということだった。

「ISはどうするのかね」

「学園の打鉄をもう一機、九尾ノ魂に改造させていただければと」

「構いませんよ。あなた方があつてこそその学園の防諜です」

「…これまでの不手際がありながら、寛大な配慮、痛み入ります」

「相手が化け物とくればそれはあなた方の領分ではないでしょう。あなた方の敵は人間だ」

「ええ」

楯無は頷く。彼女の敵はどこまでいっても人間だけだった。故に、楯無はそう遠くない未来、最大の敵と相対することになる。

「誰であっても、私は負けない。簪ちゃんのために。『あの日』からそう決めたんだ。憎まれてもいい、恨まれてもいい、それでも、大切な人のために戦う。お母様が、そう願ったように」

覚悟を決める少女を前に、十歳はただただ穏やかな表情を浮かべながら、子供たちが戦わなければならぬこの世界を寒く感じるのだった。

白く、降り積もる雪の上に一筋の川ができていた。それは赤く、赤く、命がこぼれ落ちて生まれたものだった。その川の源流へと歩みを

進めれば、一人の少女が倒れ伏す女性を見下ろしていた。

——ちがう、ちがうの、かんちゃん、これは

——どうして

——ちがうのっ

——だいじょうぶだって、まもってくれるって、いったのに

幼い少女の悲鳴と、否定を繰り返す少女の手には血と苦無。倒れ伏した女性はただただ、血を流し、虚な瞳を曇り空に向けるだけ。

——おねーちゃんの、うそつき

それが、更識簪と更識刀奈の、終わりと始まりの記憶。

「ウツ……あ……」

最悪の夢見から目覚めた簪はガバツと体を起こした。ひどい寝汗をかいていて、寝巻きを湿らせている。

「……また、見るようになった……」

先ほどまで見ていた夢は鮮明に思い出され、簪は大きく息を吐く。実の姉との関係を最悪にし、最愛の母を目の前で失った人生最悪の、雪の日の記憶。姉への気持ち少し好転したと思った途端にこの夢を見て、簪はまるで姉のことを嫌っていると言われている気がした。

「(それは、やだ)」

楯無は簪のことを愛している。それは簪もわかっている。けれども、素直に愛情を返すには簪の心は強くなかった。8年前の雪の日、先代の楯無、つまりは母をその手で殺した姉を見て、簪はそれでも姉を嫌いになりきれなかったことが奇跡だとさえ思っている。

「……終わったこと。だから、気にしていられない」

時間はある程度、簪を前に進ませた。進み続けて、飛鳥マコトという恋を知って、愛情を得て、更識簪は母を失った痛みを徐々に塞ぎつつある。もう、とっくの昔に死んだ母を想っても、彼女は生き返りもしないし、簪を愛してくれるわけではないのだ。

隣のベッドに眠るマコトを見る。普段の意志の強い、けれども一歩引いた少しか大人の彼女は眠っている時だけは簪よりも随分幼く見える。普段から先に眠るマコトの寝顔を独占できているのは、今は簪だけだった。

「マコトさん、可愛いな」

自然と、聞かれていないからとそんな言葉が出てくる。優しく微笑む簪はまさに恋する少女だった。

いつも起床する時間より早い、簪はベッドから降りて窓の外を見る。天気は快晴。雲が少しばかりあるが、青空と海のコントラストが美しい朝を演出していた。

「（そういえば、今日だけ。ボーデヴィツヒさんたちが帰ってくるのは）」

つるんでいるメンバーになったラウラがドイツに行き1週間強。現地での仕事を終え、今日で再来日することが事前に伝えられていた。簪はリアル軍人であるラウラに浪漫を感じていて密かにいろいろと聞いてみたくはあったが、どうにもそんなことを聞けるような状況ではないことが昨日の一夏への電話でわかったので、控えるつもりでいる。

ドイツでのユグドラシルの凶行は千冬づてに一夏へ伝えられており、いつものメンバーに共有されている。非戦闘員すら容赦なく殺戮し、ISの絶対防壁すら突破するほどの自爆攻撃。それを聞いたマコトが露骨に怒りを見せていたことに、簪は心配してしまった。

「（……けれど、もし大切な人の夢が穢されるって思ったら、私も同じ気持ちになりそう）」

束の夢をマコトは信じている。だからこそ見せた怒りに簪は納得する。簪もうろ覚えではあったが、束がインフィニット・ストラトスを全世界にばら撒いた際の声明は記憶に残っている。

「（全ての人が宇宙に飛ばしたためのも。それなのに、私たちは兵器として扱っている。自爆して攻撃するなんて…もつとひどい）」

無人機として自爆攻撃までさせる。もはやそれは望まれた使い方からもつとも遠く離れたもので、ユグドラシルがいかにかを簪たちに刻み込んだ。

「（これから、どうなっていくんだろう）」

ラウラが乗っ取られた事件があっても、学校は普段通りに授業が続いて、今月末には人工とはいえ南の島に校外学習をしに行く。当たり

前となりつつある日常は、非日常が時折挟まっても続いている。まるで、ガラスの上を先の尖ったヒールで歩くかのような、不安な気持ちが簪にはある。

簪の学習机の上に置かれた携帯端末を手に取り、簪はメールを確認する。すると、受信したメールの中に、倉持技研からのものがあつた。

「……内容は……二式……！」

メールの内容は待ち望んだ簪の愛機となるべく生み出されたISSの完成報告だつた。まだ細部の微調整があるため、今日すぐにはなく週末の受領となる予定だが、ようやく簪の専用機である『打鉄二式』はあるべき主人の元へと戻ることができる。

「よかつた……これで少しは、マコトさんについていけるかな」

量産機ではマコトの黒騎士にはついていくことさえできない。だから、二式ならきつと、少しぐらひはマコトの力になれることもあるのではないかと簪は思う。何より、インファイターであるマコトと元から支援よりの簪は相性が悪くない。そこに、中距離を得意とする打鉄二式があれば、今よりももつと連携がとりやすい。

「二安心……あれ？続き？」

だが、メールの内容はそれだけではなかつた。画面をスクロールしていくと、あることが文面に記されていた。

「……これって……！」

「あたしが倉持の企業所属に？」

「うん」

メールの内容を見て、簪は慌ててマコトを叩き起こした。悪いと思いつつも、早急に内容を伝えたかつたのだ。打鉄二式の完成報告に、追伸としてつけられたのはマコトを倉持技研のテストパイロットのしたいという旨の文面で、起こされて聞いたマコトは驚き半分、タッグマッチでの動きを見られていたならばと納得半分だつた。

「……正直、どう？」

「いやまあ、前世でもテスパはしてたから、勝手はわかると思うけど」「そうなんだ。それなら、一度、私と行ってみる？倉持に」

「いいけど。いつ行くの?」

「今週末。水着を買いに行つた帰りに、二式を受け取りに行こうと思つて」

「水着…? って、そつか。校外学習の」

週末に水着を買いに行くことを聞いてマコトは校外学習のことを思い出す。思い出すと言っても3日前に真耶がSHRで1組に伝えただばかりで、校外学習の内容はざっくり言つてしまえば遊び半分、特殊状況下でのIS稼働訓練が半分といったもので、そこまで過酷なものではないという。

「うん。…………あの、もしよければ」

「もちろん。一緒に買いに行くよ」

「つ…:うん、一緒に、いい」

簪からの誘いをマコトは迷うことなく受ける。簪の顔が明らかかな喜色に染まったことにマコトは可愛らしいな、と思ひながら、枕元の髪留めを手に取り、前髪につける。簪からプレゼントされた桜の髪留めはもうマコトにとって付けるのが当たり前のものになっていた。「ん、じゃあ早起きしたし、ちよつとランニングに行つてこようかな」

「いつてらつしやい」

「…………えつと、一緒に行かないの?」

「そこは別」

マコトは入学当初から簪をランニングに誘っているが、断られ続けている。簪がマコトを好きになつてからもそれは変わっていない。理由は単純にマコトのランニングの速度が、簪からすればダツシュに等しいからである。簪はどちらかという短距離型で、長距離は苦手であつた。

「そつか。じゃあ、行つてくるね。二度寝はしないようにね」

「し、しないよ」

と言いつつ、簪は二度寝をして寝坊しかけたことがある。マコトはたぶん二度寝するだろうな、と思ひながら着替えを始めた。こうして、いつもの朝を二人は迎えて、過ぎしていくのだった。

そんないつも通りの朝を終わらせて、お昼にはラウラが空港についたという連絡を一夏が受け、明日からまた一緒になるなどという話をいつものメンバーでして、そのままいつもと変わらない午後を過ごして、マコトは簪とレイラを連れ、東の研究所を訪れていた。

「いやいや、よく来たねえ」

「こんにちは、束姉さん」

「お邪魔します。博士」

「こ、こんにちは」

「れーちゃんに簪ちゃんも、いらっしやい」

マコトに加えて、レイラや簪も快く束は迎え入れ、いつものテーブルがあるモニター室に通す。そこではクロエが既に紅茶を用意し、メイド服姿で控えている。

「マコト様、レイラ様、簪様。お待ちしておりました。どうぞ」

クロエの完璧なメイドとしての姿にマコトやレイラはそれぞれの経験から慣れたものの、簪は未だ慣れない。本場のメイドをこんな学園で見れることに未だ若干、興奮していた。

3人はそのままテーブルに着くと、遅れて束もやってきて、空いているレイラの横に座る。マコトの隣は既に簪にとられており、束が座ることはできなかった。だとしても、束は内心悔しがりつつもどうか大人の余裕を取り繕って口を開いた。

「いやあ、それにしても四六時中隣にいて飽きない？」

取り繕うことは一切できずに結局言葉がそのまま出ていた。

「飽きません」

「あそう」

バチバチと視線を交わしながら束と簪は笑みを見せあつて、咳払いした。マコトは首を傾げ、レイラはもう慣れてきたので気にしていない。

じゃれあいはいこんなものにして、と束は意識を切り替え今日ここに3人が来た理由——白騎士のことについて話すことにした。

「さてさて、まーちゃんから事前に聞いてたけど、白騎士のことを聞き

「たいんだっけ？」

「うん。あたしはまあ、その、白騎士が白式のベースになってるってことは知ってたからあんまり驚きはなかったけど、まさかそのまんま呼び出せるのはちよつと驚いたから」

マコトも、まさか白騎士をそのまま稼働可能であることには驚いてしまっていた、何より、機体性能はあの頃のまま。むしろ、零落白夜がある以上、向上しているとも言える。

「…白式、びやくしき、しろしき、アナグラムでしろしき、ですか。わかりやすいぐらいなのに、全く気がつきませんでした」

レイラはあからさまな白式の名前に気が付けなかったことが若干悔しかった。思えば、かつての白騎士の弟が乗る機体としてはこれほどまでにわかりやすく、お似合いのものはないだろう。

「まあ、私、そういうの結構好きだからね」

「そうなのですか。では、やはり白騎士と黒騎士は黙示録から？」

「おっ、れーちゃん博識だねえ。そうだよ、騎士シリーズの由来はそこからとってるんだよ」

黙示録？とマコトが首を傾げれば、簪が素早くその意味を答えた。

「黙示録。終末予言の一種で、そこに登場する4つの騎士…というか、災害？の…こと、かな」

「……………えつと、さっぱりわからないんだけど」

「まあ、マコト、日本ではかなりマニアックな部類のお話です。それに、白騎士、赤騎士、黒騎士、青騎士、というものが出てくるのです」つまり、あたしとか千冬さんの機体はそれモチーフなの？」

「そーゆーこと。ま、名前と色だけだけどね」

東のまとめに、とりあえず強引に納得したマコトはそういうものだと思つて特にこれ以上の考えは浮かばなかった。だが、レイラは違つた。

「ということは、残りの2騎士もあるのですか」

「…鋭いねえ、れーちゃん」

東は少し声のトーンを落としてレイラの推測を正解だと頷く。言いつつ、彼女は手で空を切つてモニターを操作する。そうすれば、途



端にモニターには2機のインファイニット・ストラトスが表示される。「これって……」

簪が思わず声を漏らす。そこに表示された2機のインファイニット・ストラトスは明らかに「IS」寄りのものであった。

「紹介しよつか。赤騎士……こと、赤椿と青騎士だよ」

「赤騎士だけ名前違うのなんでの、東姉さん」

「この子だけは私と、箒ちゃんが乗ること前提で作ってて、篠ノ之流剣術をIS戦で使えるようにするために作った機体なんだ」

「あー、そういえば箒が使ってた形が「赤椿」なんだっけ」

「ついでに言うとな東さんもね。だからこの子だけ、赤椿に名称を変更したんだ」

赤椿、と名付けられた機体をマコトはよく見る。1、2号機である白騎士と黒騎士とはまた違う、流線型のラインが特徴的で、装甲にはそれぞれスリットが見て取れる。それらは放熱用というよりは稼働するためのものにマコトは見えた。

「赤椿の特徴は展開装甲、って言う可変機構を搭載した装甲で、状況によって様々な武装や防御機構に変形可能なんだ。例えば、背部のアンロックユニットは時にはビーム・セイバーに、時には独立稼働してビームランチャービットに、更には物理盾になったりと、いわゆる全領域対応機なんだ。元はただの補給機なだけどね」

「……………補給機というには無理がありませんか?」

レイラは表示される数々の攻撃的な性能に赤椿が元は補給機であつたなど冗談のように思えた。だが、東は大真面目である。

「いやいや、本当だって。そもそも、「騎士シリーズ」のコンセプトって単独での惑星間航行と未開惑星への先行調査機だからね。白と黒を未開惑星での障害排除、赤を補給ステーションとして、青は到達した惑星の分析をする。4機でそういうオペレーションをするために作ってたんだから」

東の言葉で、レイラと簪は改めて、本当にインファイニット・ストラトスが外宇宙への発展のために作られたのだと理解する。あまりに攻撃的な赤椿に対して、そのように言われてしまえば、射撃戦が得意

に見える「青騎士」はなんとなく、索敵機としての名残が機体左右に浮遊するレドームとシールドを兼用するアンロックユニットから察することができる。

「それで、青騎士は元々のセンサー機能を活かした高機動射撃機って感じだね。形も他の12、3号機とは違って直線的でかつこいいでしょ？」

「……確かに」

「お、簪ちゃんはそういうの好きなんだねえ」

「まあ…好きです」

「ならよかった。これ、君にあげようって思ってたから」

唐突に、束が爆弾発言をかます。マコトとレイラは衝撃のあまり固まり、簪は束が何を言ったのか一瞬理解できなかつた。

「……あの、それは、どういう」

「だから、この青騎士は簪ちゃん乗ること前提で作ってるんだよ。機体バランスとか打鉄二式参考にしてるんだよ？倉持の連中の低レベルな技術力を束さんがブラッシュアップした上でね」

簪は改めて青騎士のスペックを見る。主兵装は黒騎士と同じビーム・ライフルを持ち、テールバインダーには打ち切り式のMLRS。格闘戦兵装としてビームを加速し螺旋状に固定した上で槍を形成するビーム・ドリル・ランス「螺旋」。極め付けは大出力のメガ・ビーム・ランチャーと大剣が複合兵装となっている特殊武器「バルムンク」など、機体の詳細スペックなどが全て「理想的な打鉄二式」となっている。

もし、この世界の簪が打鉄二式を自ら作ろうと固執していれば、それはあまりにも屈辱的に映ったかもしれないが、この世界における更識簪は多少いい気持ちにはならなかったが、素直に束の技術力に感心してしまう。

「……束姉さん、その言い方はよくないよ」

「うっ、まあ、それは……」

「束姉さん」

「バ、ごめん」

とはいえ、箒の代わりにマコトが束を叱り、束は簪に謝った。簪は束の技術が隔絶したものであるのは事実であるので、謝罪を受け取りつつも、なぜこれを簪に渡すのか聞くことにした。

「どうして、これを私に？」

「いや、今一番危ないの君だからね？」

「え」

何を言っているんだ、といった表情で束に言われ思わず簪は呆けてしまう。レイラもマコトも一体どういうことだと束に視線を向ける。

「だって、まーちゃん、あいつに目をつけられたでしょ」

「……そういえば」

ユグドラシルが倒される寸前に告げた戸山キララの名でマコトは固まってしまっていたが、そもそも、あの発言はマコトにターゲツトが向いたことの証左であった。束はユグドラシルの言葉をしっかりと聞いていたため、そう察したのだ。

「つまり博士。これからアレは簪さんを狙うと？」

「わかんないよ？でも、どうにもアイツ、無駄に知識つけてるみたいだから、何してくるかわかんないんだよ。人間とは根本から思考回路違うし」

「改めてそう言われると、あたし、とんでもないものと戦ってたね」

「それを圧倒したマコトさんはすごいと思う」

「あ、ありがとう」

隙あらばいちやつき出す二人に束はこめかみがひくひくとしたが、今は大事な話の途中なので流す。

「ま、まあ？そういうわけで、自分の身を守ってもらおう&まーちゃんの足手まといにならないよう、簪ちゃんの専用機として青騎士は調整してるわけです」

「……ありがとうございます」

「簪ちゃんは礼言わなくていいよ。勝手にやってることだし」

「それでも、です」

「うーん、いい子すぎて困っちゃうな」

マコトのことを好きになるのだからむしろ、こうでなくてはと束は

思ったが、事実勝手にやっていることなので、簪に感謝されなくてもいいと束は思った。何より、流石に束も打鉄二式の超高性能版をいきなり渡すのは若干気が引けた。もし束が打鉄二式のスタツフで同じことをされたら確実にキレている。

「それにしても、調整ということはもうできていますか?」

「そうだよ。元々非戦闘用に作ってあったのを改造しただけだからね」

レイラからの質問に束はそのように答える。非戦闘用を戦闘用に作り替えたことは束としても不本意であったが、今は夢を続けるために力が必要だったからこうするしかなかった。

「……束姉さん」

「やだなあ、まーちゃん。そんな顔しないでよ。戦いが終わったら元に戻せばいいし、ちよつとだけの間だよ」

「……だったら、こんな戦い、早く終わらせないと」

「マコト。焦ってはいけませんよ」

「わかってるよ、レイラ。でも、あたしは」

「ユグドラシルを討つ。そうすれば本当にこの戦いは終わります。前世のように、複雑ではない……シンプルなものですよ」

マコトとレイだけのわかる会話であった。前世の戦いとは違い、明確な「悪」がいて、それを討つのは明確な自らの「平和」を持つものたち。純粋な戦士として剣を持って、敵を討つ。マコトは兵器を作り出さざるえなかった束のためにも、ユグドラシルを討つことを誓う。

「……マコトさん。私も、手伝わせてほしい」

「簪さん……でも」

「大丈夫。私は、ずっと守られてるほど弱くないから」

そんなことは知っている、とマコトは思ったが口にはしない。そっか、と頷くだけにとどめる。一連の流れを束は見て、うんうんと頷いて「じゃあいいかな?」と懐から何かを取り出し、簪に差し出した。

束の手に乗っているのは橘の花を模した髪留めだった。

「これが青騎士の待機形態。簪ちゃん、君に託すよ。インフィニット・ストラトスを」

「……………託されました。博士」

簪は躊躇なく、それを受け取る。ISではなく、インフィニット・ストラトス。宇宙を飛ばすために生み出された翼は今しばらくの間だけ、その羽を失い、撃ち抜くためのものとして簪の手に委ねられた。

「……………インフィニット・ストラトス4号機。愛称は青騎士。それが、君のもう一つの剣だよ、更識簪」

改めてその名を伝えられ、簪は髪留めをマコトとは逆の右側につける。

「さて、そんなわけで白騎士の話のついで簪ちゃんにこれを渡したので、あとは私が赤椿を調整して、箒ちゃんに渡せばいいかな」

「束姉さんも乗るんじゃないの?」

「いや、実を言うと束さんは8年前から使ってる子がいるからさ」

これね、と束が指を指したのはいつも頭につけているウサ耳型のヘッドギアだ。マコトはそれが簡易IS「時計兔」と知っていたので、簡易から装備を組まれたものになったのだろうと思った。

「博士の専用機ですか……………凄まじそうですね」

「れーちゃん、気になる?」

「いいえ。好奇心は猫をも殺すと、日本では言うのでしょうか。遠慮しておきます」

「うーん、賢明な判断で好きになっちゃうね。れーちゃんにもあげよっか?」

「世界が平和になったときをお願いします」

「オツケー」

冗談のつもりでレイラは言っているが、束は全く冗談ではなく、後にレイラはこのときの言葉を後悔することになるがそれはまた未来の話。

## # p h a s e — 4 2 「単一の化身」

ラウラが学園に復帰する朝。一週間ぶりにマコトたちは揃って朝食を取るようになった。

「改めて、久しぶりだなみんな」

「久しぶり、つっても一週間とちよつとだけだな」

「まあ、向こうでやるが多かったからな。体感ではどうも長く感じたよ」

ラウラは一夏にそのように答える。表面上はドイツに帰国前のラウラとなんら変わりなく、マコトたちが聞いたドイツの惨状などまるで嘘のような姿だ。しかし、前世では軍人であるマコトやレイラはそれが空元気のようなものであると察した。

もちろん、一夏や箒、シャルロットやセシリアに加えて、簪もそうなのだろうと思っただがドイツでのことは無理に聞かない。

「……聞かないのか？私が帰国したときのことを」

だが、ラウラは氣遣われていると思っただのかテーブルを囲む全員に問いかける。これに代表して答えたのは家族である一夏だった。

「千冬姉からどう言う状況だったのかは聞いてるよ。けど、あんなことが起きてるのを聞いて、今一番辛い思いをしてるラウラにまた聞けねえよ」

「一夏…お前たちも、なのか？」

マコトを含め全員が頷く。ラウラは「そうか」と静かに呟き、無理に聞いてこない一夏たちに感謝した。ラウラとて、何故原隊復帰ができないのか察している。ドイツ軍に戻るよりも、千冬といた方がラウラは安全だからだ。

もしドイツで一人きりとなったときにユグドラシルにまた襲われようものなら目もあてられない。それがラウラには屈辱的ではあったが、同時に、そんな名目があったとしてもラウラに預けられたユグドラシル討伐の任務は完遂したいと思っっている。同胞を容赦無く殺戮した化物を退治したい、と考えたいのは人として決しておかしくない考えだった。

「ありがとう。なら、その気持ちに甘えよう。話は変わるが、結局のところ、シャルロットは問題なかったのだな」

ラウラは話題を切り替えるため、一度聞いてはいたがあえてもう一度シャルロットに編入試験のことを聞いた。シャルロットもラウラの意図に乗る。

「うん。おかげさまでね。詳しい点数は教えてもらえてないけど、山田先生いわく、8割はとれてたって」

「そうか。教えた甲斐があったものだ」

「本当に助かったよ」

編入試験の結果はおおむね、十二分すぎる結果を残しており、シャルロットはラウラの教え方のおかげだと感謝していた。流されるままに生きてきてシャルロットにとって、人生で一番勉強して合格することができた試験は、終わったあとの喜びが強かった。

「まさか本当に一ヶ月で仕上げてしまわれるとは、驚きですわね」

「そうですね。セシリアは半年かかりましたからね、いい点数までくるのに」

「れ、レイラー！それは言わないでくださいまし！」

さらにレイラーがセシリアのことをからかい、皆がくすりとする。実際のところ、セシリアは家業をしながらの試験勉強であり、致し方ない部分はあったが、一緒に勉強をしていたレイラーは時折ISの一部理論が理解できず痼癪をおこしかけていたセシリアをよく覚えている。

「だいたい、レイラーが出来すぎるのです！なぜあそこまでISの理論を簡単に飲み込めたのですか」

セシリアに言われ、レイラーは内心「うっ」と呻いた。うかつな発言であったと後悔しつつ、どう答えたものかと笑顔を浮かべたままレイラーは考える。マコト同様前世のモビルスーツの知識やコスミック・イラの科学知識のおかげでレイラーはすんなりとISのことが頭に入ってきたのだが、そんなことは明かせないため理由をでっちあげる必要がある。

もちろん、その理由は簡単に出てくる。

「お母様が I S 部隊の指揮官なのですから、おかしくはないでしょう？」

「…まあ、確かに、レイラは士官学校に体験で入っていましたか」「そういうことです」

強引に丸め込まれるセシリアを周囲は見ても、明らかに他に何か理由があるのだろうと察したが、やはりレイラの「元王族」という肩書きが追及を控えさせる。あまりこの肩書きが好きではないレイラであったが、こういうときは便利だと思っていた。

「というより、それを言い出したらマコトもだいぶおかしいんじゃないが、シャルロットによりこの話題はマコトに飛び火した。マコトは正真正銘一般人である。レイラと違い、束の関係者であることを伏せれば I S に触れる機会は学園にくるまでほぼない。」

「だがシャルロット、こいつはあの姉の関係者だ。それで全て説明がつく」

「…それもそうだよねえ」

しかし、この面々には束の存在は共有されており、マコトの異常な戦闘能力も一応は説明がつく。簪はそんな面々の会話を聞きながら、本当は前世でロボットのパイロットであったことを知っているのは自身とレイラだけ、というところに少しだけ優越感を感じてしまう。

まるで、スーパーヒーローと秘密を共有しているかのような気持ちだ。

「(けど…織斑くんとか篠ノ之さんのほうが明らかにおかしいと思うけど)」

あの白騎士や天才の弟・妹だからといって超人の域にいる二人の方がおかしいと簪は思ってしまう。特に、最近は学園内の空気で忘れ去られているが一夏は世界で唯一の男性操縦者である。学園の外に出てしまえば女尊男卑は残っているし、世界で女性が優遇されていることも変わらない。

「(織斑くんは一体…)」

彼は簪にとってはもう見慣れた身近な友人だ。同じ企業の I S を使うパイロットでもあり、将来的には仕事仲間となる可能性だっ



る。だが、そういった見方を外して、彼自体の存在に目を向けてみれば織斑一夏とは不可思議なことだらけの存在だ。

タツグマツチではセシリアを追い詰め、千冬と同等の動きをしてみせたという。それで体を痛めたとも言われたが、本当に、たった数ヶ月で素人が世界最強と同じ動きができるのだろうか。簪の頭のどこかが、違和感を感じ取って、一夏へ視線を注がせる。千冬とよく似た、けれども男性的になっている顔のパーツ。体格も身長は千冬よりも高いが、千冬も女性としては身長が高い。それはまるで、双子のようにさえ見える。

「……まさか…いや、前例も、あるし」

ラウラとクロエ。漫画のような何かのクローンとして生み出された少女たちを簪は知ってしまったている。だから、考えてしまう。

織斑千冬と織斑一夏は、どちらかのクローンではないかと。年齢的には一夏が千冬のクローンなのかもしれない。

「（ISを使えるのも、それが理由？）」

妄想だと思いつながらも、簪はその「真実」にたどり着く。たどり着きはしたが「馬鹿馬鹿しい」と切って捨てた。どうあれ、本人たちからはそんな様子も見取れない。

「簪さん？」

「え、なに？」

「いや、急に考え出したから」

マコトに声をかけられ、簪は思考の海から帰還する。簪は当然、考えていたことをそのまま言うわけにもいかず、どう誤魔化したものかと考え、今週末の予定をマコトに話すことにした。

「えっと、マコトさん、今週末のお買い物だけど、どこに行こうかなって」

「ああ、そのことね」

簪の発言に、マコト以外の全員の空気が僅かに固まった。レイラ以外の面々は気がつけばマコトと簪が花は違うとはいえ同じように髪留めをつけていることに、まさかもう仲が更に進展したのかと思ってしまう。

「ここから近いのだとレゾナンスになっちゃうけど、マコトさんはどこか別のところとかある?」

「倉持にそのあと行くなら、倉持の近くでもいいよ」

「……それなら、乗り換えの駅に複合施設があるところもあるから、そこでしょうかな」

「了解。簪さんにお任せするね」

「任せて」

これで付き合っていないというのは無理があるのでは?とシャルロットは思った。束のことも知っているレイラは胃がむずがゆくなるような奇妙な感覚になりつつも、マコトを見守ることしかできない。

「お買い物にいかれるということですが、お二人は何を買われるのですか?」

「そうだな。何をしに行くんだ」

このまま聞き流さそう、といった空気だったはずが、セシリアとラウラが躊躇いなくマコトと簪にそう言った。特にセシリアも察しいいはずなのだが、何故、とレイラは思わず隣にいる親友を見てしまう。

「…?レイラ、何か?」

「いいえ、何も」

当然、その視線にセシリアは気が付くが、レイラはただ微笑むだけに止めた。

二人に何を買いに行くのか聞かれた簪は特に嫌な顔をすることもなく「水着を買いに行く」と答えた。

「なるほど、今月末の校外学習ですわね」

セシリアは合点がいったという様子であったが、ラウラは違ったようだった。

「買いに行く必要があるのか?学園指定の水着があるだろう」

「だな。遊びに行くわけではないのだ」

学園指定の競泳水着があるとラウラは言い、簪もこれに便乗する。なんともこの二人らしい見解であったが、これに対し異を唱えたのは

意外にも一夏であった。

「いや、箒、ラウラ。流石に自由時間もあるだろうし、いいんじゃないか?」

「機能性に優れた水着だと私は感じている。わざわざ新調しなくともいいと思うがな、一夏兄」

「ラウラに同意だ」

一夏はこの二人の会話に苦笑いするしかない。まあ、そこまで言うなら、と一夏はそれ以上のことは言わなかったが、ここでセシリアとシャルロットが信じられないといった顔で話に割り込んだ。

「ありえませんか! 煌く海、熱のこもった砂浜、そこで自らを輝かせる術を最初から放棄するなど、信じられませんわ!」

「:まあ、道着のようなものか」

「ドウギというものはよくわかりませんが、たぶんそうですわね」

「急に雑になってない? 私も思うけど、せっかくの海なんだからちゃんと水着は選んだほうがいいよ」

着飾ることを大切にしているセシリアは冷静さを失い、彼女らしくもなく勢いに任せた言葉を発し、シャルロットは持ち前のマイペースな空気を纏いながらラウラと箒に水着は選んだ方がいいと言う。

「よければ、私が二人の水着選び、手伝ってもいいし」

シャルロットはそう言いながら、簪をチラリと見た。シャルロットは恋する乙女の味方であった。

「(これで自然と二人を巻き込むことなく、こっちは別に買い物に行けるはず)」

「(:これは、シャルロットさん、気遣ってくれてる?)」

シャルロットの意図を察した簪はこっそりサムズアップし、シャルロットも同じくサムズアップを返す。もし、ここでマコトがいつそのことみんなで、と言おうものであれば混沌とした状況となっていたが、マコトと簪の外出の主目的は倉持技研への訪問で、買い物はそのついでのため、言い出すことはなかった。

箒とラウラはシャルロットの提案を特に断る理由はないため、お互い僅かに顔を見合わせて頷いた。

「よかった。じゃあ、私ごとびきり可愛いを選んであげるね」

「いや、可愛い：タイプのはラウラはともかく私は似合わないと思うぞ」

「私はともかくとはどういうことだ、箒」

「まあまあ。ちゃんと箒にも、ラウラにも似合うの選ぶよ。セシリアさんやレイラさんだって、きつと手伝ってくれると思うし」

「さらりとシャルロットに買い物に同行することを言われたセシリアは「も、もちろんですわ!」と胸を張った。レイラはシャルロットの提案の意図を察して、なるほど、と納得し首を縦に降った。

「セシリアほど強くは言わないですが、お二人は十二分に美しい容姿です。きつといい水着もあると思いますから、私も同伴しますよ」

「ありがと、レイラさん」

「二重の意味でお礼を言ったシャルロットはレイラにウィンクした。

「あと一夏も水着買いにいくでしょ?」

「いや、俺は別に元々持つてるのあるし」

「行こうね?」

「アツハイ」

絶対に恋する二人を二人きりにしたいシャルロットは容赦無く一夏も誘い、週末のマコトと簪の買い物：デートは二人きりになることが確定した。

「それで?戻ってきて早々になんの用だ」

放課後、一夏は帰国したばかりの千冬を使用されていないアリーナに呼び出していた。アリーナの周囲にはベンチなどが設置されており、千冬はそこに座り、一夏は彼女の前に立っている。足を組み一夏に相対する千冬は威圧的であり、教師半分、姉半分といった様子だ。

一夏は無理に呼び出したことを理解しているため、すぐに本題に入ることにした。

「千冬姉が白騎士だったんだな」

「それがどうしたんだ」

「……どうにも」

姉が世界を変えた白騎士そのものであったことを一夏は大して重要だとは考えていなかった。そもそも、亡国機業の話聞いた時にそんな予感があった。

「千冬姉が白騎士だったことはどうでもいいんだ」

弟の言葉に千冬は僅かに眉根をピクリとさせる。白騎士であったことがどうでもいい。常人であれば、あり得ない言葉だが、一夏は常人ではなかった。

「俺が聞きたいのは…どうして、あんな『強い』んだ」

一夏の瞳が千冬を、羨むように見る。ユグドラシルとの戦いで見せた千冬の動き。ブランクもあり僅かな被弾こそ許したが、その技量は一夏から見た千冬の中で最も優れていた。彼女が日本の国家代表として戦った時よりも剣筋は鋭く、動きに容赦がない、迷いが無い。

敵を斬って捨てる。剣士としての理に至っているかのようは一夏はあのときの千冬が見えていた。それがわかって、無力感に苛まれた。

白騎士がリバースシフトを迎えた際に一夏は保健室で束からこっそり説明を受けていた。白騎士と同じ性能を叩き出すが、まともな人間であれば体がついていけないという、白式・白夜叉形態。一夏の体は白騎士と同レベルの超加速によって、ISのG制御の限界値を超えたGを受けてズタズタにされた。

——束さん、どうすればそれに耐えられるんだ？

——無理だね。ちーちゃんレベルの超人じゃないと。

束から告げられたのは無慈悲な言葉であるが、事実であった。だからこそ世の中のISは全てコアが自制リミッターを設けて搭乗者の体を守っている。それが無い白騎士、白夜叉に乗ることは自殺行為に等しい。

「束さんは、あのタッグマッチのときの白式が白騎士並だったって言った。それで戦った俺の体は死人同然になった。なのになんで…千冬姉は平気なんだ」

一夏の真剣な表情に千冬はどうしたものかと考えたが、彼女に腹芸はできない。かといって、そのまま彼女の『秘密』を明かすことは憚

られた。千冬は弟に「絶望」してほしくななどなかった。

「鍛え方の問題だ。お前も私がどれだけ無茶な特訓をしていたか見ていただろう」

「いや見てたけど。というか、自覚あったのか」

「特訓をするにあたってただ無茶をするのではなく、トレーニング同様それがどんな効果を生み出すのか、といったことを意識しなくてはならないからな」

「流石にあんな無茶は無理だ。鉄塊背負いながらマラソンとか」

「だろうな。私も二度とやりたくはないよ」

笑いながら千冬は言う。一夏はこの様子では明かす気はないな、と引き下がることにした。正直に言えば無理にでも聞き出したいが、一夏にはまだその覚悟がなかった。この歳になれば一夏も嫌でも両親が失踪したわけではなく「最初から存在していない」ことに気が付く。織斑家には一切の両親の痕跡がなかった。

一夏は中学生の時に一度、自宅の土地が篠ノ之家所有の土地である以上は篠ノ之家に聞けばわかるだろうと、姉の目を盗み篠ノ之神社の現在の管理人である、束とそっくりな従姉妹の篠ノ之珠代に頼んで自宅の権利書などを見せてもらったことがある。得られたのは契約者が最初から千冬であったこと。

織斑姉弟に両親など存在していない証左であった。

「一夏。強くなりたいか」

「ああ」

千冬からの問いに、一夏は迷いなく答える。元々、剣の修羅としての才覚は一夏に備わっていた。それが開花したのがあのタツグマツチでのことだ。千冬はもちろん、彼に「可能性」を見た。

「なら、あいつを屈服させろ」

「……誰を？」

「白騎士だ。あいつはまだ私を主人と見て、お前は私によく似た誰かだと考えている。だから色々と「雑」なんだ」

「ISってそんな人間っぽいのか」

「白騎士は別格だ。長いからな、稼働時間が。ともかく、あいつに認め

られれば多少は肉体への負担も軽減するように考えるはずだ。出力を可変させるのか、それともシステムを構築して受けるGを減らすかはわからんがな」

他のISと違い、白騎士にとって千冬が人間のスタンダードであり、白騎士に一夏を理解させなければいつまでもタッグマッチの二の舞が続くと千冬は踏んだ。まるで振り向かない女性を振り向かせるためにアピールするようだな、と千冬は内心苦笑いした。

「方法は私もわからない。基本的にインフィニット・ストラトスは人間に従順だが、白騎士だけがそのように生意気なんだ。開発者に似たのかもな」

「束さんに似てるって言ううちよつと」

「フツ：そうだな、あんなやつはこの世で一人がちようどいい。一夏、白騎士に自らを認知させるには乗り続けるしかない。私の総搭乗時間はだいたい丸々6年分だ。そこまですてあそこまですて限界に振り切った性能を出せた。お前がどれだけかかるかわからんが、諦めるなよ」

「ろ、6年って……半端じゃないな」

「剣と同じだ。いきなりは無理だ」

「……わかったよ」

「頑張れよ」

丸め込まれた、と一夏は思ったが決して無駄な時間ではなかった。ラウラを襲ったユグドラシル、次に出会った時はかならずラウラを守ると一夏は心に決めていた。かつて、姉が親友たちを守ろうとしたときと同じように。

IS学園の地下にある警備員控室——実質アキとスコールの家となっているそこで、スコールは一糸纏わぬ姿でベッドの上に寝転がりながら、ついさつき「古巣」から受けた連絡を聞いて困ったものだったため息をついた。

「オペレーション・ラビット・ハント：ねえ。兎狩りだなんて、いつからアメリカは狼になったのかしら」

アメリカ軍による偶発的な戦闘を装った事故で「篠ノ之博士」を誘拐又は暗殺する。そんな無茶な作戦が行われることにスコールは強い疑問を持つ。そこまで、祖国は馬鹿なことをするだろうか。やるにしても、もつと盛大な形でやるだろう。大量破壊兵器を所持しているのでつち上げぐらいに。

「……これまでも、フランス、ドイツ、とユグドラシルの手が入ってバカなことをしている。ということはアメリカも同じね。傀儡がいる」学園に現れたユグドラシルの物言いはスコールにも届いていた。過去に護衛を行なっていた際とは比較にならないほど感情があり思考をしている。人間を見下している化け物。だからこそ、人を人形にして遊んでいるのだろうか。

だとすればそれはあまりにも…稚拙だ。

「人間はオモチャにするには中途半端すぎるのよ。オモチャにするならそれこそ、心を壊さないで。そうしないのであれば……ユグドラシル、まだあなたは化け物というには少々、物足りないわね」

かつて、二人の化け物と戦ったスコールは心底、ユグドラシルという世間知らずの赤子がどこまで行くのか見ものであった。

「けれど、ただ見ているだけじゃあ、主治医さんに怒られちゃうし……オータムには少し骨を折ってもらおうかしら」

更識は学園内の警備を請け負っている。だが、IS学園の警備員たちはIS学園の教員・生徒がいればそこは職場となる。

「私たちを傭兵会社から引き抜いて、散々めちやくちやにこき使って、最後はみんな使い潰してくれて……なぜ私たちがモノクローム・アバター身と呼ばれていたのか理解もせず……ユグドラシルとの戦いはあなたたちだけのものじゃないのよ、博士」

魔女は妖艶にも嗤いながら復讐の焰に釜をかける。ユグドラシルは知らぬ間に、自らがその焰を支える薪となっていた。



## # p h a s e — 4 3 「リビングデッド・マザー（前編）」

——旧東京湾、人工島「バビロン」。高度成長期より日本内、東京の人口増加に合わせて作られた埋立地である。現在、日本のIS産業はこの島に集中しており、最もバビロン島内で大きい企業が、かの「世界最強」のISを作成した株式会社倉持先端技術研究所：通称「倉持技研」と呼ばれるIS開発・研究企業だ。

彼らによって生み出された第一世代IS「春風」を初めとした近接戦闘を主眼に置いた扱いやすい機体群は日本以外でも採用されており、その技術力の高さはISを生み出した国として恥じないものである。

だが、それでもソフトウェアの開発は不得意であり、現在の主力機「打鉄」のマイナーチェンジ機、「打鉄二式」の開発は難航していた。テストパイロットである更識簪による不完全な状態での運用で、要求性能を全く満たせていないことが判明したことで、倉持技研は打鉄をベースとすることでは限界があると判明し、結果的に完成した打鉄二式は形状こそ打鉄に寄ってはいるが、もはや中身は全くの別物の機体となってしまった。

しかし、完成したことには変わりなく、倉持技研は簪に完成通知と、組み上げ予定の二号機のテストパイロット候補として飛鳥マコトをスカウトしようと考えていた。情報は漏れるものであり、倉持技研の上層部にはマコトが打鉄で暴走したサイレント・ゼフィルスや、直接タッグマッチで見られてしまった打鉄による暴走フリカアトラとの戦闘を行なったが知られている。

「……本当に、すごい子ね」

そんな内部情報を「更識楯無」は倉持技研の内部にある取締役室で知ることができた。今の「更識楯無」の顔は彼女本人のものではなく、本来はこの倉持技研取締役の一人である女性のものになっていた。

「それにしても、十年経ってここまでセキュリティが杜撰になつてるなんて。更識も力が落ちているわね」

まあ、落ちた原因を作ったのは自分だが、と「更識楯無」は苦笑いする。もともと、倉持技研とは個人的な付き合いがあり、「更識楯無」は潜入も容易であった。この取締役執務室の中に散らばっている「サイコロステーキ」はそんな「更識楯無」によって用意されてしまったものである。

「ごめんなさいね、倉持さん。私、雇い主が違うのよ」

奪い取った顔の主は「更識楯無」はそのように謝罪するが、相手に聞こえるはずもない。悲鳴をあげることもなく、「更識楯無」の得意とする技で彼女は切り刻まれてしまった。

「さて。簪ちゃんが来るまでは時間があるし……どうしたものかしら。コレが片付けもそうだし、逃走手段は……簪ちゃんには悪いけど、これを使いましょうか」

この「更識楯無」はもはや更識の頭領ではなく、蜘蛛のように忍び込み気がつかれずに目的を達成するようなことはしない。今の彼女は「化け物」が雇い主のただの犯罪者であり、強引な手をあえて選んでいる。それはユグドラシルが心までは操れていない証左であり、逆らえない「更識楯無」のささやかな抵抗であった。

「飛鳥マコトさん、かあ。とつても真つ直ぐな人なんでしょうね。すごい良い目をしてる」

娘の友人に「更識楯無」は好印象を受ける。ユグドラシルよりインプットされている情報からも、まさに正義のヒーローそのもので、いずれ彼女に滅ぼされるのも悪くない、と思える。

「だけど、今はそんな彼女を攫って、ユグちゃんに献上しなくちゃいけないわけだ」

簪に恨まれるだろうか、と「更識楯無」は考え、むしろその方がいいとさえ思える。死人に引つ張られるよりは遥かにマシだ。

「刀奈ちゃんはコレ見れば気が付くだろうし……娘たちの成長、じつくり見させてもらいましょうかしら」

「更識楯無」にできることはせいぜい、全力で娘たちを殺しにかかり、返り討ちに合うことだ。幸いなことに、IS戦となれば娘たちに分がある。簡単にやられるつもりはないが、いずれ滅ぼされることは

間違い無い。

「待ってるわよ、簪ちゃん、飛鳥マコトさん」

約束の週末。マコトは簪との買い物及び倉持技研への訪問のため、珍しく妹のマユに選んでもらった洋服を着ていた。グレーのフレアスカートに黒のノースリーブのトップス。マユからは「お姉ちゃん落ち着いてるし、こういうので良いと思うよ!」と勧められて買った服であったが、着る機会がなかなかないため、久しぶりに袖を通した形だ。

梅雨も明け本格的な夏がくる直前のため、まだこの服で大丈夫だろうという気温で、マコトは肩掛けの小さな鞆を持って外に出る。簪は先に校門の前に行き「待ち合わせ」をしている。まるでデートみたいだな、とマコトは思った。彼女は考えてみれば前世でまともなデートをしたことがなかった。

「……デート、かぁ」

マコトはしっかりと簪を意識し始めていた。女性同士、というのは特に気にする気はおきなかった。マコトにとっては相手がどうあれ、好き、という気持ちが大事だと考えているからだ。

「(けど、あたし)」

簪への好き、という気持ちにマコトはまだ曖昧だった。愛したいから好きなのか、親愛として好きなのか。それとも、誰かと重ねて好きなのか、そして、簪のことを考えると同時にマコトは束の姿も浮かぶ。エキセントリックだが、いつまでも子供のような姿はマコトには魅力的に見える。だが、その束への気持ちも、なんなのかがわからない。「……………わかんなく、なっっちゃったのかなぁ」

誰かを愛する、という気持ちが前世でわからなくなってしまったのか、そんな気がマコトにはした。ルナマリアへの愛は嘘ではなかった。シン・アスカはただ傷を舐め合うために、彼女を愛したはずではなかった。そのときの想いは、今の飛鳥マコトにはまるで他人事のようだった。

「(ああいや、実際、他人、だよね)」

もはや遠い、宇宙での物語。今はもう、この世界に根を下ろしたマコトにとって、シン・アスカは間違いなくお別れをした自身なのだ。過去にはもう戻れない。だから、過去に囚われず前に進まなくてはいけない。

「(なのに、あたしはまだ、戸山キララと)」

運命はマコトにある意味味方をしている。過去と決着をつけて、前に進めと、そう言われている気がした。ただ、決着をつけるとは言っても、過去のように剣を手にするわけではなく、マコトは知りたいたいと思っている。誤解なく、キラ・ヤマトのことをマコトは知りたかった。「(いずれ、きっと彼女とは会える。だから、今はもう、こんなことを考えるのはやめよう。簪さんが待ってるから)」

彼女がくれた髪飾りにマコトは触れる。暖かさを感じるこの桜の髪飾りにマコトは想いがこめられていることがわかる。それがなんなのかはわからなくとも、きっと素晴らしいものだともマコトは思う。

「よし、行こう」

マコトは簪が待つ校門に向かうために、部屋のドアを開け、歩み始めた。

校門、といってもマコトが向かったのは裏門だ。どういうわけか簪がそこで待ち合わせと指定したためである。マコトは休日の人気あまりない校内を通り、誰にも会うことなく裏門のある倉庫エリアまでやってくる。午前中、陽のある時間帯とはいえ倉庫エリアは変わらず暗かった。

「…裏門は」

「このまままっすぐだなあ」

「うわっ」

いきなりマコトは声を背後からかけられる。慌ててマコトは戦闘態勢になって構えながら振り向けば、そこにいたのは警備服姿のアキとスコールであった。アキはニヤリと明らかに堅気ではない表情をしており、スコールはくすくすと笑っている。

「おうおう、生身でも良い反応してんな。本当にただの民間人なのか

？それで」

「無理のある話ねえ」

マコトは以前、アキとは会話をしたことがあったが、その時に見た彼女の雰囲気から警備員というには穏やかでは無い気質に、今回の印象で間違い無く彼女はただの警備員ではないと察する。

「……警備員、なんですか？本当に」

「そんな構えんなんて。味方だよ、あたしたちは」

「ええ、それも、篠ノ之博士子飼いの戦力、って言ってもいいかもね」

「あなたたちが、束姉さんの……？」

構えは解くも警戒は解かずにマコトは言う。アキはそんなマコトに「明らかに軍人だよなあ」と内心思いながらも、それは指摘しない。傭兵の矜持であった。

「そうさ。もう聞いてるんだろ、亡国機業のこと」

「…はい」

「あたしらは元、その亡国機業に雇われてた傭兵だよ」

「どうしてそんな人たちがここに」

「うーん、単純に死にぞこなったのよね。それで、戻るところもなくなつたし、行くあてを無くしたからここに就職したのよ」

スコールからもっともらしい——実際に事実であるが——理由を語られ、マコトは訝しむ。アキは明らかに戦闘狂の類だと一眼でわかったが、マコトはスコールから政治家と似たような策謀に長けた印象を受ける。政治将校とでも言うべきか。

マコトからの視線を受けて、スコールはさすが束が自らインフィニット・ストラトスを与えるだけあると感じる。

「それで、なんの用ですか？」

「別に？ただ呼び止めただけさ」

「可愛らしい格好をして、裏門で待っている子とデートかしら？」

スコールは笑みを浮かべながら言うと、マコトが露骨に敵対心を剥き出しにする。スコールは的確にマコトのことを「刺激」する。これまでの戦いをスコールもその立場上確認しているため、マコトが「守ろう」とする気持ちが強いことを知っていた。

「おいおい、そんな気イ張るなよ。あたしら警備員だぜ？裏門に生徒が待つてるなんて珍しい状況なら目にもつく」

「元亡国機業、って言われて簡単に信用できますか？」

「その前に、あたしらは『傭兵』だ。金さえありゃ、あたしらは誰の味方にもつく。依頼主の依頼は絶対だ。それがあたしらの信念ってな。だから、あの嬢ちゃんには手出しなんかしねえよ」

「そうよ、飛鳥さん？…軍人も、そうでしょ」

スコールの瞳がマコトを射抜く。ゾクツとマコトは心を鷲掴みにされるような気配を感じ、スコールの瞳の中に炎が揺らめいたのを幻視する。恐ろしく美しいスコールに、マコトは策謀に長けた印象に加えて、闘争も好んでいるかのように思えた。

何より、マコトに軍人もと、軍の決定には絶対という同意を向けてきた。どこまで彼女たちは知っているんだとマコトは考える。束はマコトが別世界の住人だとバラすことはないの、ただの推測か。

「あたしは民間人です」

「あら、そうね。ふふ、今のは聞かなかったことにして頂戴」

冷や汗が出る。カマをかけられていた。

「ああ、そうだ。悪いな引き止めて、時間大丈夫か」

「大丈夫です。じゃあ、これで」

「ええ、楽しいデートを」

マコトはそのまま踵を返して去っていく。それにスコールは笑顔で手を振るが、アキはその姿に微妙な顔をした。

「あら、オータム。そんな顔をしてどうしたの」

「まるでこれから『地獄に落ちるぞ』って感じがしたぞ。悪役っぽいっていうか」

「そんな気はないけど、ダメねえ。悪い側で働きすぎた影響かしら」  
「かもな」

「言うじゃない」

「言うさ。それが、好きってことさ」

「……………言うじゃない」

甘酸っぱい恋をする若人をからかったつもりでのスコールであった

が、今の自身も恋をし続けているのだと思うのだった。

「それはともかくとして、オータム、仕事よ」

「お転婆なウサギにも困ったもんだな。わかってるよ」

スコールたちと別れたマコトは簪が待つ裏門へとようやく到達した。そこにいたのは夏に合わせた白のワンピースに髪色のジャケットを合わせた簪だった。いつものマコトと同じ気を遣わない服装ではなく、他所行きの格好で、簪の顔立ちの良さを際立たせるナチュラル系メイクがマコトの瞳に映り込む。

「……………」

魅力的な少女にマコトは目を奪われる。

「あ…マコト、さん？」

「か、簪さん、ごめん、待った？」

「ううん。そんなに」

お約束のようなやりとりに、簪は微笑んでマコトは慣れているはずなのに逆にドギマギとする。マコトはそれでも簪に歩み寄って、横に並ぶ。柑橘系の甘い香水の匂いが届く。決して強くは無い、けれどもほのかに漂うものだ。

「簪さん、香水なんて使うんだね」

「……………うん。これ、お母さんが大事な時に使うといいつて、言っていたの」

「へえ」

簪の母親、つまりは更識姉妹の母親の話が初めて出てきて、マコトはどんな人なのだろうと想像する。楯無のように活発な人なのか、それとも簪のように穏やかなのか。もしくはその中間か。真逆の性質を持つ姉妹から、その人物像を言い当てるのは難しい。

ただ、ここでマコトは簪に彼女の母親のことを詳しく聞く気がおきない。今の今まで、簪が語らない、ということはそれだけ、何かがきつとあるとマコトは思ってしまう。

「あたしは香水って使わないからよくわからないけど、なんか良い匂いだね」

「ありがとう。私もこの匂い、好きなんだ」

無邪気な笑みはまるで自慢の母親を褒められたような印象で、マコトは見惚れてしまう。魅力的なこの少女と、これから二人きり。マコトは改めてそう意識すると、顔がどんどん暑くなってくる。

「っ…いい、行こう、簪さん」

「…うん、いっつか」

顔を見ていられず、マコトは思わず前に出て歩み出す。簪はマコトの態度がどういふことなのか首を傾げながらも彼女に続いた。

裏門から程遠く無いところに本州と繋がるモノレールの「IS学園南駅」がある。本数は休日に限り増えるため、マコトたちが改札を抜け、ちょうどホームに入ったところで車両が入ってきた。

タイミングがいいね、と二人は笑みを交わしながらモノレールに乗り込んだ。車内には正門側の駅で乗り込んだ生徒たちもそこそこ乗り込んでおり、マコトたちもその中に溶け込む…には少々、気合の入った服装で、周囲の座席の生徒たちは簪とマコトの空気から全員が内心「なるほどな」といった表情になっていた。——ただ、一人を除いて。

「(うぐぐ…歳の差?歳の差なの!?)」

自慢の欺瞞装置を巧みに利用し、ちよつと発育が良すぎる生徒に変装した束は明らかにカップルな二人に呻いていた。束は恥も外聞も捨てて二人をなんと尾行しているのである。なぜ二人が出かけるのかを知っているのかといえば、それはつい先日、ひっそりと行われた簪の青騎士稼働試験で束がマコトから聞いたからだ。

シャルロットの気遣いは残念ながら、束の存在によつて無に帰した。

「(いやまあ、簪ちゃんも実際可愛いし)」

ライバルといえど、気合の入った簪を見て束は素直に可愛らしいと思った。元々、容姿は代表候補生に選ばれるほどのものなので、悪いわけがないが。

「(とにかく…見守ろう)」

ここで二人のデートに乱入して終わらせるのは束のプライドが許



さない。それをすれば即ち、束自身が負けを認めているようなもので、束のこの尾行の真の目的はマコトをより束に惚れさせるにはどうすればいいか、というものである。好きもの同士、似てしまったのか束へのマコトの好感度は簪とは別ベクトルで相当に高いのだが、束はその想いに気がついていない。

「最初は『バビロン』に着いたらそこで水着を買うんだよね」

「うん。マコトさんは、どういう水着が好き？」

「あたし？うーん、動きやすいのがいいかな」

「……いや、うん、そうなんだ」

簪が「そうじゃない」といった面持ちになり、束も「いやそうじゃない！」と内心思った。マコトのなんともいえない察しの悪さというのは奇跡的なレベルだと束は思った。一夏のラキスケ体質や朴念仁さに劣らないものだ束はマコトに改めてそんな印象を持った。

「(これ、かなりの強敵では?)」

いくらマコトが今世の女性相手でも『恋愛対象になりえる』という自覚を得たところで、マコトの本質が変わるわけではないので、髪留めをプレゼントしても、肝心の領域に達することができないのだ。

「簪さんはちなみに、どんなの着るの?」

「…えつと、実を言うと、ちゃんとした水着買うの…初めてで」

「えつ、そうなんだ。それなら、一緒に選ぼうよ」

「うんっ」

いいりカバリーであった。束もなぜかホツとした。話を聞きながら、束もそういえば校外学習に出るように学園側から要請があったことを思い出し、水着を新調しようかと考えた。クロエを海に連れて行きたいという気持ちもある。

「(なんか畏っぽいけど、どうせ潰しちゃえばおしまいだし、いっか。くーちゃんの水着も用意してあげよ)」

クロエのスリーサイズはクロエ自身の体のこともあり束はしっかりと把握している。なので、本人がいなくとも水着のサイズはぴったりのものを用意できる自信がある。

「(せっかくだから黒系のにして、デザインはフリルついたのとかいい

かなあ。いやもうISスーツ素材で自作したほうが——」

愛娘のことを考え出したせいで束はさつそく当初の目的が忘却されかけたが、気がつけばあつという間に十数駅を過ぎ、二人が目的の乗り換えの駅で降りようとしていたことに気がついたので慌てて下車した。

マコトと簪に付かず離れずの距離を歩く。歩きながらさりげなく束は普段は滅多にやらない、篠ノ之流剣術の気配を消す歩法を使う。千冬と等の実力が高すぎるが、超人である束も十二分に剣士としては力を持つ。これぐらいは朝飯前であった。

「流石のまーちゃんも気がつかないようだね。簪ちゃんは一応暗部の人だけど、気がついてないのかな？」

マコトは仕方がないにしても、こういったものに敏感そうな簪が反応しないことに束は不思議がる。

「……博士かな」

が、簪は反応を返さないだけでモノレールの時から感じていた視線に気がついていて。そもそも束が隠密行動に慣れていないこともあり、気がつけていたのだが、簪もそこまで詳細にわかるほど慣れていないので、ただ知っている気配だ、という程度の感覚だった。

「それにしても、IS学園もそうだけど、こんなに人工島ってあるんだね」

「え？そうだね」

唐突にマコトがそんなことを言い出し、簪は相槌をうつ。人工島が太平洋側にそこそこあることはマコトにとっては新鮮だった。だが、その理由をマコトは知らない。簪はマコトの世界ではこうではなかったのかと思い、人工島が多くなった理由を述べた。

「…人工島が多いのは、今は落ち着いたけど昔は人口増加の影響で本州に土地が足りなくなる、そんなことを言われて、たくさん作ったみたい」

「環境団体とか反発しなかったのかな」

「学園にも、たまにきてるよね」

「そういえば生徒手帳にもそういう団体がくるからって書いてあった

ね」

これからマコトたちが向かうバビロン島も自然破壊だと——実際のところ本当に自然破壊にしか過ぎず根強い反対運動があったが、そこは海の上。陸上ほど強引な反対運動はされなかった。マコトは少し複雑な気持ちになるも、自身はその当事者でもなんでもなく、何か思うことはない。

「そういうえばIS関連の施設って本州にはあんまりないって授業で言ってたね」

「…ビーム兵器とか使うから、本州には置かないようにされてるみたい」

「なるほどね」

マコトはバビロン島にあるという倉持技研やその他のIS企業が洋上にあることの理由に納得した。市街地でのビーム兵器はただ対象を貫くだけでなく火災も発生させる。なにより、実弾と違い、なかなか止まらないため被害が拡大しやすい。ビームが拡散してしまった場合は目も当てられない。

ある種の隔離、マコトはそう思った。

「(そんな島が『バビロン』ってなんか皮肉だなあ)」

栄華を誇ったとされる古代都市の名前を持つにしてはまるで何かを閉じ込めているようにもマコトは感じた。

その感覚が正しいものであることは今はまだ、マコトも気がつかなかった。

# p h a s e ー 4 4 「リビングデッド・マザー（中編）」

「お嬢様、確認終わりました。やはり博士は外出されたようです」  
「確認ありがとうございます」

休日の生徒会、東外出の報を聞き、クロエに確認をとった虚がそこに入室すると、懐かしい柑橘系の香水の香りが鼻腔をくすぐった。夏は近く、虚はもう今年の半分も終わったのだと意識する。

「……どうしたの？虚ちゃん」

「いいえ。今年もつけられているのですね、と」

「そうね。もう、決まり事みたいになってしまったわね」

楯無は虚の言葉に頷きながらも、手に持った香水の入った小瓶を弄ぶ。それはおてんばで、おつちよこちよいなところもあつた、元所有者が壊さないようにと樹脂製となつている。小瓶を眺めながら、楯無は座っている椅子の背もたれに体を預けつつ、天井を見上げた。

「もう、8年ですか」

「ええ、そうね。私が「楯無」になつてね」

「∴時が経つのは早いものです。同時に、世界が変わつていくのも」

「もう少し、早く、変わつて欲しかったわ」

「「楯無」にはなりたくなかつたですか？お嬢様」

「まさか。それが私の運命よ。違う道はありえなかつた。それが早かつた。それだけよ」

笑みを僅かに浮かべながら、楯無はそのまま表情から力が抜ける。そう、彼女が「更識楯無」となるのは決まっていたことであり、避けることはできない運命だつた。それがただ、早まつただけのこと。先代よりも優秀だと言われても、所詮は小娘でしかなく、更識の力は日に日に下がっている。

現代の忍者と呼ばれた更識はもう、既に過去のものとなつている。「盛者必衰。ロシアの件もあるでしょうし、お偉方は果たして私たちをそのまま使ってくれるかしら」

「我々を切り捨ててどうするのですか、この国は」

「篠ノ之博士を手に入れば世界を征すると言っているんだから、し

でもおかしくないでしょう?」

「そんな妄言をお嬢様は真に受けるのですか」

「まさか。ただ、人間というのは強すぎる力を目にしたとき、それを欲するか、滅ぼすかの二択をするものよ。今回は前者」

小瓶を仕舞い込み、楯無は席から立ち上がる。体が動けば、ふわりと、楯無を包み込むように香りが舞った。まるで、最後に見殺しにした“彼女”がそこにいてくれているようで、楯無はほんの僅かに瞑目する。

「(私がこんなふうを考えるなんて、ダメね。かんちゃんが許さない)」「楯無様?」

「もし切り捨てられたとしても、私たちの役目は変わらないわ。いつの時代も私たちは影に潜み、敵の楯を剥がしてきた。たとえ主人に疎まれようともね」

更識楯無としての言葉を彼女は従者へと告げる。いつの世も変わらない更識の役目を彼女は自覚している。誇りと思わずとも、脈絡と紡がれてきた歴史が、血が、それを捨て去ることを許さない。

「無論、我々、布仏も弁えております」

「ごめんなさいね、こんな代の当主に仕えさせて」

「誰がなんと言おうと、お嬢様は私の主人です。……それに、あなたを見捨てるほど、私は薄情に見えるのかしら?」

虚が従者から友人としての態度で言えば、楯無もそれまでの硬い空気を脱ぎ捨てて「それもそうね」と笑う。

「ま、虚ちゃんに見捨てられちゃったら私も年貢の納めどきね」

「ならそんなときは来ないでしょうね」

「頼もしいわ」

先代の“更識楯無”は一人で戦い続けていた。それは単に、先代の戦闘能力が高すぎたがゆえに。楯無は先代とは違い、どちらかといえば更識本来の間者としての能力が高かった。だから、布仏の娘がしきりに做って与えられた。

最初はただの主人と使用人であったが、同じ姉で、互いに性格の相性もよかったおかげで、公私ともにパートナーとして彼女たちの付き

合いはあった。

「さて…雑談はそこまでとして、お嬢様。どうされますか？博士の護衛は」

「そのことだけど、もうオータムがついているそうよ。さすがね」

「彼女が…そうですか。ISは」

「もちろん持たせてるわよ。ロールアウトしたばかりの九尾ノ魂“3尾”をね」

「3号機ですか。2号機は確か、ミステリアス・レイデイのデータを移植中でしたね」

「ええ。それに、私が乗るつもりだし、1号機と3号機は誰でも乗れるように調整をお願いしているわ」

「なるほど」

九尾ノ魂シリーズは楯無主導で量産が進められている。キナ臭くなりつつある情勢に合わせ、学園を守るための力として。平和利用を推進させるために生まれたはずの学園の地下で粛々と。まるでその様は、コズミック・イラにおけるオーブの“アストレイシリーズ”のように。

「1年生の校外学習…無事に終わってくれればいいけど」

「…何かが起きたとしても、我々で万全の体勢を敷く、そうでしょう、お嬢様」

「もちろん。簪ちゃんや本音ちゃんもいるのよ？姉としても、更識の長としても、ちゃんとしないとね」

「はい」

「じゃあ、虚ちゃん、本題いいかしら」

「かしこまりました。…内通者の調査の件ですが、やはり自衛隊がらみで彼女が——」

バビロン島へ向かうマコトたちが次に立ち寄ったのが『箱舟』と呼ばれるアクアラインの中継点であった。かつてはバビロン島を初めとした人工島の生成のためと拠点となった巨大な建設指揮所であり、多段で開放式の重層フロア構造の中に大型重機を多数格納・整備可能

な「巨人の国」などとも呼ばれていた場所だった。

ただ、今こうしてマコトたちの前にある箱舟はその面影は多層式であることぐらいで、現在は巨大な商業施設と化している。

「——というのが、この『箱舟』のあらまし」

「ニユースで名前とかは聞いたことあったけど、すごいね…」

簪から箱舟についての説明を受け、マコトはこの世界の技術力もかなり高い水準にあることを改めて認識する。束でなくとも、EOS自体はISが存在する以前より研究は進んでいた。箱舟の中にあるブティックエリアを指しながら、マコトは簪の手をとって自然と人混みの中を歩いていく。

「簪さん、人混み大丈夫？」

「…あんまり、得意じゃない」

「そうだよ。ちよつと抜けたら休憩しよつか」

「ありがとう」

休日ということもあって内部はそれなりに人で混み合い、マコトは簪に配慮してそうすることを決めた。今二人が歩いているのは入り口からすぐのフードコートに近い場所で、もう少して人の波は途切れそうであった。

そんな二人を追う束はというと、

「(いやあ、無理)」

束も人混みが苦手であり、二人を追うどころではなかった。入り口で早々に見失うという失態を犯しながらも、無理なものは無理だと束はため息をつきながら通路の隅まで移動してゆつくりと前へ進む。

「(まーちゃん、さりげなく手をとってくから彼氏力高いよねえ)」

元が男だからかもしれないけど、束は思いつつも優しい人の優しさを認識する。それが自分に向けられていないのが辛いところだが、今は簪の番だ。

「(それにしても、海のと真ん中なのにこんな人が多いなんて思わなかつ——) わっ」

「きゃっ」

トスつ、と束は何かにぶつかった。体の強い束とぶつかれば当然相

手のほうが弾かれ、東は面倒だな、と思いながらもぶつかった何かへと視線を向ける。すると、そこに倒れていたのは東ですらも目を奪われる美女であった。

「……………ッ！」

栗毛色の肩まで伸ばした髪、透き通るような肌の艶、紫水色の瞳。顔の作りはまさに天性のアイドルと呼ぶに相応しいもので、体つきもバランスの良すぎる、整ったもの。一度見れば忘れることのないもの。

“正しくあろう”とするインフィニット・ストラトスのコアに内蔵された“ユグドラシルの欠片”に誰よりも触れている東の脳は弾けるようにその記憶を呼び覚ます。マコトから聞いた『彼』との特徴と一致する。

篠ノ之東は二人を追うどころではなくなった。

「いたたっ…あ、ごめんなさい！私ったら、全然前見てなくって！」  
発せられたのは明るい声音。アイドル、ならばこうであろうなというもの。立ち上がり方は軽やかで、よく体が鍛えられていると東は感じた。変装している顔は極力自然体に、東は目の前の少女と言葉を交わした。

「こちらこそ、ごめんなさい。お怪我はないですか？」

「大丈夫よ！…こっちこそ、ぶつかって失礼しましたわ！」

「そうですか、よかったです」

可愛く振る舞っているのが露骨なのに、全くクドくなく、東は想像以上だと感じる。篠ノ之東の中にある魅了の技術を持つ者たちの中で、間違いなく目の前の少女は最強と言つてよかったです。

「(あの金ピカババアとは格が違う。こいつ、本当に…………)」

カリスマとはまさにこのことを言うのだろう。無意識に相手を惹きつける強烈な魅力。それを損わせない立ち振る舞い、容姿。なるほど、と東は納得する。これならば世界を手にもすることも不可能ではない。

「ミアー！」

「ん？…鈴！」



目の前の少女を呼ぶ声に、束は目を見開く。人混みをかきわけて、小柄な体はすり抜けてくる。ツインテールに茶色の髪、束もよく知る鳳鈴音がそこにはいた。

「まったく、急に『おいしそうな匂いがするわ!』とかいって走らないでよー!」

「ご、ごめんなさい。私、こういうところ来るの久しぶりで」

「はあ……まあいいけど。それで、この人は?」

「わ、私がつつかっちゃった人で」

「あー……すみません、あたしのツレが」

頭を下げる鈴音に束はいいですよ、と笑顔で対応する。どういうことだ、どういう組み合わせだ、と束は思う。ミア、と鈴音が呼んだ少女は間違いなく戸山キララであった。束の愛する…マコトを殺した張本人であり、この世界では忽然と姿を消し、明らかに不自然な記憶の抹消で忘れ去られた幻の世界的アイドル。マコトに頼まれて探していた相手が、何故、地元の馴染み深い相手と一緒にいるのか。

「というか、この人 I S 学園の人じゃん。どうすんのよ、偉い人だったら」

「いや、それ鈴音本人のいる前で言う?」

「……まあ、それもそうだけど、実際どうなんです?」

「そんなことはないから大丈夫ですよ」

露骨によかったあ、という顔をする鈴音に束はいつもの鈴音だとちよつと安心する。一番の警戒対象といる以上、鈴音の身も少しだけ束は心配だった。マコトの友人であり、変装して神社にいるときは世話になってる食事処の看板娘だ。何かあつては困る。

「じゃ、すみません。あたしたちはこれで。行くわよ、ミラ」

「ええ、そうね。ごきげんよう!」

「ああ、すみません。よろしければ、ここで会ったのも何かご縁ですから、お名前でも」

束が自然な微笑みを浮かべて二人にそう声をかけると、鈴音の目つきが鋭くなる。野生の勘で、束の思惑を何か感じ取ったのかもしれない。

「うーん、鈴ちゃんはやっぱごういとうご苦労だ」

隠し事をするのを嫌うからこそ、鈴音は人の腹の中を感じ取るのが上手い。束とは相性の悪い相手だった。呼び止められたミアはそんな鈴音のことなど気にすることもなく「それもそうね」と束に向いた。

「私、戸山ミア、つていいいます」

「そうなのですね。どなたか、双子のお姉さんでもいますか?」

「え? 私は——」

「あー、あー、すいません。あたしたち急ぐんで、ほら、いくわよっ」

「え、ちよつと、鈴音!? こつちが失礼したんだしこれぐらい——」

「いいから行くわよ!」

「あ、あなたのお名前は……!」

鈴音が強引にミアを引つ張つていく。束はそれを見送りながら、ついに目の当たりにした戸山キララ:今はミアと名乗っていた彼女を考察する。

「事前にまーちゃんから聞いていた通り、あれがポップな曲を歌う時の感じなのかな?アレが素?いやでも、途中で鈴ちゃんが遮ろうとしたつてことはなんかあるかな。——真逆の声音、性格、立ち振る舞い……大方、二重人格、もしくは二層人格。今出ていたのはそのうち片方。どつちがキラ・ヤマトなのかはわからないな」

今すぐにマコトへ聞きたいところであつたが、今は簪とデート中だ。それを邪魔するのは憚られる。何よりも、今、戸山ミアは鈴音のところを身を寄せている可能性が高い。いつからは不明だが、最近のことだろうと束は推測する。

「(まーちゃんに話すべき、れーちゃんに話すべきか)」

地元に彼女がいるとマコトに告げるのはよくないと束は思った、飛び出しかねない。ならば、レイラに、とも思ったが彼女も彼女で、マコトの仇を討ち、殺した相手である。どちらも言つていいものかと束は悩むしかない。

「(はあ。ともかく、今は何か悪さをするつてわけじゃないだろうし、あとで考えよう)」

見たところ、鈴音とミアは単純に買い物をしに来たようで、束は一

先ず放置してもいいと判断する。何より、現在の最重要目標はマコトたちだ。

「さてさて、どこに…」

水着を買いに行くのであればそのフロアに来るだろうと東は読んで、先回りすることにした。

## # phase—45「リビングデッド・マザー（後編）」

箱舟のアパレル店が集まるフロアにやってきたマコトたちはこの後の予定もあるため、早速水着選びに入っていた。もとより、二人はあまりウィンドウショッピングをせずに目的物をすぐに買う癖があるので、フロアに着いてすぐ、水着を見始めていた。

「うーん、ビキニとかは流石になあ」

「マコトさん、鍛えてるから似合うとは思うよ?」

「でもこういうの、東さんとかの方が似合うと思うんだよね」

赤のビキニを見ながら、マコトはそのように言うが簪はマコトの体つきは引き締まっているとはいえそれなりに出ているところは出ている。この赤ビキニをつけた彼女を想像して、簪は「アリじゃないか」と思った。

ただ、自身とのデート中に東の名前が出るのは少し嫌だったので、簪は他のマコトに似合いそうな水着を探すことにした。

「(マコトさんは似合わない、って言うけどビキニ、合うと思うんだよね。だから、こういう紐っぽいのは避けて…)」

簪にとって、誰かの水着を選ぶというのは初めてだった。まだ、姉との仲が疎遠になっていない頃も水着は母親が選んで、姉共々着せ替えショーをしていた。

「(…:夏は、お母さんたちと一緒にこうやって、お店に来てたんだよね)」

もう来ることのない夏は新しい夏に塗り替えられていく。隣にいる少女が、これからの夏と一緒に迎えてくれる人になってくれたらと簪は考えてしまう。

「あ…:これなんか、どうかな」

「どれどれ?」

簪の目についたのは先ほどマコトが手にとっていた赤のビキニより、明度の落ちた濃い赤色のホルターネックのビキニであった。通常のビキニよりは落ち着いていて、赤色も派手派手しさは全く感じさせない。

「悪くないかも。ただ、ちよつと大人っぽくない？」

「大丈夫だと思う。マコトさんは、普段から大人っぽいから」

「そう？」

「うん。そう見える」

実年齢を考えれば二十代後半どころか、三十代だとマコトはふと前世からの年齢を考えてしまうが、そんなことはないんじゃないか、とも思う。実際のところ、幼い頃は年齢相応に悪ふざけもしていたり、飛鳥マコトとしての年齢は前世とは切り離されている。

ただ、簪が似合うと言つて選んでくれたものを無碍にするのも、と思つたのでマコトは一度試着してみることにした。

「…じゃあ、試着してみよっかな」

「ありがと」

微笑む簪に、以前鈴音や妹と買いに行つた際はこんな反応をされた覚えがなく、少し不思議に思いつつもマコトは簪から水着を受け取り、店員を呼ぶ。試着室に案内されると、何故か簪もついてきた。

「あれ、簪さんも水着選びは」

「まずはマコトさんのを決めたい」

「そ、そうなんだ。いいけど」

心なし、興奮しているように見える簪にマコトは若干引きつつも、試着室に入り手際良く服を脱いで水着を身につける。前世の癖か、衣服を脱ぐのは素早かった。試着室の中で鏡の中にうつる自身に、マコトはほんの僅かに驚く。そこには、黒髪の夏だからと少し背伸びをした少女がいた。

自身の容姿を改めてマコトは客観的に見る。前世で男性だった影響かはわからないが、マコトは鏡を見てみると自身の姿を別人のように感じることもある。

「(可愛い、というか綺麗系、なのかな。確かに、簪さんの言う通りかもしれない)」

身につけたことで、何かが破綻しているようには見え、マコトは弾あたりに見せたら面白い反応をしそうだなと思つた。そして、鈴音がそれにツツコミを入れる。

「(また、みんなでプールとか行きたいな)」

前世では享受できなかった長い平和。それがマコトの、今世における宝物の一つだ。これからも、きつとそれは増えていく。この水着もまた、そんな思い出の一つになるかもしれないと考えた。

「簪さん、どうかな」

問題ないだろうと判断して、マコトは鏡に背を向けて、試着室のカーテンを開けた。すると、簪がマコトの姿を見た瞬間固まった。

「――」

「え、えつと、簪さん? どうしたの? へ、変かな」

「そんなことない。すごく、すごく、綺麗」

簪の目に映るマコトの水着姿は直視するのが辛いほどに美しく、似合っていた。けれども、好きな人の綺麗な姿を見たいという欲求が、簪の理性を上回る。強く、可愛く、美しく、まるで物語から飛び出てきたかのような彼女に、更識簪は恋をしているのだ。

そのことを簪は改めて自覚する。

「(どうしよう、すつごく、のぼせそう)」

燃えるように体が熱く、簪はこんな感情になったのは初めてだった。

「簪さん? 大丈夫? 顔すつごく赤いよ」

「大丈夫、問題ない。私も水着を選ぶ」

「そ、そう? それじゃあ、先にこれ、お会計するから、ちよつと待ってね」

「うん」

マコトが試着室に戻り、簪は大きいため息をつく。これ以上の直視は危険だった。

「(さて: 私の水着はどうしよう)」

一先ず、マコトの水着選びが終わり、簪は自身のものをどうするか、と売り場に戻るがそんな彼女に声をかけるものがいた。

「お客様」

「ひゃいっ!?!」

ショップの店員に声をかけられた簪は久しぶりに感じる人見知り

故の緊張感に晒され、声の上擦った。店員は「失礼しました」と言いつつ、簪の横に並んだ。

「もしよろしければ、お手伝いさせて頂いても」

「え、ええっと、う、そのお」

「大丈夫です。彼女さんに似合うって言ってもらえるもの、バッチリ選んであげます」

「か、かのじょっ……!?!」

サムズアップして自信満々な店員に簪は押し切られる。女性同士のカップルが珍しくないせいか、店員は簪とマコトの初々しい様子を既に付き合っているものと判断したらしい。簪はそのまま、店員に言われるがままに水着を選び、マコトが会計を済ませた頃には試着に入っていた。

そうして、簪と合流するために戻ってきたマコトは店員に声をかけられた。

「お連れ様のコーディネートをさせていただきましたが、ご覧になれますか?」

「え? そうなんですか? もちろん」

妙に鼻息の荒い店員に驚きつつも、マコトは試着室の前までやってくる。そうして、店員が容赦無くカーテンを開けると、そこにいたのは普段見慣れたルームメイトではなく——水着を身につけた、美少女だった。

「うえ、ま、マコトさん、ど、どうかな」

「……………」

簪が身につけているのはオフショルダーの水着であった。シンプルで、主張しすぎない水色の生地と同系色の薄い花柄が簪の気質によく合っていた。代表候補生である以上、ひきこもりがちでも美容には気を使わざるえないため、しっかりと手入れをされた肌は綺麗で、マコトは見事に見惚れていた。

「ま、マコトさん、その、そんなにじっと見つめられると」

「ご、ごめん。その、すっごく、可愛かったから」

「か、かわっ…!?!」

固まる二人をよそに、店員は影の中に消えるように温かい目をしながらその場から離れていく。試着室の前に残された二人はそのまま数分、互いに見合ったり、目をそらしてしまった。

その後、無事水着を購入した簪はしばらく言葉が出ず、マコトの後ろを雛鳥のようについてくるだけになった。マコトも妙な高鳴りを覚えつつも、箱舟を後にする。向かう先は本日最後の目的地である倉持技研、バビロン島だ。

「……美少女が二人……ハッ！いや、片方恋敵！」

そんな二人を束も追いかける。マコトと簪が可愛らしかったのに加え、妙な尊さを覚えてしまっていた束はただ見守ることしかできなかった。いけない、と焦りを覚えながらも彼女は箱舟からマコトたちが続いて出ていくのであった。

箱舟から更にバスでアクアラインを通り、到達したバビロン島はマコトたちが普段生活する学園島「カグラ」とは空気が違っていった。まるでビジネス街と工業地帯を混ぜたかのような様相を呈しており、街中には人気ที่それほどない。

バスで直接倉持技研の前まで乗り付けたマコトと簪は入り口で入所証明を受け取ると、事前に言い渡されていた格納庫へと向かうために中に踏み入った。

「ここが倉持技研……」

「そう。私の打鉄二式の開発母体で……織斑くんの、白式の開発元……つてされてる」

「今更だけど、束姉さんどうやってここに潜り込んだんだろう」

「そうだね……警備は更識の手が入ってるはずなんだけど」

正門から見た倉持技研は敷地内に社屋のビルがあり、あとは工場が多数見える。なにも、倉持技研はISだけが自社商品ではないため、様々な研究施設や生産施設を備えていた。途中で工場付近を通るためか、マコトたちは正門の警備室からヘルメットを手渡され、被る。

「それで格納庫って、どこにあるんだろう」

「知ってる。ついてきてほしい」



「ありがと、簪さん。ついていくね」

目的の格納庫は倉持技研の敷地内ではそれなりに奥地にあり、途中で、マコトは社会科見学のような気分になる。EOSの動作試験をしている研究所や、何かの機材を組み立てている工場、中には車両の分解をしているところも見受けられた。前世で深く関わったアーモリーワンの工廠エリアとはまた違った趣があり、新鮮だった。

「すごいね、こんなに色んなものを手掛けてるんだね」

「元々、IS以前から先進的な技術を先取りしてる。バビロン島とかカグラ島を作るときに、ここが作ったEOSが活躍してる」

「そうなんだ」

確かな実績と技術力。それを感じて、マコトはこの企業が作る打鉄の性能に納得する。学園に来てからお世話になってる機体であり、その素直さには助けられてきた。実際に、ここに来るキツカケとなったタッグマツチの事件でも搭乗していたのは打鉄で、暴走するオニールのフリカアトラと互角に渡り合えたのも素直な操作性ゆえだ。

お礼を言わなくちゃな、とマコトは思った。

そのまま、しばらく歩き続け二人は指定された格納庫の前にたどり着く。格納庫が並ぶエリアで、周囲に明らかに重装備をした警備員が巡回していることから、軍事兵器を取り扱う区画であることがわかる。

「ここは、やっぱりそういうところなの？」

「ISをはじめとした兵器の格納庫。この裏に、演習用の施設がある」

「なるほどね。どおりで」

納得しながらも、マコトは簪に先導されて指定されている格納庫へと足を踏み入れる。中に入ると、そこにはいくつかのIS用ハンガーが見受けられ、見慣れた打鉄が何機も駐機されている。そのうち、一つに見慣れない打鉄によく似た機体があった。

「あれが…」

簪の歩みが早くなり、その機体の前へと進ませる。そこにあるのは、ようやく完成した打鉄二式であった。未完成状態とは見違えた姿

であり、以前は搭載されていなかった一対のアンロックユニットには打鉄二式を第三世代機たらしめるマルチロック・ミサイルランチャー・システム、MLRSと高出力の過電粒子砲が搭載され、腰部後方に展開されるスラスタユニットや脚部に見えるスラスタ類から明らかに原型機とは違うとわかる。

「これが、簪さんの新しい機体なんだね」

「うん。長かった…前は未完成で、ひどいめに遭ったし」

「あはは…あれはまあ、事故のようなものでしょ」

「そうだけどね」

同時に、その事故が簪の運命を大きく変えた。まさに、打鉄二式は簪の人生を変えた機体といえるだろう。

「それで、ここで約束してるのって」

「この機体の担当をしてる、倉持の副社長さん」

「そうなんだ。まだ来てないのかな」

約束の相手はまだ来ていないのか、姿を見せていない。どうしたものかと二人が考えていると、遅れて格納庫の入り口が開いた。

「あ、来た」

入ってきたのは長い黒髪のビジネススーツに身を包んだ女性だった。二人の姿を認めると、女性は微笑んで「こんにちは」と挨拶してくる。

「こんにちは、副所長」

「ええ、休みの日に悪いですね」

「いいえ」

何故か、少し距離をおいて止まった副所長は簪にそう詫びて、マコトへと視線を写した。紫色の瞳がマコトを品定めするように見る。ここに来たのはマコトをスカウトするためであり、当然の視線といえた。

「あの、初めまして、あたしは飛鳥マコトと言います」

「ええ、はじめまして。飛鳥さん。私は倉持佳子。この副所長をしています。今日はこんなところまで来てもらって、ありがとうございます」

「いいえ。いつも、倉持技研さんのISSにはお世話になっていますので」

「あら、本当ですか。それは嬉しいです」

マコトは対外的な言葉遣いをしながら彼女に歩み寄る。目上の相手となれば、そうするべきだと思った。副所長に近づくとつれて、マコトはふと気になった。簪の香水の匂いが消えないのだ。簪の香水の匂いはかなり仄かなもので、近くにいれば香りがするものであった。それが何故か、簪から離れても持続する。

「……どうかしましたか？」

歩みを止めたマコトに副所長が首を傾げる。マコトは「いいえ」と不思議に思いつつも、もう一步、彼女に近づいた。

香りがまた、強くなる。

「あの、失礼ですけど、副所長さんも、簪さんと同じ香水をつけているんですか？」

その質問は、場の空気を急激に変えた。

「そんなの、ありえないっ！」

突然、簪が聞いたこともないような絶叫をした。マコトはあまりの声に驚いて飛び上がったかのように振り向く。

「か、簪さん!？」

「だって、この香水は更識家の人しか持ってない、それに、この香りは、香りは！」

「失敗だったわね。つい癖でつけてしまったのがよくなかったわ」

「え——ぐっ!？」

気づいたときには遅く、マコトは突如背後から強烈な衝撃を受けてこの人生で初めて気絶する。マコトを気絶させたのは微笑みを崩さない、倉持技研副所長だった。

簪は動けない。否、動こうとしない。同じ香水を持つものはこの世にもう、簪と楯無を含めて二人しかいない。何故ならば、それは本来消さなくてはならない先代更識楯無の存在した痕跡であるために。その匂いが目の前の、知っているはずの人間からしている。加えて、今のマコトを気絶させた動きは簪も可能なものだ。

ただし、その精度と速度が桁違い：更識流の暗殺術の一つであり、加減すれば今のように対象を無力化できる強烈な手刀だ。

「久しぶりね——簪ちゃん」

「——え」

バリ、と倉持技研副所長の顔面が脱ぎ捨てられる。カツラも落ち、そこにあつたのはとうに失われたはずの、見ることができなくなったはずの、簪が、楯無との仲を決定づけたもの。

「どう、して、だって、だって、あのととき」

「ふふ。そうよ、私は死んだわ。間違いなく。刀奈ちゃんに看取られて」

その名を知っている。それが、間違いのないことだと、目の前に現れた女性の正体を決定づけさせる。

楯無と、簪の瞳によく似た赤い瞳。されども、髪色は黒く、楯無とも簪とも似ているようで似ていない、穏やかな顔つき。だが、その技の冴は当代の楯無とは比較にならない「工作員」としては最強とされた人物。

「おかあ、さん」

「そうよ、私はここにいるわよ、簪ちゃん」

死んだはずの、簪の母親であり先代の楯無——更識柑奈がマコトを抱えて、簪の前に立っていた。

パニックになる思考の中で、簪はなぜ死んだ母がここにいて、なぜマコトを襲ったのか、全くもって理解ができない。体が固まって、行動を起こせない。その様子を見て、柑奈は満足そうに微笑む。

「いい子よ、簪ちゃん。そのまま動かないでね」

「ああ、あつ……」

声も出せない。意識のないマコトを引きずりながら、柑奈は簪のほうへと歩み寄ってくる。今の柑奈は仕事人としてそこにいる。だから簪は動かなくてはならない。でなければ、もうマコトとは会えなくなる。

「(なんで、どうして、お母さんは死んだのに、マコトさんを襲って、こつちに、きて、だめ、お母さんとすれちがったら、すれちがったら、

私は)

柑奈の右手が開かれる。僅かにキラリと反射する糸状のもの。それを認識してしまえば、もう助からないことを簪は知っている。断末魔も、悲鳴も、走馬灯も、最期に愛する人の名前を呼ぶことができずに、更識簪はただの肉塊に成り果てる。

「(わた、し、はこんな、ところでっ)」

「させるもんかあー！」

「ッ!？」

そんな、窮地に格納庫の天井が破られ、突入してきたものがいた。柑奈がマコトを持ったまま素早く簪から飛び退き、簪の前には赤い騎士が降り立つ。まるでそれは再現だった。サイレント・ゼフィルスに撃たれそうになったときと全く同じ。

「博士……!？」

「簪ちゃん、無事!?!おいお前エー!私のマコトに何をしてんだよっ!」

現れたのは赤椿を纏った束だった。片手に専用の刀を装備し、簪の前に立つ束は箒とよく似た鬼神の如き威圧感を持って柑奈に相対する。束の登場に柑奈は邪魔が入ったわね、と少し顔を歪めつつも、余裕は崩さずに対応する。

「あなたが篠ノ之束ね。初めまして、私は更識柑奈。ユグドラシルちゃんの遣い、といえはわかるかしら」

「お前が…アイツのッ」

「ふふ。娘が世話になってるようね。せっかくだし、お礼をさせてもらえないかしら」

「お前、さつきその娘を殺そうとしていただろっ!」

「そうね。でも、それが今の『私』なのよ。更識家の当主ではなく、ユグドラシルという化け物に作られた紛い物。『更識柑奈』の人格と記憶を再現された存在。だから、正確には娘、とは言えないかもしれないわね」

「なにを、いつてるの、お母さん」

目の前にいるのは間違いなく母親であるのに、柑奈の言葉をそのまま信じるのであれば彼女は本人ではなく、本人の写身のような存在

だ。

「簪ちゃん。理解する必要はないわ。知っているでしょう？目撃者に口はないのだから」

飛ばされる殺気。簪は気を失いそうになる。母親が、大好きな母親が、どうしてこんなことをしてくるのか、簪の脳は理解を拒む。ただ、現実として、柑奈はマコトを拐おうとし、簪を殺そうとしている。

「しつかりしろっ！恋敵！」

「ッ！」

「そんなんじゃ！私がまーちゃんをとつちやうぞ！」

「…あ」

辛い現実には強引に束が認識させる。

「この子、あなたにも愛されているのね。モテモテじゃない」

「当然っ！その人は私の『運命』を変えてくれたんだからっ！」

「だったら尚更…奪い返せるかしら？この私から」

柑奈が動く。マコトを抱えたまま、信じられないような速度の跳躍を果たす。一瞬で二人の背後に回った柑奈は打鉄二式の上に立っていた。

「強制解除♪」

そして、本来であれば簪しか乗れないはずの打鉄二式を柑奈が纏う。愛機が奪われ、愛する人も奪われようとされている。簪はどうすればいいのかわからない。わからないが、先ほどの束の言葉が強引にでも突き動かす。

「——青、騎士！」

簪を射抜こうとした荷電粒子は既のところまで展開された青騎士のバリアが防いだ。簪の姿は様変わりする。赤椿と並び、まるで銃士のように青の鎧を纏い、簪は史上4人目のインフィニット・ストラトス起動者としてここに顕現した。

「あら、流石にこれは想定外。けれど、逃げさせてもらおうよ」

柑奈はマコトを抱えたまま、瞬時加速で強引に打鉄二式のハンガーを引きちぎり、束が開けた天井の穴から脱出する。当然、そのまま逃すことなどありえず、束と簪は追撃にうつつた。

格納庫から飛び出した瞬間、二人にはけたたましいアラートが届く。先に飛翔した柑奈が打鉄二式のMLRSのミサイルを全弾発射していた。これを迎撃させて逃げるつもりだと踏んだ束は止まらな  
い。

「簪ちゃん援護！突っ込む！」

「わ、わかりましたっ！」

赤椿の装甲が稼働し、背部のスラスタバーンが全て展開、束の強靱な肉体ゆえに全ての制限が取り払われている赤椿はまるで瞬間移動したかのように打鉄二式を追い越して、頭上をとった。

「早いわね」

「まーちゃんを返せえ！」

「はいどうぞ」

「ッ!？」

斬りかかる束に、柑奈は言葉に答えてマコトを束に投げつけた。衝突すれば生身のマコトはシールドバリアに弾かれ即死する。束はとつさに、空を蹴って跳躍し、マコトを回避するが、そうしてしまえばマコトは地に落ちる。

「まーちゃん！」

「余所見をされていていいの？」

「邪魔すんな！」

薙刀“夢幻”を展開した柑奈が遠目の間合いから束に斬りかかる。束は付き合っていないとバックステップを踏みながら、右手に持った刀を振り抜く。すると、その太刀筋からエネルギーが発生し、斬撃が飛翔した。

「えいつ」

が、その初見殺しとでもいうべき一撃は容易くいなされる。弾かれた斬撃は倉持技研の社屋を破壊する。

「あら、いいのかしら？こんなところで戦って」

マコトは、と束が動こうとするが、なんとか彼女は簪に回収されていた。

「ちゃんと受け止められたのね、簪ちゃん」

「死ねっ！」

「おっと」

こちら側にマコトが戻った、となれば束は遠慮する必要はない。全力の一太刀を柑奈に振り下ろし、柑奈は夢幻の柄を切断される。そのまま後退しながら柑奈はビーム砲を牽制につかい、束と距離をとる。

『博士！私は、どうすれば！』

「モードセレクト、ハイパースケイル！」

簪からの声に、束は管理者権限で青騎士を遠隔操作し、白騎士同様の強力な光学迷彩を発動させる。マコトごと透明になった簪を束は確認するとすぐに逃げるように指示する。

「簪ちゃんはずぐ学園に！私はここで抑える！」

『は、はい！』

「すぐいわね。どこにいるか見えないわ」

関心したように言いながら、束は柑奈がライフルを呼び出し見えないはずの簪に射線を合わせているのを確認する。撃たせない、と束は赤椿の装備である擬似BT兵器をシールドビットモードで展開し、ライフルに向かって飛ばした。

「やらせない！」

「学者さんらしい動きね。無駄がなくてまつすぐで」

「舐めんなよ！」

ビットを回避した柑奈に今度は距離を保ったまま、束が高速で刀を突き出す。今度はその突きに合わせて、ビームが連射される。それらを初乗りのはずの機体で柑奈はこともなげに回避する。

「ISってこんなに自由に動かせるのね。面白いわ」

余裕そうな柑奈に束はどうしたものかと考える。今の攻撃で簪は離脱に成功している以上、相手側にも束側にもこれ以上の戦闘は不利益だ。何より、束がこうして表舞台に晒されてしまったことが痛かった。

「ありがとう。おかげさまで、目的の一つは達成できたわ」

「どういうことだよ」

「わかっているのでしょうか？こうして私と戦うこと自体、間違っ



るって」

「最低だな。お前ら。人の恋路を邪魔して」

「馬に蹴られるわね。でも、今はそのときじゃないわ」

束が構える。ここから逃すわけにはいかない。何しろ、ユグドラシル以外の初めての敵である。それにマコトを狙った相手だ。今すぐにも束はここで柑奈を殺したかった。

「逃すと思ってるの？あんたはここで私が殺す」

「怖いわね。恋は盲目というけれど、そこまで恋に狂えるのは幸せね」

「煩い。とつとと死ね」

「嫌ね」

柑奈が再び瞬時加速をかける。今度はその手に専用のブレードを持ちながら。束は格闘戦に付き合う気はなく、赤椿の性能にモノを言わせて振り切ろうとしたが、簡単に追いつかれる。

「お前、リミッターをッ」

「私、人間じゃないからね」

柑奈が強制解除したのは使用権だけでなく、コアのリミッターもであった。接近を許した束は振られた刃を新たに左手に呼び出した刀で弾くと、そのまま柑奈を蹴り付けて距離を取ろうとするが、それを柑奈はアンロックユニットのビーム砲を至近で放つことで防いだ。

「ぎっ!?!」

「銃が感覚で打てるのも、便利ね!」

容易く突き出された刃は赤椿の脚部ユニットを貫いた。内部構造が破壊されるが、なんとか束の脚は絶対防御が無傷とする。

「っーかまえた」

「はな、れろっ!」

束はこのままではやられると、赤椿の展開装甲を操作し、機体の全身のスリットからエネルギー刃を放出。全身凶器と化した赤椿から柑奈はすぐに退いた。

「必死ね。けど、すぐに楽にしてあげるわ。あなたを倒して、簪ちゃんを追えばいいのだから」

「行かせないって、言ってるでしょ」

「いくら最強の武器があっても、あなたは素人でしょう？多少は心得があるみたいだけど。それじゃあ、私には届かない」

「束さんに、不可能なんてないんだよ」

「若いわね。でも、もう終わりよ」

強がってはいるが、束は実際のところ劣勢であった。いくら赤椿が高性能といっても、束の本領は千冬がいてのもの。単騎での戦闘はあまり得意ではない。おまけに、相手は千冬並の達人であり、束が超人の域にいて、常人以上の武芸があってもまだ届かない。

せめて学園にたどり着くまでの時間稼ぎを、と束は覚悟する。

「じゃあ、さようなら」

「それはこっちのセリフだぜ！」

「なにっ!？」

勝負を決めようとした柑奈に、突如、四方からビームの霰が降り注ぐ。爆炎が上がりつつある倉持技研の敷地内から九尾ノ魂を纏ったアキが有線テールビットを展開しながら柑奈に攻撃を加えていた。

「増援…!？」

「お前、どうして!？」

「あたしらはあなたの護衛だぜ？来るに決まってるんだろ!？」

答えつつ、アキはテールビットを格納し、モーターブレードを展開。柑奈に一足飛びに斬りかかる。性能は圧倒的に劣っているはずであったが、その勢いに柑奈は不利を悟る。束は武芸者であっても戦士ではないが、現れたアキは明らかにプロだ。

「……………ここまでね。よし、逃げる!？」

「ぐおっ!？」

容易くモーターブレードを蹴り上げて、そのまま一気に雲の中へと消えた柑奈。束は捉えていたレーダーの範囲から即座にロストしたことで、追撃を諦める。何より、機体の状況や実力差からも今は行くべきではなかった。

「あく、クソ。久々に楽しめそうな相手だったのに。博士、無事か?」

「……………平気だよ」

「そうかい。ならとつとと離脱しな。ここに来るまでにカメラとか映

像記録は焼いたからよ」

「そう」

「世話が焼ける。ほら、いけよ」

「……」

光学迷彩を起動し、束はそのまま姿を消す。アキも別方向に飛びつつ迷彩を起動した。

「（こりや荒れるな。世界も博士も。ついにおっぱじまるワケか。I S 同士によるトンデモねえ戦いがよ）」

## # p h a s e — 4 6 「終わらない追撃」

「うっ……」

マコトが目を覚めたのはまだ簪に抱きかかえられ、海上を飛んでいる最中だった。

「マコトさん！大丈夫!？」

「かん、ぎし……?」

青騎士を纏った簪が目に入る。マコトは首裏に感じるわずかな鈍痛を気にしつつも、状況の把握に務める。気絶したのは何故か。倉持の副所長に唐突にやられたからだ。そうだというのに、今簪に抱えられているということは、一応の危機は去ったということになるのだろうか。

「……あたし、どうなって……」

「……マコトさんは、あのとき、私のお母さんに気絶させられたの」「あの人が、簪さんのお母さん?」

「ううん、正確には副所長に変装していた。マコトさんを気絶させたあと、私を襲って、打鉄二式を強奪してマコトさんを拐おうとしたの」「待って、どうして、簪さんのお母さんがあたしを拐おうとするの。それに、襲われたって」

いきなり出てきた情報にマコトは混乱する。簪の表情は沈痛だ。マコトは今すぐにも聞きたいことが山ほどあったが、今はマコトが言葉を詰めてはいけない。簪のほうがもつと辛いのだと悟った。

「……私のお母さんはね、8年前に死んだはずなの。私と、お姉ちゃんの前で、血塗れになって、死んだの。死体も、見たの」

「……そんな」

簪の脳裏に過ぎる、雪の中で倒れ、死闘の果てに逃げ落ちた母の死体はよく覚えている。その前に立つ、まるで見殺しにしたかのような姉の姿も。

「死んだ理由はよくわからない。きつと、任務の最中で、何かと戦って、撤退したんだと思うけれど」

「確か更識は暗部、って言ってたよね。簪さんのお母さんも、そうだった」

たの？」

「うん。先代の更識家当主…つまり、お姉ちゃんの前の『更識楯無』。それが、私たちのお母さん、更識柑奈」

「襲名なんだ…楯無さんの名前って」

「そう。だから、お姉ちゃんも本当の名前は『楯無』じゃないの」

まるで時代劇のようだとマコトは思ったが、現代も続く伝統であり、簪たちにとっては今の出来事だ。

「話が少し逸れた。…お母さんは、間違いなく、死んだ。死んだ、はずなの。だけど、あのお母さんはこういったの、『更識柑奈』の人格と記憶を再現された存在」って

「人格と記憶を再現って…まるでそれじゃ完全なクローンみたいな」

「そうだと思いたい。でも、あの技も、動きも、匂いも、顔も、声も、全部、全部、お母さんだった」

声が震える。会いたかった、もう一度声を聞きたかった。そんな相手に殺されかけた。それがどれだけ心にダメージを与えたのか。簪本人も測りきれない。マコトもまた、どう言葉をかければいいのかわからない。マコトからすれば前世のマユがそうだったとしたらパニックになる。

もはや、恐怖としか言えない。

「…それで、お母さんはユグドラシルの遣いだって、そう言ってた」

「そんな…！それじゃあ、簪さんのお母さんは」

「ユグドラシルに、造られた…たぶん、そうなんだと思う」

「…アイツ…人の命を、なんだと思ってるんだ…！」

まるでその怒りはロドニアの連合軍の施設を目の当たりにしたときのようなだった。人の死は決して犯してはならないものだ。マコトは思っている。彼女は前世の大戦で多くの人々と別れを繰り返した。家族、仲間、恩人、想い人——誰との別れも全て悲しく、苦しく、痛く、けれども覚えていなくてはいけないものだ。

憶えて、それでもとらわれず前に進むために。生きている限り、明日は続くのだから。生き続ける限り、飛鳥マコトは別れた人々のためにも、明日へ進まなくてはならない。そんな思いを抱えている彼女か

らすれば、ユグドラシルの所業はとても許されたものではない。

「それに、家族と、殺させあうなんて……許せない……！」

「マコト、さん……」

怒りを見せるマコトに、簪はほんの少しだけ心が軽くなる。もし、一人だったら簪はこの出来事に耐えきれなかった。今こうして、マコトを抱えて飛んでいるのも束という恋敵の存在があったからだ。

彼女に叱咤されて、簪は強引にでもその身に鎧を纏った。

「そうだ……それで、今、私は博士のおかげで、こうしていられているの」

「博士……って、束姉さん？まさか、束姉さんは」

「うん。戦ってる。私のお母さんと」

「大丈夫かな……」

「わからない」

簪は母親の全てを知らないし、束のことも全ては知らない。どういう戦いになるのかも見当がつかない。マコトは束の実力がある程度知っているが、実戦での動きは知らない。ただ、不意をつかれたら不利になるとは考える。

「……マコトさん、今、戻ろうと思ってる？」

「わかる？」

「ダメだよ。博士が、稼いでくれた時間なんだから」

「けど……」

「今回、敵はマコトさんを狙ってきた。私や、博士ではなく、あなたを」  
想定外の出来事であり、マコトもそう言われ沈黙するしかない。  
マコトは彼女たちを守る側であると思っていた。それが現実として守られてしまっている。

「今、あたしたちはどこにいるの？」

「学園から十数キロの海上。飛びながら青騎士の機能を確認したら光学迷彩以外にも電子戦装備があったからそれを使ってレーダーとかの反応を切ってる」

「そうなんだ」

簪は青騎士の全てをまだ把握できているわけではなかった。機体の両側に備えられたレドームとシールドを共有する狂氣的な装備と

テールバインダー内蔵のMLRS。未だ手にできていない専用バスターランチャー内蔵の大剣バウムンク。他にも装備があるが、十全に使いこなせる自信がない。それでも、元々が惑星探査用の調査機として開発されているせいも、電子戦機能が充実しており、システム類もかなりわかりやすく作り込まれ、簪は初見でも迷わず操作できた。「(本当に……インフィニット・ストラトスは戦闘用じゃないんだ)」

青騎士のシステムの作りが明らかに戦闘用とそれ以外で違っていることに気がついた簪は束が抱える葛藤をほんの少しだけわかった気がした。

「ひとまず、学園に着いたらマコトさんは保健室に連れて行く」

「ありがとう」

「どういたしまして」

束が気がかりではあったが、窮地は脱している。今は戻るしかない。二人は笑みを交わしてから水平線の先を見る。うっすらと、遠目に学園の影が見え始めていた。

「ここまでくれば——ッ!」

学園に近い、安堵した簪に突如アラートが届く。視界にあるレーダーが何かを捉えた。高速で上空から接近する機体反応。

「簪さん!?!なにがあったの!?!」

「何かがくる!」

「黒騎士を呼ぶから離して!」

「でも……!」

「敵かもしれない!早く!」

マコトにせつつかれ、簪はマコトを自身の影に入れる形で手放し、マコトは離された瞬間に黒騎士を展開する。すると、確かにマコトにも接近警報が届く。高熱原体。黒騎士と青騎士が向かってくるもののデータをライブラリから呼び出す。

——接近する機影 | 照合 | 倉持技研所属 | 打鉄二式

「打鉄二式……!?!そんな、どうして!」

二人が上空へと目を向ければもう敵の姿は捉えられた。黒髪の女性——更識柑奈が間違いないそこにいた。

『見つけたわよ、簪ちゃん』

「あ、あ、あ、お母さん、どうして」

『任務はちゃんと遂行するの。プロだからね』

マコトは柑奈が確かに楯無の母親であることを認識する。口調と雰囲気がよく似ている。そして、簪がここまで震えているのも初めて見る。触れてはならない彼女の“傷痕”をユグドラシルは穿り返し、こうして突きつけている。それがマコトは許せない。

「簪さん、ここは任せて、学園に」

「でも、それじゃあマコトさんが！」

「大丈夫。さつきは油断したけど、真正面からならあんなふうにはならないよ」

黒雪片を抜きながら、マコトは簪の前に立つ。確かに、前世も含めパイロットとしてはこの世界では最高峰にいるかもしれないマコトであれば柑奈と互角に渡り合うことができるかもしれない。けれども、彼女の狙いはマコトであり、このまま戦わせるのは相手の思う唾だ。

そうとわかっていても、簪は母親と戦うことなどできない。

『勇ましいのね。飛鳥マコトさん』

「……あなたが、どういう存在なのかはわからない。けれども、今は敵だっことはわかってる」

『へえ。なら、どうするの？実の娘の前で……私を殺せるの？』

「殺さない。でも、退いてもらう」

「マコト、さん」

簪の不安そうな声が、マコトの覚悟を決めさせる。守るべき少女を背に、戦士は今再び翼を広げた。

「もう誰も、悲しませない。あなたがどんな事情で、どうして敵対するのかもわからない。でも、あたしは簪さんの悲しむ顔を見たくない。だから、あたしも拐わせない。あなたも殺さない」

目を閉じ、マコトはイメージする。体の奥に眠る“種”を。あのときの、ユグドラシルの時のように、弾けさせるのではなく、芽吹かせるように。



意識した通りに、マコトの中で種は再び発芽する。思考がクリアになり、体が軽くなる。黒騎士はマコトのSEEDが覚醒したことを感知して、全ての性能の制限を解除する。

『欲張りなのね』

「欲張りでいいです。それぐらいがきつと、ちょうどいいんです」

人の一生は短い。だから、できることをする。助けたいと思う人がいれば全てを救う。それぐらい、してもいいはずだ。マコトは目を見開き、それに合わせて黒騎士の背中から光の翼が広がる。

「さつきは不意を突かれたけど、今度はそうはいかない」

『…これは確かに、少し、頑張らないといけそうね』

「……いくよっ」

戦端が開かれる。マコトが一気に加速し、柑奈に斬りかかった。柑奈はその速度に目を見開く。下手をすれば先程の束と同等。しかし、その目はただ敵を見るだけではない。柑奈がどうくるかの先まで読もうとしていることが見て取れる。

目標の少女は間違いなく戦士だと判断する。

「ふふっ…これは少し、骨が折れそうね」

「はああああっ!」

振り下ろされた黒雪片を柑奈はギリギリで回避すると、右手に持っていたビーム・ライフルを即座にマコトに向けトリガーを引く。マコトはほぼ接射にもかかわらず、残像を残しながら回避する。あらかじめこれは読んでいなければできない動きだ。

「経験豊富なのね!」

「それは、どうもっ!」

ここまでの移動の間に、娘と同じように機体を学習していた柑奈は打鉄二式が中距離戦機であることを理解しており、即座に距離をとりに、アンロクユニットからビームを放ちつつ、牽制にビーム・ライフルも撃つ。

「射撃戦をしようって言うの?なら!」

そっちがその気なら、とマコトは黒雪片を格納すると、即座に右手にビーム・ライフルを呼び出し、前にブーストしながら弾幕を張る。

マコトを狙う柑奈の射撃はそこまで正確ではない。戦いを見守ることしかできない簪は母親がもしかして飛び道具が得意ではないのかもしれないと考えた。

「(お母さんは、確か体術と鋼糸術が得意って聞いたことがあった。だから、飛び道具は…ダメなのかな)」

その簪の見立ては当たっており、柑奈は決して飛び道具が得意ではなかった。ただし、マコトは前に進みながらも避け辛さは感じている。アンロックユニットを含め、3門から放たれる敵機のビームは全て、うまくマコトの回避運動を誘導し、強引な回避を誘発させている。「うっ…!」

数発は直撃コースであり、それはビーム・シールドで防ぐ。

「へえ、すごいわね。光学防衛? 便利なものね」

柑奈の言葉に合わせて、再び打鉄二式のMLRSが展開する。少ない数のミサイルが放たれ、マコトを左右から狙ってくる。爆発で巻くつもりかとマコトは感じて、多少の被弾は覚悟しつつ右手のライフルを格納し、両手の甲にあるビーム・シールドを最大出力で展開。光の壁を作り出して、前方に瞬時加速した。

「前に出てくる…!?!」

「あたしの経験値、舐めないで!」

「確かに、これは侮っていたわ…!」

柑奈にとって、マコトの動きは想定外であった。確かに、ユグドラシルからは記録を得ていたが左右、前方からの攻撃に対し上昇、下降、後退を選ばず更に加速して突っ込んでくるなど思わない。

大胆なマコトの動きに柑奈は右手に新たな武器を展開する。今度は長いランスだった。

「こんっ、のおおおー!」

ビーム・シールドを解除し、マコトは再び黒雪片を抜き柑奈に向かって振り下ろす。それを柑奈はランスで受け止める。西洋の馬上槍のような武器は打鉄二式の新たな装備であり、簪もデータは知っていた。

「あれが、『螺旋』…!」

専用バスターランス、螺旋。データとして知っているだけでない、簪自身かなり気に入っている武装だ。その特性はなんといつても、ただの「槍」で終わらない。

「パワーは少しそちらの方が上のようね」

「このまま、押し切る！」

「けれど、こんなのはどうか？」

黒雪片の刃と拮抗するランスが突如、回転し始める。マコトは驚愕し、流される黒雪片ごと弾かれないように、一度弾いて、距離を取ろうとする。

「逃さない」

「くっ……！」

が、柑奈もそこまで甘くはなく、螺旋の先端部をマコトに突きつけ、ランスの持ち手部分についたスイッチを押し込んだ。刹那、ランス部分が回転しながら、射出された。

「避けてー！」

「間に合う……!?!」

予想外の攻撃に、簪の声を聞きつつもマコトはなんとか回避しようとするが、回避しきれず左背部に懸架されている超射程ビーム砲が破壊される。それと同時に、射出されたランスが爆発し、マコトは強烈な衝撃を全身に浴びる。

「うわあああああっ！」

「マコトさんっ！」

爆炎に包まれるマコトに、簪は救おうと動くが、それを柑奈が見逃さない。容赦無く彼女は娘にトリガーを引く。

「ひっ!?!」

「ダメ、簪ちゃん。動かないでね？」

かつて向けられた笑顔は殺気に満ちている。簪はその場に釘付けにされる。

爆発の直撃を受けたマコトはSEEDのおかげもあって気を失うことこそなかったが、全身を爆風で打ち付けられたことで痛みがあった。絶対防御を貫通するほどの強烈な爆発。黒騎士でなければやら

れていたとマコトは思いながら爆炎から飛び出す。

「これぐらいでえー！」

「まだ動けるのね…流石といったところかしらー！」

迎撃に放たれたビームをマコトは回避しつつ、丁寧に戦っても無理だと判断する。彼女には今の「全て」をぶつけるしかない。

「絶対に、あなたを退かせてみせる！黒騎士！」

愛機の名を呼び、マコトはまずはライフルを連射する。その射撃は全て柑奈の動きを制限させるもの。

次に、両膝、両肩のブーメラン全てを引き抜き一気に投げつける。

「当たらないー！」

柑奈は当然のようにビーム・ブーメランを全て回避するが、回避した時にはマコトがもう目の前にいた。先程見た時よりも遥かに早い。光の翼が更に輝きを増していた。

「はああつー！」

「くうー！」

咄嗟にブレードを呼び出し、柑奈はマコトの振るう、リミッター解除状態のビーム刃を発した黒雪片を受けようとするが簡単にブレードは破壊される。そのまま切り裂かれるわけにもいかず、柑奈は振るった勢いのまま力の流れを変えてマコトにタックルをかける。

だが、最大出力稼働の黒騎士の勢いには勝てず、逆に弾き飛ばされた。

「きやあつー！」

そこに、先程回避したブーメランが戻ってきて、柑奈の打鉄二式を切り刻む。アンロックユニットが損傷し、左側が脱落する。柑奈の視界に映る機体情報が幾つもの警報を表示する。

「ここまでやるの…!?!」

「それで言い訳つくでしょう！今は退いてくださいー！」

戦闘能力は落とした。ならばとマコトはそう呼びかける。事実として、打鉄二式にこれ以上の戦闘は不可能であり、柑奈は引き下がるしかない。

「……そのようね」

体勢を立て直しながら柑奈はマコトと向かい合う。赤い瞳はそれぞれ同じような色に見えて、全く違う色に互いには見えていた。

「なら、今日はここまでにさせてもらうわ。お仲間も来たようだし」  
柑奈の言う通り、マコトの黒騎士も簪の青騎士も、学園島方面から飛んでくるＩＳの反応を捉えていた。手負いの状態では柑奈は太刀打ちできる数ではない。

「……また会いましょう、簪ちゃん。今度は、刀奈ちゃんも一緒にね」  
「…………お母さん、どうして……！」

「さようなら、またね」  
「お母さん！」

簪の必死の呼びかけも、柑奈には届かず、柑奈は今度こそ雲の中に撤退した。マコトは黒騎士が背中に発信器があると警告してきたので、確認すると確かに小さな発信器がつけられており、それを剥がして海に捨てた。

「…………更識柑奈さん……か」

俯く簪を見つめながら、マコトは敵の名を呼ぶ。こうして戦った以上東が気がかりであったが、そう簡単に彼女がやられるとは思えず、もしかしたら更識柑奈は撤退を装ってこちらに来たのだろうとマコトは考えた。

その予想は当たっているが、今マコトが優先すべきは学園へ簪と一緒に帰還することであった。